

Oracle® Essbase Administration Services

Online Help

リリース 11.1.2.3.000

Administration Services Online Help, 11.1.2.3.000

Copyright © 2001, 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	29
第 1 章 Administration Services オンライン・ヘルプへようこそ	31
第 2 章 スタート・ガイド	33
Administration Services について	33
Administration Services のアーキテクチャ	33
Administration Services の開始	34
Essbase 管理サーバーへの接続	35
Administration Services の設定	36
Fusion モードにおける Administration Services	36
サンプル・アプリケーションについて	37
第 3 章 管理サービス・コンソールについて	39
管理サービス・コンソールの機能	39
右クリック・メニュー	40
右クリック・メニューにかわる操作方法	41
メニュー・バー	41
マストヘッド	41
コンソールのツールバー	42
メッセージ・ペイン	42
管理サービス・コンソールのカスタマイズ	42
管理サービス・コンソールのウィンドウの印刷	43
管理サービス・コンソール内のウィンドウの管理	43
管理サービス・コンソール・セッションでのアクティブな別名テーブルの設定	44
ウィザードの使用	45
エンタープライズ・ビューの使用	45
エンタープライズ・ビューについて	46
エンタープライズ・ビュー・オブジェクトの階層	46
「管理サーバー」のビュー	47
「Essbase サーバー」のビュー	47
エンタープライズ・ビューのカスタマイズ	48
エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加	48

エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除	49
エンタープライズ・ビューへのオブジェクトの追加	50
エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除	50
エンタープライズ・ビューの展開および縮小	51
エンタープライズ・ビューのリフレッシュ	51
カスタム・ビューについて	52
カスタム・ビューの作成	53
カスタム・ビューからのオブジェクトの削除	54
カスタム・ビューでのオブジェクトの並べ替え	55
カスタム・ビューのタブの名前変更	55
オブジェクトのナビゲーションと選択	56
オブジェクトの操作	57
第 4 章 Essbase 管理サーバー	59
Essbase 管理サーバーについて	59
Essbase 管理サーバーのログについて	60
Administration Services セッションのタイムアウトの設定	60
エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加	61
Essbase 管理サーバーからの切断	61
Essbase 管理サーバーのステータスの確認	62
エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除	63
Essbase 管理サーバーのユーザーの作成	63
Essbase 管理サーバーのユーザーのパスワードの変更	64
Essbase 管理サーバー・ユーザーの名前変更	65
Essbase 管理サーバー・ユーザーの削除	66
Essbase 管理サーバーの通信ポートの指定	66
Essbase 管理サーバーの開始	67
管理サービス・コンソールの開始	68
管理サービス Web コンソールの開始	68
電子メール・サーバーの指定	69
Administration Services のシャット・ダウン	70
第 5 章 集約ストレージの管理	71
集約ストレージについて	71
集約ストレージ・アプリケーションを使用する作業のワークフロー	72
ブロック・ストレージについて	73
集約ストレージ・アウトラインについて	73
集約ストレージのセキュリティについて	74
集約ストレージへのブロック・ストレージ・アウトラインの変換	74
集約ストレージ・データベースの式の作成	75

集約ストレージ・データベースでのメンバーと次元の計算順序の指定	76
集約ストレージ・アウトラインにおける階層の定義	76
集約ビュー選択のクエリー・データ追跡	78
取得時間を改善するための集約の計算	78
集約ストレージ・データベースからのデータの消去	79
集約ストレージの会計次元の選択	80
テーブルスペースの管理	81
集約ストレージ・キャッシュのサイズ設定	82
集約ストレージ・アウトライン・ファイルのコンパクト化	83
集約ストレージ統計の表示	83
第 6 章 Essbase サーバー、アプリケーション、およびデータベースの管理	85
Essbase サーバーの管理	85
Essbase サーバーについて	85
Essbase の接続とポートについて	86
Essbase サーバーへの接続	87
デフォルト以外のエージェント・ポートへの接続	88
Essbase サーバーからの切断	88
Essbase サーバー・プロパティの設定	89
Performance Management Architect への Essbase サーバーの登録	90
Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase サーバー権限の管理	91
電子メールによる Essbase 情報の送信	92
代替変数の管理	93
代替変数のコピー	94
ESSCMD の使用	94
アプリケーションの管理	95
アプリケーションの作成	95
アプリケーションの開始	96
アプリケーションの自動開始の構成	97
アプリケーションの停止	97
アプリケーション・プロパティの設定	98
アプリケーションのコピー	99
アプリケーション名の変更	100
アプリケーションの削除	101
Essbase のデフォルトのオプションの設定	102
データベースの管理	102
データベースの作成	103
データベースの開始	104
データベースの自動開始の構成	105

データベースの停止	106
データベース・プロパティの設定	106
データベースへのコメント	107
データベースのコピー	108
データベース名の変更	109
データベースの削除	110
オブジェクトのロックおよびロック解除	111
データベースのエクスポート	113
手動によるデータベースの再構築	114
ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ	115
ブロック・ストレージ・データベースの復元	116
ログに記録されたトランザクションの再実行	117
ログに記録されたトランザクションの表示	118
データの消去	119
上位レベルのデータ・ブロックの消去	120
計算されたデータ・ブロックの消去	120
ロケーション別名の作成	121
すべてのデータ値の消去	122
ロケーション別名の編集または削除	122
ドリルスルー定義の管理	123
Unicode モードのアプリケーション	124
ファイルのエンコード方式とロケールについて	124
Administration Services でのファイルのエンコード方式の判別方法	126
ロケール・ヘッダーについて	126
Unicode モードのアプリケーションの作成	127
アプリケーションの Unicode モードへの移行	128
第 7 章 アウトラインおよび式の管理	131
アウトラインについて	131
アウトラインについて	131
重複するメンバー名について	132
型付きメジャーについて	133
テキスト・メジャーについて	133
日付メジャーについて	134
アウトラインの操作	135
アウトラインのロックおよびロック解除	136
アウトラインの作成	137
アウトライン・プロパティの設定	137
重複メンバー名のアウトラインの作成	138

アウトラインの保存	139
アウトラインの確認	140
アウトラインのコピー	141
アウトラインの印刷	141
アウトラインの名前変更	142
アウトラインの削除	142
バッチ計算のためのアウトラインの最適化	142
アウトライン・ビューアの使用	143
アウトライン・ビューアについて	144
アウトラインの表示	144
アウトラインの展開および縮小	145
次元およびメンバーのプロパティの表示	146
式の表示	147
アウトライン・ビューアでのリレーショナルに保管されるメンバーの表示	148
アウトライン・エディタの使用	149
アウトライン・エディタについて	149
アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアのカスタマイズ	151
アウトライン・エディタの複数のペインへの分割	152
アウトライン・エディタ・ツールバーの使用	152
エディタでのテキストの検索	153
アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換	153
アウトライン内の次元およびメンバーの操作	155
クエリー・ヒント	157
ユーザー定義のビュー選択プロパティの設定	158
アウトラインの編集	159
アウトラインを開いて編集する	160
アウトラインへの次元の追加	162
次元へのメンバーの追加	163
次元およびメンバーのコピー	164
次元およびメンバーの移動	164
共有メンバーの定義	165
次元およびメンバーのプロパティの設定	166
次元タイプの設定	167
時間次元のタグ付け	167
会計次元のタグ付け	168
属性次元のタグ付け	169
次元に対する一意のタグ付け	169
次元の疎/密の設定	170

ハイブリッド分析の使用可能化または無効化	170
メンバー集計プロパティの設定	171
タイム・バランス・プロパティの設定	172
2パス計算プロパティの設定	172
メンバー・ストレージ・プロパティの設定	173
差異レポート・プロパティの設定	174
勘定科目メンバーへの通貨カテゴリの割当て	174
次元およびメンバーのコメントの設定	175
次元およびメンバーの名前変更	176
メンバーのソート	176
次元およびメンバーの削除	177
動的時系列メンバーの使用可能化	177
動的時系列メンバーの無効化	178
世代およびレベルの名前付け	179
アウトラインの変更の一覧表示	180
アウトラインでの属性情報の表示	180
アウトライン変更を元に戻す	181
別名の使用	182
別名テーブルについて	182
別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて	183
別名テーブルの作成	184
別名テーブルのエクスポート	185
別名テーブルのインポート	186
別名テーブルのコピー	187
別名テーブルの名前変更	188
別名テーブルの削除および消去	188
アウトライン・エディタのアクティブな別名テーブルの設定	189
次元およびメンバーの別名の作成	190
動的時系列メンバーの別名の作成	190
メンバー式の操作	191
式について	191
アウトライン内の式の作成および編集	192
メンバー式の印刷	194
式の構文のガイドラインについて	194
エディタでのメンバーの検索	195
属性の操作	195
属性について	196
属性の定義	197

値の範囲へのメンバー名の割当て	197
基本次元のメンバーへの属性の関連付け	198
標準次元への属性次元の関連付け	199
属性次元のメンバーの接頭辞または接尾辞のフォーマットの定義	200
属性計算次元のメンバー名の変更	200
ブール属性次元のメンバー名の設定	201
日付属性次元のメンバー名のフォーマットの設定	202
属性次元タイプの設定	202
属性データの計算	203
アウトライン・エディタを使用した UDA の操作	203
可変属性について	204
可変属性の追加	206
可変属性の使用可能化	207
第 8 章 データ・ロードおよび次元構築	209
データ・ロードと次元構築について	209
データ・ロードのルール・ファイルの作成	210
次元構築ルール・ファイルの作成	210
データ・ロードおよび次元構築	211
ルール・ファイルを使用したアウトラインの動的な更新	213
ルール・ファイルの作成および管理	214
データ準備エディタについて	215
レコードの表示方法の設定	215
ルール・ファイルの作成	216
ルール・ファイルを開く	216
データ・ソースを開く	217
SQL データベースを開く	218
ファイル区切り記号の設定	218
ルール・ファイルを使用した次元の名前付け	219
構築方法の指定	220
計算パフォーマンス向上のための次元の配置	220
次元プロパティの設定	221
メンバー・プロパティの設定および変更	222
フィールド・タイプの設定(次元の構築)	223
ルール・ファイルの検証	223
ルール・ファイルの保存	224
ルール・ファイルのコピー	225
ルール・ファイルの名前変更	226
ルール・ファイルの削除	227

ルール・ファイルの印刷	227
ルール・ファイルを使用した別名の定義	228
ルール・ファイルを使用した UDA の更新	229
ルール・ファイルによるレコードの操作	229
レコード操作について	230
データ・ソースのヘッダーの設定	230
ルール・ファイルのデータソース・メンバーの指定	231
レコードの選択	231
レコードの除外	232
選択条件や除外条件の結合	233
ルール・ファイルによるフィールドの操作	233
フィールド操作について	234
複数のフィールドの選択	235
フィールド・タイプの設定(データのロード)	235
フィールドの無視	236
トークンの指定によるフィールドの無視	237
フィールドの移動	237
フィールドの結合	238
結合を使用したフィールドの作成	238
テキストを使用したフィールドの作成	239
フィールドの分割	239
フィールド操作を元に戻す	240
フィールド名のマッピング	240
フィールド名の置換	241
空のフィールドにテキストを配置	242
フィールドの大文字と小文字の変更	243
フィールドの前後のスペースの削除	243
スペースからアンダースコアへの変換	244
接頭辞および接尾辞の追加	244
ルール・ファイルによるデータの操作	245
データ操作について	245
データ・フィールドとしての列の定義	246
データ値への加算	246
データ値からの減算	247
データ・ロードの前のデータ値の消去	247
符号の反転	248
データ値のスケール	249

第 9 章 ログの表示と分析	251
Essbase ログについて	251
ログ・アナライザについて	252
ログ・チャートの生成	253
ログ・チャートの表示	253
カスタム・ログ・フィルタの作成または編集	254
ログ・チャートの削除	255
ログ・レベルの変更	255
ログ・ビューアについて	256
ログの表示	256
ログの削除	257
第 10 章 Shared Services でのセキュリティ管理	259
Shared Services のユーザー管理について	259
EPM System セキュリティ・モード	260
Essbase ネイティブのセキュリティ・モード	261
Essbase サーバーの変換および Shared Services へのユーザーの移行	262
Shared Services へのユーザーの移行	263
データベース計算およびフィルタ・アクセスの割当て	264
Shared Services へのアプリケーションの再登録	266
第 11 章 ネイティブ・モードでのセキュリティ管理	269
セキュリティと権限について	269
サーバー・レベルでのセキュリティ管理	270
アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ管理	271
ユーザーおよびグループの管理	272
ユーザーの自動切断	273
アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ	274
アプリケーションの最小権限の設定	274
データベースの最小権限の設定	275
アプリケーション・レベルのセキュリティの無効化	276
アプリケーションに対するユーザー・アクティビティの遮断	277
ユーザーおよびグループのセキュリティ	278
Essbase サーバーのユーザーの作成	279
Essbase サーバーのグループの作成	280
Essbase サーバーのユーザーおよびグループの表示	281
外部認証の管理	282
グループ・メンバーシップの管理	284
ユーザーのアプリケーション・アクセス・タイプの設定	286

アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理	287
ユーザーおよびグループの計算権限の管理	289
Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集	292
グループ・プロパティの編集	293
Essbase サーバー・ユーザーのコピー	293
Essbase サーバー・グループのコピー	295
Essbase サーバー・ユーザーの名前変更	297
グループの名前変更	298
Essbase サーバー・ユーザーの削除	299
グループの削除	300
パスワード変更の強制	300
Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更	301
サーバー間でのパスワードの伝播	302
ユーザー名の無効化	303
無効化されたユーザー名の表示またはアクティブ化	305
パスワードの有効期限の管理	306
フィルタの管理	307
フィルタの管理	307
フィルタの作成または編集	308
フィルタの割当て	309
フィルタのコピー	310
フィルタの名前変更	311
フィルタの削除	311
第 12 章 Essbase セキュリティ・ファイル	313
Essbase セキュリティ・ファイルについて	313
Essbase セキュリティ・バックアップ・ファイルについて	314
セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新	315
セキュリティ・ファイルのコンパクト化	316
セキュリティ・ファイルのエクスポート	316
第 13 章 ユーザー・セッションおよびロックの管理	319
アクティブなユーザー・セッションの表示	319
ユーザー・セッションおよび要求の切断	320
データのロックの表示	321
データのロック解除	322
データ・ロックのタイムアウトの設定	323
第 14 章 Essbase の監視	325
Essbase サーバーの監視	325

Essbase サーバーの監視について	325
バックグラウンド・プロセスのステータスの確認	326
ライセンス情報とインストール情報の表示	327
使用可能なポートの確認	328
パス情報の表示	328
サーバー・コンピュータ情報の表示	329
Essbase クラスタ情報の表示	329
ディスク・ドライブ情報の表示	329
構成ファイル(essbase.cfg)設定の表示	330
使用可能なメモリーの確認	330
ランタイム統計の表示	331
アプリケーションの監視	332
アプリケーションの監視について	332
アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示	332
エンタープライズ・ビューのアプリケーションおよびデータベースのアイ コン	333
データベースの監視	334
データベースの監視について	334
すべてのデータベースのプロパティの表示	335
データ・ブロック統計の確認	336
読取り/書込み統計の確認	336
次元情報の表示	337
データベースの変更内容の表示	337
断片化統計の表示	338
データベースの計算状態の確認	338
第 15 章 キャッシュの管理	341
キャッシュ・メモリーのロックの使用可能化	341
キャッシュ・サイズの設定	342
キャッシュのヒット率の確認	343
取得バッファ・サイズの設定	343
第 16 章 データの保管および保護	345
ディスク・ボリュームの設定	345
インデックス・ファイルとデータ・ファイルのサイズ確認	346
データ圧縮方式の選択	347
圧縮率の確認	348
データの整合性オプションの設定	348
入出力アクセス・モードの選択	349

第 17 章 データの計算	351
ブロック・ストレージ・データベースの計算	351
デフォルト計算の設定	351
ブロック・ストレージ・データベースの計算	352
等式によるブロックの作成の使用可能化	353
データのプレビュー	354
計算スクリプトの管理	354
計算スクリプトについて	355
計算スクリプト・エディタについて	356
計算スクリプト構文のガイドライン	357
ファイルの命名	357
スクリプトの色分けのカスタマイズ	357
スクリプト・フォーマットのカスタマイズ	358
スクリプト内の行の検索	358
スクリプト・エディタ・ウィンドウの消去	359
スクリプトの作成	359
スクリプトを開く	360
スクリプトへのコメントの追加	361
オートコンプリート機能の使用	362
スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入	363
スクリプトでの関数およびコマンドの挿入	364
スクリプト・エディタの左ペインの非表示	365
スクリプトでの代替変数の使用	365
スクリプトの保存	366
スクリプトの構文チェック	367
計算スクリプトの実行	368
計算情報の確認	369
計算スクリプトのトラブルシューティングと最適化	370
スクリプトのコピー	371
スクリプトの名前変更	372
スクリプトの削除	372
スクリプトの印刷	373
デフォルト計算としての計算スクリプトの使用	374
カスタム定義の関数とマクロの使用	374
カスタム定義の関数とマクロについて	375
カスタム定義関数の表示	375
カスタム定義関数の作成	376
カスタム定義関数の編集	377
カスタム定義関数の使用	377

カスタム定義関数のコピー	378
カスタム定義関数の名前変更	378
カスタム定義関数の削除	379
カスタム定義マクロの表示	380
カスタム定義マクロの作成	380
カスタム定義マクロの編集	381
カスタム定義マクロの使用	382
カスタム定義マクロのコピー	382
カスタム定義マクロの名前変更	383
カスタム定義マクロの削除	383
計算の最適化	384
デフォルト計算における 2 パスの使用	384
計算時の欠落した値の集約	385
インテリジェント計算について	386
第 18 章 データのレポート	387
レポート・スクリプトについて	387
レポート・スクリプト・エディタについて	388
レポート・スクリプト構文のガイドラインについて	389
編集集中の Essbase オブジェクトへのアウトラインの関連付け	389
レポート・スクリプトの実行	390
レポートの保存	391
レポート・スクリプトのトラブルシューティングと最適化	392
第 19 章 データへのオブジェクトのリンク	393
リンク・レポート・オブジェクト(LRO)について	393
LRO の管理	394
LRO のエクスポート	395
LRO のインポート	396
LRO ファイル・サイズの制限	397
第 20 章 MaxL スクリプト・エディタの使用	399
MaxL スクリプトについて	399
MaxL スクリプト・エディタについて	400
MaxL シェルの使用	401
MaxL および MDX スクリプトの作成	402
MaxL および MDX スクリプトを開く	403
MaxL および MDX 構文のガイドライン	403
MaxL および MDX スクリプト・エディタから Essbase サーバーへの接続	404
MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使 用	405

MaxL および MDX スクリプトへのコメントの追加	406
MaxL および MDX スクリプトでの変数の定義	407
未定義変数の解決	408
MaxL スクリプトでのファイルの参照	409
MaxL および MDX スクリプトの展開	409
MaxL および MDX スクリプト・エディタの消去	410
MaxL および MDX スクリプトの保存	410
MaxL および MDX の実行オプションの設定	412
MaxL および MDX スクリプトの実行	412
MaxL および MDX の実行結果の表示	413
MaxL および MDX の実行結果の保存	414
MaxL および MDX スクリプトのコピー	415
MaxL および MDX スクリプトの名前変更	415
MaxL および MDX スクリプトの削除	415
MaxL および MDX スクリプトとその実行結果の印刷	415
第 21 章 MDX スクリプト・エディタの使用	417
MDX スクリプトについて	417
MDX スクリプト・エディタについて	418
MDX スクリプトでの MDX 関数の挿入	419
MDX スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入	419
第 22 章 パーティションの管理	421
パーティションについて	421
エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示	422
パーティションの作成	423
パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開く	424
パーティションのタイプおよび設定の指定	426
パーティションの接続情報の指定	426
パーティションの領域の定義	427
パーティションの領域を定義する際のメンバーの検索	428
パーティションでの領域固有のメンバー・マッピングの定義(オプション)	429
パーティションの領域マッピングの選択ルールのインポート	430
領域マッピングからの選択ルールのエクスポート	430
パーティションでのグローバル・マッピングの定義	431
パーティションのメンバー・マッピングのインポート	432
パーティションの検証	433
パーティションの保存	434
データの複製	435

パーティションの削除	436
パーティションのコピー	436
パーティションの修復	437
パーティション定義のエクスポート	439
パーティション定義のインポート	439
アウトラインの同期化	440
第 23 章 トリガーの管理	443
トリガーについて	443
トリガーの作成	444
トリガーの表示	445
トリガーの編集	445
トリガーの削除	446
トリガーの使用可能化および無効化	447
トリガー・スプール・ファイルの表示	447
第 24 章 通貨換算アプリケーションの作成	449
Essbase 通貨換算について	449
通貨の換算	450
通貨換算のためのメイン・データベース・アウトラインの準備	450
国次元のタグ付け	451
通貨パーティションの作成	452
通貨データベース・アウトラインの生成	452
データベースから通貨データベースへのリンク	454
通貨換算の計算	454
データベースの計算	455
レポート・スクリプトの使用	455
国メンバーへの通貨名の割当て	456
通貨換算の追跡	456
通貨換算のトラブルシューティング	457
第 25 章 Provider Services の管理	459
Provider Services について	459
Provider Services の追加	460
クライアントのアップグレードの自動配置	460
Provider Services への接続	461
Provider Services の切断	461
セッションの監視	462
アイドル・セッションのタイムアウトの指定	463
ロギング・プロパティの指定	463

最大行数および列数の指定	464
Provider Services のリストのリフレッシュ	464
Provider Services の削除	465
スタンドアロン・サーバー	465
スタンドアロン・サーバーについて	465
スタンドアロン・サーバーの追加	466
スタンドアロン・サーバー・リストのリフレッシュ	466
スタンドアロン・サーバーの削除	467
分析クラスター	467
分析クラスターについて	468
分析クラスターの追加	468
分析クラスター・リストのリフレッシュ	469
分析クラスターの削除	470
クラスター・コンポーネントの追加	470
クラスター・コンポーネントの削除	471
クラスター・コンポーネントの使用可能化	472
クラスター・コンポーネントの無効化	473
クラスター・コンポーネント・リストのリフレッシュ	473
第 26 章 ダイアログ・ボックスとウィザードの使用	475
「管理サーバーの追加」 ダイアログ・ボックス	479
「Essbase サーバーの追加」 ダイアログ・ボックス	480
「クラスターの追加」 ダイアログ・ボックス	481
「Provider Services の追加」 ダイアログ・ボックス	481
「スタンドアロン・サーバーの追加」 ダイアログ・ボックス	481
「カスタム・フィルタの追加」 および 「カスタム・フィルタの編集」 ダイア ログ・ボックス	481
管理サーバーのプロパティ・ウィンドウ	483
「集約ストレージ・データベースの再構築」 ダイアログ・ボックス	484
集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード	485
集約ストレージ・アウトライン変換ウィザードの起動	485
集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード・ページ	486
ソース・アウトラインの選択ページ	486
アウトラインの修正の確認ページ	486
集約ストレージ・アウトラインの保存先の選択ページ	487
アウトライン変換の完了ページ	487
集約ストレージ・パーティション・ウィザード	487
集約ストレージ・パーティション・ウィザードの起動	488
集約ストレージ・パーティション・ウィザード・ページ	488
パーティション・ソースおよびターゲットの選択ページ	488

「ターゲット次元の選択」 ページ	489
ライトバック次元へのメンバーの追加ページ	489
時間次元でのパーティションの定義ページ	489
パーティションへの時間メンバーの追加ページ	489
パーティションの確認と作成ページ	490
集約設計ウィザード	490
既存の集約ビューについてページ	492
選択プロセスを停止する基準の指定ページ	493
「集約ビューの選択」 ページ	493
集約の保存と生成ページ	495
集約設計ウィザード- 例	495
「Essbase Administration Services ログイン」 ダイアログ・ボックス	497
分析クラスタ:<クラスタ名>ウィンドウ	497
Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ	498
「Essbase サーバー・プロパティ」 - 「ディスク・ドライブ」 タブ	498
Essbase サーバー・プロパティ - 「環境」 タブ	499
「Essbase サーバー・プロパティ」 - 「ライセンス」 タブ	500
Essbase サーバー・プロパティ - 「OS」 タブ	501
Essbase サーバー・プロパティ - 「セキュリティ」 タブ	502
Essbase サーバー・プロパティ - 「統計」 タブ	504
アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ	504
アプリケーション・プロパティ - 「一般」 タブ	505
アプリケーション・プロパティ - 「統計」 タブ	507
「アプリケーション・プロパティ」 - 「テーブルスペース」 タブ	507
アプリケーション/データベースのステータス・ウィンドウ	509
「データベースのアーカイブ」 ダイアログ・ボックス	509
「領域固有メンバーのマッピング」 ダイアログ・ボックス	510
「領域の定義」 ダイアログ・ボックス	511
「領域マッピング・メンバーの選択」 ダイアログ・ボックス	512
「カスタム・ビューのノードの配置」 ダイアログ・ボックス	513
「ASO MDX 式テンプレート」 ダイアログ・ボックス	514
「計算の割当て」 ダイアログ・ボックス	514
「フィルタの割当て」 ダイアログ・ボックス	515
「アウトラインの関連付け」 ダイアログ・ボックス	515
属性ビューア・ウィンドウ	516
バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウ	516
「添付ファイルの変更」 ダイアログ・ボックス	517
「パスワードの変更」 ダイアログ・ボックス	517
「アウトラインのコンパクト化」 ダイアログ・ボックス	518

「プラグイン・コンポーネントの構成」 ダイアログ・ボックス	518
「変換設定」 ダイアログ・ボックス	518
「別名テーブルのコピー」 ダイアログ・ボックス	519
「すべての関数をコピー」 ダイアログ・ボックス	520
「すべてのマクロのコピー」 ダイアログ・ボックス	520
「アプリケーションのコピー」 ダイアログ・ボックス	521
「計算スクリプトのコピー」 ダイアログ・ボックス	522
「データベースのコピー」 ダイアログ・ボックス	522
「フィルタのコピー」 ダイアログ・ボックス	523
「関数のコピー」 ダイアログ・ボックス	524
「グループのコピー」 ダイアログ・ボックス	524
「マクロのコピー」 ダイアログ・ボックス	525
「パーティションのコピー」 ダイアログ・ボックス	525
「レポート・スクリプトのコピー」 ダイアログ・ボックス	526
「ルール・ファイルのコピー」 ダイアログ・ボックス	527
「代替変数のコピー」 ダイアログ・ボックス	528
「ユーザーのコピー」 ダイアログ・ボックス	528
「別名テーブルの作成」 ダイアログ・ボックス	530
「アプリケーションの作成」 ダイアログ・ボックス	530
「データベースの作成」 ダイアログ・ボックス	531
「結合を使用したフィールドの作成」 ダイアログ・ボックス	531
「グループの作成」 / 「グループ・プロパティ」 ダイアログ・ボックス	532
「グループの作成」 / 「グループ・プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「アプリケーション/データベース・アクセス」 タブ	532
「グループの作成/グループ・プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「グループ情報」 タブ	534
「グループの作成/グループ・プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「ユーザー」 タブ	535
パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ	535
パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」 タブ	536
パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「接続」 タブ	537
パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「マッピング」 タブ	538
パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「タイプ」 タブ	539
パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「検証」 タブ	541
「管理サーバーでのユーザーの作成」 ダイアログ・ボックス	541

「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスおよび「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス(Essbase サーバー)	542
「ユーザーの作成」 / 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「アプリケーション/データベース・アクセス」タブ(Essbase サーバー)	543
「ユーザーの作成」 / 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「グループ」タブ(Essbase サーバー)	544
「ユーザーの作成」 / 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「ユーザー情報」タブ(Essbase サーバー)	545
「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックス	546
「作成された次元」および「削除された次元」ダイアログ・ボックス	547
カスタム定義関数マネージャ	548
カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウ	549
「データ・ロード」ダイアログ・ボックス	551
「データ・ロード結果」ダイアログ・ボックス	553
「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス	553
「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス - 「データの組合せの消去」タブ	554
「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス - 「データ・ロード値」タブ	555
「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス - 「ヘッダー定義」タブ	556
データ・プレビュー・グリッド	556
データ・プレビュー・グリッド・ウィンドウ - 「キューブ・ビュー」タブ	557
データ・プレビュー・グリッド・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ	558
「データの複製」ダイアログ・ボックス	560
「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス	560
「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「区切り記号」タブ	561
「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「フィールドの編集」タブ	562
「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「ヘッダー」タブ	562
「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「トークンを無視」タブ	563
データベース情報ウィンドウ	564
データベース・プロパティ・ウィンドウ	565
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「キャッシュ」タブ	566
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「圧縮」タブ	567
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「通貨」タブ	568
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「次元」タブ	569
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ	570

データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「変更」 タブ	572
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」 タブ	572
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「ストレージ」 タブ	576
データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「トランザクション」 タブ	578
データベース・トリガー・スプール・ファイル・ウィンドウ	579
データベース・トリガー・ウィンドウ	580
「動的時系列メンバーの定義」 ダイアログ・ボックス	581
「世代の定義」 ダイアログ・ボックス	582
「レベルの定義」 ダイアログ・ボックス	583
「次元構築の設定」 ダイアログ・ボックス	584
「次元構築の設定」 ダイアログ・ボックス - 「次元構築の設定」 タブ	585
「次元構築の設定」 ダイアログ・ボックス - 「次元定義」 タブ	587
「次元構築の設定」 ダイアログ・ボックス - 「グローバル設定」 タブ	587
「次元プロパティ」 ダイアログ・ボックス	588
「次元プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 会計次元プロパティ・タブ	589
「次元プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「属性次元」 タブ	590
「次元プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「次元プロパティ」 タブ	590
「次元プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「世代/レベル名」 タブ	593
使用不可であるユーザー名ウィンドウ	593
「トランザクションの表示」 ダイアログ・ボックス	594
「共有メンバーの複製」 ダイアログ・ボックス	594
「ドリルスルー定義の編集」 ダイアログ・ボックス	595
「関数の編集」 ダイアログ・ボックス	595
「ロガーの編集」 ダイアログ・ボックス	597
「マクロの編集」 ダイアログ・ボックス	597
「ノートの編集」 ダイアログ・ボックス	598
「URL の編集」 ダイアログ・ボックス	599
「ユーザー/グループ・アクセスの編集」 ダイアログ・ボックス	599
「エディタ・オプション」 ダイアログ・ボックス	599
「Essbase クラスタ情報」 ダイアログ・ボックス	600
セキュリティ権限の移行の例	600
「計算スクリプトの実行」 ダイアログ・ボックス	601
「データベース計算の実行」 ダイアログ・ボックス	601
「レポート・スクリプトの実行」 ダイアログ・ボックス	602
「別名テーブルのエクスポート」 ダイアログ・ボックス	603
「データベースのエクスポート」 ダイアログ・ボックス	604
「LRO のエクスポート」 ダイアログ・ボックス	605

「パーティションのエクスポート」 ダイアログ・ボックス	606
「選択ルールのエクスポート」 ダイアログ・ボックス	606
ユーザーの外部化ウィザード	607
ユーザーの外部化ウィザードの起動	608
ユーザーの外部化ウィザード・ページ	608
外部化するオブジェクトの選択ページ	608
Shared Services プロパティの指定ページ	608
パスワード情報の指定ページ	609
外部プロバイダへのユーザーのマッピング・ページ	609
外部プロバイダへのグループのマッピング・ページ	610
ユーザー/グループの外部化ページ	611
「フィールド・プロパティ」 ダイアログ・ボックス	612
「フィールド・プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「データ・ロード・プロパティ」 タブ	612
「フィールド・プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「次元構築プロパティ」 タブ	613
「フィールド・プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「グローバル・プロパティ」 タブ	615
「ファイルのエンコード方式」 ダイアログ・ボックス	616
フィルタ・エディタ・ウィンドウ	616
フィルタ・ウィンドウ	618
「検索」 ダイアログ・ボックス	618
「外部グループの検索」 ダイアログ・ボックス	619
「外部ユーザーの検索」 ダイアログ・ボックス	619
「メンバーの検索」 ダイアログ・ボックス	619
「結果の検索」 タブ	621
「式」 ダイアログ・ボックス	621
「通貨アウトラインの生成」 ダイアログ・ボックス	622
「グローバル・マッピング・メンバーの選択」 ダイアログ・ボックス	622
グループ・ウィンドウ	623
「LRO のインポート」 ダイアログ・ボックス	624
「メンバー・マッピングのインポート」 ダイアログ・ボックス	624
「パーティション・ファイルのインポート」 ダイアログ・ボックス	625
「選択ルールのインポート」 ダイアログ・ボックス	625
「フィールドの結合」 ダイアログ・ボックス	626
リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウ	626
ロケーション別名ウィンドウ	628
ロック済オブジェクト・ウィンドウ	629
ロック・ウィンドウ	630
ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウ	630

「ログ・ビューアのオプション」ダイアログ・ボックス	632
ログ・ビューア・ウィンドウ	632
「メンバー情報」ダイアログ・ボックス	633
「メンバー名」ダイアログ・ボックス	634
「メンバーのプレビュー」ダイアログ・ボックス	634
「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス	635
「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「関連付け」タブ	635
「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「属性」タブ	636
「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスの「式」タブ	637
「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ	638
「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「UDA」タブ	640
移行ウィザード	641
移行ウィザードの起動	641
移行されるデータと移行されないデータ	641
移行ウィザード・ページ	642
ソースおよびターゲットの Essbase サーバーの選択ページ	643
ソースおよびターゲットのアプリケーションの選択ページ	643
移行するオブジェクトの選択ページ	644
セキュリティ移行オプションの選択ページ	644
移行する個々のユーザーの選択ページ	644
移行する個々のグループの選択ページ	645
「フィールドの移動」ダイアログ・ボックス	645
「新規」ダイアログ・ボックス	646
「新規関数」ダイアログ・ボックス	647
「新しいマクロ」ダイアログ・ボックス	648
「新しい変数」ダイアログ・ボックス	649
「新しいトリガー」および「トリガーの編集」ダイアログ・ボックス	650
「開く」ダイアログ・ボックス	652
「SQL データ・ソースを開く」ダイアログ・ボックス	653
「オプション」ダイアログ・ボックス	654
「オプション」ダイアログ・ボックス - 「Essbase」タブ	655
「オプション」ダイアログ・ボックス - 「表示」タブ	657
「オプション」ダイアログ・ボックス - 「MaxL エディタ」タブ	658
「オプション」ダイアログ・ボックス - 「MDX エディタ」タブ	659
「オプション」ダイアログ・ボックス - 「アウトライン・ツール」タブ	660
「オプション」ダイアログ・ボックス - 「スクリプト・エディタ・オプション」タブ	661
管理サービス・コンソールの表示オプションの設定	662

アウトライン・エディタ・ウィンドウ	662
アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「変更」タブ	663
アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「アウトライン」タブ	663
アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ	664
アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「テキスト・リスト・マネージャ」 タブ	666
アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「確認」タブ	666
「アウトラインの印刷オプション」ダイアログ・ボックス	667
アウトライン・ビューア・ウィンドウ	667
アウトライン・ビューア - 「アウトライン」タブ	668
アウトライン・ビューア - 「プロパティ」タブ	668
「印刷オプション」ダイアログ・ボックス	669
「パスワードを Essbase サーバーへ伝播」ダイアログ・ボックス	670
「クエリー・ヒントの選択」ダイアログ・ボックス	670
「レコード表示カウント」ダイアログ・ボックス	671
Performance Management Architect への Essbase サーバーの登録ダイアログ・ボッ クス	671
「レコードの除外」ダイアログ・ボックス	671
「別名テーブルの名前変更」ダイアログ・ボックス	672
「アプリケーションの名前変更」ダイアログ・ボックス	673
「計算スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス	673
「カスタム・ビューの名前変更」ダイアログ・ボックス	673
「データベースの名前変更」ダイアログ・ボックス	674
「フィルタの名前変更」ダイアログ・ボックス	674
「関数の名前変更」ダイアログ・ボックス	674
「グループの名前変更」ダイアログ・ボックス	675
「マクロの名前変更」ダイアログ・ボックス	675
「レポート・スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス	676
「ルール・ファイルの名前変更」ダイアログ・ボックス	676
「ユーザーの名前変更」ダイアログ・ボックス	676
「パーティションの修復」ダイアログ・ボックス	677
「置換」ダイアログ・ボックス	678
「アウトライン内の置換」ダイアログ・ボックス	678
「トランザクションの再実行」ダイアログ・ボックス	679
レポート・ビューア・ウィンドウ	679
「データベースの復元」ダイアログ・ボックス	680
「データベースの再構築」ダイアログ・ボックス	681
「データベースの再構築のオプション」ダイアログ・ボックス	681
「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス	682

「スクリプト変数」ダイアログ・ボックス	683
会計次元の選択ダイアログ・ボックス	683
「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」ダイアログ・ボックス	684
「レコードの選択」ダイアログ・ボックス	684
「電子メールの送信」ダイアログ・ボックス	685
セッションおよび要求の終了オプション	685
セッション・ウィンドウ	686
「アクティブな別名テーブルの設定」ダイアログ・ボックス	688
「データベース・ノートの設定」ダイアログ・ボックス	688
「デフォルト計算の設定」ダイアログ・ボックス	689
Provider Services プロパティ・ウィンドウ	689
Provider Services プロパティ - 「クライアントの配置」タブ	689
Provider Services プロパティ - 「ロギング」タブ	690
Provider Services プロパティ - 「設定」タブ	690
Provider Services のセッション・ウィンドウ	691
「フィールドの分割」ダイアログ・ボックス	691
「SQL 接続」ダイアログ・ボックス	692
「サブセット」ダイアログ・ボックス	692
代替変数ウィンドウ	693
「アウトラインの同期」ダイアログ・ボックス	694
「トランザクション・リスト」ダイアログ・ボックス	696
日時次元の作成ウィザード	696
日時次元の作成ウィザード - カレンダ階層の追加ページ	697
日時次元の作成ウィザード - 「ラベリング・ルールの定義」ページ	698
日時次元の作成ウィザード - 「カレンダ階層の選択」ページ	698
グレゴリオ暦カレンダ階層	700
会計カレンダ階層	700
リテール・カレンダ階層	700
製造カレンダ階層	701
ISO カレンダ階層	701
日時次元の作成ウィザード - 共通属性の選択ページ	701
日時次元の作成ウィザード - 日付属性の選択ページ	701
日時次元の作成ウィザード - 「リンク属性の選択」ページ	702
「オブジェクトのロック解除」ダイアログ・ボックス	703
「アウトラインの更新」ダイアログ・ボックス	703
「ユーザー・プロパティ」(管理サーバー)ウィンドウ	704
ユーザー・プロパティ・ウィンドウ - 「Essbase サーバー」タブ	705
ユーザー・プロパティ・ウィンドウ - 「ユーザー情報」タブ	706

ユーザー設定ウィザード	707
ユーザー設定ウィザードの起動	707
ユーザー設定ウィザード・ページ	707
ユーザー設定ウィザード - 管理サーバーのユーザー名ページ	708
ユーザー設定ウィザード - 管理サーバーの外部検索の結果	708
ユーザー設定ウィザード - 管理サーバーのユーザー情報ページ	709
ユーザー設定ウィザード - 「Essbase サーバー接続」ページ	709
ユーザー設定ウィザード - Essbase サーバーでのユーザーの作成の確認ページ	710
ユーザー設定ウィザード - Essbase サーバーのユーザー情報ページ	710
ユーザー設定ウィザード - セットアップの完了ページ	711
ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ	712
ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ - 「グループ」タブ	712
ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ - 「ユーザー」タブ	714
ユーザー・ウィンドウ	715
「検証ルール」ダイアログ・ボックス	717
「ノートを表示」ダイアログ・ボックス	717
「ウィンドウ」ダイアログ・ボックス	717
第 27 章 Administration Services の機能の拡張	719
Java プラグインによる Administration Services の拡張	719
プラグイン・コンポーネントの構成	719
用語集	721
索引	747

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

1

Administration Services オンライン・ヘルプへようこそ

Oracle Essbase Administration Services は、Oracle Essbase の実装、監視、および維持のためのフレームワークです。Administration Services は、Java クライアント・コンソール、および Essbase サーバーと直接通信する Java 中間層サーバーで構成されています。この製品の詳細は、[33 ページの「Administration Services について」](#)を参照してください。

Administration Services オンライン・ヘルプ・システムでは、Administration Services を使用して Essbase を管理するため情報を提供します。特定のタスクを実行する手順のヘルプや、概念や機能の概要にアクセスできます。また、ダイアログ・ボックス、エディタ、ウィンドウ、およびその他のコンポーネントに関するコンテキスト依存ヘルプにもアクセスできます。

この章の内容

Administration Services について	33
Administration Services のアーキテクチャ	33
Administration Services の開始	34
Essbase 管理サーバーへの接続	35
Administration Services の設定	36
Fusion モードにおける Administration Services	36
サンプル・アプリケーションについて	37

Administration Services について

Essbase のためのクロスプラットフォームの管理ツールである Administration Services は、Java 中間層サーバー(Essbase 管理サーバー)とクライアント・コンソール(管理サービス・コンソール)で構成されています。クライアント・コンソールは、Java アプリケーションとして起動することも、ブラウザから起動することもできます。

コンソールに用意されているウィザード、エディタおよびツールを使用して、次のアクティビティを実行できます:

- Essbase サーバーおよび Essbase 管理サーバーの表示、管理および維持
- ツリー・ビューからの Essbase オブジェクトの操作
- 複数のタスクの同時実行
- プロセスのバックグラウンド実行
- 複数のサーバー間での操作の実行
- アクティブ・ユーザー・アクティビティの管理

関連情報

- 33 ページの「Administration Services のアーキテクチャ」
- 36 ページの「Administration Services の設定」

Administration Services のアーキテクチャ

Administration Services は、次の 3 つの層で構成されています:

- クライアント層(管理サービス・コンソール): Java ベースのクライアント・コンソール。Windows プラットフォームでのみ動作し、Essbase 環境の管理に使用するユーザー・インタフェースを提供します。
- 中間層(Essbase 管理サーバー): Essbase 管理サーバーが実行されている Java サーバー。Essbase でサポートされている任意のプラットフォームで動作し、Essbase サーバーの接続に関する通信、セッションおよびセキュリティ情報を保持しています。これにより、データベース層とクライアント層の間の対話およびリソースを調整します。
- データベース層(Essbase サーバー): 1 つまたは複数の Essbase サーバー。Administration Services とは別にインストールされ、多次元データベース情報を保存および処理します。

Administration Services は、様々なシナリオで配置できます。たとえば、Administration Services コンポーネント(管理サービス・コンソールおよび Essbase 管理サーバー)と Essbase サーバーを同じコンピュータまたは異なるコンピュータにインストールできます。Oracle Enterprise Performance Management System アーキテクチャの詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイドを参照してください。

関連情報

- [33 ページの「Administration Services について」](#)
- [85 ページの「Essbase サーバーについて」](#)
- [59 ページの「Essbase 管理サーバーについて」](#)
- [39 ページの「管理サービス・コンソールの機能」](#)
- [36 ページの「Administration Services の設定」](#)

Administration Services の開始

Administration Services を開始する前に、管理する Essbase サーバーが開始されていることを確認します。

► Administration Services を開始するには:

- 1 [Essbase 管理サーバーを開始します。](#)
- 2 次のいずれかのアクションを行います:
 - [管理サービス・コンソールを開始します。](#)
 - [管理サービス Web コンソールを開始します - 68 ページの「管理サービス Web コンソールの開始」](#) を参照

関連情報

- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [36 ページの「Administration Services の設定」](#)
- [70 ページの「Administration Services のシャット・ダウン」](#)

- [86 ページの「Essbase の接続とポートについて」](#)
- [36 ページの「Administration Services の設定」](#)
- [Administration Services への接続](#)

Essbase 管理サーバーへの接続

管理サービス・コンソールを開くと、Essbase 管理サーバーに接続するよう求められます。それ以降は、エンタープライズ・ビューで Essbase 管理サーバーに接続および切断できます。一度に 1 つの Essbase 管理サーバーにのみ接続できます。

Essbase 管理サーバーに接続されているとき、別のユーザーとして Essbase 管理サーバーに接続する必要がある場合は、切断した後に新しいユーザーとして再度接続する必要があります。新しいユーザーの設定およびカスタム・ビューが表示されます。

Essbase への接続は、接続している Essbase 管理サーバーによって処理されます。Administration Services のユーザー名およびパスワードは、Essbase サーバーのユーザー名およびパスワードとは異なることがあります。Essbase サーバーへの接続を確立する方法については、[86 ページの「Essbase の接続とポートについて」](#)を参照してください。

Essbase 管理サーバーに初めて接続したら、[707 ページの「ユーザー設定ウィザード」](#)を参照してユーザーを作成し、Essbase サーバーへのアクセスを設定します。

Essbase 管理サーバーのポートの詳細は、[Essbase 管理サーバーの通信ポートの指定](#)を参照してください。

▶ Essbase 管理サーバーに接続する手順は、次のとおりです。

- 1 [Essbase 管理サーバーを開始します。](#)
- 2 [管理サービス・コンソールを開始します。](#)

注： 管理サービス・コンソールがすでに開いているときに、別の Essbase 管理サーバーへ接続する場合は、エンタープライズ・ビューで任意の Essbase 管理サーバーのノードを選択し、右クリックして「接続」を選択します。

- 3 「Essbase Administration Services ログイン」ダイアログ・ボックスで、接続する Essbase 管理サーバーの名前を入力します。
- 4 Essbase 管理サーバーのユーザー名とパスワードを入力します。

インストール後に初めて接続する場合は、デフォルトのユーザー名である admin とデフォルトのパスワードである password を使用します。

- 5 「OK」をクリックします。

インストール後に初めて接続し、Essbase 管理サーバーでネイティブ認証が設定されている場合は、[ユーザー設定ウィザード](#)が表示されます。このウィザードで、Administration Services ユーザーを作成し、Essbase サーバーをビューに追加できます。

関連情報

- 33 ページの「Administration Services について」
- 497 ページの「Essbase Administration Services ログイン」ダイアログ・ボックス」
- 86 ページの「Essbase の接続とポートについて」
- Administration Services セッションのタイムアウトの構成

Administration Services の設定

このトピックでは、Administration Services を設定して、自分や他の管理者が Essbase を管理できるようにする方法について説明します。

注： このトピックは、Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードである場合は適用されません。

▶ Administration Services を設定するには:

- 1 Administration Services を開始します。
- 2 デフォルトの管理者アカウントを使用して Essbase 管理サーバーに接続します。
- 3 ユーザー設定ウィザードを使用して、自分を Administration Services ユーザーとして設定します。
- 4 ユーザー設定ウィザードを使用して、他の Administration Services ユーザーを作成し、Essbase サーバーへの接続を設定します。
- 5 まだ行っていない場合は、管理者アカウントのパスワードを変更します。
- 6 必要に応じて、他のユーザーが自身のエンタープライズ・ビューに適切な Essbase サーバーを追加します。
- 7 Administration Services のユーザー情報を保管するファイルのバックアップ・コピーを作成します。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。
- 8 送信メール(SMTP)サーバーを指定します。

関連情報

- 33 ページの「Administration Services について」
- 59 ページの「Essbase 管理サーバーについて」
- 39 ページの「管理サービス・コンソールの機能」

Fusion モードにおける Administration Services

Administration Services は、EPM System、および Oracle Business Intelligence Enterprise Edition とともに使用できます。Oracle BI EE とともに使用する場合、一部の機能およびメニュー・オプションがこのドキュメントの記述どおりに表示されなかった

り、動作しない可能性があります。対象は次のとおりです(ただし、次の機能のみとは限りません):

- エンタープライズ・ビューの「セキュリティ」ノードに関連付けられた機能
- 移行ウィザード
- アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループのアクセス権
- ユーザーまたはグループのアクセス権およびプロビジョニングに関連する他のアイテム

Administration Services を Oracle Business Intelligence Enterprise Edition とともに使用する場合、これらのセキュリティおよびユーザー・プロビジョニング機能は Oracle WebLogic Server コンソールを使用してアクセスされます。

サンプル・アプリケーションについて

サンプル・アプリケーションは、Essbase サーバー・ソフトウェアに付属しています。Essbase ユーザーがサンプル・アプリケーションを使用できるようにするための作業は、Essbase サーバーのインストールの担当者が行います。Administration Services をインストールしても、サンプル・アプリケーションはインストールされません。

サンプル・アプリケーションが Essbase サーバーにインストールされている場合は、管理サービス・コンソールのエンタープライズ・ビューに表示されます。サンプル・アプリケーションをエンタープライズ・ビュー内の他のアプリケーションと区別する場合は、サンプル・アプリケーションをカスタム・ビューに移動します。サンプル・アプリケーションをエンタープライズ・ビューから削除すると、Essbase サーバーからも削除され、他のユーザーが使用できなくなります。

サンプルのアプリケーションとデータベースは、次のとおりです:

表 1 サンプル・アプリケーションおよびデータベース、およびその機能

アプリケーション	データベース	概要
ASOsamp	Sample	集約ストレージ機能および重複メンバー名のデモを行います。データベースのアウトラインには、14 の次元と 17,000 を超えるメンバーが含まれています。データ・ファイルおよびルールは ARBORPATH/app/ASOsamp/Sample ディレクトリにあります。 詳細情報...
Sample	Basic	次の機能のデモを行います: 属性次元、動的計算、共有メンバー、時系列計算、支出レポート、タイム・バランス計算、2 パス計算、UDA、およびメンバー式。
	Interntl	通貨アプリケーションのメイン・データベースの要件のデモを行います。
	Xchgrate	通貨アプリケーションの通貨データベースの要件のデモを行います。
Sample_U	Basic	Sample Basic の Unicode モード・バージョンのデモを行います。英語の他に、4 種類の文字セットの別名テーブルが含まれます。
Demo	Basic	非常に単純なデータベース・アウトラインのデモを行います。

アプリケーション	データベース	概要
Samppart	Company	パーティション・データベースのデモを行います。
Sampeast	東部	パーティション・データベースのデモを行います。

サンプル・アプリケーションの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)

3

管理サービス・コンソールについて

この章の内容

管理サービス・コンソールの機能.....	39
管理サービス・コンソールのカスタマイズ.....	42
管理サービス・コンソールのウィンドウの印刷.....	43
管理サービス・コンソール内のウィンドウの管理.....	43
管理サービス・コンソール・セッションでのアクティブな別名テーブルの設定.....	44
ウィザードの使用.....	45
エンタープライズ・ビューの使用.....	45

管理サービス・コンソールの機能

管理サービス・コンソールを使用すれば、Essbase の管理タスクを簡単に実行できます。コンソールには、Essbase の実装、監視、および保守に役立つウィザード、エディタ、動的なメニューなどのツールが用意されています。次のリストのアイテムをクリックすると、詳細情報が表示されます:

- **エンタープライズ・ビュー:** エンタープライズ・ビューは Essbase 環境をグラフィカルに表したツリー・ビューで、コンソール・ウィンドウの左側のペインに表示されます。エンタープライズ・ビューには、選択した Essbase 管理サーバーと Essbase サーバーが表示されます。エンタープライズ・ビューから Essbase オブジェクトを直接操作できます。詳細は、[46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)を参照してください。
- **Essbase 環境のカスタム・ビュー:** エンタープライズ・ビューのツリーをカスタマイズしたカスタム・ビューを作成できます。カスタム・ビューを使用すると、自分が管理しやすい形で Essbase オブジェクトを表示できます。詳細は、[52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)を参照してください。
- **動的なメニュー:** マウスの右ボタンをクリックすると、動的に内容が変わる状況依存メニューが表示されます。このショートカット・メニューには、エンタープライズ・ビューで現在選択されているオブジェクトに対してよく実行されるコマンドや、ワークスペース・ペイン内のアクティブなウィンドウに特有なコマンドが表示されます。詳細は、[40 ページの「右クリック・メニュー」](#)を参照してください。
- **ウィザード:** ウィザードを使用して、複雑なプロセスを順を追って実行できます。ウィザードを表示するには、「ファイル」>「ウィザード」を選択します。

- **スクリプト・エディタ:** スクリプト・エディタには、スクリプトをすばやく作成するための高度な機能が備わっています。用意されているスクリプト・エディタは、次のとおりです：
 - **MaxL スクリプト・エディタ:** MaxL ステートメントを作成し、実行して、コンソールでその結果を表示できます。構文の色分け機能やオートコンプレット機能が備わっており、MaxL ステートメントをすばやく作成するのに役立ちます。詳細は、[400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)を参照してください。
 - **計算スクリプト・エディタ:** 計算スクリプトをすばやく作成するための機能が用意されています。構文は読みやすいように色分けされます。メンバーや計算関数はエディタのツリー・ビューに表示されるので、簡単にスクリプトに挿入できます。詳細は、[356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」](#)を参照してください。
 - **レポート・スクリプト・エディタ:** レポート・スクリプトをすばやく作成するための機能が用意されています。構文は読みやすいように色分けされます。メンバーやレポート・コマンドはエディタのツリー・ビューに表示されるので、簡単にスクリプトに挿入できます。詳細は、[388 ページの「レポート・スクリプト・エディタについて」](#)を参照してください。
- **「メッセージ」ペイン:** 「メッセージ」ペインは、コンソール・ウィンドウの最下位に表示されます。このペインには、Essbase 管理サーバーおよび Essbase サーバーからのエラー・メッセージやステータス情報が表示されます。詳細は、[「メッセージ」ペイン](#)を参照してください。
- **広範かつ詳細なオンライン・ヘルプ・システム:** コンソールには、クロスプラットフォームに対応した HTML ベースのオンライン・ヘルプ・システムが組み込まれています。このオンライン・ヘルプでは、Administration Services を使用して Essbase の管理タスクを行う方法が説明されています。他の Essbase ドキュメントへの直接リンクも、必要に応じて用意されています。Essbase の個々のタスクに関する情報を検索できる他、ダイアログ・ボックス、ウィンドウ、エディタなどのコンポーネントに関する状況依存ヘルプを表示できます。

関連情報

- [42 ページの「管理サービス・コンソールのカスタマイズ」](#)
- [40 ページの「右クリック・メニュー」](#)
- [管理サービス・コンソールの表示オプションの設定](#)

右クリック・メニュー

右クリック・メニューは、コンソールで状況依存コマンドにアクセスするために使用します。右クリック・メニューには、エンタープライズ・ビューで現在選択しているオブジェクトに一般的に使用されるコマンドや、ワークスペース・ペイン内のアクティブ・ウィンドウに固有のコマンドが含まれます。右クリック・メニューのオプションは、コンソール内での現在位置やエンタープライズ・ビューでの選択項目に応じて動的に変化します。

たとえば、エンタープライズ・ビューでデータベースを選択してからマウスの右ボタンをクリックすると、データベース関連のコマンドがショートカット・メニューに表示されます。

左右のマウス・ボタンの役割は自由に構成できます。このヘルプ・システムでは、左のマウス・ボタンをプライマリのボタン、右のマウス・ボタンをセカンダリのボタンと想定しています。ご使用のマウスの構成に応じて、メニューにアクセスする手順を変更してください。

関連情報

- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)

右クリック・メニューにかわる操作方法

右クリック・メニューからアクセスするすべてのコマンドは、次に示す方法でもアクセスできます。都合のよい方法を使用してください:

- マウスを使用して、メニュー・バーのメニューから [メニュー・オプション](#) を選択します。
- マウスを使用して、メニュー・オプションを表す [ツールバー](#) のボタンを選択します。
- キーボードを使用して、メニューおよびメニュー・オプションをメニュー・バーから選択します。
- マウスまたはキーボードを使用して、右クリック・メニューのオプションと同じことを行うボタンを選択します。

メニュー・バー

メニュー・バーが、コンソール・ウィンドウの「[マストヘッド](#)」の下に表示されます。メニュー・バーは、コンソール内での現在位置に応じて動的に変化します。エンタープライズ・ビューで現在選択しているオブジェクトに使用可能なコマンドのみ、またはワークスペース・ペインのアクティブ・ウィンドウに固有のコマンドのみが表示されます。

メニュー・バーのオプションのほとんどは、右クリックで表示される状況依存の"ショートカット"・メニューでも使用できます。詳細は、[40 ページの「右クリック・メニュー」](#) を参照してください。

マストヘッド

マストヘッドには製品名と Oracle ロゴが含まれます。マストヘッドは、メニュー・バーの上、コンソール・ウィンドウのタイトル・バーの下に表示されます。

マストヘッドを表示するには、「表示」メニューを選択してから、「マストヘッド」チェック・ボックスを選択します。

マストヘッドを非表示にするには、「表示」メニューを選択してから、「マストヘッド」チェック・ボックスの選択を解除します。

コンソールのツールバー

コンソールのツールバーを使用すると、共通で使用されるコマンドにすばやくアクセスできます。ツールバーの内容は、コンソールで開いているウィンドウに応じて動的に変わります。マウス・ポインタをツールバー・ボタンの上に重ねると、ボタンについての説明が"ツールチップ"で表示されます。

▶ 表示されているツールバーを非表示にするには:

- 1 「表示」メニューを選択します。
- 2 「ツールバー」チェック・ボックスの選択を解除します。

▶ コンソール・ウィンドウでのツールバーの位置を選択するには:

- 1 「ツール」>「コンソール・オプション」を選択します。
- 2 「オプション」ダイアログ・ボックスで、「表示」タブを選択します。
- 3 「ツールバーのレイアウト」エリアで、レイアウト・オプションを選択します。
- 4 「適用」をクリックします。
- 5 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

メッセージ・ペイン

メッセージ・ペインは、コンソール・ウィンドウの一番下に表示されます。Essbase や Essbase 管理サーバーから戻されたメッセージは、この領域に表示されます。

メッセージ・ペインには、エラー・メッセージとステータス情報が表示されます。Essbase から戻されたエラー・メッセージは、エラー・メッセージ番号で識別されます。個々のエラー・メッセージ番号については、『Oracle Essbase エラー・メッセージ・リファレンス』を参照してください。

このペインを非表示にするには、「表示」を選択し、「メッセージ」チェック・ボックスの選択を解除します。「表示」「」メニューで再び表示するように設定するまで、「メッセージ」ペインは非表示になります。

実行中の MaxL ステートメントを表示するオプションを選択している場合は、「MaxL ステートメント」という追加のタブが「メッセージ」ペインに表示されません。

このペインの右クリック・メニューでは、メッセージの消去、コピー、電子メールによる送信、印刷、別のプログラムへの保存が行えます。また、「MaxL ステートメント」ペインでは、右クリック・メニューを使用して MaxL ステートメントとともにメッセージやデータを表示するように選択できます。

管理サービス・コンソールのカスタマイズ

コンソールの構成要素は、使用しやすいようにカスタマイズできます:

- 「オプション」ダイアログ・ボックスで、コンソールの様々なオプションを設定できます。

- エンタープライズ・ビュー・ツリーの一部を、別のカスタム・ビューにコピーできます。52 ページの「カスタム・ビューについて」を参照してください。
- 「表示」メニューでは、インタフェースのマストヘッド、ツールバー、ステータス・バー、ナビゲーション・ペイン、およびメッセージ・ペインの表示/非表示を切り替えることが可能です。
- ナビゲーション・ペインの大きさは、ナビゲーション・ペインの右端にマウス・カーソルを置いてドラッグすることで、希望するサイズに変更できます。
- メッセージ・ペインの大きさは、メッセージ・ペインの上端にマウス・カーソルを置いてドラッグすることで、希望するサイズに変更できます。

関連情報

- 46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」
- 管理サービス・コンソールの表示オプションの設定
- 53 ページの「カスタム・ビューの作成」

管理サービス・コンソールのウィンドウの印刷

コンソール内のほとんどのウィンドウは、そのコンテンツを印刷できます。今回のリリースでは、出力のフォーマットは変更できません。

▶ 開いているウィンドウのコンテンツを印刷するには:

- 1 印刷するウィンドウを開きます。
- 2 「ファイル」>「印刷」を選択します。
- 3 「印刷」ダイアログ・ボックスで、デフォルト・プリンタについて指定可能な印刷オプションを設定します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- 373 ページの「スクリプトの印刷」

管理サービス・コンソール内のウィンドウの管理

コンソールでは、同時に複数のウィンドウを開くことが可能です。コンソールのメニュー・バーの「整理」メニューに、開いているウィンドウを管理するためのオプションが用意されています。

管理サービス・コンソールで開いている複数のウィンドウを管理する方法は、次のとおりです:

- 開いているウィンドウをアクティブにするには、「整理」を選択し、次にリストからアクティブにしたいウィンドウを選択します。
- 開いているすべてのウィンドウをワークスペース・ペインに上下に並べて表示するには、「整理」>「上下に並べて表示」を選択します。
- 開いているすべてのウィンドウをワークスペース・ペインに左右に並べて表示するには、「整理」>「左右に並べて表示」を選択します。
- 開いているすべてのウィンドウをワークスペース・ペインに重ねて表示するには、「整理」>「重ねて表示」を選択します。
- 最小化されたウィンドウをワークスペース・ペインの下辺に沿って並べるには、「整理」>「アイコン」を選択します。
- すべてのウィンドウを閉じるには、「整理」>「すべて閉じる」を選択します。
- 開いているすべてのウィンドウのリストを表示するには、「整理」>「ウィンドウ」を選択します。このリストを使用して特定のウィンドウをアクティブにできます。

関連情報

- [717 ページの「ウィンドウ」ダイアログ・ボックス](#)
- [39 ページの「管理サービス・コンソールの機能」](#)

管理サービス・コンソール・セッションでのアクティブな別名テーブルの設定

管理サービス・コンソール・セッションで使用するアクティブな別名テーブルを設定できます。このセッションで別名が表示または更新される時は、アクティブな別名テーブル内の別名が使用されます。

管理サービス・コンソールの設定とは別に、[アウトライン・エディタのアクティブな別名テーブルを設定](#)できます。

- ▶ 管理サービス・コンソール・セッションでのアクティブな別名テーブルを設定するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「設定」>「アクティブな別名テーブル」を選択します。
 - 3 「アクティブな別名テーブルの設定」ダイアログ・ボックスで、使用可能な別名テーブルのリストから別名テーブルを選択します。
 - 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)
- [688 ページの「アクティブな別名テーブルの設定」ダイアログ・ボックス](#)
- [189 ページの「アウトライン・エディタのアクティブな別名テーブルの設定」](#)

関連コマンド

- [alter database\(MaxL\)](#)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- [setalias\(ESSCMD\)](#)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ウィザードの使用

Administration Services には次のウィザードが用意されており、複雑な管理タスクを順を追って実行できます:

- [707 ページの「ユーザー設定ウィザード」](#)
- [641 ページの「移行ウィザード」](#)
- [485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」](#)
- [490 ページの「集約設計ウィザード」](#)
- [487 ページの「集約ストレージ・パーティション・ウィザード」](#)

ウィザードにアクセスするには、「ファイル」>「ウィザード」を選択し、メニューからウィザードを選択します。

エンタープライズ・ビューの使用

ここには次のトピックがあります:

- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)
- [49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」](#)
- [50 ページの「エンタープライズ・ビューへのオブジェクトの追加」](#)
- [50 ページの「エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除」](#)
- [51 ページの「エンタープライズ・ビューの展開および縮小」](#)
- [51 ページの「エンタープライズ・ビューのリフレッシュ」](#)
- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)
- [53 ページの「カスタム・ビューの作成」](#)
- [54 ページの「カスタム・ビューからのオブジェクトの削除」](#)
- [55 ページの「カスタム・ビューでのオブジェクトの並べ替え」](#)
- [55 ページの「カスタム・ビューのタブの名前変更」](#)
- [56 ページの「オブジェクトのナビゲーションと選択」](#)
- [57 ページの「オブジェクトの操作」](#)

エンタープライズ・ビューについて

管理サービス・コンソールを開始すると、エンタープライズ・ビューのタブがナビゲーション・ペインに表示されます。エンタープライズ・ビューは、Essbase 環境のグラフィカルなツリー表示です。エンタープライズ・ビューには、ユーザーが選択した Essbase 管理サーバーと Essbase サーバーが表示されます。また、他の Oracle 製品のサーバー(配置サーバーなど)が存在する場合は、それらも表示されません。

バージョンが異なる複数の Essbase を、同じビューで管理できます。Essbase 環境を表すビューはカスタマイズ可能であるため、管理者ごとにその表示が異なる場合があります。詳細は、[48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)を参照してください。

エンタープライズ・ビューから Essbase オブジェクトを直接操作できます。エンタープライズ・ビューのオブジェクトに対してアクションを実行するには、オブジェクトを選択して右クリックし、そのオブジェクトの状況依存ショートカット・メニューを表示させる方法が最も簡単です。[57 ページの「オブジェクトの操作」](#)を参照してください。

エンタープライズ・ビュー・ツリーのノードのコンテンツを表示するには、オブジェクトのノードを展開するか、またはオブジェクトを直接ダブルクリックします。展開したアイテムを非表示にするには、オブジェクトのノードを縮小するか、またはオブジェクトを直接ダブルクリックします。

注：「表示」メニューを使用すると、エンタープライズ・ビューが含まれるナビゲーション・ペインの表示と非表示を切り替えられます。

関連情報

- [56 ページの「オブジェクトのナビゲーションと選択」](#)
- [57 ページの「オブジェクトの操作」](#)
- [53 ページの「カスタム・ビューの作成」](#)
- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)
- [50 ページの「エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除」](#)
- [49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」](#)

エンタープライズ・ビュー・オブジェクトの階層

エンタープライズ・ビューでは、Essbase のコンポーネントとそれに関連するオブジェクトが、ナビゲーション・ツリーの形で表示されます。Essbase 管理サーバーや Essbase サーバーのノード名は、それぞれのサーバー・コンピュータの名前と同じです。

アプリケーション、データベース、およびそれらに関連するオブジェクトは、「Essbase サーバー」ノードの下位ノードとして表示されます。一部のオブジェクトはコンテナ・ノードにグループ化されます。たとえば、個々の Essbase サーバーは「Essbase サーバー」ノードに含まれ、個々のアプリケーションは「アプリケーション」コンテナ・ノードに含まれています。

Essbase に [サンプル・アプリケーション](#) と [データベース](#) がインストールされている場合は、自社のアプリケーションやデータベースとともに、それらのサンプルがエンタープライズ・ビューに表示されます。

▶ それぞれの Essbase コンポーネントの下位に表示されるオブジェクトの階層や説明は、次の項目を参照してください:

- 1 [Essbase 管理サーバー](#)
- 2 [Essbase サーバー](#)

「管理サーバー」のビュー

次の表に、エンタープライズ・ビューの「管理サーバー」ノードに含まれているアイテムを示します。

ノード	コンテンツ
管理サーバー	Essbase 管理サーバーのコンテナ・ノード。
プロパティ	Essbase 管理サーバーのプロパティを表示および編集できるウィンドウが表示されます。
ユーザー	Essbase 管理サーバーに定義されたすべてのユーザーのコンテナ・ノードです。

「Essbase サーバー」のビュー

次の表に、エンタープライズ・ビューの「Essbase サーバー」ノードに含まれているアイテムを示します。

ノード	コンテンツ
Essbase サーバー	エンタープライズ・ビューに追加 したすべての Essbase サーバーを含むコンテナ・ノードです。
アプリケーション	Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを含んだコンテナ・ノードです。
計算スクリプト	アプリケーションやデータベースに関連付けられているすべての計算スクリプトを含んだコンテナ・ノードです。アプリケーションやデータベースに計算スクリプトが含まれている場合にのみ、このノードが表示されます。
レポート・スクリプト	アプリケーションやデータベースに関連付けられているすべてのレポート・スクリプトを含んだコンテナ・ノードです。アプリケーションやデータベースにレポート・スクリプトが含まれている場合にのみ、このノードが表示されます。
ルール・ファイル	アプリケーションやデータベースに関連付けられているすべてのルール・ファイルを含んだコンテナ・ノードです。データベースにルール・ファイルが含まれている場合にのみ、このノードが表示されます。
アウトライン	参照および編集用に、データベースのアウトラインが表示されます。
リンク・レポート・オブジェクト	データベースの リンク・レポート・オブジェクト (LRO) を表示し管理するためのウィンドウが開きます。

ノード	コンテンツ
トリガー	データベースの トリガー を表示し管理するためのウィンドウが開きます。データベースにトリガーが含まれている場合にのみ、このノードが表示されます。
フィルタ	データベースに定義されている セキュリティ・フィルタ を表示し管理するためのウィンドウが開きます。データベースにフィルタが含まれている場合にのみ、このノードが表示されます。
パーティション	データベースがソースまたはターゲットであるすべての パーティション を含むコンテナ・ノードです。
セキュリティ	展開すると、Essbase のユーザーとグループを含んだコンテナ・ノードが表示されます。
ユーザー	Essbase サーバーに定義されているすべての ユーザー を表示し管理するためのウィンドウが表示されます。
グループ	Essbase サーバーに定義されているすべての グループ を表示し管理するためのウィンドウが表示されます。
使用不可であるユーザー名	Essbase サーバーで 使用不可であるユーザー名 を表示しアクティブにするためのウィンドウが表示されます。

エンタープライズ・ビューのカスタマイズ

エンタープライズ・ビューの一部分を取り出した **カスタム・ビュー** を作成できます。エンタープライズ・ビューをカスタマイズしたい場合には、カスタム・ビューを作成するのが唯一の方法になります。エンタープライズ・ビューでは、オブジェクトの表示順序は変更できません。また、Essbase から実際にオブジェクトを削除しないかぎり、エンタープライズ・ビューからオブジェクトを削除できません。エンタープライズ・ビューから Essbase サーバー全体を削除することは可能です。

エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加

エンタープライズ・ビューは、Essbase 環境をグラフィカルに表したツリー・ビューです。このビューには、Essbase 管理サーバーと Essbase サーバーが表示されます。エンタープライズ・ビューには、特定の Essbase サーバーのセットを表示できます。エンタープライズ・ビューに表示する Essbase サーバーのセットは、Administration Services のユーザーごとに変更できます。サーバーへのマッピングは、Essbase 管理サーバーのユーザー・プロパティの一部として保管されます。

Administration Services に接続するたびに、エンタープライズ・ビューへ表示するように選択した各 Essbase サーバーに自動的に**接続されます**(そのサーバーが稼働している場合)。管理サービス・コンソールを開いた後で Essbase サーバーを追加すると、そのサーバーに自動的に接続されます。エンタープライズ・ビューに追加した Essbase サーバーを操作するには、そのサーバーが稼働している必要があります。

また、エンタープライズ・ビューから **Essbase サーバー** を削除できます。

▶ エンタープライズ・ビューに Essbase サーバーを追加するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、「Essbase サーバー」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、ショートカット・メニューから「Essbase サーバーの追加」を選択します。

「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 3 ビューに追加する Essbase サーバーの名前(必要に応じてクラスタ名を含む)を入力します。

注: Essbase サーバーのエージェント・ポートがデフォルト・ポートと異なる場合は、ポート番号も入力する必要があります。次のフォーマットを使用します: サーバー・マシン名:ポート番号 (jdoe2:4378 など)

- 4 ネイティブの Essbase 認証を使用する場合は、次の手順を実行します:

1. Essbase サーバーのユーザー名を入力します。
2. ユーザーのパスワードを入力して確認します。

- 5 外部認証を使用している場合は、次の手順に従います:

1. 「シングル・サインオンの使用」を選択します。
2. ユーザーの現在のログイン名を入力します。

- 6 オプション: SSL 暗号化を使用する場合は、「SSL を使用」を選択します。

- 7 「OK」をクリックします。

追加した Essbase サーバーがエンタープライズ・ビューに表示されます。

関連情報

- [480 ページの「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックス](#)
- [49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」](#)
- [86 ページの「Essbase の接続とポートについて」](#)
- [87 ページの「Essbase サーバーへの接続」](#)
- [88 ページの「Essbase サーバーからの切断」](#)

エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除

エンタープライズ・ビューに表示される Essbase サーバーは、Essbase 管理サーバーのユーザー・プロパティにリストされた Essbase サーバーのみです。エンタープライズ・ビューに表示される Essbase サーバーのなかで、管理する必要がなくなったものは、自分のビューから削除できます。自分のビューからサーバーを削除しても、他の管理者のビューには影響しません。

▶ エンタープライズ・ビューから Essbase サーバーを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーのノードを選択します。

- 2 右クリックして、ポップアップ・メニューから「Essbase サーバーの削除」を選択します。

選択した Essbase サーバーがエンタープライズ・ビューから削除されます。

関連情報

- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)
- [50 ページの「エンタープライズ・ビューへのオブジェクトの追加」](#)
- [50 ページの「エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除」](#)
- [61 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加」](#)
- [63 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除」](#)
- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)

エンタープライズ・ビューへのオブジェクトの追加

Essbase のオブジェクト(アプリケーション、データベース、計算スクリプトなど)を新しく作成すると、エンタープライズ・ビューが更新され、追加した内容が反映されます。他の Essbase 管理者による最近の変更内容を表示に反映させるには、[エンタープライズ・ビューをリフレッシュする](#)必要があります。

エンタープライズ・ビューに Essbase サーバーを追加するには、Essbase 管理サーバー上のユーザー・プロパティを変更する必要があります。詳細は、[48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)を参照してください。

関連情報

- [50 ページの「エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除」](#)
- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)
- [49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」](#)
- [51 ページの「エンタープライズ・ビューのリフレッシュ」](#)

エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除

Essbase オブジェクト(データベース、計算スクリプト、フィルタなど)を Essbase から削除すると、エンタープライズ・ビューが更新され、削除の結果が反映されます。他の Essbase 管理者による最近の変更内容を表示に反映させるには、[エンタープライズ・ビューをリフレッシュする](#)必要があります。

エンタープライズ・ビューから Essbase サーバーを削除するには、Essbase 管理サーバーにある自分のユーザー・プロパティを変更する必要があります。詳細は、[49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」](#)を参照してください。データベースなどの他の Essbase オブジェクトは、Essbase から削除し

ないかぎり、エンタープライズ・ビューから削除できません。あるオブジェクトを、サーバーから削除せずにエンタープライズ・ビューに表示しないようにするには、そのオブジェクトを含まないカスタム・ビューを作成します。53 ページの「カスタム・ビューの作成」を参照してください。

関連情報

- 50 ページの「エンタープライズ・ビューへのオブジェクトの追加」
- 51 ページの「エンタープライズ・ビューのリフレッシュ」
- 49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」

エンタープライズ・ビューの展開および縮小

エンタープライズ・ビューのツリーは、部分的に展開したり縮小したりできます。

▶ エンタープライズ・ビューでノードを展開するには:

1 エンタープライズ・ビューで、ノードを選択します。

展開できるノードは、各 Essbase サーバー・ノード、「アプリケーション」コンテナ・ノード、各アプリケーション・ノード、および各データベース・ノードです。

2 右クリックして「すべて展開」を選択します。

選択したノードの下のすべてのノードが展開されます。

▶ エンタープライズ・ビューでノードを縮小するには:

1 エンタープライズ・ビューで、ノードを選択します。

縮小できるノードは、「Essbase サーバー」コンテナ・ノード、各 Essbase サーバー・ノード、「アプリケーション」コンテナ・ノード、各アプリケーション・ノード、および各データベース・ノードです。

2 右クリックして「すべて縮小」を選択します。

選択したノードの下のすべてのノードが縮小されます。

関連情報

- 46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」
- 56 ページの「オブジェクトのナビゲーションと選択」

エンタープライズ・ビューのリフレッシュ

Essbase のオブジェクトを作成または削除すると、エンタープライズ・ビューが更新され、変更内容が反映されます。自分以外の管理者によって最近変更された内容を表示に反映させるには、エンタープライズ・ビューを手動でリフレッシュする必要があります。

エンタープライズ・ビューのリフレッシュは、コンテナ・ノード・レベルで行います。たとえば、アプリケーションの最新リストを表示するには、「アプリケー

ション」コンテナ・ノードをリフレッシュします。エンタープライズ・ビュー全体のリフレッシュはできません。

▶ エンタープライズ・ビューをリフレッシュするには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、ノードを選択します。
- 2 選択したノードを、次のいずれかの方法でリフレッシュします:
 - 右クリックして、「<」オブジェクト名「>リストのリフレッシュ」を選択します。このメニュー・アイテムは、選択したコンテナ・ノードによって変わります。
 - ノードをいったん縮小し、再度展開します。
- 3 エンタープライズ・ビューのその部分が更新されます。

関連情報

- [50 ページの「エンタープライズ・ビューへのオブジェクトの追加」](#)
- [50 ページの「エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除」](#)

カスタム・ビューについて

エンタープライズ・ビューには、Essbase サーバーやアプリケーション、データベースなどが多数含まれていることがあります。エンタープライズ・ビュー・ツリーをカスタマイズしたビューを、ナビゲーション・ペインの別のタブに作成できます。カスタム・ビューを作成すれば、エンタープライズ・ビューよりも少ないマウス・クリックで目的のオブジェクトに到達できるようになります。

たとえば、特定のアプリケーションのタスクを定期的に行っている場合には、そのアプリケーションのみが含まれたビューを作成して、管理にかかる手間を減らすことが可能です。これを行うには、そのアプリケーションのノードをカスタム・ビューに追加します。

カスタム・ビューについては、次の点に注意してください:

- カスタム・ビューには個々のコンテナ・ノードは追加できません。たとえば、「アプリケーション」コンテナ・ノードを選択してカスタム・ビューに追加することはできません。選択してカスタム・ビューに追加できるのは、コンテナ・ノードの下にある個々のオブジェクトです。
- カスタム・ビューに追加できる Essbase オブジェクトは、Essbase サーバー、アプリケーション、データベース、計算スクリプト、レポート・スクリプト、フィルタ、およびルール・ファイルです。Essbase のユーザーとグループ、Essbase 管理サーバー、および Essbase 管理サーバーのユーザーは、カスタム・ビューに追加できません。
- オブジェクトを追加すると、そのオブジェクトの下に表示されているすべてのオブジェクトも追加されます(コンテナ・ノードも含まれます)。
- 既存のカスタム・ビューにオブジェクトを追加すると、そのオブジェクトはツリーの最後のアイテムとして配置されます。カスタム・ビューでのオブジェクトの表示位置は、後で[再配置](#)できます。

注： カスタム・ビューでオブジェクトを並べ替えても、エンタープライズ・ビューでのオブジェクトの順序は変わりません。エンタープライズ・ビューでのオブジェクトの順序は変更できません。

- オブジェクトの操作は、カスタム・ビューとエンタープライズ・ビューのどちらでも行えます。

作成したカスタム・ビューは、エンタープライズ・ビューに含まれている同じオブジェクトを指す単なるポインタとして機能します。エンタープライズ・ビュー・ツリーとカスタム・ビュー・ツリーは、まったく同じように動作するため、エンタープライズ・ビューで行った変更はカスタム・ビューにも反映されます(その逆も同様です)。

- 複数のカスタム・ビューを作成できます。

作成できるカスタム・ビューの数に制限はありません。ただし、カスタム・ビューの数が多くなると、コンソールのロードに時間がかかる場合があります。また、ナビゲーション・ペインの下の領域がタブで一杯になると、タブの表示が複数行になり、エンタープライズ・ビューの領域が狭くなります。

- 作成したカスタム・ビューには、デフォルトで **MyView<数字>** という名前が付けられます。カスタム・ビューのタブは、わかりやすいように **名前を変更** できます。
- カスタム・ビューに追加したオブジェクトは、カスタム・ビューのルート・ノードの直下に配置されます。ルート・ノードの下のオブジェクトは、追加された順に表示されます。
- 管理サービス・コンソールを閉じるときにカスタム・ビューで作業していた場合、次にコンソールにログインするとエンタープライズ・ビューではなくカスタム・ビューが表示されます。

関連情報

- [53 ページの「カスタム・ビューの作成」](#)
- [54 ページの「カスタム・ビューからのオブジェクトの削除」](#)
- [55 ページの「カスタム・ビューのタブの名前変更」](#)
- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)

カスタム・ビューの作成

エンタープライズ・ビュー・ツリーの一部分を取り出したカスタム・ビューを、ナビゲーション・ペインの別のタブに作成できます。作成したカスタム・ビューは、エンタープライズ・ビューに含まれている同じオブジェクトを指す単なるポインタとして機能します。エンタープライズ・ビューでオブジェクトを操作すると、カスタム・ビューにその内容が反映されます。また、その逆も同様です。

▶ エンタープライズ・ビュー・ツリーのカスタム・ビューを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、カスタム・ビューに表示したいオブジェクトを選択します。
- 2 次のいずれかの方法で、カスタム・ビューを作成します:
 - 右クリックし、「追加」>「新規カスタム・ビュー」を選択します。

- ナビゲーション・ペインの下にある「エンタープライズ・ビュー」タブの横の空領域に、選択したオブジェクトをドラッグします。

ナビゲーション・ペインに新しいタブが作成され、選択したオブジェクトとその下位にあるすべてのオブジェクトがそのタブに追加されます。タブのデフォルトの名前は MyView1 です。選択したオブジェクトの親のコンテナ・ノードは、カスタム・ビューには追加されません。

▶ 既存のカスタム・ビューにオブジェクトを追加するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、追加したいオブジェクトを選択します。
- 2 次のいずれかの方法で、カスタム・ビューにオブジェクトを追加します:
 - 右クリックして、「追加」を選択し、続いて目的のカスタム・ビューを選択します。
 - ナビゲーション・ペインの下にある目的のタブに、選択したオブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。オブジェクトをドラッグしながらマウス・カーソルをタブの上に重ねていると、そのカスタム・ビューに表示が変更されます。

オブジェクトは、ツリーの最後のアイテムとして追加されます。アイテムの順序を変更する場合は、希望する順序に[これらを整理](#)します。

関連情報

- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)
- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [55 ページの「カスタム・ビューのタブの名前変更」](#)
- [54 ページの「カスタム・ビューからのオブジェクトの削除」](#)

カスタム・ビューからのオブジェクトの削除

カスタム・ビューからオブジェクトを削除できます。また、カスタム・ビュー全体をナビゲーション・ペインから削除することもできます。カスタム・ビューからオブジェクトを削除しても、エンタープライズ・ビュー・ツリーや Essbase サーバーからそのオブジェクトが削除されることはありません。詳細は、[50 ページの「エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの削除」](#)を参照してください。

削除できるのは、自分で追加したオブジェクトのみです。たとえば、カスタム・ビューに Sample アプリケーション・ノードを追加している場合は、そのノードのみを削除できます。Sample アプリケーション・ノード下の Basic データベース・ノードは削除できません。

▶ カスタム・ビューからオブジェクトを削除するには:

- 1 カスタム・ビュー・ツリーで、目的のオブジェクトを選択します。
- 2 右クリックして「カスタム・ビューから削除」を選択します。

- ▶ 1つのカスタム・ビュー全体を削除するには:
 - 1 削除するカスタム・ビューのタブを選択します。
 - 2 タブを右クリックして、「<MyView>の削除」を選択します。

- ▶ すべてのカスタム・ビューを削除するには:
 - 1 いずれかのカスタム・ビューのタブを選択します。
 - 2 タブを右クリックして、「すべてのカスタム・ビューの削除」を選択します。

関連情報

- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)
- [53 ページの「カスタム・ビューの作成」](#)
- [55 ページの「カスタム・ビューのタブの名前変更」](#)
- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)

カスタム・ビューでのオブジェクトの並べ替え

カスタム・ビューでは、オブジェクトの順序を変更できます。変更できるのは、ルート・ノードの直下のノードのみです。

エンタープライズ・ビューでは、オブジェクトの順序は変更できません。

- ▶ カスタム・ビューでオブジェクトを並べ替える手順は、次のとおりです:
 - 1 ナビゲーション・ペインで、目的のカスタム・ビューのタブを選択します。
 - 2 タブを右クリックして、「ノードの配置<」ビュー名「>」を選択します。
 - 3 「カスタム・ビューのノードの配置」ダイアログ・ボックスで、移動するノードを選択し、必要に応じて「上へ移動」または「下へ移動」をクリックします。
 - 4 「OK」をクリックして変更を適用し、カスタム・ビューを更新します。展開されていたツリー・ノードは、ルート・レベルに縮小されます。

関連情報

- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)
- [55 ページの「カスタム・ビューのタブの名前変更」](#)
- [54 ページの「カスタム・ビューからのオブジェクトの削除」](#)

カスタム・ビューのタブの名前変更

エンタープライズ・ビューのカスタム・ビューを作成すると、MyView<数字>という名前(デフォルト)の新しいタブがナビゲーション・ペインに追加されます。カスタム・ビューのタブ名は、そのビューに適した名前に変更できます。

▶ カスタム・ビューのタブの名前を変更するには:

- 1 カスタム・ビューのタブを選択します。
- 2 タブを右クリックして、「<ビュー名>の名前変更」を選択します。
- 3 「カスタム・ビューの名前変更」ダイアログ・ボックスで、ビューの新しい名前を入力します。

関連情報

- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)
- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [53 ページの「カスタム・ビューの作成」](#)

オブジェクトのナビゲーションと選択

エンタープライズ・ビューでは、Essbase サーバー、Essbase 管理サーバー、およびそれに関連するオブジェクトを表示して操作できます。コンソールで行うタスクのほとんどは、エンタープライズ・ビューで選択した Essbase オブジェクト(Essbase データベースなど)に対して行います。ここでは、エンタープライズ・ビュー・ツリーのナビゲーションとオブジェクトの選択方法について説明します。

エンタープライズ・ビューやカスタム・ビューのノードに含まれているコンテンツは、次の方法で表示できます:

- オブジェクトの横にあるノードを展開します。
たとえば、「アプリケーション」コンテナ・ノードを展開すると、そのユーザーがアクセス権を持っている Essbase アプリケーションのリストが表示されます。アプリケーションのリストは、ツリー内のそのノードの下に表示されます。
- 展開するオブジェクトのテキストをダブルクリックします。

展開したオブジェクトは、次の方法で縮小できます:

- オブジェクトの横にあるノードを縮小します。
- 縮小にするオブジェクトのテキストをダブルクリックします。

ツリー上のオブジェクトを選択するには、ツリー・ノードの横に表示された語句を直接クリックします。オブジェクトの横にあるプラスのボックスやマイナスのボックスをクリックしても、ノードが展開/縮小されるだけで、選択したことにはなりません。

エンタープライズ・ビュー・ツリーを上下にたどっていくには、ナビゲーション・ペインのスクロール・バーまたはキーボードの矢印キーを使用します。

関連情報

- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [57 ページの「オブジェクトの操作」](#)
- [40 ページの「右クリック・メニュー」](#)

- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)

オブジェクトの操作

エンタープライズ・ビューでは、Essbase サーバー、Essbase 管理サーバー、およびそれに関連するオブジェクトを表示して操作できます。コンソールで行うタスクのほとんどは、エンタープライズ・ビューで選択した Essbase オブジェクト(データベースなど)に対して行います。ここでは、エンタープライズ・ビューで選択したオブジェクトを操作する方法を説明します。

エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューのオブジェクトを操作するには、ツリー・ノードの横に表示された語句を直接クリックします。オブジェクトの横にあるノードをクリックしても、オブジェクトが展開/縮小されるだけで、選択したことにはなりません。

選択したオブジェクトを操作する方法は、次のようにいくつかあります:

- 右クリックして、ショートカット・メニューからコマンドを選択します。
ショートカット・メニューのアイテムは動的に変化し、選択したオブジェクトに関連するコマンドのみが表示されます。
- メニュー・バーの「アクション」メニューからコマンドを選択します。
これらのメニュー・アイテムは動的に変化し、選択したオブジェクトに関連するコマンドのみが表示されます。
- ツールバーで、実行したいコマンドを表すボタンをクリックします。マウス・ポインタをボタンの上に重ねると、ボタンの説明が表示されます。

選択したメニュー項目に応じて、ダイアログ・ボックスやウィンドウがワークスペース・ペインに表示されます。

右クリック・メニューやそれにかわる操作方法の詳細は、[40 ページの「右クリック・メニュー」](#)を参照してください。

関連情報

- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [56 ページの「オブジェクトのナビゲーションと選択」](#)
- [40 ページの「右クリック・メニュー」](#)

4

Essbase管理サーバー

この章の内容

Essbase 管理サーバーについて	59
Essbase 管理サーバーのログについて	60
Administration Services セッションのタイムアウトの設定	60
エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加.....	61
Essbase 管理サーバーからの切断	61
Essbase 管理サーバーのステータスの確認.....	62
エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除	63
Essbase 管理サーバーのユーザーの作成.....	63
Essbase 管理サーバーのユーザーのパスワードの変更.....	64
Essbase 管理サーバー・ユーザーの名前変更	65
Essbase 管理サーバー・ユーザーの削除.....	66
Essbase 管理サーバーの通信ポートの指定.....	66
Essbase 管理サーバーの開始.....	67
管理サービス・コンソールの開始	68
管理サービス Web コンソールの開始	68
電子メール・サーバーの指定	69
Administration Services のシャット・ダウン	70

Essbase 管理サーバーについて

Administration Services には、Essbase 管理サーバーと呼ばれる中間層サーバーがあります。このサーバーによって、クライアント・コンソールと Essbase サーバーとの間の通信が処理されます。Essbase 管理サーバーは、クロス・サーバー操作とユーザー・プリファレンスのパーシスタンスをサポートします。

システム管理者は、Essbase 管理サーバーにユーザーを作成します。これにより、ユーザーは Essbase 管理サーバーに接続して、エンタープライズ・ビューへ自分が管理する **Essbase サーバーを追加**できるようになります。Essbase 管理サーバーは、Essbase サーバーへのユーザーの接続を管理します。

Essbase 管理サーバーのノード名とコンピュータ名は同じです。エンタープライズ・ビューに、**複数の Essbase 管理サーバー名を表示**できます。

関連情報

- [33 ページの「Administration Services について」](#)

- 33 ページの「Administration Services のアーキテクチャ」
- 36 ページの「Administration Services の設定」

Essbase 管理サーバーのログについて

Essbase 管理サーバーを起動すると、WL_DOMAIN_HOME/servers/WEBLOGIC_NAME/logs/easserver.log にログ・ファイルが作成されます。WL_DOMAIN_HOME は WebLogic がインストールされているディレクトリ名、WEBLOGIC_NAME は WebLogic 内のサーバー・インスタンスの名前です。

Essbase 管理サーバーのログ・ファイルには、クライアント(管理サービス・コンソール)から受信したすべての要求が記録され、要求が成功したかどうかを示します。Essbase 管理サーバーをシャット・ダウンしてもログ・ファイルは消去されません。ログのファイル・サイズは、手動で管理する必要があります。

Essbase ログの詳細は、251 ページの「Essbase ログについて」を参照してください。

Administration Services セッションのタイムアウトの設定

デフォルトのアプリケーション・サーバーを使用している場合、45 分間にわたって Essbase 管理サーバーと管理サービス・コンソールとの間にアクティビティがないと、Administration Services への接続は切断されます。この場合、再接続して作業内容を保存することも、再接続せずに終了することも可能です。

デフォルトのタイムアウトは変更できます。

▶ Administration Services セッションのデフォルトのタイムアウト期間を変更するには:

- 1 EPM_ORACLE_HOME\products\Essbase\eas\server\AppServer\InstallableApps\Common\eas.ear ファイルを解凍します。
- 2 このファイル構造内で eas.war ファイルを解凍します。
- 3 このファイル構造内で web.xml ファイルを開きます。
- 4 サブレット・セッションの構成に関するセクションを探します。
session-timeout のデフォルト値は 45 分になっています。
- 5 session-timeout の値(分単位)を変更します。
- 6 ファイルを保存して閉じます。
- 7 eas.war ファイルを再圧縮します。
- 8 eas.ear ファイルを再圧縮します。

以降、設定した分数を超えると Administration Services セッションは終了します。

関連情報

- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [33 ページの「Administration Services のアーキテクチャ」](#)

エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加

エンタープライズ・ビューは、Essbase 環境をグラフィカルに表したビューです。ユーザーのエンタープライズ・ビューへの単一リリースまたは複数リリースの Essbase 管理サーバーのセットの移入、およびユーザー独自のビューへの単一リリースまたは複数リリースの Essbase 管理サーバーのセットの移入ができます。エンタープライズ・ビューから [Essbase 管理サーバー](#) を削除することもできます。

▶ エンタープライズ・ビューに Essbase 管理サーバーを追加するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバー・ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「管理サーバーの追加」を選択します。
「管理サーバーの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 Essbase 管理サーバーの名前を入力します。
- 4 Essbase 管理サーバーのユーザー名を入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

エンタープライズ・ビューに、Essbase 管理サーバーの名前とステータスが表示されます。

関連情報

- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)
- [63 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除」](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [61 ページの「Essbase 管理サーバーからの切断」](#)
- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)

Essbase 管理サーバーからの切断

エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバーから切断し、各 Essbase 管理サーバーの [接続ステータス](#) を表示できます。管理サービス・コンソールを閉じると、接続された Essbase 管理サーバーから自動的に切断されます。

Essbase 管理サーバーのエンタープライズ・ビューへの追加、およびエンタープライズ・ビューからの削除については、[61 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加」](#)、または [63 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除」](#) を参照してください。

Administration Services ポートの詳細は、[Essbase 管理サーバーの通信ポートの指定](#)を参照してください。

▶ Essbase 管理サーバーから切断するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、[Essbase 管理サーバー・ノード](#)を選択します。
- 2 右クリックして「切断」を選択します。

開いているウィンドウがすべて閉じ、未保存の変更がある場合は、保存するように求められます。選択した Essbase 管理サーバーのノードの下にあるすべてのノードが縮小され、Essbase サーバーのノードが縮小されます。コンソールのほとんどの機能は、Essbase 管理サーバーに再接続するまで使用できません。

関連情報

- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [63 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除」](#)
- [61 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加」](#)
- [62 ページの「Essbase 管理サーバーのステータスの確認」](#)
- [87 ページの「Essbase サーバーへの接続」](#)

Essbase 管理サーバーのステータスの確認

エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバーのステータスが名前の横に表示されます。

▶ Essbase 管理サーバーのステータスを特定するには、Essbase 管理サーバー・ノードを展開し、どのステータス・インジケータ用語が表示されているかを確認します:

テキスト	ステータス
実行中	サーバーは実行していますが、接続は確立されていません。
接続済	サーバーは実行しており、接続も確立されています。
停止済	サーバーは実行していません。
不明	サーバーの DNS エントリがないか、またはサーバー名が正しくありません。

関連情報

- [61 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加」](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [61 ページの「Essbase 管理サーバーからの切断」](#)

エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除

エンタープライズ・ビューに、ビューに追加した Essbase 管理サーバーが表示されます。ビューから Essbase 管理サーバーを削除できます。この削除による他の管理者のビューへの影響はありません。

▶ エンタープライズ・ビューから Essbase 管理サーバーを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバー・ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「管理サーバーの削除」を選択します。

関連情報

- [61 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加」](#)
- [61 ページの「Essbase 管理サーバーからの切断」](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)

Essbase 管理サーバーのユーザーの作成

注： この機能は、EPM System のセキュリティ・モードには適用されません。

Essbase 管理サーバーの管理権限を持っている場合は、Administration Services ユーザーを作成できます。作成するユーザーは、管理サービス・コンソールを使用して Essbase サーバーを操作したり Essbase を管理したりできます。Essbase 管理サーバーにスプレッドシート・ユーザーを作成する必要はありません。

Essbase 管理サーバーのネイティブ認証または外部認証を使用してログインするユーザーを作成できます。外部認証の場合は、EPM System セキュリティ・ドキュメントの説明に従って、Essbase 管理サーバーを適切に構成しておく必要があります。

Administration Services ユーザーの作成は、エンタープライズ・ビューまたはユーザー設定ウィザードを使用して実行できます。

- ▶ [ユーザー設定ウィザード](#)を使用して Administration Services ユーザーを作成するには、「ウィザード」>「ユーザー設定ウィザード」を選択して、ウィザードの手順に従います。
- ▶ エンタープライズ・ビューから Administration Services ユーザーを作成するには:
 - 1 エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバー・ノードの下の「ユーザー」を選択します。
 - 2 右クリックして、「ユーザーの作成」を選択します。

- 3 「管理サーバーでのユーザーの作成」ダイアログ・ボックスで、「ネイティブ」または「外部」を選択します。
- 4 「ネイティブ」を選択した場合は、次の手順を実行します:
 - ユーザーのユーザー名を入力します。
 - ユーザーの電子メール・アドレスとフル・ネームを入力します。
 - 確認のため、ユーザーのパスワードを入力します。
- 5 「外部」を選択した場合は、次の手順を実行します:
 - 「検索」をクリックします。
 - 「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックスで、検索オプションを選択し、ユーザーの検索情報を入力して、「検索」をクリックします。
 - 表示されたリストで目的のユーザーを選択して、「OK」をクリックします。
- 6 ユーザーに管理者権限を与える場合は、「管理者権限」から「TRUE」を選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

Administration Services ではユーザーが作成され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

8 エンタープライズ・ビューに Essbase サーバーを追加

関連情報

- 707 ページの「ユーザー設定ウィザード」
- 619 ページの「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックス
- 48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」
- 66 ページの「Essbase 管理サーバー・ユーザーの削除」
- 704 ページの「ユーザー・プロパティ」(管理サーバー)ウィンドウ
- 279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」

Essbase 管理サーバーのユーザーのパスワードの変更

注： この機能は、EPM System のセキュリティ・モードには適用されません。

Essbase 管理サーバーのパスワードを変更できます。Essbase 管理サーバーの管理者権限がある場合、他のユーザーのパスワードも変更できます。

Essbase 管理サーバーのパスワードを変更しても、Essbase のパスワードには影響はありません。Essbase のパスワードの変更については、301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」を参照してください。

▶ Essbase 管理サーバーのユーザーのパスワードを変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバー・ノードの下の「ユーザー」を展開します。
- 2 任意のユーザーを選択して右クリックし、「プロパティの編集」を選択します。
デフォルトの管理者アカウントのパスワードを変更する場合は、admin を選択します。
- 3 「パスワード」および「パスワードの確認」に、新しいパスワードを入力および再入力します。
- 4 「適用」をクリックします。

関連情報

- [63 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーの作成」](#)
- [301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」](#)
- [66 ページの「Essbase 管理サーバー・ユーザーの削除」](#)
- [65 ページの「Essbase 管理サーバー・ユーザーの名前変更」](#)

Essbase 管理サーバー・ユーザーの名前変更

注： この機能は、EPM System のセキュリティ・モードには適用されません。

Essbase 管理サーバーの管理者権限がある場合、自分の名前だけでなく、Essbase 管理サーバーに接続していない他のユーザーの名前も変更できます。

Essbase 管理サーバーのユーザーの名前を変更しても、Essbase のユーザー名には影響はありません。Essbase のユーザー名の変更については、[297 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの名前変更」](#)を参照してください。

▶ Essbase 管理サーバー・ユーザーの名前変更の手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバー・ノードの下の「ユーザー」を展開します。
- 2 任意のユーザーを選択して右クリックし、「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「ユーザー名」で、新しいユーザー名を入力します。
- 4 「適用」をクリックします。

Administration Services によりユーザー名が変更され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [63 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーの作成」](#)
- [64 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーのパスワードの変更」](#)
- [66 ページの「Essbase 管理サーバー・ユーザーの削除」](#)

Essbase 管理サーバー・ユーザーの削除

注： この機能は、EPM System のセキュリティ・モードには適用されません。

Essbase 管理サーバーの管理者権限がある場合、自分自身および Essbase 管理サーバーを最も最近使用したユーザー以外のユーザーを削除できます。

Essbase 管理サーバーからユーザーを削除しても、Essbase からは削除されません。Essbase のユーザーの削除については、299 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの削除」を参照してください。

▶ Essbase 管理サーバー・ユーザーを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバー・ノードの下の「ユーザー」を展開します。
- 2 任意のユーザーを選択して右クリックし、「ユーザーの削除」を選択します。
- 3 確認のメッセージが表示されたら、「はい」をクリックします。

Administration Services によりユーザーが Essbase 管理サーバーから削除され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

[63 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーの作成」](#)

Essbase 管理サーバーの通信ポートの指定

中間層アプリケーション・サーバーを使用して Administration Services を配置する場合は、インストール後に通信ポートを変更できます。いずれかのデフォルト・ポートが別のアプリケーションによって使用されている場合は、別のポート値を指定する必要があります。

▶ Essbase 管理サーバーで使用するデフォルトの通信ポートを変更するには:

- 1 アプリケーション・サーバー用の管理コンソールを起動します:
- 2 適切なページに移動して、変更を行います。
- 3 Essbase 管理サーバーが実行中の場合は終了します。
- 4 [Essbase 管理サーバーを再起動します。](#)

Essbase 管理サーバーを再起動するまで、ポートの設定は有効になりません。

注： Essbase 管理サーバーを Windows サービスとして実行している場合は、手動でこの Windows サービスを停止して Essbase 管理サーバーを起動します。手順は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

関連情報

- [33 ページの「Administration Services のアーキテクチャ」](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)

Essbase 管理サーバーの開始

Essbase 管理サーバーはエージェント・ウィンドウで稼働します。Essbase 管理サーバーのエージェント・ウィンドウには、サーバーのアクティビティ・ログが表示されます。

Windows プラットフォームでは、Essbase 管理サーバーを Windows サービスとして開始することも可能です。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

Administration Services を開始するには、まず Essbase 管理サーバーを開始し、次に管理サービス・コンソールを開始します。

▶ Essbase 管理サーバーを開始するには:

- 1 Essbase 管理サーバーをインストールしたディレクトリを探します。
- 2 そのディレクトリから、使用しているプラットフォーム用の実行可能ファイルを起動します:
 - Windows - MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/bin/startEAS.exe
 - UNIX (フォアグラウンド) - MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/bin/startEAS
 - UNIX (バックグラウンド) - MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/bin/startEAS &

注: Windows では、インストール時に「スタート」メニューにショートカットを追加することを選択した場合、「スタート」>「すべてのプログラム」>「Oracle EPM System」>「<EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME>」>「Essbase」>「Essbase Administration Services」>「Start Administration Server」を選択して、Essbase 管理サーバーを開始することも可能です。Essbase 管理サーバー用のテキストモードのエージェント・プロセスまたは DOS ウィンドウが表示されます。Essbase 管理サーバーが正常に開始すると、次のメッセージが表示されます:「サーバーは正常に起動しました クライアント要求の待機中です」。このメッセージが表示されない場合は、Essbase 管理サーバーが正常に開始しなかったことを意味します。

関連情報

- [管理サービス・コンソールの開始](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [36 ページの「Administration Services の設定」](#)

管理サービス・コンソールの開始

管理サービス・コンソールは、標準シン・クライアントを使用して実行するか、Web ブラウザから実行できます。ブラウザから管理サービス・コンソールを開始する方法は、[68 ページの「管理サービス Web コンソールの開始」](#)を参照してください。

管理サービス・コンソールを開始する前に、管理する Essbase サーバーを開始し、[Essbase 管理サーバーを開始](#)します。

注： Administration Services で Essbase を開始できなくなりました。Essbase の開始の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の OPMN を使用した Essbase の開始と停止に関する項を参照してください。

▶ 管理サービス・コンソールのシン・クライアントを開始するには:

- 1 管理サービス・コンソールをインストールしたディレクトリを探します。
- 2 そのディレクトリから、次の実行可能ファイルを起動します:
`\console\bin
\admincon.bat`

注： インストール時に「スタート」メニューにショートカットを追加するように選択した場合は、「スタート」>「すべてのプログラム」>「Oracle EPM System」>「<EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME>」>「Essbase」>「Administration Services」>「Start Administration Services Console」を選択して、管理サービス・コンソールを開始することも可能です。「Administration Services ログイン」・ダイアログ・ボックスが表示されたら、[Essbase 管理サーバー](#)に接続します。

関連情報

- [Essbase 管理サーバーの開始](#)
- [68 ページの「管理サービス Web コンソールの開始」](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [36 ページの「Administration Services の設定」](#)
- [70 ページの「Administration Services のシャット・ダウン」](#)

管理サービス Web コンソールの開始

管理サービス・コンソールを開始する前に、管理する Essbase サーバーを開始し、[Essbase 管理サーバーを開始](#)します。

注： Administration Services で Essbase を開始できなくなりました。Essbase の開始の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の OPMN を使用した Essbase の開始と停止に関する項を参照してください。

▶ ブラウザを使用して管理サービス・コンソールを開始するには:

- 1 ブラウザの URL ウィンドウに `http://server:port/easconsole/console.html` と入力します。ここで、`server` は Essbase 管理サーバーを実行しているアプリケーション・サーバーで、`port` はポート番号です。
- 2 **オプション:** コンソール・アクティビティを記録するには「コンソール・ロギングの有効化」を選択し、ロギングを停止するには「コンソール・ロギングの有効化」の選択を解除します。
- 3 **オプション:** ログ・ファイル・サイズ、ログ・フォルダ・サイズまたはログ・フォーマット・オプションを変更します。ファイル・サイズはバイト単位です。
- 4 「起動」をクリックします。

関連情報

- [34 ページの「Administration Services の開始」](#)
- [68 ページの「管理サービス・コンソールの開始」](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)
- [36 ページの「Administration Services の設定」](#)
- [70 ページの「Administration Services のシャット・ダウン」](#)

電子メール・サーバーの指定

管理者が管理サービス・コンソールから他の管理者またはオラクル・テクニカル・サポートに電子メール情報を直接送信するには、Essbase 管理サーバーのコンピュータで送信メール(SMTP)サーバーを指定しておく必要があります。

SMTP(Simple Mail Transfer Protocol)は、電子メール・メッセージをサーバー間で送信するためのプロトコルです。管理者が管理サービス・コンソールから電子メールを送信すると、指定した SMTP サーバーによって受信者の電子メール・クライアントにメッセージが送信されます。

管理サービス・コンソールから電子メールで情報を送る方法については、[92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)を参照してください。

▶ 送信メール・サーバーを指定するには:

- 1 [Administration Services](#) を開始します。
- 2 管理サービス・コンソール・ウィンドウで、適切な Essbase 管理サーバーを選択します。
- 3 右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティの編集」を選択します。
- 4 「管理サーバーのプロパティ」・ウィンドウで、「構成」タブを選択します。
- 5 「電子メール・サーバー」領域で、SMTP サーバーの名前を入力します。
- 6 「適用」をクリックして、「管理サーバーのプロパティ」・ウィンドウを閉じます。

関連情報

- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)
- [483 ページの「管理サーバーのプロパティ・ウィンドウ」](#)

Administration Services のシャット・ダウン

管理サービス・コンソールを閉じると、Essbase 管理サーバーおよび接続しているすべての Essbase サーバーから自動的に切断されます。Essbase の接続とポートを確立および解放する方法については、[86 ページの「Essbase の接続とポートについて」](#)を参照してください。

▶ Administration Services をシャット・ダウンするには:

- 1 管理サービス・コンソールをシャットダウンするには「ファイル」>「終了」を選択します。

設定、スクリプト、修正などを保存していない場合は、それらを保存するためのプロンプトが表示されます。セッションはタイム・アウトしているものの、アクションの必要なファイル(レポート・スクリプトなど)がまだ開いている場合は、管理サービス・コンソールを閉じる前にログオンするためのプロンプトが表示されます。

- 2 Essbase 管理サーバーをシャット・ダウンするには、次の実行ファイルを起動します:

- Windows: EPM_ORACLE_INSTANCE\bin\stopEssbaseAdminServices.bat
- UNIX: EPM_ORACLE_INSTANCE\bin\stopEssbaseAdminServices.sh

注: Windows で、インストール時に「スタート」メニューにショートカットを追加した場合は、「スタート」>「すべてのプログラム」>「Oracle EPM System」>「Essbase」>「Administration Services」>「Stop Administration Server」を選択して、Essbase 管理サーバーを停止することも可能です。

関連情報

- [88 ページの「Essbase サーバーからの切断」](#)
- [34 ページの「Administration Services の開始」](#)

5

集約ストレージの管理

この章の内容

集約ストレージについて.....	71
集約ストレージ・アプリケーションを使用する作業のワークフロー.....	72
ブロック・ストレージについて.....	73
集約ストレージ・アウトラインについて.....	73
集約ストレージのセキュリティについて.....	74
集約ストレージへのブロック・ストレージ・アウトラインの変換.....	74
集約ストレージ・データベースの式の作成.....	75
集約ストレージ・データベースでのメンバーと次元の計算順序の指定.....	76
集約ストレージ・アウトラインにおける階層の定義.....	76
集約ビュー選択のクエリー・データ追跡.....	78
取得時間を改善するための集約の計算.....	78
集約ストレージ・データベースからのデータの消去.....	79
集約ストレージの会計次元の選択.....	80
テーブルスペースの管理.....	81
集約ストレージ・キャッシュのサイズ設定.....	82
集約ストレージ・アウトライン・ファイルのコンパクト化.....	83
集約ストレージ統計の表示.....	83

集約ストレージについて

集約ストレージとは、多数の潜在的に大きな次元に分類されている大規模な疎に分散したデータをサポートする、Essbase データベース・ストレージ・モデルです。選択されたデータ値は集約および保管され、一般的に集約時間が改善されます。ストレージのタイプには、この集約ストレージの他に**ブロック・ストレージ** (密/疎構成)があります。

Essbase とともにインストールされる**サンプル・アプリケーション**(ASOsamp)は、集約ストレージ機能のデモを実行します。サンプル・アプリケーション用のデータ・ソース・ファイル(dataload.txt)とルール・ファイル(dataload.rul)は、データベース・ディレクトリ(ARBORPATH\app\ASOsamp\sample)にインストールされます。

関連情報

- 集約ストレージとブロック・ストレージの比較(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

- 73 ページの「ブロック・ストレージについて」
- 72 ページの「集約ストレージ・アプリケーションを使用する作業のワークフロー」

集約ストレージ・アプリケーションを使用する作業のワークフロー

手順	タスク	詳細情報
1.	手動により、または485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」でブロック・ストレージ・アウトラインを変換することにより、集約ストレージ・アプリケーションを作成します。	<ul style="list-style-type: none"> ● 95 ページの「アプリケーションの作成」 ● 103 ページの「データベースの作成」 ● 485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」
2.	485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」でブロック・ストレージ・アウトラインを変換することにより、データベース作成時に作成されるアウトラインを取り込むことにより、またはデータ・ソースおよびルール・ファイルを使用して次元およびメンバーを構築(次元構築)することにより、集約ストレージ・アプリケーションを作成します。	<ul style="list-style-type: none"> ● 73 ページの「集約ストレージ・アウトラインについて」 ● 485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」
3.	オプション: 日時次元の作成ウィザードを使用して、日時次元および関連付けられた属性次元を作成します。	<ul style="list-style-type: none"> ● 696 ページの「日時次元の作成ウィザード」 ● 集約ストレージの時間ベースの分析(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』)
4.	テーブルスペースを使用して、データ・ストレージを最適化し、またデータ・ファイルおよび作業ファイルの取得を最適化します。	81 ページの「テーブルスペースの管理」
5.	集約ストレージ・キャッシュの最大サイズを指定します。	82 ページの「集約ストレージ・キャッシュのサイズ設定」
6.	データをデータベースにロードします(次元構築との組合せが可能)。 この時点で、すべてのレベル0の組合せで集約が存在し、データベースに対して取得を実行できます。	211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」
7.	データベースで選択した集約を計算します。	78 ページの「取得時間を改善するための集約の計算」
8.	データベース統計を表示します。	83 ページの「集約ストレージ統計の表示」
9.	オプション: 487 ページの「集約ストレージ・パーティション・ウィザード」を使用して、ライトバック機能を有効にします。	487 ページの「集約ストレージ・パーティション・ウィザード」
10.	スプレッドシート・アドイン、データ・プレビュー・グリッド、その他の Oracle のツール、あるいは第三者によるツールを使用して、データを表示します。	該当する製品ドキュメント。 354 ページの「データのプレビュー」

ブロック・ストレージについて

ブロック・ストレージとは、次元を疎または密で分類しデータをブロックに保管する、Essbase データベース・ストレージ・モデルです。ブロック・ストレージは、対話型のプランニング、割当て、および高度な分析を行うアプリケーション向けに設計されています:

- ライトバックが頻繁にあり、状況を仮定した分析が必要となる売上げ予測
- 製品および顧客にわたってコストを割り当てる必要がある収益分析
- 通貨換算および会社間消去が必要となる財務集計

Essbase では、集約ストレージ・モデルも用意されています。このモデルにより、一部のアプリケーションではデータベースの集約時間と次元の拡張性を大きく向上できます。集約ストレージの説明とワークフローについては、[72 ページの「集約ストレージ・アプリケーションを使用する作業のワークフロー」](#)を参照してください。

関連情報

- アーキテクチャの基本要素(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 集約ストレージとブロック・ストレージの比較(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

集約ストレージ・アウトラインについて

集約ストレージ・アウトラインは、様々な方法で作成できます:

- [485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」](#)を使用して、既存のブロック・ストレージ・アウトラインを集約ストレージに変換します。このウィザードでは、集約ストレージの検証を通過するために必要な変更のリストが表示されます。手動でアウトラインを修正することも、ウィザードで自動的にアウトラインを修正することも可能です。ウィザードでは式は変換されません。

注意 ファイル・システムを使用してアウトライン・ファイルを手動でコピーしないでください。特に、ブロック・ストレージと集約ストレージのデータベース間で、このような操作を行わないでください。[141 ページの「アウトラインのコピー」](#)を参照してください。

- 集約ストレージ・アプリケーションとデータベースを作成します。集約ストレージ・アウトラインは、データベースを作成すると自動的に作成されます。必要にあわせてアウトラインを完成させます。
- データ・ソース・ファイルとルール・ファイルを使用して、次元およびメンバーを集約ストレージ・アウトラインにロードします(次元構築)。

関連情報

- 集約ストレージ・アプリケーション、データベースおよびアウトライン(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

- 集約ストレージとブロック・ストレージの比較(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

集約ストレージのセキュリティについて

集約を定義および実行するには、計算権限またはそれ以上の権限が必要です。次元構築を行うとデータベースが消去されるため、この操作は書き込み権限を持つユーザーのみが実行できます。その他のすべての領域では、集約ストレージ・アプリケーションのセキュリティとブロック・ストレージ・アプリケーションのセキュリティは同一です。

関連情報

[269 ページの「セキュリティと権限について」](#)

集約ストレージへのブロック・ストレージ・アウトラインの変換

[485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」](#)を使用して、既存のブロック・ストレージ・アウトラインを集約ストレージに変換します。このウィザードでは、集約ストレージの検証を通過するために必要な変更のリストが表示されます。手動でアウトラインを修正することも、ウィザードで自動的にアウトラインを修正することも可能です。ウィザードでは式は MDX に変換されません。

Essbase は、ブロック・ストレージ・アウトラインから集約ストレージ・アウトラインへの変換として次のシナリオをサポートしています:

- 非 Unicode のブロック・ストレージ・アウトラインから非 Unicode の集約ストレージ・アウトラインへ
- 非 Unicode のブロック・ストレージ・アウトラインから Unicode の集約ストレージ・アウトラインへ
- Unicode のブロック・ストレージ・アウトラインから Unicode の集約ストレージ・アウトラインへ

次の変換シナリオはサポートされていません:

- Unicode のブロック・ストレージ・アウトラインから非 Unicode の集約ストレージ・アウトラインへ
- 集約ストレージ・アウトラインからブロック・ストレージ・アウトラインへ

▶ ブロック・ストレージ・アウトラインを集約ストレージに変換するには:

- 1 「ファイル」>「ウィザード」>「集約ストレージ・アウトライン変換」を選択します。
- 2 [集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード](#)で、指示に従います。
- 3 支援が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。

関連情報

- [71 ページの「集約ストレージについて」](#)
- [73 ページの「集約ストレージ・アウトラインについて」](#)
- [485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」](#)

集約ストレージ・データベースの式の作成

集約ストレージ・データベースでは、式は MDX 言語で数値表現として記述される必要があります。式の使用は、動的階層および会計次元のメンバーにのみ許可されています。次元内では、式の[解決順を指定](#)できます。

式は取得時にのみ計算されます; 計算された式の値は保管されません。

▶ 式を作成または編集するには:

- 1 **編集モードでアウトラインを開きます。**
「アウトライン」タブが表示されます。
- 2 式を添付するメンバーを右クリックして、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「式」タブを選択します。
- 4 MDX 構文に従って、表示されているテキスト・ボックスに式を入力します。
- 5 **オプション:** 定義済テンプレートを使用して式を生成します:
 - 1 「MDX テンプレート」をクリックします。
 - 2 「ASO MDX 式テンプレート」で、「MDX テンプレートの選択」から式テンプレートを選択します。
 - 3 表示されているフィールドに、パラメータ情報を入力します。
 - 4 「式の挿入」をクリックします。
 - 5 **オプション:** テキスト・ボックスで、生成された式をさらに編集します。
- 6 「OK」をクリックして、式を保存します。

関連情報

- [71 ページの「集約ストレージについて」](#)
- [514 ページの「ASO MDX 式テンプレート」ダイアログ・ボックス](#)
- 集約ストレージ・アウトラインでの式の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [集約ストレージ・データベースでのメンバーと次元の計算順序の指定](#)
- 集約ストレージ・データベースの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- Oracle Essbase API リファレンス

集約ストレージ・データベースでのメンバーと次元の計算順序の指定

多次元クエリーが実行される時、セルが個別に評価されます。セルが計算される順序は明確ではない場合があります。集約ストレージ・データベースでは、計算順序を明確にするために、解決順序プロパティを使用して、メンバーと次元の計算に優先度を指定できます。

解決順序プロパティの値により式が計算される優先度が決まります。優先度が最も高いメンバーの式が最初に計算されます。

解決順序(1 から 127)は、メンバー・レベルまたは次元レベルで指定できます。解決順序が 0(デフォルト値)のメンバーは、次元の解決順序を継承します。同一の解決順序を持つメンバーは、データベース・アウトラインで次元が表示される順序で評価されます。解決順序が設定されていないメンバーは、解決順序が設定されているメンバーの後に評価されます。

解決順序の詳細と例は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： 次元構築の際に、次元プロパティとして計算順序を指定することも可能です。

▶ 集約ストレージ・データベースで式の計算順序を指定するには:

- 1 編集モードでアウトラインを開きます。
「アウトライン」タブが表示されます。
- 2 次元またはメンバーを右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「メンバーの解決順」で、選択されたメンバーまたは次元に添付された式の計算順の中での配置を表す番号を入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- 計算順序(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 75 ページの「集約ストレージ・データベースの式の作成」
- 638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ」

集約ストレージ・アウトラインにおける階層の定義

集約ストレージ・データベースでは、次元内に 2 つのタイプの階層を作成できます:

- 保管
- 動的

各タイプの階層には固有の利点と制限があります。1つの次元には両方の階層タイプを含めることが可能です。1つの次元で両方の階層タイプを使用するには、その次元で複数階層を有効にする必要があります。次元の世代1メンバーでは複数階層が使用可能にされ、ラベルのみのタグが付けられます。

会計のタグが付けられた次元は、自動的に動的階層とみなされます。会計次元を保管階層として指定することはできません。

動的階層と保管階層による制限の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： 次元構築時には、次元プロパティを使用して階層を動的または保管に指定できます。

▶ 次元で複数の階層を有効にするには:

1 編集モードでアウトラインを開きます。

「アウトライン」タブが表示されます。

2 次元を右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。

3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。

4 「階層」で「階層: 使用可能」を選択します。

5 「OK」をクリックします。

▶ 次元または世代2のメンバーを動的または保管階層としてタグ付けするには:

1 編集モードでアウトラインを開きます。

「アウトライン」タブが表示されます。

2 次元またはメンバーを右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。

3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。

4 「階層」で「動的」または「保管済」を選択します。

5 次元で複数の階層が使用可能になっている場合は、その次元のすべての世代2のメンバーについて手順1から手順4を繰り返して、各メンバーの階層タイプを選択します。

6 「OK」をクリックします。

関連情報

- 階層(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ」

集約ビュー選択のクエリー・データ追跡

データベースに生成するための最も適切な集約ビューのセットを選択するには、クエリー・データを使用できます。データベースに対して実行される各クエリーのコストに関するデータを取り込むために、クエリー追跡を使用可能にできます。有効にすると、クエリー追跡は次のいずれかの状況が発生するまで続行されます:

- このトピックで説明する方法を使用して、データベースのクエリー追跡を無効にします。
- アプリケーションがシャット・ダウンされます。アプリケーションがシャット・ダウンされる場合、そのアプリケーションを再び開始したときにクエリー追跡は自動的に再開されません。
- データベースに追加の集約ビューが生成されます。追加の集約ビューが生成されるとクエリー追跡のデータが無効になるため、新しい集約ビューの生成によってクエリー追跡がリセットされます。

クエリー・トラッキング(メモリー内のみ保管されます)には、Oracle Hyperion Web Analysis、グリッド API、レポート・スクリプト、Java API などからのクエリーが含まれます。

クエリー・コストの定義方法とクエリー・データの保管方法の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』で使用に基づいたビューの選択を参照してください。

▶ 集約ストレージ・データベースのクエリー追跡を有効または無効にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして、「クエリーの追跡」>「使用可能にする」または「クエリーの追跡」>「使用不可にする」を選択します。

クエリー追跡を使用可能にすると、Essbase ではクエリー情報の記録が開始されます。クエリー追跡を使用不可にすると、Essbase でのクエリー情報の記録が停止され、記録されたクエリー・データがメモリーから消去されます。

関連情報

- [490 ページの「集約設計ウィザード」](#)
- 使用に基づいたビューの選択(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

取得時間を改善するための集約の計算

取得要求に応じて、レベル 0 のセルにロードされた値が集約され、勘定科目メンバーの式が計算されます。

Essbase では、取得のパフォーマンスを改善するために集約ビューを生成して保管できます。保管された結果を集約と呼びます。データベースに対する計算権限を持っている場合は、集約設計ウィザードを使用して集約を設計できます。

集約ストレージ・データベースの計算の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

▶ 集約を設計するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、集約ストレージ・データベースを選択します。
- 2 右クリックして「集約の設計」を選択します。
- 3 **集約設計ウィザード**でタスクを選択し、ウィザードの指示に従って操作します。
- 4 支援が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。

関連情報

- [490 ページの「集約設計ウィザード」](#)
- 集約ストレージ・データベースの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [75 ページの「集約ストレージ・データベースの式の作成」](#)
- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)
- [71 ページの「集約ストレージについて」](#)

関連コマンド

- `execute aggregate process(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `query database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

集約ストレージ・データベースからのデータの消去

次のいずれかの方法により、集約ストレージ・データベースからデータを消去できます:

- すべてのデータを消去(データベース・マネージャまたは管理者権限が必要です)
 - 消去されたデータ値は#MISSING に設定されます。
 - データが消去された後でも、データ・ファイルは削除されません;ただし、Essbase ではファイルを縮小してオペレーティング・システムに可能なかぎり多くの領域を戻そうと試行されます。集約ストレージ・アプリケーションのストレージ管理の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- すべての集約を消去(計算の権限が必要です)

レベル 0 の値を除くすべてのデータが消去されます。これにより、すべての集約セルがデータベースから削除され、ディスク領域が解放されて再使用できるようになります。

- 部分データの消去(データベース・マネージャまたは管理者権限が必要です)

MDX 集合式を使用して消去する領域を指定します。次のガイドラインに従います:

- 領域は対称である必要があります。
- 領域の指定に含まれるすべての次元の各メンバーは、保管済メンバーである必要があります。
- 動的メンバー(暗黙的または明示的な MDX 式を持つメンバー)、および属性次元からのメンバーは、領域内のメンバーになることができません。
- 保管階層の上位レベル・メンバーは、領域内のメンバーになることが可能です。

MDX の構文については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の MDX の項を参照してください。

関連情報

- [119 ページの「データの消去」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- resetdb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- cleardata(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

▶ 集約ストレージ・データベースからデータを消去するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして適切なコマンドを選択します:
 - 「消去」 > 「すべてのデータ」
 - 「消去」 > 「すべての集約」
 - 「消去」 > 「部分データ」

消去するデータ領域を指定する MDX 集合式を入力します。

- 3 確認のメッセージで「はい」をクリックします。

集約ストレージの会計次元の選択

集約ストレージ・データベースでは、次元を会計としてマークすると圧縮できません。圧縮の概算は、ディスク上のデータベースのサイズに関係します。圧縮の概算は、アウトラインで会計のタグが付けられた次元によって異なります。

圧縮の概算の統計を表示すると、会計のタグを付ける次元を決定するときに役立ちます。また、実際の圧縮の統計は、[データベース・プロパティ・ウィンドウの「圧縮」タブ](#)で確認できます。

注： データが含まれるデータベースについてのみ、圧縮の統計を表示できます。

▶ 会計次元を選択するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして、「会計次元の選択」を選択します。
[会計次元の選択ダイアログ・ボックス](#)が表示されます。
- 3 次元を選択して「OK」をクリックします。
- 4 確認のメッセージで「はい」をクリックします。
アウトラインが更新され、再構築が実行されます。

関連情報

- [683 ページの「会計次元の選択ダイアログ・ボックス」](#)
- [567 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「圧縮」タブ](#)
- データベース圧縮のための会計次元の選択(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

テーブルスペースの管理

Essbase では、テーブルスペースを使用して、[集約ストレージ](#)のデータ・ファイルと作業ファイルのデータ・ストレージと取得を最適化します。テーブルスペースは、集約ビューや集約などのデータ・オブジェクトをファイルにマッピングする場所の定義です。

Essbase では、変更できない2つのテーブルスペース(log と metadata)、および変更できる2つのテーブルスペース(default と temp)が設定されます。default および temp テーブルスペースは、サイズや場所を変更することはできますが、削除できず、名前も変更できません。これら4つのテーブルスペース内で、データはファイルの場所に保管されます。内部のファイルの場所は変更できます。また、データを含まないファイルの場所は削除できます。

▶ 集約ストレージ・アプリケーションのテーブルスペースを管理するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「[テーブルスペース](#)」タブを選択します。
- 4 次の1つまたは複数のアクションを行います:

- テーブルスペースにファイルの場所を追加するには、「場所の追加」をクリックしてパスとパラメータを入力します。
- ファイルの場所を編集するには、目的のセルをクリックしてパラメータを変更します。

注： ファイルの場所のパスは編集できません。

- テーブルスペースからファイルの場所を削除するには、目的の行を選択して「場所の削除」をクリックします。

5 「適用」をクリックします。

関連情報

- [507 ページの「アプリケーション・プロパティ」 - 「テーブルスペース」タブ](#)
- 集約ストレージ・アプリケーションのストレージ管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter tablespace(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display tablespace(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

集約ストレージ・キャッシュのサイズ設定

Essbase では、データ・ロード、集約および取得時に使用するメモリーを、集約ストレージ・キャッシュとして管理しています。集約ストレージ・アプリケーションが開始すると、Essbase ではメモリー内の小さな領域がアプリケーションの集約ストレージ・キャッシュとして割り当てられます。Essbase では、必要に応じてキャッシュ・サイズが増加していきます。アプリケーションの最大キャッシュ・サイズに達するか、オペレーティング・システムが追加の割当てを拒否した時点で上限となります。

現在の集約キャッシュ・サイズを表示したり、集約キャッシュ・サイズの最大値を変更したりできます。集約ストレージ・キャッシュの管理の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

▶ 集約ストレージ・キャッシュのサイズを表示および変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「**保留中のキャッシュ・サイズの制限値**」ノードの横に、キャッシュ・サイズ of 値を MB 単位で入力します。
- 5 「適用」をクリックします。

キャッシュ設定は、アプリケーションを再び開始したときに有効になります。

関連情報

- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ](#)
- 集約ストレージ・キャッシュの管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

集約ストレージ・アウトライン・ファイルのコンパクト化

変更された集約ストレージ・アウトライン・ファイル(.ot1 ファイル)は、サイズが増加することがあります。このようなファイルをコンパクト化することにより、削除されたメンバーのレコードを削除してファイルのサイズを小さくすることが可能です。

注： この機能は、ブロック・ストレージ・データベースには適用されません。

▶ アウトライン・ファイルをコンパクト化するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを検索します。
- 2 「アウトライン」ノードを右クリックして、「コンパクト化」を選択します。
- 3 **オプション:** コンパクト化中に作業を続行する場合は、「[アウトラインのコンパクト化](#)」ダイアログ・ボックスで、「バックグラウンドでアウトラインをコンパクト化」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [518 ページの「「アウトラインのコンパクト化」ダイアログ・ボックス](#)
- [73 ページの「集約ストレージ・アウトラインについて」](#)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

集約ストレージ統計の表示

集約ストレージ・データベースに固有の統計を表示できます:

- キャッシュの使用
- ディスク容量

- 次元
- 集約
- 増分データ・スライスのサイズおよび数
- 増分データ・スライスのクエリーのコスト

▶ 集約ストレージ・データベースの実行時統計を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「統計」タブを選択します。
- 4 「集約ストレージ統計」ノードと「ランタイム」ノードを展開します。

関連情報

[572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」タブ」](#)

関連コマンド

- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

6

Essbaseサーバー、アプリケーション、およびデータベースの管理

この章の内容

Essbase サーバーの管理	85
アプリケーションの管理	95
データベースの管理	102
Unicode モードのアプリケーション	124

Essbase サーバーの管理

ここには次のトピックがあります:

- 85 ページの「Essbase サーバーについて」
- 86 ページの「Essbase の接続とポートについて」
- 87 ページの「Essbase サーバーへの接続」
- 88 ページの「デフォルト以外のエージェント・ポートへの接続」
- 88 ページの「Essbase サーバーからの切断」
- 89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」
- 90 ページの「Performance Management Architect への Essbase サーバーの登録」
- 91 ページの「Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase サーバー権限の管理」
- 92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」
- 93 ページの「代替変数の管理」
- 94 ページの「代替変数のコピー」
- 94 ページの「ESSCMD の使用」

Essbase サーバーについて

Essbase は、時間、勘定科目、地域、チャネル、製品などの次元をいくつでも自由に使用してデータを保管できる、多次元データベースです。Essbase は、解析データ・モデル、データ・ストレージ、計算、データ・セキュリティを管理します。Essbase の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

Essbase は、Essbase 管理サーバーとは異なります。Essbase 管理サーバーにより、個々の Essbase サーバーと管理サービス・コンソールの通信が可能になります。

エンタープライズ・ビューでは、Essbase サーバーは「Essbase サーバー」コンテナ・ノードに表示されます。Essbase サーバーのノード名は、サーバー・コンピュータ名と同じです。Essbase サーバーをエンタープライズ・ビューに追加する方法については、[48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)を参照してください。

関連情報

- [33 ページの「Administration Services のアーキテクチャ」](#)
- [87 ページの「Essbase サーバーへの接続」](#)
- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)

Essbase の接続とポートについて

Essbase のインスタンスに使用可能なポート数は、ライセンスされている同時接続数を表します。Essbase には、システム管理者用のポートが 1 つ確保されています。システム管理者はこのポートを使用して、他のすべてのポートが使用中のときにユーザーをログオフさせます。Essbase ポートの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

デフォルト以外の Essbase エージェント・ポートの変更および接続については、[88 ページの「デフォルト以外のエージェント・ポートへの接続」](#)を参照してください。

Administration Services では、Essbase サーバーへの接続が確立されている場合のみポートが使用されます。接続が確立されるのは、次の操作を行った場合です：

- エンタープライズ・ビューで Essbase サーバーのノードを展開する。
- エンタープライズ・ビューで Essbase サーバーのノードを選択し、右クリックして「接続」を選択する。
- [707 ページの「ユーザー設定ウィザード」](#)または[ユーザー・プロパティ・ウィンドウ](#)を使用して Essbase サーバーをエンタープライズ・ビューに追加する。
- Essbase サーバーへの接続が暗黙的に必要になる操作(たとえば、Essbase サーバーに保存されているスクリプトを開く場合)を行う。
- [MaxL スクリプト・エディタ](#)を介して Essbase に MaxL ステートメントを送信する。

Essbase への接続は、中間層の Essbase 管理サーバーによって処理されます。

管理サービス・コンソールにログインしたり、Essbase 管理サーバーや管理サービス・コンソールに固有のタスクを実行したりするだけでは、Essbase サーバーには接続されません。また、ローカルに保存されているオブジェクトを編集しても、接続は確立されません。たとえば、Essbase に接続したりポートを使用したりせずに、コンソールを開き、ローカルの計算スクリプトを編集することが可能です。

Essbase の接続が確立され、ポートが使用中になると、エンタープライズ・ビューで手動により Essbase から切断するか、コンソールを終了するか、または Essbase に設定されたタイムアウトの制限を超えるまで、ポートは使用中のままになります。切断または終了したときにプロセスが実行されていた場合、ポートは解放されますが、そのプロセスは完了するまで続行します。

関連情報

- [87 ページの「Essbase サーバーへの接続」](#)
- [88 ページの「Essbase サーバーからの切断」](#)
- [328 ページの「使用可能なポートの確認」](#)
- Essbase サーバー、アプリケーションおよびデータベースの実行(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

Essbase サーバーへの接続

Essbase サーバーから手動で切断した場合は、再接続できます。Essbase に接続するには、あらかじめそれを開始しておく必要があります。

Administration Services では、個々の Essbase サーバーへの接続は中間層の Essbase 管理サーバーによって処理されます。個々の Essbase サーバーとの接続を確立する前に、ユーザー名やパスワードを入力する必要はありません。Essbase サーバーへの接続およびポートの確立については、[86 ページの「Essbase の接続とポートについて」](#)を参照してください。

Essbase サーバーをエンタープライズ・ビューに追加する方法については、[48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)を参照してください。

管理サービス・コンソールでは、異なるリリースの Essbase に同時に接続できません。リリースの互換性情報は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス(<http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html>)を参照してください。

▶ Essbase サーバーに手動で接続するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase Server を検索します。
- 2 次のいずれかのアクションを行います:
 - 「Essbase サーバー」ノードを右クリックして、「接続」を選択します。
 - Essbase サーバー・ノードを展開します。

Administration Services によりエンタープライズ・ビューが再び読み込まれます。

関連情報

[88 ページの「Essbase サーバーからの切断」](#)

デフォルト以外のエージェント・ポートへの接続

Essbase エージェントで使用するデフォルトのポートを変更できます。たとえば、デフォルト値のポートがすでに使用されている場合や、テストを行うために1つのコンピュータに2つ目のエージェントをインストールしたりする場合に、デフォルトの変更を行います。デフォルト以外のポート値の指定の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

デフォルトのエージェント・ポートを変更する場合は、Essbase の接続情報を707 ページの「ユーザー設定ウィザード」または管理サーバーのユーザー・プロパティ・ウィンドウ(「Essbase サーバー」タブ)で定義する際にこのポートを指定できます。いずれかの場所でも、次のようにポート番号をサーバー・マシン名に追加できます:

サーバー・マシン名:ポート番号

例:

jdoe2:4378

注: パーティションとデフォルト以外のエージェント・ポートの要件については、437 ページの「パーティションの修復」を参照してください。

関連情報

- 86 ページの「Essbase の接続とポートについて」
- 87 ページの「Essbase サーバーへの接続」
- 88 ページの「Essbase サーバーからの切断」
- 328 ページの「使用可能なポートの確認」
- Essbase サーバー、アプリケーションおよびデータベースの実行(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- agentport(essbase.cfg 設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- serverportbegin(essbase.cfg 設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- serverportend(essbase.cfg 設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- portinc(essbase.cfg 設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバーからの切断

エンタープライズ・ビューで個々の Essbase サーバーを切断できます。接続のステータスは、管理サーバー・プロパティ・ウィンドウで表示できます。

管理サービス・コンソールを開くと、エンタープライズ・ビュー・ツリーに表示されている各 Essbase サーバーに自動的に接続されます。接続は、中間層の Essbase

管理サーバーによって処理されます。エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加およびエンタープライズ・ビューからの削除については、[48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#) または [49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」](#) を参照してください。

Essbase のポートが確立および解放される方法については、[86 ページの「Essbase の接続とポートについて」](#) を参照してください。

▶ Essbase サーバーを切断するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして、ポップアップ・メニューから「切断」を選択します。

未保存の変更がある場合は、保存するように求められます。その後、エンタープライズ・ビューおよびカスタム・ビューで、選択した Essbase サーバー・ノードの下にあるすべてのノードが縮小されます。

すべての Essbase サーバーから同時に切断するには、管理サービス・コンソールをシャット・ダウンします。

関連情報

- [87 ページの「Essbase サーバーへの接続」](#)
- [35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」](#)

Essbase サーバー・プロパティの設定

Essbase サーバーのプロパティは、1つのウィンドウで表示および編集できます。また、複数のサーバーのプロパティ・ウィンドウを同時に開くことが可能です。このトピックには、設定可能な Essbase サーバー・プロパティのリストがありません。

essbase.cfg 構成ファイルを使用して、サーバーレベルのプロパティを設定することも可能です。このファイルの作成方法、および使用可能な設定については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

▶ Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウを開く手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。

設定できる Essbase サーバー・プロパティは、次のとおりです:

- [306 ページの「パスワードの有効期限の管理」](#)
- [273 ページの「ユーザーの自動切断」](#)
- [303 ページの「ユーザー名の無効化」](#)
- [Unicode モードのアプリケーションを作成するための権限](#)

関連情報

- 498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」
- 325 ページの「Essbase サーバーの監視について」

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Performance Management Architect への Essbase サーバーの登録

Oracle Hyperion EPM Architect から Essbase サーバーにキューブを配置するには、適切な Essbase サーバー・インスタンスを Performance Management Architect に登録する必要があります。

注： Essbase サーバー・インスタンスを Performance Management Architect に登録するには、その Essbase サーバー・インスタンスが Oracle Hyperion Shared Services に外部化されている必要があります。

▶ Essbase サーバーを Performance Management Architect に登録するには:

- 1 Essbase サーバーと Essbase 管理サービス・コンソールに同じユーザー名とパスワードでログインしていること、および、そのユーザーが外部化されていることを確認します。
- 2 エンタープライズ・ビューで「Essbase サーバー」ノードを右クリックし、「BPM Architect による Essbase サーバーの登録」を選択します。
- 3 「BPM Architect による Essbase サーバーの登録」ダイアログ・ボックスで、右上のペインにある「使用可能」リストからサーバーを選択して左矢印ボタンをクリックするか、そのサーバー名をダブルクリックしてサーバーを「選択」ペインに移動します。

「使用可能」リストに表示される Essbase サーバー・インスタンスは、Shared Services に外部化されているサーバーです。

選択したサーバーが、ダイアログ・ボックスの右下にある「サーバー名」の下に表示されます(例: aspen5)。

- 4 選択したサーバーの「インスタンス名」の下に、この登録に対するわかりやすい名前を入力します。

たとえば、aspen5 に対して、Esb for BPMA というインスタンス名を付けます。

- 5 「OK」をクリックします。

次回「BPM Architect による Essbase サーバーの登録」ダイアログ・ボックスを開くと、登録したインスタンスおよびサーバー名が「選択済」ペインに表示されます。例:

- 6 オプション: Performance Management Architect に登録する必要のある各 Essbase サーバー・インスタンスについて、[90 ページの手順 1](#) から [90 ページの手順 5](#) を完了します。

Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase サーバー権限の管理

アプリケーションを誤って Unicode モードに設定してしまうことを防ぐため、それぞれの Essbase サーバーには、Unicode モードのアプリケーションを作成、または Unicode モードにアプリケーションを移行するための権限を設定するプロパティが用意されています。

この権限が適用されるのは、Unicode モードのアプリケーションの作成と、Unicode モードへのアプリケーションの移行のみです。Unicode モードのアプリケーションの使用は、Essbase サーバーのこのプロパティ値に関係なく行えます。このプロパティは、必要でないかぎり選択しないでおくことをお勧めします。

Unicode モードのアプリケーションの作成およびアプリケーションの Unicode モードへの移行を実行する権限が Essbase にある場合、Essbase は Unicode モードになっています。

Essbase が Unicode モードになっているかどうかは、「Unicode モードのアプリケーションの作成権限」というサーバー・プロパティを表示して確認できます。

注： Unicode モードのアプリケーションは、Unicode モードでないアプリケーションには変更できません。

- ▶ Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase の権限を表示したり、有効または無効にするには:
 - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「Unicode モードのアプリケーションの作成権限」チェック・ボックスを表示して、Essbase が Unicode モードか非 Unicode モードかを確認します。次のいずれかのアクションを行います:
 - チェック・ボックスを選択して、Essbase サーバーを Unicode モードに設定します。
 - チェック・ボックスの選択を解除して、Essbase サーバーを非 Unicode モードに設定します。
 - 4 「適用」をクリックします。

関連情報

- [127 ページの「Unicode モードのアプリケーションの作成」](#)

- [アプリケーションの Unicode モードへの移行](#)
- [Essbase サーバー・プロパティ - 「セキュリティ」 タブ](#)
- [89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」](#)
- Unicode モードのサーバーおよび非 Unicode モードのサーバー(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

電子メールによる Essbase 情報の送信

管理サービス・コンソールから他の管理者や Oracle テクニカル・サポートに電子メールで直接情報を送信できます。

コンソールから電子メールを送信した場合、ブラウザで開くことが可能な XML または HTML 形式の添付ファイルが電子メール・メッセージに含まれます。XML ファイルは、Internet Explorer 5.x 以降でのみ表示可能です。電子メールに Essbase サーバー、アプリケーションまたはデータベースのプロパティが含まれる場合は、Internet Explorer 6.0 以降が必要です。メッセージの本文にはユーザーのコメントを記述して送信できます。

電子メールの送信は、Essbase のバックグラウンド・プロセスとして実行されます。「メッセージ」ペインには、プロセスの ID が表示されます。この ID をバックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウで使用して、電子メール・プロセスのステータスを追跡できます。電子メール・メッセージは、UTF-8 でエンコードされます。

▶ Essbase の情報をコンソールから電子メールで送信するには:

- 1 ウィンドウまたはダイアログ・ボックスを開きます。
- 2 「ファイル」>「送信」を選択します。
- 3 「[電子メールの送信](#)」ダイアログ・ボックスで、電子メールの受信者、件名、およびコメント(オプション)を指定します。
- 4 「送信」をクリックします。
SMTP サーバーが見つからないというエラーが表示された場合は、[有効な SMTP サーバーを指定](#)して、電子メールを再度送信します。
- 5 「ツール」>「バックグラウンド・プロセスの表示」を選択して、[バックグラウンド・プロセスのステータス](#)・ウィンドウを開きます。このウィンドウで、電子メールが正しく送信されたことを確認できます。
- 6 電子メールの送信結果を確認するには、目的の行を選択して「表示」をクリックします。

関連情報

- [69 ページの「電子メール・サーバーの指定」](#)

- [685 ページの「電子メールの送信」ダイアログ・ボックス](#)

代替変数の管理

代替変数は、定期的に変化する情報を表すためのグローバル・プレースホルダとして機能します。ユーザーは変数とそれに対応する文字列値を作成します。値は後でいつでも変更できます。代替変数を Essbase サーバー全体に適用するか、アプリケーションに適用するか、あるいはデータベースに適用するかを指定できます。

「変数」ノードの右クリック・メニューまたは「代替変数」ダイアログ・ボックスで、代替変数を直接作成できます。

注： 一重引用符を使用して代替変数を作成する場合は、一重引用符の前にスラッシュを付けます。スラッシュを付けない場合、一重引用符は破棄されます。

▶ 代替変数を管理する手順は次のとおりです：

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックし、「編集」>「変数」を選択します。
- 3 「代替変数」で、変数を適用するアプリケーションとデータベースを選択します。
- 4 変数の名前と値を指定または編集します。
- 5 「設定」をクリックして、設定を適用します。
- 6 アプリケーションを停止して再起動し、アウトライン式、パーティション定義、およびセキュリティ・フィルタで新しい値を使用できるようにします。
- 7 変数を削除する必要がある場合は、削除する変数が含まれている行を選択して、「削除」をクリックします。

関連情報

- [693 ページの「代替変数ウィンドウ」](#)
- 代替変数の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createvariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listvariables(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- updatevariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- deletevariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

代替変数のコピー

代替変数は、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバー、アプリケーション、またはデータベースにコピーできます。

また、アプリケーションやデータベースを移行する処理の一環として、サーバー間で代替変数を移行することもできます。641 ページの「[移行ウィザード](#)」を参照してください。

▶ 代替変数をコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、コピーする変数がある Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックし、「編集」>「変数」を選択します。
- 3 「代替変数」で変数を選択し、「コピー」をクリックします。
- 4 「代替変数のコピー」で、変数のコピー先の Essbase サーバーを選択します。
- 5 「アプリケーション」ドロップダウン・リスト・ボックスで、変数のコピー先のアプリケーションを選択します。選択した Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションに変数を関連付けるには、「(すべてのアプリケーション)」を選択します。
- 6 「データベース名」ドロップダウン・リスト・ボックスで、変数のコピー先のデータベースを選択します。選択したアプリケーションのすべてのデータベースに変数を関連付けるには、「(すべての DB)」を選択します。
- 7 「コピー」列で、コピーする変数の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - すべての変数を選択するには、「すべてチェック」をクリックします。
 - すべての選択を解除するには、「すべて消去」をクリックします。
- 8 同じ名前の既存の変数がある場合にその変数を置換するには、「既存の変数の置換」を選択します。
- 9 「OK」をクリックします。

関連情報

- [528 ページの「代替変数のコピー」ダイアログ・ボックス](#)
- [93 ページの「代替変数の管理」](#)

ESSCMD の使用

ESSCMD コマンド・ライン・インタフェースを使用して、ESSCMD コマンドを Essbase に渡すことが可能です。ESSCMD インタフェースは、Essbase 管理サーバーとともに次の場所にインストールされます:

```
EAS_HOME\server\bin\esscmd.exe(UNIX の場合は EAS_HOME/server/bin/esscmd)
```

EAS_HOME は Administration Services がインストールされているディレクトリです。

また、ESSCMD は Essbase でもインストールされます。ESSCMD の使用については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

アプリケーションの管理

ここには次のトピックがあります:

- 95 ページの「アプリケーションの作成」
- 96 ページの「アプリケーションの開始」
- 97 ページの「アプリケーションの自動開始の構成」
- 97 ページの「アプリケーションの停止」
- 98 ページの「アプリケーション・プロパティの設定」
- 99 ページの「アプリケーションのコピー」
- 100 ページの「アプリケーション名の変更」
- 101 ページの「アプリケーションの削除」
- 102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」

アプリケーションの作成

アプリケーションの作成/削除権限がある場合、アプリケーション(ブロック・ストレージ・アプリケーションまたは集約ストレージ・アプリケーション)を作成できます。アプリケーションを作成すると、Essbase によって、Essbase サーバー上にアプリケーション・ディレクトリが作成されます(ARBORPATH\app\appname)。データベースを作成する前に、アプリケーションを作成する必要があります。

▶ アプリケーションを作成するには、次の手順に従います:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして、「作成」>「アプリケーション」>「ブロック・ストレージを使用」または「作成」>「アプリケーション」>「集約ストレージを使用」を選択します。
- 3 「アプリケーションの作成」ダイアログ・ボックスで、目的の Essbase サーバーが選択されていない場合は、その Essbase サーバーを選択します。
- 4 「アプリケーション名」に、アプリケーションの名前を入力します。
- 5 Unicode モードのアプリケーションを作成する場合で、かつ、**選択した Essbase に権限がある**場合、「Unicode モード」を選択します。

注意 「Unicode モード」の選択は元に戻せません。

- 6 「OK」をクリックします。

Essbase ではアプリケーションが作成され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- 530 ページの「「アプリケーションの作成」ダイアログ・ボックス」

- アプリケーションとデータベースの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 集約ストレージ・アプリケーションの作成プロセス(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションの開始

ユーザーは、自身が読取り権限以上を持っているアプリケーションを開始できます。Essbaseによって、新たに開始されたアプリケーションが Essbase サーバーのメモリーにロードされます。

親アプリケーションの開始時にデータベースも開始するよう指定できます。この場合、ユーザーがアプリケーション内のデータベースへ接続するよりも前にアプリケーションを開始しておけば、アプリケーションおよび関連する全データベースがメモリー内にロードされた状態となるため、ユーザーの初期パフォーマンス(データベース接続時)が向上します。

Essbase サーバー上の1つのアプリケーション、または全アプリケーションを開始できます。アプリケーションを開始すると、アプリケーション・サーバー・プロセス(ESSSVR)が開始されます。

また、アプリケーションが**自動的に開始**するように構成することもできます。

▶ 1つのアプリケーションを開始するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「開始」>「アプリケーション」を選択します。

▶ Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを開始するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーの下にある「アプリケーション」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「すべてのアプリケーションを開始」を選択します。

関連情報

- [97 ページの「アプリケーションの自動開始の構成」](#)
- [332 ページの「アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示」](#)
- アプリケーションの開始と停止(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- loadapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- login(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- select(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- start(Essbase Agent)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションの自動開始の構成

アプリケーション・マネージャ権限を持っているユーザーは、アプリケーションを自動的に開始するよう構成できます。

アプリケーションの開始の設定は、アプリケーションを終了して再起動した後に有効になります。

▶ アプリケーションの自動開始を構成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして、「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「起動」ノードを展開します。
- 5 次のいずれかのアクションを行います:
 - ユーザーがアプリケーション内のデータベースからデータを取得しようとしたときに、そのアプリケーションを開始させるように構成するには、「アプリケーションの開始をユーザーに許可」を選択します。
 - Essbase サーバーの起動時にアプリケーションを開始させるように構成するには、「Essbase サーバーの開始時にアプリケーションを開始」を選択します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ」](#)
- [96 ページの「アプリケーションの開始」](#)

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setappstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションの停止

アプリケーションを停止すると、Essbase によって、アプリケーションと、そのアプリケーション内のすべてのデータベースが Essbase サーバーのメモリーからアンロードされます。これにより、使用可能なメモリーが増加します。

アプリケーション内のデータベースが破損しないようにするには、適切な方法でアプリケーションを停止する必要があります。

Essbase サーバー上の 1 つのアプリケーション、またはすべてのアプリケーションを停止できます。

▶ 1 つのアプリケーションを停止するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「停止」>「アプリケーション」を選択します。

▶ Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを停止するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーの下にある「アプリケーション」ノードを選択します。
- 2 右クリックして「すべてのアプリケーションを停止」を選択します。

関連情報

- [96 ページの「アプリケーションの開始」](#)
- [106 ページの「データベースの停止」](#)
- [332 ページの「アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示」](#)

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- unloadapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- stop(Essbase Agent)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーション・プロパティの設定

1 つの Essbase アプリケーションの設定を、1 つのウィンドウで表示および編集できます。また、複数のアプリケーションの設定を、複数のウィンドウで表示および編集できます。

Essbase 全体への設定の適用には、`essbase.cfg` 構成ファイルを使用できます。このファイルの作成方法、および使用可能な設定については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

▶ アプリケーション・プロパティを設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、次の 1 つまたは複数のプロパティを設定します:
 - [97 ページの「アプリケーションの自動開始の構成」](#)

- [277 ページの「アプリケーションに対するユーザー・アクティビティの遮断」](#)
- [276 ページの「アプリケーション・レベルのセキュリティの無効化」](#)
- [274 ページの「アプリケーションの最小権限の設定」](#)
- [323 ページの「データ・ロックのタイムアウトの設定」](#)
- [397 ページの「LRO ファイル・サイズの制限」](#)
- [128 ページの「アプリケーションの Unicode モードへの移行」](#)
- [81 ページの「テーブルスペースの管理」](#)

関連情報

- [504 ページの「アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ」](#)
- [332 ページの「アプリケーションの監視について」](#)

関連コマンド

- `alter application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションのコピー

ユーザーは、適切なアクセス権限を持つ Essbase サーバーにアプリケーションをコピーできます。アプリケーションは、Essbase サーバー間(たとえば、開発サーバーから本番サーバー)のほか、Essbase サーバー内(たとえば、テストやバックアップ目的など)でコピーできます。Essbase では、サーバー間でアプリケーションをコピーする場合、サーバー内でのアプリケーションのコピーとは異なる方法でコピーします。

ターゲットとソースのアプリケーションは同じタイプ(集約またはブロック・ストレージ)である必要があります。[メンバー名の一意性](#)の要件に関する設定は保持されます。

アプリケーションのコピーには、次の手順を使用できるほか、[641 ページの「移行ウィザード」](#)を使用できます。アプリケーションのコピー、移動、名前変更、または削除にはファイル・システムを使用しないでください。バックアップ時におけるファイル・システムを使用したアプリケーションおよびデータベースの管理の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： ソース Essbase サーバーより古いバージョンのターゲット Essbase サーバーには、アプリケーションをコピーできません。

▶ アプリケーションをコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「コピー」を選択します。
- 3 「アプリケーションのコピー」ダイアログ・ボックスで、アプリケーションのコピー先の Essbase サーバーを選択します。
- 4 「アプリケーション名」に、アプリケーションのコピーの名前を入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase でアプリケーションがコピーされ、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [521 ページの「アプリケーションのコピー」ダイアログ・ボックス](#)
- [641 ページの「移行ウィザード](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のデータベースの再ロードに関する項。

関連コマンド

- create application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーション名の変更

ユーザーは、アプリケーションの作成/削除の権限を持つアプリケーションを名前変更できます。

アプリケーション名を変更すると、アプリケーション・ディレクトリ(ARBORPATH \app\appname)および一部のアプリケーション・オブジェクト(アプリケーション・ログなど)の名前も変更されます。

▶ アプリケーション名を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「名前変更」を選択します。
- 3 「アプリケーションの名前変更」ダイアログ・ボックスで、アプリケーションの新しい名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

アプリケーション内にロックされているオブジェクトがある場合、Essbase でそのオブジェクトの一覧が表示され、オブジェクトをロックしたユーザーおよび時刻が示されます。

- 5 ロック済オブジェクトのリストが表示されたら、[オブジェクトのロック解除](#)を行い、「OK」をクリックして名前変更の操作を完了します。

管理者権限がないユーザーの場合は、自身がロックしたオブジェクトのみをロック解除できます。

すべてのオブジェクトがロック解除されている場合は、Essbase でアプリケーション名が変更され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [673 ページの「アプリケーションの名前変更」ダイアログ・ボックス](#)
- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)

関連コマンド

- `alter application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `renameapp(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションの削除

ユーザーは、アプリケーションの作成/削除の権限を持つアプリケーションを削除できます。

アプリケーションを削除する際、次の処理が実行されます:

- アプリケーション内のすべてのオブジェクトが削除されます。
- ロックされたオブジェクトをロック解除するよう求められます。ロックされたオブジェクトは削除できません。管理者以外のユーザーは、自身がロックしたオブジェクトのみをロック解除できます。
- アプリケーション・ディレクトリ(`ARBORPATH\app\appname`)、およびその中に保管されているすべてのファイルが削除されます。
- アプリケーションのログ・チャート情報([ログ・アナライザ](#)用)が削除されません。
- そのアプリケーションに関連するウィンドウ(たとえば、アプリケーション・プロパティ、セッション、およびロック)が開いている場合は、閉じられます。保存されていない変更があるウィンドウでは、変更内容を保存するか尋ねるメッセージが表示されます。

▶ アプリケーションを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「削除」>「アプリケーション」を選択します。
- 3 確認のメッセージで「はい」をクリックします。

アプリケーション内にロックされているオブジェクトがある場合、Essbase ではロックされているオブジェクトの一覧が表示され、オブジェクトをロックしたユーザーおよび時刻が示されます。

- 4 アプリケーションにロック済オブジェクトが含まれる場合は、[オブジェクトのロックを解除](#)し、削除操作を完了して「OK」をクリックします。

ロックされているすべてのオブジェクトがロック解除されると、Essbaseによってアプリケーションが削除され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [110 ページの「データベースの削除」](#)
- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)

関連コマンド

- drop application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- deleteapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase のデフォルトのオプションの設定

特定の Essbase の操作に対するデフォルトの動作(オブジェクトをロック済モードおよびロック解除済モードで開く、など)を指定できます。これらの設定は Essbase 管理サーバーに保管されるため、どのコンピュータから接続しても、特定の動作に対する設定は常に同じになります。

▶ コンソールに関する Essbase のデフォルトのオプションを設定するには:

- 1 メニュー・バーから「ツール」>「コンソール・オプション」を選択します。
- 2 「オプション」ダイアログ・ボックスで、「Essbase」タブを選択します。
- 3 希望する [Essbase のデフォルトのオプション](#)を選択します。
- 4 「適用」をクリックして、設定を保存します。
- 5 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

関連情報

- [654 ページの「「オプション」ダイアログ・ボックス」](#)
- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)
- [368 ページの「計算スクリプトの実行」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)

データベースの管理

ここには次のトピックがあります:

- [103 ページの「データベースの作成」](#)
- [104 ページの「データベースの開始」](#)
- [105 ページの「データベースの自動開始の構成」](#)
- [106 ページの「データベースの停止」](#)
- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)

- 107 ページの「データベースへのコメント」
- 108 ページの「データベースのコピー」
- 109 ページの「データベース名の変更」
- 110 ページの「データベースの削除」
- 111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」
- 113 ページの「データベースのエクスポート」
- 114 ページの「手動によるデータベースの再構築」
- 115 ページの「ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ」
- 116 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの復元」
- 117 ページの「ログに記録されたトランザクションの再実行」
- 118 ページの「ログに記録されたトランザクションの表示」
- 119 ページの「データの消去」
- 120 ページの「上位レベルのデータ・ブロックの消去」
- 120 ページの「計算されたデータ・ブロックの消去」
- 121 ページの「ロケーション別名の作成」
- 122 ページの「すべてのデータ値の消去」
- 122 ページの「ロケーション別名の編集または削除」
- 123 ページの「ドリルスルー定義の管理」

データベースの作成

アプリケーションの作成/削除権限を持っているユーザーは、データベースを作成できます。データベースを作成すると、Essbase によって、Essbase サーバーのアプリケーション・ディレクトリの下にデータベース・ディレクトリが作成されます (ARBORPATH\app\appname\dbname)。

データベースをアプリケーションに追加する前に、アプリケーションを作成する必要があります。ブロック・ストレージ・データベースはブロック・ストレージ・アプリケーション内に作成され、集約ストレージ・データベースは集約ストレージ・アプリケーション内に作成されます。

▶ データベースを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「データベースの作成」を選択します。
- 3 「データベースの作成」ダイアログ・ボックスで、目的の Essbase サーバーとアプリケーションが選択されていない場合は、その Essbase サーバーとアプリケーションを選択します。
- 4 「データベース名」に、データベースの名前を入力します。
- 5 「データベース・タイプ」で、「標準」(デフォルト)または「通貨」を選択します。

通貨データベースの詳細は、[通貨の換算](#)を参照してください。

- 6 データベース・アウトラインで[メンバー名の重複](#)を許可する場合は、「メンバー名の重複を許可」を選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

Essbase ではデータベースが作成され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [531 ページの「データベースの作成」ダイアログ・ボックス](#)
- [454 ページの「データベースから通貨データベースへのリンク」](#)
- アプリケーションとデータベースの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createdb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの開始

データベースを開始すると、Essbase では Essbase サーバーのメモリー上にデータベースがロードされます。インデックス・キャッシュは自動的に割り当てられ、データ・ファイル・キャッシュおよびデータ・キャッシュはブロックの要求時に割り当てられます。ユーザーのアクセスよりも前にデータベースを開始すれば、データベースが先にメモリー内にロードされるため、ユーザーの初期パフォーマンス(接続時)が向上します。

開始されていないアプリケーションのデータベースを開始すると、そのアプリケーションと、そのアプリケーション内のすべてのデータベースがロードされます。アプリケーション内の1つのデータベース、またはすべてのデータベースを開始できます。

また、データベースが[自動的に開始](#)するように構成することもできます。

▶ 1つのデータベースを開始するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「開始」を選択します。

▶ アプリケーションのすべてのデータベースを開始するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「開始」>「すべてのデータベース」を選択します。

関連情報

- [105 ページの「データベースの自動開始の構成」](#)
- [96 ページの「アプリケーションの開始」](#)
- [332 ページの「アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示」](#)

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- loaddb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- login(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- select(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの自動開始の構成

データベース・マネージャ権限を持っているユーザーは、データベースの開始を自動化できます。

データベースの開始の設定は、「適用」をクリックするとすぐに有効になります。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースの自動開始を構成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「起動」ノードを展開します。
- 5 次のいずれかのアクションを行います:
 - アプリケーションの開始時にデータベースを開始するよう構成するには、「アプリケーションの開始時にデータベースを開始」を選択します。
 - ユーザーによるデータ取得の試行時にデータベースを開始するよう構成するには、「データベースの開始をユーザーに許可」を選択します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [104 ページの「データベースの開始」](#)
- [570 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの停止

データベースを停止すると、Essbase では Essbase サーバー上のメモリーからデータベースがアンロードされ、更新されたデータがディスクにコミットされます。これにより、サーバー・コンピュータ上で使用可能なメモリーの量が増加します。

▶ 1つのデータベースを停止するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「停止」を選択します。

▶ アプリケーションのすべてのデータベースを停止するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「停止」>「すべてのデータベース」を選択します。

関連情報

- [104 ページの「データベースの開始」](#)
- [332 ページの「アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示」](#)

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- unloaddb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- stop(Essbase Agent)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティの設定

1つの Essbase データベースのプロパティを、1つのウィンドウで表示および編集できます。また、複数のデータベースのプロパティを、複数のウィンドウで表示および編集できます。

Essbase 全体への設定の適用には、essbase.cfg 構成ファイルを使用できます。このファイルの作成方法、および使用可能な設定については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

▶ データベース・プロパティを設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 次のプロパティを設定します:
 - [105 ページの「データベースの自動開始の構成」](#)
 - [385 ページの「計算時の欠落した値の集約」](#)
 - [353 ページの「等式によるブロックの作成の使用可能化」](#)

- 384 ページの「デフォルト計算における 2 パスの使用」
- 275 ページの「データベースの最小権限の設定」
- 343 ページの「取得バッファ・サイズの設定」
- 341 ページの「キャッシュ・メモリーのロックの使用可能化」
- 342 ページの「キャッシュ・サイズの設定」
- 348 ページの「データの整合性オプションの設定」
- 349 ページの「入出力アクセス・モードの選択」
- 347 ページの「データ圧縮方式の選択」
- 345 ページの「ディスク・ボリュームの設定」
- 454 ページの「データベースから通貨データベースへのリンク」

関連情報

- 565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」
- 334 ページの「データベースの監視について」
- Essbase のパフォーマンスの向上(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbinfo(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースへのコメント

データベース・マネージャの権限を持つデータベースに、コメントを付けられます。たとえば、データベース・ノートを使用して、スプレッドシートのユーザーにデータベースのステータスや更新期限に関するメッセージを伝達できます。データベース・ノートには、Spreadsheet Add-in のログイン・ダイアログ・ボックスからアクセスできます。

▶ データベースにコメントを付ける手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックし、「設定」>「データベース・ノート」を選択します。
- 3 「データベース・ノートの設定」ダイアログ・ボックスで、「データベース・ノート」にノートを入力します。

4 「OK」をクリックします。

関連情報

688 ページの「[「データベース・ノートの設定」ダイアログ・ボックス](#)」

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースのコピー

ユーザーは、アプリケーション・マネージャの権限を持つアプリケーションのデータベース、および適切なアクセス権限を持つアプリケーションをコピーできます。ソース Essbase サーバーより古いバージョンのターゲット Essbase サーバーには、データベースをコピーできません。

非 Unicode モードのアプリケーションから Unicode モードのアプリケーションにコピーされたデータベースは、Unicode モードに変換されます。Unicode モードのアプリケーションから非 Unicode モードのアプリケーションにデータベースをコピーすることはできません。

データベースのコピー時には、[メンバー名の一意性](#)の要件に関する設定は保持されます。また、データベース・ディレクトリ(ARBORPATH\app\appname\dbname)がターゲット・サーバーに作成されます。

データベースは、Essbase サーバー間(たとえば、開発サーバーから本番サーバー)の他、Essbase サーバー内(たとえば、テストやバックアップ目的など)でコピーできます。Essbase では、サーバー間でデータベースをコピーする場合、サーバー内でのデータベースのコピーとは異なる方法でコピーします。

データベースは既存のアプリケーションにのみコピーできます。必要な場合には、ターゲット・サーバーに、データベースを含める[アプリケーションを作成](#)できます。

データベースのコピーには、次の手順を使用できるほか、[641 ページの「移行ウィザード」](#)を使用できます。データベースのコピー、移動、名前変更、または削除にはファイル・システムを使用しないでください。バックアップ時におけるファイル・システムを使用したアプリケーションおよびデータベースの管理の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： 集約ストレージ・データベースはコピーできません。ただし、集約ストレージ・アプリケーションはコピーできます。

▶ データベースをコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「コピー」を選択します。
- 3 「データベースのコピー」ダイアログ・ボックスで、データベースのコピー先の Essbase サーバーを選択します。

- 4 「アプリケーション」リストで、データベースのコピー先のアプリケーションを選択します。
- 5 「データベース名」に、データベースのコピーの名前を入力します。
- 6 「OK」をクリックします。

Essbase ではデータベースがコピーされ、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [522 ページの「データベースのコピー」ダイアログ・ボックス](#)
- [99 ページの「アプリケーションのコピー」](#)
- [641 ページの「移行ウィザード」](#)
- Unicode モードのサーバーおよび非 Unicode モードのアプリケーション(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のデータベースの再ロードに関する項。

関連コマンド

- create database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createdb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース名の変更

データベースに対してアプリケーション・マネージャの権限を持っている場合は、そのデータベースの名前を変更できます。データベース内のオブジェクトが他のユーザーによってロックされている場合は、Essbase で変更の前にロックを解除するよう求めるプロンプトが表示されます。管理者権限がある場合を除き、ユーザーは自分がロックしたオブジェクトのロックのみを解除できます。

データベース名を変更すると、データベース・ディレクトリ(ARBORPATH\app\appname\dbname)とデータベース・アウトライン(dbname.otl)の名前が変更されます。システムが定義する他のデータベース・ファイル(dbname.db、dbname.dbb、dbname.esm、dbname.ind、dbname.tct)の名前も変更されます。

データベースとは別に作成されたデータベース・オブジェクト(計算スクリプト、レポート・スクリプトなど)の名前は変更されません。

▶ データベースの名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックし、「名前の変更」を選択します。
- 3 「データベースの名前変更」ダイアログ・ボックスで、データベースの新しい名前を入力します。(命名ルールについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。)
- 4 「OK」をクリックします。

データベース内にロックされているオブジェクトがある場合は、Essbaseでそのオブジェクトの一覧が表示され、オブジェクトをロックしたユーザーおよび時刻が示されます。

- 5 **オブジェクトのロック解除**および名前変更の操作を完了するには、「OK」をクリックします。すべてのオブジェクトが正常にロック解除された場合は、Essbaseでデータベース名が変更され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- 674 ページの「[データベースの名前変更](#)」ダイアログ・ボックス」
- 111 ページの「[オブジェクトのロックおよびロック解除](#)」

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renamedb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの削除

アプリケーションに対するアプリケーション・マネージャの権限を持っているユーザーは、自分が作成したアプリケーション内のデータベースを削除できます。

データベースを削除すると、次の処理が行われます:

- データベース内のすべてのオブジェクトが削除されます。
- ロックされたオブジェクトをロック解除するよう求められます。ロックされたオブジェクトは削除できません。管理者以外のユーザーは、自身がロックしたオブジェクトのみをロック解除できます。
- データベース・ディレクトリ(ARBORPATH\app\appname\dbname)とそのディレクトリに保管されているすべてのファイルが削除されます。
- そのデータベースに関連するウィンドウ(たとえば、データベース・プロパティ、セッション、およびロック)が開いている場合は、閉じられます。保存されていない変更があるウィンドウでは、変更内容を保存するか尋ねるメッセージが表示されます。

1つのデータベースを削除することも、また Essbase サーバー上のすべてのデータベースを削除することもできます。

▶ 個々のデータベースを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「削除」を選択します。
- 3 確認のメッセージで「はい」をクリックします。

データベース内にロックされているオブジェクトがある場合は、Essbaseでロックされているオブジェクトの一覧が表示され、オブジェクトをロックしたユーザーおよび時刻が示されます。

- 4 アプリケーションにロック済オブジェクトが含まれる場合は、**オブジェクトのロックを解除**し、「OK」をクリックして削除操作を完了します。

すべてのオブジェクトがロック解除されると、Essbase ではデータベースが削除され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

▶ Essbase サーバー上のすべてのデータベースを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、削除するデータベースを含むアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「削除」>「すべてのデータベース」を選択します。
- 3 確認のメッセージで「はい」をクリックします。

データベース内にロックされているオブジェクトがある場合は、Essbase でロックされているオブジェクトの一覧が表示され、オブジェクトをロックしたユーザーおよび時刻が示されます。

- 4 アプリケーションにロック済オブジェクトが含まれる場合は、**オブジェクトのロックを解除**し、「OK」をクリックして削除操作を完了します。

すべてのオブジェクトのロックが正常に解除されると、Essbase ではすべてのデータベースが削除され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [101 ページの「アプリケーションの削除」](#)
- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)

関連コマンド

- `drop database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `deletedb(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

オブジェクトのロックおよびロック解除

Essbase では、データベース・オブジェクト(計算スクリプト、レポート・スクリプト、ルール・ファイルなど)にチェックアウト機能を設けて、同じオブジェクトを複数のユーザーが同時に編集しないようにしています。デフォルトでは、オブジェクトを開こうとすると、Essbase ではそのオブジェクトをロックするように促すプロンプトが表示され、オブジェクトのエディタを終了するとロックが削除されます。一部のオブジェクトについては、デフォルトのロック動作を変更できます。[102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)を参照してください。

注： アウトラインのロックおよびロック解除の動作については、このトピックでは説明していません。[136 ページの「アウトラインのロックおよびロック解除」](#)を参照してください。

ロックされたオブジェクトは開くことや、編集、実行およびコピーすることができます。ロックされたオブジェクトは保存、名前変更、または削除できません。

ロックされたオブジェクトに対する変更内容を保存するには、「ファイル」>「名前を付けて保存」を選択して、変更したオブジェクトを別の場所に保存する必要があります。

ロックされたオブジェクト、またはロックされたオブジェクトを含むアプリケーションやデータベースで権限のない操作を実行しようとする、Essbaseに「[オブジェクトのロック解除](#)」ダイアログ・ボックスが表示され、ロックを解除して操作を実行するよう求められます。自身の持つセキュリティ権限に応じて、オブジェクトを表示してロックを解除できます。管理者権限を持つユーザーは、どのオブジェクトでもロックを解除できます。管理者権限を持たないユーザーは、ロックしたオブジェクトのみロックを解除できます。

注： オブジェクトのロックと、ユーザーによるデータのロックとは異なります。データのロックの詳細は、[321 ページの「データのロックの表示」](#)を参照してください。

▶ ロックされている複数のオブジェクトを表示してロックを解除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして、「編集」>「ロック済オブジェクト」を選択します。
- 3 [ロック済オブジェクト・ウィンドウ](#)で、アクションを実行します:
 - 特定のオブジェクトをロック解除するには、そのオブジェクトが含まれている行を選択して、「ロック解除」をクリックします。
 - すべてのオブジェクトをロック解除するには、「すべてロック解除」をクリックします。

▶ 1つのオブジェクトを手動でロックまたはロック解除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ロック解除またはロックされたオブジェクト(計算スクリプトなど)を選択します。
- 2 右クリックし、選択したオブジェクトの状態(未ロックまたはロック済)に応じて、「ロック」または「[ロック解除](#)」をクリックします。

関連情報

- [102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)
- [629 ページの「ロック済オブジェクト・ウィンドウ」](#)
- [703 ページの「\[オブジェクトのロック解除\]\(#\)」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- unlockobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースのエクスポート

データベース読取り権限を持っているユーザーは、データをテキスト・ファイルにエクスポートすることによってバックアップできます。エクスポートの際、データは圧縮されません。エクスポート・ファイルにはデータのみが保管されます、制御、アウトライン、およびセキュリティ情報は保管されません。

エクスポートするデータベースが稼働していない場合は、Administration Servicesによって開始されます。データのエクスポート中には、ユーザーはデータベースに接続して読取り専用の操作を実行できます。

注： 重複メンバー名を含むデータベースからデータをエクスポートする際、重複するメンバーについては修飾名がエクスポートされます。エクスポート・ファイルでは、すべてのメンバー名が引用符(" ")で囲まれます。

▶ データベースをエクスポートするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「エクスポート」を選択します。
- 3 604 ページの「データベースのエクスポート」ダイアログ・ボックスで、エクスポート・ファイル(複数可)の名前を指定します。
- 4 エクスポートするデータを選択します。

注： 集約ストレージ・データベースについては、レベル0のデータのみをエクスポートできます。

- 5 **オプション:** データを列フォーマットでエクスポートする場合は、「列フォーマットでのエクスポート」を選択します。

注： このオプションは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

- 6 **オプション:** エクスポート・プロセスが行われている間にコンソールで作業できるように、バックグラウンドでデータをエクスポートする場合は、「バックグラウンドで実行」を選択します。

- 7 「OK」をクリックします。

Essbase でエクスポートが実行されます。コンソール・ウィンドウの最下部にある「メッセージ」ペインに、エラーおよびステータス・メッセージが表示されます。エクスポートをバックグラウンドで実行する場合は、プロセスの ID が表示されます。この ID をバックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウで使用して、エクスポートの「ステータスを追跡」できます。

注： デフォルトでは、Administration Services は、ローカル・ファイル・システムではなく、選択された Essbase 管理サーバーにデータベースをエクスポートします。

関連情報

- [604 ページの「データベースのエクスポート」ダイアログ・ボックス](#)
- バックアップのエクスポート(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)(ブロック・ストレージ)
- 集約ストレージ・データベースのエクスポート(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- export data block storage(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- export data aggregate storage(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- export(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

手動によるデータベースの再構築

データベースに対してデータベース・マネージャの権限を持っているユーザーは、断片化を削除または減少させるために、データベースをいつでも手動で再構築できます。データベースを手動で再構築すると、データ・ファイルのブロックが再構築され、新しいデータ・ファイルが作成されます。インデックスが自動的に再生成され、インデック・スメントリによって新しいデータ・ブロックが参照されます。データベースの再構築が終了したら、データを再計算する必要があります。

データベースまたはアウトラインに特定の変更が行われると、データベースの再構築が自動的に開始される場合もあります。自動的な再構築の詳細は、[139 ページの「アウトラインの保存」](#)を参照してください。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースを手動で再構築するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「再構築」を選択します。
- 3 **オプション:** 再構築プロセス中に作業を続行するには、「[データベースの再構築](#)」[ダイアログ・ボックス](#)で「バックグラウンドで再構築」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [681 ページの「データベースの再構築」ダイアログ・ボックス](#)
- データベースの再構築の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ

ブロック・ストレージ・データベースを特定の時点でバックアップし、後でデータベースをその時点と同じ状態に復元できます。データベースのバックアップでは、Essbaseによってデータベース・ファイルのコピーが単一のアーカイブ・ファイルに書き込まれます。データベース・アーカイブ・ファイルには、アプリケーション名やデータベース名、バックアップが実行された日時、ディスク・ボリューム名などの、バックアップされたデータベースに関する情報が含まれます。データベースは、必要に応じてアーカイブ・ファイルから復元できます。

データベースをバックアップするには、管理者の役割が必要です。

注： 包括的なバックアップ/復元戦略の一環として、トランザクション・ロギング/再実行とともに、データベースのバックアップ/復元を使用することをお勧めします。

▶ データベースをアーカイブするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的のデータベースを右クリックして「データベースのアーカイブ」を選択します。
- 2 作成するアーカイブ・ファイルのパスとファイル名を入力します。

Essbase サーバー・コンピュータ上に存在するディレクトリへのパスを入力する必要があります。ファイルには.arc という拡張子を付けることをお勧めします。アーカイブ・ファイルのサイズは、ディスク・スペースにのみ制約されます。

注： アーカイブ・ファイルは、大規模ファイルをサポートしているファイル・システムに保存する必要があります。Windows の場合は、ファイル・システムが NTFS フォーマットである必要があります。UNIX の場合は、大規模ファイルのサポートが使用可能となっている必要があります。ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

- 3 **オプション:** アーカイブ操作と並行してコンソールで作業を続行するには、「バックグラウンドでアーカイブ」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- アーカイブ・ファイル情報の取得(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [116 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの復元」](#)
- [118 ページの「ログに記録されたトランザクションの表示」](#)

- [117 ページの「ログに記録されたトランザクションの再実行」](#)

関連コマンド

- `alter database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `query archive_file(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ブロック・ストレージ・データベースの復元

バックアップしたデータベースを復元すると、データベースは、バックアップが実行された時点の状態に戻ります。データベースを復元すると、バックアップ後に行われたトランザクションは失われます。

データベースを復元するには、管理者の役割が必要です。

注： データベースのバックアップ/復元とともに、トランザクション・ロギングと再実行を使用して、継続中のトランザクションをキャプチャすることにより、バックアップ実行時の状態にではなく、最新の状態にデータベースを復元できます。

▶ アーカイブされたデータベースを復元するには:

- 1 データベースに対するアクティブなクライアント接続を終了します。
- 2 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的のデータベースを右クリックして「データベースの復元」を選択します。
- 3 復元するデータベース・アーカイブ・ファイルをリストから選択するか、アーカイブ・ファイルのパスとファイル名を入力します。
- 4 **オプション:** データベースがディスク・ボリュームを使用していた場合は、「拡張」をクリックします。

データベースは同じディスク・ボリュームに復元できるほか、別のディスク・ボリューム名を入力することもできます。

復元するデータベースに使用するディスク・ボリュームの数と必要な容量は、バックアップ前のデータベースと同じでなければなりません。変更できるのはディスク・ボリューム名のみです。たとえば、ディスク・ボリューム"C"を"F"に、"D"を"G"に変更できます。

- 5 バックアップされたデータベースおよびアプリケーションの名前が、データを復元するアプリケーションおよびデータベースとは異なる場合は、「復元を強制」を選択します。
- 6 **オプション:** 復元操作と並行してコンソールで作業を続行するには、「バックグラウンドで復元」を選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

関連情報

- [115 ページの「ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ」](#)

- アーカイブ・ファイル情報の取得(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 118 ページの「ログに記録されたトランザクションの表示」
- 117 ページの「ログに記録されたトランザクションの再実行」

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ログに記録されたトランザクションの再実行

バックアップしたデータベースを復元すると、アーカイブ操作後に実行されたトランザクションは失われます。データベースのバックアップ後にトランザクション・ロギングを使用可能にすると、ログに記録されたトランザクションを再実行して、データベースを最新の状態に復元できます。

ログに記録および再実行できるのは、ブロック・ストレージ・データベースのトランザクションのみです。

注： 包括的なバックアップ/復元戦略の一環として、データベースのバックアップ/復元とともに、トランザクション・ロギング/再実行を使用することをお勧めします。

ログに記録された各トランザクションには、そのトランザクションが実行された順序を示すシーケンス ID が割り当てられます。再実行後の復元データの整合性を確実に保つために、Essbase ではトランザクションは最初の実行時と同じ順序で再実行されます。シーケンス ID の順序は複数回の再実行コマンドの実行にわたって追跡されます。あるトランザクションが再実行されると、それ以降は、そのトランザクションより大きいシーケンス番号を持つトランザクションのみが再実行できます。

▶ トランザクションを再実行するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的のデータベースを右クリックして「トランザクションの再実行」を選択します。
- 2 再実行するトランザクションを指定するには、次のいずれかのオプションを選択します:
 - 「最終再実行時間に基づく」
管理サービス・コンソールによって、前回の再実行要求の実行以降にログに記録されたトランザクションが再実行されます。
 - 「シーケンス ID の範囲の使用」
トランザクションを選択的に再実行するには、シーケンス ID の範囲を示す文字列をカンマで区切って入力します。範囲は次の 1 つまたは複数のトランザクションで構成できます:
 - 1 トランザクション: n から n(例: 1 から 1)
 - 複数のトランザクション: x から y(例: 20 から 100)

- 「開始時間」:時刻を mm-dd-yyyy hh:mm:ss フォーマットで入力します(例: Mar 28, 2008 19:35:43)。

管理サービス・コンソールによって、指定した日時以降にログに記録されたトランザクションが再実行されます。

3 「OK」をクリックします。

関連情報

- トランザクション・ロギングの使用可能化およびトランザクションの再実行の構成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [118 ページの「ログに記録されたトランザクションの表示」](#)
- [115 ページの「ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ」](#)
- [116 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの復元」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ログに記録されたトランザクションの表示

データベースのバックアップ後に実行されたトランザクションは、データベースを復元すると失われます。データベースのバックアップ後に、トランザクション・ロギングを使用可能にすると、継続中のトランザクションがキャプチャされ、それらのトランザクションを再実行してデータベースを最新の状態に復元できます。

ログに記録および再実行できるのは、ブロック・ストレージ・データベースのトランザクションのみです。

注: 包括的なバックアップ/復元戦略の一環として、データベースのバックアップ/復元とともに、トランザクション・ロギング/再実行を使用することをお勧めします。

ログに記録されたトランザクションのリストを表示するには、管理者の役割が必要です。

▶ ログに記録されたトランザクションを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、トランザクション・ロギングが使用可能になっているデータベースを右クリックして、「トランザクションの表示」を選択します。
- 2 表示するトランザクションを指定するには、次のいずれかのオプションを選択します:
 - 「最終再実行時間に基づく」
管理サービス・コンソールによって、前回の再実行要求以降にログに記録されたトランザクションのリストが表示されます。
 - 「開始時間」:時刻を mm-dd-yyyy hh:mm:ss フォーマットで入力します(例: Mar 28, 2008 19:35:43)。

管理サービス・コンソールによって、指定した日時以降にログに記録されたトランザクションのリストが表示されます。

3 リストは次の属性でソートできます:

- トランザクションが実行された日時
- トランザクション要求を送信したユーザー
- トランザクション ID(トランザクションが実行された順序を示す。この順序で再実行する必要がある)

4 「OK」をクリックします。

関連情報

- トランザクション・ロギングの使用可能化およびトランザクションの再実行の構成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [117 ページの「ログに記録されたトランザクションの再実行」](#)
- [594 ページの「トランザクションの表示」ダイアログ・ボックス](#)
- [115 ページの「ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ」](#)
- [116 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの復元」](#)

関連コマンド

query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データの消去

書込み権限のあるデータベースから、データを消去できます。

すべてのデータ値を消去できるほか、ブロック・ストレージ・データベースの場合は、計算されたデータ・ブロックのみ、または上位レベルのデータ・ブロックのみを消去できます。データが消去されたセルは#MISSING に設定されます。

データ・ロードの際にデータを自動的に消去することもできます。[247 ページの「データ・ロードの前のデータ値の消去」](#)を参照してください。

- すべてのデータ値を消去するには、[すべてのデータ値の消去](#)を参照してください。
- 集約ストレージ・データベースからデータを消去するには、[79 ページの「集約ストレージ・データベースからのデータの消去」](#)を参照してください。
- 計算されたデータ・ブロックを消去するには、[計算されたデータ・ブロックの消去](#)を参照してください。
- 上位レベルのデータ・ブロックを消去するには、[上位レベルのデータ・ブロックの消去](#)を参照してください。

関連情報

データ・ブロック内のデータ・ストレージ(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- resetdb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- cleardata(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- clearblock noninput(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- clearblock upper(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

上位レベルのデータ・ブロックの消去

書き込み権限のあるデータベースから、データを消去できます。

上位レベル・ブロックのみを消去した場合、上位レベル・ブロックのデータ値は#MISSING に設定されます。上位レベル・ブロックは、疎メンバーの1つ以上が親メンバーとなっている疎メンバーの組合せに対して作成されます。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースから上位レベル・ブロックを消去するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「消去」>「上位レベル・ブロック」を選択します。
- 3 確認のプロンプトで、「はい」をクリックします。

関連情報

[119 ページの「データの消去」](#)

関連コマンド

clearblock upper(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

計算されたデータ・ブロックの消去

書き込み権限のあるデータベースから、データを消去できます。

計算によって算出された値を含むデータ・ブロック(入力されたブロックではないブロック)のみを消去できます。計算されたデータ・ブロックを消去すると、計算されたセル(入力されたセルではないセル)のデータ値は#MISSING に設定されます。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

- ▶ データベースの計算されたブロック(入力されたブロックではないブロック)を消去するには:
 - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「消去」>「非入力ブロック」を選択します。
 - 3 確認のプロンプトで、「はい」をクリックします。

関連情報

119 ページの「データの消去」

関連コマンド

clearblock noninput(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ロケーション別名の作成

データベース・マネージャの権限を持っているユーザーは、ロケーション別名を作成できます。ロケーション別名は、データベースの別名を、そのデータベースの物理的なロケーションにマップします。ロケーション別名では、Essbase サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。

別名を使用してデータベースを参照できるほか、ロケーション定義を編集できます。

ロケーション別名は、@XREF 関数でのみ使用できます。この関数を使用すると、現在のデータベース以外のデータベースからデータ値を取得して、現在のデータベースの計算にその値を含められます。ロケーション別名は、値を取得するデータベースをポイントします。

注： ロケーション別名は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

- ▶ データベースのロケーション別名を作成するには:
 - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックし、「編集」>「ロケーション別名」を選択します。
「ロケーション別名」ウィンドウが表示されます。
 - 3 「別名」にデータベースの別名を入力します。
 - 4 **別名情報**、データベースを含むサーバーに関する情報を入力または選択します。
 - 5 「テスト」をクリックして、ロケーション別名の情報が正しいことを確認します。
ロケーション別名の情報が有効な場合は、「確認済」列のチェック・ボックスが選択されます。
 - 6 「設定」をクリックします。

関連情報

- [122 ページの「ロケーション別名の編集または削除」](#)
- [628 ページの「ロケーション別名ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- create location alias(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createlocation(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listlocations(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

すべてのデータ値の消去

書き込み権限のあるデータベースから、すべてのデータを消去できます。

集約ストレージ・データベースからのデータの消去の詳細は、[79 ページの「集約ストレージ・データベースからのデータの消去」](#)を参照してください。

▶ **ブロック・ストレージ**・データベースからデータをすべて消去するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「消去」>「すべてのデータ」を選択します。
- 3 確認のメッセージが表示されたら、「はい」をクリックします。

関連情報

[119 ページの「データの消去」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- resetdb(ESSCMD)
- cleardata(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ロケーション別名の編集または削除

ロケーション別名は、データベースの別名をデータベースの物理的なロケーションにマップします。データベース・マネージャの権限を持っている場合、ロケーション別名の定義の編集、およびロケーション別名の削除を実行できます。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ ロケーション別名を編集または削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。

- 2 右クリックし、「編集」>「ロケーション別名」を選択します。
- 3 「ロケーション別名」ウィンドウで、次の1つ以上のアクションを実行します:
 - 別名情報を編集して、「設定」をクリックします。
 - 別名を名前変更して、「設定」をクリックします。
 - 別名を削除するには、行を選択して「削除」をクリックします。

関連情報

- [121 ページの「ロケーション別名の作成」](#)
- [628 ページの「ロケーション別名ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- drop location alias(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- deletelocation(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ドリルスルー定義の管理

- ▶ ドリルスルー定義を作成するには、次の手順に従います:
- 1 エンタープライズ・ビューで、データベースを右クリックします。
 - 2 「編集」を選択し、「ドリルスルー定義」を選択します。
 - 3 次のいずれかのアクションを行います:
 - 定義の追加
 - 定義の変更
 - 定義の削除
- ▶ 定義を追加または変更するには、次の手順に従います:
- 1 次のいずれかのアクションを行います:
 - 定義を追加するには、「定義」で「定義を追加するには、ここをクリックします」を選択します。
 - 定義を変更するには、「定義」でその定義を選択します。
 - 2 **オプション:** 定義を作成する場合は、「URL 名」を入力します。
 - 3 次のいずれかのアクションを行います:
 - 「XML コンテンツ」に、XML スクリプトを入力します。
 - 「ファイルから XML をロード」をクリックし、XML スクリプトを含んでいるファイルを選択します。
 - 「XML をファイルに保存」をクリックし、XML スクリプトを保存します。
 - 「XML のエクスポート」をクリックし、XML スクリプトをエクスポートします。
 - 4 定義に含める1つ以上の領域を追加します:

1. アウトライン・ツリーでメンバー名をダブルクリックすると、式のテキスト・マーカーの位置にそのメンバー名が挿入されます。メンバーの検索を実行して、指定したテキストが含まれるメンバーを検索できます。
2. **オプション:** アウトライン・ツリーで別名を表示するには、「別名の使用」を選択して、リストから別名テーブルを選択します。
3. 「コマンドと関数」のツリーで、演算子または関数をダブルクリックします。選択した演算子または関数が、テキスト領域のテキスト・マーカーの位置に挿入されます。「引数の挿入」を選択すると、コマンドまたは関数の挿入時に、テキスト領域に引数が挿入されます。
4. **オプション:** レベル 0 メンバーのみを含めるには、「レベル 0 のメンバーのみ」を選択します。

5 「保存」をクリックし、「閉じる」をクリックします。

▶ 定義を削除するには、次の手順に従います:

- 1 「定義」で、ドリルスルー定義を選択します。
- 2 「定義の削除」をクリックします。

関連トピック

[595 ページの「ドリルスルー定義の編集」ダイアログ・ボックス](#)

Unicode モードのアプリケーション

ここには次のトピックがあります:

- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)
- [126 ページの「Administration Services でのファイルのエンコード方式の判別方法」](#)
- [126 ページの「ロケール・ヘッダーについて」](#)
- [127 ページの「Unicode モードのアプリケーションの作成」](#)
- [128 ページの「アプリケーションの Unicode モードへの移行」](#)

ファイルのエンコード方式とロケールについて

ファイルの文字テキストのそれぞれの文字は、特定のビットの組合せを使用して保管されています。ファイルの文字の読み書きが行われる際には、特定のコード・ページやその他のマッピング標準が参照されます。たとえば、英語でよく使用されるコード・ページの Latin 1 では、16 進数の 41 が大文字の A にマッピングされています。コード・ページに従ってテキスト文字を書き込むことを、エンコードと呼びます。

コード・ページは、ロケールの指定によって決定されます。Essbase の場合は、ESSLANG 変数またはコンピュータのシステム・ロケールによってロケールが指定されます(『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照)。非 Unicode モードのアプリケーションでのエン

コード方式は、Essbase と Administration Services の両方に共通のロケールに基づいて指定されます。

メンバー名などのテキストを正しく解釈するためには、それがどの方式でエンコードされているかを管理サービス・コンソールが認識する必要があります。エンコード方式の選択によって、ファイルの様々なカテゴリやサブカテゴリでアクションを実行できるかどうか異なります：

- アプリケーションやデータベースで内部的に使用されるファイルは直接編集できません。これらのファイルの文字テキストは、アプリケーション(Unicode モードまたは非 Unicode モードのいずれか)のエンコード方式に基づいてエンコードされます。
 - Unicode モード・アプリケーションのファイルのテキストは、UTF-8 でエンコードされています。
 - 非 Unicode モード・アプリケーションのファイルのテキストは、ESSLANG 変数のロケール、またはそのファイルが作成された Essbase サーバーのシステム・ロケールに従ってエンコードされています。
- ユーザーは、スクリプトやデータ・ソースなどのテキスト・ファイルを編集および作成できるほか、アウトライン・ファイルやルール・ファイルなどのバイナリ・ファイルを編集できます。
- アウトライン・ファイルおよびルール・ファイルの編集には、管理サービス・コンソールを使用します。アプリケーションの内部で編集を行う場合、管理サービス・コンソールはアプリケーションのエンコード方式に基づいてロケールを判別します。アプリケーションの外部で編集を行う場合は、エンコード方式の指定を求めるメッセージが表示されます。
- 管理サービス・コンソールを使用してテキスト・ファイルを作成する場合、ファイルの保存時にエンコード情報を求められます。そのエンコード情報がファイルに保管されます。
- 管理サービス・コンソール以外の方法を使用してテキスト・ファイルを作成する場合は、テキスト・エディタまたは Essbase Unicode ファイル・ユーティリティ(ESSUTF8)を使用して、エンコード方式の情報を手動で追加する必要があります。

注： UTF-8 でエンコードされたテキスト・ファイルのエンコード方式のインディケータは、業界標準の UTF-8 シグネチャです。UTF-8 以外でエンコードされたテキスト・ファイルのエンコード方式のインディケータは、一定のフォーマットで記述されたロケール・ヘッダー・レコードです。

関連情報

- [126 ページの「Administration Services でのファイルのエンコード方式の判別方法」](#)
- テキストのエンコードの特定およびファイルのエンコード方式の管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- Essbase Unicode ファイル・ユーティリティ(ESSUTF8)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Administration Services でのファイルのエンコード方式の判別方法

Essbase 管理サーバーでファイルを開いたとき、エンコード方式は次のいずれかの方法で判別されます:

- エンコード方式のインディケータが含まれているファイルの場合は、指定されているエンコード方式が使用されます。
- エンコード方式のインディケータが含まれていないファイルを Essbase から開いた場合は、アプリケーションのエンコード方式が使用されます。
- ルール・ファイルやテキスト・ファイルにエンコード方式のインディケータがなく、ファイルが Essbase から開かれていない場合は、エンコード方式の指定を求めるプロンプトが表示されます。ファイルがアウトライン・ファイル(.otl)の場合は、Essbase のエンコード方式が使用されます。

Essbase 管理サーバーでファイルを保存するとき、テキストは次のいずれかの方法でエンコードされます:

- ファイルが Essbase に保存される場合は、アプリケーションのエンコード方式が使用されます:
 - アプリケーションが Unicode モード・アプリケーションである場合は、UTF-8 が使用されます
 - アプリケーションが非 Unicode モード・アプリケーションである場合は、Essbase の ESSLANG 変数で指定されているエンコード方式が使用されます
- 既存のファイルがクライアント上の場所に保存される場合は、既存のエンコード方式で保存されます。
- 新規のテキスト・ファイルがクライアント上の場所に保存される場合は、エンコード方式の指定を求めるプロンプトが表示されます。ファイルがアウトライン・ファイル(.otl)の場合は、Essbase のエンコード方式が使用されます。

注: エンコード方式を指定してファイルを保存した後は、エンコード方式を変更できなくなります。ファイルを別名で保存する場合でも変更できません。

関連情報

- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)
- [126 ページの「ロケール・ヘッダーについて」](#)
- ファイルのエンコード方式の管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

ロケール・ヘッダーについて

ロケール・ヘッダーは、非 Unicode のテキスト・ファイルで使用されます。Unicode モード・アプリケーションに関連付けられているファイルが UTF-8 でエンコードされていない場合、Essbase では、ファイル内のテキスト文字の解釈に使用するエンコード方式を、ロケール・ヘッダー・レコードを使用して判別します。

ロケール・ヘッダー・レコードは、テキスト・ファイルの作成時に挿入できるほか、Essbase Unicode ファイル・ユーティリティ(ESSUTF8)を使用して挿入できます。ロケール・ヘッダー・レコードの詳細、およびその挿入方法とレコードのフォーマットについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

管理サービス・コンソールでテキスト・ファイルを保存すると、管理サービス・コンソールによってロケール・ヘッダー・レコードが挿入されます。管理サービス・コンソールでは、ヘッダー・レコードに挿入するロケール値を決定する特定のプロセスをたどります。

ロケール・ヘッダー・レコードは、Unicode モードおよび非 Unicode モード・アプリケーションのテキスト・ファイルに挿入されます。したがって、1つのテキスト・ファイルを両方のタイプのアプリケーションで使用できます。

関連情報

- 126 ページの「Administration Services でのファイルのエンコード方式の判別方法」
- ファイルのエンコード方式の管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

Unicode モードのアプリケーションの作成

Unicode モードのアプリケーションでは、様々な文字セットを使用できます。

ブロック・ストレージまたは集約ストレージに対して Unicode モードのアプリケーションを作成できます。また、非 Unicode モードのアプリケーションを Unicode モードに移行することもできます。Unicode モードへのアプリケーションの移行を参照してください。

アプリケーションが Unicode モードかどうかは、「Unicode モード」アプリケーション・プロパティとして表示されます。

▶ Unicode モードのアプリケーションを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、アプリケーションの作成権限が付与されている Essbase サーバーを選択します。

Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase サーバー権限の管理を参照してください。

- 2 右クリックして、「作成」>「アプリケーション」>「ブロック・ストレージを使用」または「作成」>「アプリケーション」>「集約ストレージを使用」を選択します。
- 3 「アプリケーションの作成」ダイアログ・ボックスで、目的の Essbase サーバーを選択します。
- 4 「アプリケーション名」に、アプリケーションの名前を入力します。
- 5 「Unicode モード」を選択します。

注意 「Unicode モード」の選択は元に戻せません。

6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [128 ページの「アプリケーションの Unicode モードへの移行」](#)
- [91 ページの「Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase サーバー権限の管理」](#)
- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ」](#)
- Unicode を使用した複数言語のアプリケーションの有効化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションの Unicode モードへの移行

非 Unicode のアプリケーションを Unicode モードに移行すると、様々な文字セットでアプリケーションの情報を表示できるようになります。

注意 Unicode モードに移行する処理は、元に戻せません。

▶ アプリケーションを Unicode モードへ移行するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「Unicode モード」を選択します。

「Unicode モード」チェック・ボックスは、Unicode モードのアプリケーションを作成する権限が Essbase に与えられている場合にのみ表示されます。

- 5 「適用」をクリックします。

関連情報

- [91 ページの「Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase サーバー権限の管理」](#)
- Unicode を使用した複数言語のアプリケーションの有効化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- create application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

アウトラインについて.....	131
アウトライン・ビューアの使用.....	143
アウトライン・エディタの使用.....	149
アウトラインの編集.....	159

アウトラインについて

ここには次のトピックがあります:

- 131 ページの「アウトラインについて」
- 132 ページの「重複するメンバー名について」
- 133 ページの「型付きメジャーについて」
- 133 ページの「テキスト・メジャーについて」
- 134 ページの「日付メジャーについて」
- 135 ページの「アウトラインの操作」
- 136 ページの「アウトラインのロックおよびロック解除」
- 137 ページの「アウトラインの作成」
- 137 ページの「アウトライン・プロパティの設定」
- 138 ページの「重複メンバー名のアウトラインの作成」
- 139 ページの「アウトラインの保存」
- 140 ページの「アウトラインの確認」
- 141 ページの「アウトラインのコピー」
- 141 ページの「アウトラインの印刷」
- 142 ページの「アウトラインの名前変更」
- 142 ページの「アウトラインの削除」
- 142 ページの「バッチ計算のためのアウトラインの最適化」

アウトラインについて

集約ストレージ・アウトラインの詳細は、73 ページの「集約ストレージ・アウトラインについて」を参照してください。

Essbase では、データベースの構造はデータベースのアウトラインによって定義されます。アウトラインには、次元、メンバー、別名、属性、集計、および演算関係が使用されます。データベースにおけるデータの保管および計算方法は、アウトラインの構造によって決まります。

Essbase では、次元とメンバーを使用してデータ階層を表します。アウトラインの各次元は、1つまたは複数のメンバーで構成されます。メンバーは子メンバー(複数可)を持つことが可能です。この階層によって、Essbase における各メンバーの値の集計方法が決まります。データベース・アウトラインのツリー構造内では、1つの集計は、ツリー内の1つの分岐に含まれているメンバーの集合になります。

データベースを作成すると、Essbase では空のアウトラインが自動的に作成されます。アウトライン・ファイルの名前にはデータベースと同じ名前が使用され、.ot1 という拡張子が付けられます(dbname.ot1)。データベースに対するデータベース・マネージャ(またはそれ以上)の権限があるユーザーは、そのデータベースのノードの下にある「アウトライン」ノードを使用して、Administration Services でアウトラインにアクセスできます。

アウトラインは、手動または[アウトライン・エディタ](#)を使用して作成および保守したり、[次元構築](#)を実行することでデータ・ソースから動的にアウトラインを構築することもできます。アウトラインを読取り専用ですばやく表示するには、[アウトライン・ビューア](#)を使用します。

Essbase のアウトラインの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [73 ページの「集約ストレージ・アウトラインについて」](#)
- 次元とメンバー(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [アウトラインの操作](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [209 ページの「データ・ロードと次元構築について」](#)

重複するメンバー名について

データベース・アウトライン内では、一定の制限のもとに、重複する(一意ではない)メンバー名および別名の使用を許可できます。たとえば、データベースではアウトライン内で、1つは State メンバー、もう1つは City メンバーの下にある、New York という2つのメンバーが必要な場合があります。アウトラインではこれらのメンバー名はいずれも New York と表示されます。修飾メンバー名は次のとおりです:

```
[State].[New York] [City].[New York]
```

重複メンバーの修飾メンバー名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで表示できます。スクリプトやパーティション定義などに重複メンバー名を挿入する場合は、修飾メンバー名が自動的に挿入されます。

次元名、世代名、およびレベル名は常に一意である必要があります。また、親メンバーの下の子も常に一意である必要があります。アウトラインでの重複メンバー名の制限の一覧は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

重複メンバー名のアウトライン内では、次元(および次元内の世代とレベル)に一意とタグ付けすることにより、特定のメンバーのセット内で名前が一意となるように指定できます。このタグ付けにより、重複メンバー名のアウトライン内でメンバー名の一意性をより細かく指定できます。

重複メンバー名の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

重複するメンバーのアウトラインの作成および使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』)

型付きメジャーについて

型付きメジャーは Essbase の分析能力を拡張します。メジャーは、数値のほかに、テキストや日付タイプの値にも関連付けられます。

メジャーが表示される次元内で、テキスト・メジャーには"テキスト"というタグが付けられます。テキスト・メジャーでは、セルの値にテキスト・ラベルを列挙したリストを1つ含まれます。これらのラベルは、テキスト・リスト・オブジェクトと呼ばれるマッピング・アーチファクトを使用して、アウトライン・レベルで定義します。

メジャーが表示される次元内で、日付メジャーには"日付"というタグが付けられます。日付メジャーでは、セルの値を特定のフォーマットの日付形式にできます。

次に示す一般ガイドラインが、テキスト・メジャーと日付メジャーの両方に適用されます:

- これらのメジャーは、既存のメジャー次元(会計など)に追加します。
- これらのメジャーは集約しないでください。テキストおよび日付メジャーには、デフォルトで、集約を行わないことを示す記号(Λ)が割り当てられます。
- クエリーは、データがロードされたレベルと同じレベルで行う必要があります。

関連情報

- [133 ページの「テキスト・メジャーについて」](#)
- [134 ページの「日付メジャーについて」](#)
- 型付きメジャーの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

テキスト・メジャーについて

テキスト・メジャーを使用すると、Essbase で数値データのほかにテキスト・ベースのコンテンツも分析できるようになります。テキスト形式のコンテンツの保管

と分析は、たとえば、ある製品が異なる 5 つの色で販売されている場合などで、セルの値を所定のリスト内のテキスト値のいずれかにする必要がある場合に役立ちます。このケースでは、色を、値が 5 色のいずれかとなる必要のあるテキスト・メジャーとします。

この色は、対応する数値 ID にマップされているテキスト文字列のセットです。これらのマッピングは、ユーザーが作成するデータベース・レベルのテキスト・リスト・オブジェクトに含まれます。

テキスト・メジャーを使用可能に設定して使用するには、次のワークフローを使用します。

- アウトラインのプロパティで、テキスト・メジャーを使用可能にします。
- テキスト・リスト・オブジェクトを作成してテキスト値を保管し、各テキスト値を整数にマップします。また、欠落と範囲外も整数にマップします。
- メジャーが表示される次元内で、テキスト・メジャーにするメンバーを作成します。たとえば、"Color" というメンバーを作成します。
- テキスト・メジャーのメンバー・プロパティで、タイプを"テキスト"として定義し、テキスト・リスト・オブジェクトに関連付けます。

関連情報

- [134 ページの「日付メジャーについて」](#)
- [133 ページの「型付きメジャーについて」](#)
- 型付きメジャーの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

日付メジャーについて

日付メジャーを使用すると、メンバーに日付タイプの値を含められます。メジャーが表示される次元内で日付を処理する能力は、時間次元を使用して示すことが困難なタイプの分析に役立つことがあります。たとえば、資産の減価償却を分析するアプリケーションで、一連の資本資産の取得日を追跡するとします。創立から 50 年が経過した企業などの場合は、取得日の範囲が実現可能な時間次元モデリングの範囲を超えて長期にわたってしまうことがあります。

さらに、日付メジャーでは、時間や分などの細かい単位で日付値を分析できます。

日付メジャーを使用可能に設定して使用するには、次のワークフローを使用します。

- アウトラインのプロパティで、日付メジャーを使用可能にします。
- メジャーが表示される次元内で、日付メジャーにするメンバーを作成します。
- 日付メジャーのメンバー・プロパティで、タイプを"日付"として定義し、目的の日付フォーマットを選択します。

関連情報

- [133 ページの「テキスト・メジャーについて」](#)
- [133 ページの「型付きメジャーについて」](#)
- 型付きメジャーの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

アウトラインの操作

アウトライン・エディタを使用してアウトラインを管理します。アウトライン、次元およびメンバーの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

また、ルール・ファイルを使用して、フラット・ファイルやリレーショナル・データベースなどのデータ・ソースからアウトラインを作成して管理することもできます。データ・ロードおよび次元構築の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

▶ アウトライン・エディタを使用してアウトラインを作成および管理するには:

- 1 データベースの作成後、**アウトライン・エディタでアウトラインを開きます。**
- 2 **既存のアウトラインをコピーするか、アウトライン・エディタを使用してアウトラインに入力し、次元およびメンバーを追加します。**
- 3 **アウトラインのプロパティを定義します**
 - 名前の大文字/小文字を区別するかどうかを設定します。
 - アクティブな別名テーブルを設定し、別名テーブルを管理します。
 - 必要に応じて、属性次元のメンバーのフォーマットを定義します。
- 4 **次の次元やメンバーのプロパティと特性を定義します:**
 - **各次元のデータ・ストレージを密または疎として定義**(ブロック・ストレージ・アウトラインのみ)。
 - **メンバー集計プロパティ**
 - **メンバー・ストレージ・プロパティ**(ブロック・ストレージ・アウトラインのみ)。
- 5 **オプション: 次の次元やメンバーのプロパティと特性を定義します:**
 - **時間次元のタグ付け**(ブロック・ストレージ・アウトラインのみ)。
 - **会計次元のタグ付け。**
 - **動的時系列メンバーの使用可能化**(ブロック・ストレージ・アウトラインのみ)。
 - **世代名およびレベル名の割当て**
 - **差異レポート・プロパティの設定**(ブロック・ストレージ・アウトラインのみ)。
 - **2パス計算プロパティの設定**(ブロック・ストレージ・アウトラインのみ)。
 - **特定のメンバーに対する式の作成**(集約ストレージ・アウトラインでは異なる)。
 - **他の次元およびメンバー・プロパティの設定**
 - **属性次元の定義、基本次元への属性次元の関連付けおよび特定メンバーへの属性の関連付け。**
- 6 必要に応じて、**通貨換算のためのアウトラインを準備します**(ブロック・ストレージ・アウトラインのみ)。

- 7 **オプション**: 別名テーブルの作成および別名を定義します。
- 8 パフォーマンスを最大化するため、**メンバーをソート**します。
- 9 **アウトラインが正しいかどうかを確認**します。
- 10 **アウトラインを保存**します。
- 11 **アウトラインを印刷**します。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- ケース・スタディ: 単一サーバー、多次元データベースのデザイン(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [160 ページの「アウトラインを開いて編集する」](#)
- [137 ページの「アウトライン・プロパティの設定」](#)

アウトラインのロックおよびロック解除

編集モードで開くと、アウトラインは常にロックされます。「閉じる」ボタンを使用してアウトラインを閉じると、「Essbase」ではロックが解除されます。場合によっては、ロックが解除されずにアウトラインが閉じられることもあります。たとえば、アウトラインを開いているユーザーがタイムアウトによってサーバーから切断された場合です。

アウトラインをロックすると、Essbase では他のユーザーがそのアウトラインに対して上書き保存、名前の変更、削除、編集、最適化を実行できなくなります。ロックされているアウトラインを編集しようとする、アウトライン・ビューアでアウトラインを表示するオプションが表示されます。

管理者権限を持っている場合、ロックされているアウトラインのロックを解除できます。ロックされているアウトラインを強制的にロック解除する前に、そのアウトラインを操作しているユーザーが他にいないことを確認してください。

注: Essbase は、他のオブジェクトとは異なるプロセスでアウトラインのロックやロック解除を行います。「**オプション**」ダイアログ・ボックスの「**Essbase**」タブでロック・オプションを指定しても、アウトラインのロックには影響しません。他のオブジェクトのロックに関する詳細は、[111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)を参照してください。

アウトラインをロックするには、[編集モードでアウトラインを開きます](#)。

▶ アウトラインのロックを解除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして、「編集」「>」「ロック済オブジェクト」を選択します。
- 3 「ロック済オブジェクト」・ウィンドウで、ロックを解除するアウトラインを含む行を選択します。

- 4 アウトラインの「ロックしているユーザー」列に表示されているユーザーによってアウトラインが開かれていないことを確認します。
- 5 「ロック解除」をクリックします。

関連情報

- [160 ページの「アウトラインを開いて編集する」](#)
- [629 ページの「ロック済オブジェクト・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `alter object(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `unlockobject(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アウトラインの作成

データベースを作成すると、Essbase によってそのデータベース用の空のアウトラインが自動的に作成されます。アウトラインにはデータベースと同じ名前が付けられ(`dbname.ot1`)、データベース・ディレクトリ(`ARBORPATH\app\appname\dbname`)に保管されます。

▶ アウトラインを作成するには:

- 1 [新しいデータベースを作成](#)します。
- 2 [アウトラインを開きます](#)。
- 3 次元、メンバー、およびプロパティを定義します。[アウトラインの操作](#)を参照してください。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [135 ページの「アウトラインの操作」](#)

アウトライン・プロパティの設定

アウトラインには、Essbase に次元およびメンバーの処理方法を指示するプロパティが含まれます。アウトライン・エディタを使用して、アウトラインのプロパティを表示および編集できます。アウトライン・プロパティの詳細、およびアウトラインのドラフト作成については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

アウトライン・タイプなどの一部のアウトライン・プロパティは、アウトライン・エディタで変更できません。

注：一部の[アウトライン・プロパティ](#)は、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

▶ アウトラインのプロパティを表示するには:

- 1 **アウトラインを編集モードで開き、「プロパティ」タブを選択します。**
- 2 プロパティ・ツリーの各ノードを展開して、次の**アウトライン・プロパティ**を表示または設定します:
 - メンバー名の大文字/小文字の区別
 - メンバー名における**一意性**の要件
 - **別名テーブル**の処理
 - **属性次元**およびメンバーの名前付け
 - **疎密データ・ストレージ**の設定(ブロック・ストレージ・アウトラインの次元のみ)

関連情報

- 131 ページの「アウトラインについて」
- 149 ページの「アウトライン・エディタについて」
- 664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ」

重複メンバー名のアウトラインの作成

デフォルトでは、アウトラインで、メンバー名を一意にする必要があります。既存の一意のアウトラインで**重複メンバー名**を許可する場合は、重複メンバーを許可するようにアウトラインを変換できます。アウトラインを一度変換すると、一意の状態に戻すことはできません。

デフォルトでは、重複メンバー名のアウトライン内のすべての次元で重複メンバー名が許可されます。重複メンバー名のアウトライン内で1つまたは複数の次元に一意とのタグを付けて、その特定の次元内でメンバー名を一意とするように指定できます。

▶ 重複メンバー名のアウトラインを作成するには:

- 1 **編集モードでアウトラインを開きます。**
- 2 「プロパティ」タブを選択します。
- 3 アウトラインに加え、まだ保存していない変更を保存します。
- 4 「重複を許可されたメンバー名」ノードの横のドロップダウン・リストから「TRUE」を選択します。
- 5 **アウトラインを保存**してから、他のアウトラインの変更に進みます。

注: 設定を「TRUE」に変更してアウトラインを保存すると、再びアウトラインを一意のメンバーのアウトラインに戻せません。

- 6 次元内のメンバー名を一意にするよう指定するには、**次元に一意のタグを付けます。**

重複メンバー名を許可するようにタグ付けした次元では、重複メンバー名を作成できるようになります。

- 7 重複メンバー名が許可された次元において、特定の世代やレベルでメンバー名が一意となるようにする場合は、**世代またはレベルを一意に指定します**。

関連情報

- 132 ページの「[重複するメンバー名について](#)」
- 169 ページの「[次元に対する一意のタグ付け](#)」
- 103 ページの「[データベースの作成](#)」

アウトラインの保存

アウトラインを保存すると、Essbase 管理サーバーによって自動的にアウトラインの確認が行われます。アウトラインの確認は、保存する前に行うこともできます。詳細は、[140 ページの「アウトラインの確認」](#)を参照してください。

データベースにデータが含まれている場合にアウトラインに加えた変更を保存すると、Essbase によってデータベースが再構築される場合があります。ブロック・ストレージの再構築の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。集約ストレージ・データベースの再構築の管理については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

アウトライン・ファイルは、Essbase サーバー、クライアント・コンピュータ、またはネットワークに保存できます。どの場所に保存しても、Essbase のエンコード方式が使用されます。

▶ アウトラインを Essbase サーバーに保存するには:

- 1 必要に応じて、アウトラインを**編集**および**確認**します。
- 2 「ファイル」、「保存」と選択します。

データベースの再構築を引き起こす変更をアウトラインに加えると、ダイアログ・ボックスが表示され、再構築のオプションが提供されます。ブロック・ストレージ・データベースの場合、「[データベースの再構築のオプション](#)」**ダイアログ・ボックス**を使用すると再構築時のデータ値の処理方法を定義できます。ブロック・ストレージの再構築の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

集約ストレージ・データベースでは、再構築の前にデータを消去するように求められる場合があります。データを消去せずに再構築を実行できる場合は、「[集約ストレージ・データベースの再構築](#)」**ダイアログ・ボックス**で再構築前にデータを消去するかどうかを選択できます。集約ストレージ・データベースの再構築の管理については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

- 3 確認のプロンプトやダイアログ・ボックスが表示された場合は、適切に応答します。

▶ アウトライン・ファイルをローカルまたはネットワークに保存するには:

- 1 必要に応じて、アウトラインを**編集**および**確認**します。
- 2 「ファイル」>「名前を付けて保存」を選択します。

- 3 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、「ファイル・システム」タブを選択します。
- 4 アウトラインを保存するファイル・システム内のディレクトリに移動します。
- 5 「ファイル名」テキスト・ボックスに、アウトラインの名前を入力します。
アウトラインには、デフォルトで.ot1 の拡張子が付けられます。
- 6 「OK」をクリックします。Essbase では指定した場所にアウトラインが保存されません。

関連情報

- [140 ページの「アウトラインの確認」](#)
- [681 ページの「データベースの再構築のオプション」ダイアログ・ボックス](#)
- [484 ページの「集約ストレージ・データベースの再構築」ダイアログ・ボックス](#)

アウトラインの確認

アウトラインを保存すると、Essbase によってアウトラインにエラーがないかどうかを確認されます。アウトラインが正確であることは、保存する前にも確認できます。Essbase では、アウトラインを確認する際に一連の確認チェックが行われます。確認チェックの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

アウトラインの確認プロセスでは、アウトラインのタイプ([集約ストレージ](#)または[ブロック・ストレージ](#))が考慮されて、そのタイプのルールに従ってアウトラインが確認されます。

アウトラインの確認が行われ、アウトラインにエラーがなければ、Essbase でメンバー式の確認が行われます。式のエラーの修正方法については、[192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#)を参照してください。

注： Essbase サーバーに接続せずにアウトラインを確認した場合は、アウトライン内のメンバー式の確認は行われません。

▶ アウトラインを確認する手順は、次のとおりです：

- 1 [アウトラインを開き](#)、必要に応じて変更します。
- 2 「[確認](#)」をクリックします。
 - アウトラインにエラーがない場合は、アウトライン・エディタによってメッセージが表示されます。
 - アウトラインが無効の場合、「[確認](#)」タブが表示されます。このタブには、アウトラインのエラーが一覧表示されます。エラーを修正し、再度アウトラインを確認します。

アウトラインにエラーがない場合は、メンバー式の確認が行われ、Essbase で式のエラーに関する警告が表示されます。式にエラーがあってもアウト

ラインを保存できますが、式を修正してからアウトラインを使用するように注意してください。

3 アウトラインにエラーがなければ、[アウトラインを保存します](#)。

関連情報

- アウトラインの確認(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [666 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「確認」タブ](#)

アウトラインのコピー

あるデータベースから別のデータベースにアウトラインをコピーするには、新しいデータベースへの「名前を付けて保存」を行います。アウトラインは、ファイル・システムのディレクトリまたは既存のデータベース名の Essbase の場所にコピーできます。

ブロック・ストレージ・データベースのアウトラインを集約ストレージ・データベースにコピーしたり、その逆を行ったりすることはできません。

注意 ファイル・システムを使用してアウトライン・ファイルを手動でコピーしないでください。特に、ブロック・ストレージと集約ストレージのデータベース間で、このような操作を行わないでください。

- ▶ あるデータベースから別のデータベースに完全なアウトラインをコピーするには:
 - 1 [アウトラインを開きます](#)。
 - 2 「ファイル」>「名前を付けて保存」を選択します。
 - 3 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、アウトラインを保存するファイル・システムの場所または Essbase の場所を指定します。
 - 4 既存のファイルの置換を確認するメッセージの表示に対して、「はい」を選択します。

関連情報

[682 ページの「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アウトラインの印刷

アウトライン・エディタでは、「アウトライン」、「プロパティ」および「変更」タブに表示される情報などのアウトライン情報を印刷できます。

展開されたアウトライン全体を印刷すれば、ツリーの下位メンバーを確認できます。アウトラインの一部の次元またはメンバーのみが展開されている場合は、縮

小さく集計されたセクションを、アウトライン・エディタに現在表示されているとおりに印刷できます。

▶ アウトラインとそのプロパティを印刷するには:

- 1 [アウトライン・エディタ](#)または[アウトライン・ビューア](#)でアウトラインを開きます。
- 2 **オプション:** アウトラインを展開し、印刷に含める子メンバーを表示します。
- 3 **オプション:** 「ファイル」>「ページ設定」を選択し、ページ・レイアウト・プロパティを設定します。
- 4 **オプション:** 「ファイル」>「印刷プレビュー」を選択し、印刷するアウトラインをプレビューします。
- 5 「ファイル」>「印刷」を選択します。
- 6 「[アウトラインの印刷オプション](#)」ダイアログ・ボックスで、アウトライン印刷オプションを選択します。
- 7 「印刷」ダイアログ・ボックスで、印刷オプションを選択します。
- 8 「OK」をクリックします。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [144 ページの「アウトラインの表示」](#)
- [194 ページの「メンバー式の印刷」](#)

アウトラインの名前変更

アウトラインの名前は常にデータベースと同じです。アウトラインの名前を変更するには、データベースの名前を変更する必要があります。[109 ページの「データベース名の変更」](#)を参照してください。

アウトラインの削除

アウトラインはデータベースの必須の要素です。アウトラインを削除するには、データベースを削除する必要があります。[110 ページの「データベースの削除」](#)を参照してください。

既存のアウトラインから次元およびメンバーを削除することはできます。[177 ページの「次元およびメンバーの削除」](#)を参照してください。

バッチ計算のためのアウトラインの最適化

アウトラインでの次元の配置、および次元やメンバーのストレージ・プロパティは、パフォーマンス(バッチ計算の実行速度やデータの取得時間)に影響を与えます。

注： この機能は、ブロック・ストレージ・アウトラインにのみ適用されます。

ブロック・ストレージ・データベース・アウトラインの設計、開発、調整を行う際には、「アウトラインの最適化」を使用して、標準的な設計原則をアウトラインに適用し、バッチ計算のパフォーマンスを最適化できます。ただし、実際の配置環境には、計算スクリプト、エンド・ユーザーの作業負荷、ハードウェア環境などの固有の要因があるので、この機能を使用して標準を適用しても、アウトラインが最適化されない場合があります。

アウトラインの設計およびパフォーマンスに関する問題の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の「計算の最適化」を参照してください。

▶ 計算のパフォーマンスを向上させるためにアウトラインを最適化するには:

- 1 **データベースをバックアップします。**
- 2 アウトラインがアウトライン・エディタで開かれており、保存されていない編集内容がある場合は、アウトラインを保存します。
- 3 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 4 「アウトライン」ノードを選択し、右クリックして「最適化」を選択します。

注意 このアクションは元に戻せません。

- 5 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。
- 6 アウトラインが開いている場合は、いったん閉じてから再度開いて、更新されたアウトラインを表示します。

変更されたメンバー数を示すメッセージが Essbase 管理サーバーによって表示されます。

関連情報

パフォーマンスを最適化するためのアウトラインのデザイン(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

アウトライン・ビューアの使用

ここには次のトピックがあります:

- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- [144 ページの「アウトラインの表示」](#)
- [145 ページの「アウトラインの展開および縮小」](#)
- [146 ページの「次元およびメンバーのプロパティの表示」](#)
- [147 ページの「式の表示」](#)
- [148 ページの「アウトライン・ビューアでのリレーショナルに保管されるメンバーの表示」](#)

アウトライン・ビューアについて

アウトライン・ビューアは、アウトラインとそのプロパティをすばやく表示するための読取り専用ビューです。アウトライン・ビューアでは、表示する必要が生じたときにしかアウトライン・メンバーがメモリーにロードされないため、動作が高速です。

アウトライン・ビューアをカスタマイズすることにより、必要なアウトライン情報のみを表示できます。設定した値は、アウトライン・ビューア・ウィンドウとアウトライン・エディタ・ウィンドウの両方に適用されます。

アウトライン・エディタを使用して、アウトラインを表示および変更します。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [144 ページの「アウトラインの表示」](#)
- [667 ページの「アウトライン・ビューア・ウィンドウ」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)

アウトラインの表示

アウトラインを表示する場合は、アウトライン・ビューアを使用します。アウトライン・ビューアでは、表示する必要が生じたときにしかアウトライン・メンバーがメモリーに読み込まれないため、リソースを節約できます。必要に応じて、表示される情報や情報の種類を表す色をカスタマイズできます。

アウトラインは、アウトライン・エディタでも表示できます。ただし、アウトライン・エディタの場合はアウトライン全体が即座にメモリーにロードされるため、アウトラインが表示されるまでに少し時間がかかることがあります。アウトライン・エディタでは、アウトラインを変更することもできます。

アウトラインとそのプロパティを表示および変更する場合は、アウトライン・エディタを使用します。

▶ アウトラインの変更は行わずに表示のみを行う場合は、アウトライン・ビューアを使用します:

1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、アウトラインを表示するデータベースを探します。

2 「アウトライン」ノードを右クリックし、「表示」を選択します。

アウトライン・ビューアに、アウトライン内の次元が表示されます。アウトラインの別の部分を表示するには、次の操作を行います:

- アウトラインを展開および縮小するには、メニュー・アイテムを使用します。
- 次元を展開して次元のメンバーを表示するには、次元名の横にあるプラス・ボックス(または同様の記号)をクリックするか、次元名をダブルクリックします。
- 次元またはメンバーの下位レベルを展開するには、適切なプラス・ボックスまたはメンバー名をクリックします。

- アウトラインのセクションを縮小するには、そのセクションの最上位のメンバーのマイナス・ボックス(または同様の記号)をクリックします。
- アウトラインのプロパティを表示するには、「**プロパティ**」タブをクリックします。
- アウトライン・ビューア・ウィンドウの別のペインに次元またはメンバーのプロパティを表示するには、次元またはメンバーを右クリックし、「**メンバーのプロパティの表示**」を選択します。

必要に応じてプロパティ・ペインが開き、プロパティが表示されます。プロパティ・ペインの使用方法については、[146 ページの「次元およびメンバーのプロパティの表示」](#)を参照してください。

注： 他のユーザーがアウトライン・エディタ、アウトラインの最適化、または次元構築を使用してアウトラインを変更しても、その変更はアウトライン・ビューアには検出されません。バックグラウンドで行われた変更内容を表示させるには、アウトラインをいったん閉じて再度開きます。

関連情報

- [141 ページの「アウトラインの印刷」](#)
- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [146 ページの「次元およびメンバーのプロパティの表示」](#)
- [147 ページの「式の表示」](#)

アウトラインの展開および縮小

アウトラインは、このトピックで説明する方法を使用して展開および縮小できます。このトピックで説明している手順は、アウトライン・エディタとアウトライン・ビューアの両方に適用されます。

複数のメンバーを選択して、同時に展開または縮小することはできません。

リレーショナルに保管されているメンバーを含むアウトラインの展開の詳細は、[リレーショナルに保管されるメンバーの表示](#)を参照してください。

▶ アウトラインを展開または縮小するには:

- 1 [アウトライン・エディタ](#)または[アウトライン・ビューア](#)でアウトラインを開きます。
- 2 アウトライン全体をすべての子孫まで展開するには、「アウトライン」>「アウトライン全体の展開」を選択します。
- 3 アウトラインを特定のメンバーの子まで展開するには、メンバーを選択してから「アウトライン」>「子まで展開」を選択します。
- 4 アウトラインを特定のメンバーのすべての子孫まで展開するには、メンバーを選択してから「アウトライン」>「子孫まで展開」を選択します。

- 5 アウトラインを特定のメンバーの祖先まで縮小するには、メンバーを選択してから「アウトライン」>「祖先まで縮小」を選択します。

関連情報

- [155 ページの「アウトライン内の次元およびメンバーの操作」](#)
- [176 ページの「メンバーのソート」](#)

次元およびメンバーのプロパティの表示

メンバー・プロパティの詳細を表示するには、アウトライン・ビューアまたはアウトライン・エディタを使用します。アウトライン・エディタを使用するとプロパティの変更を実行できますが、アウトライン・ビューアを使用する場合よりも Essbase 管理サーバーのリソースが多く必要になるため、全体のパフォーマンスに影響を与えることがあります。

- ▶ アウトライン・エディタを使用して次元やメンバーのプロパティを表示するには:
 - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 「アウトライン」ノードを右クリックし、「表示」を選択します。[アウトライン・ビューア](#)に選択したアウトラインが表示されます。
 - 3 アウトライン・ビューアの「[アウトライン](#)」タブで次元またはメンバーを右クリックし、「[メンバーのプロパティの表示](#)」を選択します。

表示ペインが追加され、アウトラインが左側のペインに、選択したアイテムのプロパティが右側のペインに表示されます。右側のペインがすでに開いている場合は、直前に選択されたアイテムのプロパティが表示されます。

選択したメンバーが式を持っている場合は、プロパティ・ペインのすぐ下の 3 番目のペインにその式が表示されます。[147 ページの「式の表示」](#)を参照してください。

- ▶ アウトライン・エディタを使用して次元やメンバーのプロパティを表示するには:
 - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 「アウトライン」ノードを右クリックし、「編集」を選択します。[アウトライン・エディタ](#)に選択したアウトラインが表示されます。
 - 3 1つまたは複数の次元やメンバーを選択し、右クリックします。
 - 4 「[メンバー・プロパティの編集](#)」を選択します。

「[メンバーのプロパティ](#)」ダイアログ・ボックスが表示されます。それぞれのタブに情報が表示されます。タブの詳細は、「[メンバーのプロパティ](#)」ダイアログ・ボックスを参照してください。

関連情報

- [アウトライン・プロパティの表示](#)
- [アウトライン・ビューアのカスタマイズ](#)
- 次元およびメンバーのプロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [147 ページの「式の表示」](#)

関連コマンド

getmbrinfo(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

式の表示

アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアのアウトライン・ペインでは、アウトラインの表示に関する [コンソール・オプション](#) の選択に基づいて、アウトライン・ツリーの関連メンバーの横に、可能な範囲で式が表示されます。

アウトライン・エディタですでにアウトラインが開いている場合は、式エディタを使用して大きなメンバー式を表示できます。[192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#) を参照してください。

アウトライン・エディタでアウトラインが開いていない場合は、[アウトライン・ビューア](#) の式の表示機能を使用して大きなメンバー式を表示します。

アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアのアウトライン・ツリーに式を表示するには、「式」 [コンソール・オプション](#) を選択して式を表示します。

アウトライン・エディタですでにアウトラインが開いている場合は、式エディタを使用して大きなメンバー式を表示できます。[192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#) を参照してください。

▶ アウトライン・ビューアを使用して大きな式を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 「アウトライン」ノードを右クリックし、「表示」を選択します。
アウトライン・ビューアの「アウトライン」タブに、選択したアウトラインが表示されます。
- 3 メンバー式を右クリックして「メンバーのプロパティの表示」を選択します。
選択したメンバーが式を持っている場合は、次の3つのペインに「アウトライン」タブが分割されます:
 - アウトライン・ツリーを表示する左側のペイン
 - メンバー・プロパティを表示する右上のペイン
 - メンバー式を表示する右下のペイン
- 4 表示ペインの領域を変更するには、枠線の上にカーソルを置いて、希望するサイズになるまでドラッグします。
- 5 式が大きすぎて右下のペイン内にすべて表示されない場合は、スクロールして表示します。

メンバー式を表示する「式」ダイアログ・ボックスがアウトライン・ビューアに表示されます。式の隠れている部分を表示するには、次の操作を行います:

- スクロール・バーをドラッグします。
- ダイアログ・ボックス内の、カーソルを挿入する場所をダブルクリックします。キーボードを使用してこのカーソルを上下に移動することで、ダイアログ・ボックス内のテキストを表示できます。

6 「閉じる」をクリックして、「式」ダイアログ・ボックスを閉じます。

関連情報

- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#)

アウトライン・ビューアでのリレーショナルに保管されるメンバーの表示

Oracle Essbase Integration Services により拡張リレーショナル・アクセスまたはハイブリッド分析が使用可能なアウトラインでは、リレーショナル・データベースやデータ・ウェアハウスに保管されたメンバーを管理サービス・コンソールのアウトライン・ビューアで表示できます。リレーショナルに保管されたメンバーは、アウトライン・エディタには表示されません。

注: 拡張リレーショナル・アクセスが使用可能なアウトラインを編集して変更内容を保存しないでください。

拡張リレーショナル・アクセス機能は、集約ストレージ・アウトラインのみに適用されます。

アウトライン・ビューアでは、リレーショナルに保管されたメンバーは通常メンバーと同様に表示され、どのメンバーがリレーショナル・ソースに保管されているのか区別されません。リレーショナルに保管されたメンバーを表示することはできますが、これらのメンバーに対してはアクションを実行できません。たとえば、リレーショナルに保管されたメンバーにはメンバー・プロパティがありません。

注: アウトライン・ビューアで各メンバーの[子の数を表示する](#)ように選択している場合、その数にはリレーショナルに保管されたメンバーは含まれません。

▶ リレーショナルに保管されたメンバーを表示するには:

1 **表示モードでアウトラインを開きます。**

「アウトライン」タブが表示されます。

2 **メンバーを展開します。**

アウトラインの一部を展開するとき、次の点に留意してください:

- リレーショナルに保管された子を含むメンバーで「子まで展開」を選択すると、予期されたように子が表示されます。
- リレーショナルに保管された子を含むメンバーで「子孫まで展開」を選択すると、選択したメンバーの子のみが表示され、すべての子孫は表示されません。
- アウトライン展開により、リレーショナルに保管された子を含んでいるメンバーの子のみ(すべての子孫ではない)が表示されます。
- リレーショナルに保管された子を含まないアウトラインの一部を展開すると、[すべてのアウトラインについてドキュメントで説明](#)されているように表示されます。

関連情報

- [170 ページの「ハイブリッド分析の使用可能化または無効化」](#)
- [145 ページの「アウトラインの展開および縮小」](#)
- [リレーショナル・データの取得\(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内\)](#)

アウトライン・エディタの使用

ここには次のトピックがあります:

- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [151 ページの「アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアのカスタマイズ」](#)
- [152 ページの「アウトライン・エディタの複数のペインへの分割」](#)
- [152 ページの「アウトライン・エディタ・ツールバーの使用」](#)
- [153 ページの「エディタでのテキストの検索」](#)
- [153 ページの「アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換」](#)
- [155 ページの「アウトライン内の次元およびメンバーの操作」](#)
- [157 ページの「クエリー・ヒント」](#)
- [158 ページの「ユーザー定義のビュー選択プロパティの設定」](#)

アウトライン・エディタについて

アウトライン・エディタには、アウトライン次元およびメンバーのグラフィカル・ビューがあるため、Essbase データベースを定義できます。アウトライン・エディタは、アウトラインのコンテンツ、構造、プロパティを表示および変更するための様々なタイプのポータルが用意されたタブ付きの[ウィンドウ](#)です。複数のアウトラインを開いた場合は、それぞれ別のアウトライン・エディタ・ウィンドウに表示されます。

「[アウトライン](#)」タブには、アウトラインの次元とメンバーが階層ツリー構造で表示されるため、それぞれの関係を確認しながらメンバーを操作できます。また、アウトラインの次元やメンバーを操作しやすくするために、[表示される情報をカスタマイズ](#)し、[使用する色を選択](#)できます。アウトライン・エディタでは、様々な方法を使用してアウトラインへのアクセスやアウトラインの変更を行うことができます:

- 右クリックによるショートカット・メニュー。ツリー上のアイテムを右クリックすると、実行可能なアクションが一覧表示されたショートカット・メニューが開きます。この方法を使用すると、次元やメンバーの追加および削除、メンバーのソート、メンバー情報へのアクセス、複数ペインへのビューの分割などのタスクを実行できます。 [詳細](#)
- ドラッグ・アンド・ドロップ。アイテムを選択して移動します。 [詳細](#)
- 管理サービス・コンソールのメニュー・バーのメニュー。アウトラインを編集すると、メニュー・バーに「アウトライン」メニューが追加されます。このメニューは、状況依存型ではありません。このメニュー・アイテムには、アウトライン・エディタからいつでもアクセスできます。実行できるアクションは次のとおりです:
 - [アウトラインが正しいかどうかの確認](#)
 - [世代およびレベルの定義](#)
 - [動的時系列](#)メンバーの定義
 - [通貨データベースの生成](#)
 - 別名テーブル・データの[インポート](#)または[エクスポート](#)
 - ルール・ファイルを使用した[アウトラインの動的な更新](#)
 - アウトラインの[展開](#)および[縮小](#)
- アウトライン・エディタ・ツールバー。「[アウトライン・エディタ](#)」[ツールバー・ボタン](#)をクリックすると、その機能を簡単に実行できます。
- キーボード・ショートカット。[キー](#)または[キーの組合せ](#)を押して、最も一般的なアウトライン・タスクを開始します。

「[アウトライン](#)」タブを複数のペインに分割すると、アウトラインの様々な部分を同時に表示できます。

アウトラインの「[プロパティ](#)」タブには、アウトライン・プロパティもツリー・フォーマットで表示されます。プロパティ情報を表示して変更する操作は、エンタープライズ・ビューでの操作と同じようにして行えます。関連する情報やプロパティはノードにまとめられており、開いたり閉じたりすることが可能です。

- 下線が引かれている値をクリックすると、テキスト・ボックスまたはドロップダウン・リスト・ボックスが開いて、値を変更できます。下線が付いていない値は、編集できません。
- ツリー上のアイテムを右クリックすると、実行可能なアクションが一覧表示されたショートカット・メニューが開きます。

アウトライン・エディタのその他のタブには、[確認要求](#)または[検索操作](#)に対する応答のリストや、アウトラインに対して行われた[変更](#)のリストなどの情報リストが表示されます。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [662 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ」](#)
- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- [アウトライン・ビューアおよびアウトライン・エディタのカスタマイズ](#)
- [135 ページの「アウトラインの操作」](#)
- [160 ページの「アウトラインを開いて編集する」](#)

アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアのカスタマイズ

アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアでは、データベースのアウトラインがナビゲーション・ツリー形式で表示されます。アウトラインに関する情報や、アウトラインに含まれている次元やメンバーに関する情報を表示できます。

表示するアウトライン情報(式、別名、子の数など)を選択したり、各種の情報の表示色を指定したりできます。

また、メンバーの削除などの特定のアクションをアウトラインで実行するたびにプロンプトを表示するかどうかを指定することもできます。

▶ アウトライン内の各次元およびメンバーに関して表示する情報を選択するには:

- 1 「ツール」 > 「コンソール・オプション」を選択します。
- 2 「アウトライン・ツール」タブを選択します。
- 3 アウトライン・ツリーに表示するアイテムを選択します。
- 4 アイテムの表示色を変更する場合は、そのアイテムの右端の列のセルをクリックして、ドロップダウン・リストから希望する色を選択します。
- 5 確認オプションを指定します。
- 6 「適用」をクリックします。

これらの変更は、次回アウトラインを開いた時点から有効になります。

- 7 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

関連情報

- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- 「オプション」ダイアログ - 「アウトライン・ツール」タブ

アウトライン・エディタの複数のペインへの分割

「アウトライン」タブを複数のビューに分割して、それぞれのビュー(ペイン)で個別に作業を実行できます。この機能は、非常に大きなアウトラインでメンバーの表示や操作を行う場合に便利です。タブは、垂直方向および水平方向の2つ以上のビューに分割できます。

複数ビュー・プロセスを使用可能にするには、[アウトラインを編集モードで開きます](#)。「アウトライン」タブが表示されます。

- ▶ アウトライン・ツリーのビューを左右の2つのペインに分割するには:
 - 1 分割するペイン内を右クリックします。
 - 2 ショートカット・メニューから「ビューの水平方向の分割」を選択します。

- ▶ アウトライン・ツリーのビューを上下の2つのペインに分割するには:
 - 1 分割するペイン内を右クリックします。
 - 2 ショートカット・メニューから「ビューの垂直方向の分割」を選択します。

- ▶ 「アウトライン」タブを単一のビューに戻す手順は、次のとおりです:
 - 1 単一のビューとして残すペイン内を右クリックします。
 - 2 ショートカット・メニューから「他のビューを閉じる」を選択します。

- ▶ 特定のペインを閉じる手順は、次のとおりです:
 - 1 閉じるビューのペイン内を右クリックします。
 - 2 ショートカット・メニューから「ビューを閉じる」を選択します。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [662 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ」](#)

アウトライン・エディタ・ツールバーの使用

アウトライン・エディタ・ウィンドウの一番上にはツールバーが表示されます。これを使用すると、アウトライン・エディタでよく行われる操作にすばやくアクセスできます。アウトライン・エディタのボタンの上にカーソルを重ねると、そのボタンの説明が表示されます。アウトラインで選択されているものに応じて、使用不可状態になるボタンもあります。たとえば、会計次元に特有のボタンは、会計次元が選択されている場合にのみ表示されます。管理サービス・コンソールのウィンドウのサイズを最大化しないと、すべてのボタンが表示されないことがあります。

ボタンの機能を実行するには、そのボタンをクリックします。ボタンを選択すると、押し下げたような状態で表示されます。

注：一部のツールバー・アイコンは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

エディタでのテキストの検索

式、計算スクリプト、レポート・スクリプト、および MaxL スクリプト内のテキストを、検索および置換できます。また、レポート・ビューアで表示しているレポート内のテキストも検索できます。

- ▶ 式、計算スクリプト、レポート・スクリプト、MaxL スクリプト、およびレポート・ビューア内のテキストを検索するには:
 - 1 スクリプト領域またはレポート・ビューアを右クリックして、「検索」を選択します。
 - 2 「検索」ダイアログ・ボックスで、検索する**テキストを入力**します。
 - 3 **オプション:** 大文字と小文字を区別して検索する場合は、「大文字/小文字の一致」を選択します。
 - 4 「検索」をクリックします。

- ▶ エディタでテキストを検索して置換する手順は、次のとおりです:
 - 1 スクリプト内で右クリックして、「置換」を選択します。
 - 2 「検索」ダイアログ・ボックスで、置換する**テキストを入力**します。
 - 3 「置換後の文字列」に、置換後のテキストを入力します。
 - 4 **オプション:** 大文字と小文字を区別して置換する場合は、「大文字/小文字の一致」を選択します。
 - 5 「置換」または「すべて置換」をクリックします。

関連情報

- [618 ページの「「検索」ダイアログ・ボックス」](#)
- [678 ページの「「置換」ダイアログ・ボックス」](#)
- [153 ページの「アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換」](#)

アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換

アウトライン内の次元名、メンバー名、別名、式、および UDA には文字テキストが含まれています。アウトライン・エディタにはテキストを検索および置換する機能が用意されており、指定したテキスト文字列の検索および置換を実行できます。アウトライン・ビューアでは、テキストの置換は行えません。

このトピックでは、テキストの検索手順と置換手順を別々に説明します。

検索でのワイルドカードについて:

- アウトライン・エディタでは、ワイルドカードは使用できません。

- アスタリスク(*)を使用すると、それより前のテキストを含むすべてのエントリを検索できます;たとえば、100*は、100、100-10、100-20、100-30 を戻します。

*の前にある文字は、テキスト文字列全体の前半の文字とみなされます;たとえば、100*によって 21000000 が戻されることはありません。

*は、検索用語の先頭には使用できません。

注: 計算スクリプトまたはレポート・スクリプトの編集時や、式エディタの使用時にテキストを検索および置換する方法については、[153 ページの「エディタでのテキストの検索」](#)を参照してください。

▶ アウトライン・エディタまたはアウトライン・ビューアの「アウトライン」タブでメンバーまたはテキストを検索するには:

- 1 表示モードまたは編集モードで**アウトラインを開きます**。
- 2 「アウトライン」タブ内を右クリックし、「メンバーの検索」を選択します。
- 3 「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスで、**検索するテキスト**および検索基準を指定します。
- 4 「OK」をクリックします。

検索が終了すると、メッセージ・ボックスが表示されます。このボックスには、検索の成功率が示されます。

- 5 「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを閉じます。
「結果の検索」タブが表示され、検索条件に一致したメンバーが一覧表示されます。
- 6 **オプション:** アイテムを右クリックして希望するアクションを選択し、検索一覧のメンバーに対して追加のアクションを行います。

▶ アウトライン・エディタの「アウトライン」タブでメンバーまたはテキストを検索して置換するには:

- 1 編集モードで**アウトラインを開きます**。
- 2 「アウトライン」タブ内を右クリックし、「置換」を選択します。
- 3 「**アウトライン内の置換**」ダイアログ・ボックスで、検索するテキスト、置換後のテキストおよび検索条件を指定します。
- 4 「次を検索」をクリックして、検索条件に一致する箇所を次々に検索していきます。必要に応じて「置換」をクリックすれば、その一致箇所が置換されます。
- 5 検索条件に一致するすべての箇所を置換するには、「すべて置換」をクリックします。

置換操作に関する情報が、メッセージ・ボックスに表示されます。置換されたメンバーが、「結果の検索」タブに表示されます。

- 6 **オプション:** アイテムを右クリックして希望するアクションを選択し、検索一覧のメンバーに対して追加のアクションを行います。

関連情報

- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- [619 ページの「「メンバーの検索」ダイアログ・ボックス」](#)
- [678 ページの「「アウトライン内の置換」ダイアログ・ボックス」](#)
- [621 ページの「「結果の検索」タブ」](#)

アウトライン内の次元およびメンバーの操作

アウトライン・ツリー内の次元やメンバーを操作する場合、および次元やメンバーのプロパティを定義する場合は、アウトライン・エディタで使用できるいくつかの方法の中から適切な方法を選択できます。必要に応じて、ドラッグ・アンド・ドロップ、ツールバー・ボタン、キーボード・ショートカット、「編集」メニューおよび右クリックで表示されるメニューから、適切な方法を組み合わせて使用します。

注意: メンバーまたはメンバーの親を削除した場合や、メンバーの名前を変更した場合は、そのメンバー名が使用されているすべての場所を修正してください。メンバー名は、メンバー式、レポート・スクリプト、計算スクリプト、およびパーティション定義で使用されます。

次元およびメンバーのプロパティの変更については、[166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」](#)を参照してください。

➤ メンバーの追加、削除または名前変更を行う場合、メンバーの場所を変更する場合、選択したメンバーの下にメンバーを挿入する場合、およびメンバーのプロパティを変更する場合の手順は、次のとおりです:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 必要に応じて、次のいずれかの方法を使用して、アウトライン・メンバーを操作します:
 - 次元やメンバーを移動するには、それを選択して新しい場所にドラッグします。ツリー内で上または下に移動していくと、他の次元やメンバーが1つずつ反転表示(選択)されていきます。移動しているメンバーが、選択されたメンバーの子になるか兄弟になるかは、メンバーを離れたときのカーソルの位置によって決まります。
 - 子を作成するには、選択されたメンバーの真上(重なる位置)または右側で離します。
 - 兄弟を作成するには、選択されたメンバーの左側で離します。
 - [アウトラインのメンバーを展開および縮小します。](#)
 - メンバーに対してよく行われる操作は、次のキーボード・ショートカットを使用して実行できます:

キーまたはキーの組合せ	タスク
[Delete]または[Del]	選択されたメンバーを削除します

キーまたはキーの組合せ	タスク
[Ins]または[Insert]	選択されたメンバーに子を追加します
[Ctrl]+[Ins]	選択されたメンバーに兄弟を追加します
=	選択されたメンバーについて、式エディタ(「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスの「式」タブ)を開きます
[Ctrl] + [Enter]	選択されたメンバーについて、「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスの「情報」タブを開きます

- メンバーを右クリックして、適切なメニュー・オプションを選択します:

メニュー・オプション	タスク
切り取り	アウトラインからメンバーを削除してクリップボードに配置します。このメンバーは、他のメンバーがクリップボードに切り取りまたはコピーされて置き換えられるまで、クリップボードに存在します。 164 ページの「次元およびメンバーの移動」 を参照してください。
コピー	現在の選択内容をクリップボードにコピーします。この選択内容は、他の選択内容がクリップボードに切り取りまたはコピーされるまで、クリップボードに存在します。 164 ページの「次元およびメンバーのコピー」 を参照してください。
削除	アウトラインからメンバーを削除します。 177 ページの「次元およびメンバーの削除」 を参照してください。
子の貼付け	クリップ・ボード内のメンバーを、選択されたメンバーの子として貼付けます。
兄弟の貼付け	クリップ・ボード内のメンバーを、選択されたメンバーの兄弟として貼り付けます。
子の追加	選択された親に子を追加します。テキスト・ボックスが表示されたら、子の名前を入力して「[Enter]」を押します。子が追加されます。他にも子を追加する場合は、「[Enter]」を1回押します。別のテキスト・ボックスがアウトライン・エディタに表示されます。すべての子を追加するまでプロセスを続けます。その後、「[Enter]」を2回押すか、「[Esc]」を1回押します。
兄弟の追加	選択された親に兄弟を追加します。テキスト・ボックスが表示されたら、兄弟の名前を入力して「[Enter]」を押します。兄弟が追加されます。他にも兄弟を追加する場合は、「[Enter]」を1回押します。別のテキスト・ボックスがアウトライン・エディタに表示されます。すべての兄弟を追加するまでプロセスを続けます。その後、「[Enter]」を2回押すか、「[Esc]」を1回押します。
名前変更	選択されたメンバーの名前が表示されたテキスト・ボックスが開きます。新しい名前を入力し、「[Enter]」を1回押してテキスト・ボックスを閉じます。 176 ページの「次元およびメンバーの名前変更」 を参照してください。
子を昇順にソート	選択された親メンバーのすべての子を、英数字の昇順にソートします(0→9、A→Z)。このメニュー・コマンドは、現在のメンバーまたは次元に子がない場合は使用できません。 176 ページの「メンバーのソート」 を参照してください。

メニュー・オプション	タスク
子を降順にソート	<p>選択された親メンバーのすべての子を、英数字の降順にソートします(Z→A、9→0)。</p> <p>このメニュー・コマンドは、現在のメンバーまたは次元に子がない場合は使用できません。</p> <p>176 ページの「メンバーのソート」を参照してください。</p>

注：「検索」オプションの詳細は、[153 ページの「アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換」](#)を参照してください。ビューの分割オプションの詳細は、[152 ページの「アウトライン・エディタの複数のペインへの分割」](#)を参照してください。

関連情報

- [145 ページの「アウトラインの展開および縮小」](#)
- [160 ページの「アウトラインを開いて編集する」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)

クエリー・ヒント

クエリー・ヒントにより、ビューの選択が左右されます。管理者は1つ以上の次元のメンバーを指定することで、実行される可能性の高いクエリーのタイプを Essbase に通知できます。たとえば、管理者が時間次元の最下位レベルのメンバー (January など) を1つ指定することにより、時間次元の最下位レベルにクエリーを最適化できます。これにより、時間次元の最下位レベルにあるいずれかのメンバーにクエリーが実行される可能性があることが Essbase に通知されます。次元のメンバーが指定されていない場合、クエリーが実行される可能性は、その次元の全レベルのメンバーで同じであることを示します。

クエリーに基づくビューの選択では、クエリー・ヒントは無視されます。また、ユーザー定義のビューの選択とクエリー・ヒントの間で競合が発生した場合は、ユーザー定義のビューの選択が優先されます。

▶ クエリー・ヒントを適用するには:

- 1 アウトライン・エディタを開きます。
- 2 「クエリー・ヒント」タブを選択します。
- 3 ヒントを適用する次元をダブルクリックします。

注： 動的次元ではクエリー・ヒントを使用できません。

4 次のいずれかのアクションを行います:

- 「メンバー選択の使用」オプションを選択し、メンバーまでドリル・ダウンします。
- 「インライン編集の使用」を選択し、次元名の下のフィールドにメンバー名を入力します。






関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [662 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ」](#)
- [アウトライン・ビューアおよびアウトライン・エディタのカスタマイズ](#)
- [135 ページの「アウトラインの操作」](#)
- [160 ページの「アウトラインを開いて編集する」](#)
- [クエリー・ヒント\(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内\)](#)

ユーザー定義のビュー選択プロパティの設定

デフォルトでは、Essbase は内部機構を使用して集約の作成方法を決定します。管理者は、ユーザー定義のビュー選択を使用することで、デフォルトのビュー選択とクエリーに基づくビュー選択の両方に影響を与えることが可能です。

集約ストレージ・アウトラインに保管されているメンバーを選択すると、アウトライン・エディタのツールバーにアイコンが表示され、これらを使用してそのメンバーの選択のプロパティを変更できます。これらのプロパティは、「集約でのレベルの使用」の下の[638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス](#) - 「情報」タブでも設定できます。次のオプションを選択できます：

プロパティ	効果
 デフォルト	Essbase はプライマリ階層のすべてのレベルを検査します。他のロールアップが使用可能となっている場合を除き、セカンダリ階層での集約は行われません。
 すべてのレベルを検査	階層内のすべてのレベルを集約の候補として検査します。これはプライマリ階層ではデフォルト設定ですが、セカンダリ階層ではデフォルト設定ではありません。
 集約しない	この階層で集約を行いません。Essbase で選択されるすべてのビューは、入力レベルです。
 上位レベルのみ検査	プライマリ階層にのみ適用します。クエリーは入力データから直接回答されます。
 中間レベルに集約しない	プライマリ階層に適用します。最上位および最下位レベルのみを選択します。

関連トピック

- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のユーザー定義のビュー選択の理解に関する項

アウトラインの編集

ここには次のトピックがあります:

- 160 ページの「アウトラインを開いて編集する」
- 162 ページの「アウトラインへの次元の追加」
- 163 ページの「次元へのメンバーの追加」
- 164 ページの「次元およびメンバーのコピー」
- 164 ページの「次元およびメンバーの移動」
- 165 ページの「共有メンバーの定義」
- 166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」
- 167 ページの「次元タイプの設定」
- 167 ページの「時間次元のタグ付け」
- 168 ページの「会計次元のタグ付け」
- 169 ページの「属性次元のタグ付け」
- 169 ページの「次元に対する一意のタグ付け」
- 170 ページの「次元の疎/密の設定」
- 170 ページの「ハイブリッド分析の使用可能化または無効化」
- 171 ページの「メンバー集計プロパティの設定」
- 172 ページの「タイム・バランス・プロパティの設定」
- 172 ページの「2パス計算プロパティの設定」
- 173 ページの「メンバー・ストレージ・プロパティの設定」
- 174 ページの「差異レポート・プロパティの設定」
- 174 ページの「勘定科目メンバーへの通貨カテゴリの割当て」
- 175 ページの「次元およびメンバーのコメントの設定」
- 176 ページの「次元およびメンバーの名前変更」
- 176 ページの「メンバーのソート」
- 177 ページの「次元およびメンバーの削除」
- 177 ページの「動的時系列メンバーの使用可能化」
- 178 ページの「動的時系列メンバーの無効化」
- 179 ページの「世代およびレベルの名前付け」
- 180 ページの「アウトラインの変更の一覧表示」
- 180 ページの「アウトラインでの属性情報の表示」
- 181 ページの「アウトライン変更を元に戻す」

アウトラインを開いて編集する

アウトライン・エディタを使用してアウトラインを編集モードで開いたり、アウトライン・ビューアを使用してアウトラインを読取り専用モードで開いたりできます。編集モードでアウトラインを開くと、次の処理が行われます：

- Essbase 管理サーバーのメモリーにアウトライン全体がロードされます。同じ Essbase 管理サーバー上で大きなアウトラインを複数のユーザーが開く場合には、Essbase 管理サーバーのマシンのメモリーを調整したり、アウトラインを読取り専用モードで開いたりすることが必要な場合もあります。
- アウトラインが、ワークスペース・ペインのアウトライン・エディタ・ウィンドウに表示されます。
- コンソールのメニュー・バーに「編集」メニューおよび「アウトライン」メニューが追加されます。
- アウトラインの整合性を保つために、Essbase によってアウトラインがロックされます。開かれているアウトラインを編集しようとする、アウトライン・ビューアでアウトラインを表示するためのオプションが表示されます。
- アウトラインに関連付けられているデータベースは、アウトラインを保存するまで開始されません。

アウトラインを変更する必要がない場合は、[アウトライン・ビューア](#)を使用して読取り専用で開くことができます。アウトラインを読取り専用で開くと、次の処理が行われます：

- アウトラインの必要な部分のみが Essbase 管理サーバーのメモリーにロードされます。アウトラインを読取り専用モードで開くと、編集モードで開いたときよりも Essbase 管理サーバーで使用されるメモリーは少なくなります。
- アウトラインが、ワークスペース・ペインの新しいアウトライン・ビューア・ウィンドウに表示されます。
- アウトラインはロックされず、編集や保存を行うことはできません。
- アウトラインに関連付けられているデータベースは、アウトラインを開いたときに開始されます。データベースがすでに開始されている場合は、編集モードよりも速くアウトラインを開くことが可能です。

アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアでの、アウトラインによって消費されるメモリーの詳細は、[Oracle Essbase Database Administrator's Guide](#) を参照してください。

注： 複数のデータベースがあるアプリケーションでは、1つのデータベースを開くと残りのデータベースもロードされる場合があります。複数のデータベースがロードされないようにするには、アプリケーションの各データベースで、[アプリケーション開始時にデータベースを開始する](#)オプションが選択されていないことを確認してください。

▶ Essbase サーバーにオブジェクトとして保存されているアウトラインを開いて編集するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 アウトラインを編集モードで開くには、次のアクションを実行します:
 - 「アウトライン」ノードを選択し、右クリックして「編集」を選択します。
 - 「アウトライン」ノードをダブルクリックします。

アウトライン・エディタには、選択したアウトラインが表示されます。「オプション」ダイアログ・ボックスで選択したオプションによっては、アウトラインをロックするように求められる場合があります。アウトラインに変更を加えてその変更内容を保存する場合、その前にアウトラインをロックして、自分がそのアウトラインで作業している間に他のユーザーによって変更されないようにする必要があります。詳細は、111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」を参照してください。

- 3 オプション: **アウトライン・エディタの作業領域を設定し**、自分が作業しやすいように環境を整えてアウトラインを編集します。
- 4 アウトラインを編集します。
アウトラインの操作を参照してください。

▶ ローカルまたはネットワークに保存されているアウトライン・ファイルを開く手順は、次のとおりです:

- 1 「ファイル」>「開く」を選択します。
- 2 「開く」ダイアログ・ボックスで、「ファイル・システム」タブを選択します。
- 3 アウトライン・ファイルに移動します。
- 4 「ファイルのタイプ」ドロップダウン・リストで、「アウトライン・ファイル (*.otl)」を選択します。
- 5 アウトライン・ファイルを選択して、「OK」をクリックします。
選択したアウトラインがアウトライン・エディタに表示されます。
- 6 「オプション」ダイアログ・ボックスで選択したオプションによっては、アウトラインをロックするように求められる場合があります。アウトラインに変更を加えてその変更内容を保存する場合、その前にアウトラインをロックして、自分がそのアウトラインで作業している間に他のユーザーによって変更されないようにする必要があります。詳細は、**オブジェクトのロックおよびロック解除**を参照してください。
- 7 オプション: **アウトライン・エディタの作業領域を設定し**、自分が作業しやすいように環境を整えてアウトラインを編集します。
- 8 アウトラインを編集します。

関連情報

- [アウトラインの操作](#)
- [アウトライン・ビューアおよびアウトライン・エディタのカスタマイズ](#)

- 144 ページの「アウトラインの表示」
- 137 ページの「アウトライン・プロパティの設定」
- 166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」
- 141 ページの「アウトラインの印刷」
- 136 ページの「アウトラインのロックおよびロック解除」

アウトラインへの次元の追加

アウトラインはメンバーで構成されます。アウトラインの最上位レベルのメンバーは、次元と呼ばれます。次元には標準次元と属性次元の2つのタイプがあります。次元の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

アウトラインで重複メンバー名が有効であっても、次元名は常に一意である必要があります。

次元をアウトラインのどこに配置するかによって、パフォーマンスが変わります。パフォーマンスを最適化するためのアウトラインのデザインについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： 次元を追加、削除、または変更してからアウトラインを保存した場合は、Essbase でデータベースの再構築が必要になります。再構築が終了したら、データの再計算を実行してください。

▶ アウトラインに次元を追加するには:

1 **編集モードでアウトラインを開きます。**

2 **次のいずれかのアクションを行います:**

- アウトラインにメンバーが表示されていない場合は、「アウトライン: データベース名」のノードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「子の追加」を選択します。
- アウトラインにメンバーが表示されている場合は、既存の次元を右クリックして、「兄弟の追加」を選択します。

3 **次元の名前を、命名ルールに従って入力して、「[Enter]」を押します。**

「[Enter]」を押すと、新しいテキスト・トボックスが表示され、兄弟メンバーを追加できます。名前を入力せずにこのテキスト・ボックスを閉じるには、[Esc]を押します。

4 **ブロック・ストレージ・アウトラインの場合、必要に応じて、次元のストレージ構成を変更します。**

5 **次元タイプを設定します。**

6 **必要に応じて、その他の次元プロパティを定義します。**

7 **アウトライン内での次元の位置による影響を考慮した上で、次元を配置します。**

パフォーマンスを最適化するためのアウトラインのデザインについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

8 次元にメンバーを追加します。

関連情報

- 163 ページの「次元へのメンバーの追加」
- 166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」
- 135 ページの「アウトラインの操作」
- 155 ページの「アウトライン内の次元およびメンバーの操作」
- 176 ページの「次元およびメンバーの名前変更」

次元へのメンバーの追加

メンバーは、アウトラインを構成する要素です。次元で重複メンバー名が使用可能になっている場合を除き、各メンバーの名前は一意となります。次元に格納できるメンバーの数に制限はありません。メンバーは、他のメンバーの下位にネストできます。メンバーの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

重複メンバー名のアウトラインで、各次元はデフォルトで重複メンバー名を許可します。重複メンバー名は、入力するのみで追加できます。重複メンバーを追加するために他の操作を行う必要はありません。アウトラインで重複メンバー名が使用可能となっていない場合は、重複するメンバー名を入力するとエラーが戻されます。

注： 次元を追加、削除、または変更してからアウトラインを保存した場合は、Essbase でデータベースの再構築が必要になります。再構築が終了したら、データの再計算を実行してください。

▶ アウトラインにメンバーを追加するには:

1 編集モードでアウトラインを開きます。

2 次のいずれかのアクションを行います:

- メンバーを、次元の子や別のメンバーの子として追加する場合は、その次元やメンバーを選択して右クリックし、「子の追加」を選択します。
- メンバーを、別のメンバーや別の次元の兄弟として追加する場合は、そのメンバーや次元を選択して右クリックし、「兄弟の追加」を選択します。

3 メンバーの名前を、命名ルールに従って入力して、「[Enter]」を押します。

「[Enter]」を押すと、テキスト・ボックスが表示され、兄弟メンバーをさらに追加できるようになります。名前を入力せずにこのテキスト・ボックスを閉じるには、「[Enter]」を再度押すか、または「[Esc]」を押します。

4 すべての新規メンバーおよび次元の**メンバー・プロパティ**を定義します。

関連情報

- 162 ページの「アウトラインへの次元の追加」
- 166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」

- [アウトライン内の次元およびメンバーの操作](#)
- [176 ページの「メンバーのソート」](#)
- [165 ページの「共有メンバーの定義」](#)
- [176 ページの「次元およびメンバーの名前変更」](#)

次元およびメンバーのコピー

▶ 次元またはメンバーをコピーするには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 次元またはメンバーを右クリックし、「コピー」を選択します。
- 3 別のアウトラインにコピーする場合、[ターゲットのアウトラインを編集モードで開きます。](#)
- 4 ターゲット・アウトラインの次元またはメンバーを右クリックし、次のアクションを実行します:
 - 選択した次元またはメンバーの最初の子として貼り付ける場合は「子の貼付け」。
 - 選択した次元またはメンバーの兄弟として貼り付ける場合は「兄弟の貼付け」。

関連情報

- [164 ページの「次元およびメンバーの移動」](#)
- [141 ページの「アウトラインのコピー」](#)

次元およびメンバーの移動

▶ 次元またはメンバーを移動するには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 次元あるいは1つまたは複数のメンバーを選択します。
- 3 右クリックして、「切り取り」を選択します。
- 4 ターゲット次元またはターゲット・メンバーを選択して右クリックし、アイテムを選択します:
 - 選択した次元またはメンバーの最初の子として貼り付ける場合は「子の貼付け」。
 - 選択した次元またはメンバーの兄弟として貼り付ける場合は「兄弟の貼付け」。

また、1つのメンバーを選択し、マウスを使用して、アウトライン内の目的の場所にドラッグすることもできます。

複数のメンバーをドラッグする場合は、それらのメンバーを選択し、マウスの右ボタンを押しながらアウトライン内の目的の場所までドラッグします。

関連情報

- [164 ページの「次元およびメンバーのコピー」](#)
- [141 ページの「アウトラインのコピー」](#)

共有メンバーの定義

Essbase で共有メンバーを使用すると、同じデータベース内の複数の親の下に同じ値を含められます。たとえば、Sample Basic データベースの Diet Cola のメンバーである 100-20 は、Colas の値にロールアップされています。Diet Drinks の下に 100-20 の共有メンバーを定義すると、100-20 の値が Diet Drinks のレポート合計にも含まれるようになります。

共有メンバーは、アウトライン・ツリー内で、実際のメンバーよりも低いレベルに配置する必要があります。

共有メンバーを使用するということは、アウトライン内に同じ値が複数出現するということです。これは、データベースの集計結果を不正なものにしてしまう危険性を伴っています。データベースが正しく集計されるように、必要に応じて、共有メンバーやその親または祖先の集計プロパティを、「(~)無視」に設定してください。

注： 共有メンバーを使用する場合、集約ストレージ・アウトラインとブロック・ストレージ・アウトラインでは、それぞれ異なる方針と制限を考慮する必要があります。代替階層の詳細、および集約ストレージ・アウトラインで共有メンバーを使用する場合の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。ブロック・ストレージ・アウトラインで共有メンバーを使用する場合の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

▶ アウトライン・ツリー内で共有メンバーを定義するには:

- 1 [次元にメンバーを追加します。](#)
- 2 次元内の別のメンバー名と重複する名前をメンバーに割り当てます。
- 3 そのメンバーを選択して右クリックし、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 4 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 5 「データ・ストレージ」ドロップダウン・リストで、「共有メンバー」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

重複メンバー名が許可されたアウトラインでは、複数のメンバーが共有とタグ付けされたメンバーと同じ名前である場合は、[「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックス](#)が開きます。

- 7 「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックスが表示された場合は、「基本メンバー」列で共有メンバーの基として指定する重複メンバーをダブルクリックします。

ダブルクリックしたメンバーは「共有メンバー」列に追加されます。

8 「OK」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

基本メンバーは、後で635 ページの「[メンバーのプロパティ](#)」ダイアログ・ボックス」で変更できます。

関連情報

- 共有メンバーの理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 代替階層(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [171 ページの「メンバー集計プロパティの設定」](#)
- [594 ページの「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックス](#)

次元およびメンバーのプロパティの設定

データベースのアウトラインを作成して構成した後は、アウトライン内の次元およびメンバーのプロパティを定義できます。次元およびメンバーの保管、計算、および連結方法は、プロパティによって定義されます。

プロパティの中には、複数の次元およびメンバーにわたって設定できるものもあります。複数のメンバーを選択してプロパティを変更すると、選択したすべてのメンバーに変更内容が適用されます。

▶ 次元およびメンバーのプロパティを設定するには:

1 [アウトライン・エディタを開きます](#)。

「アウトライン」タブに、階層ツリー形式でアウトラインが表示されます。

2 プロパティを設定する 1 つまたは複数の次元またはメンバーを右クリックして、「[メンバー・プロパティの編集](#)」を選択します。

3 「[メンバーのプロパティ](#)」ダイアログ・ボックスで、適切なタブを選択し、必要に応じてプロパティを編集します。複数の次元またはメンバーを選択した場合は、一部のプロパティが編集できないことがあります。編集可能なプロパティのフィールドには下線が付いています。

注： ブロック・ストレージ・データベースの場合、このダイアログ・ボックスで次元ストレージのプロパティ(疎/密)を編集することはできません。これらの設定の変更方法の詳細は、[次元の疎/密の設定](#)を参照してください。

4 変更内容を保存する場合は、「OK」をクリックし、「次へ」または「前へ」をクリックするか、「[メンバーのプロパティ](#)」ダイアログ・ボックスの別のタブを選択します。

5 このタブを開いてから現時点までの間に現在のメンバーに対して行った変更を元に戻す場合は、「[取消し](#)」をクリックします。

関連情報

- [アウトラインの操作](#)
- 次元およびメンバーのプロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

- [次元およびメンバーのコメントの設定](#)
- [167 ページの「次元タイプの設定」](#)
- [170 ページの「次元の疎/密の設定」](#)
- [171 ページの「メンバー集計プロパティの設定」](#)
- [172 ページの「2 パス計算プロパティの設定」](#)
- [173 ページの「メンバー・ストレージ・プロパティの設定」](#)
- [172 ページの「タイム・バランス・プロパティの設定」](#)
- [174 ページの「差異レポート・プロパティの設定」](#)
- [190 ページの「次元およびメンバーの別名の作成」](#)
- [192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#)

次元タイプの設定

次元タイプとは、Essbase に用意されているプロパティの 1 つで、次元に特殊な機能を追加します。一般的に使用される次元タイプは、時間、会計および属性です。デフォルトでは、すべての次元に「なし」のタグが付けられます。

次の次元タイプは、時間、国および通貨の[集約ストレージ・アウトライン](#)には適用されません。

次の各トピックで、個々の次元タイプの設定方法を説明しています:

- [167 ページの「時間次元のタグ付け」](#)
- [168 ページの「会計次元のタグ付け」](#)
- [国次元のタグ付け](#)
- [通貨パーティションのタグ付け](#)
- [169 ページの「属性次元のタグ付け」](#)

関連情報

次元タイプの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

時間次元のタグ付け

時間のタグを付けた次元を使用して、データの収集頻度や更新頻度を表します。時間次元では、会計次元の機能のいくつか(期首タイム・バランスや期末タイム・バランスなど)が使用可能です。アウトラインに時間次元が含まれている必要はありません。

注: 時間次元は、集約ストレージ・アウトラインにのみ適用されます。

▶ 次元に時間のタグを付ける手順は、次のとおりです:

- 1 **編集モードでアウトラインを開きます。**
「アウトライン」タブが表示されます。

- 2 次元を右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「メンバー情報」「」ノードの下で、「次元タイプ」ドロップダウン・リストから「時間」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- 時間次元の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [167 ページの「次元タイプの設定」](#)
- [638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

会計次元のタグ付け

利益や在庫などメジャーの対象となるアイテムが含まれている次元には、会計のタグを付けます。ブロック・ストレージ・データベースで次元に会計のタグを付けると、Essbase に組み込まれている勘定科目用の機能が使用可能になります。アウトラインに会計次元が含まれている必要はありません。

アウトラインの2回目のパスで会計次元のメンバーを計算する方法については、[172 ページの「2パス計算プロパティの設定」](#)を参照してください。

▶ 次元に会計のタグを付けるには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます](#)。
「アウトライン」タブが表示されます。
- 2 タグを付ける次元を右クリックして、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「メンバー情報」ノードの下で、「次元タイプ」ドロップダウン・リストから「会計」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 会計次元のメンバーのプロパティを設定する場合は、[タイム・バランス・プロパティの設定](#)、[差異レポートのプロパティの設定](#)および[勘定科目メンバーへの通貨カテゴリの割当て](#)を参照してください。

関連情報

- 会計次元の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [172 ページの「タイム・バランス・プロパティの設定」](#)
- [174 ページの「差異レポート・プロパティの設定」](#)
- [勘定科目メンバーへの通貨カテゴリの割当て](#)
- [167 ページの「次元タイプの設定」](#)

- [638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

属性次元のタグ付け

属性次元を使用して、他の関連する次元のメンバーを分類します。たとえば、Sample Basic データベースの Pkg Type 属性次元には、Product 次元のメンバーに適するパッケージのタイプ(ボトルや缶など)を表すメンバーが含まれています。

▶ 属性次元にタグを付けるには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
「アウトライン」タブが表示されます。
- 2 次元を右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「メンバー情報」ノードの下で、「次元タイプ」ドロップダウン・リストから「属性」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- 属性の操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [196 ページの「属性について」](#)
- [197 ページの「属性の定義」](#)
- [167 ページの「次元タイプの設定」](#)
- [638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

次元に対する一意のタグ付け

重複メンバー名を使用できるアウトラインでは、特定の次元にタグを付けてメンバー名を一意とするよう指定できます。この設定により、重複メンバー名のアウトライン内でメンバー名の一意性を細かく指定することが可能になります。

▶ 重複メンバー名のアウトラインでメンバー名が一意となるように次元にタグを付ける手順は、次のとおりです:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 次元を右クリックして、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「メンバー情報」ノードの下にある「次元内でのメンバー名の重複を許可」で、「FALSE」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

[132 ページの「重複するメンバー名について」](#)

次元の疎/密の設定

ブロック・ストレージ・データベースについては、Essbase で標準次元が 2 つのタイプ(密次元および疎次元)に分割され、データベースのパフォーマンスが最適化されます。この分割によって、Essbase ではまばらに存在しているデータを処理できるようにしています。密および疎のデータ・ストレージの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

新しい次元を作成してアウトラインを保存すると、Essbase では新しい次元が自動的に疎として設定されます。属性次元を関連付ける標準次元は、疎に設定する必要があります。当然ながら、属性次元は疎として設定されます。属性次元の設定を疎から変更することはできません。

注： 疎/密ストレージは、[集約ストレージ・データベース](#)には適用されません。

▶ 次元のストレージ構成を変更するには:

1 編集モードでアウトラインを開きます。

「アウトライン」タブが表示されます。

2 「プロパティ」タブを選択します。

3 「次元ストレージ・タイプオプション・グループで、ストレージ・タイプを変更する次元ごとに「密」または「疎」を選択します。

注： 次元ストレージ・タイプを変更できるのは、アウトラインの「自動構成」オプションが「FALSE」に設定されている場合のみです。

関連情報

- [664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ」](#)

ハイブリッド分析の使用可能化または無効化

Integration Services コンソールでハイブリッド分析用に定義されている各次元では、ハイブリッド分析を使用可能または無効に設定できます。ハイブリッド分析用に定義されていないアウトラインを開いた場合、「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスやアウトライン・エディタのツールバーに「ハイブリッド分析」オプションは表示されません。

ハイブリッド分析が無効になっている次元では、関連するハイブリッド分析データの表示やドリルスルーは実行できませんが、その次元のメンバーはアウトライン・エディタで表示できます。

▶ 次元のハイブリッド分析を使用可能または無効にするには:

- 1 編集モードでアウトラインを開きます。
「アウトライン」タブが表示されます。
- 2 次元を右クリックして、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「ハイブリッド分析」ノードの横で、「使用可能」または「使用不可」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

リレーショナル・データへのアクセス(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

メンバー集計プロパティの設定

Essbase では、親の値は子の値を集計することで決定されます。Essbase でそれぞれの子メンバーの値をどのように処理すればよいか(加算するのか減算するのかなど)は、それぞれの子メンバーの集計演算子を定義することによって指定します。デフォルトでは、新しいメンバーに対してメンバーが加算されたことを表す加算(+)演算子が与えられます。たとえば、Sample Basic データベースでは、Jan、Feb、および Mar の各値が加算され、その結果が親の Qtr1 に保管されます。

注: 集約ストレージ・アウトラインでは、集計演算子の使用に関して制限があります。集約ストレージとブロック・ストレージの違いの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

▶ アウトライン内のメンバーの集計プロパティを設定するには:

- 1 編集モードでアウトラインを開きます。
- 2 そのメンバーを選択して右クリックし、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「集計」ドロップダウン・リストで、集計演算子を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- メンバー集計の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 異なる演算子を持つ場合のメンバーの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

タイム・バランス・プロパティの設定

タイム・バランス・プロパティは、Essbaseにおける会計次元のデータの計算方法を指定します。デフォルトでは、時間次元内の親は、その子の集計と式を基に計算されます。タイム・バランス・プロパティを設定すると、別の方法で親がロールアップされるようになります。タイム・バランス・プロパティを使用するには、会計のタグが付けられた次元と、時間のタグが付けられた次元が存在する必要があります。「タイム・バランス」プロパティは、保管された時間次元にのみ適用できます。

また、タイム・バランス・プロパティを設定する場合は、スキップ・プロパティを設定して、Essbaseにおける欠落した値や0値の処理方法を指定する必要もあります。

▶ 勘定科目メンバーのタイム・バランス・プロパティを設定するには:

1 編集モードでアウトラインを開きます。

「アウトライン」タブが表示されます。

2 メンバーを右クリックして、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。

3 「メンバーのプロパティ」・ウィンドウで、「情報」タブを選択します。

4 「タイム・バランス」から、タイム・バランス・プロパティを選択します。

5 「タイム・バランス」のプロパティを「平均」、「期首」または「期末」にした場合は、「スキップ・オプション」からスキップ・プロパティを選択します。

6 「OK」をクリックします。

アウトライン・エディタでは、タイム・バランス・プロパティが保管された時間次元のみに適用されていることが確認されます。

関連情報

- タイム・バランス・プロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- スキップ・プロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [168 ページの「会計次元のタグ付け」](#)
- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

2パス計算プロパティの設定

2パス計算プロパティは、目的の値を得るために計算を2回行う必要があるメンバーに対して使用します。2パス・メンバーの正しい値を得るためには、Essbaseでアウトラインを計算した後に、他のメンバーの計算値に依存しているメンバーを再計算する必要があります。

2パス計算のプロパティは、属性次元以外のどの次元のメンバーにも設定できますが、実際に2パス計算が行われるのは、会計次元のメンバー、動的計算メンバー、および動的計算および保管メンバーのみです。それ以外のメンバーに2パス計算を設定しても、Essbaseでは無視されます。

注： 2パス計算は、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

▶ アウトラインの2回目のパスで計算されるようにメンバーを設定するには:

- 1 編集モードでアウトラインを開きます。
- 2 次元またはメンバーを右クリックして、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」・ウィンドウで、「情報」タブを選択します。
- 4 「2パス計算」ドロップダウン・リストで、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- 2パス計算の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

メンバー・ストレージ・プロパティの設定

次元やメンバーのデータ値をデータベースに保管する方法およびタイミングを Essbase に指定できます。たとえば、ユーザーから要求された場合にのみ Essbase で値を計算して、計算したデータ値は保存しないようにメンバーを設定できます。Essbase のデフォルトでは、関連するメンバーの各データ値は保管されます。

注： 一部のメンバー・ストレージ・オプションは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

メンバーは、次の6つのいずれかの方法で定義できます:

- データの保管
 - 動的計算および保管
 - 動的計算
 - 共有しない
 - ラベルのみ
 - 共有メンバー
- ▶ アウトラインの次元またはメンバーのストレージ・プロパティを設定するには:
- 1 編集モードでアウトラインを開きます。
「アウトライン」タブが表示されます。
 - 2 次元またはメンバーを右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
 - 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。

- 4 「データ・ストレージ」ドロップダウン・リストから、ストレージ・プロパティを選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)
- [165 ページの「共有メンバーの定義」](#)
- メンバーによるデータ値の保管方法の決定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」](#)

差異レポート・プロパティの設定

会計次元のメンバーの差異レポート・プロパティを設定して、Essbase で実績データと予算データの差を計算する方法を指定できます。会社の支出を表すメンバーには、支出のプロパティ・タグを付ける必要があります。

注： 差異レポートは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

▶ 勘定科目メンバーに支出または支出外のタグを付けるには:

- 1 編集モードでアウトラインを開きます。
- 2 そのメンバーを選択して右クリックし、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「差異レポートの支出」ドロップダウン・リストで、差異レポート・プロパティを選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- 差異レポート・プロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

勘定科目メンバーへの通貨カテゴリの割当て

通貨換算のためにメイン・データベースのアウトラインを準備する際には、会計次元およびそのメンバーに通貨カテゴリを割り当てる必要があります。たとえば、Gross Profit および Net Profit メンバーの換算には、あるカテゴリのレート(Profit & Loss など)を使用し、他の勘定科目には別のレートのセット(Balance Sheet など)を使用する場合があります。

メイン・データベースで通貨カテゴリを割り当てると、Essbase では、それらの個々の通貨カテゴリをメンバーとして持つ次元が、通貨データベースに作成されます。メイン・データベースで通貨カテゴリを定義する際には、下位階層への継承機能を使用して、親から子に通貨カテゴリを継承できます。

▶ 勘定科目メンバーの通貨換算プロパティを設定するには:

- 1 メイン・データベースのアウトラインを開きます。
- 2 メンバーを選択します。このメンバーは、会計のタグが付いた次元に属している必要があります。
- 3 右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 4 「情報」タブを選択して、「会計情報」ノードを探します。
- 5 「通貨換算」ドロップダウン・リストで、換算オプションを選択します。
- 6 「カテゴリ」を選択した場合は、「カテゴリ」テキスト・ボックスに適切な換算カテゴリを入力します。
- 7 換算しないメンバーには「換算しない」タグを付けます。「換算しない」タグは継承されません。
- 8 「OK」をクリックします。

注: あるメンバーの子孫は各自、その祖先の通貨カテゴリ・タグを継承します。メンバーまたはメンバーのサブ分岐にも、固有のカテゴリを定義できます。

関連情報

- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [通貨の換算](#)
- [168 ページの「会計次元のタグ付け」](#)
- [457 ページの「通貨換算のトラブルシューティング」](#)
- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

次元およびメンバーのコメントの設定

次元およびメンバーにコメントを追加できます。アウトライン・エディタでは、次元名またはメンバー名の右側に、次のフォーマットでコメントが表示されます:

/* コメント */

アウトライン・エディタでは、コメントを表示するかどうかを指定できます。

▶ 次元またはメンバーのコメントを入力するには:

- 1 **編集モード**でアウトラインを開きます。
「アウトライン」タブが表示されます。

- 2 次元またはメンバーを選択し、右クリックし、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「コメント」テキスト・ボックスで、コメントを入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)
- [151 ページの「アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアのカスタマイズ」](#)

次元およびメンバーの名前変更

次元およびメンバーの名前は変更できます。

▶ 次元またはメンバーの名前を変更するには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 次元またはメンバーを右クリックし、「名前変更」を選択します。
- 3 名前を命名ルールに従って入力し、「[Enter]」を押します。

命名規則については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注意 パーティション定義で使用されている次元またはメンバーの名前を変更した場合、変更後の新しい名前を使用してそのパーティションを再定義しないかぎり、パーティション定義は無効になります。

メンバーのソート

アウトライン・ツリー内のメンバーを、英数字の順序(0-9、A-Z)または逆の順序(Z-A、9-0)で並べられます。

属性次元のレベル0 メンバーは、ソート・コマンドを使用して並べ替えることはできません。

▶ 特定の次元またはメンバーの下のレベルにあるメンバーをすべてソートするには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
「アウトライン」タブが表示されます。
- 2 メンバーをソートする次元またはメンバーを右クリックします。
- 3 英数字の順序でメンバーをソートする場合は、「子を昇順にソート」を選択します。

- 4 英数字の逆の順序でメンバーをソートする場合は、「子を降順にソート」を選択します。

注意 メンバーをソートすると、アウトライン内で共有メンバーが実際のメンバーより前に配置されてしまう場合があります。実際のメンバーより前に共有メンバーを配置することはお勧めしません。

関連情報

- 次元およびメンバーの位置付け(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [155 ページの「アウトライン内の次元およびメンバーの操作」](#)

次元およびメンバーの削除

属性以外の次元またはメンバーを追加、削除、または移動すると、Essbase によってデータベースが再構築されるため、データを再計算する必要があります。

▶ 次元またはメンバーを削除するには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 次元またはメンバーを右クリックし、「削除」を選択します。
- 3 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。

注意 削除は元に戻せません。

動的時系列メンバーの使用可能化

あらかじめ定義された動的時系列(DTS)メンバーを使用して期間累計値を動的に計算するには、アウトラインで DTS メンバーを使用可能にする必要があります。DTS メンバーを使用可能にするときは、DTS メンバーを世代番号に関連付ける必要があります。

DTS メンバーを世代番号に関連付けると、Essbase では、その世代番号のためのあらかじめ定義された世代名が作成されます。あらかじめ定義されたメンバーおよび世代名は、Essbase で使用するために予約されています。時間次元で世代名を作成し、あらかじめ定義された世代名のいずれかを使用すると、Essbase では対応する DTS メンバーが自動的に作成されて使用可能になります。

注: 動的時系列メンバーは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ アウトラインの動的時系列(DTS)メンバーを使用可能にするには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 「アウトライン」>「動的時系列」を選択します。

アウトライン・エディタに「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 3 「使用可能」列で、使用可能にするあらかじめ定義済みの DTS メンバーのチェック・ボックスを選択します。
- 4 「世代」列で、使用可能にするメンバーを関連付ける世代を選択します。
「世代」列のセルをクリックすると、ドロップダウン・リストが表示されます。このリストには、現在のアウトラインで DTS メンバーを作成可能な世代の番号が示されます。
- 5 必要に応じて、DTS メンバーの別名を作成できます。[動的時系列メンバーの別名の作成](#)を参照してください。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [581 ページの「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックス](#)
- [178 ページの「動的時系列メンバーの無効化」](#)
- 動的時系列メンバーの選択(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- パーティションでの動的時系列の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

動的時系列メンバーの無効化

Essbase には、あらかじめ定義された動的時系列(DTS)メンバーが用意されています。これらを使用すると、期間累計値を動的に計算できます。DTS メンバーを使用する必要がなくなった場合は、そのメンバーを無効化できます。

▶ アウトラインの動的時系列(DTS)メンバーを無効にするには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 「アウトライン」>「動的時系列」を選択します。
- 3 削除する DTS メンバーの「使用可能」列で、チェック・ボックスの選択を解除します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [581 ページの「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックス](#)
- [177 ページの「動的時系列メンバーの使用可能化」](#)
- 動的時系列メンバーの選択(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- パーティションでの動的時系列の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

世代およびレベルの名前付け

アウトライン内の世代およびレベルには、独自の名前を付けられます。名前は、世代またはレベルを説明する単語または語句です。たとえば、アウトラインのすべての市に対して **Cities** という世代名を作成します。それぞれの世代またはレベルには、1つの名前のみ定義できます。定義した世代およびレベル名は、アウトライン・ビューアの「**プロパティ**」タブに表示できます。

計算スクリプトやレポート・スクリプトで、メンバー名のリスト、あるいは世代番号またはレベル番号のリストを指定する必要がある場合は、世代名やレベル名を使用します。たとえば、計算スクリプトで行う計算の範囲を、特定の世代のメンバーに限定できます。

重複メンバー名を許可する次元では、特定の世代やレベルでメンバー名が一意となるように指定できます。

▶ 世代名またはレベル名を作成、変更または削除するには:

1 **編集モードでアウトラインを開きます。**

2 次のいずれかのアクションを行います:

- 「アウトライン」 > 「世代」を選択して「**世代の定義**」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 「アウトライン」 > 「レベル」を選択して「**レベルの定義**」ダイアログ・ボックスを開きます。

3 「次元」リスト・ボックスから、適切な次元名を選択します。

4 世代名またはレベル名を作成するには、次のアクションを行います:

- 1 「世代名」または「レベル名」列で、<新規世代を作成するには、ここをクリック>または<新規レベルを作成するには、ここをクリック>というテキストが含まれているセルをクリックします。
 - 2 そのテキスト・ボックスに、メンバーの場合と同じ命名ルールに従って、世代名またはレベル名を入力します。
 - 3 同じ行の「番号」ドロップダウン・リスト・ボックスで、世代番号またはレベル番号を選択します。たとえば、Sample Basic データベースの月の世代に名前を付けるには、3 を選択します。Sample Basic データベースの月のレベルに名前を付けるには、1 を選択します。
 - 4 **オプション:** **重複メンバー名**が許可されたアウトラインにおいて、重複メンバー名次元の特定の世代やレベルでメンバー名が一意となるように指定する場合は、「一意」列のチェック・ボックスを選択します。
- 5 既存の世代名またはレベル名を削除する場合は、削除する世代名またはレベル名の横にある「削除」をクリックします。
- 6 ダイアログ・ボックスを開いてから現時点までの間に行ったすべての変更を、そのダイアログ・ボックスを開いたまま元に戻すには、「戻す」をクリックします。
- 7 「OK」をクリックします。

関連情報

- 次元とメンバーの関係(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

- [582 ページの「世代の定義」ダイアログ・ボックス](#)
- [583 ページの「レベルの定義」ダイアログ・ボックス](#)

アウトラインの変更の一覧表示

現在のアウトライン編集セッションでアウトラインに対して加えられた変更を表示できます。アウトライン・エディタの「変更」タブには、アウトラインを開いてから現時点までの間にアウトラインに加えられたすべての変更が表示されます。アウトライン・エディタを閉じると、変更の一覧は消去されます。

変更の一覧には、他の管理者が行ったアウトラインの変更は含まれません。

アウトラインの変更には、[元に戻す](#)ことができるものもあります。

▶ アウトラインに加えられた変更を一覧表示するには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 必要に応じてアウトラインを編集します。
- 3 [「変更」タブを選択します。](#)

関連情報

- [663 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「変更」タブ](#)
- [166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」](#)
- [181 ページの「アウトライン変更を元に戻す」](#)

関連コマンド

`outlinechangelog(essbase.cfg の設定)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アウトラインでの属性情報の表示

属性設定は、アウトライン、次元、およびメンバーのプロパティです。該当するプロパティ情報を表示させて、属性設定を見ることが可能です。

また、アウトライン内に属性情報を表示するようにコンソールをカスタマイズすることで、アウトライン・ツリーに次元やメンバーの属性情報を表示させることもできます。

アウトライン・ツリー内でのメンバーおよび次元の属性情報の表示を制御するには、次に示す[管理サービス・コンソールの「アウトライン・ツール」オプション](#)の選択を行うかまたは選択を解除します:

- **関連付け:** アウトライン内の関連メンバーおよび関連次元の名前の横に、属性および属性次元の名前を表示します
- **属性タイプ:** 属性次元のメンバーの横に、属性次元のタイプを表示します

基本次元および基本次元のメンバーの属性情報を表示するには、管理サービス・コンソールのアウトライン・オプションの設定に関係なく、アウトライン・エディタで、基本次元のメンバーの次元またはメンバーのプロパティを表示します。

- 次元の場合: 「属性」タブを表示します。
- メンバーの場合: 「関連付け」タブを表示します。

アウトラインの属性設定を表示するには、アウトラインの「プロパティ」タブを表示します。

注: アウトライン・ビューアでは、属性次元、および属性次元と基本次元の関連付けを表示できます。ただし、属性が関連付けられている基本メンバーを表示するには、属性メンバーをクリックする必要があります。

関連情報

- [196 ページの「属性について」](#)
- [アウトライン・ビューアおよびアウトライン・エディタのカスタマイズ](#)
- [146 ページの「次元およびメンバーのプロパティの表示」](#)

アウトライン変更を元に戻す

アウトライン・エディタを使用すると、その変更内容が「変更」タブに1行ずつ表示されます。「変更」タブには、現在のセッション中にアウトラインに対して加えられた変更が表示されます。最も新しい変更が、リストの最下部に表示されます。

複数のメンバーに対して同時に行った操作は、「変更」タブでは1つのエントリとして表示されます。複数メンバーに対する操作は部分的に元に戻せません。

アウトラインの変更は、変更を行った順序と逆の順序でのみ元に戻すことが可能です。「変更」タブに表示されている変更をすべて元に戻せるわけではありません。変更を元に戻せるかどうかは、変更のタイプと順序によります。

現在のアウトライン・エディタ・セッションでアウトラインを保存した後も、「変更」タブに表示されている操作を元に戻せます。

▶ 現在のアウトライン・エディタ・セッションでアウトラインに対して加えられた変更を元に戻す手順は、次のとおりです:

- 1 「アウトライン・エディタ」・ウィンドウで、「変更」タブを選択します。
- 2 元に戻す変更を選択し、「編集」>「元に戻す」を選択します。

注: アウトラインに加えられた変更のタイプと順序によっては、表示されている変更の一部しか元に戻せない場合があります。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [663 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「変更」タブ」](#)

- [180 ページの「アウトラインの変更の一覧表示」](#)

別名の使用

ここには次のトピックがあります:

- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)
- [183 ページの「別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて」](#)
- [184 ページの「別名テーブルの作成」](#)
- [185 ページの「別名テーブルのエクスポート」](#)
- [186 ページの「別名テーブルのインポート」](#)
- [187 ページの「別名テーブルのコピー」](#)
- [188 ページの「別名テーブルの名前変更」](#)
- [188 ページの「別名テーブルの削除および消去」](#)
- [189 ページの「アウトライン・エディタのアクティブな別名テーブルの設定」](#)
- [190 ページの「次元およびメンバーの別名の作成」](#)
- [190 ページの「動的時系列メンバーの別名の作成」](#)

別名テーブルについて

メンバーや共有メンバーには、1つまたは複数の代替名(別名)を割り当てられます。別名を使用すると、アウトラインやレポートが読みやすくなります。たとえば、Sample Basic データベースの Product 次元のメンバーは、製品コード(100 など)で識別することも、また、人間にとってわかりやすい別名(Cola など)で識別することもできます。

メンバーの別名は、データベースの一部として1つまたは複数のテーブルに保管されます。すべてのブロック・ストレージまたは集約ストレージ・データベースには Default という名前のテーブルがあり、その他に最大 31 のテーブルを追加できるため、合計でデータベース当たり 32 の別名テーブルを使用できます。メンバー名の重複が可能なデータベースには、重複した別名を別名テーブルに含めることができます。次のいずれかの方法を使用して別名テーブルを作成できます:

- 空の別名テーブルを作成してから、既存の別名テーブルから別名をコピーするか、個々のメンバーの別名を手動で定義することにより、別名テーブルに別名を移入します。
- ソース・ファイルから別名テーブルをインポートします。ソース・ファイルを手動で作成することも、別名テーブルのエクスポートによって作成されたファイルを使用することもできます。ソース・ファイルのフォーマットの詳細は、別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについてを参照してください。

Default という別名テーブルは、デフォルトでアクティブになる別名テーブルです。アウトライン・エディタのアウトライン・ツリーに同時に表示できる名前は、1つの別名テーブルに登録されている名前のみです。したがって、Default 以外の

別名テーブルに登録されている別名を表示するには、[別名テーブルをアウトラインのアクティブな別名テーブルに設定](#)する必要があります。

別名は、レポートやスプレッド・シートでも使用されます。アウトライン・エディタ以外のデータベース・アクティビティでも、アクティブな別名テーブルとして別のテーブルを選択できます。

さらに、アウトライン・エディタでは別名テーブルについて次の操作を実行できます:

- [別名テーブルの名前変更](#)
- [別名テーブルのコンテンツの消去](#)
- [別名テーブルの削除](#)
- [動的時系列メンバーの別名の作成](#)

次元構築のルール・ファイルを使用する方法でも、次元やメンバーに別名をマッピングできます。ルール・ファイルでは、次元構築データ・ソース内の別名の値が含まれているフィールドでフィールド・タイプを別名に設定して、世代参照、レベル参照、または親子参照の構築方法を使用できます。フィールド・タイプ情報の設定の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 別名テーブルの言語コードの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [183 ページの「別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて」](#)
- [530 ページの「別名テーブルの作成」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- displayalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listaliases(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- loadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- unloadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて

別名テーブルのインポート・ファイルには、別名をアウトライン・メンバーに関連付けるための情報が含まれています。別名テーブルのインポート・ファイルは、次の方法で作成できます:

- 別名テーブルをエクスポートする
- テキスト・エディタを使用してファイルを作成する
- Perl スクリプトなどを利用してファイルを自動生成する

別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルは、次のフォーマットで記述されたテキスト・ファイルです:

- ファイルの最初の行は\$ALT_NAME です。1 つまたは2 つのスペースの後に別名テーブルの名前を記述します。別名テーブルの名前に空白文字が含まれている場合は、その名前を単一引用符で囲む必要があります。
- ファイルの最終行には、\$END を記述します。
- 開始行と最終行の間の各行には、2 つの値を記述する必要があります。最初の値は既存のアウトライン・メンバーの名前で、2 番目の値はそのメンバーの別名です。この2 つの値は、1 つ以上のスペースまたはタブで区切ってください。

注: メンバー名または別名に空白文字またはアンダースコアが含まれている場合は、その名前を二重引用符で囲んでください。

次のテキストは、Sample Basic で使用する、別名テーブルのインポート/エクスポート・ファイルのコンテンツの簡単な例を示しています:

```
$ALT_NAME 'Long Names'
```

```
Qtr1 Quarter1 Jan January Feb February Mar March $END
```

注: Administration Services で別名テーブルのインポート・ファイルは、UTF-8 でエンコードされている(UTF-8 のシグネチャが付いている)必要があります。

関連情報

- 別名テーブルの作成と管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [186 ページの「別名テーブルのインポート」](#)
- [185 ページの「別名テーブルのエクスポート」](#)

別名テーブルの作成

メンバーの別名は、データベース・アウトラインの一部として1 つまたは複数のテーブルに保管されます。別名テーブルの作成後は、アウトライン・エディタでメンバーの別名を作成できます。作成した別名は、アウトラインの**アクティブな別名テーブル**に保存されます。デフォルトでは、すべてのデータベースに Default という名前の別名テーブルが1 つあります。ブロック・ストレージまたは集約ストレージブロック・データベースごとにその他に最大 31 の別名テーブルを追加できるため、合計でデータベース当たり 32 の別名テーブルを使用できます。

[183 ページの「別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて」](#)に示すように、同じデータベース内の**別名テーブルを新しい名前**

にコピーするか、テキスト・ファイルから別名テーブルをインポートすることにより、データベースの別名テーブルを作成することもできます。

▶ アウトラインで使用する空の別名テーブルを新規作成するには:

- 1 アウトラインを編集モードで開き、「プロパティ」タブを選択します。
- 2 「別名テーブル」ノードを右クリックして、「別名テーブルの作成」を選択します。
- 3 「別名テーブルの作成」ダイアログ・ボックスで、別名テーブルの名前を指定します。
- 4 「OK」をクリックします。
- 5 必要に応じて、新しい別名テーブルを、アウトラインのアクティブな別名テーブルに設定します。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 別名テーブルの言語コードの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 190 ページの「次元およびメンバーの別名の作成」
- 530 ページの「別名テーブルの作成」ダイアログ・ボックス」

別名テーブルのエクスポート

別名テーブルは、データベースから .alt ファイルにエクスポートして、別のデータベースにインポートできます。

エクスポートしたファイルは、テキスト・エディタでその内容を表示して変更できます。

▶ 別名テーブルをエクスポートするには:

- 1 編集モードでアウトラインを開きます。
- 2 「アウトライン」>「別名テーブルのエクスポート」を選択します。
- 3 「別名テーブルのエクスポート」ダイアログ・ボックスで、別名テーブルを選択して「OK」をクリックします。
- 4 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、エクスポート・ファイルの場所を指定します。
- 5 次のいずれかのアクションを行います:
 - Essbase サーバーにエクスポート・ファイルを保存するには:
 - 1 「Essbase サーバー」タブを選択します。
 - 2 「検索」リスト・ボックスで、エクスポート・ファイルを保存する Essbase サーバーを選択します。
 - 3 エクスポート・ファイルを保存するアプリケーションまたはデータベースに移動します。
 - エクスポート・ファイルをローカルまたはネットワークに保存するには:

1. 「ファイル・システム」タブを選択します。
 2. ファイルを保存するファイル・システム・ディレクトリに移動します。
- 6 「ファイル名」テキスト・ボックスに、ファイルの名前を入力します。
エクスポート・ファイルには、拡張子 .alt が付けられます。
- 7 「OK」をクリックします。
- 8 **オプション:** [別名テーブルをデータベースにインポート](#)します。

関連情報

- [183 ページの「別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて」](#)
- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [603 ページの「別名テーブルのエクスポート」ダイアログ・ボックス](#)
- [186 ページの「別名テーブルのインポート」](#)
- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)

関連コマンド

- unloadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- loadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- displayalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

別名テーブルのインポート

別のデータベースからエクスポートした別名テーブルをインポートできます。インポートするソース・ファイルは、ユーザーも作成できます。

別名テーブルのインポート・ファイルは、正しいフォーマットで記述され、名前の末尾が .alt である必要があります。フォーマットの詳細は、[183 ページの「別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて」](#)を参照してください。Essbase では、新しい別名テーブルを作成するのか、既存のテーブルを置き換えるのかは、インポート・ファイルのヘッダー・レコードに記述されているテーブル名に基づいて判断されます。

非 Unicode モード・アプリケーションの場合、別名テーブルのインポート・ファイルはアプリケーション・サーバーのエンコード方式に則っているものとみなされます。Unicode モード・アプリケーションの場合、別名テーブルのインポート・ファイルは UTF-8 エンコード方式(UTF-8 シグネチャ付き)か、またはアプリケーションのエンコード方式が可能です。ロケール・ヘッダー・レコードは、サポートされていません。エンコード方式の詳細は、[124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)を参照してください。

▶ 別名テーブルをインポートするには:

- 1 **編集モードでアウトラインを開きます。**
- 2 「アウトライン」>「別名テーブルのインポート」を選択します。

- 3 「開く」ダイアログ・ボックスで、別名テーブルのインポート・ファイルを選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 182 ページの「別名テーブルについて」
- 183 ページの「別名テーブルのインポート・ファイルおよびエクスポート・ファイルについて」
- 185 ページの「別名テーブルのエクスポート」
- 124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」

関連コマンド

- unloadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- loadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

別名テーブルのコピー

別名は、同じデータベース内の別名テーブル間でコピーできます。既存のテーブルにコピーできる他、新しいテーブルにコピーすることもできます。既存のテーブルにコピーする場合は、2つのテーブルの別名をマージするかどうかを選択できます。

別名テーブルをデータベース間でコピーするには、元のデータベースから別名テーブルをエクスポートしてから、別名テーブルを他のデータベースにインポートする必要があります。

▶ 同じデータベース内の別名テーブル間で別名をコピーするには:

- 1 **アウトラインを編集モードで開き、「プロパティ」タブを選択**します。
- 2 「別名テーブル」ノードの下で、コピー元の別名テーブルを右クリックし、「別名テーブルのコピー」を選択します。
- 3 「別名テーブルのコピー」で、別名テーブルを選択するか、新しい別名テーブルの名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 別名テーブルの言語コードの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 519 ページの「「別名テーブルのコピー」ダイアログ・ボックス」

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

別名テーブルの名前変更

Default 別名テーブル以外の別名テーブルの名前を変更できます。

▶ 別名テーブルの名前を変更するには:

- 1 [アウトラインを編集モードで開き](#)、「プロパティ」タブを選択します。
- 2 「別名テーブル」ノードの下で別名テーブルを右クリックし、「名前変更」を選択します。
- 3 「新規の名前」テキスト・ボックスに、名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [672 ページの「別名テーブルの名前変更」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

別名テーブルの削除および消去

別名テーブルのコンテンツは消去できます。また、別名テーブルをアウトラインから削除することもできます。Default 別名テーブルは、消去は可能ですが、削除はできません。

▶ 別名テーブルを消去または削除するには:

- 1 [アウトラインを編集モードで開き](#)、「プロパティ」タブを選択します。
- 2 「別名テーブル」ノードの下で別名テーブルを右クリックし、次のいずれかを選択します:
 - 「消去」: テーブルのコンテンツを消去します。テーブル自体は削除しません。
 - 削除: 別名テーブルを削除します。
- 3 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。

▶ すべての別名テーブルを消去または削除するには:

- 1 [アウトラインを開きます](#)。
- 2 「プロパティ」タブを選択します。
- 3 「別名テーブル」ノードを右クリックして、「全テーブルの消去」または「全テーブルの削除」を選択します。
- 4 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 別名テーブルの言語コードの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)
- [184 ページの「別名テーブルの作成」](#)

関連コマンド

query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アウトライン・エディタのアクティブな別名テーブルの設定

アウトライン・エディタがアウトライン・ツリーに別名を表示するように構成されている場合は、アクティブな別名テーブルに登録されている名前が表示されません。

デフォルトでは、Default という名前の別名テーブルに登録されている別名が表示されます。現在のアウトライン・エディタ・セッションでアクティブにする別名テーブルとして、別の別名テーブルを選択できます。

この設定とは別に、[管理コンソール・セッションでのアクティブな別名テーブルを設定](#)できます。

▶ データベースにアクティブな別名テーブルを設定するには:

- 1 [アウトラインを編集モードで開き、「プロパティ」タブを選択](#)します。
- 2 「別名テーブル」ノードの下で別名テーブルを右クリックし、「アクティブとして設定」を選択します。

コンソールの[アウトライン・ツール・オプション](#)で別名を表示するように選択すると、アウトライン・エディタのアウトライン・ツリーの各メンバーの横に、アクティブな別名テーブルに登録されている別名が表示されます。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)
- [44 ページの「管理サービス・コンソール・セッションでのアクティブな別名テーブルの設定」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

次元およびメンバーの別名の作成

アウトラインの次元、メンバー、および共有メンバーには、代替名(別名)を割り当てられます。たとえば、Sample Basic データベースのアウトラインの、Product 次元のメンバーは、製品コード(100 など)で識別することも、また、人間にとってわかりやすい別名(Colaなど)で識別することもできます。

動的時系列メンバーの別名を作成するには、[190 ページの「動的時系列メンバーの別名の作成」](#)を参照してください。

▶ 次元またはメンバーの別名を作成するには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 次元またはメンバーを右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」・ウィンドウで、「情報」タブを選択します。
- 4 「別名」ノードの下で、目的の別名テーブルの隣にあるテキスト・ボックスに、メンバーの別名を入力します。

適切な命名ルールを遵守してください。命名規則については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

- 5 作成した別名を表示するには、アウトラインに適切な別名テーブルがアクティブなテーブルとして設定されていることを確認し、「[アウトライン・ツール](#)」オプションを設定して別名を表示します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)
- [190 ページの「動的時系列メンバーの別名の作成」](#)
- [184 ページの「別名テーブルの作成」](#)
- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

動的時系列メンバーの別名の作成

データベースに定義されている各別名テーブルで、あらかじめ定義された動的時系列メンバーの別名を指定できます。指定した別名を使用して、Spreadsheet Add-in やレポートで動的時系列メンバーを取得できます。

▶ 動的時系列メンバーの別名を作成するには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 「アウトライン」>「動的時系列」を選択し、「[動的時系列メンバーの定義](#)」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 3 使用可能になっている各動的時系列メンバーに別名を指定するには、適切な別名テーブル列の交点セルを選択し、希望する別名を入力します。
- 4 「OK」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

関連情報

- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)
- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [177 ページの「動的時系列メンバーの使用可能化」](#)
- [581 ページの「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックス](#)
- [638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

メンバー式の操作

ここには次のトピックがあります:

- [191 ページの「式について」](#)
- [192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#)
- [194 ページの「メンバー式の印刷」](#)
- [194 ページの「式の構文のガイドラインについて」](#)
- [195 ページの「エディタでのメンバーの検索」](#)

式について

式によって、データベース・アウトラインのメンバー間の関係が計算されます。次の2つの方法で式を使用できます:

- 式をデータベース・アウトライン内のメンバーに適用します。この方法は、データベースの計算を慎重に制御して、精度やパフォーマンスを管理する必要がない場合に使用します。この方法では、式のサイズは 64KB 未満に制限されます。
- 式を計算スクリプト内に記述します。この方法は、データベースの計算を慎重に制御する必要がある場合に使用します。詳細は、[355 ページの「計算スクリプトについて」](#)を参照してください。

式の作成の詳細は、Oracle Essbase データベース管理者ガイドを参照してください。式の構文の詳細は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

注: 集約ストレージ・データベースでの式の使用に関しては、別のガイドラインがあります。詳細は、[75 ページの「集約ストレージ・データベースの式の作成」](#)を参照してください。

関連情報

- [192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#)
- [147 ページの「式の表示」](#)
- 式の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

- 式の例の検討(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [194 ページの「式の構文のガイドラインについて」](#)

関連コマンド

getmbrcalc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アウトライン内の式の作成および編集

式エディタを使用すると、特定のアウトライン・メンバーに適用する式を記述できます。このトピックでは、ブロック・ストレージ・データベースの式を作成および編集する方法について説明します。集約ストレージ・データベースの式の詳細は、[75 ページの「集約ストレージ・データベースの式の作成」](#)を参照してください。

式は、演算子、関数、次元名、メンバー名、代替変数、および数値定数を組み合わせて作成できます。計算スクリプト・エディタと同じように、式エディタにも、式を入力するための編集ペインが用意されています。式エディタ内のフォーカスは、[Tab]キーや矢印キーを使用して移動できます。また、マウスを使用して式コンポーネントを選択し、式の編集ペインにそれらを挿入することもできます。

メンバー式が正しいかどうか、必ず確認してください。式の確認メッセージで、メッセージ・ペインの参照が含まれることがあります。メッセージ・ペインは、管理サービス・コンソール・ウィンドウの最下位にあります。

注： 新たに追加されたメンバーが含まれる式の検証を行うと、アウトライン確認エラーが発生する場合があります。こうしたエラーが発生してもサーバーへのアウトラインの保存には影響はありません。サーバーにアウトラインを保存すると、式の検証がエラーなしで完了するようになります。

式の変更は行わずに表示のみを行う場合は、アウトライン・ビューアの**式ビューア**を使用します。

計算スクリプトで使用する式の記述の詳細は、[359 ページの「スクリプトの作成」](#)を参照してください。

▶ 式を作成または編集するには:

- 1 **編集モードでアウトラインを開きます。**
- 2 次元またはメンバーを右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「**式**」タブを選択します。
- 4 メンバー名ではなく別名を使用する場合は、「別名の使用」ボタンを選択し、「別名テーブル」ドロップダウン・リストから希望する別名テーブルを選択します。
- 5 右側の「スクリプト」タブで、式のテキストを入力する位置にテキスト・マーカーを挿入します。
- 6 **式構文ガイドライン**に従ってアクションを実行します:
 - キーボードを使用して式のテキストを入力します。スペースや特殊文字が含まれているメンバー名は引用符で囲んでください。

メンバー名の重複が許可されているアウトラインで重複メンバー名を入力する場合は、修飾メンバー名を入力することにより重複するメンバーを区別できるようにする必要があります。重複メンバーの修飾メンバー名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで表示できます。修飾メンバー名は二重引用符で囲んで入力してください。

また、アウトライン・ツリーからメンバー名を挿入することもできます。

- 「コマンドと関数」のツリーで、演算子または関数をダブルクリックします。選択した演算子または関数が、テキスト領域のテキスト・マーカーの位置に挿入されます。

「引数の挿入」をオンにすると、コマンドまたは関数の挿入時に、テキスト領域に引数が挿入されます。

- アウトライン・ツリーでメンバー名をダブルクリックすると、式のテキスト・マーカーの位置にそのメンバー名が挿入されます。メンバーの検索を実行して、指定したテキストが含まれるメンバーを検索できます。

メンバー名の重複が許可されているアウトラインで重複メンバー名を挿入する場合、このスクリプトには修飾メンバー名が挿入されます。たとえば、アウトラインに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれている場合は、いずれかの New York メンバーを挿入するとき、スクリプトには修飾メンバー名が挿入されます。

- テキスト・エディタからテキストを貼り付けます。
 - 式の編集ペインで右クリックすると、次のタスクを実行できます：
 - 直前のアクションを元に戻すおよびやり直し。
 - テキストのコピー、切り取り、および貼付け。
 - 式の中のすべてのテキストの選択。
 - テキストの検索または置換。この操作を繰り返し行って、同じテキストが出現する箇所を次々に検索または置換できます。
 - 指定した行番号への移動
- 式エディタのステータス領域には、移動に応じたテキスト・マーカーの位置が表示されます。
- 行末にはセミコロン(;)を入力します。
 - テキスト領域のテキストをすべて削除する場合は、「消去」を選択します。

7 「確認」をクリックして、式が正しいことを確認します。

式を確認できるのは、Essbase サーバーに接続している場合のみです。

注： 新たに追加されたメンバーが含まれる式の検証を行うと、アウトライン確認エラーが発生する場合があります。こうしたエラーが発生してもサーバーへのアウトラインの保存には影響はありません。サーバーにアウトラインを保存すると、式の検証がエラーなしで完了するようになります。

8 「OK」をクリックして、式を保存します。

注：「次へ」や「前へ」をクリックして別のメンバーに移動したり、現在のメンバーの別のタブを選択したりすると、現在のメンバー式に加えられた変更が保存されます。

関連情報

- 式の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 式の構文(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 式の例の検討(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [メンバーのプロパティ - 「式」タブ](#)
- [147 ページの「式の表示」](#)
- [191 ページの「式について」](#)
- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)

関連コマンド

getmbrcalc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

メンバー式の印刷

アウトライン・エディタの式エディタからメンバー式を印刷できます。

▶ 式を印刷するには:

- 1 [アウトライン・エディタ](#)でアウトラインを開きます。
- 2 メンバーを右クリックして、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「式」タブを選択します。
- 4 「印刷」ボタンをクリックします。
- 5 「印刷」ダイアログ・ボックスで、印刷オプションを選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

[141 ページの「アウトラインの印刷」](#)

式の構文のガイドラインについて

ブロック・ストレージ・データベースの式を作成するときは、式、計算コマンドおよび計算関数の適切な構文ガイドラインに従う必要があります。

集約ストレージ・データベースの式の詳細は、[75 ページの「集約ストレージ・データベースの式の作成」](#)を参照してください。

詳細は、次の資料を参照してください:

- 式の構文(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 計算コマンド(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- 計算関数(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

関連情報

- [191 ページの「式について」](#)
- [192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」](#)
- 式の例の検討(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [637 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスの「式」タブ](#)

エディタでのメンバーの検索

エディタ・ウィンドウでは、編集集中のオブジェクトに関連付けられているアウトラインが、エディタ・ウィンドウの左側のペインにツリー形式で表示されます。

アウトライン・ツリー内のメンバーは、このトピックで説明する方法を使用して検索できます。

アウトライン・エディタまたはアウトライン・ビューアでメンバーを検索する場合は、[153 ページの「アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換」](#)を参照してください。

▶ エディタ・ウィンドウのアウトライン・ツリー内でメンバーを検索するには:

- 1 エディタを開きます。
- 2 エディタ・ウィンドウのアウトライン・ツリーが表示されていない場合は、エディタに[アウトライン](#)を関連付けます。
ウィンドウの左上のペインにアウトライン・ツリーが表示されます。
- 3 アウトライン・ツリー領域を右クリックして、ポップアップ・メニューから「[メンバーの検索](#)」を選択します。
- 4 「[メンバーの検索](#)」ダイアログ・ボックスで、検索するテキストを入力し、適切な検索オプションを選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

管理サービス・コンソールでは、エディタ・ウィンドウの右側のペインにある「[結果の検索](#)」タブに結果が表示され、一致した数を示すウィンドウが表示されます。

関連情報

- [619 ページの「「メンバーの検索」ダイアログ・ボックス」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)
- [360 ページの「スクリプトを開く」](#)
- [308 ページの「フィルタの作成または編集」](#)
- [153 ページの「エディタでのテキストの検索」](#)

属性の操作

ここには次のトピックがあります:

- [196 ページの「属性について」](#)

- 197 ページの「属性の定義」
- 197 ページの「値の範囲へのメンバー名の割当て」
- 198 ページの「基本次元のメンバーへの属性の関連付け」
- 199 ページの「標準次元への属性次元の関連付け」
- 200 ページの「属性次元のメンバーの接頭辞または接尾辞のフォーマットの定義」
- 200 ページの「属性計算次元のメンバー名の変更」
- 201 ページの「ブール属性次元のメンバー名の設定」
- 202 ページの「日付属性次元のメンバー名のフォーマットの設定」
- 202 ページの「属性次元タイプの設定」
- 203 ページの「属性データの計算」
- 203 ページの「アウトライン・エディタを使用した UDA の操作」
- 204 ページの「可変属性について」
- 206 ページの「可変属性の追加」
- 207 ページの「可変属性の使用可能化」

属性について

属性とは、データの特性です。たとえば製品のサイズや色が属性にあたります。属性を使用すると、次元のメンバーをその特性に基づいてグループ化して分析できます。たとえば、製品のサイズまたはパッケージに基づいてその製品の収益率を分析でき、また各マーケット地域の人口規模などのマーケット属性を分析に取り入れることで、より有効な結論を導き出すことが可能です。

Pkg Type などの属性次元には、属性以外の次元の個々のメンバーのパッケージ特性を表すメンバーが含まれています。属性以外の次元は、標準次元と呼ばれます。属性次元を標準次元に関連付けると、その標準次元はその属性次元の基本次元になります。たとえば、Pkg Type を標準次元の Product に関連付けると、Product は Pkg Type 属性次元の基本次元になります。1つの属性次元が持つことができる基本次元は、1つのみです。

また、属性次元の個々のメンバーを、その基本次元のメンバーに関連付ける必要もあります。たとえば、Bottle および Can というメンバーが含まれる Pkg Type 次元で Bottle または Can を基本次元の各メンバーに関連付けると、製品をパッケージ別に分析できるようになります。

アウトラインに属性次元が含まれている場合には、Essbase では属性計算というデフォルト名を持つ、特別な次元が使用できます。属性計算次元は、分析するアイテムの平均やカウントなどを計算する一連の機能を提供します。属性計算次元の名前および属性計算次元のメンバーの名前は変更が可能です。属性計算次元とメンバーの名前は、アウトライン・ビューアではアウトライン・ツリーに表示されます。アウトライン・エディタでは、「プロパティ」タブに名前が表示されます。

注： 集約ストレージ・データベースでの属性次元および属性の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

複数の属性次元で同じ属性名を使用することが必要になる場合があります。たとえば、Size 属性次元と Age 属性次元の両方で、20 という名前のメンバーの使用が必要になる場合があります。Essbase には、接頭辞または接尾辞を適用して、メンバー名を区別できるようにする機能が用意されています。

関連情報

- [197 ページの「属性の定義」](#)
- 属性の操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [203 ページの「属性データの計算」](#)

属性の定義

ルール・ファイルを使用してアウトラインを動的に構築する場合、属性次元を自動的に定義して構築して、属性次元のメンバーを基本次元のメンバーに関連付けられます。属性次元の構築および属性の関連付けの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

属性を手動で操作する場合は、アウトライン・エディタを使用して、次元やメンバーに関連する次のタスクを実行します:

- 属性次元を作成します。[アウトラインへの次元の追加](#)を参照してください。属性次元は、アウトラインの最下位に配置してください。
- [次元に属性次元タグを付け](#)、属性次元タイプ(テキスト、数値、ブールまたは日付)を設定します。
- 属性次元のメンバー名のフォーマットを定義します:
 - 属性次元のメンバー名で[接頭辞または接尾辞を使用する](#)
 - [日付属性次元のメンバー名のフォーマット](#)
 - [ブール属性次元のメンバーに新しい名前を付ける](#)(必要に応じて)
 - [数値次元の値の範囲の名前付けルール](#)(必要に応じて)
 - [属性計算次元のメンバーに新しい名前を付ける](#)(必要に応じて)
- 属性次元にメンバーを追加します。[次元へのメンバーの追加](#)を参照してください。
- 属性次元を標準次元に関連付けて、属性次元の基本次元を定義します。[標準次元への属性次元の関連付け](#)を参照してください。
- 属性次元のメンバーを基本次元のメンバーに関連付けます。[基本次元のメンバーへの属性の関連付け](#)を参照してください。

関連情報

[196 ページの「属性について」](#)

値の範囲へのメンバー名の割当て

数値属性次元のメンバーは、単一の数値または値の範囲を表すことが可能です。値の範囲を使用するのは、データの個々の値ではなく、値の範囲に基づいてデータを蓄積し取得する場合です。たとえば、様々な州の売上値のビューを人口カテ

ゴリにグループ化するため、1 から 100,000 の人口を表す属性を定義できます。さらに 100,001 から 1,000,000 の人口を表す属性を定義します。

数値属性次元で範囲を使用する場合は、属性次元のメンバー名が範囲の下限を表すのか上限を表すのかを定義する必要があります。

- ▶ 数値属性次元で、値の範囲を表すメンバーに名前を割り当てるための規則を定義するには:
 - 1 **アウトラインを編集モードで開き**、「プロパティ」タブを選択します。
 - 2 「**ブール、日付および数値属性の設定**」オプション・グループで「**数値範囲の指定**」オプションを選択して、数値属性の値が範囲の上限を表すのか下限を表すのかを設定します。
 - 3 「OK」をクリックします。

関連情報

- [196 ページの「属性について」](#)
- [664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ](#)
- 値の範囲を表すメンバー名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

基本次元のメンバーへの属性の関連付け

属性次元を標準次元に関連付けて基本次元を作成したら、属性次元のメンバーを基本次元のメンバーに関連付けて、属性分析を行えるようにする必要があります。

たとえば、Sample Basic データベースの製品 100-30 はボトル詰めで販売されます。製品 100-30 にボトルの属性を設定するには、Pkg Type 属性次元の Bottle メンバーを、基本次元(Product)の 100-30 メンバーに関連付けます。

属性の関連付けは、一定の規則に従って行う必要があります。

- ▶ 基本次元のメンバーに属性次元のメンバーを関連付ける手順は、次のとおりです:
 - 1 **編集モードでアウトラインを開きます。**
「アウトライン」タブが表示されます。
 - 2 基本次元の 1 つまたは複数のメンバーを選択して右クリックし、「**メンバー・プロパティの編集**」を選択します。
 - 3 「**メンバーのプロパティ**」ダイアログ・ボックスで、「**関連付け**」タブを選択します。
 - 4 「**使用可能な属性**」リスト・ボックスで、属性次元の適切なメンバーを選択します。
 - 5 「**割当て**」をクリックして、属性次元の選択したメンバーを基本次元のメンバーに関連付けます。
 - 6 次のいずれかのアクションを行います:

- 属性の関連付けを解除するには、その属性を「関連付けられた属性」リスト・ボックスで選択して「削除」をクリックします。
- 選択した基本次元のメンバーに関連付けられているすべての属性を削除するには、「すべて削除」をクリックします。

7 「OK」をクリックします。

関連情報

- [標準次元への属性次元の関連付け](#)
- [196 ページの「属性について」](#)
- [197 ページの「属性の定義」](#)

標準次元への属性次元の関連付け

属性次元を標準次元に関連付けると、その標準次元はその属性次元の基本次元になります。詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』で属性の操作に関する項を参照してください。

▶ 属性次元を標準次元に関連付ける手順は、次のとおりです:

1 **編集モードでアウトラインを開きます。**

「アウトライン」タブが表示されます。

2 **標準次元を選択して右クリックし、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。**

3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「**属性**」タブを選択します。

4 次のいずれかのアクションを行います:

- 選択した標準次元に属性次元を 1 つ関連付けるには、関連付ける属性次元を「他の属性次元」リスト・ボックスで選択して「<」をクリックします。
- 選択した標準次元に、指定可能なすべての属性次元を関連付けるには、「<<」をクリックします。
- 「関連付けられた属性次元」リスト・ボックスで選択されている属性次元の関連付けを解除するには、「>」をクリックします。
- すべての属性次元の関連付けを解除するには、「>>」をクリックします。

5 「OK」をクリックします。

6 **基本次元のメンバーに属性を関連付けます。**

関連情報

- [636 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「属性」タブ](#)
- [198 ページの「基本次元のメンバーへの属性の関連付け」](#)
- [196 ページの「属性について」](#)

属性次元のメンバーの接頭辞または接尾辞のフォーマットの定義

注： ここに示す説明は、重複メンバー名のアウトラインにおける属性次元には適用されません。詳細は、[属性次元のメンバー名における、接頭辞および接尾辞のフォーマットの設定](#)を参照してください。

同じデータベース内のブール、日付、数値のすべての属性次元の間で重複するメンバー名が生成されないように、属性次元のメンバー名に接頭辞または接尾辞を自動的に追加する方法を定義できます。

たとえば、メンバー名の接尾辞として属性次元の名前を追加できます(2つの名前はアンダースコアで区切られます)。この場合、Sample Basic データベースの Ounces 属性次元のメンバー 12 には、12_Ounces という一意な完全メンバー名が与えられます。

指定したフォーマットは、アウトライン内の数値、ブール、日付のすべての属性次元のレベル 0 メンバーの名前に適用されます。デフォルトでは、属性次元のメンバー名には接頭辞または接尾辞は付加されません。

▶ ブール、日付および数値属性次元のメンバー名の接頭辞または接尾辞のフォーマットを定義するには:

- 1 [アウトラインを編集モードで開き](#)、「プロパティ」タブを選択します。
- 2 「属性の設定」の下の「接頭辞/接尾辞のフォーマット」オプション・グループで、属性名に適用する接頭辞または接尾辞のフォーマットを選択します。
- 3 「OK」をクリックします。

関連情報

- 属性次元のメンバー名における、接頭辞および接尾辞のフォーマットの設定 (『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [196 ページの「属性について」](#)
- [664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ」](#)

関連コマンド

getattrinfo(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

属性計算次元のメンバー名の変更

アウトラインでの名前の重複を避けるために、属性計算次元の名前または属性計算次元のメンバーの名前変更が必要になる場合があります。

メンバーにどのような名前を付けても、そのメンバーの機能は変わりません。たとえば、Sum メンバーは、どのような名前を付けても、合計を計算します。

▶ 属性計算次元の名前および属性計算次元のメンバーの名前を変更するには:

- 1 [アウトラインを編集モードで開き](#)、「プロパティ」タブを選択します。

- 2 属性計算次元名を変更するには、「計算次元名」ノードの下で、「次元名」:」の横に表示されている値をクリックします。表示されたテキスト・ボックスに、その次元の新しい名前を入力します。
- 3 特定のメンバーの名前を変更するには、「計算次元名」ノードの下で、メンバーの横に表示されている値をクリックします。表示されたテキスト・ボックスに、正しい命名ルールに従って新しい名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [203 ページの「属性データの計算」](#)
- [664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ」](#)

ブール属性次元のメンバー名の設定

1つのデータベース内のすべてのブール属性次元には、レベル0メンバーが2つあります。このメンバーのデフォルトの名前は、True と False です。Essbase では、このデフォルトの名前は Yes と No などに変更できます。

属性次元タイプをブールに設定すると、Essbase では設定で指定されている名前を持つ2つのメンバーが自動的に作成されます。メンバーを持っている属性次元のタイプをブールに変更するには、その前にメンバーを削除しておく必要があります。

ブール・メンバー名の設定を変更しても、すでに割り当てられているブール属性の名前が変更されることはありません。たとえば、製品 100-10 の Caffeinated 属性が True である場合、ブール属性次元のメンバー名を True から Yes に変更しても、製品 100-10 の Caffeinated 属性が Yes に変更されることはありません。

複数のブール属性次元がある場合、[接頭辞または接尾辞メンバー名フォーマットを指定](#)して、メンバー名が一意になるようにしてください(Caffeinated_True や Caffeinated_False など)。

- データベース内のブール属性次元のメンバー名の設定を変更するには:
- 1 [アウトライン・エディタでアウトラインを開いて「プロパティ」タブを表示](#)します。
 - 2 ブール、日付および数値属性設定オプション・グループで、ブール属性次元の True メンバーおよび False メンバーの名前を指定します。
 - 3 「OK」をクリックします。

関連情報

- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のブール属性メンバー名の設定に関する項
- [664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ」](#)

日付属性次元のメンバー名のフォーマットの設定

日付属性次元のメンバー名のフォーマットを設定できます。日付メンバー名のフォーマットを変更する場合、日付属性次元の既存のメンバー名は無効になることがあります。たとえば、10-18-1999 というメンバーが存在しているときにフォーマットを dd-mm-yyyy に変更すると、アウトラインの確認で 10-18-1999 は無効と判断されます。日付フォーマットを変更した場合は、日付属性次元を再構築し、基本次元のメンバーに日付属性を再度関連付ける必要があります。

日付属性次元が複数ある場合は、メンバー名に接頭辞または接尾辞を付けて、メンバー名を一意にすることを検討してください。たとえば Product_07012002、Market_07012002 のようにします。200 ページの「属性次元のメンバーの接頭辞または接尾辞のフォーマットの定義」を参照してください。

▶ 日付属性次元のメンバーの日付フォーマットを変更するには:

- 1 アウトラインを編集モードで開き、「プロパティ」タブを選択します。
- 2 「ブールおよび日付メンバー名」ノードの下で、アウトラインのすべての日付属性次元に適用する日付フォーマットを選択します。
- 3 「OK」をクリックします。

関連情報

- 664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ」
- 日付属性次元のメンバー名の変更(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 196 ページの「属性について」
- 200 ページの「属性次元のメンバーの接頭辞または接尾辞のフォーマットの定義」

属性次元タイプの設定

属性には、テキスト、ブール、日付、または数値タイプのプロパティがあります。タイプは次元レベルで割り当てますが、実際に適用されるのはその次元のレベル 0 メンバーのみです。

ブール、日付、数値のすべての属性次元の間でメンバー名が重複しないように、メンバー名に接頭辞または接尾辞を付加することが必要な場合もあります。

メンバーを持つ既存の次元で属性次元のタイプを変更した場合、既存のレベル 0 メンバーの名前が、新しい属性次元タイプのルールに準拠しなくなることがあります。既存のメンバーの名前や関連付けをユーザーがどのように処理しようとしているかは把握できないため、Essbase ではメンバーの削除や名前の変更などは行われません。属性次元タイプの変更によってルールに準拠しなくなった既存のメンバーの名前は、必要に応じて、手動で削除または変更する必要があります。属性タイプの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

デフォルトの属性次元タイプはテキストです。

▶ 属性次元タイプを設定するには:

- 1 アウトライン・エディタでアウトラインを開いて「アウトライン」タブを表示します。
- 2 属性次元を右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 4 「次元タイプ」ドロップダウン・リストで、「属性」を選択します。
- 5 「属性タイプ」ドロップダウン・リストで、属性タイプを選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- 属性タイプ(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [属性次元のメンバーの接頭辞または接尾辞のフォーマットの定義](#)
- [638 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

属性データの計算

Essbase における属性データの計算は、Essbase で自動的に作成されるシステム定義の次元(属性計算次元)のメンバーを使用して、取得時に動的に行われます。この次元を使用して、合計や平均などの異なる計算関数を同じ属性に適用できます。属性次元メンバーに特定の計算も実行できます。属性次元メンバーに特定の計算も実行できます。たとえば、オンス単位のサイズの製品について、1 オンス当りの収益率を得ることが可能です。

注： 集約ストレージ・データベースの属性計算で使用できるのは、Sum 計算のみです。

属性計算次元には、属性データの計算やレポートに使用する 5 種類のメンバーがあります。デフォルトのメンバー名は変更できます。詳細は、[200 ページの「属性計算次元のメンバー名の変更」](#)を参照してください。

アウトライン・エディタを使用した UDA の操作

メンバーに対してユーザー定義属性を作成できます。ユーザー定義属性(UDA)とは、メンバーを説明する単語または語句です。たとえば、Major Market という UDA を作成して、アウトラインの中の主要マーケットであるメンバーに、その UDA を割り当てられます。

属性と UDA の比較については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

▶ UDA を作成、割当てまたは削除するには:

- 1 [編集モードでアウトラインを開きます。](#)
- 2 UDA を管理するメンバーを選択します。

- 3 右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 4 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「UDA」タブを選択します。
「<選択したメンバー名>に割り当てられた UDA」リスト・ボックスに、選択したメンバーに現在割り当てられている UDA が表示されます。
「<次元名>次元に割り当てられた UDA」リスト・ボックスに、その次元に現在定義されているすべての UDA が表示されます。
- 5 アウトラインで選択したメンバーに UDA を割り当てる場合は、「」<次元名>「次元に割り当てられた UDA」リスト・ボックスで UDA をダブルクリックするか、UDA を選択して「割当て」をクリックします。
- 6 UDA を作成して、新しい UDA をすべての選択したメンバーに割り当てる場合は、テキスト・ボックスに UDA 名を入力し、「割当て」をクリックします。両方のリスト・ボックスに UDA が表示されます。
- 7 UDA の割当てを解除する場合は、「<選択したメンバー名>に割り当てられた UDA」リスト・ボックスで目的の UDA を選択し、「割当て解除」をクリックします。

注： すべてのメンバーから割当てを解除した UDA は、ダイアログ・ボックスを閉じるとアウトラインから削除されます。
- 8 「OK」をクリックします。

関連情報

- [640 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「UDA」タブ](#)
- UDA の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [229 ページの「ルール・ファイルを使用した UDA の更新」](#)

可変属性について

通常、製品はその製品を記述または定義する属性を持ちます。たとえば、ある製品が、製品サイズをオンスで記述する属性と、製品の種類を記述する属性を持つとします。このようなシナリオでは、製品は基本次元で、オンスと種類は属性次元です。

注： 基本次元と属性次元の詳細な説明は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

可変属性を使用すると、独立次元と呼ばれる 3 番目の次元に関連する 2 つの値を追跡できます。たとえば、8 オンスの製品を 1 年間にわたって追跡できます。このシナリオでは、時間次元が独立次元になります。この第 3 の要素の値は変動が可能です(可変属性という名前はそこに由来します)。たとえば、製品を、1 年間、1 四半期間、または 1 か月間にわたって追跡できます。

注： 独立次元には、連続と個別の2つのタイプがあります。連続次元のメンバーは、連続性を反映します。たとえば、週、月、および四半期は、時間次元における連続性を反映します。個別次元のメンバーは、連続性を持ちません。たとえば、マーケットの次元の California、Texas、および Ohio は、連続性に基づく関係を有していません。

別の例として、次のような、あるクライアントを受け持つ営業担当者が年度途中で変わるというシナリオを例に説明します。過去6か月間の顧客の売上の合計と営業担当者の割当て状況は次のとおりです：

表 2 可変属性の例: 期間内で営業担当者が変わる場合

3月	4月	5月	6月	7月	8月
4000	6000	2000	1000	1000	7000
ジョーンズ	ジョーンズ	ジョーンズ	スミス	スミス	スミス

この例では、営業担当者が可変属性です。データを取得すると、営業担当者ジョーンズが3月から5月の間にこの顧客に合計\$12,000の製品を販売し、その後、営業担当者スミスが6月から8月までの間にこの顧客に合計\$9,000の製品を販売したことが示されます。可変属性を使用しない場合、現在の担当者であるスミスが唯一の営業担当者として認識され、すべての売上(\$21,000)がスミスに計上されてしまいます。

可変属性は、メンバーのグループ化に対する代替の方法としても使用できます。たとえば、色を使用してSKUをグループ化できます。このシナリオでは、属性次元"Color"がSUBSKUに関連付けられています：

```

Product_H
|
|__Family
|  |
|  |__SKU
|  |
|  |__SUBSKU
|
|__Color
|
|__SUBSKU

```

Color を可変属性に設定すると、取得の結果は次の表のようになります：

表 3 前述の例の SUBSKU および SKU の取得結果

SUBSKU	SKU
赤	100
白	400
白	600

SUBSKU	SKU
黒	200
黒	300
銀	500

可変属性は、次のガイドラインを満たしている必要があります:

- 複数のチェーンを有していること。
- リーフ・レベルが一致していること。

アウトラインでの可変属性のサポートを使用可能に設定できます。可変属性として機能するように属性次元を定義できます。また、可変属性を編集して、必要な情報のタイプを反映させられます。

関連情報

- [207 ページの「可変属性の使用可能化」](#)
- [206 ページの「可変属性の追加」](#)

可変属性の追加

可変属性は、属性次元の特定のメンバーを関連付けることによって、基本次元を属性次元と関連付けます。

▶ 可変属性を次元レベルで追加するには:

- 1 「アウトライン・エディタ」でアウトラインを開きます。
- 2 **オプション:** 必要に応じて、アウトラインで可変属性を使用可能にします。 [207 ページの「可変属性の使用可能化」](#) を参照してください。
- 3 「アウトライン」タブが選択されていない場合は、それを選択します。
- 4 属性次元を選択します。
- 5 右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 6 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「属性」タブを選択します。

すでに基本次元に関連付けられている属性次元が「関連付けられた属性次元」テキスト・ボックスに表示されます。基本次元に関連付けられていない他の次元は「他の属性次元」テキスト・ボックスに表示されます。独立次元は「独立次元」テキスト・ボックスに表示されます。

- 7 可変属性を追加する次元がまだ基本次元に関連付けられていない場合は、「他の属性次元」でその次元を選択して「割当て」ボタンをクリックします。

注: 基本次元に割り当てられている属性次元の割当てを解除するには、「関連付けられた属性次元」テキスト・ボックスでその次元を選択して「削除」ボタンをクリックします。

- 8 「独立次元」テキスト・ボックスで、可変属性として使用する独立次元の横のチェック・ボックスを選択します。

注： 上下の矢印ボタンを使用して、独立次元の順序を変更できます。

9 独立次元のタイプとして、「連続」または「個別」を選択します。

注： 独立次元には、連続と個別の2つのタイプがあります。連続次元のメンバーは、連続性を反映します。たとえば、週、月、および四半期は、時間次元における連続性を反映します。個別次元のメンバーは、連続性を持ちません。たとえば、マーケットの次元の California、Texas、および Ohio は、連続性に基づく関係を有していません。

10 「OK」をクリックします。

「アウトライン・エディタ」の「アウトライン」タブに、独立次元が太字のフォントで表示されます。

11 独立次元を選択します。

12 右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。

13 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「関連付け」タブを選択します。

14 「使用可能な属性」テキスト・ボックスで、可変属性に対して使用する属性次元を選択します。

15 オプション - 「範囲の追加」ボタンをクリックして、可変属性に範囲を割り当てます。

16 「割当て」ボタンをクリックします。

17 「関連付けモード」ダイアログ・ボックスで、適切な応答を選択します。

18 「OK」をクリックします。

19 アウトラインを保存します。

メンバーのプロパティを再度開くと、新たに追加された可変属性が表示されます。

関連情報

- [204 ページの「可変属性について」](#)
- [207 ページの「可変属性の使用可能化」](#)

可変属性の使用可能化

▶ アウトラインでの可変属性のサポートを使用可能にするには:

- 1 「アウトライン・エディタ」でアウトラインを開きます。
- 2 「プロパティ」タブを選択します。
- 3 「アウトラインのプロパティ」メニューで、「可変属性は使用可能です」を選択して右クリックします。
- 4 「TRUE」を選択します。

注： アウトラインでの可変属性のサポートを無効化するには、ドロップダウン・リストから「FALSE」を選択します。これにより、属性の関連付けがすべて削除されます。この操作は元に戻せません。後で属性を再び関連付ける場合は、手動で関連付けを行う必要があります。

関連情報

- [204 ページの「可変属性について」](#)
- [206 ページの「可変属性の追加」](#)

8

データ・ロードおよび次元構築

この章の内容

データ・ロードと次元構築について	209
データ・ロードのルール・ファイルの作成	210
次元構築ルール・ファイルの作成	210
データ・ロードおよび次元構築	211
ルール・ファイルを使用したアウトラインの動的な更新	213
ルール・ファイルの作成および管理	214
ルール・ファイルによるレコードの操作	229
ルール・ファイルによるフィールドの操作	233
ルール・ファイルによるデータの操作	245

データ・ロードと次元構築について

Essbase データベースには、次元、メンバー、およびデータ値が含まれています。

- データ・ソースおよびルール・ファイルを使用して、次元とメンバーをデータベースに追加できます。このプロセスを次元構築と呼びます。また、[アウトライン・エディタ](#)で、次元構築のルール・ファイルを使用して、[アウトラインを更新](#)し、次元とメンバーを動的に追加できます。
- スプレッドシートや SQL データベースなどのデータ・ソースを使用して、データ値をデータベースに追加できます。このプロセスをデータ・ロードと呼びます。完全にフォーマットされていないデータ・ソースからデータをロードするには、ルール・ファイルが必要です。

▶ データあるいは次元とメンバーを Essbase データベースに追加するには:

- 1 必要に応じて、データ・ソースを設定します。データ・ソースの設定の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- 2 必要に応じて、[データ・ロード](#)または[次元構築ルール・ファイル](#)を設定します。
- 3 [データをロードするか、次元を構築](#)します。

関連情報

- データのロードおよび次元構築の理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- ルール・ファイルの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)

- 210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」
- 551 ページの「データ・ロード」ダイアログ・ボックス」
- 213 ページの「ルール・ファイルを使用したアウトラインの動的な更新」

データ・ロードのルール・ファイルの作成

データ・ロード・ルール・ファイルは、Essbase データベースにロードするデータ・ソース値の処理方法を Essbase に伝えます。

▶ データ・ロード・ルール・ファイルを作成するには:

- 1 ルール・ファイルを作成します。
- 2 データ・ソースのファイル区切り記号を設定します。
- 3 必要に応じて、ロード中にデータ・ソース値を変更するためのレコード、フィールド、およびデータ操作を設定します。
- 4 ルール・ファイルを検証します。
- 5 ルール・ファイルを保存します。

注: Administration Services を UNIX で実行している場合、.XLS ファイルからのデータ・ロードはサポートされません。

関連情報

- ルール・ファイルの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 235 ページの「フィールド・タイプの設定(データのロード)」
- 215 ページの「データ準備エディタについて」

次元構築ルール・ファイルの作成

次元構築ルール・ファイルでは、次元構築時における次元およびメンバーの処理方法を指定します。ルール・ファイルを作成した後、このファイルとデータ・ソースを使用して次元構築を実行します。

▶ 次元構築のルール・ファイルを作成するには:

- 1 ルール・ファイルを作成します。
- 2 データ・ソースのファイル区切り記号を設定します。
- 3 次元を作成する場合は、次元に名前を付けます。
- 4 構築方法を選択します。
- 5 必要に応じて、構築するメンバーおよび次元のプロパティを設定します。
- 6 必要に応じて、データのロード時にデータ・ソース・メンバーを変更するレコードおよびフィールド操作を設定します。

- 7 フィールド・タイプ、フィールド番号、次元などの**フィールド・タイプ情報**を設定します。
- 8 **ルール・ファイルを検証**します。
- 9 **ルール・ファイルを保存**します。

関連情報

- ルール・ファイルの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)

データ・ロードおよび次元構築

「データ・ロード」ダイアログ・ボックスは、少なくとも自身が書込み権限を持つ集約ストレージ・データベースやブロック・ストレージ・データベースに、データをロードおよび次元を構築(メンバーをロード)するために使用します。

注： 集約ストレージ・データベースとブロック・ストレージ・データベースでは、ロードと構築のプロセスが異なります。たとえば、集約ストレージ・データベースはバッファを使用してデータ・ソースのバッチ・リストを保持します。集約ストレージと**ブロック・ストレージ**の関連ドキュメントを参照してください。

データ・ロードや次元構築をバックグラウンドで実行している間も、作業を続行し、プロセスのステータスを確認できます。ただし、Essbase 管理サーバーはシャット・ダウンできません。Essbase がバックグラウンドですべてのデータ・ロードおよび次元構築を実行するか、ロードや構築のたびにプロンプトを表示するかを指定できます。[102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)を参照してください。

▶ データをロード、または次元を構築するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「データのロード」を選択します。
「データ・ロード」ダイアログ・ボックスが表示されます。データ・ソース・テーブルの最初の行には、デフォルト設定(データ・ファイル、ロードのみ)が移入されます。最初の行を編集、または「挿入」をクリックして新しい行を挿入できます。
- 3 以前のデータ・ロードや次元構築からの情報をデータ・ソース・テーブルに移入する場合は、「開く」をクリックし、その情報を含むファイルの場所を検索して選択します。
- 4 データ・ソース・テーブルを手動で移入する手順は、次のとおりです:
 1. 「データ・ソース・タイプ」列をクリックし、「データ・ファイル」または「SQL」を選択します。

2. 「モード」列をクリックし、「ロードのみ」、「ビルドのみ」、「両方」のいずれかを選択します。
3. 「SQL ユーザー名」および「SQL パスワード」で「SQL」を選択した場合は、データベース・ユーザー名とパスワードを入力します。
4. 「データ・ファイル」を選択した場合は、「データ・ファイルの検索」をクリックし、ファイル・システムまたは Essbase サーバーから 1 つ以上のデータ・ファイルを検索して選択します。

「開く」ダイアログ・ボックスでの表示と同じ順序で、複数のファイルがデータ・ソース・テーブルに追加されます。データ・ソースは、データ・ソース・テーブルでの表示と同じ順序でロードされます。

クライアント・コンピュータではなく、Essbase サーバー・コンピュータからデータ・ソースをロードすることで、ロード時間を短縮できます。

5. 選択したデータ・ソースとともにルール・ファイルを使用する場合は、「ルール・ファイルの検索」ボタンをクリックし、ファイル・システムまたは Essbase サーバーから 1 つ以上のルール・ファイルを検索して選択します。複数のルール・ファイルを選択すると、「開く」ダイアログ・ボックスに表示される順序でテーブルに追加されます。これらのファイルは、テーブルで選択した最初の行から連続して追加されます。

データ・ソースごとに異なるルール・ファイルを関連付けられます。

6. データのみのロードを実行中にエラーが発生した場合にデータ・ロードを停止するには、「エラーにより中止」列のチェック・ボックスを選択します。
7. ロードまたは構築中に発生するエラーがエラー・ログ・ファイルに書き込まれるようにする場合は、「エラー・ファイル」列で、エラーを書き込む場所への完全パスを指定します。
8. 新しく発生したエラーが既存のエラー・ファイルの内容を上書きするように指定する場合は、「上書き」列のチェック・ボックスを選択します。
9. 複数のデータ・ソース、ルール・ファイル、および設定を選択するには、前述の手順を繰り返します。
10. 指定した情報をデータ・ソース・テーブルに保存する場合は、「保存」をクリックし、その情報をクライアント・ファイル・システム上の XML ファイルに保存します。

5 次元構築について、再構築が遅延された次元構築を実行する場合は、「再構築が遅延された次元構築」を選択します。

6 集約ストレージ・データベースのみ:

- データをロードし、データベースに値が存在する場合は、「データ・ロード値」ドロップ・ダウン・リストのオプションで、既存の値を上書きするか、既存の値に追加するか、既存値から差し引くか、データベースのコンテントを置換するかのいずれかを選択できます。
- データ・ソース内の欠落した値およびゼロの値を無視するかどうかを選択します。
- データをデータベース内の新しいスライスとしてロードするかどうかを選択します。

- 7 データ・ロードや次元構築が行われている間にコンソールで作業できるように、ロードや構築をバックグラウンドで処理する場合は「、「バックグラウンドで実行」を選択します。
- 8 「OK」をクリックします。

Essbase では、データ・ロードまたは次元構築が実行され、「データ・ロード結果」ダイアログ・ボックスが表示されます。ここにステータス・メッセージが表示されます。

データ・ロードまたは次元構築をバックグラウンドで実行した場合は、プロセスの ID が表示されます。ロードまたは構築に複数のデータ・ソースが含まれている場合は、単一のバックグラウンド・プロセスとして処理されます。この ID を使用して、「バックグラウンド・プロセスのステータス」・ウィンドウでバックグラウンド・プロセスのステータスを追跡できます。

関連情報

- [551 ページの「「データ・ロード」ダイアログ・ボックス」](#)
- 集約ストレージ・データベースの準備(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- データのロードおよび次元構築の理解(ブロック・ストレージ)(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [553 ページの「「データ・ロード結果」ダイアログ・ボックス」](#)

関連コマンド

データ・ロード用:

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- import data(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- import(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- loaddata(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

次元構築用:

- import dimensions(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- builddim(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter system kill request(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ルール・ファイルを使用したアウトラインの動的な更新

次元構築用の有効なルール・ファイルがある場合は、アウトライン・エディタで次元を動的に作成および更新できます。動的次元構築を実行するには、アウトラインに少なくとも 1 つの次元が定義されている必要があります。

新しい次元を作成するには、ルール・ファイルでその次元を定義する必要があります。

注： この機能は、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

▶ ルール・ファイルを使用してアウトラインを更新するには:

- 1 **編集モードでアウトラインを開きます。**
- 2 「アウトライン」>「アウトラインの更新」を選択して「**アウトラインの更新**」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 3 **データ・ソース・タイプを選択します:**
 - データ・ファイルを選択するには、「データ・ファイル」を選択してから「データ・ファイルの検索」をクリックします。
 - SQL データベースを選択するには、「SQL」を選択し、データベースのユーザー名とパスワードを指定します。
- 4 「ルール・ファイルの検索」をクリックして、次元構築のルール・ファイルの検索と選択を行います。
- 5 エラー処理用の**オプション**を指定します。
- 6 「OK」をクリックします。

Essbase ではデータ・ソースの次元がアウトラインに追加されます。

関連情報

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [703 ページの「「アウトラインの更新」ダイアログ・ボックス」](#)

ルール・ファイルの作成および管理

ここには次のトピックがあります:

- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)
- [215 ページの「レコードの表示方法の設定」](#)
- [216 ページの「ルール・ファイルの作成」](#)
- [216 ページの「ルール・ファイルを開く」](#)
- [217 ページの「データ・ソースを開く」](#)
- [218 ページの「SQL データベースを開く」](#)
- [218 ページの「ファイル区切り記号の設定」](#)
- [219 ページの「ルール・ファイルを使用した次元の名前付け」](#)
- [220 ページの「構築方法の指定」](#)
- [220 ページの「計算パフォーマンス向上のための次元の配置」](#)
- [221 ページの「次元プロパティの設定」](#)
- [222 ページの「メンバー・プロパティの設定および変更」](#)
- [223 ページの「フィールド・タイプの設定\(次元の構築\)」](#)
- [223 ページの「ルール・ファイルの検証」](#)

- 224 ページの「ルール・ファイルの保存」
- 225 ページの「ルール・ファイルのコピー」
- 226 ページの「ルール・ファイルの名前変更」
- 227 ページの「ルール・ファイルの削除」
- 227 ページの「ルール・ファイルの印刷」
- 228 ページの「ルール・ファイルを使用した別名の定義」
- 229 ページの「ルール・ファイルを使用した UDA の更新」

データ準備エディタについて

コンソールのメニュー・バーからデータ準備エディタを開くには、「ファイル」>「エディタ」>「データ準備エディタ」を選択します。

データ準備エディタを使用して、データを Essbase アプリケーションにロードするためのルール・ファイルを作成および変更します。データ準備エディタでは、テキスト・ファイル、スプレッドシート・ファイルおよび SQL データ・ソースなどのデータ・ソースを開くことができます。データ準備エディタにはデータ・ソースが表示されるため、データを正常にロードするために変更の必要な点を確認できます。

関連情報

- 235 ページの「複数のフィールドの選択」
- 209 ページの「データ・ロードと次元構築について」
- 表示するレコードの設定
- 210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」
- 210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」
- 216 ページの「ルール・ファイルを開く」
- 211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」

レコードの表示方法の設定

データ準備エディタでレコードを表示する方法を指定できます。

▶ データ準備エディタにレコードを表示する方法を設定するには:

- 1 データ準備エディタを開きます。
- 2 「レコード」>「レコード表示カウント」を選択します。
- 3 「表示カウント」に、表示するレコードの数を入力します。
- 4 「開始レコード」に、表示する最初のレコードを入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)
- [671 ページの「レコード表示カウント」ダイアログ・ボックス](#)

ルール・ファイルの作成

ルール・ファイルを使用して、データ・ロードおよび次元構築中に Essbase がデータ・ソース・データおよびメタデータを処理する方法を指定できます。

▶ ルール・ファイルを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、アプリケーションまたはデータベースを選択します。
- 2 「ファイル」>「新規」を選択し、「新規」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 3 「スクリプト」タブを選択します。
- 4 「ルール・ファイル」を選択して、「OK」をクリックします。
新しいルール・ファイルがデータ準備エディタで開きます。
- 5 「表示」>「データ・ロード・フィールド」または「表示」>「次元構築フィールド」を選択します。
- 6 [データ・ファイル](#)または [SQL データベース](#)のデータ・ソースを開きます。

関連情報

- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)
- [357 ページの「ファイルの命名」](#)

ルール・ファイルを開く

ルール・ファイルは、データ・ロードおよび次元構築中に Essbase がデータ・ソース・データおよびメタデータを処理する方法を指定します。

ルール・ファイルを開くには、ファイルが関連付けられているデータベースに対する読取り権限が少なくとも必要です。

▶ ルール・ファイルを開く手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のルール・ファイルが関連付けられているアプリケーションまたはデータベースを探します。
- 2 アプリケーション・ノードまたはデータベース・ノードの下で、「ルール・ファイル」ノードを展開します
- 3 ルール・ファイルを 1 つ選択します。

4 右クリックして「編集」を選択します。

ルール・ファイルがデータ準備エディタで開きます。Essbase 管理サーバーによってスクリプトをロックするように求められる場合があります。スクリプトに変更を加えてその変更内容を保存する作業を行うときは、その前にスクリプトをロックして、自分がそのファイルで作業している間に他のユーザーによって変更されないようにする必要があります。[オブジェクトのロックおよびロック解除](#)を参照してください。

5 「表示」>「データ・ロード・フィールド」または「次元構築フィールドの表示」を選択します。

6 データ・ファイルまたは SQL データベースのデータ・ソースを開きます。

関連情報

- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)
- [652 ページの「開く」ダイアログ・ボックス](#)
- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)

データ・ソースを開く

データ・ソースとは、データまたはメンバーを含むファイル(Microsoft Excel スプレッドシート、スプレッドシート監査ログ、テキスト・ファイルまたは Essbase エクスポート・ファイル)です。

データ・ソースは、Essbase サーバー、クライアント・コンピュータまたはネットワーク上に存在します。

▶ データ・ソースを開く手順は、次のとおりです:

1 データ準備エディタを開きます。

2 「ファイル」>「データ・ファイルを開く」を選択します。

3 「開く」ダイアログ・ボックスで、「Essbase サーバー」タブ(Essbase サーバーに保存されているファイルを検索する場合)または「ファイル・システム」タブ(ローカルまたはネットワーク上に保存されているファイルを検索する場合)を選択し、目的のファイルに移動します。

4 ファイルを選択して、「OK」をクリックします。

5 エンコード方式を要求されたら、デフォルト(「Essbase サーバー」)を受け入れるか、エンコード方式を選択します。

6 必要に応じて、ファイル区切り記号を設定します。

データ準備エディタの一番上のペインにデータ・ファイルが表示されます。

関連情報

- サポートされているデータ・ソース(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)
- [218 ページの「SQL データベースを開く」](#)
- [652 ページの「開く」ダイアログ・ボックス](#)

SQL データベースを開く

ライセンスされた SQL インタフェース機能を使用すると、SQL データベースをデータ・ソースとして使用できます。

▶ SQL データベースをデータ・ソースとして開く手順は、次のとおりです:

- 1 [データ準備エディタを開きます](#)。
- 2 「ファイル」を選択し、次に「SQL を開く」を選択します。
- 3 SQL データベースにログオンします。
- 4 「OK/取得」をクリックして、SQL データベースに接続します。
- 5 「SQL 接続」ダイアログ・ボックスで、データベースのユーザー名とパスワードを入力します。

データ準備エディタの一番上のペインにデータ・ソースが表示されます。

- 6 必要に応じて、[ファイル区切り記号を設定](#)します。

関連情報

- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)
- [217 ページの「データ・ソースを開く」](#)
- [653 ページの「SQL データ・ソースを開く」ダイアログ・ボックス](#)
- [692 ページの「SQL 接続」ダイアログ・ボックス](#)

ファイル区切り記号の設定

ファイル区切り記号は、データ・ソース・フィールドを区切ります。ルール・ファイル以外では、データ・ソース・フィールドはスペースで区切られます。デフォルトのルール・ファイルでは、データ・ソースはタブで区切られます。

データ・ロードまたは次元構築ルール・ファイル内では、カンマ、タブ、スペース、固定幅の列、またはカスタム値をファイル区切り記号として設定できます。SQL データについては、ファイル区切り記号を設定する必要はありません。

▶ ファイル区切り記号を設定するには:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 「オプション」>「データ・ソースのプロパティ」を選択します。

- 3 「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「区切り記号」タブを選択します。
- 4 「区切り記号」ノードで、ファイル区切り記号を選択します。
- 5 カスタム・ファイル区切り記号を選択した場合は、テキスト・ボックスに標準ASCII文字セット(0 から 127)の中から 1 文字を入力します。
- 6 固定幅の列を選択した場合は、テキスト・ボックスに列の幅を入力します。

関連情報

- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス、「区切り記号」タブ](#)

ルール・ファイルを使用した次元の名前付け

次元構築を使用して次元を新しく作成する場合には、ルール・ファイルでその次元に名前を付ける必要があります。

▶ 次元に名前を付ける手順は、次のとおりです:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 「オプション」>「次元構築の設定」を選択します。
- 3 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスで、「次元定義」タブを選択します。
- 4 標準次元向け:
 1. 「ルール・ファイル」を選択します。
 2. 新しい次元の名前を入力し、「[Enter]」を押します。
「次元」ノード(「ルール・ファイル」オプションの下)に次元が表示されます。
 3. 新しい次元を右クリックし、「編集」を選択します。
 4. 「次元プロパティ」ダイアログ・ボックスで、次元のプロパティ(密か疎かなどの構成やタイプなど)を定義します。
- 5 属性次元向け:
 1. 基本次元の名前を右クリックし、「プロパティの編集」を選択します
 2. 「次元プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「属性次元」タブを選択します。
 3. 属性次元の名前を入力し、属性次元タイプを選択して「OK」をクリックします。
 4. 属性次元タイプを選択し、「OK」をクリックします。

関連情報

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)

- [「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス - 「次元定義」タブ](#)
- [588 ページの「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)
- [221 ページの「次元プロパティの設定」](#)
- 属性次元の構築と属性の関連付け(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

構築方法の指定

メンバーを作成したり次元に追加する場合は、アルゴリズム(構築方法)を指定する必要があります。

▶ 構築方法を選択するには:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 「オプション」>「次元構築の設定」を選択します。
- 3 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスで、「次元構築の設定」タブを選択します。
- 4 「構築方法」ノードまでスクロールします。
- 5 構築方法を選択します。
- 6 「子として追加」を選択した場合は、親の名前を入力するか、「子として追加」から親を選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

関連情報

- 構築方法(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス、「次元構築の設定」タブ](#)

計算パフォーマンス向上のための次元の配置

次元の配置(アウトライン内)は、計算時間に影響を与えます。詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

ルール・ファイルには、次元を次の順序に配置(「砂時計の形に配置」と呼ばれる)することで計算パフォーマンスを最適化する、次元構築のグローバル・プロパティ・オプションが含まれています:

1. 最密次元(会計と時間)
2. 残りの密次元(大きい順)
3. 疎次元(小さい順)

4. 属性次元(特定の順序なし)

アウトライン・エディタの「アウトラインの最適化」機能を使用しても、次元を砂時計の形に配置できます。ただし、このアウトライン・エディタ機能を使用すると、一部のメンバーのストレージ・プロパティも変更されます。詳細は、[バッチ計算のためのアウトラインの最適化](#)を参照してください。

▶ アウトライン次元を砂時計の形に配置するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「オプション」>「次元構築の設定」を選択します。
- 3 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスで、「グローバル設定」タブを選択します。
- 4 「サイズおよびタイプによって次元を砂時計の形に配置」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- パフォーマンスを最適化するためのアウトラインのデザイン(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス、「グローバル設定」タブ

次元プロパティの設定

ルール・ファイルを使用して、個々の標準次元および属性次元のプロパティ、またはすべての標準次元のプロパティを設定できます。

▶ 個々の次元のプロパティを設定するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「オプション」>「次元構築の設定」を選択します。
- 3 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスで、「次元定義」タブを選択します。
- 4 次元を選択します。
「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」をクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。
- 5 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 6 「次元プロパティ」ダイアログ・ボックスで、1つまたは複数のプロパティを選択して、「OK」をクリックします。

▶ すべての標準次元のプロパティを設定するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「オプション」>「次元構築の設定」を選択します。
- 3 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスで、「グローバル設定」タブを選択します。

- 疎密の構成、別名テーブル、次元の配置(自動または砂時計)、「AND」または「OR」(選択または除外条件を組み合わせるかどうかを指定する場合)を選択します。

注： 一部のプロパティは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

- 「OK」をクリックします。

関連情報

- 210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」
- 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス、「次元定義」タブ
- 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス、「グローバル設定」タブ
- 588 ページの「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス
- 次元およびメンバーのプロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- データ・ソースを使用したメンバー・プロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 密次元と疎次元の選択のシナリオ(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

メンバー・プロパティの設定および変更

次元構築の場合、標準次元のメンバーのプロパティを設定、または変更できます。

- ▶ 次元構築の場合の、メンバー・プロパティを設定または変更する手順は次のとおりです：
 - ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
 - 「オプション」>「次元構築の設定」を選択します。
 - 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスで、「次元構築の設定」タブを選択します。
 - 「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」ボタンをクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。
 - 次元を選択します。
 - 次元名を右クリックして、「プロパティの編集」を選択します。
 - メンバー・プロパティの変更、属性の関連付けの変更、メンバーのソートなど、**1つ以上のアクションを実行**します。
 - 「OK」をクリックします。

関連情報

- 210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」
- 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス、「次元構築の設定」タブ

- データ・ソースを使用したメンバー・プロパティの操作(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

フィールド・タイプの設定(次元の構築)

次元を構築するときは、メンバー・プロパティや属性の関連付けなど、メンバー名またはメンバー情報を含むフィールドのタイプを設定する必要があります。

▶ フィールド・タイプ情報を設定するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「次元構築プロパティ」タブを選択します。
- 4 次元名をダブルクリックします。
- 5 「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」ボタンをクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。
- 6 フィールド・タイプをダブルクリックします。
- 7 「番号」に、フィールドの番号を入力します。
- 8 「次へ」をクリックし、ルール・ファイルの次のフィールドでフィールド情報を設定します。
- 9 必要に応じて、手順 8 を繰り返します。
- 10 「OK」をクリックします。

関連情報

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [220 ページの「構築方法の指定」](#)
- [613 ページの「「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「次元構築プロパティ」タブ](#)
- フィールド・タイプのリストと有効な構築方法(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

ルール・ファイルの検証

ルール・ファイルのメンバーおよび次元が、関連するアウトラインに正しくマッピングされるように、ルール・ファイルを検証します。

▶ ルール・ファイルを検証するには:

- 1 [ルール・ファイルを開きます。](#)
- 2 「オプション」>「アウトラインの関連付け」を選択します。

通常は、データまたはメンバーを現在ロードしているデータベースのアウトラインに、ルール・ファイルに関連付けます。関連付けは永続的ではありません。ファイルに関連付けるアウトラインは後で変更できます。

- 3 「表示」>「データ・ロード・フィールド」、または「表示」>「次元構築フィールド」を選択します。
- 4 動的参照を使用する場合は、[データ・ソースを開きます](#)。
- 5 「オプション」>「検証」を選択します。

エラーは「[検証ルール](#)」ダイアログ・ボックスに表示されます。

関連情報

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [215 ページの「データ準備エディタについて」](#)
- [515 ページの「アウトラインの関連付け」ダイアログ・ボックス](#)
- [230 ページの「データ・ソースのヘッダーの設定」](#)
- [217 ページの「データ・ソースを開く」](#)
- 有効なデータ・ロード・ルール・ファイルの要件(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 次元構築ルール・ファイルが有効であるための要件(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- ヘッダー・レコードの定義(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

ルール・ファイルの保存

ルール・ファイルは、Essbase サーバー、クライアント・コンピュータまたはネットワークに保存できます。

- ▶ ルール・ファイルを開いた場所に保存するには、「ファイル」>「保存」を選択します。
- ▶ ルール・ファイルを Essbase サーバーに保存するには:
 - 1 「ファイル」>「名前を付けて保存」を選択します。
 - 2 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、「Essbase サーバー」タブを選択します。
 - 3 「検索」リスト・ボックスで、Essbase サーバー・インスタンスを選択します。
 - 4 アプリケーションまたはデータベースを選択します。
 - 5 「ファイル名」に、ルール・ファイルの名前を入力します。

長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。ルール・ファイルには、デフォルトで.ru1 拡張子が付けられます。
 - 6 「OK」をクリックします。

Essbase では、選択したアプリケーションまたはデータベースにルール・ファイルが保存され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

▶ ルール・ファイルをローカルまたはネットワークに保存するには:

- 1 「ファイル」 > 「名前を付けて保存」を選択します。
- 2 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、「ファイル・システム」タブを選択します。
- 3 ファイル・システム・ディレクトリを選択してそこに移動します。
- 4 「ファイル名」に、ルール・ファイルの名前を入力します。
デフォルトでは、ルール・ファイルには .rul 拡張子が付けられます。
- 5 エンコード方式のために、次のアクションを実行します:
 - エンコード方式に UTF-8 を指定するには、「UTF-8」を選択します。
 - Unicode 以外のエンコード方式を指定するには、リストから選択します。
 - Unicode 以外のアプリケーションには、デフォルトの選択をそのまま使用します。
- 6 「OK」をクリックします。

Essbase により、ルール・ファイルが選択したディレクトリに保存されます。

関連情報

- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [216 ページの「ルール・ファイルの作成」](#)
- [682 ページの「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス](#)
- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)

ルール・ファイルのコピー

このトピックで説明する方法を使用するか、ファイル・システムを使用して、ルール・ファイルをアプリケーションまたはデータベースにコピーできます。

ルール・ファイルは、コピー先の Essbase サーバー上のアプリケーション・ディレクトリ (ARBORPATH\app\appname) またはデータベース・ディレクトリ (ARBORPATH\app\appname\dbname) にコピーされます。

アプリケーションの移行の一部として、複数サーバー間でルール・ファイルをコピーすることもできます。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。

- ▶ ルール・ファイルを他のアプリケーションおよびデータベースにコピーするには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ルール・ファイルを選択します。

- 2 右クリックし、「コピー」を選択して、「ルール・ファイルのコピー」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 3 「Essbase サーバー」で、Essbase サーバーを選択します。
- 4 「アプリケーション」で、アプリケーションを選択します。
- 5 次のいずれかの操作を行います:
 - ルール・ファイルを特定のデータベースにコピーするには、「データベース」で、データベースを選択します。
 - 選択したアプリケーション内のすべてのデータベースにルール・ファイルをコピーするには、「すべての DB」を選択します。
- 6 「ルール・ファイル」で、ルール・ファイルのコピーの名前を入力します。
- 7 「OK」をクリックします。

関連情報

[527 ページの「ルール・ファイルのコピー」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ルール・ファイルの名前変更

このトピックで説明されている方法を使用するか、ファイル・システムを使用して、他のユーザーによってロックされていないルール・ファイルの名前を変更できます。

ルール・ファイル名は、(オペレーティング・システムで)有効で、8 文字以下の英数字を含む必要があります。Essbase によって .rul という拡張子が追加されます。

▶ ルール・ファイルの名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ルール・ファイルを選択します。
- 2 右クリックして「名前変更」を選択します。
- 3 「ルール・ファイルの名前変更」ダイアログ・ボックスで、名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

[676 ページの「ルール・ファイルの名前変更」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ルール・ファイルの削除

このトピックで説明されているファイル・システムまたは方法を使用すると、ルール・ファイルを Essbase サーバー・コンピュータ(アプリケーションまたはファイルが保存されているデータベース・ディレクトリ)から削除できます。

ルール・ファイルを削除するには、適切な権限が必要です。アプリケーションから削除するにはアプリケーション・マネージャ権限が、またデータベースから削除するにはデータベース・マネージャ権限がそれぞれ必要です。

関連コマンド

drop object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

▶ Essbase サーバー・コンピュータからルール・ファイルを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ルール・ファイルを選択します。
- 2 右クリックして「削除」を選択します。
- 3 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。
- 4 ファイルのロックを解除するように求められた場合は、ファイルのロックを解除して、「はい」をクリックします。

ファイルのロックを解除するには、アプリケーション・マネージャ権限を持っているか、ファイルをロックしたユーザーである必要があります。

ルール・ファイルの印刷

データ・ロード・ファイルおよび次元構築ルール・ファイルの内容の全体または選択した一部を印刷できます。

▶ ルール・ファイルを印刷するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のルール・ファイルが関連付けられているアプリケーションまたはデータベースを探します。
- 2 アプリケーション・ノードまたはデータベース・ノードの下で、「ルール・ファイル」ノードを展開します。
- 3 ルール・ファイルを1つ選択します。
- 4 右クリックして「編集」を選択します。
ルール・ファイルがデータ準備エディタに表示されます。
- 5 **オプション:** 「ファイル」> 「ページ設定」を選択し、ページ・レイアウト・プロパティを設定します。
- 6 **オプション:** 「ファイル」> 「印刷プレビュー」を選択し、印刷するドキュメントをプレビューします。
- 7 「ファイル」> 「印刷」を選択します。
- 8 「印刷オプション」ダイアログ・ボックスで、希望する**印刷オプション**を選択します。

9 「OK」をクリックします。

関連情報

- 669 ページの「[「印刷オプション」ダイアログ・ボックス](#)」
- 216 ページの「[ルール・ファイルの作成](#)」
- 216 ページの「[ルール・ファイルを開く](#)」

ルール・ファイルを使用した別名の定義

ルール・ファイルとデータ・ソースを使用して、別名を定義(追加および名前変更)できます。別名を定義するためのデータ・ソースには、少なくとも、別名に関連するメンバー名および別名を格納するテーブルが含まれている必要があります。別名の割当ては、他の次元構築ルールとともに実行できます。

別名は、[手動でアウトラインを編集](#)するか、[別名テーブルのソース・ファイルをインポート](#)して定義することもできます。

メンバー名の命名ルールは、別名にも適用されます。

注： レベル参照構築を使用している場合は、メンバー名と重複する別名を作成できません。

▶ ルール・ファイルを使用して別名を定義するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「オプション」>「次元構築の設定」を選択し、「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 3 「グローバル設定」タブで「別名テーブルの更新」をクリックして、既存の別名テーブルのリストを表示します。
- 4 別名テーブルを選択し、「OK」をクリックします。
- 5 ルール・ファイルで、別名用のフィールド列を選択します。
- 6 「フィールド」>「プロパティ」を選択し、「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスから「次元構築プロパティ」タブを選択します。
- 7 「フィールド定義」ノードの下で、「別名」フィールド・タイプを選択します。
- 8 「OK」をクリックします。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 182 ページの「[別名テーブルについて](#)」
- 184 ページの「[別名テーブルの作成](#)」
- 613 ページの「[「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「次元構築プロパティ」タブ](#)」

ルール・ファイルを使用した UDA の更新

ユーザー定義属性(UDA)とは、メンバーを説明するために作成する単語または語句です。たとえば、大規模市場という UDA を作成して、それを規模の大きな市場を表すメンバーに割り当てることができます。

UDA を更新(追加、置換または削除)するには、次元構築ルール・ファイルまたはアウトライン・エディタを使用できます。

UDA と属性次元の比較については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

▶ UDA の更新に次元構築ルール・ファイルを使用するには:

- 1 UDA を設定するメンバー用の列、および UDA 値のための列が含まれるようにデータ・ソースを設計します。
- 2 [次元構築のルール・ファイルを作成します。](#)
- 3 UDA 値を含む各データ・ソース・フィールドでは、次元構築のフィールド・タイプを UDA に設定します。
- 4 **オプション:** 次元構築設定のルール・ファイルに対して UDA 値の置換を使用可能にするには、「UDA の変更を使用可能にする」を選択します。

注: UDA 値を削除するには、「UDA の変更を使用可能にする」を使用して、データ・ソース内で関連する UDA フィールドを空白のままにします。

関連情報

- [メンバーのプロパティ - UDA](#)
- UDA の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [アウトライン・エディタを使用した UDA の操作](#)

ルール・ファイルによるレコードの操作

ここには次のトピックがあります:

- [230 ページの「レコード操作について」](#)
- [230 ページの「データ・ソースのヘッダーの設定」](#)
- [231 ページの「ルール・ファイルのデータソース・メンバーの指定」](#)
- [231 ページの「レコードの選択」](#)
- [232 ページの「レコードの除外」](#)
- [233 ページの「選択条件や除外条件の結合」](#)

レコード操作について

Essbase では、データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイルで1つのレコードを1つの単位として操作できます。ルール・ファイルによって、データ・ロードまたは次元構築時における、各レコードに含まれている情報を処理する方法がEssbase に指示されます。

レコード・レベルで実行できる操作は、次のとおりです:

- データベースにロードするレコードを選択する。
- データベースにロードしないレコード、つまり除外するレコードを選択する。
- データ・ソースの内容を説明し、ルール・ファイル内のそれらのレコードを参照するように、データ・ソース内のヘッダー・レコードを設定する。
- データ・ソースの内容を説明する、ルール・ファイル内のヘッダー・レコードを設定する。
- データ準備エディタに表示するレコードを指定する。

関連情報

- [データ・ロードと次元構築について](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [245 ページの「データ操作について」](#)

データ・ソースのヘッダーの設定

データ・ロードや次元分析のルール・ファイルで、データ・ソースのヘッダー情報を参照できます。データ・ソース内にヘッダー情報を配置することで、フォーマットの異なる複数のデータ・ソースに対して同じルール・ファイルを使用できます。これは、データ・ソースのフォーマットがルール・ファイル内ではなくデータ・ソースのヘッダーで指定されるためです。

データ・ソース内とルール・ファイル内の両方でヘッダー情報が定義されている場合、データ・ソース内で定義されているヘッダー情報は、ルール・ファイル内で定義されているヘッダー情報よりも優先されます。

▶ データ・ソースのヘッダー・レコードの位置を指定するには:

- 1 テキスト・エディタまたはスプレッドシートを使用し、1つ以上のデータ・ソースの最初のレコードにヘッダー情報を挿入します。
- 2 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 3 「オプション」>「データ・ソースのプロパティ」を選択します。
- 4 「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「ヘッダー」タブを選択します。
- 5 「ヘッダー」タブで、ヘッダーの場所情報を入力します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- ヘッダー・レコードの定義(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [231 ページの「ルール・ファイルのデータソース・メンバーの指定」](#)
- [「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス、「ヘッダー」タブ](#)

ルール・ファイルのデータソース・メンバーの指定

データ・ロード・ルール・ファイルのヘッダー内では、1つの次元につき1メンバーを指定できます。たとえば January を指定すると、すべてのデータ・ソース・レコードで January は Year 次元を表します。

データ・ソース内のヘッダーが優先されるため、ルール・ファイルにデータ・ソース・ヘッダーへの動的参照が含まれていても、そのルール・ファイルのヘッダー情報は使用されません。

▶ ルール・ファイル・ヘッダー内でデータ・ソース・メンバーを指定するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「オプション」>「データ・ロードの設定」を選択します。
- 3 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックスで、「ヘッダー定義」タブを選択します。
- 4 「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」をクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。
- 5 「名前」に、メンバーの名前を入力します。

代替変数を入力した場合は、データのロード時に有効な変数値が使用されます。

- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- ヘッダー・レコードの定義(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [230 ページの「データ・ソースのヘッダーの設定」](#)
- [「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス、「ヘッダー定義」タブ](#)

レコードの選択

データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイルでは、どのレコードがロードされるかを決定する1つ以上の選択条件(文字列および数値の条件)を定義できます。

▶ 選択条件を定義するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 フィールドを選択します。

- 3 「レコード」 > 「選択」 を選択します。
- 4 「[レコードの選択](#)」ダイアログ・ボックスで、条件を定義します。
- 5 **オプション:** 別の選択条件を定義する手順は、次のとおりです:
 1. 「新規」 をクリックします。
 2. 手順 2 から 3 を繰り返します。
 3. 「AND」 (フィールドはすべての条件を満たす必要あり) または 「OR」 (フィールドはいずれかの条件を満たす必要あり) を選択します。
- 6 **オプション:** 複数のフィールドに選択条件を定義する手順は、次のとおりです:
 1. 手順 2 から 5 を繰り返します。
 2. [Administration Services](#) が条件を組み合わせる方法を指定します。

関連情報

- [232 ページの「レコードの除外」](#)
- [233 ページの「選択条件や除外条件の結合」](#)
- [684 ページの「レコードの選択」ダイアログ・ボックス](#)

レコードの除外

データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイルでは、1 つ以上の除外条件(文字列および数値の条件)を定義できるので、データベースへのロードが不要のレコードを除外できます。

- ▶ データ・ソースに特定のレコードがロードされないように除外条件を定義するには:
- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
 - 2 1 つ以上のフィールドを選択します。
 - 3 「レコード」 > 「除外」 を選択します。
 - 4 「[レコードの除外](#)」ダイアログ・ボックスで、条件を定義します。
 - 5 **オプション:** 選択したフィールドに別の除外条件を適用する手順は、次のとおりです:
 1. 「新規」 をクリックします。
 2. 手順 4 を繰り返します。
 3. 「AND」 (すべての条件を満たす場合のみレコードを除外する場合) または 「OR」 (いずれかの条件を満たす場合にレコードを除外する場合) を選択します。
 - 6 **オプション:** 1 つ以上の除外条件を複数のフィールドに対して作成するには、手順 2 から 5 を繰り返し、[Essbase](#) によって様々なフィールドの条件を組み合わせる方法を指定します。

関連情報

- [231 ページの「レコードの選択」](#)
- [233 ページの「選択条件や除外条件の結合」](#)
- [671 ページの「レコードの除外」ダイアログ・ボックス](#)

選択条件や除外条件の結合

データ・ロードおよび次元構築のルール・フィールドでは、選択条件と除外条件を組み合わせることができます。

選択され除外されたレコード(条件により決定)は、除外されます。

▶ 選択条件および除外条件を組み合わせる手順は、次のとおりです:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 「オプション」>「データ・ロードの設定」を選択し、「データ・ロード値」タブを選択するか、「オプション」>「次元構築の設定」を選択し、「グローバル設定」タブを選択します。
- 3 「グローバル選択/除外ブール演算」ノードを展開します。
- 4 「AND」(フィールドはすべての選択条件および除外条件を満たす必要あり)または「OR」(フィールドはいずれかの選択条件または除外条件を満たす必要あり)を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [231 ページの「レコードの選択」](#)
- [232 ページの「レコードの除外」](#)
- [「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス、「データ値」タブ](#)
- [「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス、「グローバル設定」タブ](#)

ルール・ファイルによるフィールドの操作

ここには次のトピックがあります:

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [235 ページの「複数のフィールドの選択」](#)
- [235 ページの「フィールド・タイプの設定\(データのロード\)」](#)
- [236 ページの「フィールドの無視」](#)
- [237 ページの「トークンの指定によるフィールドの無視」](#)
- [237 ページの「フィールドの移動」](#)
- [238 ページの「フィールドの結合」](#)
- [238 ページの「結合を使用したフィールドの作成」](#)

- 239 ページの「テキストを使用したフィールドの作成」
- 239 ページの「フィールドの分割」
- 240 ページの「フィールド操作を元に戻す」
- 240 ページの「フィールド名のマッピング」
- 241 ページの「フィールド名の置換」
- 242 ページの「空のフィールドにテキストを配置」
- 243 ページの「フィールドの大文字と小文字の変更」
- 243 ページの「フィールドの前後のスペースの削除」
- 244 ページの「スペースからアンダースコアへの変換」
- 244 ページの「接頭辞および接尾辞の追加」

フィールド操作について

データ・ロードや次元構築のルール・ファイル内では、Essbase は 1 つの単位として 1 つのフィールドで操作します。データのロード中や次元構築中は、フィールドを無視、操作、または名前を変更できます:

フィールドを無視する方法としては、次のような方法があります:

- 列内のすべてのフィールドを無視する。
- 文字列の一致に基づいてフィールドを無視する。

フィールドの位置を変更する方法としては、次のような方法があります:

- フィールドを新しい場所に移動する。
- フィールドを結合する。
- 2 つの既存のフィールドを結合して新しいフィールドを作成する。
- あるテキスト値を持つフィールドを追加して新しいフィールドを作成する。
- 1 つのフィールドを 2 つに分割する。
- 必要に応じて、それぞれの位置変更を元に戻すことができます。

フィールド名を変更する方法としては、次のような方法があります:

- フィールド名をアウトラインのメンバー名にマッピングする。
- フィールド名のテキスト文字列を置換する。
- フィールド名の大文字と小文字を変更する。
- フィールド名の前後にある余分なスペースを削除する。
- フィールド名のスペースをアンダースコアに変換する。
- フィールド名に接頭辞/接尾辞を追加する。

関連情報

- データ・ロードと次元構築について
- 210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [245 ページの「データ操作について」](#)
- [230 ページの「レコード操作について」](#)
- [235 ページの「複数のフィールドの選択」](#)

複数のフィールドの選択

データ準備エディタでは、複数のフィールドを選択できます。複数のフィールドを選択すると、使用できるメニュー・アイテムおよびコントロールのみが利用可能になります。

▶ 連続した複数のフィールドを選択するには:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「[Shift]」キーを押しながら、最後のフィールドを選択します。

▶ 不連続のフィールドを選択するには:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 次のいずれかのアクションを行います:
 - 最初の領域の複数のフィールドを選択し、「[Ctrl]」キーを押しながらマウスをドラッグして、2番目の領域のフィールドを選択します。
 - 最初のフィールドを選択し、「[Ctrl]」キーを押しながら他の各フィールドを選択します。

関連情報

[215 ページの「データ準備エディタについて」](#)

フィールド・タイプの設定(データのロード)

データをロードするときは、メンバー名、またはメンバー・プロパティや属性の関連付けなどメンバー情報を含むフィールドのタイプを設定する必要があります。次の情報を指定してください:

- 世代や別名などのフィールド・タイプ。フィールド・タイプは、データ・ソースや構築方法によって異なります。
 - そのフィールド内のメンバーが属している次元。
 - そのフィールド内のメンバーの世代番号またはレベル番号。
- ▶ フィールド・タイプ情報を設定するには:
- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
 - 2 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。

- 3 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「次元構築プロパティ」タブを選択します。
- 4 次元名をダブルクリックします。
- 5 「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」ボタンをクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。
- 6 フィールド・タイプをダブルクリックします。
- 7 「番号」に、フィールドの番号を入力します。
- 8 「次へ」をクリックし、ルール・ファイルの次のフィールドでフィールド情報を設定します。
- 9 必要に応じて、手順 8 を繰り返します。
- 10 「OK」をクリックします。

関連情報

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [構築方法の選択](#)
- [613 ページの「「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「次元構築プロパティ」タブ](#)

フィールドの無視

データ・ロードや次元構築のルール・ファイル内では、(Essbase データベースにロードされていない)特定のデータ・ソース列のフィールドを無視できます。たとえば、コメントを含む列を無視できます。

▶ フィールドを無視するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 列を選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「データ・ロード・プロパティ」タブを選択します。
- 5 「データ・ロード時にフィールドを無視」または「次元構築時にフィールドを無視」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [237 ページの「トークンの指定によるフィールドの無視」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- フィールドの無視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「データ・ロード・プロパティ」タブ

トークンの指定によるフィールドの無視

データ・ロードや次元構築のルール・ファイル内では、値が存在する場所に関係なく、特定のトークン(テキスト文字列)に一致するデータ・ソース値を無視できます。

▶ 指定したトークンに一致するデータ・ソース値を無視するには:

- 1 ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
- 2 「オプション」>「データ・ソースのプロパティ」を選択します。
- 3 「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「トークンを無視」タブを選択します。
- 4 テキスト・ボックスに、テキストの文字列を入力します。
- 5 **オプション**: 他のトークンに一致する値を無視するには、「新規」をクリックし、手順 4 を繰り返します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [236 ページの「フィールドの無視」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス、「トークンを無視」タブ](#)

フィールドの移動

データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイルでは、フィールドを移動できます。たとえば、1 番目のフィールドを 3 番目のフィールドにできます。

▶ ルール・ファイルにおいてフィールドを移動するには:

- 1 ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
- 2 移動するフィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「移動」を選択します。
- 4 「上へ」または「下へ」を 1 回以上クリックします。
- 5 フィールドが正しい位置に配置されたら、「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [240 ページの「フィールド操作を元に戻す」](#)
- [645 ページの「「フィールドの移動」ダイアログ・ボックス」](#)
- フィールドの移動(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [235 ページの「複数のフィールドの選択」](#)

フィールドの結合

データ・ロードや次元構築のルール・ファイル内では、複数のフィールドを1つのフィールドに結合できます。このフィールドには、結合の最初のフィールドの名前が与えられます。

フィールドを結合する前に、結合する順に**フィールドの位置を指定**します。

▶ 複数のフィールドを1つのフィールドに結合するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「フィールド」>「結合」を選択します。
- 3 「フィールドの結合」ダイアログ・ボックスの「結合するフィールド」リスト・ボックスで、結合する**フィールドを選択**します。

たとえば、field2 と field3 を選択します。

- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [238 ページの「結合を使用したフィールドの作成」](#)
- [237 ページの「フィールドの移動」](#)
- [239 ページの「フィールドの分割」](#)
- [240 ページの「フィールド操作を元に戻す」](#)
- [626 ページの「「フィールドの結合」ダイアログ・ボックス」](#)
- [235 ページの「複数のフィールドの選択」](#)

結合を使用したフィールドの作成

データ・ロードまたは次元構築のルール・ファイルで、他のフィールドを結合することにより、フィールドを作成できます。

▶ 複数のフィールドを結合してフィールドを作成するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「フィールド」>「結合を使用した作成」を選択します。
- 3 「結合を使用したフィールドの作成」ダイアログ・ボックスの「作成用に結合するフィールド」リスト・ボックスで、**複数のフィールドを選択**します。

- 4 「OK」をクリックします。

新しいフィールドが、結合に使用した最初のフィールドの左側に表示されます。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [239 ページの「テキストを使用したフィールドの作成」](#)

- 238 ページの「フィールドの結合」
- 240 ページの「フィールド操作を元に戻す」
- フィールド結合による新規フィールドの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 「結合を使用した作成」ダイアログ・ボックス
- 235 ページの「複数のフィールドの選択」
- フィールドのコピー

テキストを使用したフィールドの作成

データ・ロードまたは次元構築のルール・ファイルでは、列を挿入して、新しく作成した列のすべてのフィールドにテキストを入れられます。たとえば、1つの列に 100 のようなフィールドが含まれ、別の列に 10-1 のようなフィールドが含まれる場合、100-10-1 のようなフィールドが含まれる列を挿入できます。

▶ テキストを使用してフィールドを作成するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 直前に新しいフィールドを挿入するフィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「テキストを使用した作成」を選択します。
- 4 「テキストを使用したフィールドの作成」ダイアログ・ボックスの「フィールド内のテキスト」テキスト・ボックスに、テキスト文字列を入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

新しいフィールドは、選択したフィールドの左側に表示されます。

関連情報

- 234 ページの「フィールド操作について」
- 546 ページの「「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックス」
- 238 ページの「結合を使用したフィールドの作成」
- 240 ページの「フィールド操作を元に戻す」

フィールドの分割

データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイルでは、1つのフィールドを2つのフィールドに分割できます。たとえば、「UPC100-10-1」フィールドを「UPC」フィールドと「100-10-1」フィールドに分割できます。

▶ 1つのフィールドを2つに分割するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「分割」を選択します。

- 4 「フィールドの分割」ダイアログ・ボックスの「列内の文字数」に、2つのフィールドのうちの最初のフィールドに含める文字数を入力します。

残りの文字は2つ目のフィールドに入ります。

- 5 「OK」をクリックします。

1番目のフィールドは、2番目のフィールドの左側に表示されます。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [236 ページの「フィールドの無視」](#)
- [238 ページの「フィールドの結合」](#)
- [240 ページの「フィールド操作を元に戻す」](#)
- [691 ページの「「フィールドの分割」ダイアログ・ボックス」](#)

フィールド操作を元に戻す

データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイルでは、フィールド操作(移動、分割、結合、テキストを使用した作成、および結合を使用した作成など)を元に戻すことができます。

フィールド操作は最新の操作から最も古い操作へと順に元に戻されます。

▶ 最新のフィールド操作を元に戻すには、「編集」>「元に戻す」を選択します。

▶ 複数のフィールド操作を元に戻す手順は、次のとおりです:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 「オプション」>「データ・ソースのプロパティ」を選択します。
- 3 「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「フィールドの編集」タブを選択します。
- 4 最下部(最新)の操作を選択して、「削除」をクリックします。
これにより、元は2番目に新しかった操作が最新(一番下)の操作になります。
- 5 元に戻すすべての操作が削除されるまで、手順4を繰り返します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

[234 ページの「フィールド操作について」](#)

フィールド名のマッピング

データ・ロード・ルール・ファイルでは、データ・ソース・フィールドをデータベース・メンバーにマップする方法が指定されます。

データ準備エディタでは、非重複メンバーおよび重複メンバーのためのマッピング方法を指定します。重複メンバーはレベル(データ・ソース・フィールドがボトムアップ式に整理されている場合)、または世代(データ・ソース・フィールドがトップダウン式に整理されている場合)のいずれかで指定できます。

▶ データ・ソース・フィールドをデータベースのメンバーにマップするには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「データ・ロード・プロパティ」タブを選択します。
- 5 「フィールド」では、ターゲット・メンバーまたはメンバーの組合せを入力するか、「次元」ノードでメンバーを選択します。代替変数名を入力した場合は、データ・ロードが実行される時点で設定されている代替変数の値が使用されます。
- 6 一意のメンバー名を指定するには、デフォルトのオプションの下の「フィールド名」テキスト・ボックスに、ターゲット・メンバーまたはメンバーの組合せを入力するか、「次元」ノードでメンバーを選択します。
- 7 「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」ボタンをクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。
- 8 **重複メンバー名**にマップするには、「リファレンス・メソッドを使用」を選択し、該当する世代やレベル名を指定して、次元を指定します。
- 9 「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「データ・ロード・プロパティ」タブ](#)

フィールド名の置換

データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイル内で、データ・ロードおよび次元構築の間に特定のフィールド名が置換されるように指定できます。たとえば、データ・ソースのメンバー名 NY を New York に置換できます。

▶ フィールド名を置換するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 変更するフィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「グローバル・プロパティ」タブを選択します。
- 5 置換する文字列と新しい文字列を入力し、目的のオプションを選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- 234 ページの「フィールド操作について」
- 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「グローバル・プロパティ」タブ

空のフィールドにテキストを配置

列の空のフィールドにテキスト(デフォルト値または#MI など)を入れるには、次の3つの手順が必要です:

1. 空のフィールドに一時的な文字列を入れます。
2. 一時的な文字列のみを含むフィールド内で、一時的な文字列を適当な値で置換します。
3. 一時的な文字列と他の値を含むフィールド内で、一時的な文字列を削除します。

▶ 空のフィールドに一時的な文字列を入れる手順は、次のとおりです:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 空のフィールドを含む列を選択します。
- 3 「フィールド」>「テキストを使用した作成」を選択します。
- 4 「フィールド内のテキスト」で、列の値にならない文字列(temp など)を入力します。
- 5 一時的な文字列を含むフィールドと空のフィールドを選択します。
- 6 「フィールド」>「結合」を選択し、「OK」をクリックします。

空のフィールドに一時的な文字列が含まれます。

▶ 一時的な文字列のみを含むフィールド内で、一時的な文字列を適当な値で置換する手順は、次のとおりです:

- 1 一時的な文字列を含む結合された列を選択し、「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 2 「グローバル・プロパティ」タブを選択します。
- 3 「置換」で、一時的な文字列を入力します。
- 4 「置換後の文字列」で、適当な値(#MI など)を入力します。
- 5 「完全に一致する単語を検索」および「すべて置換」を選択して、「OK」をクリックします。

▶ 一時的な文字列と他の値を含むフィールド内で、一時的な文字列を削除する手順は、次のとおりです:

- 1 一時的な文字列を含む結合された列を選択し、「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 2 「グローバル・プロパティ」タブを選択します。

- 3 「置換」で、一時的な文字列を入力します。
- 4 「置換後の文字列」には何も入力しません。
- 5 「すべて置換」を選択して、「完全に一致する単語を検索」の選択を解除し、「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「グローバル・プロパティ」タブ](#)
- [241 ページの「フィールド名の置換」](#)
- [239 ページの「テキストを使用したフィールドの作成」](#)

フィールドの大文字と小文字の変更

データ・ロードや次元構築のルール・ファイルのフィールド内では、大文字と小文字を区別できます。たとえば、データ・ソースで JAN が、データベースで jan が使用されている場合、JAN を jan に変更できます。

▶ フィールドの大文字と小文字を変更するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「グローバル・プロパティ」タブを選択します。
- 5 「大文字/小文字」ノードで、大文字または小文字を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「グローバル・プロパティ」タブ](#)

フィールドの前後のスペースの削除

データ・ロードおよび次元構築のルール・ファイルでは、フィールド内の先頭/末尾のスペースを削除できます。

▶ 先頭および末尾のスペースを削除するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。

- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「グローバル・プロパティ」タブを選択します。
- 5 「先頭/末尾のスペースを削除」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「グローバル・プロパティ」タブ](#)

スペースからアンダースコアへの変換

データ・ロードまたは次元構築のルール・ファイルでは、フィールド内のスペースをアンダースコアに変換できます。たとえば、「New York」を「New_York」に変換できます。

▶ スペースをアンダースコアに変換するには:

- 1 ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「グローバル・プロパティ」タブを選択します。
- 5 「スペースをアンダースコアに変換」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「グローバル・プロパティ」タブ](#)

接頭辞および接尾辞の追加

データ・ロードまたは次元構築のルール・ファイルでは、データ・ソース値に接頭辞および接尾辞を追加できます。たとえば、メンバー名に ESS という接頭辞を追加できます。その際、追加後の名前は有効なメンバー名である必要があります。

▶ データ・ソース値に接頭辞または接尾辞を追加する手順は、次のとおりです:

- 1 ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」・ウィンドウで、「グローバル・プロパティ」タブを選択します。

- 5 「接頭辞」または「接尾辞」に、それぞれ接頭辞または接尾辞を入力します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「グローバル・プロパティ」タブ](#)

ルール・ファイルによるデータの操作

ここには次のトピックがあります:

- [245 ページの「データ操作について」](#)
- [246 ページの「データ・フィールドとしての列の定義」](#)
- [246 ページの「データ値への加算」](#)
- [247 ページの「データ値からの減算」](#)
- [247 ページの「データ・ロードの前のデータ値の消去」](#)
- [248 ページの「符号の反転」](#)
- [249 ページの「データ値のスケール」](#)

データ操作について

データ・ロードのルール・ファイルでは、データ操作のみを実行できます。次元を作成することはできません。

データ・ロードのルール・ファイルでは、データ・ロード時にデータベース値をどのように変更するかを Essbase に指定できます:

- データ・ソースの中で、すべてのデータ値が1つの列に存在している場合は、この列をデータ・フィールドとして定義する必要があります。
- データベース値を加算または減算できます。
- データベース値を消去できます。
- データ・ソース値をスケールリングできます。
- データ・ソース値の符号を反転できます。

関連情報

- [データ・ロードと次元構築について](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [230 ページの「レコード操作について」](#)

データ・フィールドとしての列の定義

データ・ロードのルール・ファイルで、各レコードに各次元の列と1つのデータ列が含まれている場合は、データ・ロードのルール・ファイルでそのデータ列をデータ・フィールドとして定義する必要があります。データ・フィールドとして定義できるのは、レコード内の1つのフィールドのみです。

▶ 列をデータ・フィールドとして定義するには:

- 1 ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
- 2 データ値が含まれているフィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「データ・ロード・プロパティ」タブを選択します。
- 5 「フィールド定義」ノードで、「データ・フィールド」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- データ・ソース(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- ルール・ファイル(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「データ・ロード・プロパティ」タブ

データ値への加算

データ・ロード時には、デフォルトで、Essbase によってデータ・ソース値でデータベース値が上書きされます。データ・ソース値をデータベース値に加算することもできます。たとえば、週ごとのデータ値をロードする場合は、それを加算して累積データ値をデータベースで作成できます。その際、データ・ソースは変更されません。

[コミットされたトランザクション](#)を使用する場合、データ・ソース値をデータベース値に加算すると、データのロード中に発生するデータベースの中断からのリカバリが複雑になります。

▶ データ・ロード時に既存の値に加算するには:

- 1 ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
- 2 データ値フィールドを選択します。
- 3 「オプション」>「データ・ロードの設定」を選択します。
- 4 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックスで、「データ値」タブを選択します。
- 5 「データ値」ノードで、「既存の値に追加」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- 247 ページの「データ値からの減算」
- 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス、「データ・ロード値」タブ
- 348 ページの「データの整合性オプションの設定」
- 既存値に対する加算および減算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- import data(集約ストレージ)(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データ値からの減算

データ・ロード中、デフォルトで Essbase によってデータベースの値がデータ・ソースの値で上書きされます。ただし、データベースの値からデータ・ソースの値を減算できます。たとえば、使用可能な週単位の予算を追跡するには、週次のデータ費用を前週の予算値から減算できます。

この減算オプションを使用し、[トランザクションのコミット](#)を使用していない状態で障害が発生した場合は、回復が困難な可能性があります。

▶ データ値から減算するには:

- 1 ルール・ファイルを開くか、作成します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「オプション」>「データ・ロードの設定」を選択します。
- 4 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックスで、「データ値」タブを選択します。
- 5 「データ値」ノードで、「既存の値から差し引く」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- 246 ページの「データ値への加算」
- 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス、「データ・ロード値」タブ
- 348 ページの「データの整合性オプションの設定」
- 既存値に対する加算および減算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- import data(集約ストレージ)(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データ・ロードの前のデータ値の消去

データ・ロード中、デフォルトで Essbase によってデータベースの値がデータ・ソースの値で上書きされます。

場合によっては(値を加算または減算する場合など)、データ・ソース値をロードする前に選択したデータベース値を消去できます。

注： この機能は、[集約ストレージ](#)データベースには適用されません。

▶ データ・ロードを実行する前にデータ値を消去するには:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 消去するフィールドを選択します。
- 3 「オプション」>「データ・ロードの設定」を選択します。
- 4 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックスで、「データの組合せの消去」タブを選択します。
- 5 「組合せの消去」に、1つ以上のメンバーの組合せを入力する("New York"のように、それぞれの名前を二重引用符で囲む)か、「次元」ノードで1つ以上のメンバーをダブルクリックします。
- 6 **オプション:** 「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」をクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。
- 7 「OK」をクリックします。

関連情報

- [「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス、「データの組合せの消去」タブ](#)
- [119 ページの「データの消去」](#)
- 既存のデータ値の消去(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

符号の反転

データ・ロード・ルール・ファイルで、符号を反転させることによりデータ・フィールドの値を逆にすることができます。符号反転は、アウトラインで定義されている UDA に基づきます。

▶ データのロード中にデータ・フィールドの符号を反転するには:

- 1 ルール・ファイルを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 反転するフィールドを選択します。
- 3 「オプション」>「データ・ロードの設定」を選択します。
- 4 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックスで、「データ・ロード値」タブを選択します。
- 5 「符号反転」ノードを展開します。
- 6 「UDA 上」を選択します。
- 7 「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」ボタンをクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。

- 8 「次元」ノードで、その UDA が含まれている次元をダブルクリックします。
- 9 テキスト・ボックスに、選択したフィールドの符号を反転するために必要な UDA を入力します。
- 10 「OK」をクリックします。

関連情報

- フィールド符号の反転(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- UDA の作成
- 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス、「データ・ロード値」タブ

データ値のスケール

データ・ロード時にデータ値をスケールするためにルール・ファイルを使用できます。

たとえば、\$5,460 の売上が Essbase データベース内で 5,460、データ・ソース内で 54.6 (データ・ソースでは、値が百単位で記録されるため)として記録されているとします。データ・ソースから Essbase データベースに値をロードする場合は、値をスケールする必要があります。

▶ データ・ロードの実行時にデータ値をスケールするには:

- 1 ルール・ファイルを**開く**か、**作成**します。
- 2 フィールドを選択します。
- 3 「フィールド」>「プロパティ」を選択します。
- 4 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「データ・ロード・プロパティ」タブを選択します。
- 5 「スケール」ノードを展開します。
- 6 「スケール」を選択します。
- 7 データ値のスケール値(10 や.01 など)を入力します。
- 8 「OK」をクリックします。

関連情報

「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス、「データ・ロード・プロパティ」タブ

この章の内容

Essbase ログについて	251
ログ・アナライザについて.....	252
ログ・チャートの生成.....	253
ログ・チャートの表示.....	253
カスタム・ログ・フィルタの作成または編集	254
ログ・チャートの削除.....	255
ログ・レベルの変更	255
ログ・ビューアについて.....	256
ログの表示.....	256
ログの削除.....	257

Essbase ログについて

Essbase には、Essbase サーバーのアクティビティを記録する 2 種類のログがあります。1 つは Essbase サーバー用のログで、もう 1 つは各アプリケーション用のログです。どの種類の情報をログに記録するかは、ユーザーが指定できます。

Essbase では、Essbase に関連するすべてのアクションとコマンドは、Essbase サーバー・ログ(Essbase サーバー上のテキスト・ファイル)に書き込まれます。このログには、エージェントのプロセス情報とサーバーに対するアクティビティが記録されます。Essbase サーバー・ログは、MIDDLEWARE_HOMEUser_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/essbase/instance ディレクトリに ESSBASE.LOG という名前で保管されます。アプリケーションに関連するすべてのアクティビティ(計算、データベースの再構築など)は、アプリケーション・ログ(Essbase サーバー上のテキスト・ファイル)に書き込まれます。アプリケーション・ログは、アプリケーション・ディレクトリ(MIDDLEWARE_HOMEUser_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/essbase/instance/appname)に appname.log という名前で保管されます。

Essbase ログの使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

ログ・アナライザを使用し、ログにフィルタを適用し、ログを検索および分析できます。ログのテキストを表示するには、ログ・ビューア・ウィンドウを使用します。

サーバー・ログを参照するには、Essbase に対する管理者権限が必要です。アプリケーション・ログを参照するには、アプリケーションに対するアプリケーション・マネージャ権限が必要です。

Essbase には、アウトラインの詳細な変更情報をテキスト・ファイルに記録した、アウトライン変更ログもあります。アウトライン変更ログは、ログ・ビューアでは開けません。アウトライン変更ログの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [256 ページの「ログ・ビューアについて」](#)
- [256 ページの「ログの表示」](#)
- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの表示」](#)
- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

ログ・アナライザについて

関連情報

- [251 ページの「Essbase ログについて」](#)
- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [630 ページの「ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウ」](#)
- [632 ページの「ログ・ビューア・ウィンドウ」](#)

ログ・アナライザを使用して、Essbase サーバー・ログおよびアプリケーション・ログをフィルタ、検索および分析できます。選択または作成したフィルタに基づいて、ログの強力なチャートを表示できます。自動リフレッシュ・オプションを使用すると、ログ情報を動的に監視できます。

ログ・アナライザは、Essbase サーバーのログ・ファイルからログ情報を取得し、その情報を中間層である Essbase 管理サーバーのリレーショナル・データベースに整理します。ログが更新されたりログ・アナライザでログを開いたりしていくうちに、Essbase 管理サーバーのログ・データベースのサイズが大きくなっていきます。essbase.cfg 構成ファイルの設定を使用して、ログ・ファイルのサイズの制御や区切り記号の設定を行っている場合は、それらの設定によって Essbase 管理サーバーのログ・データベースのサイズを制御することもできます。Essbase ログの使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

Essbase サーバー・ログを開くには、管理者権限が必要です。また、アプリケーション・ログを開くには、アプリケーション・マネージャ権限が必要です。

ログ・アナライザでは、次のタスクを実行できます:

- [253 ページの「ログ・チャートの生成」](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの表示」](#)

- 254 ページの「カスタム・ログ・フィルタの作成または編集」
- 255 ページの「ログ・チャートの削除」

ログ・チャートの生成

ログ・チャートを表示したり、ログ・チャートにフィルタを適用する前に、ログ・チャート情報を生成する必要があります。ログのチャートを生成すると、Essbase 管理サーバーのリレーショナル・データベースにログが整理されます。ログ・チャートを表示するたびに「リフレッシュ」をクリックし、前回のログ・チャート表示以降にログに書き込まれたメッセージでログ・データベースを更新する必要があります。ログ・チャートは、各ログで 1 回生成するのみで十分です。

Essbase 管理サーバーのログ・データベースにログをロードする際にはログが変更されないため、Essbase サーバー上のログ・ファイルは影響を受けません。ログ・チャートの情報は、[ログ・チャートを削除する](#)までログ・データベースに保管されます。

ログ・チャートの生成はバックグラウンド・プロセスとして実行されるため、管理サービス・コンソールで引き続き作業を実行できます。バックグラウンドで生成処理が行われている間に、コンソールは終了できますが、生成プロセスが完了するまでは Essbase 管理サーバーをシャットダウンできません。

▶ ログのログ・チャートを生成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase Server または他のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして、「ログ・チャートの生成」を選択します。

バックグラウンドで生成が開始されたことを示すメッセージと、プロセスの ID が表示されます。この ID を使用して、バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウで、バックグラウンド・プロセスの[ステータスを追跡](#)できます。

- 3 「OK」をクリックします。

[生成したログ・チャートを表示](#)できます。

関連情報

- 252 ページの「ログ・アナライザについて」
- 253 ページの「ログ・チャートの表示」

ログ・チャートの表示

ログのログ・チャートを生成したら、チャートを表示したり、[フィルタ](#)をかけたりできます。

▶ ログのチャートを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase Server または他のアプリケーションを選択します。

2 右クリックして「表示」>「ログ・チャート」を選択します。

選択したログのログ・チャートが生成されていない場合は、生成するように求められます。「はい」をクリックしてログ・チャートを生成します。ログのデフォルトのチャートがログ・アナライザによって表示されます。

3 ログ・チャートを更新するには、「リフレッシュ」をクリックします。

4 **オプション:** ログのフィルタまたはチャート表示のオプションを選択し、「リフレッシュ」をクリックしてウィンドウを更新します。

5 **オプション:** ログ・チャートを自動リフレッシュする頻度を指定します。

6 **オプション:** ログ・チャートのカスタム・フィルタの作成や、チャートの軸の変更を行います。

関連情報

- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの生成」](#)
- [254 ページの「カスタム・ログ・フィルタの作成または編集」](#)
- [630 ページの「ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウ」](#)

カスタム・ログ・フィルタの作成または編集

ログ・アナライザでは、ログ・チャートのカスタム・フィルタを作成できます。アプリケーション、データベース、ユーザー、メッセージ番号、メッセージ・タイプ、期間、およびテキストに基づいてログ・チャートをフィルタできます。また、ログ・チャートの X 軸と Y 軸も指定できます。

ログのフィルタを作成すると、ログのチャートを表示するたびにそのフィルタが使用できます。ログのログ・チャートを削除すると、ログに定義されたカスタム・フィルタも削除されます。

▶ ログ・チャートのカスタム・フィルタを作成または編集するには:

1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ログ・チャートを表示する Essbase サーバーまたはアプリケーションを選択します。

2 右クリックして、「表示」>「ログ・チャート」を選択します。

「ログ・アナライザ・チャート」・ウィンドウが表示されます。

3 「フィルタの追加」をクリックし、カスタム・フィルタを追加します。

4 「フィルタを適用して表示」で、フィルタを選択して「フィルタの編集」をクリックし、カスタム・フィルタを編集します。

5 「カスタム・フィルタの追加/カスタム・フィルタの編集」で、[フィルタ基準を指定](#)します。

6 「OK」をクリックします。

フィルタに基づいて、ログ・アナライザによってログ・チャートがリフレッシュされます。

関連情報

- [481 ページの「カスタム・フィルタの追加」および「カスタム・フィルタの編集」ダイアログ・ボックス](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの表示」](#)
- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)

ログ・チャートの削除

Essbase サーバー・ログまたはアプリケーション・ログの **ログ・チャート** を生成すると、Essbase 管理サーバーのディスク・スペースを消費します。ログ・チャートを削除することで、Essbase 管理サーバーのディスク・スペースを解放できます。ログ・チャートを削除すると、ログに定義された **カスタム・フィルタ** も削除されます。

ログのログ・チャートをまだ削除していない場合は、Essbase サーバーからログを削除しようとする、ログ・チャートを削除するように求められます。

アプリケーションを削除すると、そのアプリケーションのログ・チャート情報も削除されます。

▶ Essbase サーバーまたはアプリケーションからログ・チャートを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ログ・チャートを削除する Essbase サーバーまたはアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「削除」>「ログ・チャート」を選択します。
- 3 「OK」をクリックします。

関連情報

- [253 ページの「ログ・チャートの表示」](#)
- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)
- [257 ページの「ログの削除」](#)

ログ・レベルの変更

Administration Services では、Essbase ログ・レベルをサーバー・レベルおよびアプリケーション・レベルで変更できます。

- アプリケーション・ログ・レベルを変更する場合は、[505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ](#) を使用
- サーバー・ログ・レベルを変更する場合は、[499 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「環境」タブ](#) を使用

関連情報

- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [499 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「環境」タブ](#)

- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」 タブ](#)

ログ・ビューアについて

ログ・ビューアによって、Essbase サーバー・ログとアプリケーション・ログをテキスト・ウィンドウで参照できます。ログ・ビューアには、最大 5MB のログ情報が表示されます。ログ情報がこれより大きい場合は、最も新しいログ情報が表示されます。

ログにフィルタをかけたり、フィルタに基づいてグラフィカルなチャートを表示したりするには、[ログ・アナライザ](#)を使用します。

ログを表示している間に発生したアクティビティは、「リフレッシュ」をクリックするまで反映されません。

ログ・ビューアでは、次のタスクを実行できます:

- [ログの表示](#)
- [ログの削除](#)

ログは、Essbase サーバーのディスク・スペースを消費します。ログ・ファイルのサイズは、`essbase.cfg` 構成ファイルの設定で制限できます。Essbase ログの使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [251 ページの「Essbase ログについて」](#)
- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [632 ページの「ログ・ビューア・ウィンドウ」](#)
- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)

ログの表示

Essbase には、Essbase のアクティビティを記録する 2 種類のログがあります。1 つは Essbase サーバー用のログで、もう 1 つは各アプリケーション用のログです。サーバー・ログとアプリケーション・ログは、ログ・ビューアで開くことが可能です。詳細は、[256 ページの「ログ・ビューアについて」](#)を参照してください。

ログ・ビューアには、ユーザーがログ表示を要求した時点でのログのスナップショットが読取り専用で表示されます。ログの表示内容を更新するには、「リフレッシュ」をクリックします。

Essbase サーバー・ログを開くには、管理者権限が必要です。また、アプリケーション・ログを開くには、アプリケーション・マネージャ権限が必要です。

ログにフィルタをかけたり、フィルタに基づいてグラフィカルなチャートを表示したりするには、[ログ・アナライザ](#)を使用します。

▶ ログを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase Server または他のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして、「表示」>「ログ」を選択します。
- 3 「ログ・ビューアのオプション」ダイアログ・ボックスで、最近のログ・エントリ、または特定の日付以降のログ・エントリのどちらを表示するかを指定します。
- 4 「OK」をクリックします。

ログ・ビューアには、ログが最大 5 メガバイト(5 MB)まで表示されます。ログのロードには時間がかかることがあります。

デフォルトでは、最も古いログから順にログ・ビューア・ウィンドウに表示されます。

関連情報

- [251 ページの「Essbase ログについて」](#)
- [256 ページの「ログ・ビューアについて」](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの表示」](#)
- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

ログの削除

ログは、Essbase サーバーのディスク・スペースを消費します。管理者権限を持っている場合は、Essbase サーバーからログを削除できます。詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

Essbase サーバーからログを削除する前に、他の場所にログをコピーしてバックアップすることをお勧めします。Essbase サーバー・ログは、

MIDDLEWARE_HOMEUser_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/essbase/
instance ディレクトリに ESSBASE.LOG という名前で保管されます。アプリケーション・ログは、アプリケーション・ディレクトリ(たとえば、
MIDDLEWARE_HOMEUser_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/essbase/
instance/appname)に appname.log という名前で保管されます。

▶ ログを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase Server または他のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして、「削除」>「ログ」を選択します。
- 3 「OK」をクリックします。

ログ・チャート情報がログに存在する場合は、ログ・アナライザ・データベースからその情報を削除するように求められます。

関連情報

- [256 ページの「ログ・ビューアについて」](#)

- [256 ページの「ログの表示」](#)
- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [255 ページの「ログ・チャートの削除」](#)

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- deletelog(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

Shared Services のユーザー管理について	259
Essbase サーバーの変換および Shared Services へのユーザーの移行.....	262
Shared Services へのユーザーの移行.....	263
データベース計算およびフィルタ・アクセスの割当て.....	264
Shared Services へのアプリケーションの再登録.....	266

Shared Services のユーザー管理について

EPM System のセキュリティでは、Shared Services を、EPM System 製品へのユーザーおよびグループ・アクセスを集中的に管理するためのシステムとして使用します。EPM System のセキュリティには、コーポレートまたはネイティブの Shared Services ユーザー・ディレクトリ、および Oracle Hyperion Shared Services Console と呼ばれる共通のユーザー・インタフェースが含まれます。Shared Services ユーザー管理システムを使用することで、複数の EPM System 製品のユーザーの管理およびプロビジョニングを 1 箇所から実行できます。プロビジョニングとは、ユーザーおよびグループに、Essbase アプリケーションの役割およびアクセス権限を割り当てるプロセスです。

デフォルトの配置オプションを使用する場合、Administration Services、Essbase および Oracle Hyperion Provider Services は EPM System セキュリティ・モードで配置されます。

Essbase Administration Server の場合、インストール後に構成ユーティリティを実行し、Shared Services サーバーを指定すると、その時点で Essbase Administration Server が EPM System セキュリティ・モードに変換されます。Shared Services の構成情報は、Essbase Administration Server のプロパティ・ウィンドウ(「構成」タブ)に表示できます。

Essbase を EPM System セキュリティ・モードで配置しない場合、Essbase では独自のネイティブ・セキュリティ・モードを使用して、Essbase アプリケーション、データベースおよびアーチファクトのセキュリティを管理します。Essbase ネイティブのセキュリティ・モードで稼働している Essbase サーバーは、Shared Services Console から EPM System セキュリティ・モードに変換できます。

一度変換を実行すると、Essbase 管理サーバーおよび Essbase サーバーをネイティブのセキュリティ・モードに変換しなおすことはできません。Essbase サーバーを EPM System セキュリティ・モードに変換する手順については、[262 ページ](#)の

「[Essbase サーバーの変換および Shared Services へのユーザーの移行](#)」を参照してください。

サーバーが EPM System セキュリティ・モードで稼働する場合は、Shared Services Console を使用してユーザー管理のすべてのタスクを実行します。Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードで稼働しているかどうかは、Essbase サーバーのプロパティ・ウィンドウ(「セキュリティ」タブ)で確認できます。

注： このヘルプ・システム内のすべての手順は、特に記述がないかぎり EPM System セキュリティ・モードおよび Essbase ネイティブのセキュリティ・モードの両方に適用されます。

関連情報

『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の EPM System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

EPM System セキュリティ・モード

Shared Services を使用してユーザー管理を実行するには、既存のユーザーを Shared Services に移行する必要があります。このとき、以前のリリースで外部的に認証されていた"ネイティブ"・ユーザーも移行する必要があります。Shared Services にユーザーを移行する方法は、[262 ページの「Essbase サーバーの変換および Shared Services へのユーザーの移行」](#)を参照してください。

Essbase 管理サーバー、Essbase サーバー、または Provider Services が EPM System セキュリティ・モードで稼働している場合、ユーザー管理に関連するすべての機能(作成、名前変更、削除、アクセス権限の割当てなど)は Shared Services Console からのみ実行できます。ユーザー管理の大部分のタスクは、管理サービス・コンソールを使用して実行できなくなります。Essbase サーバーでは、Shared Services を介して Essbase にプロビジョニングされているユーザーの情報を引き続き表示できますが、ユーザー情報は編集できません。

Essbase が EPM System セキュリティ・モードにある場合は、一部のセキュリティ情報が Shared Services および外部ユーザー・ディレクトリによって保管され、一部のセキュリティ情報が Essbase セキュリティ・ファイル(essbase.sec)に保管されます。[313 ページの「Essbase セキュリティ・ファイルについて」](#)を参照してください。

Essbase では、ユーザーおよびグループの詳細(ユーザーおよびグループ情報と Essbase アプリケーションへのプロビジョニングを含む)を Shared Services から取得します。したがって、Essbase 管理者は、Essbase と Shared Services のセキュリティを明示的に同期する必要はありません。

ユーザーが Essbase にログオンする際、Essbase は Shared Services にそのユーザーの情報を問い合わせます。ユーザーがセッションを開始する権限は、セッション中にユーザーの権限が Shared Services で変更されるかどうかに関係なく、セッション全体で保持されます。

EPM System セキュリティ・モードでのユーザーとグループのセキュリティの詳細、および Shared Services に対する Essbase ユーザーの役割の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

Provider Services 向けには、管理者の役割のプロビジョニングのみを行います。Provider Services にはユーザーが含まれないため、ネイティブ・モードのユーザーを EPM System セキュリティ・モードに移行する必要はありません。

EPM System セキュリティ・モードでは、Essbase 管理サーバー・ユーザーには関連付けられた役割がありません。したがって、Shared Services を介して認証されるユーザーはすべての Essbase 管理サーバーに接続できます。Essbase 管理サーバー・ユーザーについてプロビジョニングを行う必要はありません。管理サービス・コンソールには、ログイン中の Essbase 管理サーバー・ユーザーのみが表示されます。管理サービス・コンソールでは、引き続き管理サーバー・ユーザーを Essbase サーバーにマッピングできますが、他のユーザー情報は編集できません。

Shared Services Console を使用したユーザーの管理およびプロビジョニングの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

Essbase ネイティブのセキュリティ・モード

Essbase サーバーで以前のリリースと同じようにユーザーおよびグループの管理を行う場合は、引き続き Essbase のネイティブの認証を使用できます。Essbase を EPM System セキュリティ・モードで実行する場合は、Essbase 管理サーバーも同じセキュリティ・モードで実行する必要があります。一方で、Essbase を Essbase ネイティブのセキュリティ・モードで実行し、Essbase 管理サーバーを EPM System セキュリティ・モードで実行することは可能です。

Provider Services については、Administration Services とセキュリティ・モードが一致している必要があります。たとえば、Administration Services を EPM System セキュリティ・モードで実行する場合は、Provider Services も EPM System セキュリティ・モードで実行する必要があります。また、Administration Services をネイティブ・モードで実行する場合は、Provider Services もネイティブ・モードで実行する必要があります。

Essbase ネイティブのセキュリティモードでは、管理サービス・コンソールを使用して引き続きユーザーを管理できます。EPM System セキュリティ・モードで作成されたユーザーは、Essbase がネイティブのセキュリティ・モードで実行しているときにはコンソールに表示されません。Essbase ネイティブ・モードでは、ネイティブ・ユーザーおよび外部ユーザーを以前と同じように作成できます。ネイティブ・モードでの外部ユーザーは、引き続き Shared Services を介して認証されますが、Shared Services Console を使用してプロビジョニングを実行できません。

Essbase サーバーの変換および Shared Services へのユーザーの移行

デフォルトの配置オプションを使用する場合、Essbase および Administration Services は EPM System セキュリティ・モードで配置されます。

Administration Services を EPM System セキュリティ・モードで構成した後は、Essbase 管理サーバー・ユーザーを Shared Services に移行する必要があります。

Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードの Essbase 配置に EPM System セキュリティを使用するには、すべての Essbase サーバー・アプリケーションと既存の Essbase ユーザーおよびグループを、この項で説明するとおりに Shared Services に移行する必要があります。

一度変換を実行すると、Essbase 管理サーバーおよび Essbase サーバーをネイティブのセキュリティ・モードに変換しなおすことはできません。サーバーが EPM System セキュリティ・モードで稼働する場合は、Shared Services Console を使用してユーザー管理のすべてのタスクを実行します。

Essbase サーバーを変換すると、その時点で外部認証ディレクトリに含まれない Essbase のすべてのネイティブ・ユーザーおよびグループは、Shared Services のネイティブ・ユーザー・ディレクトリに含まれる Shared Services のネイティブ・ユーザーおよびグループに変換され、対応する役割を付与されます。外部認証ユーザーは Shared Services に登録されますが、元の認証ディレクトリに引き続き保管されます。正常に移行されないユーザーは、Essbase セキュリティ・ファイル (essbase.sec) で保持されます。

Shared Services への移行中にユーザーのデータベース権限が変更された場合、情報は AccessModifiedUsers_n.txt というテキスト・ファイルに書き込まれます。ここで n は、Shared Services に登録されている Essbase のインスタンスに対するシーケンス ID を表します。このファイルは、ARBORPATH/bin ディレクトリにあります。

このプロセスでは、アプリケーションも Shared Services に登録されます。自動のユーザー移行プロセスの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

サーバーを変換できるのは Essbase 管理者のみです。また、Essbase サーバーを変換するときは、Essbase 管理サーバーを EPM System セキュリティ・モードで実行している必要があります。

▶ Essbase サーバーを EPM System セキュリティ・モードに変換するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーのノードの下にある「セキュリティ」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「ユーザーの外部化」を選択します。
- 3 確認のプロンプトで「はい」をクリックして続行します。

注： 一度変換を実行すると、サーバーをネイティブのセキュリティ・モードに変換しなおすことはできません。

- 4 「[変換設定](#)」 [ダイアログ・ボックス](#) で、Essbase 管理サーバーのサーバーおよびポートの情報を指定します。
- 5 ネイティブの Shared Services ユーザーとして作成されるユーザー向けにパスワードを作成する方法を指定します。
- 6 「OK」 をクリックして変換を開始します。
- 7 必要に応じてユーザーの外部化ウィザードを使用して、[最初の移行に失敗したユーザーおよびグループを再び移行](#) します。

関連情報

- [518 ページの「変換設定」ダイアログ・ボックス](#)
- [259 ページの「Shared Services のユーザー管理について」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の EPM System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章の EPM System セキュリティへの Essbase の移行に関するトピック

関連コマンド

alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Shared Services へのユーザーの移行

Shared Services を使用してセキュリティを管理する前に、既存のネイティブ・ユーザーおよびグループを Shared Services に移行(外部化)する必要があります。

最初に EPM System セキュリティ・モードに [Essbase サーバーを変換](#) すると、ユーザーおよびグループが自動的に Shared Services に移行されます。移行に失敗したユーザーおよびグループは、Essbase セキュリティ・ファイル(ARBORPATH/essbase.sec)に保持されます。Shared Services への移行中にユーザーのデータベース権限が変更された場合、AccessModifiedUsers_n.txt というテキスト・ファイルに情報が書き込まれます。ここで、n は、Shared Services に登録された Essbase のインスタンスのシーケンス ID を表します。(シーケンス ID は Essbase が外部化されるたびに増加します。)このファイルは、ARBORPATH/bin ディレクトリにあります。

Essbase 管理サーバーのユーザーは、サーバーの変換時に自動的に移行されません。Essbase 管理サーバーのユーザーを Shared Services に移行する場合は、ユーザーの外部化ウィザードを使用する必要があります。

注： エンタープライズ・ビューでは、現在 Essbase 管理サーバーにログオンしているユーザーのみが「Essbase 管理サーバー」ノード(「ユーザー」)に表示されます。ただし、ユーザーの外部化ウィザードを使用すると、エンタープライズ・ビューに表示されないユーザーも含めて、Essbase 管理サーバーに存在するすべてのユーザーを移行できます。

ユーザーの外部化ウィザードを使用して Administration Services ユーザーを移行するか、以前に移行に失敗した Essbase ユーザーを移行しなおすすめ場合は、ウィザードで指定したファイルと、Essbase サーバー・ログに移行エラーが記録されます。

サーバーのユーザーを移行できるのは Essbase 管理者のみです。

注意 Shared Services に移行する場合、Essbase のユーザーとグループは Shared Services の対応する役割に変換されます。Shared Services は、「admin」というユーザー ID を使用して読み取り専用のスーパーユーザーを作成します。Essbase に「admin」というユーザー ID が含まれる場合、そのユーザー ID を Shared Services に移行できません。移行前に、「admin」というユーザー ID を「asadmin」などに変更します。各自の Essbase のセキュリティ・ファイルを編集するには、管理サービス・コンソールまたは MaxL を使用します。

▶ Essbase ユーザーを Shared Services に移行するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーのノードの下にある「セキュリティ」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「ユーザーの外部化」を選択します。
- 3 詳細は、[ユーザーの外部化ウィザード](#)で、「ヘルプ」をクリックします。

▶ Essbase 管理サーバーのユーザーを Shared Services に移行するには:

- 1 「Essbase 管理サーバー」ノードを右クリックして、「ユーザーの外部化」を選択します。
- 2 詳細は、[ユーザーの外部化ウィザード](#)で、「ヘルプ」をクリックします。

関連情報

- [259 ページの「Shared Services のユーザー管理について」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の EPM System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章の EPM System セキュリティへの Essbase の移行に関するトピック

関連コマンド

alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース計算およびフィルタ・アクセスの割当て

注: この項は、Essbase ネイティブのセキュリティ・モードには適用されません。

Shared Services Console で Essbase アプリケーション向けにユーザーのプロビジョニングを実行した後で、特定の Essbase アプリケーションおよびデータベースに関してユーザーおよびグループにアクセス権限を割り当てられます。たとえば、アプリケーションに対してユーザーのアクセス権と役割を割り当てた後で、そのユーザーに対して Essbase フィルタを割り当てたり、特定の計算スクリプトへのアクセス権を割り当てたりすることが可能です。Shared Services Console では、これらのタスクを実行するために Essbase 専用の画面が表示されます。

データベース計算およびフィルタ・アクセスを割り当てるとき、Shared Services Console にログインしたユーザーとして自動的に Administration Services および Essbase にログインします。このユーザーは、有効な Essbase 管理者、アプリケーション・マネージャ、またはデータベース・マネージャである必要があります。ユーザーは適切なアプリケーションのプロビジョニング・マネージャ役割を持つ必要があります。

注： 計算スクリプトおよびフィルタは、Essbase を使用して作成する必要があります。

Shared Services でのユーザーのプロビジョニング方法については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

▶ ユーザーおよびグループにデータベース計算およびフィルタ・アクセスを割り当てる手順は、次のとおりです：

- 1 「Shared Services」で、「プロジェクト」ノードを展開し、Essbase アプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして、「アクセス権の割当て」を選択します。
- 3 「使用可能なユーザーおよびグループ」からアイテムを選択し、ユーザーのみ、グループのみ、またはその両方を表示します。

Essbase 管理者およびアプリケーション・マネージャは、リストに含まれません。

- 4 そのアプリケーションについて操作するユーザーまたはグループ、あるいはその両方を選択します。
- 5 **オプション:** プロビジョニングを行った直後のユーザーおよびグループを表示するには、「リフレッシュ」をクリックします。
- 6 矢印ボタンをクリックし、選択対象を「選択したユーザーとグループ」に移動します。すべてのユーザーおよびグループを移動するには、二重矢印ボタンをクリックします。
- 7 「次へ」をクリックします。

この画面には、アプリケーションへのアクセス権を持つユーザーとその役割が一覧表示されます。

- 8 「データベース」から Essbase データベースを選択します。
- 9 ユーザーおよびグループに Essbase フィルタを割り当てる手順は、次のとおりです：

1. フィルタを割り当てる各ユーザーおよびグループの隣にあるチェック・ボックスを選択します。
2. 「フィルタ」からフィルタを選択します。

フィルタ・リストには、Essbase サーバー上の選択したデータベースのフィルタが表示されます。

10 ユーザーおよびグループに Essbase 計算スクリプトへのアクセス権を割り当てる手順は、次のとおりです:

1. 計算スクリプトのアクセス権を割り当てる各ユーザーとグループの横にあるチェック・ボックスを選択します。
2. 「計算」ドロップダウン・リストから、適切な計算スクリプトを選択するか、必要に応じて「すべて」または「なし」を選択します。

計算スクリプトのリストには、Essbase サーバー上の選択したデータベースの既存の計算スクリプトが表示されます。

11 オプション: 次のいずれかのアクションを行います:

- 計算アクセスのみを割り当てる場合は、「フィルタ」から「更新しない」を選択します。
- フィルタアクセスのみを割り当てる場合は、「計算」から「更新しない」を選択します。

12 「計算」の横の適用チェック・マークをクリックして、選択を適用します。

注: 「保存」をクリックしていない場合、「リセット」をクリックして元の設定(または最後に保存した設定)に戻すことができます。

13 「保存」をクリックします。

新しい画面にステータス・メッセージが表示されます。変更内容は即座に管理サービス・コンソールに反映されます。

関連情報

- [259 ページの「Shared Services のユーザー管理について」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の EPM System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

grant(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Shared Services へのアプリケーションの再登録

Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#)に変換される際、アプリケーションは Shared Services に自動的に登録されます。次のような状況では、アプリケーションの再登録が必要になる場合があります:

- Shared Services Console でアプリケーションをプロジェクトから「割り当てられていないアプリケーション」に移動した場合は、そのアプリケーションを再登録する必要があります。
- MaxL または API を使用して Essbase 管理サーバーの場所(Shared Services からのコールバックの際に使用)を変更した場合、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを再登録する必要があります。
- MaxL または API を使用して Essbase サーバーを EPM System セキュリティ・モードに変換した場合は、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを再登録する必要があります。
- Shared Services Console でプロジェクトを削除した場合は、そのプロジェクトに含まれるすべてのアプリケーションを再登録する必要があります。グローバル・アプリケーションに戻すには、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを再登録する必要があります。
- Essbase 管理サーバーのコンピュータ名またはポート番号を変更した場合は、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを再登録する必要があります。
- Essbase サーバーのコンピュータ名またはポート番号を変更した場合は、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを再登録する必要があります。

新しく作成したアプリケーションや名前を変更したアプリケーションを登録する必要はありません。このような変更は、自動的に Shared Services に伝播されます。

▶ Shared Services にアプリケーションを再登録するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「登録」を選択します。

アプリケーションが Shared Services に登録され、Shared Services Console が更新されます。

▶ Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションを Shared Services に登録するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「アプリケーション」コンテナ・ノードを選択します。
- 2 右クリックして「すべて登録」を選択します。

Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションが Shared Services に登録され、Shared Services Console が更新されます。

関連情報

『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の EPM System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

セキュリティと権限について	269
サーバー・レベルでのセキュリティ管理	270
アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ管理	271
ユーザーおよびグループの管理	272
ユーザーの自動切断	273
アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ	274
ユーザーおよびグループのセキュリティ	278
フィルタの管理	307

セキュリティと権限について

注： この項は、Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードに適用されます。
Shared Services を使用してセキュリティを管理する場合は、[259 ページの「Shared Services のユーザー管理について」](#)を参照してください。

Essbase のセキュリティは、データベース・セキュリティの様々なニーズに応えられるように設計されています。ユーザーやグループには様々なレベルの権限を付与できます。また、サーバー・レベル、アプリケーション・レベル、データベース・レベルでも権限を定義できます。セキュリティは次の方法で適用できます：

- **ユーザーおよびグループ：** 個々のユーザーおよびユーザーのグループに権限を付与できます。ユーザーおよびグループの権限の方が、アプリケーションおよびデータベースの最小限の権限よりもレベルが高い場合は、ユーザーおよびグループの権限の方が優先されます。通常のユーザーには、固有の権限はありません。ユーザーまたはグループを作成するときには、サーバー・レベルの権限を付与できます。また、ユーザーまたはグループのプロパティを編集して、特定のアプリケーションおよびデータベースに対する権限をユーザーやグループに付与できます。詳細は、[272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)を参照してください。
- **アプリケーションおよびデータベースの最小権限：** アプリケーションまたはデータベースの最小権限を定義して、アプリケーションまたはデータベースのすべてのユーザーに適用されるデフォルト・レベルのアクセス権を設定できます。アプリケーションまたはデータベースに対する最小権限と同等かそれを超える権限を持っているユーザーやグループは、他のアイテムに対して、アクセス権限がなくてもアクセスできます。より高い権限を持っているユーザー

やグループには影響はありません。詳細は、[274 ページの「アプリケーションの最小権限の設定」](#) および [275 ページの「データベースの最小権限の設定」](#) を参照してください。

- **サーバー・レベルの権限および設定:** ユーザーまたはグループの作成時には、サーバー・レベルの設定を指定できます。たとえば、サーバー全体に適用される権限をユーザーに付与できるほか、ユーザー名、パスワード、ログイン試行回数、ユーザーの非アクティブ期間を管理するためのオプションを設定できます。Essbase サーバーや特定のアプリケーションおよびデータベースで実行されているユーザー・セッションや要求を表示および終了できます。また、データに対するユーザーのロックを、サーバー・レベル、アプリケーション・レベル、またはデータベース・レベルで管理できます。詳細は、[270 ページの「サーバー・レベルでのセキュリティ管理」](#) を参照してください。
- **データベース・フィルタ:** データベースのフィルタを作成して、特定のメンバー(最小単位は個々のデータ値(セル))に対してユーザーやグループが持つことのできる権限を定義できます。詳細は、[307 ページの「フィルタの管理」](#) を参照してください。

関連情報

- [74 ページの「集約ストレージのセキュリティについて」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

サーバー・レベルでのセキュリティ管理

注: これらのタスクの大部分は、Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードに設定されている場合は適用されません。Shared Services を使用してセキュリティを管理する場合は、[259 ページの「Shared Services のユーザー管理について」](#) を参照してください。

Essbase サーバー全体に適用されるセキュリティ設定を指定して、サーバーに接続するすべてのユーザーのアクティビティを管理できます。サーバー・レベルでセキュリティを管理するには、次の操作の一部または全部を行う必要があります:

タスク	詳細情報
サーバーのユーザーおよびグループを作成し、サーバー・レベルの権限をそれらのユーザーおよびグループに付与する。	<ul style="list-style-type: none">● 279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」● 280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」
複数のサーバー間でセキュリティを管理する。	<ul style="list-style-type: none">● 293 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのコピー」● 302 ページの「サーバー間でのパスワードの伝播」● 295 ページの「Essbase サーバー・グループのコピー」● 641 ページの「移行ウィザード」
サーバーの現在のユーザーおよびグループを表示する。	<ul style="list-style-type: none">● Essbase サーバー・ユーザーおよびグループの表示

タスク	詳細情報
パスワードの有効期間およびユーザー名の無効化のルールを管理する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 306 ページの「パスワードの有効期限の管理」 ● 303 ページの「ユーザー名の無効化」 ● 305 ページの「無効化されたユーザー名の表示またはアクティブ化」
アクティブなユーザー・セッションの表示、ユーザーの切断、特定のユーザー要求の終了を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ● 319 ページの「アクティブなユーザー・セッションの表示」 ● 320 ページの「ユーザー・セッションおよび要求の切断」
データに対するユーザーのロックを表示および削除する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 321 ページの「データのロックの表示」 ● 322 ページの「データのロック解除」

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)
- [271 ページの「アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ管理

アプリケーションおよびデータベースのレベルでセキュリティを管理できます。アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ設定によって、データへの接続を管理し、各アプリケーションおよびデータベースの最小の共通セキュリティ・プロファイルを作成できます。

アプリケーションおよびデータベースのセキュリティを管理するには、次のタスクの一部または全部を行う必要があります:

タスク	詳細情報
アプリケーションおよびデータベースの最小権限を設定する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 274 ページの「アプリケーションの最小権限の設定」 ● 275 ページの「データベースの最小権限の設定」
アプリケーションのセキュリティを一時的に無効にする。	276 ページの「アプリケーション・レベルのセキュリティの無効化」
保守中にアプリケーションに対して更新、要求および接続ができないようにする。	277 ページの「アプリケーションに対するユーザー・アクティビティの遮断」
個々のユーザーおよびグループに様々なアプリケーションおよびデータベースに対する権限を与える。 注： この機能は、 EPM System のセキュリティ・モード には適用されません。	287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)
- [270 ページの「サーバー・レベルでのセキュリティ管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

ユーザーおよびグループの管理

注： このトピックは、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

Essbase サーバー上の個々のユーザーおよびユーザーのグループに、セキュリティ権限を付与できます。セキュリティ・グループにユーザーを割り当てることで、グループ・レベルで割り当てられた同一の最小権限をグループ内のユーザーで共有できます。ユーザーは、所属しているグループに割り当てられているすべての権限を継承します。また、それらのグループの権限以上の権限を持つこともできます。ユーザーおよびグループは、サーバー単位で管理されます。1 つの Essbase サーバーで定義されているユーザーおよびグループは、そのサーバー上のすべてのアプリケーションおよびデータベースに対して存在します。

ユーザーおよびグループに付与されている権限は、アプリケーション・レベルやデータベース・レベルで付与されている最小権限よりも優先されます。セキュリティ権限の詳細は、[269 ページの「セキュリティと権限について」](#)を参照してください。

ユーザーおよびグループのセキュリティを管理するには、次のタスクの一部または全部を行う必要があります：

タスク	詳細情報
Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成し、外部認証を管理する。	<ul style="list-style-type: none">● 279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」● 280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」● 282 ページの「外部認証の管理」
サーバーの現在のユーザーおよびグループを表示する。	<ul style="list-style-type: none">● Essbase サーバー・ユーザーおよびグループの表示
グループ・メンバーシップを管理する。	<ul style="list-style-type: none">● 284 ページの「グループ・メンバーシップの管理」
ユーザーおよびグループに特定のアプリケーションおよびデータベースに対する権限を与える。	<ul style="list-style-type: none">● 287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」● ユーザーおよびグループの計算権限の管理
アクティブなユーザー・セッションを管理する。	<ul style="list-style-type: none">● 319 ページの「アクティブなユーザー・セッションの表示」● 320 ページの「ユーザー・セッションおよび要求の切断」

タスク	詳細情報
データに対するユーザーのロックを管理する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 321 ページの「データのロックの表示」 ● 322 ページの「データのロック解除」
ユーザーおよびグループをコピーまたは移行し、別のサーバーにパスワードを伝播する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 293 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのコピー」 ● 302 ページの「サーバー間でのパスワードの伝播」 ● 295 ページの「Essbase サーバー・グループのコピー」
ユーザーおよびグループのセキュリティ・プロパティを編集する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 292 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集」 ● 293 ページの「グループ・プロパティの編集」 ● 301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」 ● 302 ページの「サーバー間でのパスワードの伝播」
ユーザーおよびグループの名前を変更する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 297 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの名前変更」 ● 298 ページの「グループの名前変更」
ユーザーおよびグループを削除する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 299 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの削除」 ● 300 ページの「グループの削除」
パスワードの有効期間および無効なユーザー名を管理する。	<ul style="list-style-type: none"> ● 273 ページの「ユーザーの自動切断」 ● 306 ページの「パスワードの有効期限の管理」 ● 303 ページの「ユーザー名の無効化」

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [270 ページの「サーバー・レベルでのセキュリティ管理」](#)
- [271 ページの「アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

ユーザーの自動切断

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

管理者権限を持っているユーザーは、一定時間非アクティブ状態であったユーザーを自動的に Essbase サーバーから切断するかどうか、およびいつ切断するかを指定できます。デフォルトの設定は 0 です。これは、そのオプションを無効にすることを示します。つまり、サーバーがシャットダウンされるまでユーザーは接続されたままになります。

接続設定はサーバー上のすべてのユーザーに適用され、「適用」をクリックするとすぐに有効になります。

- ▶ ユーザーを Essbase サーバーから自動的に切断するタイミングを指定するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「セキュリティ」を選択します。
 - 4 「自動ログオフ」ノードを展開します。
 - 5 「非アクティブの制限」オプションでは、Essbase によりユーザーが切断されるまでのユーザーの非アクティブ時間を分単位で指定します。
 - 6 「チェック(分ごと)」では、Essbase が非アクティブなユーザーをチェックする頻度を分単位で指定します。

注: この設定により、[セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新頻度](#)も制御されます。

- 7 「適用」をクリックします。

関連情報

- [502 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「セキュリティ」タブ](#)
- [87 ページの「Essbase サーバーへの接続](#)
- [88 ページの「Essbase サーバーからの切断](#)

関連コマンド

alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ

ここには次のトピックがあります:

- [274 ページの「アプリケーションの最小権限の設定](#)
- [275 ページの「データベースの最小権限の設定](#)
- [276 ページの「アプリケーション・レベルのセキュリティの無効化](#)
- [277 ページの「アプリケーションに対するユーザー・アクティビティの遮断](#)

アプリケーションの最小権限の設定

アプリケーション・マネージャ権限を持っているユーザーは、アプリケーション・レベルの設定を使用して、アプリケーション内のすべてのデータベースに対する最小レベルの権限をすべてのユーザーに付与できます。特定のデータベースでより高い権限が設定されていたり、特定のユーザーやグループにより高い権限が付与されていないかぎり、この設定は、すべてのユーザーおよびアプリケーション内のすべてのデータベースに適用されます。

たとえば、あるアプリケーションに2つのデータベースが含まれており、そのデータベースが含まれているアプリケーションに設定されている最小権限が「書込み」であるとします。1つのデータベースで最小権限を「計算」に変更すると、そのデータベースではすべてのユーザーが計算を実行可能になりますが、もう1つのデータベースの最小権限は「書込み」(アプリケーション・レベルで設定された、より低い設定)のままです。

同様に、あるアプリケーションの最小権限が「読取り」で、同じアプリケーションに対して書込み権限を持っているユーザーがいる場合、そのユーザー・レベルの権限はアプリケーション・レベルの権限よりも優先されます。

▶ アプリケーションの最小権限を設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「最小アクセス・レベル」オプションで、アクセス・レベルを選択します。

たとえば、アプリケーション内のすべてのデータベースに対してすべてのユーザーが少なくとも書込みアクセスできるようにする(つまり、すべてのユーザーがデータ値を更新できるようにする)場合は、「書込み」を選択します。

デフォルト設定は「なし」です。この設定の場合、最小権限は設定されません。すべてのユーザーは、各自が持っているユーザー・レベルの権限に基づいてこのアプリケーションにアクセスします。

- 5 「適用」をクリックします。

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ」](#)
- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [275 ページの「データベースの最小権限の設定」](#)

関連コマンド

- `alter application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの最小権限の設定

注: この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

データベース・マネージャ権限を持っているユーザーは、データベースの設定を使用して、データベースに対する最小権限をすべてのユーザーに付与できます。この設定は、そのデータベースのすべてのユーザーに適用され、アプリケーション・レベルの権限よりも優先されます。個々のユーザーやグループに、データベースの最小権限よりも高い権限が付与されている場合は、より高い権限のほうが優先されます。

たとえば、あるデータベースの最小権限が「読取り」で、そのデータベースに対して書込み権限を持っているユーザーがいる場合、そのユーザー・レベルの権限はデータベース・レベルの権限よりも優先されます。そのユーザーは、データベース内のデータ値を更新できます。

▶ データベースの最小権限を設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」で、「一般」タブを選択します。
- 4 「最小アクセス・レベル」で、アクセス・レベルを選択します。たとえば、そのデータベースに対してすべてのユーザーに少なくとも書込みアクセス権を付与する(つまり、すべてのユーザーがデータ値を更新できるようにする)場合は、「書込み」を選択します。

デフォルト設定は「なし」です。この設定の場合、最小権限は設定されません。すべてのユーザーは、各自が持っているユーザー・レベルの権限に基づいてこのデータベースにアクセスします。

- 5 「適用」をクリックします。

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [570 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ」](#)
- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [274 ページの「アプリケーションの最小権限の設定」](#)
- [307 ページの「フィルタの管理」](#)

関連コマンド

- `alter database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーション・レベルのセキュリティの無効化

アプリケーション・マネージャ権限を持っているユーザーは、アプリケーションのセキュリティ設定を無効化できます。デフォルトでは、セキュリティは使用可能に設定されます。つまり、セキュリティ設定が適用されます。セキュリティを無効にすると、Essbase では現在のセキュリティ設定が無視され、すべてのユー

ザーがアプリケーション・マネージャと見なされます。アプリケーション・マネージャ権限は、アプリケーション内のすべてのオブジェクトに対する完全なアクセス権を与えます。

セキュリティを無効にすると、ユーザー・レベルのセキュリティ設定は無効になります。データベース・レベルで同様のことを行う機能は用意されていません。

▶ アプリケーションのセキュリティを無効にし、すべてのユーザーをアプリケーション・デザイナーとみなすようにするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」で、「一般」を選択します。
- 4 「セキュリティ」ノードを展開します。
- 5 「セキュリティを使用可能にする」チェック・ボックスの選択を解除します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでの一般アプリケーション接続オプションの設定に関する章
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setappstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションに対するユーザー・アクティビティの遮断

アプリケーション・レベルで更新作業や保守作業を行うときは、その前に、アプリケーションに対するユーザー・アクティビティを遮断することをお勧めします。アプリケーションに対するアプリケーション・マネージャ権限を持っているユーザーは、様々なタイプのアクティビティをアプリケーションが受け付けないように設定できます。

ユーザー・アクティビティの設定の詳細は、[505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ](#)を参照してください。

▶ アプリケーションに対するユーザー・アクティビティを一時的に遮断するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして、「プロパティの編集」を選択します。

- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「セキュリティ」ノードを展開します。
- 5 1つまたは複数の「許可」オプションを消去します。

これらの設定の持続性については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』で一般アプリケーション接続オプションの設定を参照してください。

- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ](#)
- [319 ページの「アクティブなユーザー・セッションの表示](#)
- [320 ページの「ユーザー・セッションおよび要求の切断](#)

関連コマンド

- `alter application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ユーザーおよびグループのセキュリティ

ここには次のトピックがあります:

- [279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成](#)
- [280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成](#)
- [281 ページの「Essbase サーバーのユーザーおよびグループの表示](#)
- [282 ページの「外部認証の管理](#)
- [284 ページの「グループ・メンバーシップの管理](#)
- [286 ページの「ユーザーのアプリケーション・アクセス・タイプの設定](#)
- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理](#)
- [289 ページの「ユーザーおよびグループの計算権限の管理](#)
- [292 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集](#)
- [293 ページの「グループ・プロパティの編集](#) [293 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのコピー](#)
- [295 ページの「Essbase サーバー・グループのコピー](#)
- [297 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの名前変更](#)
- [298 ページの「グループの名前変更](#)
- [299 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの削除](#)
- [300 ページの「グループの削除](#)
- [300 ページの「パスワード変更の強制](#)
- [301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更](#)

- 302 ページの「サーバー間でのパスワードの伝播」
- 303 ページの「ユーザー名の無効化」
- 305 ページの「無効化されたユーザー名の表示またはアクティブ化」
- 306 ページの「パスワードの有効期限の管理」

Essbase サーバーのユーザーの作成

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

ユーザーおよびグループの作成/削除権限を持っているユーザーは、Essbase サーバーにユーザーを作成できます。管理者権限を持つユーザーか、特定の権限を持つ通常ユーザーを作成できます。ユーザーは、[既存のユーザーのセキュリティ・プロパティをコピー](#)することによって作成することもできます。ユーザーを作成する場合、自分自身の権限と同等かそれ以下の権限を付与できます。

ネイティブの Essbase 認証または[外部認証](#)を使用してログインするユーザーを作成できます。Essbase ユーザーに外部認証を使用させる場合は、EPM System セキュリティ・ドキュメントの説明に従って、Essbase サーバーおよび Essbase 管理サーバーを適切に構成しておく必要があります。

新しいユーザーに付与する権限は、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションとデータベースに適用されます。ユーザーを作成した後で、個々のアプリケーションやデータベースに対するユーザーの権限を変更できます。権限の詳細は、[269 ページの「セキュリティと権限について」](#)を参照してください。

作成するユーザーが Administration Services を使用して Essbase を管理する必要がある場合は、[Essbase 管理サーバーにもそのユーザーを作成する](#)必要があります。

▶ Essbase サーバーにユーザーを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 サーバー・ノードの下で、「セキュリティ」ノードを展開します。
- 3 「ユーザー」ノードを選択して右クリックし、「ユーザーの作成」を選択します。
- 4 「ユーザーの作成」で、ユーザー名を入力します。
- 5 必要に応じて、ユーザーを作成する別の Essbase サーバーを選択します。
- 6 「[ユーザー情報](#)」タブでユーザーの認証モデルとセキュリティ・タイプを選択します。
- 7 「[グループ](#)」タブを選択して編集し、グループ内のユーザーのメンバーシップを管理します。
- 8 「[アプリケーション/データベース・アクセス](#)」タブを選択して編集し、特定のアプリケーションおよびデータベースに対する追加権限をユーザーに付与します。
- 9 「適用」をクリックして、ユーザーを作成します。

Essbase では Essbase サーバーにユーザーが作成され、[ユーザー・ウィンドウ](#)が更新されます。

10 別の Essbase サーバー上にこれと同じグループ名を作成して同じプロパティを指定するには、別の Essbase サーバーを選択し、上記の手順を繰り返します。

11 ユーザーの作成が終了したら、「閉じる」をクリックします。

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックス](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章
- [63 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーの作成」](#)
- [282 ページの「外部認証の管理」](#)
- [619 ページの「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

- `create user(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `createuser(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバーのグループの作成

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#)である場合は適用されません。

ユーザーおよびグループの作成/削除権限を持っているユーザーは、Essbase サーバーにユーザーのグループを作成できます。グループとは、同一の最小セキュリティ権限を持っているユーザーの集合です。グループを作成すると、個々のユーザーに同じ権限を割り当てていく手間を省くことが可能です。グループの個々のメンバーには、グループの権限以上の権限が個別に割り当てられていることがあるため、グループに割り当てられている権限以上の権限をグループのメンバーが持っている場合もあります。

グループを作成した後、グループにユーザーを追加し、特定のアプリケーションやデータベースに対する追加の権限をグループに付与できます。

▶ Essbase サーバーにユーザーのグループを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューから、目的の Essbase サーバーを選択します。
- 2 サーバー・ノードの下で、「セキュリティ」ノードを展開します。
- 3 「グループ」ノードを選択して右クリックし、「グループの作成」を選択します。
- 4 「グループの作成」で、グループの名前を入力します。
- 5 必要に応じて、グループを作成する別の Essbase サーバーを選択します。

- 6 「グループ情報」タブで、グループのタイプと説明を入力します。
- 7 「ユーザー」タブを選択し、ユーザーをグループに追加します。
- 8 特定のアプリケーションまたはデータベースにグループ権限を付与する場合、「アプリケーション/データベース・アクセス」タブを選択します。
- 9 「適用」をクリックして、グループを作成します。Essbase では Essbase サーバーにグループが作成され、[グループ・ウィンドウ](#)が更新されます。
- 10 別の Essbase サーバー上にこれと同じグループ名を作成して同じプロパティを指定するには、別の Essbase サーバーを選択し、前述の手順を繰り返します。
- 11 グループの作成後、「閉じる」をクリックします。

関連情報

- [623 ページの「グループ・ウィンドウ」](#)
- 「グループの作成」ダイアログ・ボックス
- [284 ページの「グループ・メンバーシップの管理」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

- create group(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- creatgroup(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバーのユーザーおよびグループの表示

各 Essbase サーバーには、Essbase 管理サーバーのユーザーとは別に定義された一連のユーザーがあります。管理サービス・コンソールを使用して、Essbase サーバーのユーザーの作成、表示、権限の割当て、削除を実行できます。

グループとは、同一の最小セキュリティ権限を持っているユーザーの集合です。管理サービス・コンソールを使用して、Essbase サーバーのグループの作成、表示、権限の割当て、削除を実行できます。

詳細は、[272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)を参照してください。

- ▶ Essbase サーバーのユーザーまたはグループが一覧表示されるテーブルを表示するには:
 - 1 エンタープライズ・ビューから、目的の Essbase サーバーを選択します。
 - 2 サーバー・ノードの下で、「セキュリティ」ノードを展開します。
 - 3 必要に応じて、「ユーザー」ノードまたは「グループ」ノードを選択して右クリックし、「ユーザー・テーブルの表示」または「グループ・テーブルの表示」を選択します。

管理サービス・コンソールに**ユーザー・ウィンドウ**または**グループ・ウィンドウ**が表示され、Essbase サーバーのユーザーまたはグループがテーブル・フォーマットで表示されます。

関連情報

- 715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」
- 623 ページの「グループ・ウィンドウ」
- 272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」

関連コマンド

- display user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display group(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listusers(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listgroups(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

外部認証の管理

注： この項は、Essbase サーバーがネイティブのセキュリティ・モードで実行されている場合の外部認証の管理に適用されます。ネイティブのセキュリティ・モードにおける外部認証での EPM System セキュリティ・プラットフォームの使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。EPM System セキュリティ・モードを使用して外部認証を管理する方法は、259 ページの「[Shared Services のユーザー管理について](#)」を参照してください。

デフォルトでは、ネイティブのセキュリティ・モードの新しいユーザーには Essbase サーバー認証が選択されます。

Essbase ユーザー、または [Administration Services](#) ユーザーに外部認証を使用可能にできます。

▶ 外部認証を Essbase ユーザーに対して使用可能にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「ユーザー」ノードを選択し、右クリックして「ユーザー・テーブルの表示」を選択します。
- 3 **ユーザー・ウィンドウ**でユーザーを作成する場合:
 1. 「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスで、「新規」をクリックして「ユーザー情報」タブを選択します。
 2. 新しいユーザーに関するその他の情報を入力します。
- 4 **ユーザー・ウィンドウ**で既存のユーザーを編集する場合:
 1. 右クリックしてユーザーを選択し、「プロパティの編集」を選択します。

2. 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「ユーザー情報」タブをクリックします。
 - 5 「シングル・サインオンの使用」を選択します。
このオプションを選択すると、「検索」ボタンが使用可能になります。
 - 6 「検索」をクリックします。
 - 7 「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックスで、次のタスクを実行します:
 1. 検索オプション(ユーザー名、姓名、または電子メール・アドレス)を選択し、適切なユーザー情報を入力します。
 2. 「検索」をクリックして、検索オプションで指定したテキストと一致する次の箇所を検索して選択します。
 3. 「OK」をクリックします。
「ユーザーの作成」または「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックスに戻ります。
 - 8 「OK」をクリックします。
- ▶ 外部認証を Administration Services ユーザーに対して使用可能にするには:
- 1 エンタープライズ・ビューで、Essbase 管理サーバーのノードを展開します。
 - 2 そのノードの下にある「ユーザー」を選択します。
 - 3 右クリックして、「ユーザーの作成」を選択します。
 - 4 「管理サーバーでのユーザーの作成」で、「外部」を選択します。
 - 5 「検索」をクリックします。
 - 6 「外部ユーザーの検索」で、検索オプションを選択し、ユーザーに該当する検索情報を入力して「検索」をクリックします。

注： 検索順序に複数のプロバイダを指定した場合、そのプロバイダの中に正しく構成されていないものがあると、Administration Services では検索処理が中断されます。存在するはずのユーザーが見つからない場合は、データベース管理者に相談してください。

- 7 表示されたリストからユーザーを選択して、「OK」をクリックします。
- 8 もう一度「OK」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。
Administration Services ではユーザーが作成され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードにおける外部認証での EPM System セキュリティの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」](#)
- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- authenticationmodule(essbase.cfg の設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- create user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

グループ・メンバーシップの管理

注： この機能は、Essbase サーバーが **EPM System セキュリティ・モード**である場合は適用されません。

Essbase サーバー・ユーザーまたはグループを作成した後に、必要に応じてユーザーを追加または削除したり、ユーザーまたはグループのプロパティを編集することにより、グループ・メンバーシップを管理できます。自身の持つ権限よりも高い権限を付与されているグループにはユーザーを追加できません。

Essbase サーバーでユーザー・プロパティやグループ・プロパティを編集できるようにするには、ユーザーおよびグループの作成/削除権限が必要です。

▶ ユーザーのグループ・メンバーシップを管理するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 **ユーザー・ウィンドウ**で、ユーザーを選択します。
- 4 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。

注： 複数のユーザーのプロパティを同時に編集することはできません。

- 5 「ユーザー・プロパティ」・ウィンドウで、「**グループ**」を選択します。

「グループのメンバー」リスト・ボックスに、ユーザーが所属しているすべてのグループの名前が表示されます。「グループのメンバーでない」リスト・ボックスに、ユーザーを追加できる(そのユーザーが所属していない)Essbase サーバー・グループが表示されます。

- 6 グループにユーザーを追加するには、次の手順に従います。
 1. 「グループのメンバーでない」リスト・ボックスで、適切なグループを選択します。
 2. 「グループのメンバー」リスト・ボックスの方向を指す一重矢印ボタンをクリックします。
- 7 グループからユーザーを削除するには、次の手順に従います。
 1. 「グループのメンバー」リスト・ボックスで、適切なグループを選択します。
 2. 「グループのメンバーでない」リスト・ボックスの方向を指す一重矢印ボタンをクリックします。

- 8 すべてのグループを反対側のリスト・ボックスに移動するには、適切な二重矢印ボタンをクリックします。
- 9 「適用」をクリックします。

ユーザーは「グループのメンバー」リスト・ボックスに表示されたグループのみのメンバーになります。

▶ グループのユーザー・メンバーシップを管理するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「グループ」ノードをダブルクリックします。
- 3 **グループ・ウィンドウ**で、グループを選択します。
- 4 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。

注: 複数のグループのプロパティを同時に編集することはできません。

- 5 「グループ・プロパティ」・ウィンドウで、「ユーザー」を選択します。

「メンバー」リスト・ボックスに、グループ内のすべてのユーザーの名前が表示されます。「非メンバー」リスト・ボックスに、グループに追加できる(そのグループのメンバーではない)Essbase サーバー・ユーザーが表示されます。

- 6 ユーザーをグループに追加するには:

1. 「非メンバー」リスト・ボックスで、ユーザーを選択します。
2. 「メンバー」リスト・ボックスの方向を指す一重矢印ボタンをクリックします。

- 7 ユーザーをグループから削除するには:

1. 「メンバー」リスト・ボックスで、ユーザーを選択します。
2. 「非メンバー」リスト・ボックスの方向を指す一重矢印ボタンをクリックします。

- 8 すべてのユーザーを反対側のリスト・ボックスに移動するには、適切な二重矢印ボタンをクリックします。
- 9 「適用」をクリックします。

グループは「メンバー」リスト・ボックスに表示されたユーザーのみを含みます。

関連情報

- [279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」](#)
- [280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」](#)
- [623 ページの「グループ・ウィンドウ」](#)
- [544 ページの「「ユーザーの作成」 / 「ユーザー・プロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「グループ」 タブ\(Essbase サーバー\)」](#)
- [「グループの作成/グループ・プロパティ」 - 「ユーザー」 タブ](#)

- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

- alter user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- adduser(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- removeuser(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ユーザーのアプリケーション・アクセス・タイプの設定

Essbase ユーザーを作成すると、そのユーザーには Essbase というアプリケーション・アクセス・タイプが割り当てられます。これは、Essbase セキュリティで定義されている Essbase アプリケーションへのアクセス権を持っていることを意味します。その他の EPM 製品、たとえば Oracle Hyperion Planning などもアプリケーション・アクセス・タイプをユーザーに割り当てる場合があります。ライセンス契約によっては、複数のタイプのアプリケーションへのアクセス権がユーザーに与えられる場合があります。たとえば、Essbase アプリケーションと Planning アプリケーションへのアクセス権をユーザーが持っている場合があります。

Essbase のアプリケーション・アクセス・タイプ設定は、Essbase の管理ツール (Administration Services や MaxL など)でのみ変更できます。Planning のアプリケーション・アクセス・タイプ設定は、Planning のインタフェースでしか変更できないため、「Planning」チェック・ボックスは読取り専用です。

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#)である場合は適用されません。Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードである場合は、Shared Services Console を使用してユーザーのアプリケーション・アクセス・タイプを設定する必要があります。

▶ ユーザーのアプリケーション・アクセス・タイプを設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 [ユーザー・ウィンドウ](#)で、「新規」をクリックしてユーザーを作成するか、ユーザーを選択して「編集」をクリックします。
- 4 「ユーザーの作成」または「ユーザー・プロパティ」・ウィンドウで、[ユーザー情報](#)タブを選択します。
- 5 「アプリケーション・アクセス・タイプ」ノードの下で、適切なアプリケーション・アクセス・タイプを選択します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

542 ページの「[「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスおよび「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス\(Essbase サーバー\)](#)」

関連コマンド

- create user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createuser(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

デフォルトでは、ユーザーおよびグループは、アプリケーションまたはデータベースで設定されている最小権限を継承します。たとえば、あるアプリケーションの最小権限が「読取り」である場合、そのアプリケーションに接続するすべてのユーザーは、アプリケーション内のすべてのデータベースに対して、少なくとも読取り専用権限を持つこととなります。

ユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、特定のアプリケーションやデータベースに関して、アプリケーション・レベルの権限やデータベース・レベルの権限よりも高い権限をユーザーやグループに付与できます。付与できるのは、自分が持っている権限と同等かそれ以下の権限のみです。

管理者に対してアプリケーションやデータベースの権限を定義する必要はありません。管理者には、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションに対するアプリケーション・マネージャ権限が自動的に付与されます。

ユーザー/グループ権限は、様々なパースペクティブから定義できます：

- [ユーザー/グループ権限を編集する場合](#)
 - [アプリケーション/データベースを定義する場合](#)
- ▶ ユーザー/グループ権限の編集時にアプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限を管理するには：
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
 - 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードまたは「グループ」ノードをダブルクリックします。
 - 3 [ユーザー・ウィンドウ](#)または[グループ・ウィンドウ](#)で、ユーザーまたはグループを選択します。
 - 4 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。

ユーザーを選択した場合は、「ユーザー・プロパティ」・ウィンドウが開きます。

グループを選択した場合は、「グループ・プロパティ」・ウィンドウが開きます。

注： 複数のユーザーまたはグループのプロパティを一度に編集することはできません。

5 「アプリケーション/データベース・アクセス」を選択し、「アプリケーション」ノードを展開します。

ユーザーまたはグループが管理者権限を持っている場合、「アプリケーション/データベース・アクセス」タブは選択できません。これは、管理者はすべてのアプリケーションおよびデータベースに対してフル・アクセス権を持っているためです。

Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションとデータベースが、ナビゲーション・ツリーに表示されます。アプリケーションおよびデータベースごとに、ユーザーまたはグループが現在持っている権限が表示されます。

6 アプリケーションの隣をクリックし、ドロップダウン・リスト・ボックスから権限を選択します。

ユーザーまたはグループにアプリケーション・マネージャ権限を付与すると、ツリー内の選択したアプリケーションの下にあるデータベースは選択できなくなります。これは、アプリケーション・マネージャはアプリケーション内のすべてのデータベースに対してフル・アクセス権を持っているためです。

7 アプリケーション内の1つまたは複数のデータベースに対する個別の権限を付与するには、アプリケーションの権限として「データベース・アクセス」を選択します。

8 アプリケーション・ノードを展開し、データベースごとに権限を選択します。

ユーザーまたはグループのデータベース権限として「計算」を選択した場合は、そのユーザーまたはグループが実行できる計算スクリプトを指定できます。詳細は、[ユーザーおよびグループの計算権限の管理](#)を参照してください。

9 ユーザーまたはグループにデータベース・フィルタを割り当てる場合は、目的のデータベース・ノードの下で「フィルタ」を選択し、ドロップダウン・リストからフィルタを選択します。

データベースの権限として「なし」を選択した場合は、「フィルタ」オプションは選択できません。

1人のユーザーまたは1つのグループに割り当てることができるフィルタは、1つのデータベースにつき1つのみです。詳細は、[フィルタの管理](#)を参照してください。

10 「適用」をクリックします。

▶ アプリケーションまたはデータベースでの作業時にアプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限を管理するには:

1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、アプリケーションまたはデータベースを選択します。

- 2 右クリックして「ユーザー/グループ・アクセス」を選択します。
[ユーザー/グループ・アクセス](#)・ウィンドウが開いて、左側にアプリケーションおよびデータベースの階層ツリー・ビュー、右側にユーザーまたはグループのテーブルが表示されます。
- 3 「ユーザー」または「グループ」のいずれかのタブを選択します。
- 4 すべてのユーザーまたはグループを表示するか、選択されたアプリケーションまたはデータベースへのアクセス権限を持つユーザーまたはグループのみを表示するオプションを選択します。
- 5 ユーザーまたはグループを選択し、適切なテーブルのセルをクリックして、「アプリケーションのアクセス」、「データベースのアクセス」、「フィルタ」を割り当てます。

注： 複数のユーザーまたはグループの割り当てを行うには、ユーザーまたはグループを選択して「編集」をクリックします。次に「ユーザー/グループ・アクセスの編集」ダイアログ・ボックスで割り当てを行います。

- 6 すべての割り当てを適用するには、「適用」をクリックします。
- 7 ユーザーまたはグループを別のアプリケーションまたはデータベースに割り当てるには、左側のペインからアプリケーションまたはデータベースを選択してから、割り当てを行います。
- 8 終了したら、「閉じる」をクリックします。

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [ユーザー・プロパティ - 「アプリケーション/データベース・アクセス」 タブ](#)
- [ユーザー・プロパティ - 「グループ」 タブ](#)
- [712 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)
- [274 ページの「アプリケーションの最小権限の設定」](#)
- [275 ページの「データベースの最小権限の設定」](#)
- [514 ページの「計算の割り当て」ダイアログ・ボックス](#)
- [307 ページの「フィルタの管理」](#)

ユーザーおよびグループの計算権限の管理

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードになっている場合は、[Shared Services コンソール](#)を使用して[計算権限を管理](#)する必要があります。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、ユーザーやグループに、データベース単位で計算権限を付与できます。データベースの計算権限をユーザーまたはグループに付与した場合は、そのユーザーまたはグループが実行できる計算スクリプトを指定できます。Essbase サーバーに保存されているすべての計算スクリプトを実行する権限を付与することも、また、データベースに関連付けられている計算スクリプトを選択することもできます。すべての計算スクリプトを実行する権限を付与した場合は、今後そのデータベースで定義されるスクリプトに対する計算権限も、ユーザーまたはグループに自動的に追加されます。ユーザーおよびグループの計算権限はいつでも変更できます。

計算スクリプトの選択は、データベース・アクセス権限を持つユーザーまたはグループにのみ該当します。デフォルトでは、管理者、アプリケーション・マネージャ、およびデータベース・マネージャは、すべての計算スクリプトを実行できます。

計算権限は、ユーザーの様々なパースペクティブから定義できます：

- [ユーザー/グループ権限を編集する場合](#)
- [データベースを定義する場合](#)

▶ ユーザー/グループ権限の編集時にユーザーまたはグループに計算権限を付与するには：

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードまたは「グループ」ノードをダブルクリックします。
- 3 [ユーザー・ウィンドウ](#)または[グループ・ウィンドウ](#)で、ユーザーまたはグループを選択します。
- 4 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。

ユーザーを選択した場合は、「ユーザー・プロパティ」・ウィンドウが表示されます。

グループを選択した場合は、「グループ・プロパティ」・ウィンドウが表示されます。

注： 複数のユーザーまたはグループのプロパティを同時に編集することはできません。

- 5 「[アプリケーション/データベース・アクセス](#)」を選択します。

ユーザーまたはグループが管理者権限を持っている場合、「アプリケーション/データベース・アクセス」タブは選択できません。これは、管理者はすべてのアプリケーションおよびデータベースに対してフル・アクセス権を持っているためです。Essbase サーバー上のすべてのアプリケーションとデータベースが、ナビゲーション・ツリーに表示されます。アプリケーションおよびデータベースごとに、選択したユーザーまたはグループが現在持っている権限が表示されます。

- 6 目的のデータベースが含まれているアプリケーションを探し、アプリケーションの権限として「[データベース・アクセス](#)」を選択します。

- 7 アプリケーション・ノードを展開し、計算権限を付与するデータベースを探します。
- 8 目的のデータベースの横をクリックし、「計算」を選択します。
- 9 データベース・ノードを展開し、「計算」ノードで、次のいずれかの操作を行います:
 - すべての計算スクリプトを実行する権限をユーザーまたはグループに付与するには、「すべての計算を許可」を選択します。
 - 特定の計算スクリプトのみを実行する権限をユーザーまたはグループに付与するには、「計算スクリプトの選択」を選択し、スクリプトを選択します。
- 10 「適用」をクリックします。

▶ データベースでの作業時にデータベースに計算権限を付与するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「ユーザー/グループ・アクセス」を選択します。
[ユーザー/グループ・アクセス](#)・ウィンドウが開いて、左側にアプリケーションおよびデータベースの階層ツリー・ビュー、右側にユーザーまたはグループのテーブルが表示されます。
- 3 すべてのユーザーまたはグループを表示するか、選択されたアプリケーションまたはデータベースへのアクセス権限を持つユーザーまたはグループのみを表示するオプションを選択します。
- 4 「ユーザー」または「グループ」のいずれかのタブを選択します。
- 5 ユーザーまたはグループを選択します。
- 6 「アプリケーションのアクセス」権限が「データベース・アクセス」と定義されているユーザーまたはグループについては、次の手順を実行します:
 - 計算を実行する権限を付与するには、「データベースのアクセス」列で「計算」を選択します。
 - 計算を実行する権限を削除するには、「データベースのアクセス」列で「計算」以外のオプションを設定します。
- 7 計算権限を持つユーザーまたはグループに対して計算スクリプトの割当てを行うには、「計算の割当て」をクリックします。
- 8 「計算の割当て」で、すべての計算スクリプトを使用可能または無効にするには、「すべての計算の割当て」の選択を行うかまたは選択を解除します。
- 9 個々の計算スクリプトを割り当てるには、一重矢印または二重矢印をクリックして「使用可能な計算」から「選択された計算」に移動します。
- 10 終了したら、「閉じる」をクリックします。

関連情報

- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)

- [ユーザー・プロパティ](#) - 「アプリケーション/データベース・アクセス」タブ
- [712 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ」](#)
- [計算スクリプトについて](#)

Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、ユーザーのセキュリティ・プロパティを編集できます。ユーザーを編集すると、ユーザーの作成時に設定したセキュリティ・プロパティが変更されます。ユーザーの作成時に設定したプロパティを変更する他に、次のことを管理できます：

- ユーザーのパスワードを変更する
- 認証モデル(外部、カスタム、またはネイティブ)を変更する
- グループにおけるユーザーのメンバーシップを管理する
- 特定のアプリケーションおよびデータベースに対するユーザーの権限を管理する
- ユーザーの計算権限を管理する
- ユーザーが Essbase サーバーに接続できないようにする

▶ ユーザー・プロパティを編集するには：

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 [ユーザー・ウィンドウ](#)で、ユーザーを選択します。
- 4 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 5 [「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)で、必要に応じてプロパティを編集します。

注： 複数のユーザーのプロパティを同時に編集することはできません。

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」](#)
- [「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)
- [301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」](#)
- [282 ページの「外部認証の管理」](#)

- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)

グループ・プロパティの編集

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループの作成/削除権限を持っているユーザーは、グループのセキュリティ・プロパティを編集できます。グループを編集すると、グループの作成時に設定したセキュリティ・プロパティが変更されます。グループの作成時に設定したプロパティを変更する他に、特定のアプリケーションおよびデータベースに対するグループのメンバーシップおよび権限を管理できます。

▶ Essbase サーバー・グループのプロパティを編集するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「グループ」ノードをダブルクリックします。
- 3 [グループ・ウィンドウ](#)で、グループを選択します。
- 4 右クリックして「グループ・プロパティの編集」を選択します。
- 5 「[グループ・プロパティ](#)」ダイアログ・ボックスで、プロパティを編集します。

注： 複数のグループのプロパティは一度に編集できません。

関連情報

- [623 ページの「グループ・ウィンドウ」](#)
- [280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」](#)
- 「[グループ・プロパティ](#)」ダイアログ・ボックス

Essbase サーバー・ユーザーのコピー

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

ユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、1 人または複数のユーザーを別の Essbase サーバーにコピーできます。また、既存のユーザーをコピーすることにより、既存のユーザーのプロパティに基づいて新しいユーザーを作成できます。

ユーザーをコピーするには、このトピックで説明する方法を使用するか、アプリケーションを移行する処理の一環として、すべてのユーザーを別の Essbase サーバーに移行します。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。パス

ワードおよびセキュリティ権限がどのようにコピーされるかは、使用するコピー方法によって異なります。

ユーザー・ウィンドウを使用してユーザーを別の Essbase サーバーにコピーする場合(このトピックで説明する方法)は、次の点に注意してください:

- ターゲット・サーバーにおけるユーザーおよびグループの作成/削除権限が必要です。
- 他のサーバーにユーザーをコピーする前に、ターゲット・サーバーが稼働していることを確認してください。
- ターゲット・サーバーでは、コピーされるユーザーには、ソース・サーバーと同じユーザー・タイプ(管理者またはユーザー)が割り当てられます。たとえば、ソース・サーバーでユーザーおよびグループの作成/削除またはアプリケーションの作成/削除を行う権限がユーザーに付与されている場合、これらの権限はターゲット・サーバーに持ち越されます。
- コピーされるユーザーには、ターゲット・サーバーで使用する新パスワードを指定できます。
- コピーされるユーザーは、ターゲット・サーバー上のいずれのグループにも割り当てられず、コピーされるユーザーが属すグループは、ユーザーとともにコピーされません。

▶ 1人または複数のユーザーをコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーノードを選択し、「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 **ユーザー・ウィンドウ**で、コピーする1人または複数のユーザーを選択します。
- 4 右クリックして、「ユーザーのコピー」を選択します。
- 5 **「ユーザーのコピー」**で、Essbase サーバーを選択します。複数のユーザーをコピーする場合は、ターゲット Essbase サーバーはソース Essbase サーバーとは異なるサーバーである必要があります。
- 6 単一のユーザーをコピーする場合は、「新規ユーザー名」に「そのユーザーの**名前を入力**」できます。
- 7 複数のユーザーをコピーする手順は、次のとおりです:
 - コピー・プロセス中に管理サービス・コンソールで作業を続けられるようにするには、「**バックグラウンドで実行**」を選択します。
 - ユーザーがターゲット・サーバーへのログイン時にパスワードを変更する必要があるようにするには、「**次回のログイン時にパスワード変更を強制**」を選択します。
 - ユーザーが初回のログイン時に既存のパスワードを使用できるようにするには、「**次回のログイン時にパスワード変更を強制**」の選択を解除します。
- 8 単一のユーザーをコピーする場合、「Essbase サーバー認証を使用」が選択されており、この選択は解除できません。このオプションにより、ターゲット・サーバー上のユーザーに対して Essbase のネイティブ認証が設定されます。
- 9 ユーザーのパスワードを入力して確認します。

- 同じ Essbase サーバー上で既存のユーザーをコピーすることでユーザーを作成する場合は、パスワードを入力して確認する必要があります。
 - 複数のユーザーをコピーする場合は、コピーするすべてのユーザーに同じパスワードを割り当てる必要があります。
- 10 複数のユーザーをコピーする場合、管理者権限を持つユーザーをコピーするには、「管理者のコピー」チェック・ボックスを選択します。
 - 11 同じ名前の既存のユーザーがいる場合にそのユーザーを新しいユーザーで置換するには、「既存のユーザーの置換」を選択します。
 - 12 「OK」をクリックします。

Essbase ではユーザーがコピーされます。

コピー後に、ターゲット・サーバーでユーザーのプロパティを編集して、次のセキュリティ・プロパティを変更できます：

- ユーザー・タイプを変更する
- 新しいユーザーに特定のアプリケーションおよびデータベースに対する権限を与える
- グループにおける新しいユーザーのメンバーシップを管理する
- 使用される認証モデルを変更する

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [528 ページの「「ユーザーのコピー」ダイアログ・ボックス」](#)
- [282 ページの「外部認証の管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

create user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバー・グループのコピー

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

ユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、1 つまたは複数のグループを別の Essbase サーバーにコピーできます。また、既存のグループをコピーすることにより、既存のグループのプロパティに基づいて新しいグループを作成できます。

グループをコピーするには、このトピックで説明する方法を使用するか、アプリケーションを移行する処理の一環として、すべてのグループを別の Essbase サーバーに移行します。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。セキュ

リティ権限がどのようにコピーされるかは、使用するコピー方法によって異なります。

グループ・ウィンドウを使用してグループを別の Essbase サーバーにコピーする場合(このトピックで説明する方法)は、次の点に注意してください:

- ターゲット・サーバーにおけるユーザーおよびグループの作成/削除権限が必要です。
- サーバー間でグループをコピーする前に、ターゲット・サーバーが稼働していることを確認してください。
- ターゲット・サーバーでは、ソース・サーバーと同じグループ・タイプ(管理者またはユーザー)がグループに割り当てられます。たとえば、ソース・サーバーでユーザーおよびグループの作成/削除またはアプリケーションの作成/削除を行う権限がグループに付与されている場合、これらの権限はターゲット・サーバーに持ち越されます。グループには、ターゲット・サーバー上のアプリケーションおよびデータベースに対する権限は付与されません。これにより、ターゲットでグループに不適切な権限が付与されないようにします。
- ターゲット・サーバーにグループが存在せず、グループ内のユーザーがターゲットに存在しない場合、グループとそのユーザーはターゲットにコピーされ、ユーザーはグループに割り当てられます。
- コピーされるグループ内のユーザーがターゲット・サーバーに存在する場合、既存のユーザーは、ターゲット・サーバーでコピーされるグループには割り当てられません。これにより、既存のユーザーが不適切なグループに間違っ
て割り当てられないようにします。
- コピーされるグループ内のユーザーがターゲット・サーバーに存在する場合、既存のユーザーは、コピーされるグループ内のユーザーによって置き換えられ
ません。
- コピーされるグループがターゲット・サーバーに存在する場合、「既存のグ
ループの置換え」オプションが選択されている場合のみ、既存のグループは、
コピーされるグループによって置き換えられます。グループ内のユーザーは
置き換えられません。

▶ グループを Essbase サーバーにコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「グループ」ノードをダブルクリックします。
- 3 **グループ**・ウィンドウで、コピーするグループを 1 つまたは複数選択します。
- 4 右クリックして、「グループのコピー」を選択します。
- 5 「グループのコピー」ダイアログ・ボックスで、グループのコピー先の Essbase サーバーを選択します。

複数のグループをコピーする場合は、既存の Essbase サーバーとは別の Essbase サーバーを選択する必要があります。

- 6 コピーするグループが 1 つの場合は、新規グループの名前を「新規グループ名」テキスト・ボックスに入力できます。

- 7 コピーするグループが複数の場合は、コピー・プロセス中に管理サービス・コンソールで作業を続ける場合、「バックグラウンドで実行」を選択します。
- 8 複数のグループをコピーする場合、管理者権限を持つグループをコピーするには、「管理者のコピー」を選択します。
- 9 同じ名前の既存のグループがある場合にそのグループを新しいグループで置換するには、「既存のグループの置換え」を選択します。
- 10 「OK」をクリックします。

Essbase ではグループがコピーされます。

コピー後に、ターゲット・サーバーでグループのプロパティを編集して、次のセキュリティ・プロパティを変更できます:

- グループ・タイプを変更する
- 新しいグループに特定のアプリケーションおよびデータベースに対する権限を与える
- グループのメンバーシップを管理する

関連情報

- [623 ページの「グループ・ウィンドウ」](#)
- [524 ページの「「グループのコピー」ダイアログ・ボックス」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

create group(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバー・ユーザーの名前変更

注： この機能は、Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードである場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、ユーザーの名前を変更できます。自分自身の名前は変更できません。また、現在 Essbase サーバーに接続中のユーザーの名前は変更できません。

ユーザーの名前を変更すると、そのユーザーが所属しているすべてのグループでユーザー名が更新されます。また、そのユーザーが Administration Services ユーザーでもある場合は、Essbase 管理サーバー・ユーザー・プロパティ(「Essbase サーバー」タブ)の名前が自動的に変更されます。そのユーザーの Essbase 管理サーバー・ユーザー名には影響はありません。

Essbase サーバー・ユーザーの名前を Administration Services の外部で(たとえば MaxL または ESSCMD を使用して)変更した場合は、そのユーザーの Essbase 管理

サーバー・ユーザー・プロパティ(「Essbase サーバー」タブ)を手動で更新して、ユーザー名を同期化する必要があります。

▶ ユーザーの名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 **ユーザー・ウィンドウ**で、ユーザーを選択します。
- 4 右クリックし、「ユーザーの名前変更」を選択します。
- 5 「ユーザーの名前変更」ダイアログ・ボックスで、名前を入力します。
- 6 「OK」をクリックします。

Essbase ではユーザーの名前が変更され、「ユーザー」ウィンドウが更新されません。そのユーザーの Essbase 管理サーバーでのユーザー・プロファイルが更新されます。

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [676 ページの「ユーザーの名前変更」ダイアログ・ボックス](#)
- [298 ページの「グループの名前変更」](#)

関連コマンド

- alter user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameuser(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

グループの名前変更

注： この機能は、Essbase サーバーが **EPM System セキュリティ・モード**である場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、グループの名前を変更できます。グループの名前を変更しても、そのグループのユーザーには影響はありません。

▶ グループの名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「グループ」ノードをダブルクリックします。
- 3 **グループ・ウィンドウ**で、グループを選択します。
- 4 右クリックし、「グループの名前変更」を選択します。
- 5 「グループの名前変更」に名前を入力します。

6 「OK」をクリックします。

Essbase ではグループの名前が変更され、グループ・ウィンドウが更新されます。

関連情報

- [623 ページの「グループ・ウィンドウ」](#)
- [675 ページの「「グループの名前変更」ダイアログ・ボックス」](#)
- [297 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの名前変更」](#)

関連コマンド

alter group(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバー・ユーザーの削除

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、そのサーバーからユーザーを削除できます。

ユーザーを Essbase サーバーから削除しても、Essbase 管理サーバーからは削除されません。

▶ Essbase サーバーからユーザーを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 [ユーザー・ウィンドウ](#)で、1 人または複数のユーザーを選択します。
- 4 右クリックして、「ユーザーの削除」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase ではユーザーが削除され、ユーザー・ウィンドウが更新されます。削除したユーザーは、所属しているグループからも削除されます。

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [292 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集」](#)
- [300 ページの「グループの削除」](#)

関連コマンド

- drop user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- deleteuser(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

グループの削除

注： この機能は、Essbase サーバーが **EPM System セキュリティ・モード**である場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、Essbase サーバーからユーザーのグループを削除できます。

グループを削除しても、グループのメンバーは、削除されたグループのメンバーでなくなる以外に影響を受けません。

▶ グループを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「グループ」ノードをダブルクリックします。
- 3 **グループ・ウィンドウ**で、1 つまたは複数のグループを選択します。
- 4 右クリックして「グループの削除」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase ではグループが削除され、グループ・ウィンドウが更新されます。

関連情報

- [623 ページの「グループ・ウィンドウ」](#)
- [293 ページの「グループ・プロパティの編集」](#)
- [299 ページの「Essbase サーバー・ユーザーの削除」](#)

関連コマンド

- `drop group(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `deletegroup(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パスワード変更の強制

注： この機能は、Essbase サーバーが **EPM System セキュリティ・モード**になっている場合か、ユーザーが Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードで外部認証済の場合は適用されません。

次回 Essbase サーバーにログインするときにパスワードの変更が必要となるように、他のユーザーを設定できます。この機能を使用すれば、すべての新規ユーザーにデフォルトのパスワードを割り当てて、Essbase サーバーの使用開始時にユーザーに自分でデフォルトのパスワードを変更させるようにすることが可能です。

ログイン中のユーザーに対してはパスワードの変更を強制できません。選択した複数のユーザーにログイン中のユーザーが含まれている場合は、パスワード変更の強制はログイン中ではないユーザーにのみ適用されます。

パスワードの変更の強制は、このトピックの説明に従って実行できる他、「[ユーザー・プロパティ](#)」ダイアログ・ボックス(「[ユーザー情報](#)」タブ)を使用して実行できます。

▶ 次回のログイン時にパスワードの変更が必要となるように、1人または複数のユーザーを設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 [ユーザー・ウィンドウ](#)で、1人または複数のユーザーを選択します。
- 4 右クリックして、「パスワード変更の強制」を選択します。
- 5 確認のプロンプトで「OK」をクリックします。

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」](#)
- [306 ページの「パスワードの有効期限の管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

alter user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#)である場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っているユーザーは、ユーザーの Essbase サーバー・パスワードを変更できます。

ユーザーが Administration Services ユーザーでもある場合、ユーザーの Essbase 管理サーバー・[ユーザー・プロパティ](#)(「Essbase サーバー」タブ)が自動的に更新されます。そのユーザーの Essbase 管理サーバー・パスワードには影響はありません。

ユーザーの Essbase サーバー・パスワードを Administration Services の外部で(たとえば MaxL や ESSCMD を使用して)変更した場合は、そのユーザーの Essbase 管理サーバー・ユーザー・プロパティを手動で更新して、パスワードを同期する必要があります。

▶ ユーザーの Essbase サーバー・パスワードを変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 [ユーザー・ウィンドウ](#)で、ユーザーを選択します。
- 4 右クリックして「ユーザー・プロパティの編集」を選択します。
- 5 「ユーザー・プロパティ」・ウィンドウで、「ユーザー情報」タブを選択し、新パスワードを入力します。
- 6 「パスワードの確認」に新パスワードを再入力します。
- 7 「適用」をクリックします。

Essbase で、そのユーザーの Essbase サーバーのパスワードが変更され、該当する場合は、Essbase 管理サーバーのユーザー・プロファイルが更新されます。

- 8 **オプション:** [ユーザーのパスワードを他の Essbase サーバーに伝播](#)します。

関連情報

- [302 ページの「サーバー間でのパスワードの伝播」](#)
- [282 ページの「外部認証の管理」](#)
- [279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」](#)
- [292 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集」](#)
- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [ユーザー・プロパティ - 「ユーザー情報」タブ](#)

関連コマンド

- `alter user(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setpassword(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

サーバー間でのパスワードの伝播

注: この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#)である場合は適用されません。

Essbase サーバーのユーザーおよびグループを作成または削除する権限を持っている場合、あるユーザーのパスワードを変更し、新パスワードを他の Essbase サーバーに伝播できます。この操作を行うには、ソース・サーバーとターゲット・サーバーの両方に対する、ユーザーおよびグループの作成/削除の権限が必要となります。パスワード変更対象のユーザーがターゲット・サーバーに存在しており、ターゲット・サーバーが稼働している必要があります。

Administration Services を使用してあるユーザーの Essbase サーバー・パスワードを変更した場合、そのユーザーが Administration Services のユーザーでもあるときは、Essbase 管理サーバー・[ユーザー・プロパティ](#)(「Essbase サーバー」タブ)が自動的に

に更新されます。そのユーザーの Essbase 管理サーバー・パスワードには影響はありません。

ユーザーの Essbase サーバー・パスワードを Administration Services の外部で(たとえば MaxL や ESSCMD を使用して)変更した場合は、そのユーザーの Essbase 管理サーバー・ユーザー・プロパティを手動で更新して、パスワードを同期する必要があります。

▶ ユーザーの Essbase サーバー・パスワードを変更し、新パスワードを他の Essbase サーバーに伝播するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーノードの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 **ユーザー・ウィンドウ**で、ユーザーを選択します。
- 4 右クリックして、「パスワードの伝播」を選択します。
- 5 「パスワードを Essbase サーバーへ伝播」ダイアログ・ボックスで、ユーザーの新パスワードを入力して確認します。
- 6 「使用可能」リスト・ボックスでパスワードの伝播先のサーバーを選択し、「選択済」リスト・ボックスの方向を指す一重矢印ボタンをクリックします。
「使用可能」リスト・ボックスのすべてのサーバーを「選択済」リスト・ボックスに移動するには、二重矢印ボタンをクリックします。
- 7 パスワードの伝播先のサーバーがすべて「選択済」リスト・ボックスに表示されたら、「OK」をクリックします。

Essbase では選択したサーバーでのそのユーザーのパスワードが変更され、該当する場合は Essbase 管理サーバーのユーザー・プロファイルが更新されます。

関連情報

- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [670 ページの「「パスワードを Essbase サーバーへ伝播」ダイアログ・ボックス」](#)
- [293 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのコピー」](#)
- [301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」](#)

ユーザー名の無効化

注： この機能は、Essbase サーバーが **EPM System セキュリティ・モード** である場合は適用されません。Essbase サーバーが **EPM System セキュリティ・モード** で実行されている場合は、Shared Services Console を使用して、ユーザーを無効にする必要があります。

Essbase サーバーに対して管理者権限、またはユーザーおよびグループの作成/削除権限を持っているユーザーは、ユーザー名を無効にして、ユーザーがそのサーバーにログインできないように設定できます。Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウで指定した制限をユーザーが超えると、そのユーザー名は自動的に無効になります。また、ユーザー名は手動でも無効化できます。

無効になっているユーザー名を表示しアクティブにできるのは、管理者のみです。

ユーザー名を使用不可にする方法としては、次のような方法があります：

- ユーザー名を手動で使用不可にする
- 指定のログイン失敗回数をユーザーが超えたときに、自動的にユーザー名を使用不可にする
- 指定の非アクティブ日数をユーザーが超えたときに、自動的にユーザー名を無効にする

▶ ユーザー名を手動で無効にするには：

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「セキュリティ」ノードの下で、「ユーザー」ノードをダブルクリックします。
- 3 **ユーザー・ウィンドウ**で、1 つまたは複数のユーザー名を選択します。
- 4 右クリックして「ユーザーを使用不可にする」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase ではユーザー・ウィンドウ、ユーザー・プロパティ・ウィンドウ、および使用不可であるユーザー名ウィンドウが更新されます。

注：「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックスからユーザー名を無効にすることもできます。

▶ 指定のログイン連続失敗回数を超えたときに自動的にユーザー名を使用不可にするには：

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「セキュリティ」タブを選択します。
- 4 「ユーザー名とパスワードの管理」ノードを展開します。
- 5 「ユーザー名が使用不可になるまでに試行できるログイン」に値を入力します。
- 6 「適用」をクリックします。

▶ 指定の非アクティブ日数を超えたときに自動的にユーザー名を使用不可にするには：

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。

- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「セキュリティ」タブを選択します。
- 4 「ユーザー名とパスワードの管理」ノードを展開します。
- 5 「ユーザー名が使用不可になるまでの非アクティブ日数」に値を入力します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [593 ページの「使用不可であるユーザー名ウィンドウ」](#)
- [715 ページの「ユーザー・ウィンドウ」](#)
- [305 ページの「無効化されたユーザー名の表示またはアクティブ化」](#)
- [502 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「セキュリティ」タブ」](#)

関連コマンド

- alter user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

無効化されたユーザー名の表示またはアクティブ化

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードになっている場合は、Shared Services コンソールを使用してユーザーを使用不可または使用可能にする必要があります。

「Essbase サーバー・プロパティ」ウィンドウで指定した制限をユーザーが超過するか、管理者がユーザー・レベルでユーザー名を無効にした場合、ユーザー名が無効になります。ユーザー名を無効にする方法については、[303 ページの「ユーザー名の無効化」](#)を参照してください。

Essbase サーバーに対する管理者権限を持っているユーザーは、無効になっているユーザー名を表示してアクティブ化できます。

注： 使用不可になっているユーザー名は、[ユーザー・ウィンドウ](#)からアクティブにすることもできます。

▶ 無効になっているユーザー名を表示してアクティブ化するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを展開します。
- 2 「使用不可であるユーザー名」ノードを右クリックし、「使用不可であるユーザー名リストの編集」を選択します。

3 ユーザー名をアクティブ化するには:

1. 「使用不可であるユーザー名」リストで、ユーザー名を選択します。
2. 「使用可能」リスト・ボックスの方向を指す一重矢印ボタンをクリックします。
3. 「適用」をクリックします。

関連情報

- [593 ページの「使用不可であるユーザー名ウィンドウ」](#)
- [303 ページの「ユーザー名の無効化」](#)

関連コマンド

alter user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パスワードの有効期限の管理

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

管理者権限を持っている場合は、Essbase サーバーで同じパスワードを使用できる日数を制限できます。この制限は Essbase サーバー上のすべてのユーザーに適用され、「適用」をクリックすると即座に有効になります。

この設定は、Essbase 管理サーバー・ユーザーのパスワードには影響を与えません。

▶ ユーザーが Essbase サーバーで同じパスワードを使用できる日数を制限する手順は、次のとおりです。

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「セキュリティ」タブを選択します。
- 4 「ユーザー名とパスワードの管理」ノードを展開します。
- 5 「パスワード変更が要求されるまでの日数」の値を入力します。
- 6 「適用」をクリックします。

指定した日数が経過すると、ログオン時にパスワードを変更するよう求められます。

関連情報

- [502 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「セキュリティ」タブ」](#)
- [301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」](#)

関連コマンド

alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

フィルタの管理

ここには次のトピックがあります:

- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [308 ページの「フィルタの作成または編集」](#)
- [309 ページの「フィルタの割当て」](#)
- [310 ページの「フィルタのコピー」](#)
- [311 ページの「フィルタの名前変更」](#)
- [311 ページの「フィルタの削除」](#)

フィルタの管理

フィルタはデータベース内のデータ値(セル)へのセキュリティ・アクセスを制御します。フィルタは、Essbase で提供されるセキュリティの中でも粒度が最も細かいセキュリティです。

フィルタ・エディタを使用してフィルタを作成する際は、特定のデータベース・セルまたはデータベース・セルの範囲に対して一連の制限を指定します。次に、フィルタを Essbase サーバーのユーザーまたはグループに割り当てます。フィルタ情報は、Essbase セキュリティ・ファイル(essbase.sec)に保管されます。フィルタとデータベース・セルへのアクセス制御の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

持っているセキュリティ権限に応じて、フィルタを作成、割当て、編集、コピー、名前変更、または削除できる方法が決まります:

- 管理者権限がある場合は、どのユーザーやグループについてもフィルタを管理できます。フィルタによる作業の影響はありません。
- アプリケーションの作成/削除権限を持っているユーザーは、自分が作成したアプリケーションのフィルタを管理できます。
- アプリケーション・マネージャ権限またはデータベース・マネージャ権限を持っているユーザーは、アプリケーションまたはデータベース内でフィルタを管理できます。

▶ データベースのフィルタを管理するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックし、「編集」>「フィルタ」を選択します。

フィルタ・ウィンドウに、そのデータベースのすべてのフィルタが表示されます。フィルタ・ウィンドウから、次のタスクを実行できます:

- [308 ページの「フィルタの作成または編集」](#)

- 309 ページの「フィルタの割当て」
- 310 ページの「フィルタのコピー」
- 311 ページの「フィルタの名前変更」
- 311 ページの「フィルタの削除」

関連情報

- 618 ページの「フィルタ・ウィンドウ」
- 616 ページの「フィルタ・エディタ・ウィンドウ」
- 269 ページの「セキュリティと権限について」
- データベース・セルへのアクセスの制御(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

alter filter(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

フィルタの作成または編集

フィルタは、Essbase のセキュリティの中でも最も詳細なセキュリティです。フィルタは、データベース内の特定のセルまたはセル範囲へのアクセスを制御します。また、フィルタでメタデータ・セキュリティを定義することも可能です。メタデータ・セキュリティにより、アウトラインのメタデータ(次元およびメンバー)用にセキュリティ階層が追加されます。これは、データ・セル用の読取り専用セキュリティに似ています。

最初にフィルタを作成してから、ユーザーまたはグループにそのフィルタを割り当てます。1つのデータベースに対して複数のフィルタを作成できます。フィルタを編集した場合、フィルタ定義に加えた変更内容は、フィルタの各ユーザーが次にデータベースに接続したときに自動的に継承されます。

▶ データベースのフィルタを作成または編集するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックし、「編集」>「フィルタ」を選択します。
- 3 **フィルタ・ウィンドウ**で次のアクションを実行します:
 - フィルタを作成する場合には、「新規」をクリックします。
 - フィルタを編集するには、フィルタを選択して「編集」をクリックします。

フィルタ・エディタが表示されます。

- 4 フィルタを作成する場合は、「フィルタ名」テキスト・ボックスにフィルタの名前を入力します。
- 5 「アクセス」列で、メンバー指定に対応するアクセス・レベルを選択または編集します。

- 6 「メンバー指定」列で、指定したアクセス・レベルを適用する次元またはメンバーを指定するには、次のアクションを実行します:
 - 1つまたは複数の次元のメンバーを入力するか、またはメンバーの組合せを入力します。メンバーやメンバーの組合せはカンマで区切ります。メンバー名はすべて二重引用符("")で囲むことをお勧めします。
 - アウトライン・ツリーから、挿入する次元またはメンバーをダブルクリックします。

アウトライン・ツリーでメンバーを[検索](#)できます。メンバー名ではなく別名を挿入する場合は、「別名の使用」を選択し、「別名テーブル」ドロップダウン・リスト・ボックスから別名テーブルを選択します。
 - Essbase の計算関数を使用して、指定のアクセス・レベルを特定の次元およびメンバーに適用する場合は、関数ツリーから関数を選択し、関数の引数を入力します。関数とともに引数テンプレートを挿入するには、「引数の挿入」を選択します。
- 7 フィルタ・シート全体で構文が正しいことを確認するには、「確認」をクリックします。
- 8 「保存」をクリックして、フィルタ・ウィンドウに戻ります。

関連情報

- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [616 ページの「フィルタ・エディタ・ウィンドウ」](#)
- [618 ページの「フィルタ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `create filter as(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `alter filter(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

フィルタの割当て

注： この機能は、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) である場合は適用されません。

フィルタを[作成](#)したら、フィルタ定義に含まれる設定を必要とするユーザーまたはグループにフィルタを割り当てられます。フィルタ定義を変更した場合、変更内容はフィルタのユーザーが次にデータベースに接続したときに自動的に継承されます。フィルタは、管理者権限を持っているユーザーには影響を与えません。

1人のユーザーまたは1つのグループに割り当てることができるフィルタは、1つのデータベースにつき1つのみです。

フィルタの割当てに必要な権限の詳細は、[307 ページの「フィルタの管理」](#)を参照してください。

また、アプリケーションを移行する処理の一環として、サーバー間でフィルタの関連付けを移行できます。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。

- ▶ ユーザーまたはグループにフィルタを割り当てる手順は、次のとおりです:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックし、「編集」>「フィルタ」を選択します。
 - 3 「フィルタ」・ウィンドウで、フィルタを選択します。
 - 4 「割当て」をクリックして、「フィルタの割当て」ダイアログ・ボックスを表示します。
 - 5 「使用可能なユーザーおよびグループ」リスト・ボックスで、フィルタを割り当てるユーザーやグループを選択します。
 - 6 「割り当て済のユーザーおよびグループ」リスト・ボックスの方向を指す一重矢印ボタンをクリックします。
すべてのユーザーおよびグループを移動するには、二重矢印ボタンをクリックします。
 - 7 「OK」をクリックします。

関連情報

- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [515 ページの「「フィルタの割当て」ダイアログ・ボックス」](#)

フィルタのコピー

フィルタを作成したら、適切なアクセス権を持つ Essbase サーバー上の別のデータベースにフィルタをコピーできます。フィルタの管理に必要な権限の詳細は、[307 ページの「フィルタの管理」](#)を参照してください。

また、アプリケーションを移行する処理の一環として、サーバー間でフィルタおよびフィルタの関連付けを移行できます。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。

- ▶ フィルタを新しい場所にコピーするには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックし、「編集」>「フィルタ」を選択します。
 - 3 [フィルタ・ウィンドウ](#)で、1つ以上のフィルタを選択します。
 - 4 右クリックして、「フィルタのコピー」を選択します。
 - 5 「フィルタのコピー」ダイアログ・ボックスで、フィルタのコピー先の Essbase サーバー、アプリケーションおよびデータベースを選択します。
選択したアプリケーション内のすべてのデータベースにフィルタをコピーする場合は、「(すべての DB)」を選択します。
 - 6 「フィルタ名」テキスト・ボックスに、フィルタ・コピーの名前を入力します。
 - 7 「既存のフィルタの置換」チェック・ボックスを設定して、既存のフィルタを置換するかどうかを指定します。

8 「OK」をクリックして、フィルタ・ウィンドウに戻ります。

関連情報

- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [618 ページの「フィルタ・ウィンドウ」](#)
- [523 ページの「「フィルタのコピー」ダイアログ・ボックス」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- create filter as(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyfilter(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

フィルタの名前変更

フィルタの名前は変更できます。フィルタの管理に必要な権限の詳細は、[307 ページの「フィルタの管理」](#)を参照してください。

▶ フィルタの名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックし、「編集」>「フィルタ」を選択します。
- 3 [フィルタ・ウィンドウ](#)で、名前を変更するフィルタを選択します。
- 4 右クリックし、「フィルタの名前変更」を選択します。
- 5 「フィルタの名前変更」に名前を入力します。
- 6 「OK」をクリックして、フィルタ・ウィンドウに戻ります。

関連情報

- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [618 ページの「フィルタ・ウィンドウ」](#)
- [674 ページの「「フィルタの名前変更」ダイアログ・ボックス」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renamefilter(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

フィルタの削除

データベースからフィルタを削除できます。フィルタの管理に必要な権限の詳細は、[307 ページの「フィルタの管理」](#)を参照してください。

▶ フィルタを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックし、「編集」>「フィルタ」を選択します。
- 3 [フィルタ・ウィンドウ](#)で、1つ以上のフィルタを選択します。
- 4 右クリックして「フィルタの削除」を選択します。
- 5 「はい」をクリックします。

Essbase でフィルタが削除され、フィルタ・ウィンドウが更新されます。

関連情報

- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [618 ページの「フィルタ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

drop filter(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

Essbase セキュリティ・ファイルについて.....	313
Essbase セキュリティ・バックアップ・ファイルについて	314
セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新.....	315
セキュリティ・ファイルのコンパクト化.....	316
セキュリティ・ファイルのエクスポート.....	316

Essbase セキュリティ・ファイルについて

Essbase が EPM System セキュリティ・モードにある場合は、一部のセキュリティ情報が Shared Services および外部ユーザー・ディレクトリによって保管され、一部のセキュリティ情報が Essbase セキュリティ・ファイル(essbase.sec)に保管されます。

Shared Services または外部ユーザー・ディレクトリによって、次の情報が保管されます:

- ユーザー
- グループ
- パスワード
- アプリケーションに関するユーザーとグループの役割の情報

次の情報は、essbase.sec に保存されています:

- 計算スクリプトのアクセス権
- フィルタ・アクセス
- アプリケーション・アクセス・タイプ
- アプリケーション・プロパティおよびデータベース・プロパティ、代替変数および(ブロック・ストレージ・データベースの場合のみ)DISKVOLUME の設定など

Essbase がネイティブ・セキュリティ・モードの場合は、ユーザー、グループ、パスワード、権限、フィルタ、アプリケーション、データベースおよびそれらに対応するディレクトリに関するすべての情報が、essbase.sec に保管されます。

essbase.sec ファイルは、ARBORPATH/bin ディレクトリにあります。

essbase.sec のコンテンツは、暗号化されています。ただし、人間が読み取れるテキスト・ファイル・フォーマットでエクスポートして、レビューなどの目的に

使用できます。essbase.sec ファイルをエクスポートする際は、自社のセキュリティ手順に従ってデータの整合性を確保してください。詳細は、[316 ページの「セキュリティ・ファイルのエクスポート」](#)を参照してください。

関連情報

- [316 ページの「セキュリティ・ファイルのコンパクト化」](#)
- [316 ページの「セキュリティ・ファイルのエクスポート」](#)
- [314 ページの「Essbase セキュリティ・バックアップ・ファイルについて」](#)

Essbase セキュリティ・バックアップ・ファイルについて

Essbase サーバーが正常に起動されると、セキュリティ・ファイルのバックアップ・コピーが essbase_timestamp.bak として作成されます。Essbase で維持するセキュリティ・バックアップ・ファイル数(2 個から 10 個まで)、セキュリティ・バックアップ・ファイルを作成する間隔、および essbase.sec ファイルが無効な場合は起動時に最新の有効なセキュリティ・バックアップ・ファイルに切り替えるかどうかを管理できます。セキュリティ・バックアップ・ファイルを手動で更新することもできます。[315 ページの「セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新」](#)を参照してください。

注： Administration Services で Essbase を開始できなくなりました。Essbase の開始の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の OPMN を使用した Essbase の開始と停止に関する項を参照してください。

関連情報

- [315 ページの「セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新」](#)
- [313 ページの「Essbase セキュリティ・ファイルについて」](#)

関連コマンド

- alter system sync security backup(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter system reconcile (MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- SECFILEBACKUPINTERVAL(essbase.cfg の設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- NUMBEROFSECFILEBACKUPS(essbase.cfg の設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- ENABLESWITCHTOBACKUPFILE(essbase.cfg の設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新

▶ セキュリティ・バックアップ・ファイルを手動で更新するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新」<「Essbase サーバー名>」を選択します。
- 3 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。

Essbase は、最新のセキュリティ・バックアップ・ファイル (essbase_timestamp.bak) の作成以降に、セキュリティ・ファイル (essbase.sec) が変更されたかどうかを確認します。セキュリティ・ファイルが変更されている場合、新しいセキュリティ・バックアップ・ファイルが作成されます。

▶ Essbase でセキュリティ・ファイルとセキュリティ・バックアップ・ファイルを比較し、セキュリティ・バックアップ・ファイルを必要に応じて更新する頻度を指定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「セキュリティ」タブを選択します。
- 4 「自動ログオフ」ノードを展開します。
- 5 「チェック(分ごと)」オプションには、Essbase でセキュリティ・ファイルとセキュリティ・バックアップ・ファイルを比較する頻度を分単位で指定します。

注: この設定により、ユーザーが非アクティブであることを確認する頻度も制御されます。

- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [314 ページの「Essbase セキュリティ・バックアップ・ファイルについて」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [316 ページの「セキュリティ・ファイルのエクスポート」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase セキュリティ・ファイル(essbase.sec)に関する項

セキュリティ・ファイルのコンパクト化

すべてのセキュリティ情報は、ARBORPATH/bin ディレクトリのセキュリティ・ファイル(essbase.sec)に保管されます。Essbase セキュリティ・エンティティ(フィルタ、ユーザー、グループ、アプリケーション、データベース、代替変数、ディスク・ボリューム、パスワードなどの Essbase オブジェクト)を変更または削除すると、セキュリティ・ファイルが断片化されることがあります。セキュリティ・ファイルの断片化が進行すると、セキュリティ関連のパフォーマンスが低下することがあります。

Essbase では、Essbase サーバーが停止するたびに、セキュリティ・ファイルが自動的にコンパクト化(最適化)されます。セキュリティ・ファイルの最適化ステータスをチェックし、必要に応じて、Essbase サーバーを停止せずにコンパクト化を実行できます。

注： Essbase サーバーの稼働中にセキュリティ・ファイルをコンパクト化する場合は、操作が完了するまで(数分間)、エージェントのアクティビティが低速になります。

▶ セキュリティ・ファイルを手動でコンパクト化するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「セキュリティ・ファイルのコンパクト化」を選択します。

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase セキュリティ・ファイル(essbase.sec)に関する項

関連コマンド

- display system security file fragmentation_percent(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter system security file fragmentation_percent(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- compact(Essbase Agent)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- SECURITYFILECOMPACTIONPERCENT(essbase.cfg の設定)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

セキュリティ・ファイルのエクスポート

essbase.sec セキュリティ・ファイルと essbase_timestamp.bak セキュリティ・バックアップ・ファイルのコンテンツは暗号化されています。essbase.sec ファイルのコンテンツを確認するために、Essbase 管理者はそのコンテンツを判読可能なテキスト・ファイル・フォーマットでエクスポートできます。

注意 essbase.sec ファイルをエクスポートする際は、社内のセキュリティ手順に従って、データの整合性を確保してください。

▶ Essbase サーバー・インスタンスの essbase.sec ファイルのコンテンツをエクスポートするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーの下にある「セキュリティ」ノードを選択します。
- 2 右クリックして「セキュリティ・ファイルのエクスポート」を選択します。
- 3 エクスポートする情報を書き込むテキスト・ファイルの名前とパスを入力します。
パスには、Essbase サーバーがあるシステム上の場所を指定する必要があります。クライアント・システムにファイルを書き込むことはできません。パスが指定されていない場合、テキスト・ファイルは ARBORPATH\bin ディレクトリに作成されます。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [315 ページの「セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新」](#)
- export security_file(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase セキュリティ・ファイル(essbase.sec)に関する項

この章の内容

アクティブなユーザー・セッションの表示	319
ユーザー・セッションおよび要求の切断.....	320
データのロックの表示.....	321
データのロック解除.....	322
データ・ロックのタイムアウトの設定.....	323

アクティブなユーザー・セッションの表示

セッション・ウィンドウには、Essbase サーバー、アプリケーション、またはデータベースについてアクティブなユーザー・セッションのリストが表示されます。ユーザーは、同時に複数のセッションを開くことが可能です。たとえば、1人のユーザーが2つのデータベースでセッションを開くことが可能です。

管理者またはアプリケーション・マネージャの権限を持っているユーザーは、ユーザー・セッションを切断したり、セッション中に行われた特定の要求を終了させられます。

▶ Essbase サーバーのアクティブなユーザー・セッションを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「セッション」を選択します。

「セッション」・ウィンドウに、アクティブなセッションのリストが表示されます。管理者権限を持っている場合は、Essbase サーバーのすべてのユーザーのアクティブなセッションが表示されます。アプリケーション・マネージャ権限を持っている場合は、当該アプリケーションに接続しているすべてのユーザー(権限を持つユーザーを含む)のアクティブなセッションがウィンドウに表示されます。

3 セッションのリストを列でソートするには:

- 列を昇順にソートするには、列のヘッダーをクリックします。
たとえば、「User」列をアルファベット順にソートするには、列のヘッダーをクリックします。
- 列を降順にソートするには、「[Shift]」を押しながら列のヘッダーをクリックします。

たとえば、最も長いログイン時間がリストの先頭にくるように「ログイン時間」列をソートするには、「[Shift]」を押しながら列のヘッダーをクリックします。

4 「セッション」・ウィンドウでセッションを管理するには、[ユーザー・セッション](#) および[要求の切断](#)を参照してください。

関連情報

- [320 ページの「ユーザー・セッションおよび要求の切断」](#)
- [686 ページの「セッション・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `display session(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `alter system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ユーザー・セッションおよび要求の切断

セッション・ウィンドウには、Essbase サーバー、アプリケーション、またはデータベースについてアクティブなユーザー・セッションのリストが表示されます。セッションを表示または切断したり、セッション中に行われた要求を終了したりするには、Essbase サーバーの管理者権限、またはアプリケーションに対するアプリケーション・マネージャ権限を持っている必要があります。表示したり終了したりできるのは、ユーザー自身が持つ権限と同じ、またはそれより低い権限を持つユーザーのセッションまたは要求のみです。

セッションとは、サーバー、アプリケーション、またはデータベースのレベルで Essbase サーバーに接続されたユーザーがログインしてからログアウトするまでの期間のことです。ユーザーは、いつでも複数のセッションを開くことが可能です。たとえば、ユーザーは異なるデータベースにログインできます。適切な権限があれば、選択した条件に基づいてセッションをログオフできます。たとえば、任意のユーザーをすべてのデータベースまたは特定のデータベースからログオフすることが可能です。

要求とは、ユーザーまたは別のプロセスによって Essbase サーバーに送信されるクエリーのことです。たとえば、データベースのデフォルト計算やデータベース・アウトラインの再構築はいずれも要求です。1つのセッションで一度に処理できる要求は1つのみです。要求(計算など)の途中でユーザーが Essbase サーバーから切断されると、破棄された要求が原因となって、以降の要求にアプリケーションが応答しなくなることがあります。ユーザーを切断せずに、破棄された要求を終了できます。ユーザーはセッションを続行して、新しい要求を発行できます。要求を終了するとき、Essbase では安全に終了できる状態になるまで要求が処理されます。

▶ セッションの切断や要求の終了を行う手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「セッション」を選択します。

「セッション」・ウィンドウに、アクティブなセッションのリストが表示されます。管理者権限を持っている場合は、Essbase サーバーのすべてのユーザーのアクティブなセッションが表示されます。アプリケーション・マネージャ権限を持っている場合は、当該アプリケーションに接続しているすべてのユーザー(権限を持つユーザーを含む)のアクティブなセッションがウィンドウに表示されます。

- 3 ユーザーを切断したり、要求を終了させるために、ドロップダウン・リストを使用してグリッドから1つまたは複数のユーザー・セッションを選択します。

オプションを選択するとき可能な組合せのテーブルを表示するには、[セッションおよび要求の終了オプション](#)を参照してください。「ログオフ」オプションはユーザー・セッションを終了します。「強制終了」オプションはユーザーをセッション全体からログアウトさせるのではなく、セッション内の特定の要求を終了します。

- 4 「適用」をクリックして、選択した操作を実行します。
- 5 ビューを更新して現在のセッションおよび要求アクティビティを表示する場合は、「リフレッシュ」をクリックします。

注： 自分の現在の要求を終了するには、「取消し」をクリックします。

関連情報

- [319 ページの「アクティブなユーザー・セッションの表示」](#)
- [686 ページの「セッション・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `display session(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `alter system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `logoutuser(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `logoutuser (Essbase Agent)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データのロックの表示

管理者権限を持っているユーザーは、Essbase サーバーでデータのロックを保持しているユーザーのリストを表示することが可能です。たとえば、現在データのロックを保持している Spreadsheet Add-in ユーザーを調べられます。データのロックは、アプリケーション・プロパティ・ウィンドウに設定されているタイムアウト期間を過ぎると期限切れになります。指定した時間が経過する前に、ロックを解除する必要が生じることもあります。[322 ページの「データのロック解除」](#)を参照してください。

データに対するユーザーのロックは、データベース・オブジェクト(計算スクリプトやルール・ファイルなど)に対するロックとは異なります。オブジェクトのロックの詳細は、[111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)を参照してください。

注： データのロックは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データに対する現在のロックのリストを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、データのロックを表示する Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「ロック」を選択します。
ロック・ウィンドウに、現在サーバーに対して少なくとも1つのロックされたデータ・ブロックを持っているユーザーのリストが表示されます。
- 3 ロックのリストをリフレッシュするには、「リフレッシュ」をクリックします。
- 4 ロックを削除する場合は、[データのロック解除](#)を参照してください。

関連情報

- [322 ページの「データのロック解除」](#)
- [630 ページの「ロック・ウィンドウ」](#)
- [323 ページの「データ・ロックのタイムアウトの設定」](#)

関連コマンド

- listlocks(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- removelocks(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データのロック解除

ユーザーがデータのロックを保持できる最大時間は、アプリケーション・プロパティ・ウィンドウで設定します。場合によっては、指定した時間が経過する前に、ロックを解除する必要が生じることがあります。たとえば、データに対するアクティブなロックがあるデータベースで計算を実行してロックが検出された場合、計算は待機する必要があります。ロックを解除すると、計算は再開されます。

データロックは Essbase サーバーのレベルで管理できます。データに対するユーザーのロックを表示して解除するには、管理者権限が必要です。

ユーザーのロックを解除すると、そのユーザーは現在のセッションから切断されます。

データに対するユーザーのロックは、データベース・オブジェクト(計算スクリプトやルール・ファイルなど)に対するロックとは異なります。オブジェクトのロックの詳細は、[111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)を参照してください。

注： データのロックは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データに対する1つまたは複数のユーザー・ロックを解除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、データのロックを管理する Essbase サーバーを選択します。

- 2 右クリックして「編集」>「ロック」を選択します。
- 3 「ロック」・ウィンドウで行を選択します。
連続する複数の行を選択するには、最初の行を選択し、「[Shift]」を押しながら最後の行を選択します。
連続していない複数の行を選択するには、最初の行を選択し、[Ctrl]を押しながら他の行を選択します。
- 4 「ロック解除」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 データ・ロックのリストをリフレッシュするには、「リフレッシュ」をクリックします。

関連情報

- [321 ページの「データのロックの表示」](#)
- [630 ページの「ロック・ウィンドウ」](#)
- [323 ページの「データ・ロックのタイムアウトの設定」](#)

関連コマンド

- listlocks(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- removelocks(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データ・ロックのタイムアウトの設定

アプリケーション・マネージャ権限を持つブロック・ストレージ・アプリケーションについては、ユーザーがデータをロックできる時間を指定できます。

データ・ロックのタイムアウト設定を変更した場合は、アプリケーションを再開したときに変更内容が有効になります。

▶ データ・ロックのタイムアウトを設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ブロック・ストレージ・アプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして、「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「データ・ブロックのロックのタイムアウト」で、ユーザーがデータ・ブロックをロックできる最大時間を分単位で入力します。
デフォルトは 60 分です。
- 5 「適用」をクリックします。

関連情報

- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ」](#)
- [321 ページの「データのロックの表示」](#)

- 322 ページの「データのロック解除」
- 630 ページの「ロック・ウィンドウ」

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getappinfo(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getappstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

Essbase サーバーの監視	325
アプリケーションの監視	332
データベースの監視	334

Essbase サーバーの監視

ここには次のトピックがあります:

- 325 ページの「Essbase サーバーの監視について」
- 326 ページの「バックグラウンド・プロセスのステータスの確認」
- 327 ページの「ライセンス情報とインストール情報の表示」
- 328 ページの「使用可能なポートの確認」
- 328 ページの「パス情報の表示」
- 329 ページの「サーバー・コンピュータ情報の表示」
- 329 ページの「ディスク・ドライブ情報の表示」
- 330 ページの「構成ファイル(essbase.cfg)設定の表示」
- 330 ページの「使用可能なメモリーの確認」
- 331 ページの「ランタイム統計の表示」

Essbase サーバーの監視について

Essbase サーバーのプロパティは、1つのウィンドウで表示および編集できます。また、複数のサーバーのプロパティ・ウィンドウを同時に開くことが可能です。このトピックには、監視可能な Essbase サーバー・プロパティのリストがあります。

▶ Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウを開く手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。

監視できる Essbase サーバー・プロパティは、次のとおりです:

- 327 ページの「ライセンス情報とインストール情報の表示」
- 331 ページの「ランタイム統計の表示」
- 328 ページの「使用可能なポートの確認」
- 328 ページの「パス情報の表示」
- 330 ページの「構成ファイル(essbase.cfg)設定の表示」
- 329 ページの「サーバー・コンピュータ情報の表示」
- 330 ページの「使用可能なメモリの確認」
- 329 ページの「ディスク・ドライブ情報の表示」

関連情報

- 498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」
- 89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

バックグラウンド・プロセスのステータスの確認

バックグラウンドで実行されているプロセスのステータスを確認できます。Essbase 管理サーバーに対する管理者権限を持っている場合、このウィンドウには、自分または他の管理者が開始したバックグラウンド・プロセスのステータスが表示されます。管理者権限を持っていない場合は、自分が開始したバックグラウンド・プロセスのみがウィンドウに表示されます。

このウィンドウ内のバックグラウンド・プロセスは、手動で削除するまですべて表示されたままになります。

▶ バックグラウンド・プロセスのステータスを確認するには:

1 「ツール」>「バックグラウンド・プロセスの表示」を選択します。

バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウに、現在バックグラウンドで実行されているプロセスや、完了したプロセスが表示されます。表示される内容は、そのユーザーが持っている権限によって異なります。このリスト内のバックグラウンド・プロセスは、手動で削除するまですべて表示されたままになります。

2 必要に応じて、正常に実行された操作の出力を参照するには(レポート・スクリプトなど)、その操作を含む行を選択して「表示」ボタンをクリックします。

エラーを出さずに実行できなかった処理は、「ステータス」列に「失敗」と表示されます。失敗した処理のエラーを参照するには、目的の行を選択して「表示」ボタンをクリックします。Essbase 管理サーバーの管理者権限を持っていない場合は、自分が実行した処理のエラーのみを表示できます

注： データ・ロードおよび次元構築については、複数のデータ・ロードまたは次元構築を実行した場合は、エラー・ファイルのデフォルトの場所またはエラー・ファイル名を変更しないかぎり、エラー・ファイルはそれぞれのプロセスで上書きされます。

3 特定の列でテーブルをソートするには、列のヘッダーをクリックします。

デフォルトでは、Essbase 管理サーバーのユーザー名と開始時刻で列がソートされます。「リフレッシュ」ボタンをクリックすると、最初のソート順に戻ります。

4 リストから行を削除するには、その行を選択して「削除」をクリックします。

5 ウィンドウをリフレッシュするには、「リフレッシュ」をクリックします。

関連情報

[516 ページの「バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウ」](#)

ライセンス情報とインストール情報の表示

Essbase サーバー・コンピュータの、Essbase のライセンス情報とインストール情報を表示できます。この情報は、Essbase が正しくインストールされているかどうかを確認したり、使用可能な Essbase のオプションを確認したりする場合に使用します。また、Essbase のシステム・ファイルのリストを表示したり、Essbase サーバー・コンピュータにインストールされているネットワーク・プロトコルを確認したりすることも可能です。

また、ライセンス契約ごとに許可されている名前付きユーザー接続、および同時ユーザー接続に関する情報については、「統計」ペインで[ランタイムの統計を表示](#)できます。

▶ Essbase のライセンスとインストールに関する情報を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」で、「**ライセンス**」を選択します。

関連情報

- [500 ページの「Essbase サーバー・プロパティ」 - 「ライセンス」タブ](#)

関連コマンド

- display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- version(MaxL Shell コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- version(Essbase サーバー・エージェント)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

使用可能なポートの確認

Essbase サーバーのポートについて、次の情報を表示できます:

- Essbase サーバーでライセンスされている合計ポート数
- Essbase サーバーで使用中のポート数
- Essbase サーバーで使用可能なポートの残り数

また、`essbase.cfg` 構成ファイルの `PORTUSAGELOGINTERVAL` 設定を使用すると、Essbase サーバーがポートの使用状況に関する統計を確認して Essbase サーバー・ログに書き込むように設定できます。

▶ Essbase サーバーで使用中のポート数、および使用可能なポートの残り数を確認するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「統計」タブを選択します。
ポート情報が、「使用中のポート」領域と「使用可能なポート」領域に表示されます。
- 4 Essbase サーバーのポートの合計数を表示するには、「ライセンス」タブをクリックします。

関連情報

- [504 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「統計」タブ](#)
- マルチスレッド処理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- Essbase サーバー、アプリケーションおよびデータベースの実行(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [Essbase 管理サーバーの通信ポートの指定](#)

関連コマンド

- `ports`(Essbase サーバー・エージェント)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パス情報の表示

Essbase の環境変数に関する情報を参照して、パス情報が正しいかどうかを確認できます。

▶ Essbase のパス情報を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。

- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」で、「環境」を選択します。
- 4 ツリーの環境変数ノードを展開します。

関連情報

[499 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「環境」タブ」](#)

サーバー・コンピュータ情報の表示

Essbase サーバー・コンピュータのオペレーティング・システムに関する情報や、リソースの使用状況に関する情報を表示できます。たとえば、サーバー・マシンに搭載されている CPU のタイプと数、メモリー情報、ディスク・スワップ情報を表示できます。コンピュータやオペレーティング・システムによる制限が、Essbase のパフォーマンスに影響していないかどうかは、これらの情報に基づいて判断してください。

▶ Essbase サーバー・コンピュータに関する情報を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」で、「OS」を選択します。
- 4 各ノードを展開し、サーバー・コンピュータ情報をすべて表示します。

関連情報

[501 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「OS」タブ」](#)

Essbase クラスタ情報の表示

Essbase サーバー・コンピュータの Essbase サーバー・クラスタに関する情報を表示できます。

▶ Essbase サーバー・クラスタに関する情報を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューで、「Essbase サーバー」を右クリックします。
- 2 「クラスタ情報の表示」を選択します。

ディスク・ドライブ情報の表示

Essbase サーバー・コンピュータのディスク・ドライブのタイプ、ディスク・ドライブ使用率、ファイル・システムのタイプに関する情報を表示できます。ディスク・スペースが不足している、あるいはファイル・システムの互換性がないために Essbase のパフォーマンスに影響されていないかどうかは、これらの情報に基づいて判断してください。

- ▶ Essbase サーバー・コンピュータのディスク・ドライブに関する情報を表示するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「Essbase サーバー・プロパティ」で、「ディスク・ドライブ」を選択します。

関連情報

[498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ」 - 「ディスク・ドライブ」タブ](#)

構成ファイル(essbase.cfg)設定の表示

essbase.cfg 構成ファイルは、Essbase サーバー全体の構成をカスタマイズできるテキスト・ファイルです。essbase.cfg ファイルで指定した設定は Essbase のすべてのデフォルトよりも優先され、Essbase サーバー上のすべてのアプリケーション内のすべてのデータベースに適用されます。

管理者が essbase.cfg ファイルを作成済の場合は、そのファイル内に定義されている現在の設定値を表示できます。

- ▶ Essbase サーバーの essbase.cfg ファイルの現在の設定を表示するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的の Essbase サーバーを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「環境」タブを選択します。
 - 4 「Essbase 構成設定」ノードを展開して、パラメータとその現在の値を表示します。

このウィンドウでは、essbase.cfg の設定は編集できません。設定を追加、変更、または削除するには、実際のテキスト・ファイルを変更する必要があります。詳細は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

関連情報

- [499 ページの「Essbase サーバー・プロパティ」 - 「環境」タブ](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の essbase.cfg 構成設定

使用可能なメモリの確認

Essbase サーバー・コンピュータのオペレーティング・システムに関する情報や、リソースの使用状況に関する情報を表示できます。コンピュータやオペレーティング・システムによる制限が、Essbase のパフォーマンスに影響していないかどうかは、これらの情報に基づいて判断してください。

▶ Essbase サーバー・コンピュータに関する情報を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Essbase サーバー・プロパティ」・ウィンドウで、「OS」タブを選択します。
- 4 「メモリー」ノードを展開して、メモリーの統計を表示します。

関連情報

[501 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「OS」タブ」](#)

ランタイム統計の表示

Essbase サーバー、アプリケーション、およびデータベースのランタイム統計を表示できます。統計には、開始/停止のステータス、接続情報、ユーザー接続統計、および実行経過時間が含まれます。

注： 集約ストレージのランタイム統計の詳細は、[83 ページの「集約ストレージ統計の表示」](#)を参照してください。

アプリケーションおよびデータベースのパフォーマンス統計を表示するには、getperfstats(ESSCMD)を使用します。

▶ Essbase サーバー、アプリケーションまたはデータベースのランタイム統計を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバー、アプリケーションまたはデータベースを選択します。
- 2 次のいずれかのオプションを選択します:
 - データベースの場合、「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - アプリケーションの場合、「プロパティの編集」を選択します。
- 3 プロパティのウィンドウで、「統計」を選択します。
- 4 ツリーの「統計」ノードを展開します。
- 5 「ヘルプ」をクリックして、それぞれの統計に関する情報を表示します。

関連情報

- [504 ページの「Essbase サーバー・プロパティ - 「統計」タブ」](#)
- [507 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「統計」タブ」](#)
- [572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」タブ」](#)

関連コマンド

- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- `getappinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getperfstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションの監視

ここには次のトピックがあります:

- [332 ページの「アプリケーションの監視について」](#)
- [332 ページの「アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示」](#)
- [333 ページの「エンタープライズ・ビューのアプリケーションおよびデータベースのアイコン」](#)

アプリケーションの監視について

Essbase アプリケーションのプロパティは、1つのウィンドウで表示および編集できます。さらに、複数のアプリケーションについて、それぞれのプロパティ・ウィンドウを同時に開くことが可能です。

▶ アプリケーション・プロパティ・ウィンドウを開く手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。

関連情報

- [504 ページの「アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ」](#)
- [98 ページの「アプリケーション・プロパティの設定」](#)

関連コマンド

- `alter application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示

使用権限のあるアプリケーションおよびデータベースの、開始/停止ステータスを表示できます。

現在のセッション中に他の管理者が実行した変更内容を反映するには、「アプリケーション」ノードを手動でリフレッシュする必要があります。

▶ Essbase サーバーのアプリケーションとデータベースのステータスを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 そのサーバーの下にある「アプリケーション」ノードを右クリックし、「データベースの表示」を選択します。

コンソールでアプリケーション/データベースのステータス・ウィンドウが開いて、その Essbase サーバーでアクセスできるすべてのアプリケーションおよびデータベースの開始/停止ステータスが表示されます。

注: エンタープライズ・ビューでアプリケーション・ノードおよびデータベース・ノードの横にある **アイコン** もステータスを示します。

関連情報






- [509 ページの「アプリケーション/データベースのステータス・ウィンドウ」](#)
- [96 ページの「アプリケーションの開始」](#)
- [104 ページの「データベースの開始」](#)
- [97 ページの「アプリケーションの停止」](#)
- [106 ページの「データベースの停止」](#)


関連コマンド

- `display database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

エンタープライズ・ビューのアプリケーションおよびデータベースのアイコン

エンタープライズ・ビューでは、次のアイコンがアプリケーションおよびデータベースのタイプとステータスを示します:

アイコン	説明
	起動している集約ストレージ・アプリケーションまたはデータベース
	停止している集約ストレージ・アプリケーションまたはデータベース
	起動しているブロック・ストレージ・アプリケーションまたはデータベース
	停止しているブロック・ストレージ・アプリケーションまたはデータベース
	起動している Unicode ブロック・ストレージ・アプリケーションまたはデータベース

アイコン	説明
	停止している Unicode ブロック・ストレージ・アプリケーションまたはデータベース

データベースの監視

ここには次のトピックがあります:

- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [335 ページの「すべてのデータベースのプロパティの表示」](#)
- [336 ページの「データ・ブロック統計の確認」](#)
- [336 ページの「読取り/書込み統計の確認」](#)
- [337 ページの「次元情報の表示」](#)
- [337 ページの「データベースの変更内容の表示」](#)
- [338 ページの「断片化統計の表示」](#)
- [338 ページの「データベースの計算状態の確認」](#)

データベースの監視について

Essbase データベースのプロパティは、同じウィンドウで表示および編集ができます。複数のデータベースについて、それぞれのプロパティ・ウィンドウを同時に開くことが可能です。このトピックには、監視可能なデータベース・プロパティのリストがあります。

すべてのデータベースのプロパティを同じウィンドウで表示する場合は、[335 ページの「すべてのデータベースのプロパティの表示」](#)を参照してください。

▶ データベース・プロパティ・ウィンドウを開く手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。

監視できるデータベース・プロパティは、次のとおりです:

- [337 ページの「次元情報の表示」](#)
- [331 ページの「ランタイム統計の表示」](#)
- [336 ページの「データ・ブロック統計の確認」](#) (ブロック・ストレージ・データベースのみ)
- [336 ページの「読取り/書込み統計の確認」](#)
- [348 ページの「圧縮率の確認」](#) (ブロック・ストレージ・データベースのみ)
- [338 ページの「断片化統計の表示」](#) (ブロック・ストレージ・データベースのみ)

- 346 ページの「インデックス・ファイルとデータ・ファイルのサイズ確認」
(ブロック・ストレージ・データベースのみ)
- 337 ページの「データベースの変更内容の表示」

関連情報

- 565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」
- 335 ページの「すべてのデータベースのプロパティの表示」
- 106 ページの「データベース・プロパティの設定」

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

すべてのデータベースのプロパティの表示

Essbase サーバーのすべてのデータベースのプロパティを、1つのウィンドウに表示できます。表示されるのは、自分が必要な権限を持っているデータベースのみです。このウィンドウではプロパティを編集できません。

このウィンドウには、次のようなプロパティが表示されます:

- データベース・タイプ(集約、ブロックなど)
- データベースの開始/停止ステータス
- キャッシュおよびバッファ・サイズ
- 使用された圧縮方式
- 接続しているユーザーの数
- ロック情報
- 次元数

▶ Essbase サーバーのすべてのデータベースのプロパティを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 そのサーバーの下にある「アプリケーション」ノードを右クリックし、「データベースの表示」を選択します。

データベース情報ウィンドウに、Essbase サーバーでアクセス権を持っているすべてのデータベースのプロパティが表示されます。

関連情報

- [564 ページの「データベース情報ウィンドウ」](#)
- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)

関連コマンド

- `display database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getperfstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データ・ブロック統計の確認

データ・ブロックに関する統計(ブロック・サイズ、ブロックの密度、圧縮率など)を表示することで、データベースの効率を確認できます。

注： これらの統計は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースのブロック統計を確認するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「統計」を選択します。
- 4 「ブロック」ノードを展開して、ブロックの統計を表示します。

関連情報

- [572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」タブ」](#)
- アーキテクチャの基本要素(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- Essbase のパフォーマンスの向上(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `getdbstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getperfstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

読取り/書込み統計の確認

データベースに対する読取り/書込み操作に関する情報を表示できます。

▶ データベースの読取り/書込み統計を確認するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」で、「統計」を選択します。
- 4 「ランタイム」ノードを展開して、読取り/書込み統計を表示します。

関連情報

- [572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」タブ](#)
- アーキテクチャの基本要素(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- Essbase のパフォーマンスの向上(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `display database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getperfstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

次元情報の表示

ストレージの構成、メンバーの数、保管済メンバーの数など、データベース・アウトラインの次元に関する情報を表示できます。

▶ データベースの次元に関する情報を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」で「次元」を選択します。

関連情報

[569 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「次元」タブ](#)

関連コマンド

`display system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの変更内容の表示

データベースで前回正常に完了した操作(データ・ロード、計算、アウトラインの更新など)のリストを表示できます。

- ▶ データベースで前回正常に完了した操作(アウトラインの更新、データ・ロード、計算など)のリストを表示するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「データベース・プロパティ」で、「変更」を選択します。

関連情報

572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「変更」 タブ」

関連コマンド

getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

断片化統計の表示

断片化は、データベースの平均クラスタ率統計を使用して測定できます。この統計は、データ(.pag)ファイルの断片化レベルを示します。最大値 1 は、断片化がないことを表します。

注： この統計は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

- ▶ データベースの断片化統計を表示するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「データベース・プロパティ」で、「統計」を選択します。
 - 4 「ブロック」ノードを展開し、平均クラスタ率を表示します。

関連情報

- 572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」 タブ」
- 断片化の削除(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの計算状態の確認

データベースの計算状態を確認して、計算が実行中かどうかを確認したり、前回の計算以降にデータ値が変更されたかどうかを確認したりできます。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースの現在の計算状態を確認するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして、「計算の実行」を選択します。
- 3 「データベースの状態」テキスト・ボックスに表示された情報を確認します。
- 4 「取消し」をクリックします。

関連情報

- [「データベース計算」ダイアログ・ボックス](#)
- [352 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの計算」](#)

この章の内容

キャッシュ・メモリのロックの使用可能化	341
キャッシュ・サイズの設定.....	342
キャッシュのヒット率の確認	343
取得バッファ・サイズの設定	343

キャッシュ・メモリのロックの使用可能化

データベース・マネージャ権限を持っているデータベースについて、キャッシュ・メモリのロックを使用可能にできます。デフォルトでは、キャッシュメモリのロックは無効になっています。

注： この設定は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

メモリーをロックすると、システムのメモリー・マネージャが Essbase のキャッシュ・メモリーをスワップしたり予約したりする必要がなくなるので、データベースのパフォーマンスが向上することがあります。

メモリーのロックを変更した場合、変更内容はデータベースをいったん停止して再起動したときに有効になります。

▶ データベースのキャッシュ・メモリのロックを有効にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「キャッシュ」タブを選択します。
- 4 「キャッシュ・メモリのロック」を選択します。
- 5 「適用」をクリックします。

関連情報

- [566 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「キャッシュ」タブ](#)
- Essbase キャッシュの最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

キャッシュ・サイズの設定

データベース・マネージャ権限を持っているユーザーは、ブロック・ストレージ・データベースに対する Essbase のメモリー・キャッシュ(インデックス・キャッシュ、データ・ファイル・キャッシュ、データ・キャッシュ)のサイズを設定できます。

キャッシュ・サイズの設定は、データベースやサーバーの全般的なパフォーマンスに大きく影響します。キャッシュ・サイズとして適切な値は、データベースの大きさ、ブロック・サイズ、インデックス・サイズ、Essbase サーバーで使用可能なメモリー量などの多くの要因によって変わります。

キャッシュのサイズ設定は、データベースをいったん停止して再起動したときに有効になります。

- ▶ データベース・インデックス・キャッシュ、データファイル・キャッシュ、およびデータ・キャッシュのサイズを指定する手順は、次のとおりです：
 - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「キャッシュ」タブを選択します。
 - 4 「キャッシュ・サイズ」ノードを展開します。
 - 5 キャッシュごとに、KB 単位でキャッシュ・サイズの値を入力します。
 - 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [566 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「キャッシュ」タブ](#)
- Essbase キャッシュの最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [346 ページの「インデックス・ファイルとデータ・ファイルのサイズ確認](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

キャッシュのヒット率の確認

各キャッシュには、要求された情報がキャッシュ内で使用可能になる回数の割合を示すヒット率があります。Essbase キャッシュのヒット率を確認すると、キャッシュ・サイズを増やす必要があるかどうかを判断できます。

▶ データベース・キャッシュのヒット率を確認するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」で、「統計」を選択します。
- 4 「ランタイム」ノードを展開します。
- 5 「ヘルプ」をクリックして、それぞれの統計に関する情報を表示します。

関連情報

- [572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」タブ](#)
- [342 ページの「キャッシュ・サイズの設定」](#)
- [341 ページの「キャッシュ・メモリーのロックの使用可能化」](#)
- Essbase キャッシュの最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `getdbstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getperfstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

取得バッファ・サイズの設定

データベース・マネージャ権限を持っているデータベースについては、データ取得バッファのサイズを設定できます。

Essbase では、スプレッドシート・アドインやレポート・スクリプトからのデータの取得に取得バッファを使用して、処理を最適化しています。取得ソート・バッファは、取得時にデータをソートした状態に保つために使用されます。取得ソート・バッファがいっぱいになると、Essbase からエラーメッセージが戻されます。

バッファの最適なサイズを決めるには、異なる設定でレポート・スクリプトをテストしてください。

▶ データベースの取得バッファのサイズを設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「データの取得バッファ」ノードを展開します。

- 5 「バッファ・サイズ」と「ソート・バッファ・サイズ」に、KB 単位で値を入力します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [570 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ](#)
- レポートおよび他の取得機能の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

ディスク・ボリュームの設定	345
インデックス・ファイルとデータ・ファイルのサイズ確認	346
データ圧縮方式の選択	347
圧縮率の確認	348
データの整合性オプションの設定	348
入出力アクセス・モードの選択	349

ディスク・ボリュームの設定

Essbase では、データおよびインデックス・ファイルのストレージは Essbase サーバーに割り当てられます。データベース・マネージャ権限を持っている場合は、ストレージの割当て方法を制御できます。

注： ディスク・ボリュームは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

ディスク・ボリュームには、次のディレクトリ構造によってファイルが書き込まれます：

```
.../app/app_name/db_name
```

新規ファイルについては、ディスク・ボリュームの設定はデータベースが再起動された後で有効になります。既存のファイルおよびボリュームには影響がありません。

注： SAN デバイスをディスク・ボリュームとして指定できます。

データベース用のディスク・ボリュームを指定していない場合、Essbase では ARBORPATH ディレクトリがあるボリュームにのみファイルが保管されます。ARBORPATH 変数が設定されていない場合、Essbase では Essbase サーバーが起動されたボリュームにのみファイルが保管されます。

▶ データベースのディスク・ボリュームを設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「ストレージ」タブを選択します。
- 4 ディスク・ボリューム領域の列で、適切な値を選択します。
- 5 「設定」をクリックします。
- 6 「適用」をクリックします。
- 7 **オプション:** Essbase でボリュームにファイルが保管されるのを止めるには、目的の行を選択して「削除」をクリックします。

Essbase では、指定したボリュームに新しいファイルが書き込まれなくなりますが、そのボリュームに保管済のファイルは引き続きアクセスおよび使用されます。

関連情報

- [576 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「ストレージ」タブ](#)
- ストレージの割当て(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

インデックス・ファイルとデータ・ファイルのサイズ確認

インデックス・ファイル(.ind)とデータ・ファイル(.pag)の名前、数、サイズ、および合計を表示できます。また、ファイルが Essbase で開かれているかどうかも確認できます。これらの情報は、Essbase のキャッシュ・サイズを変更する際に必要になる場合があります。また、これらのファイルの保管場所や、ファイルが複数のボリュームにスパンしているかどうかも確認できます。

注: これらのタイプのファイルは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースのインデックス・ファイル(.ind)とデータ・ファイル(.pag)のサイズを確認するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして、「編集」>「プロパティ」を選択します。

- 3 「データベース・プロパティ」で、「ストレージ」を選択します。
- 4 「データ/インデックス・ファイル・タイプ」列に表示されたファイルについて、ファイルのサイズを確認します。

関連情報

- [576 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「ストレージ」タブ](#)
- [342 ページの「キャッシュ・サイズの設定」](#)
- ストレージの割当てとデータの圧縮(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- listfiles(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データ圧縮方式の選択

データベース・マネージャ権限を持っている場合は、データベースのデータ圧縮方式(ビットマップ圧縮、ランレングス符号化または ZLIB 圧縮)を選択できます。データ圧縮が有効になっているとき、Essbase ではデータ・ブロックは圧縮されてディスクに書き込まれます。データの取得時に、圧縮されたブロックがデータ・キャッシュにスワップされます;ブロックは、空のセルも含めて完全に展開されません。

一般に、データ圧縮を行うと、ストレージの使用が最適化されます。圧縮率の統計を確認すると、圧縮の効率を評価できます。[348 ページの「圧縮率の確認」](#)を参照してください。

注： データ圧縮は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

データ圧縮の設定を変更すると、その後にディスクに書き込まれるブロックに変更内容が反映されますが、すでにディスクに書き込まれているブロックには影響しません。

- ▶ データベースのデータ圧縮方式を有効にする手順は、次のとおりです:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「ストレージ」タブを選択します。
 - 4 「データ圧縮」から、データ圧縮方法を選択します。
 - 5 「適用」をクリックします。

関連情報

- [576 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「ストレージ」タブ](#)
- [348 ページの「圧縮率の確認」](#)
- データ圧縮(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

圧縮率の確認

圧縮率は、圧縮方式(ビットマップまたは RLE)に関係なく、圧縮済ブロックのサイズ(オーバーヘッドを含む)と展開済ブロックのサイズの比率を表します。数値が大きいほど圧縮率が高くなります。

注： この統計は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースの圧縮率を確認するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「統計」タブを選択します。
- 4 「ブロック」ノードを展開して、リストから「圧縮率」を探します。

関連情報

- [572 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」タブ](#)
- データ圧縮(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データの整合性オプションの設定

Essbase では、ディスクへのデータのコミットは自動的に行われます。Essbase でデータ・ブロックをどのようにディスクにコミットするかは、データベースのコミット設定とそれに関連する設定で指定できます。Essbase では、コミット・アクセスおよびアンコミット・アクセス(デフォルト)という 2 種類のコミット設定が

トランザクションで使用されます。コミット・アクセスを使用すると、データの整合性が最適化されます。

注： これらのオプションは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

コミット設定を変更するには、データベース・マネージャ権限が必要です。設定の変更は、次回トランザクションがなくなった時点から有効になります。

▶ データベースの分離レベルおよび関連する設定を指定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「トランザクション」タブを選択します。
- 4 「コミット・アクセス」または「アンコミット・アクセス」(デフォルト)を選択します。
- 5 「コミット・アクセス」を選択した場合は、次のように操作します:
 1. 「同時」ノードを展開します。
 2. 待機時間を選択します。
 3. オプション: 「プライメージ・アクセス」を選択します。
- 6 「アンコミット・アクセス」を選択した場合は、「同期ポイント」ノードを展開して、「ブロックのコミット」または「行のコミット」(あるいはその両方)に値を指定します。
- 7 「適用」をクリックします。

関連情報

- [データベース・プロパティ - 「トランザクション」タブ](#)
- コミット設定の理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

入出力アクセス・モードの選択

Essbase では、データベースに対してバッファ入出力アクセス・モードがデフォルトで使用されますが、Essbase がサポートしているほとんどのオペレーティング・システムおよびファイル・システムでは直接入出力を使用できます。データベー

ス・マネージャ権限を持つデータベースについては、入出力アクセス・モードを変更できます。設定の変更は、データベースの再起動後に有効になります。

注： この設定は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースの入出力アクセス・モードを選択するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「ストレージ」タブを選択します。
- 4 「保留中の入出力アクセス・モード」で、[入出力アクセス・モード](#)を1つ選択します。
- 5 「適用」をクリックします。

関連情報

- バッファ入出力と直接入出力の理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [576 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「ストレージ」タブ](#)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

ブロック・ストレージ・データベースの計算	351
計算スクリプトの管理	354
カスタム定義の関数とマクロの使用	374
計算の最適化	384

ブロック・ストレージ・データベースの計算

ここには次のトピックがあります:

- 351 ページの「デフォルト計算の設定」
- 352 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの計算」
- 353 ページの「等式によるブロックの作成の使用可能化」
- 354 ページの「データのプレビュー」

デフォルト計算の設定

データベースのデフォルト計算コマンドは CALC ALL です。したがって、Essbase ではデータベースの完全計算時に、すべての次元とメンバー、およびアウトラインのすべての式が集計されます。

データベース・マネージャ権限を持っているデータベースについては、デフォルトのデータベース計算として任意の計算スクリプトや計算文字列を指定できます。たとえば、使用頻度の高いスクリプトをデフォルトに指定すると、データベースに対してスクリプトの計算を実行するたびにスクリプトをロードする必要がなくなります。

デフォルト計算の設定変更は即座に有効になります。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ デフォルト計算を設定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「設定」>「デフォルト計算」を選択します。

- 3 「デフォルト計算の設定」ダイアログ・ボックスで、**デフォルトの計算方法**を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- 689 ページの「**デフォルト計算の設定**」ダイアログ・ボックス
- 352 ページの「**ブロック・ストレージ・データベースの計算**」

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdefaultcalc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdefaultcalcfile(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ブロック・ストレージ・データベースの計算

Calculation 権限のある**ブロック・ストレージ**・データベースについては、計算を実行できます。この場合、デフォルト計算または計算スクリプトを実行できます。

計算をバックグラウンドで実行すると、計算中に他の作業を行ったり、コンソールを終了したりできます。ただし、計算が完了するまでは Essbase 管理サーバーをシャット・ダウンできません。

▶ ブロック・ストレージ・データベースを計算するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして、「**計算の実行**」を選択します。
「データベース計算の実行」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 「**計算スクリプト**」で、**任意のアクション**を実行します:
 - **デフォルト計算**を実行するには、「デフォルト」を選択します。
 - 任意の計算スクリプトを選択します。
- 4 **オプション:** 計算中に作業を行えるように、計算をバックグラウンドで実行する場合は、「**バックグラウンドで実行**」を選択します。
- 5 「OK」をクリックして、計算を開始します。

計算をバックグラウンドで実行させるように設定した場合は、計算プロセスの ID が表示されます。この ID を使用すると、**バックグラウンド・プロセスのステータス**・ウィンドウでバックグラウンド計算のステータスを追跡できます。

関連情報

- 601 ページの「**データベース計算の実行**」ダイアログ・ボックス
- 368 ページの「**計算スクリプトの実行**」
- Essbase データベースの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

- 計算順序の定義(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [78 ページの「取得時間を改善するための集約の計算」](#)

関連コマンド

- execute calculation(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calcdefault(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calcline(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

等式によるブロックの作成の使用可能化

データ・ブロックが存在していない疎次元のメンバーに対して、定数以外のデータを割り当てる場合は、Essbase で等式によってブロックが作成されるように設定しておく必要があります。データベース・マネージャ権限を持つデータベースについては、Essbase で等式によってブロックが作成されるように設定できます。設定内容は、「適用」をクリックするとすぐに有効になります。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ Essbase で等式によるブロックの作成を有効にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「計算」ノードを展開します。
- 5 「等式によるブロックの作成」を選択します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [570 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ」](#)
- 疎次元のメンバーに割り当てられた定数値(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- set createblockoneq(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データのプレビュー

データベースの読取り権限を持っているユーザーは、管理サービス・コンソールから、集約ストレージおよびブロック・ストレージ・データベースのデータ値をプレビューできます。データ・プレビュー・グリッドには、Spreadsheet Add-in に似たスプレッドシート・フォーマットでデータが表示されます。

データ・グリッドでは、基本検索と条件付き取得、ズーム操作、選択項目のみ保持および選択項目のみ削除の操作、ピボット、メンバー選択などの、限られた操作を実行できます。また、HTML 形式でのグリッドの表示、グリッドの印刷、グリッドの電子メール送信も実行できます。

データ・プレビュー・グリッドには、他のクライアント・アプリケーションからの正確な取得回数は反映されません。

注： データ・プレビュー機能は、重複メンバーのアウトラインには対応していません。

▶ データベースのデータをプレビューするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして、「データのプレビュー」を選択します。
データ・プレビュー・グリッドが表示されます; 「キューブ・ビュー」タブが選択されています。
- 3 オプション: ツールバーを使用して、目的の操作をグリッドで実行します。
- 4 オプション: 「プロパティ」タブを選択し、グリッドのプロパティを設定します。

関連情報

[データ・プレビュー・グリッド・ウィンドウ](#)

計算スクリプトの管理

ここには次のトピックがあります:

- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」](#)
- [357 ページの「計算スクリプト構文のガイドライン」](#)
- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)
- [358 ページの「スクリプト・フォーマットのカスタマイズ」](#)
- [358 ページの「スクリプト内の行の検索」](#)
- [359 ページの「スクリプト・エディタ・ウィンドウの消去」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)
- [360 ページの「スクリプトを開く」](#)

- 361 ページの「スクリプトへのコメントの追加」
- 362 ページの「オートコンプリート機能の使用」
- 363 ページの「スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」
- 364 ページの「スクリプトでの関数およびコマンドの挿入」
- 365 ページの「スクリプト・エディタの左ペインの非表示」
- 365 ページの「スクリプトでの代替変数の使用」
- 366 ページの「スクリプトの保存」
- 367 ページの「スクリプトの構文チェック」
- 368 ページの「計算スクリプトの実行」
- 369 ページの「計算情報の確認」
- 370 ページの「計算スクリプトのトラブルシューティングと最適化」
- 371 ページの「スクリプトのコピー」
- 372 ページの「スクリプトの名前変更」
- 372 ページの「スクリプトの削除」
- 373 ページの「スクリプトの印刷」
- 374 ページの「デフォルト計算としての計算スクリプトの使用」

計算スクリプトについて

計算スクリプトを使用すると、データベースの計算方法を指定して、データベースのアウトラインで定義されているデータベース集計よりも優先させることが可能です。たとえば、データベースのサブセットを計算したり、メンバー間でデータ値をコピーできます。計算スクリプトは、アプリケーション内の1つまたは複数のデータベースに関連付けられます。エンタープライズ・ビューでは、少なくとも1つのスクリプトを含む各アプリケーションおよびデータベースの下に計算スクリプトのコンテナ・ノードが表示されます。

計算スクリプト・エディタで計算コマンド、等式、およびメンバー式を使用して作成します。計算スクリプト・エディタでは、計算スクリプトをアイテムごとに入力したり、ユーザー・インタフェースでアイテムを選択したりできます。計算スクリプトはテキスト・ファイルなので、任意のテキスト・エディタで計算スクリプトを作成して計算スクリプト・エディタに貼り付けることが可能です。

計算スクリプトには、デフォルトで.cscの拡張子が付けられます。管理サービス・コンソールから表示および実行できるのは、拡張子が.cscの計算スクリプトのみです。

計算スクリプトおよび式の作成については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： 計算スクリプトは、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

関連情報

- [356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」](#)
- 計算スクリプトの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 計算コマンド(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- 計算関数(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

計算スクリプト・エディタについて

- ▶ コンソールのメニュー・バーから計算スクリプト・エディタを開くには、「ファイル」>「エディタ」>「計算スクリプト・エディタ」を選択します。あるいは、スクリプトを[開く](#)か[作成](#)します。

計算スクリプトを開く場合は、[360 ページの「スクリプトを開く」](#)を参照してください。

注： 計算スクリプトは、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

計算スクリプト・エディタには、テキスト編集ウィンドウ、カスタマイズされた右クリック・メニュー、ツールバーおよびメッセージ・ペインが備えられています。エディタ内では、次のタスクを実行できます：

- [アウトラインとスクリプトの関連付け](#)
- [アウトライン・ツリーでのメンバーの検索](#)
- [アウトライン・ツリーからスクリプトへのメンバーの挿入](#)
- [スクリプトへの関数およびコマンドの挿入](#)
- [構文のオートコンプリート機能の使用](#)
- [スクリプトの構文チェック](#)
- [スクリプトの実行](#)
- [スクリプト要素の色分けとカスタマイズ](#)
- [スクリプト内のテキストの検索](#)
- [スクリプトのコンテンツの消去](#)

関連情報

- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)
- [360 ページの「スクリプトを開く」](#)
- [368 ページの「計算スクリプトの実行」](#)
- [366 ページの「スクリプトの保存」](#)

計算スクリプト構文のガイドライン

計算スクリプトを作成するときは、計算スクリプト構文のガイドラインに従う必要があります。また各計算コマンドおよび関数で正しい構文を使用する必要があります。

関連情報

- 355 ページの「計算スクリプトについて」
- 356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」
- 計算スクリプトの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』

ファイルの命名

Administration Services を使用して、計算スクリプト、レポート・スクリプト、データ・ロード用のファイル、および Essbase によって使用される他のファイルを作成および保存する場合、ファイル名はオペレーティング・システムとは関係なく選択する必要があります。Administration Services では、すべてのファイル名が大文字と小文字を区別せずに処理されます。たとえば、Administration Services では、Sheila1 と SHEILA1 は同じものとみなされます。

また、ESSLANG 変数はオペレーティング・システムのロケールと一致する必要があります。

スクリプトの色分けのカスタマイズ

MaxL スクリプト・エディタ、計算スクリプト・エディタ、式エディタおよびレポート・スクリプト・エディタでは、スクリプトの各要素は読みやすいように色分けして表示されます。各スクリプト要素のデフォルトの色は変更できます。変更はすべてのスクリプト・エディタに適用されます。

▶ スクリプト・エディタの色分けをカスタマイズするには:

- 1 メニュー・バーから「ツール」>「コンソール・オプション」を選択します。
- 2 「スクリプト・エディタ・オプション」タブを選択します。
- 3 スクリプト要素の色を変更するには:
 - 標準色を適用するには、要素の横の「色」列で、ドロップダウン・リストから色を選択します。
 - カスタム色を作成するには、ドロップダウン・リストから「カスタム」を選択し、「エディタの色の設定」ダイアログ・ボックスで色を選択します。
- 4 「適用」をクリックして、設定を保存します。
設定はすぐに有効になります。
- 5 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

関連情報

- [「オプション」ダイアログ - 「スクリプト・エディタ・オプション」](#)
- [358 ページの「スクリプト・フォーマットのカスタマイズ」](#)
- [357 ページの「計算スクリプト構文のガイドライン」](#)
- [389 ページの「レポート・スクリプト構文のガイドラインについて」](#)
- [191 ページの「式について」](#)

スクリプト・フォーマットのカスタマイズ

MaxL スクリプト・エディタ、計算スクリプト・エディタ、および式エディタなどのスクリプト・エディタには、タブ位置および行折返しまたはワード・ラップを指定できます。変更はすべてのスクリプト・エディタと式エディタに適用されません。

▶ スクリプト・エディタのフォーマットをカスタマイズするには:

- 1 メニュー・バーから「ツール」>「コンソール・オプション」を選択します。
- 2 「スクリプト・エディタ・オプション」タブを選択します。
- 3 タブ位置を設定するには、「[Tab]」キーを押したときにインデントする文字数を「タブのサイズ」テキスト・ボックスに指定します。
- 4 行折返しを有効にするには、「右端で折り返す」を選択します。
- 5 ワード・ラップを有効にするには、「ワード・ラップを使用可能にする」を選択します。
- 6 「適用」をクリックして、設定を保存します。
設定はすぐに有効になります。
- 7 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

関連情報

- [「オプション」ダイアログ - 「スクリプト・エディタ・オプション」](#)
- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)

スクリプト内の行の検索

計算スクリプトまたはレポート・スクリプト内では、任意の行を検索できます。たとえば、メッセージ・ペインでエラーが戻された行を検索できます。

▶ 計算スクリプトおよびレポート・スクリプト内で行を検索するには:

- 1 スクリプト内で右クリックして、「行に移動」を選択します。
- 2 「行に移動」ダイアログ・ボックスに、行番号を入力します。
- 3 「OK」をクリックします。

関連情報

[153 ページの「エディタでのテキストの検索」](#)

スクリプト・エディタ・ウィンドウの消去

計算スクリプト・エディタやレポート・スクリプト・エディタのコンテンツは、エディタ・ウィンドウを閉じなくても消去できます。

- ▶ 計算スクリプト・エディタやレポート・スクリプト・エディタのスクリプト領域のコンテンツを消去するには:
 - 1 スクリプト内で、次のアクションを実行します:
 - 特定の領域に含まれるテキストを消去するには、その領域を選択します。
 - すべてのテキストを消去するには、右クリックして「すべて選択」を選択します。
 - 2 「編集」>「消去」を選択します。

- ▶ 「メッセージ」ペインを消去するには、ペイン内で右クリックして「消去」を選択します。

関連情報

- [356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」](#)
- [388 ページの「レポート・スクリプト・エディタについて」](#)

スクリプトの作成

Essbase でのデータベースの計算方法を指定した計算スクリプトを作成するには、計算スクリプト・エディタを使用します。データの取得、フォーマットおよび出力方法を詳細に指定したレポート・スクリプトを作成するには、レポート・スクリプト・エディタを使用します。

スクリプトの作成時に、スクリプトを特定のデータベース、または特定のアプリケーション内のすべてのデータベースに関連付けることが可能です。

- ▶ 計算スクリプトまたはレポート・スクリプトを作成するには:
 - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、スクリプトを関連付けるアプリケーションまたはデータベースを選択します。
 - 2 「ファイル」>「新規」を選択して、「新規」ダイアログ・ボックスを開きます。
 - 3 「スクリプト」タブを選択し、「計算スクリプト」または「レポート・スクリプト」を選択して、「OK」をクリックします。

適切なエディタに空白のスクリプトが表示されます。

- 4 アウトライン・ツリーが表示されていない場合は、スクリプトに[アウトラインを関連付け](#)ます。

「新規」ダイアログ・ボックスを開く前にエンタープライズ・ビューからデータベースを選択した場合は、スクリプトは自動的にデータベースに関連付けられ、これに従ってアウトライン・ツリーが表示されます。

- 5 スクリプトを記述して、[スクリプト構文を確認](#)します。
- 6 スクリプトを[保存](#)または[実行](#)します。

関連情報

- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [363 ページの「スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」](#)
- [364 ページの「スクリプトでの関数およびコマンドの挿入」](#)
- [365 ページの「スクリプトでの代替変数の使用」](#)
- [361 ページの「スクリプトへのコメントの追加」](#)
- [357 ページの「ファイルの命名」](#)

関連コマンド

create calculation(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

スクリプトを開く

計算スクリプト・エディタおよびレポート・スクリプト・エディタでは、計算スクリプトおよびレポート・スクリプトを開いたり、編集または実行したりすることが可能です。スクリプトは、このトピックで説明する方法で開くか、またはエンタープライズ・ビューから直接開くことが可能です。

▶ Essbase サーバーにオブジェクトとして保存されている計算スクリプトまたはレポート・スクリプトを開く手順は、次のとおりです：

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のスクリプトが関連付けられているアプリケーションまたはデータベースを探します。
- 2 アプリケーションまたはデータベースの下の、「計算スクリプト」ノードまたは「レポート・スクリプト」ノードを展開します。
- 3 開きたいスクリプトを選択して右クリックし、「編集」を選択します。

エディタにスクリプトが表示されます

- 4 スクリプトをロックするように求めるプロンプトが表示されることがあります。スクリプトを変更して変更内容を保存する場合は、スクリプトをロックします。

[オブジェクトのロックおよびロック解除](#)を参照してください。

▶ ローカルまたはネットワークに保存されている計算スクリプトまたはレポート・スクリプトを開く手順は、次のとおりです：

- 1 「ファイル」>「開く」を選択します。
- 2 「開く」ダイアログ・ボックスで、「ファイル・システム」タブを選択します。

- 3 **オプション:** 特定のタイプのスクリプトのみを表示するには、「ファイルのタイプ」からスクリプトのタイプを選択します。
- 4 開きたいスクリプトがある場所に移動します。
- 5 スクリプトを選択して、「OK」をクリックします。

エディタにスクリプトが表示されます

- 6 スクリプトをロックするように求めるプロンプトが表示されることがあります。スクリプトを変更して変更内容を保存する場合は、スクリプトをロックします。

[オブジェクトのロックおよびロック解除](#)を参照してください。

- 7 エンコード方式を指定するように求められた場合は、次のように操作します:
 - Unicode モードのアプリケーション用のスクリプトである場合は、UTF-8 または任意のロケールを選択します。
 - Unicode モードのアプリケーション用のスクリプトでない場合は、デフォルトの値を選択します。

[ファイルのエンコード方式とロケールについて](#)を参照してください。

関連情報

- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」](#)
- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [388 ページの「レポート・スクリプト・エディタについて」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)

スクリプトへのコメントの追加

計算スクリプトおよびレポートスクリプトに、注釈を付けるには、コメントを含めます。Essbase でスクリプトが実行される時、コメントは無視されます。

注: エディタ・ウィンドウで 1 行を超えるコメントは、最初の行のみが色分けされます。

- ▶ 計算スクリプトまたはレポート・スクリプトにコメントを追加するには:
- 1 スクリプトを[開く](#)か、[作成](#)します。
 - 2 スクリプト内のコメントを追加する場所をクリックします。
 - 3 コメントを `/* ... */` で囲みます; 次に例を示します: `/* This is a comment. */`
レポート・スクリプトの場合、コメントの各行を `//` で始めるとコメントを追加できます。

コメントは、計算スクリプト・エディタおよびレポート・スクリプト・エディタでは緑色で表示されます。

関連情報

- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)

オートコンプリート機能の使用

計算スクリプト・エディタ、レポート・スクリプト・エディタ、および式エディタにはオートコンプリート機能が用意されており、入力しながら対話的にスクリプトを作成できます。エディタでテキストを入力し始めると、一致する候補のリストが表示されます。任意のアイテムを選択すると、そのアイテムに必要なテキストがスクリプトに入力され、引数の入力位置にカーソルが置かれます。

ブロック・ストレージ・データベースの場合は、Essbase の計算関数とコマンド、およびレポート・コマンド(メンバー名は除く)にオートコンプリートが適用されます。たとえば、ブロック・ストレージ・データベースでは、エディタに@a(大文字と小文字は区別されません)と入力すると、@ABS、@ACCUM などの@a で始まる計算関数の候補のリストが表示され、選択できるようになります。オートコンプリートは[引数テンプレートの挿入](#)でも使用できます。

集約ストレージ・データベースの場合は、MDX 構文にオートコンプリートが適用されます。MDX でのオートコンプリートの動作の詳細は、[405 ページの「MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用」](#)を参照してください。

▶ 計算スクリプト・エディタ、レポート・スクリプト・エディタまたは式エディタでオートコンプリート機能を使用するには:

1 スクリプトを開くか、作成します。

エディタ・ウィンドウの左下ペインに、関連する関数およびコマンドがツリー・ビューで表示されます。

2 「オートコンプリートを使用可能にする」を選択します。

3 関数やコマンドとともに引数テンプレートをスクリプトに挿入する場合は、「引数の挿入」を選択します。

4 スクリプトで、テキスト、コマンド、または関数を挿入する位置をクリックします。

5 入力を開始し、続いてドロップダウン・リストからコマンドまたは関数を選択します。

選択されたコマンドまたは関数がスクリプトに挿入されます。

注： リストを閉じるには、[Esc]を押します。

関連情報

- [356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」](#)
- [388 ページの「レポート・スクリプト・エディタについて」](#)
- [363 ページの「スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」](#)

- 364 ページの「スクリプトでの関数およびコマンドの挿入」
- 357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」
- 405 ページの「MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用」

スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入

計算スクリプト・エディタや式エディタなどのエディタに関連付けられているアウトラインは、エディタ・ウィンドウの左上ペインにツリー・ビューで表示されます。ツリー・ビューには名前ではなく別名を表示でき、名前の検索も可能です。

次元名やメンバー名をツリーから選択すると、スクリプトに挿入できます。手動で名前を入力する必要はありません。ただし、式のテキストを手動で入力する場合は、空白や特殊文字が含まれるメンバー名を引用符で囲む必要があります。

重複メンバーについては、修飾メンバー名を入力する必要があります。たとえば、アウトラインに New York というメンバーが 2 つ含まれている場合、2 つの修飾メンバー名のいずれか一方(New York ではなく [State].[New York])を入力する必要があります。重複メンバーの修飾メンバー名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスに表示されます。手動で入力するのではなくツリーから名前を選択すると、修飾メンバー名が自動的に挿入されます。

▶ 次元名およびメンバー名をスクリプトに挿入するには:

- 1 スクリプトを開くか、作成します。
- 2 エディタ・ウィンドウにアウトライン・ツリーが表示されていない場合は、スクリプトにアウトラインを関連付けます。
- 3 アウトライン・ツリーで次のいずれかのタスクを実行して、スクリプトに挿入するメンバーを検索します:
 - 次元を展開するには、その次元を選択して右クリックし、「子孫まで展開」を選択します。
 - アウトライン・ツリーから特定のメンバーを検索するには、次のように操作します:
 1. 任意の次元またはメンバーを選択します。
 2. 右クリックして「メンバーの検索」を選択すると、「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスが開きます。
 3. 「結果の検索」タブで、目的の次元またはメンバーの名前をダブルクリックします。
 - メンバー名ではなく別名を表示および挿入するには、次のように操作します:
 1. 「別名の使用」を選択します。
 2. 「別名テーブル」から別名テーブルを選択します。
- 4 次元またはメンバーの名前、あるいは別名を選択して右クリックし、「メンバーの挿入」を選択します。

注： レベル 0 メンバーを挿入するには、メンバー名をダブルクリックします。

名前または別名がカーソル位置に挿入されます; 名前は"名前"のように二重引用符で囲まれます。

関連情報

- [389 ページの「編集集中の Essbase オブジェクトへのアウトラインの関連付け」](#)
- [195 ページの「エディタでのメンバーの検索」](#)
- [364 ページの「スクリプトでの関数およびコマンドの挿入」](#)
- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)

スクリプトでの関数およびコマンドの挿入

エディタ(計算スクリプト・エディタや式エディタなど)では、関連するコマンドや関数がつリー・ビューで表示されます。たとえば計算スクリプト・エディタでは、Essbase の計算関数、カスタム定義の関数およびマクロ、計算コマンド、および計算演算子が表示されます; レポート・スクリプト・エディタでは、レポート・コマンドが表示されます。現在のツリーから選択したアイテムは、現在のスクリプトや式に挿入されます。手動で入力する必要はありません。

関数やコマンドの挿入時に引数のテンプレートを挿入することが可能です。引数は挿入後に変更できます。

『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の次のトピックも参照してください:

- 計算関数のカテゴリ
- 計算コマンド・グループ
- レポート・ライターのコマンド・グループ

注： 表示される関数やコマンドは、接続する Essbase サーバーのリリース・レベルによって異なる場合があります。

▶ スクリプトや式にコマンド、関数、または演算子を挿入するには:

1 エディタを開きます。

エディタ・ウィンドウの左下ペインに、関連する関数、コマンド、および演算子がツリー・ビューで表示されます。

2 オプション: 次のいずれかのアクションを行います:

- カテゴリ別にリストを表示するには、「カテゴリ別」タブをクリックします。
- アルファベット順でリストを表示するには、「アルファベット順」タブをクリックします。

3 スクリプト内または式中の、関数、コマンドまたは演算子を挿入する場所をクリックします。

- 4 「コマンドと関数」 ツリーで、挿入するアイテムを探します。
- 5 **オプション:** 関数やコマンドとともに引数テンプレートを挿入する場合は、「引数の挿入」を選択します。
引数テンプレートのプレビューを表示するには、関数またはコマンドを右クリックします。
- 6 選択したアイテムをダブルクリックします。
Essbase では、関数、コマンド、または演算子がスクリプトまたは式のカーソル位置に挿入されます。
- 7 引数テンプレートを挿入した場合は、テンプレートを必要な値に置き換えます。

関連情報

- [363 ページの「スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」](#)
- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)

スクリプト・エディタの左ペインの非表示

メンバー・リスト、レポート・エディタ、MDX エディタ、式エディタ、計算スクリプト・エディタなどが含まれる左ペインは非表示にできます。これにより、スクリプト編集ウィンドウがより大きく表示されます。

▶ エディタの左ペインを非表示にするには:

- 1 「スクリプト」タブをダブルクリックします。
- 2 「スクリプト」タブを再びダブルクリックすると、左ペインが再表示されます。

スクリプトでの代替変数の使用

計算スクリプトおよびレポート・スクリプトでは、代替変数を使用できます。通常、代替変数は頻繁に変化する情報を参照する場合に使用されます。

代替変数は、[代替変数](#) ウィンドウで作成します。代替変数が含まれるスクリプトを実行すると、Essbase では各変数が変数定義に指定された値に置き換えられます。

▶ 計算スクリプトまたはレポート・スクリプトで代替変数を使用するには:

- 1 スクリプトを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 代替変数を挿入する場所をクリックします。
- 3 アンパサンド(&)に続けて代替変数の名前を入力します(&CurQtr など)。
- 4 スクリプトを[保存](#)して実行します。

Essbase では、代替変数が代替変数定義に指定された値に置き換えられます。

注： ランタイム代替変数は、計算スクリプトで使用されるすべてのランタイム代替変数を SET RUNTIMESUBVARS 計算コマンドで宣言する必要がある点が代替変数と異なります。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [93 ページの「代替変数の管理」](#)
- 計算スクリプトでの代替変数の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [693 ページの「代替変数ウィンドウ」](#)

スクリプトの保存

計算スクリプトおよびレポート・スクリプトは、Essbase サーバー上に Essbase オブジェクトとして保存するか、またはネットワーク・コンピュータやクライアント・コンピュータ上にテキスト・ファイルとして保存できます。

Essbase オブジェクトとして保存したスクリプトは、Essbase アプリケーションまたはデータベースに関連付けられます。エンタープライズ・ビューに表示されるのは、Essbase オブジェクトとして保存したスクリプトのみです。Essbase オブジェクトとして保存したスクリプトは、Essbase サーバーの次の場所に保存されます：

ARBORPATH\app\appname\scriptname.csc

または ARBORPATH\app\appname\dbname\scriptname.rpt

Essbase のディレクトリ構造以外の場所にスクリプトを保存すると、そのスクリプトは Essbase オブジェクトとしては保存されません。ローカルでスクリプトを使用する場合は、クライアント・マシンやネットワーク上にスクリプトを保存します。

- ▶ スクリプトを開いた場所に保存するには、「ファイル」>「保存」を選択します。
- ▶ スクリプトを Essbase サーバーに保存するには:
 - 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
 - 2 「ファイル」>「名前を付けて保存」を選択します。
 - 3 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、「Essbase サーバー」タブを選択します。
 - 4 「検索」で、スクリプトを保存する Essbase サーバーを選択します。
 - 5 スクリプトを保存するアプリケーションまたはデータベースに移動します。
 - 6 「ファイル名」に、スクリプトの名前を入力します。

ファイル名の長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

デフォルトでは、計算スクリプトには.csc の拡張子が付けられ、レポート・スクリプトには.rep の拡張子が付けられます。デフォルトの拡張子が付いて

いるスクリプトのみを、管理サービス・コンソールから表示または実行できます。

7 「OK」をクリックします。

Essbase ではスクリプトが保存され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

▶ スクリプトをローカルまたはネットワークに保存するには:

1 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、「ファイル・システム」タブを選択します。

2 スクリプトを保存するファイルシステム・ディレクトリに移動します。

3 「ファイル名」に、スクリプトの名前を入力します。

デフォルトでは、計算スクリプトには.csc の拡張子が付けられ、レポート・スクリプトには.rep の拡張子が付けられます。デフォルトの拡張子が付いているスクリプトのみを、管理サービス・コンソールから表示または実行できます。

4 エンコード方式を指定するように求められた場合は、次のように操作します:

- エンコード方式を Unicode に指定する場合は、「UTF-8」を選択します。
- Unicode 以外のエンコード方式を指定する場合は、デフォルトの選択をそのまま使用します。

5 「OK」をクリックします。

Essbase では、指定された場所にスクリプトが保存されます。

関連情報

- [682 ページの「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス](#)
- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)
- [368 ページの「計算スクリプトの実行」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)
- [357 ページの「ファイルの命名」](#)
- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)

スクリプトの構文チェック

計算スクリプト・エディタとレポート・スクリプト・エディタには、計算スクリプトやレポート・スクリプト内の構文エラーを検出して通知する、構文チェッカが用意されています。たとえば、関数名の誤入力や、行末のセミコロンの入力漏れなどが構文チェッカによってチェックされます。また、スクリプトに関連付けられているデータベースを参照することで、次元名、メンバー名、カスタム定義のマクロや関数(計算スクリプトの場合)も構文チェック機能によって確認されます。

構文チェック機能では、セマンティック(論理)のエラーは識別されません。スクリプトを実行しても期待した結果が得られないときはセマンティック・エラーが発生しています。セマンティック・エラーを識別するには、スクリプトを実行して結果をチェックし、結果が期待どおりであることを確認します。

構文チェックやスクリプトの実行では、エラーおよびステータス・メッセージは、コンソール・ウィンドウの一番下にあるメッセージ・ペインに表示されます。表示されるメッセージは、構文チェックでもスクリプトの実行でも同じです。

▶ 計算スクリプトまたはレポート・スクリプトの構文をチェックするには:

- 1 スクリプトを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 エディタ・ウィンドウにアウトライン・ツリーが表示されていない場合は、スクリプトに[アウトライン](#)を関連付けます。
- 3 「構文」>「構文チェック」を選択します。

Essbase では、コンソール・ウィンドウの一番下にあるメッセージ・ペインに、構文チェックの結果が表示されます。一度に1つのエラーが表示されます。

- 4 エラーが行番号に関連付けられている場合、スクリプト領域で右クリックして「行に移動」を選択すると、その行に直接進むことが可能です。
- 5 エラーが複数の行番号に関連付けられている場合、それぞれの行番号について手順3を繰り返します。

関連情報

- [368 ページの「計算スクリプトの実行」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)
- [357 ページの「計算スクリプト構文のガイドライン」](#)
- [370 ページの「計算スクリプトのトラブルシューティングと最適化」](#)
- [389 ページの「レポート・スクリプト構文のガイドラインについて」](#)
- [392 ページの「レポート・スクリプトのトラブルシューティングと最適化」](#)

計算スクリプトの実行

計算スクリプトを作成して保存したら、そのスクリプトを実行することで計算を行います。計算スクリプトを実行するには、スクリプトを実行するデータベースの計算権限が必要です。

Essbase 計算スクリプトを常にバックグラウンドで実行するように設定したり、計算するたびにプロンプトが表示されるように設定したりすることが可能です。[102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)を参照してください。構文を確認するには、スクリプトを開いて「構文チェック」ボタンをクリックします。

計算スクリプトは、計算スクリプト・エディタまたは Spreadsheet Add-in で実行したり、関連付けられているデータベースを計算したりすることにより実行できます。[352 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの計算」](#)を参照してください。

▶ 計算スクリプト・エディタから計算スクリプトを実行するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで計算スクリプトを選択して右クリックし、「実行」を選択します。
- 計算スクリプトを[開く](#)か[作成](#)して、「実行」をクリックします。

Essbase では「計算スクリプトの実行」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2 スクリプトがファイル・システムに保存されている場合、またはデータベース・レベルではなくアプリケーション・レベルで保存されている場合は、スクリプトを実行するデータベースを選択します。

3 オプション: 「バックグラウンドで実行」を選択します。

スクリプトをバックグラウンドで実行すると、コンソールで他の作業を行ったり、コンソールを終了したりできます。スクリプトの実行が完了するまでは Essbase 管理サーバーをシャット・ダウンできません。

4 「OK」をクリックします。

Essbase ではデータベースに対して計算スクリプトが実行されます。エラー・メッセージおよびステータス・メッセージは、コンソール・ウィンドウの最下位にある「メッセージ」ペインに表示されます。計算スクリプトをバックグラウンドで実行した場合は、プロセスの ID が表示されます。この ID を使用して、バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウで計算の[ステータスを追跡](#)できます。

5 ツール([データ・プレビュー・グリッド](#)や Spreadsheet Add-in など)を使用して、計算結果を確認します。

6 アプリケーション・ログで、計算に関する情報を確認します。

[ログを開く](#)を参照してください。

関連情報

- [601 ページの「「計算スクリプトの実行」ダイアログ・ボックス」](#)
- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [367 ページの「スクリプトの構文チェック」](#)
- [369 ページの「計算情報の確認」](#)

関連コマンド

- execute calculation(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- runcalc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

計算情報の確認

完了した計算について、アプリケーション・ログに計算メッセージが表示されます。ログ情報(計算回数や順序など)を使用すると、計算を調整する際に役立ちます。

アプリケーション・ログを表示するには、ログ・ビューアを使用するか、または Essbase サーバーからログ・ファイルを開きます。251 ページの「Essbase ログについて」を参照してください。

▶ 計算に関する情報を確認するには:

- 1 計算したデータベースが含まれているアプリケーションのアプリケーション・ログを開きます。
- 2 ログにフィルタを適用して、現在の日付のメッセージのみを表示します。
- 3 ログ・ビューア・ウィンドウで、計算に関するメッセージを確認します。
メッセージには、計算されたデータ値と計算時間が示されます。
- 4 メッセージの「固定メンバー[]」アイテムをチェックして、固定したすべてのメンバーが実際に計算に含まれていたことを確認します。

詳細な計算エントリを表示する場合は、SET MSG 計算コマンドを使用できます。

関連情報

- 368 ページの「計算スクリプトの実行」
- 251 ページの「Essbase ログについて」
- ログの表示

関連コマンド

- SET MSG(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- SET NOTICE(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

計算スクリプトのトラブルシューティングと最適化

管理サービス・コンソールには、メッセージ・ペインが用意されています。スクリプトの構文を確認するかスクリプトを実行するときに、このペインにエラー・メッセージが表示されます。

エラー・メッセージに行番号が含まれている場合は、スクリプトで右クリックして「行に移動」を選択すると、その行に直接移動できます。Essbase のエラー・メッセージ番号がエラー・メッセージに表示される場合は、この番号を使用してエラーに関する解決策などの情報を調べられます。エラー・メッセージ番号を調べるには、エラー・メッセージ・リファレンスを参照してください。

- 計算スクリプトの構文およびガイドラインについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- 計算の最適化については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- 計算コマンドおよび関数の構文情報および例については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

関連情報

- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [356 ページの「計算スクリプト・エディタについて」](#)
- 計算スクリプトの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 計算の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』

スクリプトのコピー

計算スクリプトやレポート・スクリプトをコピーすると、Essbase ではコピー先となる Essbase サーバー上のアプリケーションまたはデータベース・ディレクトリにスクリプトがコピーされます。このようなスクリプトをコピーするには、このトピックで説明する方法を使用するか、ファイル・システムを使用します。

また、アプリケーションを移行する処理の一環として、サーバー間でスクリプトをコピーすることも可能です。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。

▶ スクリプトを新しい場所にコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、スクリプトを選択します。
- 2 右クリックして「コピー」を選択します。
Essbase では「計算スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス、または「レポート・スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 スクリプトをコピーするアプリケーションおよびデータベースが含まれる Essbase サーバーの名前を選択します。
- 4 「アプリケーション名」で、スクリプトを関連付けるアプリケーションを選択します。
- 5 次のいずれかのアクションを行います:
 - 1つのデータベースに対してスクリプトを関連付ける場合は、「データベース名」でデータベースを選択します。
 - 選択したアプリケーションのすべてのデータベースに対してスクリプトを関連付ける場合は、「(すべての DB)」を選択します。
- 6 「計算スクリプト名」または「レポート・スクリプト名」で、スクリプトに指定する新しい名前を入力します。
- 7 「OK」をクリックします。
- 8 Administration Services から既存スクリプトを上書きするかどうかの確認を求められた場合は、「はい」をクリックします。

Essbase ではスクリプトがコピーされ、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [522 ページの「計算スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス](#)
- [526 ページの「レポート・スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス](#)
- [108 ページの「データベースのコピー」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- create calculation as(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

スクリプトの名前変更

計算スクリプトおよびレポート・スクリプトの名前を変更する場合は、このトピックで説明する方法を使用するか、ファイル・システムを使用します。

他のユーザーによってロックされているスクリプトは、名前を変更できません。

▶ 計算スクリプトおよびレポート・スクリプトの名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、スクリプトを選択します。
- 2 右クリックして「名前変更」を選択します。

Essbase では「計算スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス、または「レポート・スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 3 スクリプトの新しい名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

Essbase ではスクリプト名が変更され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [673 ページの「計算スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス](#)
- [676 ページの「レポート・スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

スクリプトの削除

適切な権限がある場合は、Essbase サーバーから計算スクリプトおよびレポート・スクリプトを削除できます。このトピックで説明する方法を使用するか、ファイル・システムを使用できます。アプリケーション・レベルで保存されたスクリプトを削除するには、少なくともそのアプリケーションに対するアプリケーション・

マネージャ権限を持っている必要があります。データベース・レベルで保存されたスクリプトを削除するには、少なくともそのデータベースに対するデータベース・マネージャ権限を持っている必要があります。

スクリプトを削除すると、Essbase サーバー上の、スクリプトが保存されていたアプリケーション・ディレクトリまたはデータベース・ディレクトリから、スクリプトが削除されます。

▶ Essbase サーバーから計算スクリプトまたはレポートスクリプトを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、スクリプトを選択します。
- 2 右クリックして「削除」を選択します。
- 3 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。

スクリプトがロックされている場合は、Essbase からロックを解除(「OK」をクリック)するように求められます。管理者以外のユーザーは、自分でロックしたスクリプトについてのみロックを解除できます。

スクリプトがロックされていなかった、またはロックが正常に解除されたときみなされ、スクリプトが削除され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連コマンド

- drop calculation(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- drop object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

スクリプトの印刷

エディタで開いている計算スクリプトまたはレポート・スクリプトを印刷できます。

▶ 計算スクリプトおよびレポート・スクリプトを印刷するには:

- 1 スクリプトを開くか、作成します。
- 2 「ファイル」>「印刷」を選択します。
- 3 オプション: 「印刷」ダイアログ・ボックスで、1 つ以上のオプションを指定します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [366 ページの「スクリプトの保存」](#)
- [194 ページの「メンバー式の印刷」](#)

デフォルト計算としての計算スクリプトの使用

データベース・マネージャ権限を持っているデータベースについては、デフォルトのデータベース計算として計算スクリプトを指定できます。たとえば、使用頻度の高いスクリプトをデフォルトに指定すると、データベースに対してスクリプトの計算を実行するたびにスクリプトをロードする必要がなくなります。

デフォルト計算の設定を変更した場合、その変更内容は即座に有効になります。

- ▶ データベースのデフォルト計算として特定の計算スクリプトを使用するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、デフォルトとして使用する計算スクリプトが関連付けられているデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「設定」>「デフォルト計算」を選択します。
 - 3 「デフォルト計算の設定」ダイアログ・ボックスで、「計算スクリプトの使用」を選択します。
 - 4 リストから計算スクリプトを選択します。
 - 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [351 ページの「デフォルト計算の設定」](#)
- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)
- [352 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの計算」](#)

関連コマンド

- `alter database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setdefaultcalc(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setdefaultcalcfile(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義の関数とマクロの使用

ここには次のトピックがあります:

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [375 ページの「カスタム定義関数の表示」](#)
- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の編集」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の使用」](#)
- [378 ページの「カスタム定義関数のコピー」](#)
- [378 ページの「カスタム定義関数の名前変更」](#)
- [379 ページの「カスタム定義関数の削除」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの表示」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの作成」](#)

- [381 ページの「カスタム定義マクロの編集」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロの使用」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロのコピー」](#)
- [383 ページの「カスタム定義マクロの名前変更」](#)
- [383 ページの「カスタム定義マクロの削除」](#)

カスタム定義の関数とマクロについて

Essbase の計算言語は、カスタム定義の計算関数とマクロを作成して使用して拡張できます。

注： カスタム定義の関数とマクロは、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

カスタム定義関数

カスタム定義関数を使用すると、Essbase の計算スクリプト言語ではサポートされていない計算関数を作成できます。カスタム定義関数は、Java で開発し、Essbase で作成し、アプリケーションまたは Essbase サーバーに関連付け、Essbase のネイティブの計算関数と同じように、式や計算スクリプトで使用できます。

カスタム定義の計算関数の開発に関する概念については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。例については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

カスタム定義マクロ

カスタム定義マクロを使用すると、Essbase の複数の関数を 1 つの関数にまとめられます。カスタム定義マクロには、マクロ関数、変数、およびその他のマクロを含めることが可能です。マクロは、Essbase のネイティブの計算関数と同じように、式や計算スクリプトで使用できます。

この概念は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。マクロ言語の構文と規則の詳細、およびマクロの使用例は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

関連情報

- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの作成」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の使用」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロの使用」](#)

カスタム定義関数の表示

カスタム定義関数を表示して、関数が正常に作成されているかどうかを確認したり、カスタム定義関数がローカルかグローバルかを確認したりできます。カスタ

ム定義関数は、ユーザーが作成して登録するまでは表示されません。Essbase では、カスタム定義関数のサンプルは提供されていません。

▶ カスタム定義関数を表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「関数」を選択します。

カスタム定義関数マネージャ・ウィンドウに既存の関数が表示されます。このウィンドウを使用して、関数を**作成**、**編集**、**名前変更**または**削除**できます。

関連情報

- [548 ページの「カスタム定義関数マネージャ」](#)
- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の編集」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の使用」](#)

関連コマンド

display function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義関数の作成

Essbase の計算機のフレームワークで使用するカスタム定義計算関数を作成できます。まずカスタム定義関数を Java プログラミング言語で開発し、次にカスタム定義関数マネージャを使用して Essbase で関数を作成する必要があります。カスタム定義関数の Java 要件の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』でカスタム定義計算関数の作成を参照してください。

注： カスタム定義関数は、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

▶ カスタム定義関数を作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「作成」>「関数」を選択します。
- 3 「**新規関数**」ダイアログ・ボックスのテキスト・ボックスで、適切な情報を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

Essbase によって関数が作成され、カスタム定義関数マネージャ・ウィンドウに表示されます。Essbase のネイティブの計算関数と同じように、この関数を使用できます。[カスタム定義関数の使用](#)を参照してください。

関連情報

- [647 ページの「新規関数」ダイアログ・ボックス](#)
- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の編集」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の使用」](#)

関連コマンド

create function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義関数の編集

カスタム定義関数を編集できます。ローカル(アプリケーション・レベル)の関数を編集するには、少なくともアプリケーション・マネージャ権限が必要です。また、グローバル(サーバー・レベル)の関数を編集するには、管理者権限が必要です。

▶ カスタム定義関数を編集するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「関数」を選択します。
- 3 「カスタム定義関数マネージャ」・ウィンドウで、関数を選択して「編集」をクリックします。
- 4 「関数の編集」ダイアログ・ボックスで、1つ以上のフィールドを編集します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase で関数が更新されます。

関連情報

- [595 ページの「関数の編集」ダイアログ・ボックス](#)
- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)

関連コマンド

create function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義関数の使用

カスタム定義関数は、Essbase のネイティブの計算関数と同じように、計算スクリプトおよび式で使用できます。ローカル・レベル(アプリケーション)で作成した関数は、そのアプリケーションに関連付けられた計算スクリプトおよび式でのみ使用できます。グローバル・レベル(Essbase サーバー)で作成した関数は、その Essbase サーバー上のすべての計算スクリプトおよび式で使用できます。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)
- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)

カスタム定義関数のコピー

カスタム定義関数は、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバーおよびアプリケーションにコピーできます。また、アプリケーションを移行する処理の一環として、サーバー間でカスタム定義関数をコピーすることも可能です。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。

▶ カスタム定義関数をコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、コピー対象の関数に関連付けられている Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「関数」を選択します。
- 3 「カスタム定義関数マネージャ」・ウィンドウで、1つ以上の関数を選択して「コピー」をクリックします。
- 4 「すべての関数をコピー」ダイアログ・ボックスで、関数のコピー先の Essbase サーバーとアプリケーションを選択します。
- 5 オプション: コピーする関数と同じ名前を持つ関数を上書きする場合は、「既存の関数の上書き」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [520 ページの「「すべての関数をコピー」ダイアログ・ボックス」](#)
- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)

関連コマンド

create function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義関数の名前変更

▶ カスタム定義関数の名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「関数」を選択します。
- 3 「カスタム定義関数マネージャ」・ウィンドウで、関数を選択して「名前変更」をクリックします。

- 4 「関数の名前変更」ダイアログ・ボックスで、関数の新しい名前を入力します。
- 5 **オプション:** 名前変更後の関数と同じ名前を持つ既存の関数を上書きする場合は、「既存の関数の上書き」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

Essbase で関数名が変更されます。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [674 ページの「関数の名前変更」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

create function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義関数の削除

管理者権限を持っているユーザーは、グローバル(サーバー)のレベルで定義されたカスタム定義関数を削除できます。あるアプリケーションのアプリケーション・マネージャ権限を持っているユーザーは、そのアプリケーションに対して定義されているカスタム定義関数を削除できます。

ローカル(アプリケーション・レベル)の関数を削除する場合は、その関数が関連付けられている Essbase アプリケーションを再起動する必要があります。グローバル(サーバー・レベル)の関数を削除する場合は、サーバーで実行中のすべての Essbase アプリケーションを再起動する必要があります。アプリケーションを再起動すると、関数のカタログがリフレッシュされます。

関数を削除する前に、その関数を参照している計算スクリプトや式がないことを確認してください。

注意 グローバルのカスタム定義関数の削除は、Essbase データベースにアクセスしているユーザーがおらず、計算が実行中でないときにのみ行ってください。

▶ カスタム定義関数を削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「関数」を選択します。
- 3 「カスタム定義関数マネージャ」・ウィンドウで、関数を選んで「削除」をクリックします。
- 4 確認のメッセージで「はい」をクリックします。

Essbase で関数が Essbase サーバーから削除されます。

- 5 この関数に関連付けられているすべてのアプリケーションを再起動します。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の編集」](#)

関連コマンド

drop function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義マクロの表示

既存のカスタム定義マクロを表示して、マクロが正常に作成されているかどうかを確認したり、カスタム定義マクロがローカルかグローバルかを確認したりできます。

▶ カスタム定義マクロを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「マクロ」を選択します。

カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウに既存のマクロが表示されます。このウィンドウで、マクロを**作成**、**編集**、**名前変更**または**削除**できます。

関連情報

- [549 ページの「カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウ」](#)
- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [381 ページの「カスタム定義マクロの編集」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロの使用」](#)

関連コマンド

display macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義マクロの作成

Essbase の計算機のフレームワークで使用するカスタム定義計算マクロを作成できます。マクロを作成する際は、マクロのスコープ、構文規則、拡張指示およびその他のオプション情報を指定します。

注： カスタム定義マクロは、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

▶ カスタム定義マクロを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。

- 2 右クリックして「作成」>「関数」を選択します。
- 3 「新規マクロ」ダイアログ・ボックスのフィールドで、情報を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

Essbase によってマクロが登録され、カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウに表示されます。Essbase のネイティブの計算関数と同じように、このマクロを使用できます。

関連情報

- [648 ページの「新しいマクロ」ダイアログ・ボックス](#)
- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロの使用」](#)
- [383 ページの「カスタム定義マクロの削除」](#)

関連コマンド

create macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義マクロの編集

カスタム定義マクロを編集できます。ローカル(アプリケーション・レベル)のマクロを編集するには、少なくともアプリケーション・マネージャ権限が必要です。また、グローバル(サーバー・レベル)のマクロを編集するには、管理者権限が必要です。

▶ カスタム定義マクロを編集するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「マクロ」を選択します。
- 3 「カスタム定義マクロ・マネージャ」・ウィンドウで、マクロを選択して「編集」をクリックします。
- 4 「マクロの編集」ダイアログ・ボックスで、1 つ以上のフィールドを編集します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase でマクロが更新されます。

関連情報

- [597 ページの「マクロの編集」ダイアログ・ボックス](#)
- [カスタム定義の関数とマクロについて](#)
- [カスタム定義マクロの作成](#)

関連コマンド

create macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義マクロの使用

カスタム定義マクロは、Essbase のネイティブの計算関数と同じように、計算スクリプトおよび式で使用できます。ローカル・レベル(アプリケーション)で作成したマクロは、そのアプリケーションに関連付けられた計算スクリプトおよび式でのみ使用できます。グローバル・レベル(Essbase サーバー)で作成したマクロは、その Essbase サーバー上のすべての計算スクリプトおよび式で使用できます。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの作成」](#)
- [355 ページの「計算スクリプトについて」](#)

カスタム定義マクロのコピー

カスタム定義マクロは、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバーおよびアプリケーションにコピーできます。また、アプリケーションを移行する処理の一環として、サーバー間でカスタム定義マクロをコピーすることも可能です。[641 ページの「移行ウィザード」](#)を参照してください。

▶ カスタム定義マクロをコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「マクロ」を選択します。
- 3 「カスタム定義マクロ・マネージャ」・ウィンドウで、1 つ以上のマクロを選択して「コピー」をクリックします。
- 4 「すべてのマクロのコピー」ダイアログ・ボックスで、マクロのコピー先の Essbase サーバーとアプリケーションを選択します。
- 5 オプション: コピーするマクロと同じ名前を持つマクロを置き換えるする場合は、「既存のマクロの上書き」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [520 ページの「すべてのマクロのコピー」ダイアログ・ボックス」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの作成」](#)

関連コマンド

create macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義マクロの名前変更

▶ カスタム定義マクロの名前を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「マクロ」を選択します。
- 3 「カスタム定義マクロ・マネージャ」・ウィンドウで、マクロを選択して「名前変更」をクリックします。
- 4 「マクロの名前変更」ダイアログ・ボックスで、マクロの新しい名前を入力します。

『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の命名ルールを参照してください。

- 5 **オプション:** 名前変更後のマクロと同じ名前を持つ既存のマクロを上書きする場合は、「既存のマクロの上書き(0)」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

Essbase ではマクロの名前が変更され、エンタープライズ・ビューが更新されます。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [675 ページの「マクロの名前変更」ダイアログ・ボックス](#)

関連コマンド

create macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義マクロの削除

管理者権限を持っているユーザーは、グローバル(サーバー)のレベルで定義されたカスタム定義マクロを削除できます。特定のアプリケーションについてアプリケーション・マネージャ権限を持っているユーザーは、そのアプリケーションに対して定義されているカスタム定義マクロを削除できます。

ローカル(アプリケーション・レベル)のマクロを削除する場合は、そのマクロが関連付けられている Essbase アプリケーションを再起動する必要があります。グローバル(サーバー・レベル)のマクロを削除する場合は、サーバーで実行中のすべての Essbase アプリケーションを再起動する必要があります。アプリケーションを再起動すると、マクロのカタログがリフレッシュされます。

マクロを削除する前に、そのマクロを使用中の計算スクリプトや式がないことを確認してください。

注意 グローバルのカスタム定義マクロの削除は、Essbase データベースにアクセスしているユーザーがおらず、計算が実行中でないときにのみ行ってください。

▶ カスタム定義マクロを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase サーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「マクロ」を選択します。
- 3 「カスタム定義マクロ・マネージャ」・ウィンドウで、マクロを選択して「削除」をクリックします。
- 4 確認のメッセージで「はい」をクリックします。
Essbase でマクロが Essbase サーバーから削除されます。
- 5 このマクロに関連付けられているすべてのアプリケーションを再起動します。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの作成」](#)
- [381 ページの「カスタム定義マクロの編集」](#)

関連コマンド

drop macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

計算の最適化

ここには次のトピックがあります:

- [384 ページの「デフォルト計算における 2 パスの使用」](#)
- [385 ページの「計算時の欠落した値の集約」](#)
- [386 ページの「インテリジェント計算について」](#)

デフォルト計算における 2 パスの使用

データベース・マネージャ権限を持っているデータベースについては、2 パス計算を有効にできます。Essbase で 2 パス計算を有効にすると、2 回目の計算パスで、他のメンバーの計算値に依存しているメンバーが再計算されます。

注: この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

この機能は、デフォルトで有効になっています。2 パスの設定を変更した場合、変更内容は「適用」をクリックするとすぐに有効になります。

▶ 2 パス計算を有効にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。

- 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「計算」ノードを展開します。
- 5 「2パス計算」を選択します。
- 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [570 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ](#)
- 2パス計算の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 計算順序の定義(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

計算時の欠落した値の集約

Essbase のデフォルトでは、データベースの完全計算時に欠落した値(#Missing 値)は集約されません。データを親レベルにロードしない場合は、欠落した値を集約することにより計算のパフォーマンスが改善されることがあります。データベース・マネージャの権限を持つデータベースでは、欠落した値を集約するかどうかを選択できます。この選択内容は、「適用」をクリックするとすぐに有効になります。

注： この機能は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

- ▶ データベース計算時に欠落した値を集約するように選択するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
 - 4 「計算」ノードを展開します。
 - 5 「欠落した値の集約」を選択します。
 - 6 「適用」をクリックします。

関連情報

- [570 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ](#)
- #MISSING 値の集計(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [352 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの計算](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

インテリジェント計算について

データベースの完全計算を行うと、Essbase では計算済のデータブロックが特定されます。完全計算を実行してから、データのサブセットをロードすると仮定します。計算が必要なデータ・ブロックとまだ計算が済んでいないブロックのみを対象にして以降の計算を行うことが可能です。Essbase では、この機能を高機能計算と呼んでいます。

注： 高機能計算は、集約ストレージ・データベースには適用されません。

高機能計算は、デフォルトで有効になっています。デフォルト設定は、`essbase.cfg` ファイルの `UPDATECALC` 設定を使用して変更できます。また、計算スクリプト内で高機能計算を使用可能にしたり無効化したりできます。

関連情報

- 高機能計算による最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [352 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの計算」](#)

この章の内容

レポート・スクリプトについて	387
レポート・スクリプト・エディタについて	388
レポート・スクリプト構文のガイドラインについて.....	389
編集集中の Essbase オブジェクトへのアウトラインの関連付け.....	389
レポート・スクリプトの実行	390
レポートの保存	391
レポート・スクリプトのトラブルシューティングと最適化	392

レポート・スクリプトについて

レポート・スクリプトにより、データベースに関してフォーマットされたデータ・レポートが生成されます。[レポート・スクリプト・エディタ](#)を使用すると、データのレポート方法を正確に指定したレポート・スクリプトを作成できます。レポート・スクリプトは、レイアウト、メンバー選択、およびレポートのフォーマットを定義した一連の Essbase レポート・コマンドで構成されます。

レポート・スクリプトのコンテンツをレポート・スクリプト・エディタのテキスト領域に直接入力することもできますし、スクリプト・エディタのユーザー・インタフェース機能を使用してスクリプトを構築することもできます。レポート・スクリプトはテキスト・ファイルです。任意のテキスト・エディタでレポート・スクリプトを作成して、それをレポート・スクリプト・エディタに貼り付けるという操作方法も可能です。

レポート・スクリプトは、特定のデータベースあるいはアプリケーション内のすべてのデータベースに関連付けられます。エンタープライズ・ビューでは、少なくとも1つのスクリプトを含んでいる各アプリケーションおよびデータベースの下にレポート・スクリプトのコンテナ・ノードが表示されます。アプリケーションやデータベースにスクリプトが定義されていない場合は、コンテナ・ノードは表示されません。レポート・スクリプトには、デフォルトで拡張子`.rep`が付けられます。管理サービス・コンソールから表示および実行できるのは、拡張子が`.rep`のレポート・スクリプトのみです。

レポート・スクリプトの作成に関する詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。レポート・コマンドの詳細は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

関連情報

- [388 ページの「レポート・スクリプト・エディタについて」](#)

- レポート・スクリプトの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- レポートおよび他の取得機能の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

レポート・スクリプト・エディタについて

レポート・スクリプト・エディタを使用すると、何ページにもわたって多次元データが記載された大規模なレポートを生成するスクリプトを作成できます。このような大規模なレポートは、最も堅牢なスプレッドシートでも処理しきれないことがあります。レポート・スクリプト・エディタでは、レポート・コマンドを使用して、フォーマットしたレポートを定義し、データベースからデータのサブセットをエクスポートして、フリーフォーム・レポートを作成します。その後、スクリプトを実行してレポートを生成できます。

レポート・スクリプト・エディタには、テキスト編集ウィンドウ、カスタマイズされた右クリック・メニュー、ツールバー、およびメッセージ・ペインが備えられています。エディタ内では、次の操作を実行できます:

- [アウトラインとスクリプトの関連付け](#)
- [アウトライン・ツリーでのメンバーの検索](#)
- [アウトライン・ツリーからスクリプトへのメンバーの挿入](#)
- [スクリプトへの関数およびコマンドの挿入](#)
- [構文のオートコンプリート機能の使用](#)
- [スクリプトの構文チェック](#)
- [スクリプトの実行](#)
- [スクリプト要素の色分けとカスタマイズ](#)
- [スクリプト内のテキストの検索](#)
- [スクリプトのコンテンツの消去](#)

レポート・スクリプト・エディタを開くには、[既存のスクリプトを開く](#)か、[新規スクリプトを作成](#)します。

既存のレポート・スクリプトを開く場合は、[360 ページの「スクリプトを開く」](#)を参照してください。

関連情報

- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)
- [360 ページの「スクリプトを開く」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)
- [366 ページの「スクリプトの保存」](#)

レポート・スクリプト構文のガイドラインについて

レポート・スクリプトを作成するときは、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』に記載されているレポート・スクリプト構文のガイドラインに従う必要があります。また、スクリプトで使用する各レポート・コマンドでも正しい構文を使用する必要があります。

関連情報

- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [388 ページの「レポート・スクリプト・エディタについて」](#)
- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)

編集中の Essbase オブジェクトへのアウトラインの関連付け

計算スクリプト、ルール・ファイル、またはフィルタなどの Essbase オブジェクトを編集する場合、オブジェクトをデータベース・アウトラインに関連付けられます。この関連付けによりアウトラインの次元およびメンバー名がエディタに取り込まれるので、次元およびメンバーを選択でき、手動で次元およびメンバー名を入力する必要がありません。

計算スクリプト、レポート・スクリプト、またはフィルタに関連付けられているアウトラインは、エディタ・ウィンドウの左上のペインにツリー・ビューで表示されます。ルール・ファイルに関連付けられているアウトラインの場合、次元およびメンバー名はデータ準備エディタのダイアログ・ボックスに表示されます。デフォルトでは、エンタープライズ・ビューからオブジェクトを開くと、オブジェクトが関連付けられているデータベース・アウトラインが適切なエディタに取り込まれます。アウトラインの関連付けについてのデフォルトの動作は変更できません。[102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)を参照してください。

Essbase では、オブジェクトの編集にのみアウトラインとオブジェクトの関連付けを実行できます。エディタ・ウィンドウを閉じると関連付けが取り消されます。

▶ オブジェクトを編集にデータベース・アウトラインに関連付ける手順は、次のとおりです：

- 1 **スクリプト、ルール・ファイル**または**フィルタ**を作成します。
- 2 「オプション」>「アウトラインの関連付け」を選択します。
- 3 「アウトラインの関連付け」ダイアログ・ボックスで、オブジェクトに関連付けるアウトラインが含まれているデータベースに移動します。
- 4 データベースを選択して「OK」をクリックします。

スクリプト・エディタで、アウトライン・ツリーから、[メンバーを検索](#)したり、[次元およびメンバーを挿入](#)できます。データ準備エディタでは、ダイアログ・ボックスから次元およびメンバーを選択できます。

関連情報

- [515 ページの「アウトラインの関連付け」ダイアログ・ボックス](#)
- [195 ページの「エディタでのメンバーの検索」](#)
- [363 ページの「スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」](#)

レポート・スクリプトの実行

レポート・スクリプトを作成して保存した後は、レポートを生成するためにスクリプトを実行する必要があります。レポート・スクリプトを実行する前に構文をチェックするには、レポート・スクリプト・エディタでスクリプトを開き、「構文チェック」ボタンをクリックします。

レポート・スクリプトが処理されている間にコンソールで作業を行うには、レポート・スクリプトをバックグラウンドで実行します。レポート・スクリプトをバックグラウンドで実行するときは、[バックグラウンド・プロセスのステータス](#)・ウィンドウでそのステータスをチェックし、生成されたレポートを表示できます。

注： WIDTH コマンドが組み込まれているレポート・スクリプトを実行すると、Administration Services では列の幅が 1 文字短く設定され、列に収まらない文字は切り捨てられます。たとえば、WIDTH が 7 であるスクリプトでは、表示される列の幅が 6 に設定されます。ユーザーはスクリプトを編集して調整する必要があります。これは既知の問題です。

Essbase でレポート・スクリプトを常にバックグラウンドで実行するように指定したり、実行するたびにプロンプトが表示されるように指定したりできます。詳細は、[102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)を参照してください。

▶ レポート・スクリプトを実行するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューでレポート・スクリプトを選択して右クリックし、「実行」を選択します。
- スクリプトを[開く](#)または[作成](#)し、「実行」ボタンをクリックします。

Essbase で「レポート・スクリプトの実行」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 ファイル・システムに保存されたスクリプト、またはデータベース・レベルではなくアプリケーション・レベルで保存されたスクリプトを実行する場合は、レポート・スクリプトの実行対象となるデータベースを選択します。
- 3 バックグラウンドでレポート・スクリプトを実行するには、「バックグラウンドで実行」を選択します。
- 4 レポートの宛先を 1 つまたは複数選択します(コンソール、プリンタ、ファイル)。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase では、適切なデータベースに対してレポート・スクリプトが実行されます。コンソール・ウィンドウの一番下にあるメッセージ・ペインに、エラーおよびステータスのメッセージが表示されます。レポートは選択された出力先に送られます。

レポート・スクリプトをバックグラウンドで実行する場合は、プロセスの ID が表示されます。この ID を使用して、プロセスのステータスを追跡できます。プロセスが完了すると、バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウからレポートを表示できます。

関連情報

- [602 ページの「レポート・スクリプトの実行」ダイアログ・ボックス](#)
- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [391 ページの「レポートの保存」](#)
- [389 ページの「レポート・スクリプト構文のガイドラインについて」](#)
- [326 ページの「バックグラウンド・プロセスのステータスの確認」](#)
- [679 ページの「レポート・ビューア・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `export database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `runreport(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

レポートの保存

レポート・ビューア・ウィンドウから別の場所にレポートを保存できます。レポートは、拡張子が `.rpt` のテキスト・ファイルとして保存され、生成元のアプリケーションと同じエンコード方式を持ちます。

レポート・スクリプトを実行する際に、ファイルに直接レポートを送信することもできます。

▶ レポートをファイルに保存するには:

- 1 **レポートを実行し**、出力先として「コンソール」を選択します。
レポート・ビューアにレポートが表示されます。
- 2 「レポート・ビューア」・ウィンドウで、「ファイル」>「名前を付けて保存」を選択します。
- 3 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、レポートを保存するドライブとフォルダに移動します。
- 4 「ファイル名」テキスト・ボックスに、ファイルの名前を入力します。
レポートには、デフォルトで `.rpt` の拡張子が付けられます。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase では指定された場所にレポートが保存されます。

- 6 保存されたレポートを管理サービス・コンソールで開くには、「ファイル」>「開く」を選択し、ファイルに移動します。

関連情報

- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)
- [43 ページの「管理サービス・コンソールのウィンドウの印刷」](#)
- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)
- [357 ページの「ファイルの命名」](#)

レポート・スクリプトのトラブルシューティングと最適化

管理サービス・コンソールには、レポート・スクリプトのエラーのトラブルシューティングに役立つメッセージ・ペインが用意されています。スクリプトの構文を[チェック](#)したりスクリプトを実行した際のエラーがこのペインに表示されます。

エラーが発生した行番号がエラー・メッセージに含まれている場合は、スクリプトで右クリックし「行に移動」を選択すると、その行に直接移動できます。Essbaseのエラー・メッセージ番号がエラー・メッセージに含まれている場合は、この番号を使用してエラーに関する情報や解決策を調べられます。エラー・メッセージ番号を調べるには、『Oracle Essbase エラー・メッセージ・リファレンス』を参照してください。

レポート・スクリプトの構文、コマンド、レポートの最適化、ガイドラインおよびレポート・コマンドの例については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [388 ページの「レポート・スクリプト・エディタについて」](#)

この章の内容

リンク・レポート・オブジェクト(LRO)について.....	393
LRO の管理.....	394
LRO のエクスポート.....	395
LRO のインポート.....	396
LRO ファイル・サイズの制限.....	397

リンク・レポート・オブジェクト(LRO)について

関連情報

- 394 ページの「LRO の管理」
- 395 ページの「LRO のエクスポート」
- 396 ページの「LRO のインポート」
- 397 ページの「LRO ファイル・サイズの制限」
- 626 ページの「リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウ」

リンク・レポート・オブジェクト(LRO)とは、Essbase データベースの特定のデータ・セルに関連付けるオブジェクトのことです;たとえば、セルの値をより詳しく説明するグラフィック・ファイルなどを LRO として関連付けます。LRO を使用すると、データの補足情報を追加できるので、プランニング・アプリケーションやレポート・アプリケーションのサポートが向上し、データ分析機能が強化されます。LRO として指定できるのは、リンク・ファイル、簡単なセル・ノート、または URL です。各タイプの LRO に関する詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

LRO を作成するには、Spreadsheet Add-in または Oracle Hyperion Smart View for Office を使用して、スプレッドシートのデータ・セルを選択し、そのセルに LRO を添付します。1つのセルにリンクできるオブジェクトの数に制限はありません。オブジェクトは Essbase サーバーに保管され、適切な権限を持つユーザーが使用できます。ユーザーによる LRO の操作の詳細は、『Oracle Essbase Spreadsheet Add-in ユーザー・ガイド』および『Oracle Hyperion Smart View for Office ユーザー・ガイド』を参照してください。既存の LRO は、コンソールを使用して管理できます。

LRO に関連するタスクを実行する際は、次のことに注意してください:

- Essbase は、データベース・インデックスを使用して LRO を検索し、取得します。データベースからデータを削除すると、LRO 情報とともにインデックスも削除されます。データベースから LRO 情報を削除する操作を実行する前に、後で再インポートできるように LRO をエクスポートしてください。詳細は、[395 ページの「LRO のエクスポート」](#)と[396 ページの「LRO のインポート」](#)を参照してください。
- データベースの再構築では、インデックスと LRO 情報は保持されます。
- 移行ウィザードを使用してサーバー間でアプリケーションやデータベースを移行する場合、LRO はそのアプリケーションやデータベースとは移行されません。移行の前に LRO をエクスポートし、移行後に LRO をインポートする必要があります。
- 共有メンバーは LRO を共有しません。LRO は、メンバーの特定の組合せに対してリンクされ、共有メンバーのメンバーの組合せは同一ではありません。共有メンバーに特定の LRO をリンクする場合は、各共有メンバーに LRO を個別にリンクする必要があります。

LRO の管理

データベースの既存のリンク・レポート・オブジェクト(LRO)は、表示、編集、および削除できます。LRO を表示する際は、ユーザー名、最終変更日付などの選択条件に基づいてフィルタを設定できます。たとえば、特定の日付よりも前のオブジェクトを表示したり、特定のユーザーのオブジェクトを表示したりすることが可能です。

LRO の管理に必要な権限の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウから、リンク・パーティションに変更を加えることはできません。リンク・パーティションの作成と変更については、[423 ページの「パーティションの作成」](#)を参照してください。

注： リンク・レポート・オブジェクトは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

▶ データベースの LRO を管理するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「リンク・レポート・オブジェクト」ノードをダブルクリックします。
- 3 「リンク・レポート・オブジェクト」・ウィンドウで、表示する LRO のフィルタ条件を指定します。

デフォルトでは、現在の日付またはそれ以前に変更されたすべての LRO がウィンドウに表示されます。

- 4 次のいずれかのアクションを行います:

- LRO の内容を表示する場合は、目的の行を選択して「表示」をクリックします。
- LRO を編集するには、目的の行を選択して「編集」をクリックします。
- Essbase サーバーから LRO を削除するには、目的の行を選択して「削除」をクリックします。
- LRO をすべて削除するには、エンタープライズ・ビューの「リンク・レポート・オブジェクト」ノードに戻って右クリックし、「すべてのリンク・レポート・オブジェクトを削除」を選択します。

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [395 ページの「LRO のエクスポート」](#)
- [396 ページの「LRO のインポート」](#)
- [397 ページの「LRO ファイル・サイズの制限」](#)
- [626 ページの「リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- drop object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listlinkedobjects(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- purgelinkedobjects(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

LRO のエクスポート

リンク・レポート・オブジェクト(LRO)は、データをバックアップしたり消去したりする場合に備えて、エクスポートして保管できます。データベースからデータを消去するときに、LRO は保存されません。また、バックアップからデータベースを復元しても LRO は復元されません。LRO をエクスポートするには、データベースの読取り権限が必要です。

LRO をエクスポートする際は、LRO 情報のエクスポート先ディレクトリを指定します。LRO のエクスポート先ディレクトリには、次のものが格納されます:

- 拡張子が .exp のテキスト・ファイル(このファイルには、LRO ファイルの場所、セル・ノートと URL のテキスト、および正しいデータ・ブロックにインポートするために使用するデータベース・インデックスの場所が含まれます)
- LRO バイナリ・ファイル(LRO のエクスポート元のデータベースに、ファイル・タイプの LRO が含まれていた場合)

エクスポートした LRO は、別のデータベースに[インポート](#)できます。

▶ LRO をエクスポートするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「リンク・レポート・オブジェクト」を右クリックし、「リンク・レポート・オブジェクトのエクスポート」を選択します。
Essbase で「LRO のエクスポート」ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3 次のいずれかのアクションを行います:
 - Essbase サーバー上のディレクトリに LRO をエクスポートするには:
 1. 「Essbase サーバー」を選択します。
 2. 「LRO エクスポート・ディレクトリ」で、LRO 情報をエクスポートするサーバー上のディレクトリを指定します。
 - クライアント・コンピュータまたはネットワーク上のディレクトリに LRO をエクスポートするには:
 1. 「ローカル・ファイル・システム」を選択します。
 2. 「LRO エクスポート・ディレクトリ」で、エクスポート先のディレクトリまでの完全パスを指定するか、ディレクトリを参照して、「開く」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [605 ページの「LRO のエクスポート」ダイアログ・ボックス](#)
- [LRO のインポート](#)
- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)

関連コマンド

- `export lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `import lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

LRO のインポート

データベースをバックアップまたは消去した後で、リンク・レポート・オブジェクト(LRO)を復元するには、そのデータベースからあらかじめエクスポートしておいた LRO をインポートします。LRO をインポートするには、そのデータベースの書込み権限が必要です。

LRO をインポートする際は、インポートする LRO 情報が格納されているディレクトリを指定します。このディレクトリは、以前に行ったエクスポート処理で作成されたものです。このエクスポート・ディレクトリには、LRO のカタログ情報が記録されている .exp ファイルと、個別の付属 LRO ファイルが含まれています。

▶ データベースに LRO をインポートするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「リンク・レポート・オブジェクト」を右クリックし、「リンク・レポート・オブジェクトのインポート」を選択します。

Essbase では「LRO のインポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。

3 次のいずれかのアクションを行います:

- ローカル・コンピュータまたはネットワーク上のディレクトリから LRO をインポートするには:
 - 1 「ローカル・ファイル・システムのディレクトリ」を選択します。
 - 2 テキスト・ボックスで、インポート元となるディレクトリへの完全パスを指定するか、ディレクトリを参照します。
- Essbase サーバー上のディレクトリから LRO をインポートするには:
 - 1 「Essbase サーバーのディレクトリ」を選択します。

注: このオプションは、Essbase サーバー上にエクスポート・ディレクトリが検出された場合にのみ使用できます。

- 2 「Essbase サーバーのディレクトリ」で、LRO 情報のインポート元となるサーバー上のディレクトリを選択します。
 - 3 インポートが完了した後でエクスポート・ディレクトリを削除するには、「インポート後にサーバーの LRO ディレクトリを削除します。」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

関連情報

- [624 ページの「「LRO のインポート」ダイアログ・ボックス」](#)
- [395 ページの「LRO のエクスポート」](#)
- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)

関連コマンド

- `export lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `import lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

LRO ファイル・サイズの制限

Essbase では、リンク・レポート・オブジェクト(LRO)ファイルは、Essbase サーバーに保管されます。非常に大きなファイルがサーバーに保管されるのを防ぐために、データ・セルにリンクできるファイルのサイズを制限できます。アプリケーション・マネージャ権限を持っている場合は、アプリケーションについて LRO

ファイルの最大サイズを設定できます。指定された制限より大きいサイズのファイルをユーザーがリンクしようとする、エラー・メッセージが戻されます。

ファイルの最大サイズは、リンク・ファイルにのみ適用されます;セル・ノートや URL には影響しません。非常に小さなファイル以外はリンクできないようにする場合は、1 を入力します。この設定により、セル・ノート、URL、および 1KB 未満のファイル以外は、リンクできないようになります。

▶ アプリケーションについて LRO ファイルの最大サイズを指定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のアプリケーションを選択します。
- 2 右クリックして「プロパティの編集」を選択します。
- 3 「アプリケーション・プロパティ」・ウィンドウで、「一般」タブを選択します。
- 4 「添付ファイルの最大サイズ」オプションには、LRO ファイルの最大サイズ用に KB 単位で値を入力します。
- 5 「適用」をクリックして、設定を適用します。

関連情報

- [505 ページの「アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ」](#)
- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)
- [395 ページの「LRO のエクスポート」](#)
- [396 ページの「LRO のインポート」](#)

関連コマンド

- `alter application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

MaxL スクリプトについて	399
MaxL スクリプト・エディタについて	400
MaxL シェルの使用	401
MaxL および MDX スクリプトの作成	402
MaxL および MDX スクリプトを開く	403
MaxL および MDX 構文のガイドライン	403
MaxL および MDX スクリプト・エディタから Essbase サーバーへの接続	404
MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用	405
MaxL および MDX スクリプトへのコメントの追加	406
MaxL および MDX スクリプトでの変数の定義	407
未定義変数の解決	408
MaxL スクリプトでのファイルの参照	409
MaxL および MDX スクリプトの展開	409
MaxL および MDX スクリプト・エディタの消去	410
MaxL および MDX スクリプトの保存	410
MaxL および MDX の実行オプションの設定	412
MaxL および MDX スクリプトの実行	412
MaxL および MDX の実行結果の表示	413
MaxL および MDX の実行結果の保存	414
MaxL および MDX スクリプトのコピー	415
MaxL および MDX スクリプトの名前変更	415
MaxL および MDX スクリプトの削除	415
MaxL および MDX スクリプトとその実行結果の印刷	415

MaxL スクリプトについて

関連情報

- 400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」
- 401 ページの「MaxL シェルの使用」
- MaxL データ定義言語の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- MaxL DDL ステートメント

MaxL は、Essbase サーバーのための多次元データベース定義言語(DDL)です。MaxL を使用すると、Essbase サーバーでの管理操作やクエリー操作を簡単に自動化できます。

MaxL スクリプトは、ログイン・ステートメントと一連の MaxL ステートメントで構成されます。それぞれのステートメントはセミコロンで終わります。MaxL スクリプト・エディタでスクリプトを実行する場合、ログイン・ステートメントはなくてもかまいません; 接続する Essbase サーバーはエディタから選択できます。ほとんどの MaxL ステートメントは動詞で始まり、その後で一連のキーワードや変数が文法に従って並べられます。MaxL スクリプト・エディタでは、MaxL 構文の要素は [色分け](#) されます。また、ステートメントを簡単に入力できるように [オートコンプリート機能](#) も用意されています。MaxL 構文の詳細は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の MaxL の項を参照してください。

MaxL スクリプトは、MaxL スクリプト・エディタまたは通常のテキスト・エディタで作成できます。MaxL スクリプト・エディタでは、既存のスクリプトを開いて変更したり、実行したりすることが可能です。MaxL スクリプトは、Essbase オブジェクトとして Essbase サーバーに保存することはできません; このため、MaxL スクリプトはエンタープライズ・ビューには表示されません。ただし、中間層の Essbase 管理サーバーに保存すると、他のユーザーが MaxL スクリプトにアクセスできるようになります。また、クライアント・コンピュータやネットワーク上にテキスト・ファイルとして MaxL スクリプトを保存することも可能です。これらのファイルは、MaxL スクリプト・エディタで開いて管理できます。手順は、[410 ページの「MaxL および MDX スクリプトの保存」](#)を参照してください。

MaxL ステートメントは、MaxL スクリプトを保存しなくても実行できます。MaxL スクリプト・エディタで対話的に MaxL ステートメントを入力、実行、消去して、1 つ以上の操作を同時に実行できます。

MaxL スクリプト・エディタについて

コンソールのメニュー・バーから MaxL スクリプト・エディタを開くには、「ファイル」>「エディタ」>「MaxL スクリプト・エディタ」を選択します。

既存の MaxL スクリプトを開く場合は、[403 ページの「MaxL および MDX スクリプトを開く」](#)を参照してください。

MaxL スクリプト・エディタには、テキスト編集ウィンドウ、カスタマイズされたメニュー、ツールバー、ショートカット・メニュー、MaxL 構文の色分け機能とオートコンプリート機能および出力ペインが用意されています。このエディタは、ユーザーの好みにあわせてカスタマイズできます。

MaxL スクリプト・エディタでは、既存の MaxL スクリプトを開くことが可能です。MaxL スクリプトには任意の名前を付けられます。ただし、MaxL スクリプト・エディタで MaxL スクリプトを開くには、拡張子を .mx1 または .msh にする必要があります。MaxL スクリプト・エディタで作成して保存したスクリプトには、デフォルトで .mx1 の拡張子が付けられます。拡張子が .mx1 または .msh 以外のファイル(.txt ファイルなど)を使用する場合は、[そのファイルを参照](#)してください。

MaxL スクリプト・エディタで既存のスクリプトを開いて実行するために、スクリプトを変更する必要はありません。エディタは、login、logout、spool、echo コマ

ンドなどの MaxL シェル構文を認識します。set、shell、version、および exit の MaxL シェル・コマンドはエディタ自体の機能に組み込まれているため、スクリプトの実行時には無視されます。

Essbase サーバーへの接続処理や、ログインおよびログアウト・コマンドの使用方は、[404 ページの「MaxL および MDX スクリプト・エディタから Essbase サーバーへの接続」](#)を参照してください。

MaxL スクリプト・エディタでは、MaxL に関する次のタスクを実行できます：

- MaxL スクリプトを**作成、編集、保存、実行**し、Essbase 管理タスクを自動化する。
- 対話式に MaxL ステートメントを**入力、実行**および**消去**し、一度に 1 つ以上の Essbase 操作を実行する。
- **オートコンプリート**機能を使用すると、MaxL ステートメントをすばやく構築できる。
- 構文要素の強調表示に使用する**色分けをカスタマイズ**する。
- **変数の定義**および**更新**を行う。
- スクリプトで実行する**ファイル**を**参照**する。
- **スクリプト**を展開して、変数の値や参照ファイルの内容を表示する。
- スクリプトの実行結果を**表示、保存**および**印刷**する。

関連情報

- [399 ページの「MaxL スクリプトについて」](#)
- MaxL データ定義言語の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- MaxL DDL ステートメント

MaxL シェルの使用

MaxL シェルを使用すると、MaxL ステートメントを Essbase サーバーに渡すことが可能です。MaxL シェルのコマンドライン・インタフェースは、Essbase 管理サーバーとともに次の場所にインストールされます：

EAS_HOME\server\bin\essmsh.exe (UNIX の場合は EAS_HOME/server/bin/essmsh)

EAS_HOME は Administration Services がインストールされているディレクトリです。

また、MaxL シェルも Essbase サーバーとともにインストールされます。MaxL シェルの使用に関する詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： MaxL シェルの起動には、essmsh.exe を直接に起動するのではなく、Essbase クライアントから起動することをお勧めします。

MaxL および MDX スクリプトの作成

MaxL スクリプトは MaxL スクリプト・エディタで作成し、MDX スクリプトは MDX スクリプト・エディタで作成できます。また、エディタを使用すると、スクリプトを実行する Essbase サーバーの選択、変数の定義と更新、スクリプトで実行する他のファイルの参照を実行でき、さらにスクリプトを展開して変数の値や参照ファイルのコンテンツを表示できます。

▶ MaxL または MDX スクリプトを作成するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- MaxL スクリプトを作成するには、「ファイル」>「エディタ」>「MaxL スクリプト・エディタ」を選択します。
- MDX スクリプトを作成するには、「ファイル」>「エディタ」>「MDX スクリプト・エディタ」を選択します。

2 スクリプト・エディタ・ウィンドウのタイトル・バーから、スクリプトのステートメントを実行する Essbase サーバーを選択します。

MaxL および MDX スクリプト・エディタから Essbase サーバーへの接続を参照してください。

3 スクリプトのコンテンツを入力します。必要に応じて、オートコンプリート機能を使用します。

スクリプトのコンテンツは、エディタで対話的に入力、実行、および消去を行う個別のステートメントである場合があります。ステートメントは、スクリプトを保存しなくても実行できます。

4 オプション:

- 現在のスクリプトで使用する [参照外部ファイル](#)
- [変数の定義および更新](#)
- 変数の値と参照ファイルの内容を表示する [スクリプトの展開](#)
- [色分けの設定の変更](#)

5 スクリプトを保存または実行するか、保存して実行します。

関連情報

- [399 ページの「MaxL スクリプトについて」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [417 ページの「MDX スクリプトについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [403 ページの「MaxL および MDX スクリプトを開く」](#)

MaxL および MDX スクリプトを開く

既存の MaxL スクリプトや MDX スクリプトは、対応するスクリプト・エディタで開き、編集し、実行できます。スクリプト・エディタで既存のスクリプトを実行するために、スクリプトを変更する必要はありません。

MaxL スクリプト・エディタでは、拡張子が .mxl または .msh のファイルが認識されます。MDX スクリプト・エディタでは、拡張子が .mdx のファイルが認識されます。

MaxL および MDX スクリプトは Essbase サーバー・オブジェクトではないので、エンタープライズ・ビューから開くことはできません。開くことができるのは、クライアント・コンピュータやネットワーク上に保存されているスクリプト、または Essbase 管理サーバーに共有ファイルとして保存されているスクリプトです。[410 ページの「MaxL および MDX スクリプトの保存」](#)を参照してください。

▶ Essbase 管理サーバーに保存された MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトを開く手順は、次のとおりです:

- 1 「ファイル」>「開く」を選択します。
- 2 「開く」で、スクリプトの場所に移動します。

ファイルは、ファイル・システム、Essbase サーバー・マシン、または Essbase 管理サーバーから開くことが可能です。

- 3 スクリプトを選択して、「OK」をクリックします。

適切なスクリプト・エディタにスクリプトが表示されます。

関連情報

- [402 ページの「MaxL および MDX スクリプトの作成」](#)
- [399 ページの「MaxL スクリプトについて」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [417 ページの「MDX スクリプトについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)

MaxL および MDX 構文のガイドライン

MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタを使用してスクリプトを作成する際は、適切な構文規則に従う必要があります。

MaxL の構文については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の MaxL の項を参照してください。

MDX の構文については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の MDX の項を参照してください。

関連情報

- [399 ページの「MaxL スクリプトについて」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- MaxL データ定義言語の使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [417 ページの「MDX スクリプトについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- MDX クエリーの記述(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

MaxL および MDX スクリプト・エディタから Essbase サーバーへの接続

MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタを開くと、エンタープライズ・ビューに表示される Essbase サーバーが、ツールバーのドロップダウン・リストに表示されます。エディタで MaxL または MDX ステートメントを実行すると、ステートメントは、ドロップダウン・リストで選択した Essbase サーバーに対して実行されます。スクリプト・エディタを開いたときにその Essbase サーバーに接続されていない場合は、スクリプトの実行時に接続されます。接続は、ユーザーが切断するまでそのまま保持されます。

ドロップダウン・リストで選択した Essbase サーバーへのログイン・ステートメントが含まれている MaxL スクリプトを実行する場合、選択した Essbase サーバーへの接続がすでに確立されていれば、既存の接続が使用されます。まだ接続されていない場合は、接続が確立されます。スクリプトにログアウト・ステートメントが含まれていても、そのステートメントは無視され、接続は、ユーザーが切断するまでそのまま保持されます。

MaxL スクリプトの場合、複数の Essbase サーバーにステートメントを送る場合は、ドロップダウン・リストで Essbase サーバーを選択するとともに、MaxL のログイン・ステートメントとログアウト・ステートメントを使用できます。たとえば、MaxL スクリプト・エディタを開き、Essbase サーバーのドロップダウン・リストから Server1 を選択し、次のスクリプトを開いたと仮定します:

```
display application; login user1 'password' on Server2; display  
application; display database; logout; display database;
```

ステートメントは次のように実行されます:

1. 1 行目のステートメントが、Server1 で実行されます。
2. 2 行目のステートメントの情報(「login user1 'password' on Server2」)が、3 行目のステートメントとともに使用できるように保管されます。
3. 3 行目のステートメントが、2 行目のステートメントの接続情報とともに Server2 に送られます。接続が正常に確立された場合は、「display application」ステートメントが Server2 に対して実行されます。接続に失敗した場合は、エラーが戻されます。
4. 4 行目のステートメントが、2 行目のステートメントの接続情報とともに Server2 に送られます。接続が正常に確立された場合は、「display database」ステートメ

ントが Server2 に対して実行されます。接続に失敗した場合は、エラーが戻されます。

5. 保管されていた、2 行目のステートメントの接続情報が削除されます。
6. 最終行のステートメントが、Server1 で実行されます。

注： ログイン・ステートメント自体がただちに Essbase サーバーとの接続を確立するわけではありません。ログイン・ステートメントが発生した場合、後続のステートメントで使用できるよう、そのステートメントに含まれている接続情報が MaxL スクリプト・エディタに保管されます。そのため、ログイン・ステートメントには不正なパスワードなどの無効な情報が含まれていても、次のステートメントが発生するまでエラーを戻しません。また、先行するログイン・ステートメントがないログアウト・ステートメントはエディタで無視されます。ログアウト・ステートメント自体は、Essbase サーバーからユーザーを切断することはありません。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [86 ページの「Essbase の接続とポートについて」](#)
- [412 ページの「MaxL および MDX スクリプトの実行」](#)

MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用

MaxL スクリプト・エディタおよび MDX スクリプト・エディタにはオートコンプリート機能が用意されており、入力時に対話的に MaxL および MDX ステートメントを構築できます。エディタでテキストを入力し始めると、キーワードの候補がリストに表示されます。目的のキーワードを選択して[Space]キーを押すと、その次のドロップダウン・リストが表示されます。

たとえば、MaxL スクリプト・エディタのスクリプト領域に「d」と入力すると、MaxL キーワードの候補である `display` と `drop` がリストに表示され、選択できるようになります。`display` を選択し、[Enter]を押してから[Space]キーを押すと、`display` の後に使用するキーワードの候補(application など)がリストに表示され、選択できるようになります。`application` を選択し、[Enter]を押してから[Space]キーを押すと、`display application` で使用する値の候補(Essbase サーバー上のすべてのアプリケーション)がリストに表示され、選択できるようになります。

MaxL スクリプトについては、オートコンプリート機能で GUI ヘルプを使用するように設定することもできます。オートコンプリートの GUI ヘルプを有効にすると、MaxL スクリプト・エディタで MaxL ステートメントを入力しているときに、そのステートメントに対応した GUI コンポーネントが起動されるようになります。たとえば、「create filter」ステートメントを入力すると、MaxL スクリプト・エディタによってフィルタ・エディタが起動し、フィルタを作成するステートメントを GUI 環境で作成できるようになります。

関連情報

- 「オプション」ダイアログ - 「MaxL スクリプト・エディタ」タブ
 - 399 ページの「MaxL スクリプトについて」
 - 400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」
 - 357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」
 - MaxL および MDX の概要
- ▶ MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタでオートコンプリート機能を使用するには:
- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
 - 2 右クリックして「オプションの設定」を選択します。
 - 3 「オプション」ダイアログ・ボックスで、「MaxL エディタ」タブまたは「MDX エディタ」タブを選択します。
 - 4 「エディタ」オプション・グループの中の「オートコンプリートを使用可能にする」を選択します。
 - 5 MaxL スクリプトの場合、MaxL ステートメントの作成に GUI コンポーネントを使用するには、「オートコンプリートで GUI ヘルプを使用可能にする」を選択します。
 - 6 「適用」をクリックして、設定を保存します。
 - 7 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。
 - 8 スクリプト・エディタでテキストを入力し、必要に応じてドロップダウン・リストからキーワードを選択します。MaxL スクリプトの場合は、実際の値(アプリケーション名やデータベース名など)も選択できます。
- 次のドロップダウン・リストを表示するには、単語と単語の間で[Space]キーを押します。リストを閉じるには、「[Esc]」キーを押します。
- 9 MaxL スクリプトの場合、入力時に GUI コンポーネントが表示されたときは、適切な情報を入力してから GUI コンポーネントを閉じます。
- 入力した情報が、対応する MaxL ステートメントに変換されます。

MaxL および MDX スクリプトへのコメントの追加

MaxL スクリプトおよび MDX スクリプトでは、C 言語スタイルのコメントを使用して注釈を追加できます。Essbase サーバーでスクリプトが実行される際は、コメントは無視されます。

- ▶ MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトにコメントを追加するには:
- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
 - 2 コメントを追加する場所をクリックします。

- 3 コメントは、`/*`で始まって`*/`で終わるようにします。コメントのテキストは、これらの記号の間に入力します。例:

```
/*  
This is a MaxL script comment that spans two lines. */
```

MaxL スクリプト・エディタおよび MDX スクリプト・エディタでは、コメントは色分けされて表示されます。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

MaxL および MDX スクリプトでの変数の定義

MaxL および MDX スクリプトでは、変更される可能性があるデータや頻繁に参照されるデータ(コンピュータ名、ユーザー名、パスワードなど)を格納するプレースホルダとして、変数を使用できます。変数を使用すると、ユーザー別、データベース別、またはホスト別にカスタマイズしたスクリプトを作成する必要がなくなります。

変数として使用できるのは、環境変数(Essbase のインストール・ディレクトリを示す`$ARBORPATH` など)と、位置パラメータ(`$1`、`$2` など)です。スクリプトでは、変数は必ず`$`(ドル記号)で始まります。

変数が含まれているスクリプトや個々のステートメントを実行する前に、MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタでそれぞれの変数を定義しておく必要があります。変数の定義は、エディタ・ウィンドウを閉じるまで変更されません。変数は保存されないため、スクリプトで必要になるたびに定義する必要があります。変数の定義は、必要に応じて更新できます。

- ▶ MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタで変数を定義するには:

- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
- 2 右クリックして、「**変数の設定**」を選択します。
- 3 「**スクリプト変数**」ダイアログ・ボックスで、「**新規**」をクリックします。
- 4 変数とその値を入力し、「**[Enter]**」キーを押します。

変数の定義でドル記号(`$`)を入力する必要はありません。たとえば、`ARBORPATH` および `EPM_ORACLE_HOME\products\Essbase\EssbaseClient` のような変数を使用できます。

- 5 変数を更新するには、目的の「**値**」フィールドをクリックして、その値を更新します。
- 6 上記の手順を繰り返して、スクリプト内で使用されているすべての変数を定義します。

- 7 変数を削除するには、その変数を含む行を選択し、「削除」をクリックします。
- 8 「OK」をクリックして、変数の定義を保存しダイアログ・ボックスを閉じます。
- 9 スクリプトの中で変数の定義を表示するには、[スクリプトを展開](#)します。
- 10 スクリプトの実行中に未定義変数が検出されたときに、変数を定義するように求めるプロンプトを表示させたい場合は、[未定義変数の解決](#)を参照してください。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [683 ページの「「スクリプト変数」ダイアログ・ボックス」](#)
- [409 ページの「MaxL および MDX スクリプトの展開」](#)
- [408 ページの「未定義変数の解決」](#)

未定義変数の解決

変数が含まれている MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトを実行する前に、MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタでそれぞれの変数を定義しておく必要があります。スクリプトの実行中に未定義変数が検出された場合の解決方法を指定できます。

▶ MaxL または MDX スクリプトの実行中に未定義変数が検出された場合の解決方法を指定するには:

- 1 スクリプトを[開く](#)か、[作成](#)します。
- 2 右クリックして「オプションの設定」を選択します。
- 3 「オプション」ダイアログ・ボックスで、「MaxL エディタ」または「MDX エディタ」のいずれかを選択します。
- 4 「未定義の変数」オプション・グループで、未定義変数を解決するオプションを選択します。
- 5 「適用」をクリックして、設定を保存します。
- 6 「閉じる」をクリックします。

関連情報

- [「オプション」ダイアログ - 「MaxL スクリプト・エディタ」タブ](#)
- [MaxL スクリプト・エディタについて](#)
- [「オプション」ダイアログ - 「MDX スクリプト・エディタ」タブ](#)
- [407 ページの「MaxL および MDX スクリプトでの変数の定義」](#)

MaxL スクリプトでのファイルの参照

1つのスクリプトで複数の操作を行うのではなく、個々の自動化タスクをそれぞれの MaxL スクリプトに保存できます。その場合、現在のスクリプトから包括的なタスク・セットを実行するには、必要に応じて個々のスクリプトを参照します。

.mxl、.msh など、任意の拡張子のファイルを参照できます。

▶ MaxL スクリプトに外部ファイルへの参照を挿入するには:

- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
- 2 ファイルへの参照を挿入する場所にカーソルを移動します。
- 3 右クリックして、「別ファイルの参照の挿入」を選択します。
- 4 「開く」で、ファイルを含むドライブとフォルダへ移動します。
- 5 ファイルを選択して、「OK」をクリックします。

現在のスクリプトに、ファイルへの参照が挿入されます。たとえば、次のようになります:

```
msh D:\MaxL\scripts\creatusr.mxl;
```

このスクリプトをプロセスすると、参照ファイルのコンテンツがプロセスされます。

注: 参照するファイル名を「開く」ダイアログ・ボックスで選択せずに手動で入力する場合は、ディレクトリ名やファイル名に空白文字が含まれている参照を二重引用符で囲んでください。たとえば、次のように入力します:msh "c:\my documents\this file.mxl"

- 6 現在のスクリプトで参照ファイルの内容を表示する場合は、**スクリプトを展開**します。

関連情報

- [399 ページの「MaxL スクリプトについて」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [MaxL スクリプトを開く](#)
- [MaxL スクリプトの展開](#)
- [MaxL スクリプトの実行](#)

MaxL および MDX スクリプトの展開

MaxL スクリプトや MDX スクリプトには変数が含まれていることがあります; 変数の定義を表示する場合は、スクリプトを展開します。目的の情報が、スクリプト本体に表示されます。

MaxL スクリプトには、他の MaxL ファイルへの参照が含まれている場合があります。参照ファイルのコンテンツを表示する場合は、スクリプトを展開します。目

的の情報が、スクリプト本体に表示されます。展開したファイルのコンテンツをスクリプト・エディタで変更しても、実際のファイルには影響しません。

▶ MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトを展開するには:

- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
- 2 右クリックして、「スクリプトの展開」を選択します。

スクリプト内のすべての変数が、定義されている値で置換されます。また、すべての参照ファイルが展開されます。

関連情報

- [407 ページの「MaxL および MDX スクリプトでの変数の定義」](#)
- [409 ページの「MaxL スクリプトでのファイルの参照」](#)
- [399 ページの「MaxL スクリプトについて」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [417 ページの「MDX スクリプトについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

MaxL および MDX スクリプト・エディタの消去

MaxL スクリプト・エディタや MDX スクリプト・エディタのコンテンツは、エディタを閉じなくても消去できます。

- MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタ・ウィンドウを消去するには、スクリプト領域を右クリックして「消去」をクリックします。
- 「結果」ペインのみを消去するには、スクリプト領域を右クリックして「結果の消去」を選択します。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

MaxL および MDX スクリプトの保存

MaxL スクリプトおよび MDX スクリプトは、Essbase オブジェクトとして Essbase サーバーに保存できません; このため、これらのスクリプトはエンタープライズ・ビューに表示されません。ただし、中間層の Essbase 管理サーバーに保存すると、他のユーザーが MaxL または MDX スクリプトにアクセスできるようになります。また、クライアント・コンピュータやネットワーク上にテキスト・ファイルとして MaxL および MDX スクリプトを保存することも可能です。これらのファイルは、対応するスクリプト・エディタで開いて管理できます。

ステートメントは、スクリプトを保存しなくてもエディタで実行できます。

MaxL スクリプトの実行結果を保存するには、[414 ページの「MaxL および MDX の実行結果の保存」](#)を参照してください。

▶ MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトを保存するには:

- 1 スクリプトを**作成**、または**開きます**。
- 2 「ファイル」>「スクリプトの保存」を選択します。
- 3 次のいずれかのアクションを行います:
 - スクリプトをオブジェクトとして Essbase 管理サーバーに保存するには:
 - 1 「名前を付けて保存」で、「Essbase 管理サーバー」を選択します。
 - 2 「名前」に、スクリプトの名前を入力します。
MaxL スクリプトには、デフォルトで .mx1 の拡張子が付けられます。
MDX スクリプトには、デフォルトで .mdx の拡張子が付けられます。
 - 3 **オプション:**他のユーザーがスクリプトを開き、編集し、保存できるようにするには、「共有」を選択します。
 - 4 **オプション:**「**エンコード方式に UTF-8 を指定するには、**」 UTF-8 を選択します。
 - 5 「OK」をクリックします。
 - スクリプトをローカルまたはネットワークに保存するには:
 - 1 「名前を付けて保存」で、「ファイル・システム」を選択します。
 - 2 スクリプトを保存するドライブおよびフォルダに移動します。
 - 3 「ファイル名」に、スクリプトの名前を入力します。
MaxL スクリプトには、デフォルトで .mx1 の拡張子が付けられます。
MDX スクリプトには、デフォルトで .mdx の拡張子が付けられます。
 - 4 **オプション:**「**エンコード方式に UTF-8 を指定するには、**」 UTF-8 を選択します。
 - 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [MaxL および MDX の実行結果の保存](#)
- [412 ページの「MaxL および MDX スクリプトの実行」](#)
- [682 ページの「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス](#)
- [357 ページの「ファイルの命名」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [MaxL および MDX スクリプトとその実行結果の印刷](#)
- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)

MaxL および MDX の実行オプションの設定

MaxL または MDX のスクリプトやステートメントを実行する際は、構文がチェックされ Essbase サーバーにステートメントが渡されます。ステートメントの実行時にエラーが発生した場合に、そのエラーをどう扱うか構成できます。

関連情報

- 「オプション」 ダイアログ - 「MaxL スクリプト・エディタ」 タブ
 - 「オプション」 ダイアログ - 「MDX スクリプト・エディタ」 タブ
 - 413 ページの「MaxL および MDX の実行結果の表示」
 - 400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」
 - 418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」
- ▶ MaxL スクリプト・エディタまたは MDX スクリプト・エディタの実行オプションを設定するには:
- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
 - 2 右クリックして「オプションの設定」を選択します。
 - 3 「オプション」ダイアログ・ボックスで、「MaxL エディタ」タブまたは「MDX エディタ」タブを選択します。
 - 4 「実行時のエラー」オプション・グループの中から、実行オプションを選択します。
 - 5 「適用」をクリックして、設定を保存します。
 - 6 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

MaxL および MDX スクリプトの実行

MaxL または MDX のステートメントやスクリプトを実行すると、Essbase 管理サーバーによって、ステートメントの実行対象の Essbase サーバーにユーザーが接続されます。ログイン・ステートメントが含まれているスクリプトを実行している場合は、Essbase 管理サーバーによって、そのログイン・ステートメントで指定されている Essbase サーバーに接続されます。それ以外の場合は、ユーザーがスクリプト・エディタで目的の Essbase サーバーを選択します。スクリプトまたはステートメントの実行が終了すると、ユーザーと Essbase サーバーとの接続が Essbase 管理サーバーによって切断されます。Essbase サーバーで別のセッションが開いている場合、他の接続はそのまま維持されます。

MaxL または MDX のスクリプトやステートメントを実行すると、その結果がスクリプト・エディタの結果ペインに表示されます。このペインには、すべての結果、情報メッセージ、エラー・メッセージ、および警告メッセージが表示されます。「オプション」ダイアログ・ボックス(「MaxL スクリプト・エディタ」タブまたは「MDX スクリプト・エディタ」タブ)では、各ステートメントの結果を1つの「結果」タブに表示するか複数のタブに表示するかを指定したり、結果とともに各ステートメントを表示するかどうかを指定したりできます。

▶ MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトを実行するには:

- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
- 2 ツールバーにあるサーバーのドロップダウン・リストから、スクリプトを実行する Essbase サーバーを選択します。
リストには、エンタープライズ・ビューに表示される Essbase サーバーのみが含まれます。接続の詳細は、[MaxL および MDX スクリプト・エディタから Essbase サーバーへの接続](#)を参照してください。
- 3 実行中のエラーの処理方法を指定します。[MaxL および MDX の実行オプションの設定](#)を参照してください。
- 4 「結果」タブで、結果の表示方法を指定します。[MaxL および MDX の実行結果の表示](#)を参照してください。
- 5 スクリプトに変数が含まれている場合は、実行時に未定義変数を解決する方法を指定します。詳細は、[未定義変数の解決](#)を参照してください。
- 6 スクリプト全体を実行する場合は、右クリックして「実行」を選択します。
- 7 スクリプトの一部のみを実行する場合は、実行する 1 つまたは複数のステートメントを反転表示し、右クリックして「実行」を選択します。
スクリプトは指定した Essbase サーバーに対して実行され、**結果**が「結果」ペインに表示されます。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [404 ページの「MaxL および MDX スクリプト・エディタから Essbase サーバーへの接続」](#)
- [412 ページの「MaxL および MDX の実行オプションの設定」](#)
- [413 ページの「MaxL および MDX の実行結果の表示」](#)

MaxL および MDX の実行結果の表示

MaxL スクリプト・エディタおよび MDX スクリプト・エディタでステートメントを実行すると、生成された出力、情報メッセージ、エラー・メッセージおよび警告メッセージがエディタ下部の「結果」ペインにデフォルトで表示されます。結果の表示方法はユーザーが構成できます。

- ▶ 結果ペインのオプションを指定し、MaxL および MDX の実行結果を表示するには:
- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
 - 2 右クリックして「オプションの設定」を選択します。
 - 3 「オプション」で、「MaxL エディタ」または「MDX エディタ」のいずれかのエディタを選択します。
 - 4 「結果パネル」で、結果を表示するオプションを 1 つ以上選択します。

- 5 「OK」をクリックします。
- 6 スクリプトを実行します。
実行結果は、スクリプト・エディタの下部の「結果」ペインに表示されます。
- 7 必要に応じて、**レポートを保存**します。

関連情報

- [「オプション」ダイアログ - 「MaxL スクリプト・エディタ」タブ](#)
- [「オプション」ダイアログ - 「MDX スクリプト・エディタ」タブ](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [412 ページの「MaxL および MDX スクリプトの実行」](#)

MaxL および MDX の実行結果の保存

MaxL または MDX セッションの実行結果は、クライアントまたはサーバー・コンピュータに HTML ファイルとして保存できます。HTML ファイルには、スクリプトのコンテンツと結果の両方が含まれます。

MaxL スクリプトの場合は、スクリプト内で MaxL シェルの `spool` コマンドを使用して、出力をファイルに送ることも可能です。

▶ MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトの実行結果を保存するには:

- 1 スクリプトを**開く**か、**作成**します。
- 2 MaxL 実行オプション「Echo ステートメント」を使用可能にし、ステートメントとその結果を保存できます。詳細は、[MaxL および MDX の実行オプションの設定](#)を参照してください。
- 3 スクリプトを**実行**します。
- 4 「ファイル」>「スクリプト結果の保存」を選択します。
- 5 「名前を付けて保存」で、結果を保存するドライブとフォルダへ移動します。
- 6 「ファイル名」に、ファイルの名前を入力します。
実行結果が HTML 形式で保存されます。
- 7 「OK」をクリックします。

関連情報

- [412 ページの「MaxL および MDX の実行オプションの設定」](#)
- [412 ページの「MaxL および MDX スクリプトの実行」](#)
- [MaxL および MDX スクリプトの保存](#)
- [MaxL および MDX スクリプトとその実行結果の印刷](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)

- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

MaxL および MDX スクリプトのコピー

MaxL スクリプトおよび MDX スクリプトはオペレーティング・システムによって保管されますが、Essbase サーバー・オブジェクトとして保存されないため、スクリプトを1つの場所から他の場所にコピーする場合はファイル・システムを使用してください。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

MaxL および MDX スクリプトの名前変更

MaxL スクリプトおよび MDX スクリプトはオペレーティング・システムによって保管されますが、Essbase サーバー・オブジェクトとして保存されないため、スクリプトの名前の変更にはファイル・システムを使用してください。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

MaxL および MDX スクリプトの削除

MaxL スクリプトおよび MDX スクリプトはオペレーティング・システムによって保管されますが、Essbase サーバー・オブジェクトとして保存されないため、すでに使用しなくなったスクリプトを削除する場合はファイル・システムを使用してください。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

MaxL および MDX スクリプトとその実行結果の印刷

MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトのコンテンツおよび実行結果を印刷できます。

- ▶ MaxL スクリプトまたは MDX スクリプトのコンテンツおよび実行結果を印刷するには:
- 1 スクリプトを[開く](#)か、[作成](#)します。
 - 2 スクリプトを[実行](#)します。
 - 3 「ファイル」>「スクリプト結果の印刷」を選択します。
 - 4 「印刷」ダイアログ・ボックスで、デフォルト・プリンタについて指定可能な印刷オプションを設定します。
 - 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [412 ページの「MaxL および MDX スクリプトの実行」](#)
- [413 ページの「MaxL および MDX の実行結果の表示」](#)
- [414 ページの「MaxL および MDX の実行結果の保存」](#)

この章の内容

MDX スクリプトについて	417
MDX スクリプト・エディタについて	418
MDX スクリプトでの MDX 関数の挿入.....	419
MDX スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入.....	419

MDX スクリプトについて

MDX は、Essbase データベースで使用される、豊かな表現力を持った言語ベースのデータ分析メカニズムです。MDX 言語を使用することで、アド・ホック分析の柔軟性を高められます。また、従来のクエリー・インタフェースでは複数パスの処理が必要になるようなクエリーを、1 回のパスで処理できます。MDX は、XML for Analysis 創設メンバーの共同仕様です。XML for Analysis の詳細は、<http://www.xmla.org> を参照してください。

MDX スクリプトにはクエリー・ステートメントが 1 つ以上複数含まれており、それぞれ最後にセミコロンが付いています。ステートメントは、エディタから、接続に選択した Essbase サーバーへと渡されます。MDX スクリプト・エディタでは MDX の構文の要素が色分けされ、入力しながらステートメントを構築できるオートコンプリート機能を備えています。結果はエディタ・ウィンドウ内のグリッドに戻されます。MDX 構文の詳細は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の MDX に関する項を参照してください。

MDX スクリプトは、MDX スクリプト・エディタまたは通常のテキスト・エディタで作成できます。MDX スクリプト・エディタでは、スクリプトを開いて変更したり、実行したりすることが可能です。MDX スクリプトは、Essbase オブジェクトとして Essbase サーバーに保存できません; このため、MDX スクリプトはエンタープライズ・ビューには表示されません。一方で、中間層の Essbase 管理サーバーに保存すると、他のユーザーが MDX スクリプトにアクセスできるようになります。また、クライアント・コンピュータやネットワーク上にテキスト・ファイルとして MDX スクリプトを保存することも可能です。これらのファイルは、MDX スクリプト・エディタで開いて管理できます。手順は、410 ページの「MaxL および MDX スクリプトの保存」を参照してください。

MDX ステートメントは、MDX スクリプトを保存しなくても実行できます。MDX スクリプト・エディタで対話的に MDX ステートメントを入力、実行、消去して、1 つ以上の操作を同時に実行できます。

関連情報

- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- MDX クエリーの記述(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- MDX 関数

MDX スクリプト・エディタについて

コンソールのメニュー・バーから MDX スクリプト・エディタを開くには、「ファイル」>「エディタ」>「MDX スクリプト・エディタ」を選択します。

MDX スクリプト・エディタには、テキスト編集ウィンドウ、カスタマイズされたメニュー、ツールバー、包括的な右クリック・メニュー、MDX 構文の色分け機能と[オートコンプリート機能](#)、および出力ペインが用意されています。このエディタは、ユーザーの好みにあわせてカスタマイズできます。

MDX スクリプトにはどのような名前を付けても構いません。ただし、MDX スクリプト・エディタで開けるようにするには、拡張子を .mdx にする必要があります。MDX スクリプト・エディタで既存のスクリプトを開いて実行するために、スクリプトを変更する必要はありません。MDX スクリプト・エディタで作成して保存したスクリプトには、デフォルトで .mdx の拡張子が付けられます。

MDX スクリプト・エディタでは、次のタスクを実行できます:

- MDX スクリプトを[作成](#)、[編集](#)、[保存](#)および[実行](#)し、Essbase 管理タスクを自動化する。
- MDX ステートメントを対話的に[入力](#)、[実行](#)および[消去](#)し、1 つ以上の操作を同時に実行する。
- [オートコンプリート](#)を使用して、MDX ステートメントの迅速な構築をサポートする。
- アウトラインおよび機能ツリーを使用して、[メンバー](#)と[機能](#)を手動で入力せずスクリプトに挿入する。
- 構文要素の強調表示に使用する[色分けをカスタマイズ](#)する。
- [変数の定義](#)および[更新](#)を行う。
- [スクリプトを展開](#)して変数値を表示する。
- スクリプトの実行結果を[表示](#)、[保存](#)および[印刷](#)する。

関連情報

- [417 ページの「MDX スクリプトについて」](#)
- MDX クエリーの記述(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- MDX 関数

MDX スクリプトでの MDX 関数の挿入

MDX スクリプト・エディタには、MDX 関数のツリー・ビューが表示されます。ツリーから関数を選択すると、開いているスクリプトに関数とその引数テンプレートが挿入されます。このため、手動で入力する必要がありません。その後、引数を必要に応じて変更できます。

注： ツリーに表示される関数は、接続する Essbase サーバーのリリース・レベルによって異なる場合があります。

▶ MDX 関数を MDX スクリプトに挿入するには:

1 スクリプトを開くか、作成します。

スクリプト・エディタ・ウィンドウの左下のペインに、MDX 関数がツリー表示されます。

2 次のいずれかのアクションを行います:

- カテゴリ別にリストを表示するには、「カテゴリ別」タブをクリックします。
- アルファベット順でリストを表示するには、「アルファベット順」タブをクリックします。

3 スクリプト内の、関数とその引数テンプレートを挿入する場所をクリックします。

4 「関数」ツリーで、挿入する関数をダブルクリックします。

Essbase では、関数がスクリプト内のカーソル位置に挿入されます。引数テンプレートを、アウトライン・ツリーの適切な次元またはメンバーで置き換えます。詳細は、[MDX スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入](#)を参照してください。

関連情報

- [419 ページの「MDX スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」](#)
- [405 ページの「MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用」](#)
- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)

MDX スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入

MDX スクリプトに関連付けるアプリケーションおよびデータベースを選択した後、アウトライン・ツリーから直接次元名およびメンバー名を選択して、スクリプトに挿入できます。アウトライン・ツリーを MDX 関数ツリーとともに使用すると、MDX ステートメントを迅速に作成できます。

アウトライン・ツリー・ビューに、メンバー名ではなく別名が表示されるように変更できます。また、ツリー内の特定のメンバーを検索することもできます。

重複メンバー名を許可するデータベースで、アウトライン・ツリーからメンバー名を挿入するのではなく、メンバー名をキー入力する場合、メンバーを区別するために重複メンバーの名前を修飾メンバー名で入力する必要があります。重複メンバーの修飾メンバー名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで表示できます。このトピックで説明している方法でメンバー名を挿入する場合は、修飾メンバー名は自動的に挿入されます。

▶ 次元名およびメンバー名を MDX スクリプトに挿入するには:

- 1 スクリプトを開くか、作成します。
- 2 エディタ・ウィンドウにアウトライン・ツリーが表示されていない場合は、スクリプトにアウトラインを関連付けます。
- 3 アウトライン・ツリーで次のいずれかのタスクを実行して、スクリプトに挿入するメンバーを検索します:
 - 次元の下のメンバーをすべて展開するには、その次元を選択して右クリックし、「子孫まで展開」を選択します。
 - アウトライン・ツリーでメンバーを検索するには、次元またはメンバーを選択し、右クリックして「メンバーの検索」を選択します。「結果の検索」タブで名前をクリックし、アウトライン・ツリーでそのメンバーの場所を検索します。
 - メンバー名ではなく別名を表示および挿入するには、「別名の使用」を選択し、別名テーブルを選択します。
- 4 スクリプトに挿入する次元、メンバーまたは別名を選択して右クリックし、「メンバーの挿入」を選択します。

注: レベル 0 メンバーを挿入するには、そのメンバーをダブルクリックします。

名前がスクリプト内のカーソル位置に挿入されます。アウトライン・ツリーにメンバー名ではなく別名が表示されている場合、Essbase ではスクリプトにもメンバー名ではなく別名が挿入されます。

重複メンバー名を許可するアウトラインで、重複メンバー名を挿入する場合、このスクリプトには修飾メンバー名が挿入されます。たとえば、アウトラインに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれている場合は、いずれかの New York メンバーを挿入するとき、スクリプトには修飾メンバー名が挿入されます。

関連情報

- 389 ページの「編集集中の Essbase オブジェクトへのアウトラインの関連付け」
- 195 ページの「エディタでのメンバーの検索」
- 419 ページの「MDX スクリプトでの MDX 関数の挿入」
- 405 ページの「MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用」
- 357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」

この章の内容

パーティションについて.....	421
エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示.....	422
パーティションの作成.....	423
パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開く.....	424
パーティションのタイプおよび設定の指定.....	426
パーティションの接続情報の指定.....	426
パーティションの領域の定義.....	427
パーティションの領域を定義する際のメンバーの検索.....	428
パーティションでの領域固有のメンバー・マッピングの定義(オプション)	429
パーティションの領域マッピングの選択ルールインポート.....	430
領域マッピングからの選択ルールのエクスポート.....	430
パーティションでのグローバル・マッピングの定義.....	431
パーティションのメンバー・マッピングインポート.....	432
パーティションの検証.....	433
パーティションの保存.....	434
データの複製.....	435
パーティションの削除.....	436
パーティションのコピー.....	436
パーティションの修復.....	437
パーティション定義のエクスポート.....	439
パーティション定義インポート.....	439
アウトラインの同期化.....	440

パーティションについて

パーティションを使用すると、複数のアプリケーションやサーバーにわたって存在している可能性のあるデータベース間で共有されているデータにアクセスできます。パーティションを作成する際には、パーティションを構成するセルを指定し、ソースのセルとターゲットのセルをマッピングする方法を指定します。また、使用するパーティションのタイプや、ソース・データベースおよびターゲット・データベースの接続情報も指定します。パーティションを作成して保存すると、2つの異なる .ddb ファイルにパーティション定義が保存されます。1つの .ddb ファイルはソース・データベースのディレクトリ (ARBORPATH\app\appname

\sourcedbname)に保管され、もう1つの.ddbファイルはターゲット・データベースのディレクトリ(ARBORPATH\app\appname\targetdbname)に保管されます。

パーティション・データにアクセスする方法は、使用するパーティションのタイプによって異なります。

- 複製パーティションでは、パーティション領域のデータを1つのデータベースから別のデータベースにコピーできます。
- 透過パーティションでは、2つの異なるデータベースに保管されているデータを、すべて1つのデータベースに保管されているかのように表示できます。たとえば、スプレッドシートをドリルダウンして様々なメンバーの組合せのデータを表示する場合、一部のデータはローカルに保管されていますが、パーティション領域にあるデータはリモートに保管されています。
- リンク・パーティションでは、1つのデータベースで1つ以上のメンバーの組合せを指定し、それを他のデータベースの同じ組合せへのリンクとして使用できます。パーティション化されたメンバーの組合せをスプレッドシートでドリルダウンすると、リンク・オブジェクト・ブラウザが起動し、そこで別のスプレッドシートを開くことが可能です。このスプレッドシートは別のデータベースに接続されており、対応するメンバーの組合せのデータ・セルが表示されます。

Essbase サーバー・ソフトウェアには、パーティション・アプリケーションのサンプルとして **Samppart** と **Sampeast** という2つのアプリケーションが提供されています。これらのサンプル・アプリケーションが Essbase サーバーにインストールされている場合は、管理サービス・コンソールの **エンタープライズ・ビュー** に表示されます。

関連情報

- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [423 ページの「パーティションの作成」](#)
- [437 ページの「パーティションの修復」](#)
- [439 ページの「パーティション定義のエクスポート」](#)
- [439 ページの「パーティション定義のインポート」](#)
- パーティション・アプリケーションの設計(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- パーティションの作成および維持(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示

エンタープライズ・ビューでは、「パーティション」ノードの下に、パーティションが表示されます。パーティションは、データベースがソースであるかターゲットであるかによって、「ソース・データベース」ノードまたは「ターゲット・データベース」ノードのいずれかに表示されます。

パーティションのデータ・ソースであるデータベースを表示している場合は、そのパーティションおよびデータ・ターゲットに関する情報が、「ターゲット・データベース」ノードに表示されます。パーティション名には、データ・ターゲットが存在する Essbase サーバー名、アプリケーション名、データベース名と、パーティションのタイプ(透過、複製、リンク)が含まれます。

パーティションのデータ・ターゲットであるデータベースを表示している場合は、そのパーティションおよびデータ・ソースに関する情報が、「ソース・データベース」ノードに表示されます。パーティション名には、データ・ソースが存在する Essbase サーバー名、アプリケーション名、データベース名と、パーティションのタイプ(透過、複製、リンク)が含まれます。

たとえば、data1 および data2 という 2 つのデータベースがパーティション化されているとします; data1 がソース・データベースで、data2 がターゲットデータベースです。data1 のデータベース・ノードでは、「パーティション」ノードの下の「ターゲット・データベース」にパーティションが表示されます。data2 ノードでは、「パーティション」ノードの下の「ソース・データベース」にパーティションが表示されます。

関連情報

- データ・ソースとデータ・ターゲット(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [423 ページの「パーティションの作成」](#)
- [437 ページの「パーティションの修復」](#)

パーティションの作成

パーティションを使用すると、複数のアプリケーションやサーバーにわたって存在している可能性のあるデータベース間で共有されているデータにアクセスできます。データにアクセスする方法は、使用するパーティションのタイプによって異なります。詳細は、[421 ページの「パーティションについて」](#)を参照してください。

パーティションを作成するには、「タイプ」、「接続」、「領域」、「マッピング」の各タブで必要な情報をすべて指定してから、パーティションを検証および保存します。

▶ パーティションを作成するには:

- 1 パーティションの設計方法を決定します(詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)。
- 2 パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。
- 3 パーティションのタイプと設定を指定します。
- 4 接続情報を指定します。
- 5 パーティション領域を定義します。
- 6 オプション: 領域固有のメンバー・マッピングを定義します。

- 7 グローバルのメンバー・マッピングを定義します。
- 8 パーティションを検証します。
- 9 パーティションを保存します。
- 10 複製パーティションを作成している場合は、データを複製します。

関連情報

- パーティション・アプリケーションの設計(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 535 ページの「パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ」
- 439 ページの「パーティション定義のエクスポート」
- 439 ページの「パーティション定義のインポート」

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- refresh replicated partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- validatepartitiondeffile(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開く

複製パーティション、透過パーティション、リンク・パーティションを作成するには、パーティションの作成ウィンドウを開きます。複製パーティション、透過パーティション、リンク・パーティションを編集するには、パーティションの編集ウィンドウを開きます。

パーティションを検証または保存するには、パーティションのソース・データベースとターゲット・データベースに対するデータベース・マネージャ権限が必要です。

Administration Services を使用してローカルに保存されたパーティションを開くには、[パーティションをインポート](#)します。アプリケーション・マネージャを使用してローカルに保存されたパーティションを開くことはできません。

▶ パーティションの作成ウィンドウを開く手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを右クリックし、「新規パーティションの作成」を選択します。

Essbase で「パーティションの作成」ウィンドウが表示されます。

3 この後のパーティション作成作業の詳細は、[パーティションの作成の手順](#)を参照してください。

▶ Essbase サーバーに保存された既存のパーティションを開く手順は、次のとおりです:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、パーティション・データベースを探します。
- 2 パーティション・データベースの「パーティション」ノードの下でパーティション定義を右クリックし、「パーティションの編集」を選択します。

注: 「パーティションの編集」メニュー・アイテムが表示されない場合は、開いて編集する前に[パーティションを修復](#)する必要があります。

「パーティションの編集」ウィンドウが表示されます。

3 必要な編集を行ってから、パーティションを[検証](#)して[保存](#)します。

▶ Essbase 管理サーバーに保存された既存のパーティションを開く手順は、次のとおりです:

- 1 「ファイル」>「開く」を選択します。
- 2 「開く」ダイアログ・ボックスで、「Essbase 管理サーバー」タブを選択します。
- 3 パーティションを選択して「OK」をクリックします。

「パーティションの編集」ウィンドウが表示されます。

4 必要な編集を行ってから、パーティションを[検証](#)して[保存](#)します。

関連情報

- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [535 ページの「パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ」](#)
- [423 ページの「パーティションの作成」](#)
- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [437 ページの「パーティションの修復」](#)
- パーティション・アプリケーションの設計(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションのタイプおよび設定の指定

Essbaseには、複製、透過、リンクという3種類のパーティションがあります。作成するパーティションのタイプの決定方法については、[421 ページの「パーティションについて」](#)を参照してください。

パーティションを編集している場合、パーティションのタイプを変更することはできません。

注： 複製パーティションは、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。透過パーティションでは、集約ストレージ・データベースはパーティション内のソース・データベースにのみなることができます。

▶ パーティションのタイプおよび関連設定を指定するには:

- 1 [パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。](#)
- 2 「タイプ」を選択します。
- 3 パーティションを作成するには、[パーティションのタイプ](#)を選択します。
- 4 アウトラインの変更を追跡する方向を選択します。この設定は、[アウトライン同期](#)にのみ適用されます。
- 5 複製パーティションの場合は、ターゲット・パーティションの更新をユーザーに許可するかどうかを決定します。
- 6 リンク・パーティションの場合は、デフォルトのソース・ログイン情報を入力します。
- 7 パーティションを作成する場合は、「接続」を選択して[パーティション定義を続行](#)します。
- 8 パーティションを[検証](#)して[保存](#)します。または、パーティションを編集する場合は、別のタブを選択して続けて編集します。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [539 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「タイプ」タブ](#)
- [パーティションのタイプ](#) (『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `create partition(MaxL)` (『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display partition(MaxL)` (『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの接続情報の指定

パーティションのソース・データベースとターゲット・データベースが通信するときに使用されるユーザー名とパスワードを、Essbase で指定する必要があります。Essbase では、2つのデータベース間でのデータ転送とアウトライン同期に、

ユーザー名とパスワードが使用されます。ローカルのセキュリティ・フィルタは、権限付きデータに対するユーザーの検索を防止するために適用されます。

▶ パーティションの接続情報を指定するには:

- 1 **パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。**
- 2 「接続」を選択します。
- 3 「データ・ソース」オプション・グループで、次の操作を行います:
 - データ・ソースの Essbase サーバー、アプリケーション、データベースを選択します。
 - データ・ソースへのデフォルト・ログイン用に使用するユーザー名およびパスワードを入力します。
- 4 「データ・ターゲット」オプション・グループで、次の操作を行います:
 - データ・ターゲットの Essbase サーバー、アプリケーション、データベースを選択します。
 - データ・ターゲットへのデフォルト・ログイン用に使用するユーザー名およびパスワードを入力します。
- 5 パーティションを作成する場合は、「領域」を選択して**パーティション定義を続行**します。
- 6 パーティションを**検証**して**保存**します。または、パーティションを編集する場合は、別のタブを選択して続けて編集します。

関連情報

- [537 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「接続」タブ](#)
- [437 ページの「パーティションの修復」](#)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの領域の定義

パーティションの領域定義では、ターゲット・データベースと共有するソース・データベースの領域を指定します。領域とは、データベース内のサブキューブのことです。たとえば、Eastern Region の Actual データの最下位レベルにあるすべての Measures データを 1 つの領域として指定したりします。パーティションは 1 つまたは複数の領域で構成されます。

領域を定義するときには、ソース・データベースとターゲット・データベースでセルの個数と形状を同じにする必要があります。たとえば、ソース・データベースの領域が 18 個のセルからなる場合は、ターゲット・データベースの領域も 18 個のセルからなる必要があります。

▶ パーティションの領域を定義するには:

- 1 [パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。](#)
- 2 「領域」タブを選択します。
- 3 編集オプションを選択し、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックします。
- 4 選択した編集ツールを使用して、パーティション領域のメンバーを指定します。
- 5 ソースおよびターゲットのパーティション領域のセル数を表示するには、「セル・カウントの表示」を選択します。
- 6 [拡張領域固有メンバーのマッピングを定義](#)するには、「拡張」をクリックします。
- 7 マッピングを必要とする領域定義の場合は、「マッピング」タブをクリックして、[パーティションの定義を続行](#)するか、[領域マッピングの選択ルールをインポート](#)します。
- 8 マッピングを必要としない領域定義の場合は、パーティションを[検証](#)および[保存](#)します。

関連情報

- [428 ページの「パーティションの領域を定義する際のメンバーの検索」](#)
- [パーティションの領域定義のインポート](#)
- [536 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」タブ](#)
- [パーティション・アプリケーションの設計\(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内\)](#)

関連コマンド

- `create partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの領域を定義する際のメンバーの検索

メンバー選択ツールを使用してパーティションの領域をマッピングするときは、「メンバーの検索」を使用すると、定義に追加するアウトライン・メンバーを簡単に検索できます。

▶ メンバー選択ツールを使用しているときにアウトライン・ツリーでメンバーを検索するには:

- 1 「パーティションの作成」または「パーティションの編集」ウィンドウを開きます。
- 2 「領域」を選択します。
- 3 「メンバー選択ツールの使用」を選択し、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックします。

「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが開きます。

- 4 アウトラインの次元とメンバーの表示方法を選択します。
- 5 「検索」をクリックして、「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスを表示します。
- 6 「メンバーの検索」で、テキストを入力し、適切な検索オプションを選択します。

関連情報

- 512 ページの「「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックス」
- 619 ページの「「メンバーの検索」ダイアログ・ボックス」

パーティションでの領域固有のメンバー・マッピングの定義(オプション)

領域固有のメンバー・マッピングにより、Essbase グローバル・マッピングよりも詳細にメンバーのマッピング方法が制御されます。標準のメンバー・マッピングを使用して、ソース・データベースのすべてのメンバーをターゲット・データベースの対応するメンバーにマッピングできる場合は、拡張の領域固有マッピングを行う必要はありません。

▶ 領域固有のメンバー・マッピングを定義するには:

- 1 [パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。](#)
- 2 「領域」を選択します。
- 3 行を選択します。
- 4 「拡張」を選択し、「[領域固有メンバーのマッピング](#)」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 5 編集オプションを選択し、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックします。
- 6 選択した編集ツールを使用して、領域固有のメンバー・マッピングを行うメンバーを指定します。
- 7 マッピングを必要とする領域定義の場合は、「マッピング」タブを選択して、[パーティションの定義を続行](#)します。
- 8 マッピングを必要としない領域定義の場合は、パーティションを[検証](#)および[保存](#)します。

関連情報

- 510 ページの「[「領域固有メンバーのマッピング」ダイアログ・ボックス](#)」
- 拡張領域固有マッピングの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの領域マッピングの選択ルールのインポート

パーティションに領域マッピングを作成しやすくするため、以前保存したメンバー選択ルール、またはアプリケーション・マネージャからエクスポートしたメンバー選択ルールをインポートできます。

インポートする選択ルール・ファイルは、拡張子が.txt または.sel である必要があります。選択ルール・ファイルでは、それぞれの行にルールが1つずつ指定されている必要があります。

ファイルをインポートすると、1行ずつ読み込まれ、「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックスの「ルール」リスト・ボックスにルールが取り込まれます。スペースが含まれているメンバー名は、引用符で囲む必要があります。

▶ パーティションの領域マッピングの選択ルールをインポートするには:

- 1 **パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。**
- 2 「領域」タブを選択します。
- 3 「メンバー選択ツールの使用」を選択し、「ソース」列または「ターゲット」列をダブルクリックします。
「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 4 「インポート」をクリックします。
- 5 「選択ルールのインポート」ダイアログ・ボックスで、インポートする選択ルール・ファイルの場所を参照します。
- 6 ファイルを選択し、「OK」をクリックします。
「領域マッピングのメンバー選択」ダイアログ・ボックスの「ルール」リスト・ボックスに、選択ルール・ファイルの内容が表示されます。
- 7 再度「OK」をクリックします。
- 8 パーティションを**検証**して**保存**します。

関連情報

- [430 ページの「領域マッピングからの選択ルールのエクスポート」](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)
- [512 ページの「「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックス」](#)
- [431 ページの「パーティションでのグローバル・マッピングの定義」](#)

領域マッピングからの選択ルールのエクスポート

パーティションの領域マッピングの作成に使用するメンバー選択ルールをエクスポートできます。選択ルールは、ファイル・システムまたは Essbase 管理サーバーにエクスポートできます。

これにより、他の領域マッピングを作成するときに、[選択ルールをインポート](#)できます。

- ▶ パーティションの領域マッピングから選択ルールをエクスポートするには:
 - 1 [パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。](#)
 - 2 「領域」を選択します。
 - 3 「メンバー選択ツールの使用」を選択し、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックします。
「[領域マッピング・メンバーの選択](#)」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - 4 「ルール」リストで、パーティション領域のメンバーを指定します。
 - 5 「エクスポート」をクリックします。
 - 6 「[選択ルールのエクスポート](#)」で、選択ルール・ファイルのエクスポート先(ファイル・システムまたは Essbase 管理サーバー)に移動します。
 - 7 「OK」をクリックします。

関連情報

- [430 ページの「パーティションの領域マッピングの選択ルールのインポート」](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)
- [512 ページの「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックス](#)
- [431 ページの「パーティションでのグローバル・マッピングの定義」](#)

パーティションでのグローバル・マッピングの定義

ソース・データベース・アウトラインとターゲット・データベース・アウトラインで、パーティション領域に異なるメンバーや名前の異なるメンバーが含まれている場合は、ソース・メンバーをターゲット・メンバーにマッピングする必要があります。

メンバー・マッピングを定義するには、このトピックで説明する方法を使用するか、テキスト・ファイルからメンバー・マッピングを[インポート](#)します。

- ▶ パーティションでグローバルのメンバー・マッピングを定義するには:
 - 1 [パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。](#)
 - 2 「マッピング」を選択します。
 - 3 編集オプションを選択し、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックします。
 - 4 選択した編集ツールを使用して、マッピングするメンバーを選択または入力します。
 - 5 作成するマッピングの対ごとに、このプロセスを繰り返します。
 - 6 パーティションを[検証](#)して[保存](#)します。

関連情報

- 538 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「マッピング」 タブ」
- メンバーのマッピング(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションのメンバー・マッピングのインポート

パーティションのメンバー・マッピングを手作業で作成するかわりに、外部テキスト・ファイルからインポートできます。

マッピング・ファイルの拡張子は .txt である必要があります。また、このファイルにはタブまたはスペースで区切った列が 2 つ含まれている必要があります。1 つはマッピングするソース・メンバーが含まれる列で、もう 1 つはマッピングするターゲット・メンバーが含まれる列になります。スペースが含まれているメンバー名は、引用符で囲む必要があります。

マッピングが正しくインポートされるためには、ソース・メンバーとそれに対応するターゲット・メンバーの対がこのテキスト・ファイルで正しく指定されている必要があります。

▶ パーティションのメンバー・マッピングをインポートするには:

- 1 **パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。**
- 2 「マッピング」タブを選択します。
- 3 「インポート」をクリックします。
- 4 「メンバー・マッピングのインポート」ダイアログ・ボックスで、次のいずれかの方法を使用して「マッピング・ファイル」テキスト・ボックスに値を入力します:
 - マッピング・ファイルのパスとファイル名を入力します。
 - 「参照」ボタンをクリックし、マッピング・ファイルを含むドライブやフォルダへ移動します。ファイルを選択し、「開く」をクリックします。
- 5 「フォーマット設定」オプション・グループで、「ソース列が最初」(ファイルの最初の列がソースのメンバー名である場合)を選択するか、または「ターゲット列が最初」(ファイルの最初の列がターゲットのメンバー名である場合)を選択します。
ソースおよびターゲットの列は、タブまたはスペースで区切られている必要があります。
- 6 「OK」をクリックします。
- 7 パーティションを**検証**して**保存**します。

関連情報

- 624 ページの「メンバー・マッピングのインポート」ダイアログ・ボックス」
- 431 ページの「パーティションでのグローバル・マッピングの定義」

パーティションの検証

Essbase では、検証時にソース・データベースとターゲット・データベースのパーティション定義ファイル(.ddb)をチェックして、パーティションが有効であることを確認します。

検証では、パーティションの接続情報が正しいこと、領域およびマッピングが有効であること、セル数が一致していること、複製パーティションまたは透過パーティションのターゲット領域が別の複製パーティションまたは透過パーティションのターゲット領域と重なっていないことがチェックされます。

パーティションの検証は、パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウで実行できます。または、エンタープライズ・ビュー(既存のパーティションの場合のみ)で実行できます。

▶ パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウでパーティションを検証するには:

- 1 **パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。**
- 2 パーティションを作成または編集します。詳細は、[パーティションの作成](#)を参照してください。
- 3 「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ」で、「検証」をクリックします。

検証結果は「検証」タブに表示されます。

- 4 検証でエラーが検出されなかった場合は、Essbase サーバーに**パーティションを保存**できます。
- 5 検証でエラーが検出された場合は、次のアクションを実行します:
 - エラーを修正し、Essbase サーバーにパーティションを保存します。
 - ファイル・システム内または Essbase 管理サーバーに無効なパーティションを保存します。

詳細は、[パーティションの保存](#)を参照してください。

▶ エンタープライズ・ビューでパーティションを検証するには:

- 1 「パーティション」ノードを展開し、パーティションを選択します。
- 2 右クリックして「パーティションの検証」を選択します。
- 3 検証でエラーが検出されなかった場合は、Essbase サーバーに**パーティションを保存**できます。
- 4 検証でエラーが検出された場合は、次のアクションを実行します:
 - エラーを修正し、Essbase にパーティションを保存します。

- ファイル・システム内または Essbase 管理サーバーに無効なパーティションを保存します。

5 詳細は、[パーティションの保存](#)を参照してください。

関連情報

- [541 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「検証」タブ](#)
- [パーティションのトラブルシューティング](#)(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [パーティション・アプリケーションの設計](#)(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `create partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `validatepartitiondeffile(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの保存

このダイアログ・ボックスは、パーティションをローカル、Essbase 管理サーバー、または Essbase サーバー・オブジェクトとして Essbase サーバーに保存するために使用します。

▶ パーティションを保存するには:

1 [パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開きます。](#)

2 [パーティションを作成または編集](#)します。

パーティションを作成している場合は、パーティションの作成が終了するまで保存できません。

3 「ファイル」、「保存」と選択します。

Essbase ではパーティション定義が Essbase サーバーに保存されます。

▶ パーティション定義をクライアント、ネットワーク、または Essbase 管理サーバーに保存するには:

1 [パーティションを作成または編集](#)します。

パーティションを作成している場合は、パーティションの作成が終了するまで保存できません。

2 「ファイル」>「名前を付けて保存」を選択します。

3 [パーティション定義ファイル](#)をファイル・システムに保存するには、「ファイル・システム」を選択し、目的の場所に移動してパーティション・ファイルの名前を付けます。

パーティション・ファイルは XML 形式で記述され、.xml の拡張子が付けられます。

- 4 パーティション定義ファイルを Essbase 管理サーバーに保存するには、「Essbase 管理サーバー」を選択し、パーティション・ファイルに名前を付けて、他の管理者とそのファイルを共有するかどうかを指定します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase では指定した場所にパーティション定義ファイルが保存されます。

関連情報

- [682 ページの「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス](#)
- [439 ページの「パーティション定義のエクスポート」](#)

関連コマンド

create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データの複製

複製パーティションを更新すると、Essbase ではソース領域のデータが対応するターゲット領域のセルにコピーされます。パーティション内のすべてのセルを更新するか、データが変更されたセルのみを更新するかを選択できます。

▶ 複製パーティションを更新するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、パーティション・データベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを展開します。
- 3 パーティションを選択します。
- 4 右クリックして、「ターゲットにデータを複製」を選択します。
- 5 「データの複製」ダイアログ・ボックスで、「変更されたセルのみを更新」(前回の複製以降に変更されたセルのみを更新する場合)または「すべてのセルを更新」(パーティション内のすべてのセルを更新する場合)を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [560 ページの「データの複製」ダイアログ・ボックス](#)
- 複製パーティション(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- getallreplcells(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getupdatedreplcells(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- putallreplcells(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- putupdatedreplcells(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- refresh replicated partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの削除

データベース・マネージャ権限がある場合は、Essbase サーバーにオブジェクトとして保存されたパーティションを削除できます。

データベースから 1 つのパーティションを削除、またはすべてのパーティションを同時に削除できます。

▶ パーティションを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを展開し、パーティションを選択します。
- 3 右クリックして「パーティションの削除」を選択します。

▶ データベースのすべてのパーティションを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを選択します。
- 3 右クリックして「すべてのパーティションの削除」を選択します。

関連情報

- [439 ページの「パーティション定義のエクスポート」](#)
- [437 ページの「パーティションの修復」](#)

関連コマンド

drop partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションのコピー

パーティションを新しい場所にコピーできます。ただし、新しいパーティションのソース・データベースおよびターゲット・データベースのアウトラインが、既存のパーティションのソース・データベースおよびターゲット・データベースのアウトラインと同一であることが必要になります。

パーティションは、新しいソース・データベースと新しいターゲット・データベースにコピーしたり、既存のソース・データベースと新しいターゲット・データベースにコピーできます。

注: パーティションを新しいソースと既存のターゲットにコピーすることはできません。

パーティションは、検証してからコピーされます。検証でエラーが検出されると、パーティションはコピーされません。警告が検出されると、コピー操作を続行するか取り消すかを選択するように求められます。

▶ パーティションをコピーするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ソース・データベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを展開します。
- 3 パーティションを選択します。
- 4 右クリックして、「パーティションのコピー」を選択します。
- 5 「パーティションのコピー」ダイアログ・ボックスで、次を実行します:
 1. パーティションのコピー先となるデータソースの Essbase サーバー、アプリケーション、データベースを選択します。
 2. パーティションのコピー先となるデータ・ターゲットの Essbase サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー、パスワードを選択します。
- 6 オプション: 「コメント」テキスト・ボックスにコメントを入力します。
- 7 「OK」をクリックします。

関連情報

[525 ページの「「パーティションのコピー」ダイアログ・ボックス」](#)

関連コマンド

alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの修復

パーティション定義を作成すると、そのパーティションの情報が、ソースのデータベース・ディレクトリとターゲットのデータベース・ディレクトリという2つの .ddb ファイルとして保管されます。どちらか一方の .ddb ファイルで保管されている接続情報が無効な場合は、パーティションの修復を行う必要があります。修復を行うまで、エンタープライズ・ビューでパーティションを開いて編集することはできなくなります。ソースまたはターゲットのどちらかの .ddb ファイルが物理的に存在していない場合(たとえば、Administration Services 以外のツールを使用して、アプリケーションやデータベースを削除した場合)は、パーティションを復元できません。

通常、パーティションが含まれているアプリケーションやデータベースに対して、Administration Services を使用して名前変更、コピー、または削除を行った場合は、対応するパーティション定義が自動的に更新または削除され、変更内容が反映されます。

パーティションの修復は、次の場合に必要となることがあります:

アプリケーションやデータベースに対して、異なるツール(MaxL など)を使用して名前の変更やコピーを行った場合、Administration Services で他方のパーティショ

ンの対応する .adb ファイルを見つけられなくなることがあります。Administration Services がなんらかの理由でパーティションのソースとターゲットの両方を判断できなくなった場合には、エンタープライズ・ビューの「孤立パーティション」ノードにパーティションが表示され、修復や削除が行えるようになります。両方の .adb ファイルが正しい場所にあっても無効な場合は、エンタープライズ・ビューの「ソース・データベース」または「ターゲット・データベース」ノードでソースまたはターゲットのパーティションを選択して、無効な情報を修復できます。

注： この機能は、リリース 6.5.3 以降の Essbase サーバーに接続している場合のみ使用できます。

▶ パーティションを修復するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 「パーティション」ノードの下で修復するソースまたはターゲットのパーティション定義を探るか、または「孤立パーティション」ノードの下でパーティション定義を探します。
- 3 パーティションを右クリックして、「パーティションの修復」を選択します。
「パーティションの修復」ダイアログ・ボックスが開きます。編集できるのは、修復の必要があるフィールドのみです。
- 4 無効なフィールドを編集し、「修復」をクリックします。
Essbase では正しい情報が .adb パーティション定義ファイルに保存されます。
- 5 修復が完了した後でパーティションを編集するには、エンタープライズ・ビューでパーティションを右クリックして、「パーティションの編集」を選択します。
- 6 無効なパーティションを修復できず、もう一方の有効なパーティションを削除する場合は、エンタープライズ・ビューでそのパーティションを右クリックして、「パーティションの削除」を選択します。

関連情報

- [677 ページの「パーティションの修復」ダイアログ・ボックス](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [423 ページの「パーティションの作成」](#)
- パーティション・アプリケーションの設計(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- パーティションの作成および維持(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- drop partition with force(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティション定義のエクスポート

パーティション・データベースに対してデータベース・マネージャ権限を持っているユーザーは、パーティション定義をエクスポートできます。Essbase サーバーに保存されたパーティション定義をファイル・システムまたはネットワークにエクスポートできます。エクスポートしたパーティション定義は、.xml ファイルとして保管されます。

パーティションのエクスポートは、パーティション定義のバックアップ・コピーを保存するための手段となります。

▶ パーティション定義をエクスポートするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを展開します。
- 3 エクスポートするパーティションの場所に応じて、「ソース・データベース」ノードまたは「ターゲット・データベース」ノードを展開します。
- 4 パーティションを選択します。
- 5 右クリックして「パーティションのエクスポート」を選択します。
- 6 「パーティションのエクスポート」で、パーティションのエクスポート先のディレクトリに移動します。
- 7 「ファイル名」で、エクスポート・ファイルの名前を入力します。

エクスポートするパーティション定義ファイルには、デフォルトで.xml の拡張子が付けられます。インポートするパーティション定義ファイルの拡張子は.xml である必要があります。

- 8 「保存」をクリックします。

関連情報

- [439 ページの「パーティション定義のインポート」](#)
- [606 ページの「「パーティションのエクスポート」ダイアログ・ボックス」](#)

パーティション定義のインポート

データベース・マネージャ権限がある場合は、以前にエクスポートしたパーティション定義をインポートして、Essbase サーバーに保存できます。パーティション定義は、ファイル・システムまたはネットワーク・ドライブからインポートできます。

インポートできるのは、拡張子が.xml のパーティション定義ファイルのみです。Administration Services を使用してパーティションをエクスポートすると、.xml という拡張子が付けられます。.ddb ファイルはインポートできません。

▶ パーティション定義をインポートするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。

- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを右クリックし、「パーティションのインポート」を選択します。
- 3 「パーティション・ファイルのインポート」で、パーティションを含むディレクトリに移動します。
- 4 ファイルを選択して、「開く」をクリックします。
- 5 パーティションを[検証](#)して[保存](#)します。

関連情報

- [439 ページの「パーティション定義のエクスポート」](#)
- [625 ページの「「パーティション・ファイルのインポート」ダイアログ・ボックス」](#)

アウトラインの同期化

データベースをパーティション化すると、ソース・データベースのパーティション化された領域にあるすべての次元とメンバーを、ターゲット・データベースの対応する次元とメンバーにマッピングできるようになります。ソース・データベース・アウトラインやターゲット・データベース・アウトラインのパーティション化された領域に変更を加えると、パーティションが無効になることがあります。パーティションが正しく機能し続けるには、ソースおよびターゲットのパーティション化されたすべての次元とメンバーがマッピング可能な状態に、アウトラインを戻す必要があります。

アウトライン同期は、アウトラインの同期を維持しパーティションを管理するために役立つツールです。

注： 集約ストレージ・データベースがパーティションのソースである場合は、アウトライン同期を使用できません。

アウトラインの変更は、ソース・データベース・アウトラインからターゲット・データベース・アウトラインに波及させる場合もあれば、その逆の方向に波及させる場合もあります。ソース・データベースとターゲット・データベースの間で、どちらの方向にアウトラインの変更を波及させるかは、[パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ\(「タイプ」タブ\)](#)で管理します。「アウトラインの変更方向はデータの変更方向と同じ」オプションを選択した場合、アウトライン同期におけるソースおよびターゲットのアウトラインは、パーティションにおけるソース・データベース・アウトラインおよびターゲット・データベース・アウトラインと同じになります。このオプションを選択しない場合、アウトライン同期におけるソースおよびターゲットのアウトラインが逆になります;つまり、同期でのソース・アウトラインは、パーティションのターゲット・データベース・アウトラインになります。

注： マルチバイト文字が含まれる、Unicode モードではないアウトラインは、Administration Services で同期化できません。問題の回避策として、MaxL シェル(essmsh)または ESSCMD を使用すると、このようなアウトラインを同期できます。

▶ アウトラインを同期化するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、ソースまたはターゲットのデータベースを選択します。
- 2 データベース・ノードの下で、「パーティション」ノードを展開します。
- 3 パーティションを選択します。
- 4 右クリックして「アウトラインの同期」を選択します。

- 5 「**アウトラインの同期**」ダイアログ・ボックスの「次元」ノード、「メンバー」ノードおよび「メンバーのプロパティ」ノードの下で、アウトラインの同期において、含める変更は選択し、除外する変更は選択を解除します。一部の変更を除外するよう選択した場合、それらの変更は後で適用できません。

すべての変更を含める場合は、「すべて選択」をクリックします。どの変更も含めない場合は、「何も選択しない」をクリックします。

- 6 ターゲット・アウトラインとソース・アウトラインの古い変更ログを削除する場合は、「削除」をクリックします。

Essbase では、適用済または拒否済のすべてのレコードが変更ログから削除されます。すべてのレコードが適用済または拒否済の場合は、Essbase では変更ログも削除されます。Essbase では、ターゲット・アウトラインにまだ適用されていないレコードは削除されません。

- 7 「適用」をクリックします。

関連情報

- [694 ページの「「アウトラインの同期」ダイアログ・ボックス](#)
- アウトラインの同期化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)

関連コマンド

- `applyotlchange`(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getpartitionotlchanges`(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `purgeotlchange`(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `resetoatlchangetime`(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

トリガーについて	443
トリガーの作成	444
トリガーの表示	445
トリガーの編集	445
トリガーの削除	446
トリガーの使用可能化および無効化	447
トリガー・スプール・ファイルの表示	447

トリガーについて

トリガーを使用すると、データベース内のデータの変更を効果的に監視できます。トリガーで指定した条件をデータが満たすと、Essbase から(ユーザーまたはシステム管理者に)電子メール・アラートを送信したり、関連情報をログ・ファイルに記録したりできます。たとえば、Western 地域で、月次売上が前年同月の売上を下回った場合に、トリガーからセールス・マネージャに電子メールを送信することが可能です。

注： 集約ストレージ・データベースでは、更新完了時トリガーのみがサポートされています。

トリガーを管理するには、データベース・デザイナー以上の権限が必要です。Essbase では次のアクティビティが監視され、必要に応じてトリガーがアクティブ化されます：

- データ・ロード
- 計算
- Spreadsheet Add-in からのロックして送信

Essbase では、データベースの再構築時はトリガーはアクティブ化されません。有効および無効なトリガーに関する情報は、実行中の Essbase サーバーのアプリケーション・ログ・ファイルで確認できます。

注： Essbase から電子メール・アラートを送信できるようにするには、Java Virtual Machine(JVM)をインストールしておく必要があります。

関連情報

- [444 ページの「トリガーの作成」](#)
- [445 ページの「トリガーの編集」](#)
- [446 ページの「トリガーの削除」](#)
- [447 ページの「トリガーの使用可能化および無効化」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

トリガーの作成

トリガーを作成して、データベース内のデータの変更を監視できます。トリガーを作成するには、データベース・マネージャ以上の権限が必要です。

計算やデータ・ロード(ロックして送信を含む)を行っている最中にトリガーを作成することはできません。

注： 動的計算メンバーのデータ、ハイブリッド分析メンバーのデータ、または別のパーティションのメンバーのデータが必要となるようなトリガーは定義できません。

▶ トリガーを作成するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「トリガー」を選択します。
- 3 「データベース・トリガー」・ウィンドウで、「新規」をクリックします。
- 4 「新規トリガー」ダイアログ・ボックスで、それぞれのテキスト・ボックスに適切な情報を入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase でトリガーが作成され、データベース・トリガー・ウィンドウに表示されます。次のアクティビティで条件に一致するとトリガーがアクティブ化されます:

- データ・ロード
- 計算
- Spreadsheet Add-in からのロックして送信(集約ストレージ・データベースや、ブロック・ストレージ・データベースまたは集約ストレージ・データベースにおける更新完了時トリガーには適用されません)

関連情報

- [650 ページの「新しいトリガー」および「トリガーの編集」ダイアログ・ボックス](#)
- [443 ページの「トリガーについて」](#)

- [445 ページの「トリガーの編集」](#)
- [446 ページの「トリガーの削除」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

create trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

トリガーの表示

トリガーを表示して、その定義内容や有効になっているかどうかを確認できます。

▶ トリガーを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「トリガー」を選択します。

データベース・トリガー・ウィンドウに、データベース用に定義されたトリガーが表示されます。このウィンドウでは、トリガーを[作成する](#)、[編集する](#)、[使用可能にする/使用不可にする](#)または[削除する](#)ことができます。

関連情報

- [580 ページの「データベース・トリガー・ウィンドウ」](#)
- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [445 ページの「トリガーの編集」](#)
- [447 ページの「トリガーの使用可能化および無効化」](#)
- [446 ページの「トリガーの削除」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

display trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

トリガーの編集

トリガーの定義を編集できます。トリガーを編集するには、データベース・マネージャ以上の権限が必要です。

▶ トリガーを編集するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「トリガー」を選択します。

- 3 「データベース・トリガー」・ウィンドウで、トリガーを選択して「編集」をクリックします。
- 4 「[トリガーの編集](#)」ダイアログ・ボックスで、フィールドを編集します。
- 5 「OK」をクリックします。
トリガーが更新されます。

関連情報

- [650 ページの「新しいトリガー」および「トリガーの編集」ダイアログ・ボックス](#)
- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [444 ページの「トリガーの作成」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

create trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

トリガーの削除

不要になったトリガーは、削除できます。トリガーを削除するには、データベース・マネージャ以上の権限が必要です。

- ▶ トリガーを削除するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして「編集」>「トリガー」を選択します。
 - 3 「データベース・トリガー」・ウィンドウで、トリガーを選択して「削除」をクリックします。
 - 4 確認のプロンプトで「はい」をクリックします。
トリガーが削除されます。

関連情報

- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [444 ページの「トリガーの作成」](#)
- [445 ページの「トリガーの編集」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

drop trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

トリガーの使用可能化および無効化

無効になっているトリガーを有効にしたり、有効になっているトリガーを無効にしたりできます。デフォルトでは、トリガーは作成時に有効になります。

また、アプリケーション・セッション中にすべてのトリガーを無効にすることも可能です。

▶ トリガーを有効にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「トリガー」を選択します。
- 3 「データベース・トリガー」・ウィンドウで、使用不可なトリガーを選択して「使用可能にする」をクリックします。

▶ トリガーを無効にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
- 2 そのデータベースの下のノードから、「トリガー」をダブルクリックします。
- 3 「データベース・トリガー」・ウィンドウで、使用可能なトリガーを選択して「使用不可にする」をクリックします。
- 4 **オプション:** 現在のデータベース・セッションですべてのトリガーを無効にするには、「すべて中断」をクリックします。

注: アプリケーションを閉じると、「すべて中断」をクリックする前の状態(有効または無効)にトリガーが戻ります。

関連情報

- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [580 ページの「データベース・トリガー・ウィンドウ」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

alter trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

トリガー・スプール・ファイルの表示

トリガーがアクティブ化されたときに生成されるスプール・ファイルを表示できます。

▶ トリガー・スプール・ファイルを表示するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。

2 右クリックして「編集」>「スプール・ファイルの表示」を選択します。

データベース・トリガー・スプール・ファイル・ウィンドウにスプール・ファイルが表示されます。このウィンドウでは、スプール・ファイルを表示または削除できます。

3 ファイルのコンテンツを表示するには、ファイルを選択して「表示」をクリックします。ファイルを削除するには、ファイルを選択して「削除」をクリックします。

「すべて削除」をクリックすると、すべてのスプール・ファイルを削除できます。

関連情報

- [579 ページの「データベース・トリガー・スプール・ファイル・ウィンドウ」](#)
- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [444 ページの「トリガーの作成」](#)
- [650 ページの「新しいトリガー」および「トリガーの編集」ダイアログ・ボックス](#)
- [446 ページの「トリガーの削除」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

display trigger spool(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

この章の内容

Essbase 通貨換算について	449
通貨の換算	450
通貨換算のためのメイン・データベース・アウトラインの準備	450
国次元のタグ付け	451
通貨パーティションの作成	452
通貨データベース・アウトラインの生成	452
データベースから通貨データベースへのリンク	454
通貨換算の計算	454
国メンバーへの通貨名の割当て	456
通貨換算の追跡	456
通貨換算のトラブルシューティング	457

Essbase 通貨換算について

Essbase の通貨換算を使用すると、様々な国の財務データを単一の基本通貨に変換できます。この換算によって、様々な国を同一の尺度で比較できるようになります。また、通貨換算により、複数の地域の財務データの集計もできます。

たとえば、ある組織がイギリス(ポンドを使用)と日本(円を使用)から報告される収益データを分析するとします。2つの国の相対的な貢献度を把握するには、ポンドを円に換算するか、円をポンドに換算するか、または両方の数値を別の通貨に換算する必要があります。

また、米国、メキシコおよびカナダの収益をすべて北米合計に合算する場合、それぞれのデータが現地通貨のままであると、各国の収益値の集計は無意味なものとなります。北米合計を正しく求めるには、すべての現地通貨を単一の基本通貨に換算してから合算する必要があります。

通貨換算アプリケーションの作成方法は、[450 ページの「通貨の換算」](#)を参照してください。

注： 通貨換算は、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

関連情報

- [450 ページの「通貨の換算」](#)
- [457 ページの「通貨換算のトラブルシューティング」](#)

- 通貨換算アプリケーションのデザインおよび作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

通貨の換算

通貨換算が必要なビジネス・アプリケーションの場合、Essbase のデータベースは少なくとも2つのスライスに分割されます。1つ目のスライスは現地データの入力を処理し、2つ目のスライスは単一の共通通貨に換算したデータのコピーを保持し、比較や集計に使用できるようにします。Essbase では、通貨換算に必要なレートは通貨データベースに保持されます。通常、Essbase によってメイン・データベースから自動的に生成される通貨データベース・アウトラインにより、特定の換算レートがメイン・データベースのセクションにマッピングされます。

注： 通貨換算は、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

▶ 通貨換算アプリケーションを作成して換算をプロセスするには:

- 1 メイン・データベースのアウトラインを作成するか、開きます。
- 2 通貨換算のために、メイン・データベースのアウトラインを準備します。
- 3 通貨データベースのアウトラインを生成します。
- 4 メイン・データベースと通貨データベースをリンクします。
- 5 通貨換算を計算します。
- 6 通貨換算を追跡します。
- 7 必要に応じて、通貨換算のトラブルシューティングを行います。

関連情報

- 449 ページの「Essbase 通貨換算について」
- 通貨換算アプリケーションのデザインおよび作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

通貨換算のためのメイン・データベース・アウトラインの準備

メイン・データベース・アウトラインの次元とメンバーを変更して、Essbase で通貨データベース・アウトラインが自動的に生成されるようにします:

- ▶ 通貨換算の準備のために、メイン・データベース・アウトラインを変更するには:
- 1 アウトラインを開くか作成します。
 - 2 次元に時間のタグを付けます(時間次元がない場合)。
 - 3 次元に会計のタグを付けます(会計次元がない場合)。

- 4 **通貨カテゴリの割当て**を会計次元とその次元内のメンバーに対して実行し、複数のカテゴリの換算レートを処理できるようにします。換算しないメンバーにはすべて「換算しない」タグを付けます。「換算しない」タグは継承されません。
- 5 **1つの次元に国のタグを付けます。**
- 6 **通貨名の割当て**を、それぞれの国に対して実行します。
- 7 **オプション: 通貨パーティション**を作成して、Essbase でデータベースのどの部分に現地のデータおよび基準データを保持するかを指定します。
- 8 データを保持しない次元とメンバーに「ラベルのみ」タグを適用します。詳細は、**メンバー集計プロパティの設定**を参照してください。
- 9 **アウトラインを保存**します。
データベースにすでにデータ値が含まれている場合、データベースは Essbase によって再構築され、アウトラインへの変更が反映されます。
- 10 **通貨データベースのアウトラインを生成**します。

関連情報

- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [通貨の換算](#)
- [452 ページの「通貨データベース・アウトラインの生成」](#)
- [データベースから通貨データベースへのリンク](#)
- [457 ページの「通貨換算のトラブルシューティング」](#)

国次元のタグ付け

通貨換算のためにメイン・データベース・アウトラインを準備する際には、1つの次元に国のタグを付けて、複数の国のビジネス活動を追跡できるようにする必要があります。国次元の中では、それぞれのメンバーが使用する通貨タイプを指定できます。詳細は、[国メンバーへの通貨名の割当て](#)を参照してください。

▶ 次元に国のタグを付ける手順は、次のとおりです:

- 1 **アウトラインを開きます。**
- 2 次元を選択して右クリックし、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「メンバーのプロパティ」・ウィンドウで、「情報」タブを選択します。
- 4 「次元タイプ」に「国」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

関連情報

- [Essbase 通貨換算について](#)
- [通貨の換算](#)
- [456 ページの「国メンバーへの通貨名の割当て」](#)

- [638 ページの「\[メンバーのプロパティ\] ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

通貨パーティションの作成

通貨換算のためにメイン・データベース・アウトラインを準備する際には、通貨パーティションを作成して、Essbase で現地のデータと基準データをデータベースのどのスライスに保持するかを指定します。通貨パーティションのタグを付ける次元には、現地の値と基準の値の両方のメンバーが含まれています; これにより、ユーザーが現地の通貨単位で入力するデータが保持されます。現地のデータは、通貨換算の計算スクリプトを使用して、基準データに変換されます。[454 ページの「通貨換算の計算」](#)を参照してください。

注: 通貨換算パーティションは、通貨換算オプションのみに適用されます。これは、複製パーティション、リンク・パーティション、透過パーティションを使用してデータベース間でデータを共有できるパーティショニング・オプションとは関係ありません。

▶ メイン・データベースに通貨パーティションを作成するには:

- 1 [アウトラインを開きます](#)。
- 2 通貨パーティションのタグを付ける次元を選択します。
- 3 右クリックして「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 4 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「情報」タブを選択します。
- 5 「次元タイプ」ドロップダウン・リストで、「通貨パーティション」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

関連情報

- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [通貨の換算](#)
- [454 ページの「通貨換算の計算」](#)
- [638 ページの「\[メンバーのプロパティ\] ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

通貨データベース・アウトラインの生成

メイン・データベース内のメンバーに通貨タグを割り当てると、Essbase では通貨データベースが自動的に作成されます。通貨データベースは、必ず次の 4 つの次元で構成されます:

- 時間次元。一般に、メイン・データベース内の時間次元と同じです。このため、通貨データベースでは、長期にわたる通貨の変動を追跡し、メイン・データベースの異なる時間スライスを正確に変換できます。

- 通貨カテゴリ次元。メイン・データベース内の会計のタグが付けられた次元のメンバーに様々なレートを適用できます。会計次元用に定義されたカテゴリから、通貨データベースの通貨カテゴリ次元メンバーが生成されます。たとえば、総利益(Gross Profit)と純利益(Net Profit)の換算には特定のカテゴリのレートを使用し、その他の勘定科目の換算には他のレートを使用する必要があります。
- 国次元。実際の現地通貨(米国ドル、カナダドル、ドイツユーロなど)ごとのレートのみが格納されます。
- 通貨タイプ次元。異なる通貨換算シナリオを利用できます。たとえば、企業では実績レートとプラン・レートを格納する場合があります。シナリオ間でデータ換算を行うには、使用するレートのタイプを選択します。

通貨アウトラインの生成時に、この次元が作成されます。この次元は、メイン・データベースには直接マップされません。このため、この次元内のメンバー名は、メイン・データベース内のメンバー名と一致していなくてもかまいません。

- ▶ 既存のメイン・データベース・アウトラインから、通貨データベース・アウトラインを作成するには:

- 1 メイン・データベースのアウトラインを**開く**か**作成**します。
- 2 **通貨換算のために、メイン・データベースを準備**します。
- 3 「アウトライン」>「通貨データベースの生成」を選択します。
- 4 「通貨アウトラインの生成」ダイアログ・ボックスで、通貨データベースを選択するか、または『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』に記載されている適切な命名ルールに従って新しい通貨データベースの名前を入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

Essbase で通貨データベース・アウトラインが生成され、表示されます。これで、通貨アウトラインの任意の次元にメンバーを追加できます。

- 6 **通貨データベースをメイン・データベースにリンク**します。

注： 通貨データベースは、通常データベースと同じように、手動で作成することも可能です。103 ページの「データベースの作成」を参照してください。

関連情報

- 622 ページの「**「通貨アウトラインの生成」ダイアログ・ボックス**」
- 449 ページの「**Essbase 通貨換算について**」
- **通貨の換算**
- 450 ページの「**通貨換算のためのメイン・データベース・アウトラインの準備**」
- 454 ページの「**データベースから通貨データベースへのリンク**」
- 457 ページの「**通貨換算のトラブルシューティング**」

データベースから通貨データベースへのリンク

通貨換算アプリケーションは、メイン・データベースと通貨データベースという2つのデータベースから構成されます。通貨換算を実行するには、その前にメイン・データベースを通貨データベースにリンクする必要があります。データベース・マネージャ権限を持っているユーザーは、リンク先の通貨データベース、使用する換算計算方法、およびデフォルトの通貨タイプ・メンバーを選択できます。

- ▶ データベースを通貨データベースにリンクし、関連する設定項目を指定するには:
- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、目的のデータベースを選択します。
 - 2 右クリックして、「編集」>「プロパティ」を選択します。
 - 3 「データベース・プロパティ」・ウィンドウで、「通貨」タブを選択します。
 - 4 「通貨データベース」オプションで、リンクする通貨データベースを選択します。
 - 5 「換算方法」で、「除算」または「乗算」を選択します。
 - 6 「デフォルトの通貨タイプのメンバー」で、通貨換算でデフォルトとして使用する通貨タイプ・メンバーを入力します。通貨データベースで CurType 次元の有効なメンバーを任意に指定できます。
 - 7 「適用」をクリックして設定を適用し、通貨データベースへのリンクを作成します。

関連情報

- [568 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「通貨」タブ」](#)
- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [通貨の換算](#)
- [457 ページの「通貨換算のトラブルシューティング」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

通貨換算の計算

通貨換算アプリケーションを作成した後、計算スクリプト内の CCONV コマンドを使用して、現地通貨のデータ値を共通通貨に換算します。たとえば、様々な通貨のデータを US\$ に換算できます。データをオリジナルの現地通貨に換算しないおすには、CCONV TOLOCALRATE コマンドを使用します。

通貨データベースで定義した換算レートを使用して、メイン・データベースのすべて、または一部を換算できます。データの追跡やレポートの必要性に応じて、

現地の値を換算した値で上書きすることも、現地の値と換算した値の両方をメイン・データベースに保持することも可能です。

注： CCONV コマンドを使用して通貨を変換した場合、結果のデータ・ブロックは、高機能計算のためにダーティとしてマークが付けられます。つまり、Essbase は、データベースの再計算を行った場合、変換されたブロックをすべて再計算します。

通貨換算の計算スクリプトの例については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

関連情報

- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [450 ページの「通貨の換算」](#)
- [456 ページの「通貨換算の追跡」](#)
- [457 ページの「通貨換算のトラブルシューティング」](#)

関連コマンド

- `cconv`(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `set uptolocal`(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `currency`(レポート・コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `set cctrackcalc`(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `clearcctrack`(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベースの計算

換算実行後に `CALC ALL` コマンドを実行してデータベースを集計する場合、換算された基本レートのパーティションに有意義な合計レベルのデータが生成されませんが、現地レートのパーティションには現地通貨の値の意味を成さない集計が含まれることとなります。これを防ぐには、`SET UPTOLOCAL` という計算コマンドを使用して、定義済の同一通貨を持つ親に集計を制限します。たとえば、米国のすべての都市では通貨単位としてドルを使用しているのに、米国のすべての子は米国に集計します。しかし、北米には他の通貨を使用する国が含まれるため、集計はこのレベルで停止します。

レポート・スクリプトの使用

また、`CURRENCY` コマンドを使用して出力通貨と通貨タイプを設定すると、レポート・スクリプトで通貨換算を計算できます。

注： Essbase では、透過パーティションのデータベースにわたるオンザフライ通貨変換を実行できません。異なる換算を使用して計算される透過パーティションのデータベースが2つある場合は、レポートで通貨換算を計算できません。

国メンバーへの通貨名の割当て

通貨換算のためにメイン・データベースのアウトラインを準備する際には、国次元およびそのメンバーに通貨名を割り当てる(たとえば、アメリカにはドルを、ドイツにはユーロを割り当てる)必要があります。複数のメンバーが同じ通貨名を使用していることが多いため、通貨名の数、通常は次元内のメンバー数よりも少なくなります。

国次元のメンバーに通貨名を割り当てると、それぞれの通貨に対するメンバーが通貨データベースに作成されます。国次元の最上位の次元メンバー名には、基準通貨の名前(たとえば US\$)を設定するようにしてください。これによって、国次元の下位階層に基準通貨が継承されます。あるメンバーの子が、親と同じ単一の通貨を使用している場合には、親メンバーの通貨名のみを定義する必要があります。

▶ 国次元の各メンバーに通貨名を割り当てる手順は、次のとおりです:

- 1 メンバーを国としてタグ付けしていない場合は、[国次元のタグ付け](#)を参照してください。
- 2 国としてタグ付けされている次元を選択して右クリックし、「メンバー・プロパティの編集」を選択します。
- 3 「情報」タブを選択して、「通貨名」ノードを探します。
- 4 国次元の通貨名を指定します(たとえば、US\$)。
- 5 前述の手順を繰り返して、国次元の各メンバーに通貨名を定義します。

関連情報

- [Essbase 通貨換算](#) について
- [450 ページの「通貨の換算」](#)
- [国次元のタグ付け](#)
- [457 ページの「通貨換算のトラブルシューティング」](#)
- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ](#)

通貨換算の追跡

essbase.cfg ファイルで CCTRACK 設定を使用すると、Essbase で変換された通貨パーティションとその変換に使用された為替レートを追跡するかどうかを制御できます。デフォルトでは、Essbase は変換された通貨パーティションを追跡しません。通貨換算の追跡の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [通貨の換算](#)
- [454 ページの「通貨換算の計算」](#)

関連コマンド

- `cctrack(essbase.cfg 設定)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `cconv tolocalrate`(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `set cctrackcalc`(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `clearcctrack`(計算コマンド)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

通貨換算のトラブルシューティング

通貨換算のトラブルシューティング:

- 通貨データベースをメイン・データベースにリンクしようとしてエラーが発生した場合は、メイン・データベースが次の条件を満たしていることを確認してください:
 - 1つの次元に時間のタグが付けられています。
 - 1つの次元に会計のタグが付けられています。
 - 会計次元には、換算する勘定科目のカテゴリ用に定義された[通貨換算カテゴリ](#)があります。
 - 換算しない会計次元のすべてメンバーに「換算しない」タグが付けられています。「換算しない」タグは継承されません。
 - 1つの Market 次元に国のタグが付けられています。
 - 国次元には、[通貨名](#)が割り当てられます(次元の各メンバーに個別に通貨名が割り当てられている場合も同様)。
 - 国次元の各メンバーは、通貨名が関連付けられているか、または次元レベルで定義された通貨を継承しています。
- 通貨データベースをメイン・データベースにリンクしようとしてエラーが発生した場合は、通貨データベースが次の条件を満たしていることを確認してください:
 - 1つの次元に時間のタグが付けられています。
 - 時間次元には、メイン・データベースの時間次元に定義された各メンバーが含まれています。各メンバーが含まれており、綴りが正しいことを確認します。
 - メイン・データベースで動的時系列メンバーを使用している場合は、通貨データベースでも動的時系列メンバーを使用する必要があります。
 - 1つの次元に会計のタグが付けられています。通貨データベースの会計次元には、メイン・データベースに定義された勘定科目カテゴリが含まれています。

- 1つの次元に国のタグが付けられており、メイン・データベースで国としてタグ付けされた次元で使用される通貨名が含まれています。各通貨が含まれ、綴りが正しいことを確認します。
- 通貨データベースが開始していることを確認します。
- 通貨データベースをメイン・データベースにリンクしようとしたときに発生するエラー(「データベースをロードできません」など)については、多くの場合、[アプリケーション・ログ](#)を参照するとより詳しい情報が得られます。
- `essbase.cfg` ファイルで `CCTRACK` 設定がオンになっているために、通貨データが変換されないことがあります。
- 変換した後に基準データが `#Missing` 値になった場合は、通貨データベースの関連するレートが `#Missing` に設定されていないか確認してください。
- 状況に応じて、基本レート・パーティションにデータを入力し、`CCONV TOLOCALRATE` コマンドを使用して現地レートに変換する必要がある場合もあります。この操作は直接実行できません。これは、Essbase では `CCTRACK` パーティション・フラグを未変換として読み取るためです。回避策として、最初に空のパーティション(現地データを保持するためのパーティション)に対して `CCONV` コマンドを実行し、続いてパーティションにデータを移動します。このパーティションに対して `CCONV TOLOCALRATE` を実行すると、正常に処理されます。これは、Essbase では `CCTRACK` フラグを変換済として読み取り、パーティションをすでに変換していると解釈するためです。

通貨に関連する特定のエラー・メッセージのトラブルシューティングについては、『Oracle Essbase エラー・メッセージ・リファレンス』を参照してください。

関連情報

- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [450 ページの「通貨の換算」](#)
- 通貨換算アプリケーションのデザインおよび作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

この章の内容

Provider Services について	459
Provider Services の追加	460
クライアントのアップグレードの自動配置	460
Provider Services への接続	461
Provider Services の切断	461
セッションの監視	462
アイドル・セッションのタイムアウトの指定	463
ロギング・プロパティの指定	463
最大行数および列数の指定	464
Provider Services のリストのリフレッシュ	464
Provider Services の削除	465
スタンドアロン・サーバー	465
分析クラスタ	467

Provider Services について

Provider Services は、Java API、XMLA、および Smart View クライアント向けに提供される中間層データ・ソース・プロバイダです。このプロバイダは Essbase サーバーと対話し、Web を使用可能な分散型エンタープライズ環境での拡張性と信頼性を提供します。

Provider Services は、管理サービス・コンソールを介して管理されます。

管理サービス・コンソールでは、次の操作を実行できます:

- Provider Services の管理
- Java API、XMLA、および Smart View クライアントからアクセスされるスタンドアロン Essbase サーバーの追加、削除、およびリスト作成
- 分析クラスタの作成、削除、およびリスト作成
- 分析クラスタに属する Essbase データベースの追加および削除
- 分析クラスタに含まれるデータベース・コンポーネントの使用可能化および無効化
- Provider Services セッションの監視
- 表示するログ・メッセージのタイプ設定

Provider Services の追加

さまざまな Provider Services を追加して Administration Services で管理できます。

▶ Provider Services を追加するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「Provider Services の追加」を選択します。
- 3 「Provider Services の追加」ダイアログ・ボックスで、「プロバイダ名」に Provider Services サーバー名(localhost など)を入力します。
- 4 「URL」で「Provider Services」プロバイダの URL をクリックすると、入力した Provider Services サーバーの名前が自動的に URL に適用されます(http://localhost:13080/aps/APS など)。
- 5 「OK」をクリックします。

プロバイダ名は、「Provider Services」ノードの下に表示されます。

関連情報

- [459 ページの「Provider Services について」](#) について
- [462 ページの「セッションの監視」](#)
- [468 ページの「分析クラスタの追加」](#)
- [466 ページの「スタンドアロン・サーバーの追加」](#)
- [461 ページの「Provider Services への接続」](#)
- [464 ページの「Provider Services のリストのリフレッシュ」](#)
- [465 ページの「Provider Services の削除」](#)
- [467 ページの「スタンドアロン・サーバーの削除」](#)
- [470 ページの「分析クラスタの削除」](#)

クライアントのアップグレードの自動配置

▶ Smart View クライアントを自動的に配置するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードの下プロバイダ・ノードを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Provider Services プロパティ」で、「クライアントの配置」を選択します。

4 次のいずれかのオプションを選択します:

- **Smart View クライアントにアップグレードを強制** - Smart View を引き続き使用するために、ユーザーにアップグレードを要求します。
- **Smart View クライアントにアップグレードを警告** - 新しいバージョンの Smart View が利用可能であることをユーザーに通知します。ユーザーは、アップグレードなしで既存の Smart View クライアントを引き続き使用できます。
- **「Smart View クライアントをアップグレードに適用」**: 管理者は、Provider Services を再開せずに新しいバージョンの Smart View を適用してユーザーに通知できます。

5 「適用」をクリックします。

6 「閉じる」をクリックします。

7 Provider Services ディレクトリの C:\Hyperion\AnalyticProviderServices\redist で、version.xml を変更して</externalVersion>行の後に Provider Services の URL の行を追加します:

```
http://<server_name>:13080/aps/SmartView>downloadClient
```

Provider Services への接続

Provider Services の接続が確立されており、クライアントが接続可能であることを確認してください。

▶ Provider Services に接続するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードの下の子の名を選択します。
- 2 右クリックして「接続」を選択します。

Provider Services がオンライン状態になります。

関連情報

- [460 ページの「Provider Services の追加」](#)
- [461 ページの「Provider Services の切断」](#)
- [464 ページの「Provider Services のリストのリフレッシュ」](#)
- [465 ページの「Provider Services の削除」](#)

Provider Services の切断

Provider Services をアップグレードなどのためにオフラインにする場合は、切断する必要があります。

▶ Provider Services を切断するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードの下のプロバイダ・ノードを選択します。
- 2 右クリックして「切断」を選択します。
Provider Services がオフラインになります。

関連情報

- [460 ページの「Provider Services の追加」](#)
- [461 ページの「Provider Services への接続」](#)
- [465 ページの「Provider Services の削除」](#)

セッションの監視

Provider Services に接続するユーザーのセッションを監視するには、このウィンドウを使用します。すべてのユーザーのセッションを表示することも特定ユーザーのセッションを表示することも可能です。また、実行中のセッション・タイプ、Smart View、Java API、または XMLA を表示できます。

▶ Provider Services セッションを監視するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Analytic Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 ユーザー・アクティビティを表示するには、「ユーザーのセッションを表示」を選択し、ユーザー・リストから選択します。
- 3 セッションを表示するには、「次のタイプのセッションを表示」を選択し、「Java」、「XMLA」または「SMARTVIEW」を選択します。
- 4 右クリックして「セッション」を選択します。

Smart View プロバイダのセッション・ウィンドウが表示され、次の情報のリストが表示されます:

- 「セッション」: アクティブなセッション ID
- 「セッション・タイプ」: スタンドアロン・サーバーまたはクラスタからの要求のタイプ
- 「モード」: スタンドアロン・サーバー・モード(サーバー)または分析クラスタ・モード(クラスタ)
- 「ユーザー」: 要求を生成したユーザー
- 「Essbase サーバー」: 作成された要求の対象となる Essbase サーバーの名前
- 「アプリケーション」: アプリケーションの名前
- 「データベース」: データベースの名前
- 「要求時間」: 要求が作成された時間
- 「要求」: 現在実行中の要求の名前(存在する場合)

- 5 表示を更新するには、「リフレッシュ」をクリックします。

関連情報

[セッションのタイムアウトの指定](#)

アイドル・セッションのタイムアウトの指定

この手順は、セッションがタイムアウトするまでに非アクティブ状態になっている時間(分)を指定するために使用します。

▶ アイドル・セッションのタイムアウト制限を指定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードの下のプロバイダ・ノードを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Provider Services プロパティ」で、「設定」を選択します。
- 4 「セッションのタイムアウト(分)」で、セッションがタイムアウトするまで非アクティブになる分数を指定します。

デフォルトは 60 分です。セッションがタイムアウトした場合は、Smart View クライアントは接続マネージャを使用して Provider Services に再接続する必要があります。

- 5 「適用」をクリックします。
- 6 「閉じる」をクリックします。

関連情報

[462 ページの「セッションの監視」](#)

ロギング・プロパティの指定

ログ・メッセージのレベルを指定したり XML トレースを有効にしたりするには、このタスクを使用します。

▶ ログ設定を変更するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードの下のサーバーを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Provider Services プロパティ」・ウィンドウで、「ロギング」を選択します。
- 4 「ロギング」の下で、「ログ・ファイルにメッセージを送信するために「プロバイダのロギングを使用可能にする」を選択し、ログ・ファイルのパスを指定します。
- 5 「最小ログ・レベル」の下で、ログ・レベルを選択します:
 - 「警告」: 警告、エラー、および致命的メッセージを表示
 - 「情報」: 情報、警告、エラー、および致命的メッセージを表示

- 「デバッグ」: デバッグ、情報、警告、エラー、および致命的メッセージを表示
- 6 「プロバイダのコンソールにメッセージを表示」を選択して、Provider Services の起動メッセージ・コンソール・ウィンドウにメッセージを送ります。
- 7 「トレース」の下で「プロバイダのログギングを使用可能にする」を選択して、クライアントと Provider Services の間の XML 要求の応答についてトレースを有効にします。
- 8 「適用」をクリックします。
- 9 「閉じる」をクリックします。

最大行数および列数の指定

この手順は、グリッド内に取得する最大の行数と列数を指定するために使用します。

▶ 最大行数および列数を指定するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードの下のプロバイダ・ノードを選択します。
- 2 右クリックして「編集」>「プロパティ」を選択します。
- 3 「Provider Services プロパティ」で、「設定」を選択します。
- 4 「最大行数」で、取得する行数を指定します。
デフォルトは 1000 です。
- 5 「最大列数」で、取得する列数を指定します。
デフォルトは 255 です。
- 6 「適用」をクリックします。
- 7 「閉じる」をクリックします。

注: 最大行数および列数を変更した場合、変更は既存のセッションには適用されず、Smart View クライアントが Provider Services の新しいセッションに接続したときに適用されます。

Provider Services のリストのリフレッシュ

この手順は、Provider Services を追加したり削除したりした後で Provider Services リストを更新するために使用します。

▶ Provider Services のリストを更新するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードを選択します。
- 2 右クリックして、「Provider Services リストのリフレッシュ」を選択します。

Provider Services のリストが更新されます。

関連情報

- [460 ページの「Provider Services の追加」](#)
- [465 ページの「Provider Services の削除」](#)

Provider Services の削除

サーバー・マシンを使用しなくなった場合などに、管理する必要がなくなった Provider Services は削除できます。

▶ Provider Services を削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 右クリックして「削除」を選択します。
- 3 「Provider Services の削除」ダイアログ・ボックスで、「はい」をクリックします。

関連情報

- [459 ページの「Provider Services について」](#) について
- [460 ページの「Provider Services の追加」](#)
- [461 ページの「Provider Services への接続」](#)
- [461 ページの「Provider Services の切断」](#)
- [464 ページの「Provider Services のリストのリフレッシュ」](#)

スタンドアロン・サーバー

ここには次のトピックがあります:

- [465 ページの「スタンドアロン・サーバーについて」](#)
- [466 ページの「スタンドアロン・サーバーの追加」](#)
- [466 ページの「スタンドアロン・サーバー・リストのリフレッシュ」](#)
- [467 ページの「スタンドアロン・サーバーの削除」](#)

スタンドアロン・サーバーについて

スタンドアロン Essbase サーバーは、クラスタ化されていない単一の Essbase サーバーです。Essbase サーバーは 1 つ以上の Essbase データベースのホストとなることがあります。スタンドアロン Essbase サーバーはクラスタ環境に含まれないため、ロード・バランシングやフェイルオーバーのサポートが提供されません。

Provider Services はスタンドアロン Essbase サーバーまたは Essbase サーバー・クラスタに接続できます。Java API、XMLA および Smart View ユーザーは、Provider

Services を介して Essbase サーバーに接続します。ユーザーにとっては、どのデータベースにアクセスしようとしているかは見えません。ユーザーは単一のデータ・ソースに接続して、そのソースからデータを取得します。

スタンドアロン・サーバーの追加

スタンドアロン Essbase サーバーを使用するには、Administration Services コンソールで Provider Services にスタンドアロン・サーバーを追加する必要があります。Provider Services にスタンドアロン・サーバーを追加するには、Administration Services コンソールのユーザー・プロパティ・ウィンドウにあらかじめ Essbase サーバーを追加しておく必要があります。

▶ スタンドアロン・サーバーを追加するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Essbase サーバー」ノードを選択します。
- 2 右クリックして「Essbase サーバーの追加」を選択します。「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックスで、Essbase サーバー名、ユーザー名、パスワード、および確認パスワードを入力し、「OK」をクリックします。
- 3 さらに Essbase サーバーを追加する場合は、手順 2 を繰り返します。
- 4 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 5 右クリックして「作成」>「スタンドアロン・サーバーの作成」を選択します。
- 6 「スタンドアロン・サーバーの追加」で、手順 2 で追加した Essbase サーバーを含むリストから、任意の Essbase サーバーを選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

スタンドアロン Essbase サーバーの名前が「スタンドアロン・サーバー」ノードの下に表示されます。

注: または、既存のスタンドアロン・サーバーを追加した場合は、プロバイダ名の下に「スタンドアロン・サーバー」ノードを選択し、右クリックして「スタンドアロン・サーバーの作成」を選択できます。

関連情報

- [465 ページの「スタンドアロン・サーバーについて」](#)
- [466 ページの「スタンドアロン・サーバー・リストのリフレッシュ」](#)
- [467 ページの「スタンドアロン・サーバーの削除」](#)
- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)

スタンドアロン・サーバー・リストのリフレッシュ

この手順は、スタンドアロン・サーバーを追加したり削除した後でスタンドアロン・サーバー・リストを更新するために使用します。

関連情報

▶ スタンドアロン・サーバー・リストをリフレッシュするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
 - 2 「スタンドアロン・サーバー」ノードを選択します。
 - 3 右クリックして「リフレッシュ」を選択します。
スタンドアロン・サーバー・リストが更新されます。
- [466 ページの「スタンドアロン・サーバーの追加」](#)
 - [467 ページの「スタンドアロン・サーバーの削除」](#)

スタンドアロン・サーバーの削除

サーバー・コンピュータを使用しなくなった場合などは、クラスタからスタンドアロン・サーバーを削除できます。

▶ スタンドアロン・サーバーを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 プロバイダ・ノードの下で「スタンドアロン・サーバー」ノードを選択します。
- 3 「スタンドアロン・サーバー」ノードの下で、サーバーを選択します。
- 4 右クリックして「削除」を選択します。
- 5 「スタンドアロン・サーバーの削除」ダイアログ・ボックスで、「はい」をクリックします。

関連情報

- [465 ページの「スタンドアロン・サーバーについて」](#)
- [466 ページの「スタンドアロン・サーバーの追加」](#)

分析クラスタ

ここには次のトピックがあります:

- [468 ページの「分析クラスタについて」](#)
- [468 ページの「分析クラスタの追加」](#)
- [469 ページの「分析クラスタ・リストのリフレッシュ」](#)
- [470 ページの「分析クラスタの削除」](#)
- [470 ページの「クラスタ・コンポーネントの追加」](#)
- [471 ページの「クラスタ・コンポーネントの削除」](#)
- [472 ページの「クラスタ・コンポーネントの使用可能化」](#)

- [473 ページの「クラスタ・コンポーネントの無効化」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネント・リストのリフレッシュ」](#)

分析クラスタについて

Essbase サーバーのクラスタは、数種類の方法で定義されます:

- 同一の Essbase データベースの複製を実行する個別のコンピュータ上のサーバー・セット
- 同一のアプリケーションの複製を実行する単一の Essbase サーバー
- これら両方の方法を組み合わせる

分析クラスタはロード・バランシングおよびフェイルオーバーのサポートを提供するので、クラスタへの接続は信頼性と可用性が高くなります。ロード・バランシングにより、Essbase サーバーへの要求は同一のデータベースを実行する Essbase サーバーのクラスタにわたって分散されます。フェイルオーバーのサポートにより、クラスタ内のサービス中断が検出され、クラスタ内で使用可能な他の Essbase サーバーに要求が送られます。

Provider Services は Essbase サーバー・クラスタまたはスタンドアロン Essbase サーバーに接続できます。Java API、XMLA、および Provider Services ユーザーは Provider Services を介して Essbase サーバーに接続します。データベースにアクセスするエンド・ユーザーからは、アクセスは透過的です。ユーザーのパーспекティブでは、単一のデータ・ソースに接続して、そのソースからデータを取得していることになります。

分析クラスタにより提供される機能の要約は、次のとおりです:

- 単一の Essbase サーバー・インスタンスへの接続
- 単一の Essbase データベースへの接続
- 複数の Essbase サーバー・インスタンスへの接続
- 複数の同一の Essbase データベースへの接続
- 負荷の均衡のサポート
- フェイルオーバーのサポート

分析クラスタの追加

▶ 分析クラスタを追加するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 右クリックして「作成」>「分析クラスタの作成」を選択します。
- 3 「分析クラスタの追加」で、「クラスタ名」の下にクラスタ名(たとえば、「East Coast Sales」)を入力します。

- 4 「説明」で、クラスタについての簡単な説明(たとえば、East Coast のセールス・データベース)を入力します。
- 5 「追加」をクリックして、クラスタに Essbase サーバーを追加します。
- 6 「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」ダイアログ・ボックスで、Essbase サーバー名、アプリケーション名、およびデータベース名を指定します。
- 7 「OK」をクリックします。

Essbase サーバーの名前と関連付けられているアプリケーションおよびデータベースが「クラスタ・コンポーネント」リスト・ボックスに表示されます。たとえば、localhost.Demo.Basic。クラスタ・コンポーネントには、Essbase サーバー、アプリケーション、およびデータベース名が含まれます。

- 8 クラスタ・コンポーネントをクラスタに追加する場合は、手順 5 から手順 7 を繰り返します。クラスタ・コンポーネントを削除する場合は、コンポーネントを選択して「削除」をクリックします。
- 9 「分析クラスタの追加」で「OK」をクリックします。

「分析クラスタ」ノードの下で、作成したクラスタの名前が表示されます。

注： スタンドアロン Essbase サーバーと異なり、新しく作成された分析クラスタは次回 Provider Services が再起動するまで使用可能になりません。

関連情報

- [468 ページの「分析クラスタについて」](#)
- [470 ページの「クラスタ・コンポーネントの追加」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネントの無効化」](#)
- [472 ページの「クラスタ・コンポーネントの使用可能化」](#)
- [469 ページの「分析クラスタ・リストのリフレッシュ」](#)
- [471 ページの「クラスタ・コンポーネントの削除」](#)
- [470 ページの「分析クラスタの削除」](#)

分析クラスタ・リストのリフレッシュ

この手順は、分析クラスタを追加したり削除した後で分析クラスタ・リストを更新するために使用します。

▶ 分析クラスタ・リストをリフレッシュするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 「分析クラスタ」ノードを選択します。
- 3 右クリックして「リフレッシュ」を選択します。
分析クラスタ・リストが更新されます。

関連情報

- [468 ページの「分析クラスタの追加」](#)
- [470 ページの「分析クラスタの削除」](#)

分析クラスタの削除

管理サービス・コンソールでの管理対象から分析クラスタを除外できます。

▶ クラスタを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 プロバイダ・ノードの下で「分析クラスタ」ノードを選択します。
- 3 「分析クラスタ」・ノードの下で、クラスタを選択します。
- 4 右クリックして「削除」を選択します。
- 5 「分析クラスタの削除」ダイアログ・ボックスで、「はい」をクリックします。

注： 分析クラスタを削除したら、変更を反映させるために Provider Services を再起動する必要があります。

関連情報

- [468 ページの「分析クラスタについて」](#)
- [468 ページの「分析クラスタの追加」](#)
- [469 ページの「分析クラスタ・リストのリフレッシュ」](#)

クラスタ・コンポーネントの追加

分析クラスタを作成したら、そのクラスタに含める Essbase サーバー、アプリケーション、およびデータベースを指定する必要があります。

▶ クラスタにデータベース・コンポーネントを追加するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 プロバイダ・ノードの下で「分析クラスタ」ノードを選択します。
- 3 「分析クラスタ」・ノードの下で、クラスタを選択します。
- 4 右クリックして「編集」を選択します。
- 5 「分析クラスタ:<」クラスタ名「>」で、「追加」をクリックします。
- 6 「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」で、Essbase サーバー名、アプリケーション名およびデータベース名を指定します。
- 7 「OK」をクリックします。

「分析クラスタ:<」クラスタ名「>」の下にデータベース・コンポーネントのリストが表示されます。

- 8 コンポーネントをさらに追加するには、手順 5 から手順 7 を繰り返します。
- 9 「適用」をクリックして、プロバイダに加えた変更を保存します。
- 10 「閉じる」をクリックします。

注： クラスタ・コンポーネントを追加したら、変更を反映させるために Provider Services を再起動する必要があります。

関連情報

- [468 ページの「分析クラスタについて」](#)
- [468 ページの「分析クラスタの追加」](#)
- [472 ページの「クラスタ・コンポーネントの使用可能化」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネントの無効化」](#)
- [471 ページの「クラスタ・コンポーネントの削除」](#)
- [470 ページの「分析クラスタの削除」](#)

クラスタ・コンポーネントの削除

クラスタの一部として使用しなくなったデータベース・コンポーネントは、クラスタから削除できます。

▶ クラスタからデータベース・コンポーネントを削除するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 プロバイダ・ノードの下で「分析クラスタ」ノードを選択します。
- 3 「分析クラスタ」・ノードの下で、クラスタを選択します。
- 4 右クリックして「編集」を選択します。
- 5 「分析クラスタ:<」クラスタ名「>」で、「削除」をクリックします。

「分析クラスタ:<」クラスタ名「>」からデータベース・コンポーネントが削除されます。

- 6 コンポーネントをさらに削除するには、手順 5 から手順 7 を繰り返します。
- 7 「適用」をクリックして、プロバイダに加えた変更を保存します。
- 8 「閉じる」をクリックします。

注： 分析クラスタを削除したら、変更を反映させるために Provider Services を再起動する必要があります。

関連情報

- [470 ページの「クラスタ・コンポーネントの追加」](#)
- [468 ページの「分析クラスタの追加」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネントの無効化」](#)
- [472 ページの「クラスタ・コンポーネントの使用可能化」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネント・リストのリフレッシュ」](#)
- [470 ページの「分析クラスタの削除」](#)

クラスタ・コンポーネントの使用可能化

クラスタ・コンポーネントを使用不可にしてオフライン状態にした後は、再びそれを使用可能にできます。

▶ クラスタ内のデータベース・コンポーネントを使用可能にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 プロバイダ・ノードの下で「分析クラスタ」ノードを選択します。
- 3 「分析クラスタ」ノードの下で、クラスタを選択します。
- 4 右クリックして「編集」を選択します。
- 5 「分析クラスタ:<」クラスタ名「>」で、「使用可能にする」をクリックします。
データベース・コンポーネントのステータスが「使用可能」に変わります。
- 6 クラスタ内の他のコンポーネントを有効にするには、手順 5 を繰り返します。
- 7 「閉じる」をクリックします。

注： Provider Services の開始時にクラスタ定義に含まれていたコンポーネントは、Provider Services を再起動する必要なく動的に使用可能/使用不可にできます。ただし、クラスタにコンポーネントを追加した場合やクラスタを作成した場合は、Provider Services を再起動して新しいクラスタ定義を反映させる必要があります。新しく追加されたクラスタ・コンポーネントは、Provider Services を再起動するまで使用可能化や無効化を実行できません。

関連情報

- [470 ページの「クラスタ・コンポーネントの追加」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネントの無効化」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネント・リストのリフレッシュ」](#)
- [471 ページの「クラスタ・コンポーネントの削除」](#)

クラスタ・コンポーネントの無効化

クラスタ内のデータベース・コンポーネントは、個別に無効化できます。たとえば、コンポーネントをオフラインにして、そのデータベースを更新できます。

▶ クラスタ内のデータベース・コンポーネントを無効にするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、「Provider Services」ノードの下のプロバイダ名を選択します。
- 2 プロバイダ・ノードの下で「分析クラスタ」ノードを選択します。
- 3 「分析クラスタ」ノードの下で、クラスタ名を選択します。
- 4 右クリックして「編集」を選択します。
- 5 「分析クラスタ:<」クラスタ名「>」で、「使用不可」をクリックします。
データベース・コンポーネントのステータスが「使用不可」に変わります。
- 6 クラスタ内の他のコンポーネントを無効にするには、手順 5 を繰り返します。
- 7 「閉じる」をクリックします。

注： Provider Services の開始時にクラスタ定義に含まれていたコンポーネントは、Provider Services を再起動する必要なく動的に使用可能/使用不可にできます。ただし、あるクラスタにコンポーネントを追加したり、クラスタを作成した場合は、新しいクラスタ定義を反映させるために Provider Services を再起動する必要があります。新しく追加したクラスタ・コンポーネントは、Provider Services を再起動するまで使用可能/使用不可を切り替えることができません。

関連情報

- [470 ページの「クラスタ・コンポーネントの追加」](#)
- [472 ページの「クラスタ・コンポーネントの使用可能化」](#)
- [473 ページの「クラスタ・コンポーネント・リストのリフレッシュ」](#)
- [471 ページの「クラスタ・コンポーネントの削除」](#)

クラスタ・コンポーネント・リストのリフレッシュ

クラスタ・コンポーネントを追加したり削除したりした後でクラスタ・コンポーネント・リストを更新するには、このタスクを使用します。

▶ クラスタ内のデータベース・コンポーネントをリフレッシュするには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
- 2 プロバイダ・ノードの下で「分析クラスタ」ノードを選択します。
- 3 「分析クラスタ」ノードの下で、クラスタを選択します。
- 4 右クリックして「編集」を選択します。

- 5 「分析クラスタ:<」 クラスタ名「>」で、「リフレッシュ」をクリックします。
データベース・コンポーネントのリストが更新されます。

関連情報

- [473 ページの「クラスタ・コンポーネントの無効化」](#)
- [472 ページの「クラスタ・コンポーネントの使用可能化」](#)
- [471 ページの「クラスタ・コンポーネントの削除」](#)

この章の内容

「管理サーバーの追加」ダイアログ・ボックス.....	479
「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックス.....	480
「クラスタの追加」ダイアログ・ボックス.....	481
「Provider Services の追加」ダイアログ・ボックス.....	481
「スタンドアロン・サーバーの追加」ダイアログ・ボックス.....	481
「カスタム・フィルタの追加」および「カスタム・フィルタの編集」ダイアログ・ボックス.....	481
管理サーバーのプロパティ・ウィンドウ.....	483
「集約ストレージ・データベースの再構築」ダイアログ・ボックス.....	484
集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード.....	485
集約ストレージ・パーティション・ウィザード.....	487
集約設計ウィザード.....	490
集約設計ウィザード - 例.....	495
「Essbase Administration Services ログイン」ダイアログ・ボックス.....	497
分析クラスタ:<クラスタ名>ウィンドウ.....	497
Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ.....	498
アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ.....	504
アプリケーション/データベースのステータス・ウィンドウ.....	509
「データベースのアーカイブ」ダイアログ・ボックス.....	509
「領域固有メンバーのマッピング」ダイアログ・ボックス.....	510
「領域の定義」ダイアログ・ボックス.....	511
「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックス.....	512
「カスタム・ビューのノードの配置」ダイアログ・ボックス.....	513
「ASO MDX 式テンプレート」ダイアログ・ボックス.....	514
「計算の割当て」ダイアログ・ボックス.....	514
「フィルタの割当て」ダイアログ・ボックス.....	515
「アウトラインの関連付け」ダイアログ・ボックス.....	515
属性ビューア・ウィンドウ.....	516
バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウ.....	516
「添付ファイルの変更」ダイアログ・ボックス.....	517
「パスワードの変更」ダイアログ・ボックス.....	517
「アウトラインのコンパクト化」ダイアログ・ボックス.....	518
「プラグイン・コンポーネントの構成」ダイアログ・ボックス.....	518
「変換設定」ダイアログ・ボックス.....	518

「別名テーブルのコピー」ダイアログ・ボックス	519
「すべての関数をコピー」ダイアログ・ボックス	520
「すべてのマクロのコピー」ダイアログ・ボックス	520
「アプリケーションのコピー」ダイアログ・ボックス	521
「計算スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス	522
「データベースのコピー」ダイアログ・ボックス	522
「フィルタのコピー」ダイアログ・ボックス	523
「関数のコピー」ダイアログ・ボックス	524
「グループのコピー」ダイアログ・ボックス	524
「マクロのコピー」ダイアログ・ボックス	525
「パーティションのコピー」ダイアログ・ボックス	525
「レポート・スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス	526
「ルール・ファイルのコピー」ダイアログ・ボックス	527
「代替変数のコピー」ダイアログ・ボックス	528
「ユーザーのコピー」ダイアログ・ボックス	528
「別名テーブルの作成」ダイアログ・ボックス	530
「アプリケーションの作成」ダイアログ・ボックス	530
「データベースの作成」ダイアログ・ボックス	531
「結合を使用したフィールドの作成」ダイアログ・ボックス	531
「グループの作成」/「グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス	532
パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ	535
「管理サーバーでのユーザーの作成」ダイアログ・ボックス	541
「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスおよび「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス(Essbase サーバー)	542
「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックス	546
「作成された次元」および「削除された次元」ダイアログ・ボックス	547
カスタム定義関数マネージャ	548
カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウ	549
「データ・ロード」ダイアログ・ボックス	551
「データ・ロード結果」ダイアログ・ボックス	553
「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス	553
データ・プレビュー・グリッド	556
「データの複製」ダイアログ・ボックス	560
「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス	560
データベース情報ウィンドウ	564
データベース・プロパティ・ウィンドウ	565
データベース・トリガー・スプール・ファイル・ウィンドウ	579
データベース・トリガー・ウィンドウ	580
「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックス	581
「世代の定義」ダイアログ・ボックス	582
「レベルの定義」ダイアログ・ボックス	583
「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス	584
「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス	588

使用不可であるユーザー名ウィンドウ	593
「トランザクションの表示」ダイアログ・ボックス	594
「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックス	594
「ドリルスルー定義の編集」ダイアログ・ボックス	595
「関数の編集」ダイアログ・ボックス	595
「ロガーの編集」ダイアログ・ボックス	597
「マクロの編集」ダイアログ・ボックス	597
「ノートの編集」ダイアログ・ボックス	598
「URLの編集」ダイアログ・ボックス	599
「ユーザー/グループ・アクセスの編集」ダイアログ・ボックス	599
「エディタ・オプション」ダイアログ・ボックス	599
「Essbase クラスタ情報」ダイアログ・ボックス	600
セキュリティ権限の移行の例	600
「計算スクリプトの実行」ダイアログ・ボックス	601
「データベース計算の実行」ダイアログ・ボックス	601
「レポート・スクリプトの実行」ダイアログ・ボックス	602
「別名テーブルのエクスポート」ダイアログ・ボックス	603
「データベースのエクスポート」ダイアログ・ボックス	604
「LROのエクスポート」ダイアログ・ボックス	605
「パーティションのエクスポート」ダイアログ・ボックス	606
「選択ルールのエクスポート」ダイアログ・ボックス	606
ユーザーの外部化ウィザード	607
「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス	612
「ファイルのエンコード方式」ダイアログ・ボックス	616
フィルタ・エディタ・ウィンドウ	616
フィルタ・ウィンドウ	618
「検索」ダイアログ・ボックス	618
「外部グループの検索」ダイアログ・ボックス	619
「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックス	619
「メンバーの検索」ダイアログ・ボックス	619
「結果の検索」タブ	621
「式」ダイアログ・ボックス	621
「通貨アウトラインの生成」ダイアログ・ボックス	622
「グローバル・マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックス	622
グループ・ウィンドウ	623
「LROのインポート」ダイアログ・ボックス	624
「メンバー・マッピングのインポート」ダイアログ・ボックス	624
「パーティション・ファイルのインポート」ダイアログ・ボックス	625
「選択ルールのインポート」ダイアログ・ボックス	625
「フィールドの結合」ダイアログ・ボックス	626
リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウ	626
ロケーション別名ウィンドウ	628
ロック済オブジェクト・ウィンドウ	629

ロック・ウィンドウ	630
ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウ	630
「ログ・ビューアのオプション」ダイアログ・ボックス	632
ログ・ビューア・ウィンドウ	632
「メンバー情報」ダイアログ・ボックス	633
「メンバー名」ダイアログ・ボックス	634
「メンバーのプレビュー」ダイアログ・ボックス	634
「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス	635
移行ウィザード	641
「フィールドの移動」ダイアログ・ボックス	645
「新規」ダイアログ・ボックス	646
「新規関数」ダイアログ・ボックス	647
「新しいマクロ」ダイアログ・ボックス	648
「新しい変数」ダイアログ・ボックス	649
「新しいトリガー」および「トリガーの編集」ダイアログ・ボックス	650
「開く」ダイアログ・ボックス	652
「SQL データ・ソースを開く」ダイアログ・ボックス	653
「オプション」ダイアログ・ボックス	654
アウトライン・エディタ・ウィンドウ	662
「アウトラインの印刷オプション」ダイアログ・ボックス	667
アウトライン・ビューア・ウィンドウ	667
「印刷オプション」ダイアログ・ボックス	669
「パスワードを Essbase サーバーへ伝播」ダイアログ・ボックス	670
「クエリー・ヒントの選択」ダイアログ・ボックス	670
「レコード表示カウント」ダイアログ・ボックス	671
Performance Management Architect への Essbase サーバーの登録ダイアログ・ボックス	671
「レコードの除外」ダイアログ・ボックス	671
「別名テーブルの名前変更」ダイアログ・ボックス	672
「アプリケーションの名前変更」ダイアログ・ボックス	673
「計算スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス	673
「カスタム・ビューの名前変更」ダイアログ・ボックス	673
「データベースの名前変更」ダイアログ・ボックス	674
「フィルタの名前変更」ダイアログ・ボックス	674
「関数の名前変更」ダイアログ・ボックス	674
「グループの名前変更」ダイアログ・ボックス	675
「マクロの名前変更」ダイアログ・ボックス	675
「レポート・スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス	676
「ルール・ファイルの名前変更」ダイアログ・ボックス	676
「ユーザーの名前変更」ダイアログ・ボックス	676
「パーティションの修復」ダイアログ・ボックス	677
「置換」ダイアログ・ボックス	678
「アウトライン内の置換」ダイアログ・ボックス	678

「トランザクションの再実行」ダイアログ・ボックス	679
レポート・ビューア・ウィンドウ	679
「データベースの復元」ダイアログ・ボックス	680
「データベースの再構築」ダイアログ・ボックス	681
「データベースの再構築のオプション」ダイアログ・ボックス	681
「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス	682
「スクリプト変数」ダイアログ・ボックス	683
会計次元の選択ダイアログ・ボックス	683
「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」ダイアログ・ボックス	684
「レコードの選択」ダイアログ・ボックス	684
「電子メールの送信」ダイアログ・ボックス	685
セッションおよび要求の終了オプション	685
セッション・ウィンドウ	686
「アクティブな別名テーブルの設定」ダイアログ・ボックス	688
「データベース・ノートの設定」ダイアログ・ボックス	688
「デフォルト計算の設定」ダイアログ・ボックス	689
Provider Services プロパティ・ウィンドウ	689
Provider Services のセッション・ウィンドウ	691
「フィールドの分割」ダイアログ・ボックス	691
「SQL 接続」ダイアログ・ボックス	692
「サブセット」ダイアログ・ボックス	692
代替変数ウィンドウ	693
「アウトラインの同期」ダイアログ・ボックス	694
「トランザクション・リスト」ダイアログ・ボックス	696
日時次元の作成ウィザード	696
「オブジェクトのロック解除」ダイアログ・ボックス	703
「アウトラインの更新」ダイアログ・ボックス	703
「ユーザー・プロパティ」(管理サーバー)ウィンドウ	704
ユーザー設定ウィザード	707
ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ	712
ユーザー・ウィンドウ	715
「検証ルール」ダイアログ・ボックス	717
「ノートの表示」ダイアログ・ボックス	717
「ウィンドウ」ダイアログ・ボックス	717

「管理サーバーの追加」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、エンタープライズ・ビューに Essbase 管理サーバーを追加します。複数の Essbase 管理サーバーをビューに追加できます。一度に1つの Essbase 管理サーバーにのみ接続できます。

「管理サーバー」テキスト・ボックスに、ビューに追加する Essbase 管理サーバーがインストールされているコンピュータの名前を入力します。追加する Essbase 管理サーバーの**ポートの設定**がデフォルトでない場合、Essbase 管理サーバー名の後にポート値を指定する必要があります(たとえば、AdminServerName:9002)。

関連情報

- 61 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase 管理サーバーの追加」
- 63 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase 管理サーバーの削除」
- 35 ページの「Essbase 管理サーバーへの接続」
- 61 ページの「Essbase 管理サーバーからの切断」

「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックス

「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックスのアイテムは、エンタープライズ・ビューに Essbase サーバーを追加するために使用します。自分のビューに、複数の Essbase サーバーを追加できます。

- Essbase ノード - Essbase サーバーまたはクラスタの名前を入力します。Essbase サーバー名は、Essbase サーバーがインストールされているコンピュータの名前です。Essbase サーバー名として localhost を使用すると、パーティションの表示に問題が発生したり、管理サービス・コンソールを Essbase 管理サーバー以外のコンピュータ上で実行するときに問題が発生する可能性があります。したがって、localhost を Essbase サーバー名として使用しないでください。

Essbase サーバーの**ポート設定**がデフォルトでない場合は、Essbase サーバー名の後にポート値を指定する必要があります(たとえば、サーバー名:9002 など)。

- シングル・サインオンの使用 - ユーザーが Shared Services のネイティブ・ディレクトリまたは企業の認証プロバイダを介して**外部認証**される場合に選択します。
- SSL を使用 - SSL 暗号化を使用して Essbase サーバーに接続する場合に選択します。
- 「パスワード」と「パスワードの確認」 - 追加する Essbase サーバーに定義されたとおりに、Essbase サーバーのパスワードを入力し、再入力します。

ユーザーが Essbase サーバーで**外部認証**されている場合、パスワードは必要なく、これらのテキスト・ボックスは非アクティブです。

関連情報

- 48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」
- 49 ページの「エンタープライズ・ビューからの Essbase サーバーの削除」
- 86 ページの「Essbase の接続とポートについて」
- 87 ページの「Essbase サーバーへの接続」
- 88 ページの「Essbase サーバーからの切断」

「クラスタの追加」ダイアログ・ボックス

クラスタの追加ダイアログ・ボックスを使用して、クラスタにおけるデータベース・コンポーネントの追加と削除ができます。

次のボックスにクラスタおよびコンポーネントの情報が表示されます:

- クラスタ名 - ドメイン名
- 説明 - Provider Services の URL です。例: `http://<server_name>:13080/aps/APS`
- クラスタ・コンポーネント - 各コンポーネントが属するドメインの ID などを
含む、コンポーネントのリスト

コンポーネントを削除するには、それを選択して「削除」ボタンをクリックします。

コンポーネントを追加するには、「追加」ボタンをクリックして「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」ダイアログ・ボックスを使用します。

「Provider Services の追加」ダイアログ・ボックス

「Provider Services の追加」ダイアログ・ボックスを使用して、Provider Services をエンタープライズ・ビューに追加します。

「プロバイダ名」ボックスに Provider Services のドメイン名が表示されます。

URL ボックスに、Provider Services の URL を入力します。例: `http://<マシン名>:13080/aps/APS`

「スタンドアロン・サーバーの追加」ダイアログ・ボックス

「スタンドアロン・サーバーの追加」ダイアログ・ボックスの「Essbase サーバー」ボックスで、Provider Services が接続する Essbase サーバー・インスタンス名を入力します(たとえば、localhost または east1 など)。

「カスタム・フィルタの追加」および「カスタム・フィルタの編集」ダイアログ・ボックス

「カスタム・フィルタの追加」/「カスタム・フィルタの編集」ダイアログ・ボックスの 1 つまたは複数のボックスは、ログ・チャートのカスタム・フィルタを作成または編集するために使用(ボックスから選択するか、ボックスに情報を入力)します。

「フィルタ名」ボックスに入力する名前は、ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウの「フィルタを適用して表示」リストに表示されます。

次のボックスで行う選択により、どのようなログ・エントリが戻されるかが決まります:

- 「アプリケーション」、「ユーザー」および「メッセージ番号」 - これら3つのボックスには、ログで見つかったアプリケーション、ユーザーおよびメッセージ番号のみがリストされます。
 - 1つのアプリケーション、ユーザーまたはメッセージ番号のエントリを戻すには、1つのアプリケーション、ユーザーまたはメッセージ番号を選択します。
 - ログ・ファイル内のすべてのアプリケーション、ユーザーまたはメッセージ番号のエントリを戻すには、「すべて」を選択します。
 - 特定のアプリケーション、ユーザーまたはメッセージ番号を参照していないエントリのみを戻すには、「なし」を選択します。

注: エラー番号を検索する場合は、「メッセージ番号」リストで「検索」を選択します。次に、「メッセージ番号検索」ダイアログ・ボックスで、エラーを選択し、「OK」をクリックして「カスタム・フィルタの追加」/「カスタム・フィルタの編集」ダイアログ・ボックスに戻ります。

- 「事前定義期間」、「開始日」および「終了日」
 - 事前定義期間を選択するか、「事前定義期間」リストから「カスタム」(開始日および終了日を指定する場合)を選択します。
 - 特定の日付以前に書き込まれたすべてのエントリを戻すには、終了日を指定し、開始日は指定しません。
 - 特定の日付以降に書き込まれたすべてのエントリを戻すには、開始日を指定し、終了日は指定しません。
- 「次を含むテキスト」テキスト - 特定のテキストが含まれるエントリのみを戻すには、テキストを入力します。このフィールドでは、大文字と小文字が区別されます。
- メッセージ・タイプ
 - 特定のタイプのメッセージを参照しているエントリのみを戻すには、「エラー」、「情報」または「警告」を選択します。
 - すべてのメッセージ・タイプのエントリを戻すには、「すべて」を選択します。

次のボックスで入力する情報と行う選択により、ログ・チャートのレイアウトとラベリングが決まります:

- 「X軸」タイトルと「Y軸」タイトル
- 「X軸」と「Y軸」 - 選択するX軸カテゴリにより、Y軸に指定したカウントをグループ化する方法が決まります。選択するY軸カテゴリにより、カウントされる対象が決まります。X軸カテゴリとY軸カテゴリは異なる必要があります; どちらも次のリストから選択されます:

- アプリケーション
- データベース
- ユーザー
- ログ・エントリの日付
- メッセージ・タイプ
- メッセージ番号
- 粒度 - X 軸でログ・エントリの日付を選択した場合は、「1 時間ごと」、「1 日ごと」、「1 週間ごと」または「1 か月ごと」を選択できます。
- 系列 - Y 軸をさらにカテゴリ化するには、系列を選択します。たとえば、各アプリケーションでの各メッセージ・タイプのカウントを示すチャートを表示するには、X 軸を「メッセージ・タイプ」に、Y 軸を「アプリケーション」に、そして系列を「アプリケーション」にします。系列は Y 軸に対してのみ選択できます。

関連情報

- [254 ページの「カスタム・ログ・フィルタの作成または編集」](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの表示」](#)
- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)

管理サーバーのプロパティ・ウィンドウ

「管理サーバーのプロパティ」ウィンドウで、Essbase 管理サーバーを管理します。

「構成」タブの「SMTP サーバー」ボックスで、管理者が管理サービス・コンソールから他の管理者または Oracle テクニカル・サポートに電子メールで情報を直接送信できるようにするための SMTP システムを実行するホストを指定します。ホスト・エントリは、DNS ホスト名または IP アドレスのどちらかでもかまいません。Essbase 管理サーバーでは、指定したサーバーに接続できるかどうかを確認されます。[69 ページの「電子メール・サーバーの指定」](#)を参照してください。

また、「構成」タブでは、Essbase 管理サーバーのバージョンや変数情報を確認できます:

- 管理サーバーのバージョン
- ARBORPATH - この場所は、Essbase 管理サーバーの起動時に内部的に設定されます。また、ARBORPATH システム環境変数が Essbase 管理サーバー・コンピュータ上で設定されている場合、この場所はそのシステム環境変数の値より優先されますが、システム環境変数が置換されることはありません。
- ESSLANG - ESSLANG の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

ネイティブ・セキュリティ・モードが使用されておらず(EPM System セキュリティ・モード・オプションが選択されている)、Administration Services が Shared Services インストールを参照するよう構成されている場合、「構成」タブには Shared Services 情報も表示されます:

- Shared Services サーバー名
- Shared Services サーバー・ポート
- セキュリティ構成 - Shared Services のセキュリティ構成のパス
- SSL - Essbase 管理サーバーと Essbase サーバー間の通信を SSL モードで行うかどうかを示します。

「データ・ストレージ」タブは、ログ・アナライザ情報の保管に使用する組込みデータベースに関する情報を指定するために使用します:

- JDBC RDBMS - 組込みデータベースの名前
- JDBC アーカイブ - JDBC ドライバが格納されている .jar ファイルの名前(JDBC ドライバは Administration Services とともにインストールされているため、空白です)
- JDBC ドライバ
- JDBC URL - Administration Services リポジトリのパス
- JDBC ユーザー名
- JDBC パスワード
- JDBC プール・サイズ - データベースの接続プールの初期サイズ

関連情報

- [34 ページの「Administration Services の開始」](#)
- [33 ページの「Administration Services について」](#)
- [33 ページの「Administration Services のアーキテクチャ」](#)

「集約ストレージ・データベースの再構築」ダイアログ・ボックス

変更された集約ストレージ・アウトラインを保存すると、データベースが再構築されます。集約ストレージ・データベース再構築の管理の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

すべてのデータを消去する必要のない再構築では、データを保持するか消去するかを指定できます。この設定は、「集約ストレージ・データベースの再構築」ダイアログ・ボックスで次のいずれかのオプションを選択して定義します:

- すべてのデータを保持して再構築を開始する
- すべてのデータを消去して再構築を開始する

関連情報

- [139 ページの「アウトラインの保存」](#)

集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード

集約ストレージ・アウトライン変換ウィザードは、ブロック・ストレージ・アウトラインの集約ストレージ・アウトラインへの変換に使用します。この変換処理では、ブロック・ストレージ・アウトラインは変更されません。

注： ブロック・ストレージ・アウトラインの一部の機能は、集約ストレージ・アウトラインに適用されません。集約ストレージ・アウトラインの詳細は、[73 ページの「集約ストレージ・アウトラインについて」](#)を参照してください。

このウィザードによって、ブロック・ストレージ・アウトラインのコピーが集約ストレージ・アウトラインの確認プロセス全体を通して実行され、エラーのリストが生成されます。エラーを自動または手動で修正し、変換されたアウトラインの保存先を指定します。アウトラインは、ページング可能な形式に変換されます。アウトライン・ページングの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注： ブロック・ストレージ・データベースで[メンバー名の重複](#)が許可される場合、集約ストレージ・データベースでもメンバー名の重複が許可されます。

関連情報

- [485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザードの起動」](#)
- [486 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード・ページ」](#)
- [74 ページの「集約ストレージへのブロック・ストレージ・アウトラインの変換」](#)
- [71 ページの「集約ストレージについて」](#)
- [73 ページの「集約ストレージ・アウトラインについて」](#)
- 集約ストレージ・アプリケーション、データベースおよびアウトライン(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 集約ストレージとブロック・ストレージの比較(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

集約ストレージ・アウトライン変換ウィザードの起動

- ▶ 集約ストレージ・アウトライン変換ウィザードを起動するには、次のいずれかのアクションを実行します:
 - 「ウィザード」 > 「集約ストレージ・アウトライン変換」を選択します。
 - 「ファイル」 > 「新規」を選択し、「ウィザード」タブで「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード」を選択します。

集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード・ページ

下のリンクをクリックすると、ウィザードの各ページに関する情報が表示されます:

- [ソース・アウトラインの選択](#)
- [アウトラインの修正の確認](#)
- [集約ストレージ・アウトラインの保存先の選択](#)
- [アウトライン変換の完了ページ](#)

ソース・アウトラインの選択ページ

このページでは、次のどちらのタブでも、集約ストレージ・アウトラインに変換するブロック・ストレージ・アウトラインを選択します:

- [ファイル・システム - ファイル・システムからアウトライン・ファイルを選択](#) します。
- [Essbase サーバー - 「検索」ボックスで、Essbase サーバー・インスタンスを選択し、アプリケーション、データベース、アウトライン・ファイルを選択](#) します。選択したファイルは「ファイル名」ボックスに表示されます。「ファイルのタイプ」ボックスでは、.ot1 がデフォルトで選択されます。

ブロック・ストレージ・アウトラインを選択して「次へ」をクリックすると、ウィザードによりブロック・ストレージ・アウトラインが検証され、ブロック・ストレージ・アウトラインを集約ストレージ・アウトラインに変換するために必要な修正のリストが戻されます。

アウトラインの修正の確認ページ

このページには、「確認エラーと警告」ツリーが表示されます。このツリーには、確認時に検出されたエラーと警告のリストが表示されます。

このページでは、エラーの修正方法を選択します:

- [アウトラインの自動修正](#) - エラーがすべて修正されると、アウトライン修正のリストが表示されます。

注: この自動オプションでは、式は MDX に変換されません。MDX を使用した式の再作成の詳細は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』で MDX アウトライン式に関する項を参照してください

- [アウトラインの手動修正](#) - アウトライン・エディタの「確認」タブに、アウトライン・エラーのリストが表示されます。個々のエラーは手動で修正します。

注: この手動オプションを DTS メンバーの削除に使用することはできません。DTS メンバーを含むアウトラインの場合は、自動オプションを使用するか、手動オプションで DTS エラー以外をすべて修正してから自動オプションで DTS エラーを修正します。

アウトライン情報にエラー修正が反映されます。たとえば、変換プロセスによって、動的計算メンバーは保存済メンバーとしてタグ付けされます。そのため、データベース・プロパティ・ウィンドウの「次元」タブに表示される「保管されたメンバー」の値が変換前後で異なる場合があります。

集約ストレージ・アウトラインの保存先の選択ページ

このページのいずれかのタブを選択して、集約ストレージ・アウトラインの保存先を指定します:

- ファイル・システム - ファイル・システム内の場所を選択します。
- Essbase サーバー - 「検索」ボックスで、Essbase サーバー・インスタンスを選択し、アプリケーション、データベース、アウトライン・ファイルを選択します。選択したファイルは「ファイル名」ボックスに表示されます。「ファイルのタイプ」ボックスでは、.ot1 がデフォルトで選択されます。

アウトラインを含めるための集約ストレージ・アプリケーションを作成するには、「集約ストレージ・アプリケーションの作成」ボタンをクリックします。次に、「集約ストレージ・アプリケーションの作成」で、アプリケーションとデータベースを作成します。変換されたアウトラインは新たに作成されたアプリケーションとデータベースに保存されます。

アウトライン変換の完了ページ

ウィザードを再起動し、別のアウトラインを集約ストレージに変換する場合は、「別のブロック・ストレージ・アウトラインの変換」オプションを選択します。

集約ストレージ・パーティション・ウィザード

集約ストレージ・パーティション・ウィザードは、集約ストレージ・データベース(ソース)とブロック・ストレージ・アウトライン(ターゲット)を結合する透過パーティションを作成するために使用します。

注: このウィザードを使用するには、ソースとターゲットに対するデータベース・マネージャ権限が必要です。ソース・データベースがメンバー名の重複を許可する場合は、ターゲット・データベースもメンバー名の重複を許可している必要があります。

透過パーティションを使用すると、データベースをシームレスに参照でき、またターゲットに定義されているパーティション領域に(スプレッドシートのロックおよび送信の操作などから)データを書き込むことができます。

関連情報

- [71 ページの「集約ストレージについて」](#)
- [ブロック・ストレージについて](#)

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [透過パーティションの使用による集約ストレージ・データベースへのライトバックの使用可能化\(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内\)](#)
- [488 ページの「集約ストレージ・パーティション・ウィザードの起動」](#)
- [488 ページの「集約ストレージ・パーティション・ウィザード・ページ」](#)

集約ストレージ・パーティション・ウィザードの起動

- ▶ 集約ストレージ・パーティション・ウィザードを起動するには、「ウィザード」 > 「集約ストレージ・パーティション」を選択します。

集約ストレージ・パーティション・ウィザード・ページ

下のリンクをクリックすると、ウィザードの各ページに関する情報が表示されます:

- [パーティション・ソースおよびターゲットの選択](#)
- [ターゲット次元の選択](#)
- [ライトバック次元へのメンバーの追加](#)
- [時間次元でのパーティションの定義](#)
- [パーティションへの時間メンバーの追加](#)
- [パーティションの確認と作成](#)

パーティション・ソースおよびターゲットの選択ページ

このページでは、接続情報を指定します。

「データ・ソース」グループと「データ・ターゲット」グループで、集約ストレージ・データベース(ソース)とブロック・ストレージ・データベース(ターゲット)をそれぞれ指定します:

- Essbase サーバー - データベース・テーブルのある Essbase サーバー・インスタンスの名前
- アプリケーション - データベースを含むアプリケーションの名前
- データベース - データベースの名前
- 「ユーザー」 および 「パスワード」 - Essbase サーバー・インスタンスとの接続時にパーティションが使用するユーザー名とパスワード
- コメント - 説明(オプション)

集約ストレージ・データベースは存在します。ブロック・ストレージ・データベースは存在する場合もしない場合もあります。指定したブロック・ストレージ・データベースが存在しない場合は作成されます。存在する場合は上書きされます。

「ターゲット次元の選択」ページ

このページでは、アウトライン・ツリーにソース次元が表示されます。表示されるどのソース次元も、パーティション定義に含めることができます。

ターゲット・データベースの作成に使用する次元を選択するには、次のいずれかのアクションを実行します:

- アウトライン・ツリーで、目的の次元を選択します。次元のサブセットを選択すると、ターゲット・データベースのサイズが抑えられ、計算と取得の速度と効率が向上します。
- 「すべての次元を選択」ボタンを選択します。
- 「すべての次元を消去」ボタンを選択します。

次元は慎重に選択してください。一部の次元を選択しなかったことが、計算に悪影響を及ぼしたり、アウトライン・エラーの原因になることがあります。

ライトバック次元へのメンバーの追加ページ

このページでは、「ライトバック次元」ボックスでライトバック次元(ライトバック先となる次元)を選択します。選択した次元は、その時点の状態でのパーティション領域に追加されます。

ライトバック次元にメンバーを追加するには、次元を選択し、「編集」をクリックし、メンバーを選択します。追加されたメンバーはパーティション領域に含められません。したがって、追加されたメンバーへの書き込みを実行してから、更新されたデータに基づいてデータを計算してレポートを生成できます。

注: このウィザードはライトバック次元外で発生したアウトライン変更を認識しません。そのため、このような変更はパーティション定義に含められず、パーティションの検証時に警告やエラーになることがあります。

ウィザードの次ページには、「編集」をクリックすると表示されるウィンドウからアクセスします。

時間次元でのパーティションの定義ページ

ある期間のデータが集約ストレージ・データベースに保管されており、別の期間のデータがブロック・ストレージ・データベースに保管されている場合は、時間メンバーをパーティション定義に追加します。追加するには、このページで、「時間次元のパーティション定義の定義」オプションを選択します。

パーティションへの時間メンバーの追加ページ

「時間次元のパーティション定義の定義」を選択した場合は、このページで、パーティションに含める時間次元のメンバーを指定します。

▶ 時間次元メンバーをパーティション定義に含める手順は次のとおりです:

- 1 **オプション:** 別名を挿入する場合は、「別名の使用」を選択し、「別名テーブル」ボックスで、別名テーブルを選択します。
- 2 次のいずれかまたは両方のアクションを実行します:
 - アウトライン・ツリーで、メンバー名または別名を1つ以上選択します。
アウトライン・ツリーを展開するには、右クリック・メニューを使用します。
 - 「コマンドと関数」ツリーで、メンバー設定関数を1つ以上選択します。

指定したメンバー名または別名が、パーティション定義のカーソル位置に挿入されます。メンバー設定関数を選択した場合は、関数の引数が表示されます。

パーティションの確認と作成ページ

このページでは、パーティションを表示、確認および作成します。無効なパーティションは、保存してパーティションの編集ウィンドウで編集できます。

ライトバック・パーティション定義ボックスには、MaxL ステートメントであるパーティション定義が表示されます。

注: MaxL を使用したパーティションの作成の詳細は、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の透過パーティションの作成に関する項を参照してください。

「確認」ボタンをクリックすると、Essbase によりパーティション定義(.ddb)ファイルでソース・データベースとターゲット・データベースが確認されます。

パーティションが有効かどうかのメッセージが表示されます。定義が無効の場合は、ライトバック・パーティション定義ボックスで修正します。パーティション定義が有効の場合は、「終了」ボタンをクリックします。

パーティション領域の定義とパーティションの検証の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

集約設計ウィザード

集約設計ウィザードは、現在のユーザーに計算権限が付与されているデータを含む集約ストレージ・データベースの集約を、事前計算して保存するために使用します。

集約プロセスは、選択と生成の2段階で行われます。これらは個別に行うことも同時に行うこともできます。

「バックグラウンドで集約を生成」オプションを選択した場合、集約プロセスは次のようになります:

- 作業を続行できます。
- Essbase 管理サーバーはシャット・ダウンできません。

- プロセスのステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで確認できます。

集約ストレージ・データベースの集約の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

集約設計ウィザードの起動

▶ 集約設計ウィザードを起動するには:

- 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、集約ストレージ・データベースを選択します。
- 2 右クリックし、「集約の設計」を選択します。

集約タスクの選択ページ

このページにアクセスすると、キューブ内には複数のスライスがありますというメッセージが表示されます。付随するビューの選択を実行する前にデータをマージするオプションを選択した場合は、ウィザードを終了し、エンタープライズ・ビューのデータをマージする必要があります。

このページでは、選択と生成に関するオプションを次の中から選択します:

- 推奨ビューを使用して集約を生成 - 選択プロセスと生成プロセスがまとめられて、Essbase サーバーによって実行される構成不可能な単一処理になります。
- 集約の設計、生成、および保存 - 選択プロセスと生成プロセスは個別に扱われます。そのため、個々のプロセスをより細かく制御できます。
- 保存済集約を使用 - 生成は集約スクリプトを通じて実行されます。そのため、ビューの選択は不要です。

「推奨ビューを使用して集約を生成」を選択した場合、「次へ」をクリックすると、Essbase サーバーによって次のアクションが実行されます:

1. データベースに以前の集約の値が含まれている場合は、該当する値を削除するかどうかの確認が求められます。
2. 最適な集約ビューのセットが選択されます。クエリー時間とストレージ・リソースに基づいて選択されます。1つのデータベースで選択できる集約ビューの最大数は 1,023 個です。
3. 集約が生成され、値が保管されます。

「集約の設計、生成、および保存」オプションを選択した場合、「次へ」をクリックすると、ウィザードに次のページがこの順序で表示されます:

1. [492 ページの「既存の集約ビューについてページ」](#)
2. [493 ページの「選択プロセスを停止する基準の指定ページ」](#)
3. [493 ページの「集約ビューの選択」ページ](#)
4. [495 ページの「集約の保存と生成ページ」](#)

「保存済集約を使用」オプションを選択した場合、「次へ」をクリックすると、現在のデータベースに保存されているすべての集約スクリプトが表示されます。

保存済集約リストで、保存済の集約スクリプトを選択します。その後、次のいずれかのアクションを実行します:

- 集約を生成するには、「既存の集約の置換」オプションを選択するか選択を解除し、「次へ」をクリックします。
- 「名前変更」をクリックし、集約の名前を変更します。
- 「削除」をクリックします。

注: 集約スクリプトが実行されると、そこに指定されているビューが生成されます。集約をスクリプトとして保存するには、ウィザードの最初のページで「集約の設計、生成、および保存」オプションを選択します。集約スクリプトの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [71 ページの「集約ストレージについて」](#)
- [78 ページの「取得時間を改善するための集約の計算」](#)
- 集約ストレージ・データベースの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [集約ストレージ・データベースのデータ・ロードまたは次元構築の実行](#)
- [495 ページの「集約設計ウィザード - 例」](#)

関連コマンド

- `execute aggregate process(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `execute aggregate selection(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `execute aggregate build(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `query database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

既存の集約ビューについてページ

ビュー選択プロセス([シナリオ例](#)を参照)は、前回の集約後にロードされた値に基づいています。ただし、ウィザードのこのページには、以前の集約に基づくビューを含むデータベースについて、以前選択したビューを含めるかどうかを指定できるオプションが用意されています:

- 既存の集約ビューの置換 - 現在の利点に基づき再選択するまでは、以前選択したビューは含めません
- 既存のビュー選択への追加 - 以前に選択したビューを含めます。これにより、クエリー・パフォーマンスが十分なビュー選択を保持できるようにし、生成時間を短縮します。

集約の置換のガイドラインについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

選択プロセスを停止する基準の指定ページ

このページには、次の情報が MB 単位で表示されます:

- [現在のレベル 0 入力サイズ - レベル 0 の値に使用されているストレージ・スペース(MB 単位)]
- 既存の集約データ・サイズ - 既存の集約がデータベース内に存在する場合の集約のサイズ

このページでは、次のいずれかのオプションを指定します:

- すべての推奨集約ビューを選択 - 停止条件を適用しません。Essbase サーバーが、選択する価値があると判断したすべてのビューを選択します。
- 合計ストレージ・スペース - 停止条件を適用します。指定した容量のストレージ・スペース(「合計ストレージ・スペース」ボックスで指定した数値(MB 単位)に対応)が使用されると、Essbase サーバーはビューの選択を停止します。

ストレージの上限を指定することで、ストレージ・スペースと集約の生成にかかる時間を削減できます。

注: 1つのデータベースで選択できる集約ビューの最大数は 1,023 個です。

「集約ビューの選択」ページ

このページには、選択した各ビューに関する情報をリストするテーブルが表示されます。既存のビュー選択への追加オプションを選択した場合、このテーブルには、以前に選択した行、次に新たに選択した行が表示されます。

「選択」列で生成するビューを選択する際は、次の点に留意してください:

- 最初のビューであるレベル 0 ビューは、デフォルトで選択されます。この選択は解除できません。
- ビューの選択は連続的に行われます。このため、たとえば 10 番目のビューを選択すると、1 から 10 までのビューがすべて選択されます。
- 以前に生成されたビューは、選択された状態でリストに表示されます。この選択は解除できません。

注: ビュー選択の調整の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください

次の列には、ビューに関する情報が表示されます:

- レベル情報 - レベル番号で、次元ごとに 1 つです(したがって、メンバーは 1 つ)。階層を含む次元の場合、階層における位置は表記(レベル番号 / 階層番

号)からわかります。次元の階層番号はトップダウンで振られ、階層 0 から始まります。

- データベース・サイズ(MB 単位) - ビュー(およびそれに依存する他のすべてのビュー)が生成された場合のデータベースの予想サイズ。各サイズ値が「データベース・サイズ/クエリー・コストのグラフ」の X 軸に表示されます。
- クエリーのコスト - 値をビューから取得するために必要な平均取得時間の予想。最初のビュー(デフォルトで選択)の場合、この予想は考えられるすべてのクエリーの平均です。クエリー・トラッキングを使用しているビューの場合は、トラッキング対象クエリーの平均です。したがって、同じビューでも条件が異なると予想も変わります。特定のビューを使用する利点を評価するパーセンテージを計算するには、目的のビューのクエリー・コスト値で、レベル 0 値のみ含むビュー(複数の場合あり)を使用した場合のクエリー・コスト値を除算します。

次のボックスには追加情報が表示されます:

- 選択されたビューまたはすべてのビューの数 - 生成対象として選択されたビューの数と、ビューの総数との比
- 選択されたビューまたはすべてのビューの合計サイズ - 選択したビューが生成された場合のデータベース・サイズと、全ビューが生成された場合のデータベース・サイズの比

ビュー選択プロセスが完了すると、「データベース・サイズ/クエリー・コストのグラフ」が表示されます。このグラフには、データベース・サイズが X 軸に、クエリー・コストが Y 軸に、それぞれプロットされます。ビュー別の値と全ビューの値は色分けされます。

グラフを解釈する際には、次の点に留意してください:

- グラフのカーブが縦から横へ変わり始める点は、ビューを追加選択してもクエリー・コストが減らなくなり、データベース・サイズが増加し始める点を表しています。
- 最適な結果を得るには、グラフの縦から横への転換点に関連しているビューの後ろのビューの選択を解除します(選択しない)。

クエリー・トラッキング・データに基づいてビューを選択する場合は、「ビューの選択中にクエリー・トラッキングのデータを使用」オプションを選択します。クエリーは継続的にトラッキングされるため、このオプションが選択されると、ウィザードを実行するたびに一意のビュー・セットが生成されます。このオプションが選択されていない場合、Essbase サーバーはどのビューも同等にクエリーします。

クエリー・トラッキングの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。データベースのクエリー・トラッキングを有効または無効にする手順については、[集約ビュー選択のためのクエリー・データのトラッキング](#)を参照してください。

注: このクエリー・データ・オプションは、集約を含むデータベースに対してのみ有効です。

ビュー選択プロセスを開始するには、「開始」をクリックします。プロセスを停止するには、「停止」をクリックします。「停止」、「開始」の順にクリックすると、選択が新たに開始され、その前のプロセスで選択されたビューは保存されません。

集約の保存と生成ページ

集約は、スクリプトとして保存するか、すぐに生成するか、またはその両方を行うことができます。

このページでは、次のオプションを1つ以上選択します：

- 集約に名前を付けて保存 - このテキスト・ボックスには名前を入力します。既存のスクリプトの名前を入力した場合、そのスクリプトは置換されます。スクリプトは、拡張子が.cscのテキスト・ファイルとして、Essbase サーバー・マシンのデータベース・ディレクトリに保存されます。保存済のスクリプトを生成するには、ウィザードの最初のページにある「保存済集約を使用」オプションを選択します。
- 集約の生成 - Essbase サーバーが集約を生成します。これにより、集約セルが作成され、そこに値が保存されます。生成中、会計のタグが付けられた次元に関するメンバー式は計算されません。該当する場合は、既存の集約値を新しい値に置換できます。
- 既存の集約の置換 - このオプションは、データベースに以前の集約の値が含まれており、かつ「集約の生成」オプションと「既存の集約ビュー選択の置換」オプションが選択されている場合のみ使用できます。

集約スクリプトの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。集約の置換のガイドラインについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

集約設計ウィザード - 例

次のシナリオは、3次元を含むモデルに基づいています：

- Product(3 レベル)
- Market(4 レベル)
- メジャー

可能な集約ビューは全部で12個あります。

前提条件

- 集約ビューは1から12まで番号が付けられています。
- データのロードと集約は実行済です。この集約によって集約ビュー「3、5、7、8」が生成済です。
- データのロードは再度実行されています。そのため、集約の実行以降、レベル0入力データが変更されています。

- 新しい集約を設計しようとしています。そのため、ウィザードのオプション 2 を使用しています。

表示と選択のオプション

ウィザードで「既存の集約ビュー選択への追加」オプションを選択した場合の処理は次のとおりです:

- ビュー 3、5、7、8 が自動選択されます。
- ビュー 1、12 を選択します。
- 集約が生成されると、集約ビュー 1、12 が生成されます。
- これで、データベース集約に集約ビュー 1、3、5、7、8、12 が含まれます。

注: 当初の集約ビュー選択によるクエリー・パフォーマンスで問題ない場合は、「追加」オプションを選択します。また、「追加」オプションを使用した場合、生成にかかる時間が短縮されます。

集約の置換のオプション

ウィザードで「既存の集約ビュー選択の置換」を選択した場合の処理は次のとおりです:

- 自動選択されるビューはありません。
- ビュー 1、3、7、9、11 を選択します。
- ウィザードの最後のページで、「既存の集約の置換」オプションを選択または選択を解除する必要があります。

ウィザードの最後のページで「既存の集約ビュー選択の置換」オプションを選択した場合は、「既存の集約の置換」オプションを選択または選択を解除する必要があります。

「既存の集約の置換」オプションを選択した場合の処理は次のとおりです:

- 集約ビュー 3、5、7、8 が削除されます。
- 集約ビュー 1、3、7、9、11 が生成されます。
- これで、データベース集約に集約ビュー 1、3、7、9、11 が含まれます。

「既存の集約の置換」オプションの選択を解除した場合の処理は次のとおりです:

- 集約ビュー 3、7 はすでに存在しています。
- 集約ビュー 1、9、11 が生成されます。
- これで、データベース集約に集約ビュー 1、3、5、7、8、9、11 が含まれます。

「Essbase Administration Services ログイン」ダイアログ・ボックス

Administration Services にログオンした後、Essbase 管理サーバーによって Essbase サーバーへの接続が処理されます。このため、Essbase サーバーに接続するためにユーザー名やパスワードを入力する必要はありません。

Administration Services にログオンするには、次のボックスに Essbase 管理サーバー情報を入力します。この情報は、Essbase サーバー情報と同じでも異なってもかまいません:

- Essbase 管理サーバー - Essbase 管理サーバーがインストールされているコンピュータの名前。Essbase 管理サーバーの**ポートの設定**がデフォルトでない場合、Essbase 管理サーバー名の後にポート値を指定する必要があります(たとえば、AdminServerName:10081)。
- ユーザー名
- パスワード - 空のパスワードはサポートされていません。LDAP、NT LAN Manager、または Active Directory のユーザーとしてログインする際に、空のパスワードを使用している場合は、そのパスワードを変更する必要があります。変更しないと、外部ディレクトリ・アカウントを使用して Administration Services にログインできません。

注: 必要な情報がわからない場合は、管理者に問い合わせてください。

分析クラスタ:<クラスタ名>ウィンドウ

分析クラスタ・ウィンドウは、このウィンドウ内に名前が表示されているクラスタを管理するために使用します。

「説明」ボックスにクラスタについての説明を入力します(「西部のセールス情報」など)。

次の列に、クラスタに関する情報(データベース・コンポーネントごとに 1 行)が表示されます:

- Essbase サーバー
- アプリケーション
- データベース
- ステータス - 使用可能、使用不可または NA

様々なアクションを実行するには、次のボタンをクリックします:

- 追加 - クラスタに追加するデータベースを選択するのに使用する「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」ダイアログ・ボックスを開きます
- 削除 - 選択したデータベースを削除します
- 使用可能にする - 選択した使用不可のデータベースを使用可能にします

- 使用不可にする - 選択した使用可能なデータベースを使用不可にします(データベースを更新できるのはオフラインでのみです。そのため、データベースを更新する場合は、その前にそれを使用不可にする必要があります。)
- リフレッシュ - データベース・リストおよびステータス・マーカーを更新します
- 適用 - 変更を適用します

Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ

このウィンドウは、Essbase サーバーのプロパティを表示および編集するために使用します。サーバー・レベルのプロパティを表示および編集するには、管理者権限が必要です。

このダイアログ・ボックスには、次のタブが含まれています:

- **セキュリティ** - 自動ログオフの動作を指定、およびユーザー名やパスワード有効期間を管理
- **ライセンス** - Essbase ライセンスとインストールに関する情報を表示
- **統計** - Essbase サーバーのランタイム統計を表示
- **環境** - Essbase 環境変数と `essbase.cfg` の設定に関する情報を表示
- **OS** - サーバー・コンピュータのオペレーティング・システムとリソース使用率に関する情報を表示
- **ディスク・ドライブ** - サーバー・コンピュータのディスク・ドライブのタイプ、ディスク・ドライブの使用状況、ファイル・システムのタイプに関する情報を表示

関連情報

- [89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」](#)
- [325 ページの「Essbase サーバーの監視について」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)

関連コマンド

- `alter system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「Essbase サーバー・プロパティ」 - 「ディスク・ドライブ」タブ

「ディスク・ドライブ」タブには、ディスク・ドライブのタイプ、ディスク・ドライブの使用状況、ファイル・システムのタイプに関する情報が表示されます。

このタブの列には、Essbase サーバー・コンピュータのドライブに関する情報が表示されます:

- ドライブ - ドライブの名前
- ボリューム・ラベル
- タイプ - 「固定」、取外し可能、RAM、「リモート」、「不明」のいずれか
- ファイル・システム - FAT、HPFS、NTFS など
- 合計スペース - KB 単位
- 使用スペース - KB 単位
- 空きスペース - KB 単位

関連情報

- [89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」](#)
- [325 ページの「Essbase サーバーの監視について」](#)
- [498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバー・プロパティ - 「環境」タブ

「環境」タブのノードには、次の情報が表示されます:

- Essbase 環境変数 - インストール時に定義(ARBORPATH など)。インストール時に環境変数を定義しなかった場合は、デフォルト値が表示されます。このノードの横にあるボックスを使用すると、パス情報を確認できます。
- Essbase 構成設定(essbase.cfg) - essbase.cfg サーバー構成ファイルを作成した場合は、そのファイルに定義されているパラメータが一覧表示されます。ファイルを作成しなかった場合、このノードの横のボックスは空白になります。このファイルの作成方法および使用可能なパラメータの一覧については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

Essbase サーバー・ログに書き込まれるメッセージを判断する、サーバー・ログ・レベル構成設定を変更できます。

関連情報

- [89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」](#)
- [325 ページの「Essbase サーバーの監視について」](#)
- 構成ファイルの概要(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- [498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「Essbase サーバー・プロパティ」 - 「ライセンス」タブ

このタブは、Essbase のライセンスとインストールに関する情報を表示するために使用します。

関連情報

- [89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」](#)
- [325 ページの「Essbase サーバーの監視について」](#)
- [327 ページの「ライセンス情報とインストール情報の表示」](#)
- [498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `display system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `version(MaxL Shell コマンド)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `VERSION(Essbase エージェント)`(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

ウィンドウ・アイテム - 「ライセンス」タブ

「バージョン」ノード	Essbase サーバー・コンピュータで稼働している Essbase の現在のバージョンが表示されます。
「ライセンス番号」ノード	Essbase のライセンス番号が表示されます。
「ライセンスの有効期限」ノード	Essbase のライセンスの有効期限が表示されます。
「インストールされたポート数」ノード	サーバーにインストールされているポートの総数が表示されます。Essbase には、管理者用の追加ポートが 1 つ確保されています。 使用可能なポート数を調べるには、「統計」タブをクリックします。
「ネットワーク・プロトコル」ノード	サーバー・コンピュータにインストールされているネットワーク・プロトコルが表示されます。

ウィンドウ・アイテム・「ライセンス」タブ

「ライセンス・タイプ」ノード	Essbase のライセンス・タイプのいずれかが表示されます: <ul style="list-style-type: none">● 「名前付き」: Essbase が名前付きユーザーに対してライセンス供与されています。つまり、ライセンス・ファイルには、Essbase サーバーに作成できる最大ユーザー数が指定されています。● 「同時」: Essbase が同時ユーザーに対してライセンス供与されています。つまり、ライセンス・ファイルには、Essbase サーバーに同時にログインできる最大ユーザー数が指定されています。このタイプのライセンスでは、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の制限についての付録に指定されている Essbase サーバーに許可されている最大ユーザー数までユーザーを作成できます。● 「CPU」: Essbase が Essbase サーバー・コンピュータの特定の CPU 数に対してライセンス供与されています。たとえば、ライセンスに指定されている CPU 数が 4 の場合、Essbase サーバーを実行するコンピュータの CPU が 4 基以下となる必要があります。● 「無制限」: Essbase がポートを無制限に使用する同時ユーザーに対してライセンス供与されています。このタイプのライセンスでは、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の制限についての付録に指定されている Essbase サーバーに許可されている最大ユーザー数までユーザーを作成できます。Essbase サーバーに同時にログインできるユーザー数に制限はありません。これは以前のリリースの従来のライセンス・タイプです。
「インストールされたオプション」ノード	Essbase のインストール時に設定された機能が一覧表示されます。
「Essbase システム・ファイル」ノード	サーバー・メモリーにロードされているシステム・ファイルと、その保存場所およびバージョン番号が表示されます。

Essbase サーバー・プロパティ・「OS」タブ

「OS」タブには、Essbase サーバー・コンピュータに関する情報が表示されます。

「オペレーティング・システム」ノードには、Essbase サーバー・コンピュータで稼働しているオペレーティング・システムに関する次の情報が表示されます:

- 名前 - 名前とバージョン
- 開始時刻 - Essbase サーバー・コンピュータのタイム・ゾーンで表示
- 経過時間 - 時間:分:秒形式
- 現在の時刻 - Essbase サーバー・コンピュータのタイム・ゾーンで表示

「CPU」ノードには、Essbase サーバー・コンピュータの CPU に関する次の情報が表示されます:

- カウント
- 入力

「メモリー」ノードには、Essbase サーバー・コンピュータの物理メモリーに関する次の情報が表示されます:

- 合計(KB 単位)
- 使用(KB 単位)

- 空き(KB 単位)

「仮想メモリー」ノードには、ディスク・スワップが有効であるかどうかを示されます。可能な値は、「使用可能」、「使用不可」、「ファイルが見つかりません」およびアクセスが拒否されました。ステータスが「使用不可」、「ファイルが見つかりません」またはアクセスが拒否された場合は、スワップ・スペース情報は表示されません。ステータスが「使用可能」の場合は、次のスワップ・スペース情報が表示されます:

- パス - Windows NT システムと UNIX システムでは、複数のスワップ・ファイルが使用されることがあります。このタブでは、複数ファイルはスペースで区切られて表示されます。
- 合計 - KB 単位
- 使用 - KB 単位。スワップ・ファイルが複数存在する場合、使用されるスペースはスワップ・ファイルの合計サイズになります。
- 空き - KB 単位

関連情報

- [89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」](#)
- [325 ページの「Essbase サーバーの監視について」](#)
- [498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバー・プロパティ - 「セキュリティ」タブ

「セキュリティ」タブは、セキュリティ関連タスクを実行するために使用します。

注： Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) の場合、「セキュリティ」タブのユーザー名とパスワードのオプションおよび自動ログオフのオプションは使用できません。

ユーザー名とパスワードの管理グループでは、ユーザー名とパスワードの設定を指定します。デフォルトでは、これらの設定は 0(オフ)です。0 から 64,000 の範囲の値を入力する必要があります。

- ユーザー名が使用不可になるまでに試行できるログイン - システムでユーザー名が無効になるまでの、間違ったユーザー名やパスワードを連続して入力できる回数を指定します。この設定を変更すると、すべてのログイン試行回数が 0 に戻されます。
- ユーザー名が使用不可になるまでの非アクティブ日数 - ユーザー・アカウントを非アクティブにしておける日数を指定します。設定を適用すると、すぐに全ユーザーのタイマーが開始されます。ユーザーがログインするたび、また

は管理者がユーザーを再度アクティブ化または編集した場合に、各ユーザーのタイマーがリセットされます。

- パスワード変更が要求されるまでの日数 - ユーザーが現在のパスワードを保持できる日数を指定します。この日数が経過すると、ログイン時にパスワードを変更するよう求められます。日数カウントは、ユーザー本人がパスワードを変更するか、または管理者がパスワードを変更するとリセットされます。

「自動ログオフ」グループのオプションは、ユーザーをログオフさせるかどうか、およびどの時点でログオフさせるかを指定するために使用します:

- 非アクティブの制限(分単位) - Essbase によってユーザーが切断されるまでのユーザーの非アクティブ時間を分単位で指定します(デフォルト 60、最小値 5、最大は 0 を指定した場合で制限なし)
- チェック(分ごと)(分単位) - Essbase が非アクティブなユーザーをチェックする頻度、およびセキュリティ・ファイルと [セキュリティ・バックアップ・ファイル](#)を比較する頻度を分単位で指定します(デフォルト 5、最小値 1、最大は 0 を指定した場合で制限なし)。

注: 自動ログオフを無効にすると、ユーザーはサーバーがシャット・ダウンされるまで接続されたままになります。

「Unicode モードのアプリケーションの作成権限」オプションは、Essbase サーバーが Unicode モードであるかどうか、つまり Essbase サーバーが Unicode モードのアプリケーションを作成したりアプリケーションを Unicode モードに移行したりできるかどうかを示します。Essbase サーバーを Unicode モードに設定するには、このオプションを選択します。(アプリケーションが誤って Unicode モードで作成されないように)Essbase サーバーを非 Unicode モードに設定するには、このオプションの選択を解除します。

EPM System セキュリティ・オプションは、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#)にあるかどうか、つまりユーザーやグループの管理に Shared Services ユーザー管理コンソールを使用するかどうかを示します。このオプションは変更できません。Essbase サーバーを手動で [EPM System セキュリティ・モード](#)に変換する必要があります。変換後は、Essbase サーバーをネイティブのセキュリティ・モードに戻すことはできません。

関連情報

- [Essbase サーバー・プロパティの管理](#)
- [325 ページの「Essbase サーバーの監視について」](#)
- [498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」](#)
- [91 ページの「Unicode モードのアプリケーションを作成するための Essbase サーバー権限の管理」](#)

関連コマンド

alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Essbase サーバー・プロパティ - 「統計」 タブ

「統計」タブのノードには、Essbase サーバーの実行時統計が表示されます:

- サーバーの開始時刻 - Essbase サーバー・コンピュータのタイム・ゾーンで表示
- サーバーの経過時間 - 時間:分:秒形式
- 使用中のポート - 使用中のポート数
- 使用可能なポート - 使用可能なポート数(値が-1の場合は、予備ポート、管理者用ポートおよびライセンスされたすべてのポートが使用中)

注: インストールされているポート数を確認するには、「ライセンス」タブを選択します。

- 最大接続数 - ポート当たりの接続数の最大値(たとえば、値が 50 の場合は、各ポートから 50 個の接続を作成可能。)
- 名前付き Essbase ユーザーの最大数 - Essbase サーバーに接続できる Essbase ユーザー数
- Planning ユーザーの最大数 - Essbase サーバーに接続できる Planning ユーザー数
- 使用中の Planning ユーザーの数 - Essbase サーバーに接続されている Planning ユーザー数

関連情報

- [89 ページの「Essbase サーバー・プロパティの設定」](#)
- [325 ページの「Essbase サーバーの監視について」](#)
- [498 ページの「Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

display system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ

このウィンドウのタブは、アプリケーションのプロパティを表示したり編集したりするために使用します。

- **一般** - アプリケーションの起動、最小権限、データ・ブロックのロック時間、および LRO ファイルの最大サイズに関するオプションを設定します。
- **統計** - アプリケーションの実行時統計を表示します。
- **テーブルスペース** - 集約ストレージ・アプリケーションのテーブルスペースを設定および管理します。

関連情報

- [98 ページの「アプリケーション・プロパティの設定」](#)

- 332 ページの「アプリケーションの監視について」
- 92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getappinfo(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getappstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setappstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーション・プロパティ - 「一般」タブ

「アプリケーション・プロパティ」 - 「一般」タブは、アプリケーションの起動、最小権限、データのロックの期限、および LRO ファイルの最大サイズに関するオプションを設定するために使用します。

- ログ・レベル情報 - アプリケーション・ログに書き込まれるメッセージを判断する、Essbase ログ・レベル構成設定を変更します。
- 起動 - 次のオプションから自動開始を構成します:
 - アプリケーションの開始をユーザーに許可 - ユーザーがアプリケーション内のデータベースからデータを取得しようとしたときにそのアプリケーションを自動的に開始します。ユーザーがアプリケーションをロードできないようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します;たとえば、複数のアプリケーションを使用している場合に、メモリー不足を回避するための一時的な措置として指定できます。このチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。
 - Essbase サーバーの開始時にアプリケーションを開始 - Essbase サーバーの起動時にアプリケーションを自動的に開始します。アプリケーションの開始は、読取りアクセス権以上の権限を持っているユーザーであれば誰でも実行できます。アプリケーションの停止は、管理者またはアプリケーション・マネージャ権限を持っているユーザーのみが実行できます。デフォルトでは、このチェック・ボックスは選択されていません。
- セキュリティ - 次のセキュリティ設定を管理します:
 - 「コマンドを許可」
 - 「接続を許可」
 - 「更新を許可」
 - 「セキュリティを使用可能にする」

デフォルトでは、すべての設定が選択されています。

- 最小アクセス・レベル - データベース・レベルで設定が変更されないかぎり、次のオプションから、アプリケーションおよびアプリケーション内のすべてのデータベースの最小アクセス・レベルを定義します:

- なし - デフォルトでは、アプリケーションに最小権限は設定されません；ユーザーは、各自の権限に基づいてこのアプリケーションにアクセスできます。
- 読取り - アプリケーション内のすべてのデータベースに対する読取り専用アクセス権を、すべてのユーザーに付与します。読取りアクセス権をユーザーに付与すると、ファイルを表示したり、データ値を取得したり、レポート・スクリプトを実行したりできるようになります。
- 書込み - アプリケーション内のすべてのデータベースに対する書込みアクセス権を、すべてのユーザーに付与します。書込みアクセス権をユーザーに付与すると、読取りアクセスに加えて、データ値の更新ができるようになります。ただし、計算の実行やアウトラインの変更はできません。
- 計算 - アプリケーション内のすべてのデータベースに対する計算アクセス権を、すべてのユーザーに付与します。計算アクセス権をユーザーに付与すると、読取りおよび書込みアクセスに加えて、計算の実行ができるようになります。ただし、アウトラインの変更はできません。
- データベース・マネージャ - アプリケーション内のすべてのデータベースに対するデータベース・マネージャ・アクセス権を、すべてのユーザーに付与します。データベース・マネージャ・アクセス権をユーザーに付与すると、読取り、書込みおよび計算アクセスに加えて、データベース・アウトラインやファイルの変更ができるようになります。
- Unicode モード - 選択すると、アプリケーションが Unicode モードに移行します。この移行は元に戻すことができません。
- 保留中のキャッシュ・サイズの制限値(MB) - [集約ストレージ・キャッシュ](#)が増加できる最大サイズを指定します。デフォルト値は 32MB で、これが最小値です。集約ストレージ・キャッシュは、この制限に達するまで動的に増加します。この設定は、アプリケーションの再起動後に有効になります。

次のアイテムは、ブロック・ストレージ・アプリケーションに対してのみ使用できます：

- データ・ブロックのロックのタイムアウト - ユーザーがデータのロックを保持できる最長時間を分単位で指定します。デフォルトは 60 分です。
- 添付ファイルの最大サイズ - リンク・レポート・オブジェクト添付について最大ファイル・サイズを KB 単位で指定します。デフォルトのサイズは「無制限」です。
- データ・ストレージ・タイプ - アプリケーションのデータ・ストレージ・タイプが表示されます。

関連情報

- [98 ページの「アプリケーション・プロパティの設定」](#)
- [332 ページの「アプリケーションの監視について」](#)
- [504 ページの「アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ」](#)
- Unicode モードのサーバーおよび非 Unicode モードのアプリケーション(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `alter application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーション・プロパティ - 「統計」 タブ

アプリケーション・プロパティ - 「統計」 タブは、アプリケーションの実行時統計を表示するために使用します:

- アプリケーションの開始時刻 - Essbase サーバーのタイム・ゾーンに応じたアプリケーションの開始時刻。
- アプリケーションの経過時間 - 時間:分:秒の形式で示されたアプリケーションの稼働時間。
- 接続数 - アプリケーションに現在接続しているユーザー数。

関連情報

- [98 ページの「アプリケーション・プロパティの設定」](#)
- [332 ページの「アプリケーションの監視について」](#)
- [504 ページの「アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `display application(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getappstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「アプリケーション・プロパティ」 - 「テーブルスペース」 タブ

アプリケーション・プロパティ・ウィンドウの「テーブルスペース」タブは、集約ストレージ・アプリケーションの物理ストレージに使用するテーブルスペースのプロパティを設定するために使用します。

このウィンドウには、システム定義の2つのテーブルスペース(default および temp)に対応する2つのタブが含まれています。

- ファイルの場所 - データ・ファイルが保管される既存のディレクトリの完全なパスを入力します。

UNIX プラットフォームで実行される Essbase サーバーの場合、このパスは大文字と小文字が区別されます。

既存のファイルの場所については、この列を編集することはできません。

- 最大ディスク・サイズ - ファイルの場所に割り当てる最大ディスク・スペースを指定します。

新しいファイルの場所については、値を指定するか、または「無制限」を選択できます。ディスク・サイズの「無制限」の値は、集約ストレージ・カーネルが処理可能な最大値を表します。この値に達する前にオペレーティング・システムの制限を受けた場合は、テーブルスペース内の別のファイルの場所を使用しようと試みられます。「無制限」の値よりも大きな値を入力した場合、カーネルはその設定を無視します。初期システム定義のファイルの場所でも「無制限」の値が使用されます。

- 単位 - 「最大ディスク・サイズ」の単位として MB または GB を選択します。
- 最大ファイル・サイズ - Essbase で新規ファイルが作成される前に、データ・ファイルの最大サイズを指定します。

新しいファイルの場所については、値を指定するか、または「無制限」を選択できます。ファイル・サイズの「無制限」の値は、集約ストレージ・カーネルが処理可能な最大値を表します。この値に達する前にオペレーティング・システムの制限を受けた場合は、新規ファイルが作成されます。「無制限」の値よりも大きな値を入力した場合、カーネルはその設定を無視します。初期システム定義のファイルの場所でも「無制限」の値が使用されます。

- 単位 - 「最大ファイル・サイズ」の単位として MB または GB を選択します。
- 場所の追加 - クリックして新しいファイルの場所をテーブルスペースに追加します。
- 場所の削除 - 選択したファイルの場所をテーブルスペースから削除するには、これをクリックします。ファイルの場所を削除すると、そのファイルの場所に含まれているすべてのファイルと、そのファイルが格納されているサブディレクトリが削除されます。

データが含まれているファイルの場所を削除することはできません。テーブルスペース自体を削除することはできません。

関連情報

- [81 ページの「テーブルスペースの管理」](#)
- 集約ストレージ・アプリケーションのストレージ管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [71 ページの「集約ストレージについて」](#)
- [504 ページの「アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- alter tablespace(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display tablespace(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

アプリケーション/データベースのステータス・ウィンドウ

アプリケーション/データベースのステータス・ウィンドウには、Essbase サーバーで開始されたアプリケーションおよびデータベースに関する情報が表示されます。

注： 情報を表示できるのは、使用権限のあるアプリケーションおよびデータベースに関してのみです。

情報は次の列に表示されます：

- アプリケーション - アプリケーション名のリスト
- アプリケーションのステータス - 実行中かどうかをアプリケーションごとに表示
- データベース - データベース名のリスト
- データベースのステータス - 実行中かどうかをデータベースごとに表示

関連情報

- [332 ページの「アプリケーションおよびデータベース・ステータスの表示」](#)
- [96 ページの「アプリケーションの開始」](#)
- [104 ページの「データベースの開始」](#)
- [97 ページの「アプリケーションの停止」](#)
- [106 ページの「データベースの停止」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)

関連コマンド

- `getappinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベースのアーカイブ」ダイアログ・ボックス

「データベースのアーカイブ」ダイアログ・ボックスのアイテムは、データベースをアーカイブ・ファイルにバックアップするために使用します。

- 「ファイルにアーカイブ」テキスト・ボックス - データベース・アーカイブ・ファイルのパスと名前を入力します。

アーカイブ・ファイルの名前には、`.arc` の拡張子を指定することをお勧めします。Essbase サーバー・コンピュータ上に存在するディレクトリへのパスを入力する必要があります。Essbase では、指定された名前でもアーカイブ・ファイルが作成されます。

- 「バックグラウンドでアーカイブ」 チェック・ボックス - バックグラウンド・プロセスとしてアーカイブを実行する場合に選択します。
- 「アーカイブの強制」 チェック・ボックス - アーカイブ・ファイルを上書きする場合に選択します。

関連情報

- [115 ページの「ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ」](#)
- [116 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの復元」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query archive_file(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「領域固有メンバーのマッピング」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスのアイテムは、パーティションの領域固有のメンバー・マッピングを作成するために使用します:

- オプションの編集 - オプションを使用して、パーティション領域を定義します:
 - メンバー選択ツールの使用 - このオプションを選択して、「ソース」列または「ターゲット」列をダブルクリックして「[グローバル・マッピング・メンバーの選択](#)」ダイアログ・ボックスを表示し、パーティション領域のメンバーを選択します。
 - テキスト・エディタの使用 - このオプションを選択して、「ソース」列または「ターゲット」列をダブルクリックして「[メンバー名](#)」ダイアログ・ボックスを表示し、パーティション領域のメンバーを手動で入力します。
 - インライン編集の使用 - このオプションを選択して、「ソース」列または「ターゲット」列をダブルクリックし、パーティション領域の列にメンバーを直接入力します。

[重複メンバー名データベース](#)で、テキスト・エディタやインライン編集オプションを使用して重複メンバー名を入力する場合は、修飾メンバー名を入力することにより重複するメンバーを区別できるようにする必要があります。重複メンバーの修飾メンバー名は、アウトライン・ビューアの「[メンバーのプロパティ](#)」ダイアログ・ボックスで表示できます。メンバー選択ツールを使用してアウトライン・ツリーから重複メンバー名を挿入する場合は、修飾メンバー名が自動的に挿入されます。

- ソース・メンバー - ソース・データベースのメンバーが表示されます。
- ターゲット・メンバー - ターゲット・データベースのメンバーが表示されます。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)

- [429 ページの「パーティションでの領域固有のメンバー・マッピングの定義\(オプション\)」](#)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「領域の定義」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスは、パーティションの領域定義を入力または編集するために使用します。

カンマで区切ったメンバー名のリストやメンバー集合関数を入力して、領域を定義します。名前に次のいずれかのが含まれる場合は、メンバー名を引用符で囲みます("メンバー名"):

- 名前の先頭にある 1 つ以上の数字(たとえば、"100-Blue")。
- スペースまたは次のいずれかの文字:
& (アンパサンド) * (アスタリスク) @ (アットマーク) \ (円記号(バックslash)) { } (中かっこ) [] (大かっこ) : (コロン), (カンマ) - (ダッシュ、ハイフン、またはマイナス記号) = (等号) ! (感嘆符) > (大なり記号) < (小なり記号) () (丸かっこ) % (パーセント記号) . (ピリオド) + (プラス記号); (セミコロン) / (スラッシュ) ~ (チルダ)

また、代替変数名を頭にアンパサンド(&)を付けた形式で入力できます。

[重複メンバー名データベース](#)で、重複メンバー名を入力する場合は、修飾メンバー名を入力することにより重複するメンバーを区別できるようにする必要があります。重複メンバーの修飾メンバー名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで表示できます。メンバー選択ツールを使用してアウトライン・ツリーから重複メンバー名を挿入する場合は、修飾メンバー名が自動的に挿入されます。

関連情報

- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)
- [536 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」タブ](#)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックス

「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックスは、パーティション定義のメンバーを選択するために使用します。

このダイアログ・ボックスが「領域」タブの「ソース」列と「ターゲット」列のどちらから起動されたかに応じて、「次元」タブには、ソースまたはターゲットのデータベースのアウトラインのツリー・ビューが表示されます。次元ノードを開いてメンバーを表示および選択し、表示領域で右クリックして、様々なアクション(選択したメンバーの全子孫の追加など)を実行できるメニューにアクセスします。

アウトラインの表示方法およびメンバーの表示および選択方法を指定するには、「表示方法」グループでいずれかのオプションを選択します:

- メンバー名順 - メンバー名またはメンバー・セット関数を選択できます。たとえば、Sales のすぐ下で「すべての子」を選択すると、Sales のすべての子がパーティションに追加されます。
- 世代名順
- レベル名別
- 動的時系列別 - 時系列でのみ使用可能

「ルール」ボックスには、現在のパーティション定義に含まれるメンバーおよびメンバー・セット関数がリストされます。重複メンバーの場合は、修飾メンバー名がリストされます。ボックスを空にするには、「すべて削除」ボタンをクリックします。リストを変更する場合は、アイテムを選択し、次のいずれかのボタンをクリックします:

- アイテムを上に移動
- アイテムを下に移動
- アイテムの削除

「出力オプション」グループで、1つ以上のオプションを選択します:

- 別名の使用 - メンバー名でなく、現在の別名テーブルからの別名がアウトラインに表示されます。別名のないメンバーについては、メンバー名が表示されます。このオプションは、「メンバー名順」オプションが選択されている場合のみ使用可能です。
- 共有メンバーの抑制 - 共有メンバーが「メンバーのプレビュー」ダイアログ・ボックスに1回のみリストされます。このオプションは、「世代名別」または「レベル名別」オプションが選択されている場合のみ使用可能です。

様々なアクションを開始または実行するには、次のボタンをクリックします:

- 追加 - アウトライン・ツリーで選択したアイテムを「ルール」ボックスに追加します
- メンバーの検索 - 「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスが開くため、これを使用してアウトライン・ツリーを検索できます(検索基準に一致するメンバーが「結果」タブにリストされます。)

- 情報 - 「[メンバー情報](#)」ダイアログ・ボックスが開き、アウトラインで選択したメンバーについての情報が表示されます
- サブセット - 「[サブセット](#)」ダイアログ・ボックスが開くため、これを使用して追加ルールをメンバーのサブセットに適用できます
- プレビュー - 「[メンバーのプレビュー](#)」ダイアログ・ボックスが開き、選択ルールに一致するメンバーがリストされます
- インポート - 「ルール」ボックスにメンバーをインポートするために「[選択ルールのインポート](#)」を実行します
- エクスポート - 「ルール」ボックスからメンバーをエクスポートするために「[選択ルールのエクスポート](#)」を実行します

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [536 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」タブ](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「カスタム・ビューのノードの配置」ダイアログ・ボックス

デフォルトでは、カスタム・ビュー・ツリーのオブジェクトは、追加した順序で表示されます。このダイアログ・ボックスのアイテムは、カスタム・ビューのオブジェクトを並べ替えるために使用します:

- ノード - カスタム・ビューに追加したオブジェクトが表示されます。
- 上に移動 - 選択したオブジェクトのカスタム・ビュー・ツリー内での位置を1つ上に移動します。
- 下に移動 - 選択したオブジェクトのカスタム・ビュー・ツリー内での位置を1つ下に移動します。

変更できるのは、ルート・ノードのすぐ下のノードのみです。

関連情報

- [55 ページの「カスタム・ビューでのオブジェクトの並べ替え」](#)
- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)
- [53 ページの「カスタム・ビューの作成」](#)
- [46 ページの「エンタープライズ・ビューについて」](#)

「ASO MDX 式テンプレート」ダイアログ・ボックス

「ASO MDX 式テンプレート」ダイアログ・ボックスにより、定義済テンプレートを使用してメンバー式を作成できます。「MDX テンプレートの選択」ペインでテンプレートを選択し、変数要素を指定ペインのフィールドに値を入力します。このダイアログ・ボックス内で、次の操作を実行できます:

- メンバー名または別名の使用
- [メンバー・ツリーからスクリプトへのメンバーの挿入](#)
- 式のプレビュー
- [637 ページの「\[メンバーのプロパティ\] ダイアログ・ボックスの「式」タブ](#)

関連情報

- [637 ページの「\[メンバーのプロパティ\] ダイアログ・ボックスの「式」タブ](#)
- [75 ページの「集約ストレージ・データベースの式の作成」](#)

「計算の割当て」ダイアログ・ボックス

「計算の割当て」ダイアログ・ボックスは、1つ以上の計算スクリプトを実行する権限をユーザーやグループに対して付与、または拒否するために使用します。現在の Essbase サーバー・インスタンス、アプリケーション、データベース、ユーザーまたはグループは、このダイアログ・ボックスのタイトル・バーで識別されます。

ユーザーまたはグループに計算スクリプトを実行する権限を付与できるかどうかは、他のセキュリティ権限によって異なります。[289 ページの「ユーザーおよびグループの計算権限の管理」](#)を参照してください。

[ユーザー/グループ・アクセス](#)・ウィンドウのアプリケーション・タブで「計算の割当て」ボタンをクリックすると、ダイアログ・ボックスが表示されます。

ユーザーやグループが、現在のアプリケーションやデータベースに関連付けられているすべての計算スクリプトを実行できるようにするには、「すべての計算の割当て」オプションを選択します。

「選択された計算」ボックスと「使用可能な計算」ボックスにはそれぞれ、ユーザーまたはグループが実行できる計算スクリプト、およびユーザーまたはグループが実行できない現在のアプリケーションやデータベースに関連付けられている計算スクリプトが表示されます。

次のいずれかの方法で、スクリプトを1つのリストからもう一方のリストに移動します(同時に権限も付与または剥奪されます):

- 1つのスクリプトを移動するには、そのスクリプトを選択し、該当する一重矢印ボタンをクリックします。

- 1つのボックスのすべてのスクリプトを移動するには、該当する二重矢印ボタンをクリックします。

関連情報

- [289 ページの「ユーザーおよびグループの計算権限の管理」](#)
- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [712 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ」](#)

「フィルタの割当て」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスは、ユーザーまたはグループにセキュリティ・フィルタを割り当てるために使用します。ユーザーやグループに割り当てることができるフィルタは、1つのデータベースにつき1つのみです:

- 割当て済のユーザーおよびグループ - フィルタが現在割り当てられているユーザーおよびグループ。
- 使用可能なユーザーおよびグループ - フィルタの割当てが可能なユーザーおよびグループ。
- 一重矢印 - 選択したアイテムをリスト間で指定した方向に移動します。
- 二重矢印 - すべてのアイテムをリスト間で指定した方向に移動します。

関連情報

- [309 ページの「フィルタの割当て」](#)
- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)

「アウトラインの関連付け」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスは、計算スクリプト、レポート・スクリプト、またはルール・ファイルにデータベース・アウトラインを関連付けるために使用します。アウトラインを関連付けると、次元やメンバーを手動で入力せずに直接挿入できます。

編集しているオブジェクトに関連付けるデータベースを探すには、Essbase サーバー・ツリーを使用します。

アウトラインとオブジェクトの関連付けは永続的ではありません。オブジェクトに関連付けるアウトラインは、後で変更できます。

関連情報

- [389 ページの「編集中の Essbase オブジェクトへのアウトラインの関連付け」](#)
- [363 ページの「スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」](#)

- [223 ページの「ルール・ファイルの検証」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

属性ビューア・ウィンドウ

属性ビューア・ウィンドウでは、指定したメンバーまたは次元の属性のアウトラインを検索できます。これは読取り専用です。

属性ビューア・ウィンドウでは、次の条件で検索できます:

- パターンに一致する基本次元または属性次元のメンバー名
- 可変属性のみ

可変属性を検索する場合、列ヘッダーをドラッグすることで、属性名、メンバー名または独立メンバー範囲別に、検索結果をグループ分けできます。

関連情報

[668 ページの「アウトライン・ビューア - 「アウトライン」タブ」](#)

バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウ

「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウには、Essbase 管理サーバーに対する管理者権限を持っている場合、自分および他の管理者が開始したバックグラウンド・プロセスのステータスが表示されます。Essbase 管理サーバーに対する管理者権限がない場合は、自分が開始したバックグラウンド・プロセスのみが表示されます。

表示する権限があり、手動では削除していないバックグラウンド・プロセスがすべて表示されます。

次のバックグラウンド・プロセス情報が表示されます:

- ユーザー名 - プロセスを開始したユーザーの Administration Services ユーザー名 (Essbase サーバー・ユーザー名ではありません)
- オブジェクト ID - 各プロセスの一意の ID(プロセスの開始時に「メッセージ」ペインに戻された ID と一致します)
- アクション - プロセスを開始するために使用されたコマンドの名前
- ソース - プロセスが開始された Essbase サーバー・インスタンス、アプリケーション、データベースの名前、および場合によってはオブジェクト名(レポート・スクリプト名など)
- ターゲット - プロセスのターゲットとなる Essbase サーバー・インスタンス、アプリケーションおよびデータベースの名前(異なるサーバー間でのアプリケーションのコピーなど、サーバー間での処理についてのみ表示)
- 「開始時刻」と「終了時刻」 - Essbase 管理サーバーの定義による

- ステータス - 「開始済」、「完了」または「失敗」

「表示」をクリックすると、選択したプロセスの結果(たとえば、失敗したプロセスのレポートやエラー・ファイルなど)を開くことができます。「削除」をクリックすると、選択した行をウィンドウから削除できます。

関連情報

[326 ページの「バックグラウンド・プロセスのステータスの確認」](#)

「添付ファイルの変更」ダイアログ・ボックス

「添付ファイルの変更」ダイアログ・ボックスは、メンバーの組合せに添付(リンク)する LRO ファイルを変更するために使用します。

「メンバーの組合せ」ボックスは、現在のメンバーの組合せを識別します。

注： このダイアログ・ボックスでは、添付ファイルに関連付けられているメンバーの組合せを変更できません。このため、ファイルを別のメンバーの組合せに添付するには、現在のリンクを削除してから、Spreadsheet Add-in を使用して目的のメンバーの組合せにリンクします。

現在のメンバーの組合せに別の LRO ファイルを添付するするには、「リンクされたファイルの再添付」ボックスを選択します。アプリケーションに設定されている制限を超えるファイルをリンクしようとする、エラー・メッセージが表示されます。

「説明」ボックスには、リンクするファイルを説明するテキストを入力できます。説明の入力は必須ではありません。

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)
- [397 ページの「LRO ファイル・サイズの制限」](#)

「パスワードの変更」ダイアログ・ボックス

「パスワードの変更」ダイアログ・ボックスを使用して Essbase サーバー・パスワードを変更する場合、パスワードは、Essbase サーバーで更新される他、Administration Services ユーザーである場合は Essbase 管理サーバーの **ユーザー・プロパティ** (「Essbase サーバー」タブ)で更新されます。Essbase 管理サーバー・パスワードには影響しません。

Essbase サーバー・パスワードでは大文字と小文字は区別されません。パスワードの長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

「アウトラインのコンパクト化」ダイアログ・ボックス

「アウトラインのコンパクト化」ダイアログ・ボックスは、集約ストレージ・アウトラインをコンパクト化することにより、アウトライン・ファイルのサイズを削減するために使用します。

コンパクト化プロセス中に作業する場合、「バックグラウンドでアウトラインをコンパクト化」を選択します。バックグラウンド・プロセス中は、コンソールを終了できませんが、Essbase 管理サーバーをシャット・ダウンできません。プロセスのステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで参照できます。

関連情報

[83 ページの「集約ストレージ・アウトライン・ファイルのコンパクト化」](#)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「プラグイン・コンポーネントの構成」ダイアログ・ボックス

「プラグイン・コンポーネントの構成」ダイアログ・ボックスは、クライアント・プラグインでの作業に使用します。

「インストールされたプラグイン」ボックスには、クライアントにインストールされたプラグイン、および選択したプラグインのプロパティが表示されます。プラグインは、エンタープライズ・ビュー・ツリーではノードとして、ボックスと同じ順序で表示されます。

プラグインを追加、削除、再配置するには、そのプラグインを選択し、次のいずれかのボタンをクリックします:

- 追加
- 削除
- 上へ移動
- 下へ移動

関連情報

[719 ページの「プラグイン・コンポーネントの構成」](#)

「変換設定」ダイアログ・ボックス

Essbase サーバーを EPM System セキュリティ・モードに変換する場合、「変換設定」ダイアログ・ボックスのアイテムを使用します:

- 管理サーバーの場所 - Shared Services と通信する Essbase 管理サーバーのマシン名およびポート番号を入力します。この情報を指定することによって、Oracle Hyperion Shared Services Console を使用して計算アクセス、フィルタ・アクセス、およびアプリケーション・アクセス・タイプをユーザーに割り当てることのできるようになります。
- パスワード作成設定 - ネイティブの Shared Services ユーザーについては、Shared Services ユーザーの移行時のパスワード作成方法を次のいずれかに指定します:
 - 自動生成 - Shared Services に移行されるユーザーの新パスワードが自動的に生成されます。パスワードは、テキスト・ボックスに指定されたテキスト・ファイルに記録されます。このファイルの拡張子は、.txt として指定する必要があります。また、既存のファイルの場所を参照し、新パスワードをこのファイルに追加することもできます。
 - ネイティブ・ユーザー名をパスワードとして使用する - Shared Services に移行される各ユーザーにネイティブ・ユーザー名をパスワードとして割り当てます。移行時にユーザー名が小文字のみのパスワードに変換されます。たとえば、ネイティブ・ユーザー名が Mark の場合、ユーザーの移行後のパスワードは mark となります。
 - 「パスワード」と「パスワードの確認」 - Shared Services で作成されるすべてのユーザーについて新パスワードを指定し、確認します。移行するすべてのユーザーに対して同一のパスワードを指定する必要があります。

関連情報

- [262 ページの「Essbase サーバーの変換および Shared Services へのユーザーの移行」](#)
- [259 ページの「Shared Services のユーザー管理について」](#)

関連コマンド

alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「別名テーブルのコピー」ダイアログ・ボックス

「別名テーブルのコピー」ダイアログ・ボックスを使用して、同じアウトライン内のテーブル間で別名をコピーできます:

「宛先」ボックスで、コピー元の別名を受け入れる別名テーブルを入力または選択します。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

「コピー時におけるテーブルのマージ」オプションを選択するかどうかを決定します:

- 未選択 - コピー先のテーブルの別名がすべて削除されてから、コピー元の別名がコピー先のテーブルにすべて追加されます。
- 選択 - 置換値がないコピー先のテーブルの別名がすべて保持されたうえで、コピー元の別名がコピー先のテーブルにすべて追加されます。

関連情報

- [187 ページの「別名テーブルのコピー」](#)
- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「すべての関数をコピー」ダイアログ・ボックス

関数をコピーする場合、ターゲット・サーバー上の1つのアプリケーションまたはすべてのアプリケーションに関数を関連付けます。1つの Essbase サーバー・インスタンスまたはアプリケーション内で関数をコピーすることも、複数の Essbase サーバー・インスタンスおよびアプリケーション間で関数をコピーすることもできます(適切なアクセス権がある場合)。

「すべての関数をコピー」ダイアログ・ボックスのリスト・ボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - 関数のコピー先の Essbase サーバー・インスタンスを選択します。
- アプリケーション - 関数のコピー先のアプリケーションを選択するか、<すべてのアプリケーション>を選択して、選択した Essbase サーバー・インスタンスのすべてのアプリケーションに関数をコピーします。
- 関数 - コピーする1つまたは複数の関数を選択します。

コピーした関数と同じ名前の関数を上書きするには、「既存の関数の上書き」オプションを選択します。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [378 ページの「カスタム定義関数のコピー」](#)

「すべてのマクロのコピー」ダイアログ・ボックス

マクロをコピーする場合、ターゲット・サーバー上の1つのアプリケーションまたはすべてのアプリケーションにマクロを関連付けます。適切なアクセス権のあるすべての Essbase サーバー・インスタンス上のすべてのアプリケーション内にマクロをコピーしたり、1つのサーバー内またはサーバー間でマクロをコピーできます。

「すべてのマクロのコピー」ダイアログ・ボックスのリスト・ボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - マクロのコピー先の Essbase サーバー・インスタンスを選択します。
- アプリケーション - マクロのコピー先のアプリケーションを選択するか、<すべてのアプリケーション>を選択して、指定した Essbase サーバー・インスタンスのすべてのアプリケーションにマクロをコピーします。
- マクロ - コピーする 1 つまたは複数のマクロを選択します。

コピーしたマクロと同じ名前のマクロを上書きするには、「既存のマクロの上書き」オプションを選択します。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロのコピー」](#)

「アプリケーションのコピー」ダイアログ・ボックス

「アプリケーションのコピー」ダイアログ・ボックスは、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバー・インスタンスにアプリケーションをコピーするために使用します:

- 「Essbase サーバー」ボックスで、ターゲット Essbase サーバー・インスタンス(同じサーバー、同じプラットフォーム上の別のサーバー、または別のプラットフォーム上のサーバー)を選択します。
- 「アプリケーション」ボックスで、コピー元のアプリケーションの名前を入力します。命名規則については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

注: ターゲット Essbase サーバー・インスタンスのバージョンは、ソース Essbase サーバー・インスタンスのバージョンと同じかこれより新しい必要があります。

関連情報

- [99 ページの「アプリケーションのコピー」](#)
- [108 ページの「データベースのコピー」](#)
- [641 ページの「移行ウィザード」](#)

関連コマンド

- create application ... as(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「計算スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス

アプリケーションのすべてのデータベースまたはアプリケーションの1つのデータベースに計算スクリプトをコピーできます。1つの Essbase サーバー・インスタンスまたはアプリケーション内でスクリプトをコピーすることも、複数の Essbase サーバー・インスタンスおよびアプリケーション間でスクリプトをコピーすることもできます(適切なアクセス権がある場合)。

「計算スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス内では、次の操作が可能です:

- スクリプトのコピー先の Essbase サーバー・インスタンスおよびアプリケーションを選択します。
- スクリプトのコピー先のデータベースを選択するか、<すべての DB>を選択して選択したアプリケーションのすべてのデータベースにスクリプトをコピーします。
- スクリプトの名前を入力します。(名前の長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。)

関連情報

[371 ページの「スクリプトのコピー」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- create calculation ... as(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベースのコピー」ダイアログ・ボックス

「データベースのコピー」ダイアログ・ボックスは、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバー・インスタンス上のアプリケーションにブロック・ストレージ・データベースをコピーするために使用します:

- 「Essbase サーバー」ボックスで、ターゲット Essbase サーバー・インスタンス(同じサーバー、同じプラットフォーム上の別のサーバー、または別のプラットフォーム上の別のサーバー)を選択します。
- 「アプリケーション」ボックスで、ターゲット・アプリケーションを選択します。
- 「データベース名」ボックスで、コピー元のデータベースの名前を入力します。命名規則については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

データベースとともにコピーされる情報については、[108 ページの「データベースのコピー」](#)を参照してください。

注： ターゲット Essbase サーバー・インスタンスのバージョンは、ソース Essbase サーバー・インスタンスのバージョンと同じかこれより新しい必要があります。

関連情報

- [108 ページの「データベースのコピー」](#)
- [99 ページの「アプリケーションのコピー」](#)
- [641 ページの「移行ウィザード」](#)

関連コマンド

- `create database ... as(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `createdb(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「フィルタのコピー」ダイアログ・ボックス

「フィルタのコピー」ダイアログ・ボックスは、セキュリティ・フィルタをあるデータベースから別のデータベースにコピーするために使用します:

情報を入力するボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - ターゲット・サーバー(権限に応じて同じサーバーまたは別のサーバー)
- アプリケーション - ターゲット・アプリケーション
- データベース - ターゲット・データベースまたは<すべての DB>(アプリケーション内のすべてのデータベースにフィルタをコピーする場合)
- フィルタ - フィルタのコピー名(文字、数字およびスペースを使用できます;長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)

コピー元のフィルタと同名のフィルタを置き換えるには、「既存のフィルタの置換」オプションを選択します。

関連情報

- [310 ページの「フィルタのコピー」](#)
- [307 ページの「フィルタの管理」](#)

関連コマンド

- `alter object(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `create filter as(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `copyfilter(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「関数のコピー」ダイアログ・ボックス

関数をコピーする場合、ターゲット・サーバー上の1つのアプリケーションまたはすべてのアプリケーションに関数を関連付けます。1つの Essbase サーバー・インスタンスまたはアプリケーション内で関数をコピーすることも、複数の Essbase サーバー・インスタンスおよびアプリケーション間で関数をコピーすることもできます(適切なアクセス権がある場合)。

「関数のコピー」ダイアログ・ボックスのリスト・ボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - 関数のコピー先の Essbase サーバー・インスタンスを選択します。
- アプリケーション - 関数のコピー先のアプリケーションを選択するか、<すべてのアプリケーション>を選択して、選択した Essbase サーバー・インスタンスのすべてのアプリケーションに関数をコピーします。
- 関数 - コピーする1つまたは複数の関数を選択します。

コピーした関数と同じ名前の関数を上書きするには、「既存の関数の上書き」オプションを選択します。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [378 ページの「カスタム定義関数のコピー」](#)

「グループのコピー」ダイアログ・ボックス

「グループのコピー」ダイアログ・ボックスは、Essbase サーバー・インスタンス内または Essbase サーバー間で Essbase ユーザーのグループをコピーするために使用します。

情報を入力するボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - ターゲット Essbase サーバー・インスタンス(権限に応じて同じサーバーまたは別のサーバー)。
- 新規グループ名 - 名前(大文字と小文字は区別されませんが、長さは制限されています。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)

選択できるオプションは、次のとおりです:

- バックグラウンドで実行 - バックグラウンド・プロセス中には、コンソールは終了できませんが、Essbase 管理サーバーはシャット・ダウンできません。プロセスのステータスは、「[バックグラウンド・プロセスのステータス](#)」ウィンドウで確認できます。
- 管理者のコピー - 管理者権限を持っているグループをコピーします
- 既存のグループの置換え - 同じ名前のグループを置き換えます

関連情報

- [295 ページの「Essbase サーバー・グループのコピー」](#)
- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

copy group(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「マクロのコピー」ダイアログ・ボックス

マクロをコピーする場合、ターゲット・サーバー上の 1 つのアプリケーションまたはすべてのアプリケーションにマクロを関連付けます。適切なアクセス権のあるすべての Essbase サーバー・インスタンス上のすべてのアプリケーション内にマクロをコピーしたり、1 つのサーバー内またはサーバー間でマクロをコピーできます。

「マクロのコピー」ダイアログ・ボックスのリスト・ボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - マクロのコピー先の Essbase サーバー・インスタンスを選択します。
- アプリケーション - マクロのコピー先のアプリケーションを選択するか、<すべてのアプリケーション>を選択して、指定した Essbase サーバー・インスタンスのすべてのアプリケーションにマクロをコピーします。
- マクロ名 - コピーする 1 つまたは複数のマクロを選択します。

コピーしたマクロと同じ名前のマクロを上書きするには、「既存のマクロの上書き」オプションを選択します。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロのコピー」](#)

「パーティションのコピー」ダイアログ・ボックス

「パーティションのコピー」ダイアログ・ボックスは、パーティションをコピーしてソース・データベースとターゲット・データベースの接続情報を指定するために使用します。

パーティションは、新しいまたは既存のソース・データベースと新しいターゲット・データベース間でコピーできますが、新しいソース・データベースと既存のターゲット・データベース間ではコピーできません。

「データ・ソース」および「データ・ターゲット」領域(それぞれソース・データベースとターゲット・データベースに関連)において、表示される情報と実行できるアクションは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - データベースが存在する Essbase サーバー・インスタンスの名前。別の Essbase サーバー・インスタンスを選択できます。
- アプリケーション - データベースが存在するアプリケーションの名前。別のアプリケーションを選択できます。
- データベース - パーティションが存在するデータベースの名前。別のデータベースを選択できます。
- 「ユーザー」と「パスワード」 - データベースが格納されているサーバーに接続するためにパーティションが使用するユーザー名とパスワード。Essbase では、複製パーティションや透過パーティションのソース・データベースとターゲット・データベースの間でデータを転送するときに、このユーザー名とパスワードを使用しています。ローカル・セキュリティ・フィルタでは、権限付きのデータがエンド・ユーザーに表示されません。
 - ソース・データベースの場合、ユーザー名とパスワードは指定できません。
 - ターゲット・データベースの場合、ユーザー名とパスワードを指定できません。Essbase
- コメント - 説明文。説明文を変更または入力できます。リンク・パーティションの場合、コメントのテキストは Spreadsheet Add-in の「リンク・オブジェクト」ボックスに表示されます。

関連情報

- [436 ページの「パーティションのコピー」](#)
- [421 ページの「パーティションについて」](#)

関連コマンド

alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「レポート・スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス

アプリケーションのすべてのデータベースまたはアプリケーションの1つのデータベースにレポート・スクリプトをコピーできます。

レポート・スクリプトは、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバー・インスタンス上の任意のアプリケーション、レポート・スクリプトが存在するサーバーおよびアプリケーション、または別のサーバーおよびアプリケーションにコピーできます。

次のボックスで、レポート・スクリプトのコピー先を指定します:

- Essbase サーバー
- アプリケーション

- データベース - データベースまたは<すべての DB>を選択します。

「レポート名」ボックスで、レポート・スクリプトのコピーの名前を入力します。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。デフォルトでは、レポート・スクリプトには.rep 拡張子が割り当てられています。

関連情報

[371 ページの「スクリプトのコピー」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「ルール・ファイルのコピー」ダイアログ・ボックス

ルール・ファイルは、データ・ロードや次元構築に使用されます。ルール・ファイルは、アプリケーションのすべてのデータベースかアプリケーションの1つのデータベースにコピーできます。

ルール・ファイルは、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバー・インスタンス上の任意のアプリケーション、ルール・ファイルが存在するサーバー・インスタンスおよびアプリケーション、または別のサーバー・インスタンスおよびアプリケーションにコピーできます。

次のボックスで、ルール・ファイルのコピー先を指定します:

- Essbase サーバー
- アプリケーション
- データベース - データベースまたは<すべての DB>を選択します。

「ルール・ファイル名」ボックスで、コピーの名前を入力します。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。デフォルトでは、ルール・ファイルには.ru1 拡張子が割り当てられています。

関連情報

[225 ページの「ルール・ファイルのコピー」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- copyobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「代替変数のコピー」ダイアログ・ボックス

代替変数をターゲット・サーバーにコピーする場合、すべてのアプリケーションおよびデータベース、1つのアプリケーションのすべてのデータベース、または1つのアプリケーションおよびデータベースに対してコピーできます。

代替変数は、適切なアクセス権がある任意の Essbase サーバー・インスタンス上の任意のアプリケーションまたはデータベース、変数が存在するサーバーおよびアプリケーション、あるいは別のサーバーおよびアプリケーションにコピーできます。

代替変数のコピー先を指定するボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー
- アプリケーション-アプリケーションを選択するか、<すべてのアプリケーション>を選択します。
- データベース-データベースまたは<すべての DB>を選択します。

変数に関する情報がリストされて表示される列は、次のとおりです:

- 名前
- 値

実行可能なアクションは、次のとおりです:

- 「すべてチェック」をクリックします(リストされたすべての変数をコピーします)。
- 「コピー」列で、1つまたは複数の変数を選択(して特定の変数をコピー)します。
- 「既存の変数の上書き」を選択します(コピー元の変数と同名の変数を置き換えます)。

関連情報

- [94 ページの「代替変数のコピー」](#)
- [93 ページの「代替変数の管理」](#)

「ユーザーのコピー」ダイアログ・ボックス

「ユーザーのコピー」ダイアログ・ボックスは、Essbase サーバー・インスタンス間でユーザーをコピーしたり、既存のユーザー・プロファイルを使用して Essbase サーバー・ユーザーを作成するために使用します。

情報を入力するボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - 権限に応じて現在のサーバーまたは別のサーバー
- 新規ユーザー名 - 1人のユーザーのみをコピーする場合に使用
 - 長さは制限されています(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)

- 大文字と小文字を区別しない
- 特殊文字の使用を許可
- パスワード - Essbase サーバー認証用のパスワード(大文字と小文字は区別されませんが;長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)。複数のユーザーをコピーする場合、すべてのユーザーに同じパスワードを割り当てる必要があります。

注: 「パスワード」ボックスは、認証を使用オプションを選択した場合にのみ使用できます。

ターゲット・サーバーに適用される「Essbase サーバー認証を使用」オプション。1人のユーザーをコピーする場合、「Essbase サーバー認証を使用」オプションが選択されます(選択は解除できません)。このオプションにより、ユーザーに対して Essbase ネイティブ認証が使用可能になります。ユーザーがソース・サーバー上の Essbase によって内部的に認証される場合、このオプションはデフォルトで選択されています。

「既存のユーザーの置換」オプションは、コピー対象のユーザーが1人か複数かに関係なく使用できます。このオプションを選択すると、新しいユーザーによって同名の既存ユーザーが置き換えられます。

複数のユーザーをコピーするときに使用可能なオプションは、次のとおりです:

- バックグラウンドで実行 - コピー・プロセスをバックグラウンドで実行しているときは、コンソールは終了できますが、Essbase 管理サーバーはシャットダウンできません。プロセスのステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで確認できます。
- 次回のログイン時にパスワード変更を強制 - ネイティブの認証ユーザーにパスワードを変更するよう求めます。このため、コピー元のすべてのユーザーにデフォルト・パスワードを割り当てて、個々のユーザーが独自のパスワードを選択できるようにしておきます。
- 現在のパスワードを保持 - ユーザーはパスワードを保持できます。
- 管理者のコピー - 管理者権限を持つユーザーをコピーできます。

関連情報

- [293 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのコピー」](#)
- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

関連コマンド

create user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「別名テーブルの作成」ダイアログ・ボックス

「別名テーブル名」ボックスで、新しい別名テーブルの名前を入力します。

新しいテーブルは空です。次のような方法でテーブルに別名を追加できます:

- 空のテーブルに別名テーブルをコピーする
- データ・ソース・ファイルから別名をインポートする
- メンバー・プロパティとして別名を手動で入力する

別名テーブルと別名の命名規則については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の制限についての付録を参照してください。

関連情報

- [182 ページの「別名テーブルについて」](#)
- [184 ページの「別名テーブルの作成」](#)
- [190 ページの「次元およびメンバーの別名の作成」](#)

関連コマンド

- unloadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- loadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「アプリケーションの作成」ダイアログ・ボックス

情報を入力する「アプリケーションの作成」ダイアログ・ボックスのボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - ターゲット Essbase サーバー・インスタンス
- アプリケーション - 新しいアプリケーションの名前

アプリケーションの命名ルールの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

「Unicode モード」オプションを選択(して Unicode モード・アプリケーションを作成)した場合、後でアプリケーションを非 Unicode に変更することはできません。

関連情報

- [95 ページの「アプリケーションの作成」](#)
- アプリケーションとデータベースの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [127 ページの「Unicode モードのアプリケーションの作成」](#)

関連コマンド

- create application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベースの作成」ダイアログ・ボックス

情報を入力する「データベースの作成」ダイアログ・ボックスのボックスは、次のとおりです:

- Essbase サーバー - ターゲット Essbase サーバー・インスタンス
- アプリケーション - ターゲット・アプリケーション
- データベース名 - 命名規則の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

ブロック・ストレージ・データベースの場合、データベース・タイプ・オプション・グループで、データベース・タイプを指定します:

- 標準 - デフォルト
- 通貨 - [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)を参照してください。

「メンバー名の重複を許可」オプションを選択または選択解除します。

関連情報

- [103 ページの「データベースの作成」](#)
- [454 ページの「データベースから通貨データベースへのリンク」](#)
- アプリケーションとデータベースの作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createdb(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「結合を使用したフィールドの作成」ダイアログ・ボックス

「結合を使用したフィールドの作成」ダイアログ・ボックスは、次の2つの方法で使用します:

- フィールドの作成 - 「作成用に結合するフィールド」ボックスで、複数のフィールドを選択します
- フィールドのコピー - 「作成用に結合するフィールド」ボックスで、1つのフィールドを選択します

新しいフィールドが、結合に使用した最初のフィールドの左側に表示されます。

関連情報

- [238 ページの「結合を使用したフィールドの作成」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「グループの作成」 / 「グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス

ダイアログ・ボックスのタイトル・バーには、Essbase サーバー・グループを新規作成している(「グループの作成」)か、既存のグループのプロパティを編集している(「グループ・プロパティ」)かが表示されます。

グループを作成または編集するときは、サーバー・レベルの権限をそのグループのユーザーに付与します。付与できるのは、自身が持っている権限と同等かそれ以下の権限のみです。実行権限を持たないタスクのオプションは、無効になっています。

このダイアログ・ボックスには、次のタブが含まれています:

- [グループ情報](#) - グループを作成、およびグループに関する基本情報を編集
- [ユーザー](#) - グループにユーザーを追加、またはグループからユーザーを削除
- [アプリケーション/データベース・アクセス](#) - Essbase サーバーの各アプリケーションおよびデータベースについて、特定の権限をグループに付与

関連情報

- [280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」](#)
- [293 ページの「グループ・プロパティの編集」](#)

「グループの作成」 / 「グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「アプリケーション/データベース・アクセス」タブ

「アプリケーション/データベース・アクセス」タブは、アプリケーション・レベルやデータベース・レベルの権限よりも高いアプリケーション権限およびデータベース権限を付与するために使用します。このタブでは権限をグループのみに付与し、個々のユーザーには付与できません。いずれの場合も、自分と同等かそれ以下の権限のみを付与できます。

次のボックスは、グループ名とそのグループが作成された Essbase サーバー・インスタンスを示します。

- グループ名

- Essbase サーバー

「アプリケーション」ノードの下に表示されている各アプリケーションについて、アプリケーション・レベルの権限をグループに付与できます:

- なし - グループにはアプリケーションへの直接アクセスは付与されていませんが、アプリケーションやアプリケーション内のいずれかのデータベースに対する最小権限が「なし」より高い場合、または権限を特定のセルにアップグレードするフィルタがグループに付与されている場合、このグループはアクセスを継承できます。
- データベース・アクセス - 各データベース固有の権限をグループに付与できます。
- アプリケーション・マネージャ - 管理者が使用できる大部分の権限がグループに付与されます。グループ内のユーザーはアプリケーションへのフル・アクセス権限を持ち、データベースの作成および削除、ユーザーの接続解除、フィルタの定義および割当て、データ・ロックの解除が可能です。

「データベース」ノードの下に表示されている各データベースについて、データベース・レベルの権限をグループに付与できます:

- なし - グループは、どのオブジェクトやデータ値にもアクセスできません。
- フィルタ - グループ・アクセスはフィルタで定義されます。このフィルタは選択できます。
- 読取り - 読取り専用のアクセス権限がグループに付与されます。これにはレポート・スクリプトを実行する権限も含まれます(変更は不可)。
- 書込み - グループは、データ値の読取りおよび更新(計算は不可)、また Essbase オブジェクトの実行が可能です(変更は不可)。
- 計算 - グループは、データ値の読取り、更新および計算が可能です。グループが実行できる計算スクリプトを指定できます。
- データベース・マネージャ - グループは、データ値の読取り、更新、計算、およびすべてのデータベース関連ファイルの変更が可能です。

次のノードで、フィルタ権限と計算権限をさらに明確に定義できます:

- フィルタ - 「なし」以外の権限を選択する場合、フィルタを選択できます。フィルタは、付与するデータベース権限との併用で動作します。[307 ページの「フィルタの管理」](#)を参照してください。
- 計算 - 計算権限を付与する場合、グループが実行できる計算スクリプトを選択できます。「すべての計算を許可」オプションを選択するか、「計算スクリプトの選択」オプションと個別のスクリプトを選択します。

関連情報

- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [293 ページの「グループ・プロパティの編集」](#)

- [532 ページの「グループの作成」 / 「グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「グループの作成/グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「グループ情報」タブ

「グループ情報」タブは、グループの作成またはグループの基本情報の編集に使用します。

次のボックスで、(グループ作成中の場合は)情報を入力または選択するか、(グループを編集の場合には)情報を表示します:

- グループ名 - グループ名は英数字で始める必要があり、大文字と小文字は区別されません。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- Essbase サーバー - グループを作成済、または作成中の Essbase サーバー・インスタンス

「グループのタイプ」グループでは、グループのタイプを選択または変更できません:

- 管理者 - グループ・メンバーは、Essbase サーバー上のすべてのユーザー、グループ、およびデータに対するフル・アクセス権限を持ちます。
- ユーザー - グループ・メンバーは、権限を継承しません。そのため、アクセス権限がある場合は、作成/削除権限、グループ・メンバーシップ、アプリケーションまたはデータベース権限、またはフィルタを使用して付与する必要があります。

注: グループに割り当てられたタイプを管理者からユーザーに変更中の場合は、「アプリケーション/データベース・アクセス」タブを使用して、特定のアプリケーションやデータベースに対するグループ権限を付与する必要があります。

「説明」ボックスでは、グループの簡単な説明を入力できます。

関連情報

- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」](#)
- [293 ページの「グループ・プロパティの編集」](#)
- [532 ページの「グループの作成」 / 「グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「グループの作成/グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「ユーザー」タブ

「ユーザー」タブは、グループへのユーザー追加、およびグループからのユーザー削除に使用します。自身よりも高い権限を持つユーザーはグループに追加できません。

次のボックスは、グループ名とそのグループが作成された Essbase サーバー・インスタンスを示します。

- グループ名
- Essbase サーバー

「メンバー」ボックスと「非メンバー」ボックスにはそれぞれ、現在のグループのメンバーおよび非メンバーのリストが表示されます。特定のユーザーを選択して一重矢印ボタンをクリックすると、メンバー名をあるリストから別のリストに移動し、グループに対してメンバーを追加または削除できます。メンバー全員を他のリストに移動する場合は、二重矢印ボタンをクリックします。

関連情報

- [284 ページの「グループ・メンバーシップの管理」](#)
- [532 ページの「「グループの作成」/「グループ・プロパティ」ダイアログ・ボックス」](#)

パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ

パーティションとは、別のデータベースと共有されている、データベースの一部のことです。

パーティションの変更を処理するために使用するウィンドウのタイトルは、パーティションを作成しているか編集しているか、およびソース・アプリケーションが[集約ストレージ](#)であるか[ブロック・ストレージ](#)であるかによって変わります。

各ウィンドウには一連のタブが含まれます。これらの各タブを使用してパーティションに関するタスクを実行します:

- [タイプ](#) - パーティションのタイプと設定を指定します
- [接続](#) - 接続情報を指定します
- [領域](#) - パーティション領域を定義します
- [マッピング](#) - グローバルのメンバー・マッピングを定義します
- [検証](#) - パーティションの検証の結果を表示します

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウを開く](#)

- 423 ページの「パーティションの作成」
- パーティション・アプリケーションの設計(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- パーティションの作成および維持(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」タブ

パーティションを作成または編集する場合、「領域」タブを使用して、ターゲット・データベースと共有するソース・データベースの領域を定義します。

「オプションの編集」グループからオプションを選択し、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックして、パーティション領域に含めるメンバーを指定します:

「オプションの編集」グループのオプションは、次のとおりです:

- メンバー選択ツールの使用 - 「領域マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。これを使用して、メンバー名を選択します
- テキスト・エディタの使用 - 「領域の定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。これを使用して、メンバー名を手動で入力します
- インライン編集の使用 - パーティション領域の列にメンバー名を手動で入力できます

注: テキスト・エディタやインライン編集のオプションを使用する場合、重複メンバー名については、修飾名を入力する必要があります(重複するメンバーと区別するため)。修飾名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで表示できます。メンバー選択ツールを使用する場合、修飾名は自動的に挿入されます。

「ソース」および「ターゲット」列には、ソースおよびターゲット・データベースのメンバー名と代替変数名がリストされます。

「セル・カウントの表示」オプションを選択し、「セル数」領域に、ソースおよびターゲット・データベースのパーティション領域のデータ・セル数を表示します。

注： セル数は、ある次元内のパーティション・メンバー数に、別の次元内のパーティション・メンバー数を掛け、これに別の次元内のパーティション・メンバー数を乗算して計算されます。パーティション定義によって参照されない次元の場合は、次元内のセルの合計数が使用されます。ソース・セルとターゲット・セルは1対1で対応している必要があります。ソース・セル数とターゲット・セル数の違いはセル数の不一致と呼ばれます。セル数が一致しない複製パーティションと透過パーティションは無効です。セル数の不一致は、リンク・パーティションの有効性には影響しません。

マッピング情報を条件付きで設定するには、「[拡張](#)」ボタンをクリックします。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)
- [535 ページの「パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `create partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「接続」タブ

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウの「接続」タブは、パーティションのソース・データベースおよびターゲット・データベースの接続情報を指定するために使用します。

「データ・ソース」および「データ・ターゲット」グループで、ソース・データベースとターゲット・データベースそれぞれの情報を指定します:

- Essbase サーバー - データベースのある Essbase サーバー・インスタンスの名前
- アプリケーション - データベースを含むアプリケーションの名前
- データベース - データベースの名前

透過パーティションでは、ソース・データベースは集約ストレージ・データベースとブロック・ストレージ・データベースのどちらでもかまいませんが、ターゲット・データベースはブロック・ストレージ・データベースにしできません。

- 「ユーザー」と「パスワード」 - データベースがある Essbase サーバー・インスタンスに接続するためにパーティションが使用するユーザー名とパスワード
複製パーティションと透過パーティションの場合、Essbase では、ユーザー名とパスワードを使用してソース・データベースとターゲット・データベース間でデータを転送します。ローカル・セキュリティ・フィルタでは、権限付きのデータがエンド・ユーザーに表示されません。

- コメント - リンク・パーティションの場合、コメントは「リンク・オブジェクト」ボックスの Spreadsheet Add-in に表示されます。このため、コメントを使用して、ユーザーがリンク・パーティションを区別できるようにすることができます。

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ内の表示が変更される可能性がある状況は、次のとおりです:

- エンタープライズ・ビューでブロック・ストレージ・データベースからウィンドウを起動した場合、「データ・ソース」および「データ・ターゲット」グループに表示されるのはブロック・ストレージ・データベースのみです。
- エンタープライズ・ビューで集約ストレージ・データベースからウィンドウを起動した場合、「データ・ソース」および「データ・ターゲット」グループにはブロック・ストレージ・データベースと集約ストレージ・データベースが表示されます。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [426 ページの「パーティションの接続情報の指定」](#)
- [535 ページの「パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「マッピング」タブ

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウの「マッピング」タブは、パーティション内のメンバーのマッピングを定義するために使用します。

「ソース・メンバー」および「ターゲット・メンバー」列には、パーティション領域で使用できるソース・メンバー名とターゲット・メンバー名がそれぞれ表示されます。

「オプションの編集」グループで選択したオプションにより、メンバーの指定方法が決まります:

- メンバー選択ツールの使用 - このオプションを選択した後、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックして「[グローバル・マッピング・メンバーの選択](#)」ダイアログ・ボックスを表示し、メンバーを選択します。
- テキスト・エディタの使用 - このオプションを選択した後、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックして「[メンバー名](#)」ダイアログ・ボックスを表示し、メンバーを手動で入力します。

- インライン編集の使用 - このオプションを選択した後、「ソース」または「ターゲット」列をダブルクリックし、列にメンバーを直接入力します。

注： [重複メンバー名データベース](#)で、テキスト・エディタやインライン編集を使用する場合、修飾メンバー名を入力する必要があります。重複メンバーの修飾メンバー名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで表示できます。

「削除」および「インポート」ボタンは、選択したマッピングを削除したり、[インポート](#)するソースおよびターゲット・データベース・メンバーが含まれるテキスト・ファイルを選択するために使用できます。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [431 ページの「パーティションでのグローバル・マッピングの定義」](#)
- [メンバーのマッピング](#) (『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [535 ページの「パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- `create partition(MaxL)` (『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display partition(MaxL)` (『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「タイプ」タブ

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウの「タイプ」タブは、パーティション・タイプおよびパーティション設定を指定するために使用します。

パーティションを作成する場合、「パーティション・タイプ」グループからパーティション・タイプを選択します:

- **複製** - あるデータベースのパーティション領域から別のデータベースにデータがコピーされます(集約ストレージ・データベースの場合、複製パーティションは作成できません。)
- **リンク** - スプレッドシートのユーザーがあるデータベースのメンバーの組合せから別のデータベースのメンバーの組合せにジャンプできます
- **透過** - 2つのデータベースに格納されているデータがあたかも1つのデータベースに格納されているかのように表示されます

パーティションを作成する場合でも編集する場合でも、次のオプションから1つまたは複数を選択できます:

- アウトラインの変更方向はデータの変更方向と同じ - アウトライン同期を行う際に、ソース・アウトラインの変更をターゲット・アウトラインに伝播させるには、このオプションを選択します。同期を行う際にターゲット・アウトラインの変更をソース・アウトラインに伝播させるには、このオプションを選択解除します。(アウトライン同期の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)

注： ソース・データベースで集約ストレージを使用する場合、アウトラインの変更オプションは適用されません。

- ターゲット・パーティションの更新可能 - 複製パーティションの場合、ユーザーがターゲット・データベースのデータを更新できるようにするには、このオプションを選択します。このオプションの選択を解除すると、ユーザーはターゲット・データベースのデータを更新できなくなります。このオプションを選択または選択解除する前に、次のことを考慮してください
 - ユーザーがターゲット・データベースに変更を加えても、Essbase により複製パーティションが更新されると、その変更は上書きされてしまいます。
 - ユーザーが更新できない複製された領域内では、計算、データのロード、および Spreadsheet Add-in を使用した情報変更はできません。したがって、この場合、複製された領域のデータは、ソース・データベースでのみ変更可能です。
 - 「ターゲット・パーティションの更新可能」を選択しない場合、ユーザーによる更新を可能にするセキュリティ・フィルタは上書きされます。
- デフォルトのソース・ログイン - リンク・パーティションの場合、ソース・データベースのデフォルトのログイン情報を入力できます。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。このオプションを選択すると、Spreadsheet Add-in などのクライアント・アプリケーションでは、入力された情報を使用してソース・データベースに接続します。

「同期ステータス」ボックスには、ソース・アウトラインおよびターゲット・アウトラインとデータの同期に関する情報が表示されます。440 ページの「[アウトラインの同期化](#)」も参照してください。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [426 ページの「パーティションのタイプおよび設定の指定」](#)
- パーティションのタイプ(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- アウトラインの同期化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [535 ページの「パーティションの作成およびパーティションの編集ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- `display partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「検証」タブ

パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウの「検証」タブは、パーティションの検証エラーを表示するために使用します(エラーが存在する場合)。

Essbase は、検証時にソース・データベースとターゲット・データベースのパーティション定義ファイル(.ddb)を確認します。433 ページの「パーティションの検証」を参照してください。

関連情報

- 421 ページの「パーティションについて」
- 422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」
- 433 ページの「パーティションの検証」
- パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ

関連コマンド

- `create partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `validatepartitiondeffile(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「管理サーバーでのユーザーの作成」ダイアログ・ボックス

既存の Essbase ユーザーであっても、Essbase 管理サーバーのユーザーとして作成されていない場合は、Administration Services を使用できません。

システム管理者が Essbase 管理サーバー上にユーザーを作成すると、各ユーザーは Administration Services に接続して、自分が管理する Essbase サーバーをエンタープライズ・ビューに表示できるようになります。また、707 ページの「ユーザー設定ウィザード」を使用して、ユーザーを作成しエンタープライズ・ビューを構成できます。

Essbase 管理サーバーのユーザーを作成するには、管理者権限が必要です。このダイアログ・ボックスのアイテムを使用して、Essbase 管理サーバーのネイティブ・ユーザーまたは外部ユーザーを作成します。

- ネイティブ - ネイティブの Administration Services 認証を使用可能にします。このオプションはデフォルトで選択されています。選択されている場合、ユーザーの Administration Services パスワードを入力して確認します。
- 外部 - 外部認証を使用可能にします。このオプションを選択した場合、ユーザー名、姓、または電子メール・アドレスで外部ユーザーを検索します。

- 「ユーザー名」、「パスワード」、「パスワードの確認」 - ユーザーに関するこれらの情報を入力します。ユーザー名とパスワードのガイドラインは、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。これはネイティブ認証に対してのみ使用できます。
- 検索 - 外部に格納されているユーザーを検索します。外部認証に対してのみ使用できます。
- 「電子メールのフル・ネーム」と「電子メール・アドレス」 - この名前は、ユーザーが管理サービス・コンソールから他の管理者やテクニカル・サポートに電子メールで情報を送信する際に使用されます。92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」を参照してください。
- 管理者権限 - ユーザーに Essbase 管理サーバーの管理者権限を付与するには、「TRUE」を選択します。デフォルトでは、「FALSE」に設定されています。

関連情報

- 63 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーの作成」
- 619 ページの「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックス
- 48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」
- 707 ページの「ユーザー設定ウィザード」
- 36 ページの「Administration Services の設定」
- 279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」
- 282 ページの「外部認証の管理」

「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスおよび「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス(Essbase サーバー)

タイトル・バーのタイトルには、Essbase サーバー・ユーザーを作成している(「ユーザーの作成」)か、もしくは Essbase サーバーのプロパティを編集している(「ユーザー・プロパティ」)かが表示されます。

各ダイアログ・ボックスには、次のタブが含まれています:

- **ユーザー情報** - ユーザーを作成、および既存のユーザーに関する基本情報(ユーザー名、認証情報、サーバー全体の権限など)を表示および編集
- **グループ** - グループにユーザーを追加、またはグループからユーザーを削除
- **アプリケーション/データベース・アクセス** - アプリケーション権限およびデータベース権限をユーザーに付与

作成するユーザーが Administration Services を使用して Essbase を管理する必要がある場合は、Essbase 管理サーバーにもそのユーザーを作成する必要があります。63 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーの作成」を参照してください。

関連情報

- 279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」
- 292 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集」
- 301 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのパスワードの変更」
- 302 ページの「サーバー間でのパスワードの伝播」

「ユーザーの作成」 / 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「アプリケーション/データベース・アクセス」タブ(Essbase サーバー)

「アプリケーション/データベース」タブは、アプリケーション・レベルおよびデータベース・レベルの権限よりも高いアプリケーション権限およびデータベース権限を付与するために使用します。このタブでは Essbase サーバー・ユーザーにのみ権限を付与できます。いずれの場合も、自分と同等かそれ以下の権限のみを付与できます。

次のボックスに、ユーザーの基本情報が表示されます:

- ユーザー名
- Essbase サーバー - ユーザーが作成された Essbase サーバー・インスタンス

「アプリケーション」ノードの下に表示される各アプリケーションについて、次のアプリケーション・レベルのいずれかの権限を選択できます:

- なし - ユーザーは、アプリケーションおよびアプリケーション内のデータベースへのアクセスが拒否されます。ただし、アプリケーションまたはアプリケーションの最小権限が「なし」より高い場合、または権限を特定のセルにアップグレードするフィルタがユーザーに付与されている場合は、このユーザーはアクセス権限を継承できます。
- データベース・アクセス - 選択するデータベースの種類と数に応じて、アプリケーションの1つ以上のデータベースへのアクセス権がユーザーに付与されます。
- アプリケーション・マネージャ - ユーザーは、アプリケーションに対するフル・アクセス権限を持ち、データベースの作成や削除、ユーザーの接続解除、フィルタの割当ておよびデータ・ロックの削除が可能です。

「データベース」ノードの下に表示される各データベースについて、次のデータベース・レベルの権限のいずれかを選択できます:

- なし - ユーザーは、データベース内のどのオブジェクトやデータ値にもアクセスできません。
- フィルタ - ユーザーは、選択するフィルタによって付与される権限を持ちます。
- 読取り - ユーザーは、データ値を読取り、レポート・スクリプトを実行できます(変更は不可)。

- 書込み - ユーザーは、データ値の読取りと更新ができ(計算は不可)、Essbase オブジェクトを実行できます(変更は不可)。
- 計算 - ユーザーは、データ値の読取り、更新、計算が可能です。
「計算」を選択すると、「計算」ノードで1つ以上のスクリプトを選択して特定の計算スクリプトを実行、または「すべての計算を許可」オプションを選択してすべての計算スクリプトを実行できるよう、ユーザーに許可できます。
- データベース・マネージャ - ユーザーは、データ値の読取り、更新、計算、およびすべてのデータベース関連ファイルの変更が可能です。

注：「なし」以外のデータベース権限を選択すると、「フィルタ」ノードからフィルタを選択できます。フィルタは、ユーザーに付与したデータベース権限との併用で動作します。

関連情報

- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [ユーザー・プロパティの編集](#)
- [542 ページの「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスおよび「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス\(Essbase サーバー\)](#)

「ユーザーの作成」 / 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「グループ」タブ(Essbase サーバー)

「グループ」タブは、グループに対する Essbase サーバー・ユーザーの追加および削除に使用します。自身よりも高い権限を持つユーザーについては、これらの操作を実行できません。

次のボックスに、ユーザーの基本情報が表示されます:

- ユーザー名
- Essbase サーバー - ユーザーが作成された Essbase サーバー・インスタンス

「グループのメンバー」ボックスには、ユーザーが所属するグループ、および自身と同等かそれ以下の権限を持つグループ、「グループのメンバーでない」ボックスには現在のユーザーが所属していないグループがそれぞれ表示されます。

ユーザーをグループに追加するには、グループ名を「グループのメンバーでない」ボックスから「グループのメンバー」ボックスへ移動します。ユーザーをグループから削除するには、グループ名を「グループのメンバー」ボックスから「グループのメンバーでない」ボックスへ移動します。いずれの場合でも、どちらかのボックスでグループ名を選択し、一重矢印ボタンをクリックしてその名前をもう1つのボックスに移動します。

ユーザーをすべてのグループに追加、またはすべてのグループから削除するには、二重矢印ボタンをクリックし、どちらかのボックスのグループをもう1つのボックスに移動します。

関連情報

- [284 ページの「グループ・メンバーシップの管理」](#)
- [542 ページの「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスおよび「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス\(Essbase サーバー\)](#)

「ユーザーの作成」 / 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「ユーザー情報」タブ (Essbase サーバー)

「ユーザー情報」タブは、Essbase サーバー・ユーザーに関する基本情報の入力、変更、表示に使用します。

ユーザー作成中の場合は、次のボックスで情報を入力または選択できます。既存のユーザーについては、このボックスは読取り専用です。

- ユーザー名 - ユーザー名には長さ制限があり(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照)、大文字と小文字を区別しません。特殊文字を含めることができます。
- Essbase サーバー - ユーザー作成中の、または作成された Essbase サーバー・インスタンス

「認証タイプ」グループから、ユーザーに適用する認証のタイプを選択します:

- Essbase サーバー認証を使用 - 選択すると、ユーザーが作成され Essbase セキュリティの一部として保管されます。このオプションはデフォルト設定です。

「Essbase サーバー認証を使用」オプションが選択されている場合は、次のアクションを実行する必要があります:

- 「パスワード」ボックスと「パスワードの確認」ボックスに、ユーザーのパスワードを入力および再入力します。パスワードの大文字と小文字は区別されません。
- 「パスワードの変更プロンプトを表示」オプションを選択、または解除します。このオプションを選択すると、ユーザーは初回ログイン時にパスワードを変更できるようになります。オプションの選択を解除すると、ユーザーは割り当てられたパスワードを保持する必要があります。このオプションを選択すると、すべての新規ユーザーにデフォルト・パスワードを割り当て、ユーザーは Essbase の使用開始時に自身のパスワードを選択できるようになります。
- シングル・サインオンの使用 - [シングル・サインオン](#)を選択すると、ユーザー・ログイン情報が EPM System セキュリティでサポートされている企業認証リポジトリに保管されます。

「シングル・サインオンの使用」オプションを選択すると、「検索」ボタンをクリックして外部保管されているユーザー名を検索できます。

管理者権限、またはユーザーおよびグループの作成/削除権限がある場合は、「ユーザー名を使用不可にする」オプションを選択し、ユーザー名を使用不可にしてユーザーが Essbase サーバーに接続できないようにします。管理者権限がある場合は、このオプションの選択を解除し、使用不可になったユーザー名を使用可能に戻すことができます。詳細は [303 ページ](#) の「[ユーザー名の無効化](#)」を参照してください

「ユーザー・タイプ」グループで、次のいずれかの [ユーザー・タイプ](#) を選択します。作成の権限を持つユーザー・タイプのみ使用できます。

- 管理者 - ユーザーは、Essbase サーバー上のすべてのユーザー、グループおよびデータに対するフル・アクセス権限を持ちます。
- ユーザー - ユーザーには、継承権限がありません。そのため、ユーザー権限がある場合は、作成/削除権限、グループ・メンバーシップ、アプリケーションまたはデータベース権限、またはフィルタを使用して付与されます。

作成/削除権限には、ユーザーが自身の権限と同等またはそれ以下の権限を持つユーザーおよびグループを作成および削除できる「ユーザーおよびグループの作成/削除」権限、およびユーザーがアプリケーションを作成および削除し、アプリケーション内のデータベースへのアクセスを制御できる「アプリケーションの作成/削除」権限が含まれています。

- アプリケーション・アクセス・タイプ - ユーザーは、Essbase アプリケーション(「Essbase」オプションが選択されている場合)、または Essbase およびプランニング・アプリケーション(両方のオプションが選択されている場合)にアクセスできます。選択または解除できるのは、「Essbase」オプションのみです。他のオプションは読取り専用です。

Administration Services や MaxL などの Essbase 管理ツールを使用して作成されたユーザーには、Essbase アプリケーション・アクセス・タイプが割り当てられます。Oracle Hyperion Planning インタフェースを使用して作成されたユーザーには、Planning アプリケーション・アクセス・タイプが割り当てられます。

関連情報

- [269 ページ](#) の「[セキュリティと権限について](#)」
- [279 ページ](#) の「[Essbase サーバーのユーザーの作成](#)」
- [ユーザー・プロパティの編集](#)
- [542 ページ](#) の「[「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックスおよび「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス\(Essbase サーバー\)](#)」
- [282 ページ](#) の「[外部認証の管理](#)」

「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックス

「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックスを使用して、ルール・ファイル内で隣接する 2 つのフィールド間にフィールドを作成し、その新しいフィールドにテキストを移入します。たとえば、1 つのフィールドのテキストが 100 で、次

のフィールドのテキストが 10-1 の場合、ダッシュが含まれる 100-10-1 というフィールドをこれらのフィールド間に作成できます。

「フィールド内のテキスト」テキスト・ボックスにテキストを入力します。新しいフィールドは、選択したフィールドの左側に作成されます。

関連情報

- 239 ページの「テキストを使用したフィールドの作成」
- 234 ページの「フィールド操作について」
- 210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」
- 210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」

「作成された次元」および「削除された次元」ダイアログ・ボックス

「作成された次元」ダイアログ・ボックスは、新しい標準次元のメンバーにデータをマップするために使用します。たとえば、Sample Basic データが単一のチャンネルまたはすべてのチャンネルの合計に関連付けられている場合、Sample Basic アウトラインで、Channel という名前の次元を作成し、Channel 次元のメンバーにデータをマップできます。

「削除された次元」ダイアログ・ボックスは、標準次元(属性でない次元)をアウトラインから削除しようとしたときに表示されます。

「削除された次元」ダイアログ・ボックスは、削除する次元のうち選択したメンバーの値を保持し、その保持した値を、削除しない次元のメンバーに関連付けるために使用します。削除する次元当たり単一のメンバーの値のみを保持できます。たとえば、Market 次元を削除する場合、データベースに残るデータは、Market 次元の単一のメンバーから導出されます。

注： 属性次元を削除すると、Essbase では基本次元との関連付けも削除されます。

「作成された次元」および「削除された次元」ダイアログ・ボックスに表示されるリストは、次のとおりです：

- 次元 - 前回アウトラインが保存された後にアウトラインで作成または削除された次元
- メンバー - 「次元」リストで選択した次元のメンバー(新しい次元の場合、データをマッピングするメンバーを選択します。削除された次元の場合、データ値を保持するメンバーを選択します。)

関連情報

- 139 ページの「アウトラインの保存」
- 681 ページの「データベースの再構築のオプション」ダイアログ・ボックス」
- データベースの再構築(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

カスタム定義関数マネージャ

カスタム定義関数マネージャ・ウィンドウは、グローバル(サーバー)のレベルまたはローカル(アプリケーション)のレベルで定義されているカスタム定義関数を表示、作成、編集または削除するために使用します。

このウィンドウではフィールドを編集しません。かわりに、関数进行操作するために、行を選択してからボタンをクリックするか、「新規」をクリックして関数を作成します。

このウィンドウを使用して関数を作成すると、事前に Java で開発した関数がカスタム定義関数およびマクロのカタログに登録され、Essbase の計算機フレームワークに追加されます。このウィンドウを使用して関数の編集、削除、リフレッシュを行うと、関数およびマクロのカタログに変更が加えられます。

注： カスタム定義計算関数を使用すると、Essbase の計算機言語を拡張できます。カスタム定義関数を作成および使用するには、Essbase とともにインストールされる Java Runtime Environment が必要です。カスタム定義関数は、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

カスタム定義関数マネージャ・ウィンドウの次の列には、リストされている関数に関する情報が表示されます:

- Essbase サーバー - 現在の Essbase サーバー・インスタンスの名前
- アプリケーション - ローカル関数の場合は現在のアプリケーション名、グローバル関数の場合は<すべてのアプリケーション>
- 名前 - 関数の名前;たとえば、@JSUM(ローカル関数の場合、この名前には、MaxL で使用される二重命名規則は反映されません。)
- クラス名 - 関数に関連付けられた Java クラスの完全修飾名(たとえば、CalcFunc)
- メソッド名 - 関数に関連付けられた Java クラス・メソッドの名前(たとえば、CalcFunc.sum の場合、sum はメソッドを示します。)
- 指定 - 関数の登録時に指定された場合における Essbase 計算構文の指定文字列;たとえば、@COVARIANCE (expList1, expList2)

注： この関数を EssListCalcFunctions API 関数の出力文字列で戻すには、指定文字列を使用する必要があります。

- コメント - 指定文字列を使用する場合のみ必要に応じて使用可能です
- ランタイム - 「ランタイム」プロパティが関数に割り当てられるどうかに応じて「はい」または「いいえ」
- 状態:
 - ロード済: 関数は Java で有効に定義されており、アプリケーションは開始されています。
 - 未ロード: 関数が Java で有効に定義されていないか、アプリケーションが開始していないか、または JRE がインストールされていません。

- 不明: Essbase では関数が Java で有効に定義されているかどうかを判断できません。カスタム定義関数およびマクロのカタログをリフレッシュするか、アプリケーションを再起動します。「不明」はデフォルトの設定値です。

カスタム定義関数マネージャ・ウィンドウで使用可能なボタンは、次のとおりです:

- 新規 - Java で前に開発された関数を追加します
- 編集 - 名前を変更せずに、関数を再登録または編集します
- コピー - 関数を別のサーバーまたはアプリケーションにコピーします
- 名前変更 - 関数の名前を変更しますが、編集はしません
- 削除 - 削除する関数がアプリケーションにロードされている場合、アプリケーションを再起動するまでは削除が有効にならない場合があります。
- リフレッシュ - 新規作成または更新した関数を関数およびマクロのカタログにロードするには、アプリケーションの再起動が必要な場合があります。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の編集」](#)
- [379 ページの「カスタム定義関数の削除」](#)
- [377 ページの「カスタム定義関数の使用」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)

関連コマンド

- create function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- drop function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウ

カスタム定義マクロは、Essbase の計算言語を拡張するために使用します。

カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウのボックスには、カスタム定義マクロに関する情報が表示されます。

このウィンドウではフィールドを編集しません。かわりに、マクロを操作するために、行を選択してからボタンをクリックするか、「新規」をクリックしてマクロを作成します。

- Essbase サーバー - 現在の Essbase サーバー・インスタンスの名前

- アプリケーション・マクロが関連付けられているアプリケーション名(ローカル・マクロの場合)または<すべてのアプリケーション>(グローバル・マクロの場合)

- 名前 - マクロ展開を参照する簡単な方法;たとえば、@MYMACRO

マクロ名には、英数字および@、#、\$、_記号を使用できます。マクロ名は@で開始することをお勧めします。アプリケーション内で、各マクロ名は一意である必要があります。ただし、グローバル・マクロとローカル・マクロには同じ名前を使用できます。この場合、ローカル・マクロの方が優先されます。

注: ローカル・マクロの範囲を指定するために MaxL で使用される二重命名規則は、「名前」列に表示される名前には反映されません。「アプリケーション」リストの選択項目は、ローカル・マクロである場合に関連アプリケーションを示しています。

- シグネチャ - マクロ引数を渡すスタイルの説明

たとえば、次のシグネチャでは、2つのカンマで区切った引数とそれに続く引数リストとしてマクロを渡します: (SINGLE, SINGLE, GROUP)

- 展開 - シグネチャの処理方法を示す文字列

たとえば、次のマクロ、シグネチャおよび展開を使用する場合、@SUM3 (x, y, z)は@SUM3 (x + y + z)に置き換えられます:

- 名前 - @SUM3
- シグネチャ - (SINGLE, SINGLE, SINGLE)
- 展開 - (@@1, @@2, @@3)

- 指定 - Essbase 計算構文の指定文字列;たとえば、@MYMACRO (mbrName, rangeList)

指定文字列は必要ありません。指定文字列を使用することにより、EssListCalcFunctions API 関数の出力文字列によってマクロとその構文が戻されるようにします。

- コメント - 必要はなく、指定文字列を使用する場合のみ使用可能

- 状態 - マクロのステータス

- ロード済 - マクロは Java で有効に定義されており、アプリケーション・プロセスにロードされています。
- 未ロード - マクロが有効に定義されていないか、アプリケーションが開始していません。このため、アプリケーション・プロセスにマクロがロードされていません。
- 不明: Essbase ではマクロが有効に定義されているかどうかを判断できません。カスタム定義関数およびマクロのカタログをリフレッシュするか、アプリケーションを再起動します。「不明」はデフォルトの設定値です。

カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウのボタンを使用すると、マクロに関する様々なアクションを実行できます:

- 作成 - Essbase の計算機フレームワークから選択する計算関数またはマクロで構成されるマクロを作成します

- コピー - 現在のマクロを別のサーバーまたはアプリケーションにコピーします
- 削除 - 現在のマクロを削除します
- 編集 - 現在のマクロのプロパティ(ただし、名前ではありません)を変更します(「編集」をクリックする前に、変更するマクロを選択します。)
- 名前変更 - 現在のマクロの名前を変更します
- リフレッシュ - 新規作成または編集したマクロをカスタム定義関数およびマクロのカタログにロードします

作成するマクロは、カスタム定義関数およびマクロのカタログに登録されます。既存のマクロに対して実行するアクションは、カスタム定義関数およびマクロのカタログに反映されます。

注： カスタム定義マクロは、集約ストレージ・アプリケーションには適用されません。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの作成」](#)
- [381 ページの「カスタム定義マクロの編集」](#)
- [383 ページの「カスタム定義マクロの削除」](#)
- [382 ページの「カスタム定義マクロの使用」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)

関連コマンド

- `create macro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display macro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `drop macro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データ・ロード」ダイアログ・ボックス

「データ・ロード」ダイアログ・ボックスは、データベースにデータをロードし、アウトラインにメンバーをロードするために使用します。

「データ・ロード」ダイアログ・ボックスは、集約ストレージ・データベースおよびブロック・ストレージ・データベースに対して使用します。ただし、集約ストレージ・データベースとブロック・ストレージ・データベースでは、データ・ロードや次元構築に使用するプロセスが異なります。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』および[ブロック・ストレージ](#)を参照してください。

データ・ロードは、クライアント・コンピュータから行うよりも、Essbase サーバー・コンピュータから実行するほうが迅速に処理できます(クライアントからサーバー・コンピュータにネットワークを介してデータを転送する必要がないため)。クライアント・コンピュータからデータ・ロードを行う場合は、データ・

ソースをサーバー・コンピュータに移動してからデータをロードする必要があります。

「データ・ロード」ダイアログ・ボックスの次の列で、説明されているアクションを実行します:

- データ・ソース・タイプ - 「SQL」(データを SQL データベースに設定)または「データ・ファイル」(データを、テキストおよびスプレッドシート・ファイルなどのファイルに設定)を選択します。
- モード - 「ロードのみ」(データをロード)、「ビルドのみ」(次元を構築)、または「両方」(データをロードして次元を構築)を選択します。
- データ・ソース - データ・ファイルを選択し、「データ・ファイルの検索」をクリックします。
- ルール・ファイル - ルール・ファイルを選択し、「ルール・ファイルの検索」をクリックします。

ユーザー名とパスワードを入力する「SQL ユーザー名」列と「SQL パスワード」列を使用できるのは、データ・ソース・タイプが SQL であり、SQL データベースでユーザー名とパスワードを入力する場合のみです。

「エラーにより中止」、「バックグラウンドで実行」および「再構築が延期された次元構築」が選択されていない場合は、次の列に情報を入力できます:

- エラー・ファイル - エラー・ファイルへのパスを指定します(データ・ソースおよびルール・ファイルを選択した後)。パスを指定しない場合は、管理サービス・コンソールが実行されているマシンの `EAS_HOME\client\dataload.err` にエラーが書き込まれます。
- 上書き - 既存のエラー・ファイルのコンテンツを上書きします。これにより、アウトラインを修正して、エラー・ファイルをデータ・ソースとして使用し、以前に除外されたレコードをロードできます。

関連情報

- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)
- 集約ストレージ・データベースの準備(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- データ・ロードおよび次元構築の理解(ブロックストレージ)(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [213 ページの「ルール・ファイルを使用したアウトラインの動的な更新」](#)

関連コマンド

データ・ロード用:

- `alter database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `import data(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `import(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `loaddata(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

次元構築用:

- import dimensions(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- builddim(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter system kill request(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データ・ロード結果」ダイアログ・ボックス

「データ・ロード結果」ダイアログ・ボックスの列には、データ・ロードおよび次元構築の結果を表示できます:

- 演算タイプ - LoadOnly、BuildOnly またはその両方
- データ・ファイル - データ・ファイルの場合、ファイルのパス; SQL ファイルの場合、「SQL」
- ルール・ファイル - ルール・ファイルのパス
- ステータス - 「成功」、「エラー」または「警告」

テーブル内の行を選択して、各データ・ソースについて結果を表示します。

注: Essbase サーバー・コンピュータに保管されるデータおよびルール・ファイルのパスには、ファイルの保管先のサーバー、アプリケーションおよびデータベースが含まれます。ローカルで保管されるデータおよびルール・ファイルのパスは、ファイル・システム・パスとなります。

問題を解決してデータ・ロードを再実行するために「データ・ロード」ダイアログ・ボックスに戻るには、「再試行」ボタンをクリックします。「データ・ロード」および「データ・ロード結果」ダイアログ・ボックスを閉じる場合は、「閉じる」をクリックします。

ダイアログ・ボックス下部の詳細情報を表示するには、行を選択します。

関連情報

- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)
- 次元構築およびデータ・ロードのエラー・ログとその使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス

「データ・ロードの設定」タブは、データ・ロード時にデータ値を操作する方法を決定するために使用します:

- **データ・ロード値** - データ値をロードする際に変更します(値への加算や減算、値の符号の反転など)。

- [データの組合せの消去](#) - 新しいデータ値をロードする前に既存のデータ値を消去します。
- [ヘッダー定義](#) - ルール・ファイルのヘッダーを定義します。

ルール・ファイルにアウトラインを関連付けて、次元ノードを取り込むには、「アウトライン」ボタンをクリックします。

関連情報

- 既存値に対する加算および減算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [248 ページの「符号の反転」](#)
- [233 ページの「選択条件や除外条件の結合」](#)
- [247 ページの「データ・ロードの前のデータ値の消去」](#)
- [231 ページの「ルール・ファイルのデータソース・メンバーの指定」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)

「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス - 「データの組合せの消去」タブ

「データの組合せの消去」タブは、新しいデータ値がロードされる前に、指定したデータ値をブロック・ストレージ・データベースから消去するために使用します。

値を加算および減算する場合、データ値を消去する必要があります。デフォルトでは、Essbase によって値が上書きされます。

値は、次のどちらかの方法で消去できます:

- 「消去する組合せ」ボックスで、1つまたは複数のメンバーの組合せを入力します。各名前は、"New York"のように、二重引用符で囲みます。
- 「次元」ノードを展開し、1つまたは複数のメンバー名をダブルクリックします。

必要に応じて、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けて「次元」ノードを取り込むには、「アウトライン」ボタンをクリックします。

関連情報

- [247 ページの「データ・ロードの前のデータ値の消去」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [553 ページの「「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス」](#)

「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス - 「データ・ロード値」タブ

「データ・ロード値」タブは、データ値をロードする際に変更する方法を指定するために使用します。

「データ値」グループで、値のロード方法を指定します:

- 既存の値の上書き - ターゲット値をソース値で置き換えます(デフォルト)。
- 既存の値に追加 - ソース値をターゲット値に加算します。
- 既存の値から差し引く - ターゲット値からソース値を減算します。
- データベースのすべての値を置換 - 集約ストレージ・データベースのコンテンツを削除して、データ・ロード・バッファのコンテンツをロードします(集約ストレージ・データベースの場合のみ適用可能)。

注: 集約ストレージ・データベースの場合、データ値のオプションは「集約ストレージ・データ・ロード」ダイアログ・ボックスでも表示されます。

「符号反転」グループは、データ・ロード時にデータ値の符号を反転するために使用します。最初に、(「次元」ボックスに名前を入力するか、「次元」ノードで名前をダブルクリックすることにより)次元を選択します。次に、「UDA 上」を選択し、UDA を指定します。Essbase では、指定した UDA が検出されると、関連付けられているメンバーの符号が反転されます。たとえば、通常、会計メンバーの符号はプラスです。しかし、データ・ロード時に、支出の UDA が割り当てられている会計メンバーの符号をマイナスに変更するよう指定できます。

「グローバル選択/除外ブール演算」グループで、選択条件と除外条件を結合する方法を指定します:

- AND - レコードのすべてのフィールドが選択条件や除外条件を満たす場合、レコードは選択または除外されます。
- OR - レコードの任意のフィールドが選択条件や除外条件を満たす場合、レコードは選択または除外されます。

必要に応じて、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けて「次元」ノードを取り込むには、「アウトライン」ボタンをクリックします。

関連情報

- 既存値に対する加算および減算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [248 ページの「符号の反転」](#)
- [233 ページの「選択条件や除外条件の結合」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [553 ページの「「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス」](#)

「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス - 「ヘッダー定義」タブ

「ヘッダー定義」タブは、ルール・ファイルのヘッダーを定義するために使用します。

ヘッダーは、データ・ソースのコンテンツを説明し、データ・ソースのフィールドをターゲット・データベースにマッピングする方法を指定します。

ヘッダーには、次元およびメンバーを指定できます。指定した次元およびメンバーは、各データ・ソース・レコードで使用されます。ヘッダーで指定できるメンバーは、1つの次元ごとに1つのみです。たとえば、Feb、Mar は Year 次元の2つのメンバーを指定しているため、無効なヘッダーです。

名前は、次のどちらかの方法で指定できます：

- 「名前」に、1つまたは複数のメンバー名、次元名、または代替変数名を入力します。複数の名前はカンマで区切ります。代替変数には、アンパサンド(&)を頭に付けます。
- 「次元」ノードを展開し、1つまたは複数のメンバー名および次元名をダブルクリックします。

必要に応じて、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けて「次元」ノードを取り込むには、「アウトライン」ボタンをクリックします。

関連情報

- [231 ページの「ルール・ファイルのデータソース・メンバーの指定」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [553 ページの「「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス」](#)

データ・プレビュー・グリッド

データ・プレビュー・グリッド・ウィンドウを使用して、「読取り」権限のあるデータベースの値をプレビューできます。

このウィンドウには次のタブがあります：

- [キューブ・ビュー](#) - スプレッドシートに似たグリッドが表示され、そこから値をプレビューできます。
- [プロパティ](#) - グリッドの動作を制御する設定のリストが表示されます。

関連情報

- [354 ページの「データのプレビュー」](#)

データ・プレビュー・グリッド・ウィンドウ・ 「キューブ・ビュー」タブ

「キューブ・ビュー」タブを使用すると、データベースの値をプレビューできるのみでなく、表示されたグリッド内で、スプレッドシートのアドイン操作の一部を実行できます。

注： グリッドには、他のクライアント・アプリケーションからの正確な取得回数は反映されません。

グリッドでは、次のマウス・アクションを実行できます(左側のボタンが第1ボタンの場合):

- メンバー・セルのダブルクリック - メンバーが1レベル展開されます。
- データ・セルのダブルクリック - 「リンク・レポート・オブジェクト」ダイアログ・ボックスが開きます。
- 右のマウス・ボタンでのメンバー・セルのダブルクリック - メンバーが1レベルのみ縮小されます。
- 右のマウス・ボタンでのメンバー・セルのドラッグ - メンバーがピボットされます。

ツールバーのボタンを使用して、様々なアクションを実行できます。ボタンおよびボタンに関連するアクションのツールチップは、次のとおりです:

- 取得 - グリッドにデータが取得されます。
- 条件取得 - 「条件取得」ダイアログ・ボックスを開きます。ここで、Essbase レポート仕様コマンドを含む文字列を入力します。
- ズームイン - メンバー・セルで行った場合はメンバーを1レベル展開し、データ・セルで行った場合は「リンク・レポート・オブジェクト」ダイアログ・ボックスを開きます。
- ズームアウト - メンバー・セルで行った場合は、メンバーを1レベル縮小します。
- ピボット - メンバー・セルで行った場合は、行グループから列グループ、またはその逆にメンバーがピボットされます。
- リンク・オブジェクト - データ・セルで行った場合は、「リンク・レポート・オブジェクト」ダイアログ・ボックスが表示され、外部ファイル、セル・ノート、またはセルの URL を添付したり編集できます。
- 選択項目のみ保持 - グリッドで選択したメンバーまたはメンバーの範囲のみが保持されます。
- 選択項目のみ削除 - グリッドから選択したメンバーまたはメンバーの範囲のみが削除されます。
- 元に戻す - デフォルトでは、グリッドで行った最後の操作を元に戻します。(元に戻す操作の数を設定するには、「プリファレンス」ボタンをクリックします。)

- 更新 - グリッドがリフレッシュされ、最新のデータが表示されます。
- チャート - グリッド・データのチャート・ビューを表示します。(グリッド・ビューに戻るには、「Sheet1」をクリックします。)
- メンバー選択 - メンバー・セルで行った場合は、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスが開き、グリッドに含めるメンバーを検索および選択できます。
- プリファレンス - ダイアログ・ボックスが開き、グリッドのプリファレンス(元に戻る操作の数、使用するグリッド・クラス、および様々なタイプのメンバー・セルまたはデータ・セルのフォーマット)を設定できます。
- HTML として表示 - グリッドを HTML 形式で表示するシートを作成します。
- 印刷 - 「印刷」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 電子メール - 「グリッド出力の電子メール送信」ダイアログ・ボックスが開き、グリッド出力を電子メールで送信するための電子メール・アドレスおよび件名を指定できます。

関連情報

[354 ページの「データのプレビュー」](#)

データ・プレビュー・グリッド・ウィンドウ・「プロパティ」タブ

「プロパティ」タブを使用して、データ・プレビュー・グリッドでの値の表示方法を指定できます。

このタブには次の読取り専用ボックスがあります:

- 名前 - グリッド・ワークシートの名前
- 接続プール - 配置サービス接続プールがターゲット・データベースで使用される場合の名前

このタブにある次のボックスを使用して、グリッドのプロパティを編集できます。

- 説明 - グリッドを説明するテキスト(最大 128 文字)を入力します。これは必須ではありません。
- ドリル・レベル - ドリル操作でデータを取得するレベルを選択します。デフォルトの「次のレベル」では、子メンバーを取得します。たとえば、Year を選択すると、Qtr1、Qtr2、Qtr3 および Qtr4 が取得されます。
- インデント・スタイル - 設定を選択します(値をインデントしない場合は「なし」;子孫をインデントする場合は「サブ・アイテム」;祖先をインデントする場合は、デフォルトである「合計」)。
- 最新のメンバー名 - ブロック・ストレージ・データベースで作業する場合は、時間次元のレベル 0 のメンバーを入力します。また、「最新のメンバーの指定」オプションも選択します。
- 別名テーブル名 - 別名を表示するために使用する別名テーブルを選択します。

このタブにある数多くのオプションを選択すると、グリッドをなんらかの点で変更できます:

- 選択を組み込む - 取得されるメンバーのリストに、ドリル操作の実行対象となるメンバーを追加します。たとえば、このオプションを選択して Qtr1 をドリルダウンすると、Jan、Feb、Mar および Qtr1 のデータが取得されます。
- 選択のみ - ドリル操作の実行対象となるメンバーのみが、ズーム・イン後も保持されます。
- 選択されたグループ内 - ドリル操作は、選択したグループのメンバーにのみ適用されます。この設定は、行または列としての2つ以上の次元にデータがある場合にかぎり意味を持ち、また、「選択項目のみ保持」および「選択項目のみ削除」操作の動作に影響を与えます。
- 欠落の抑制 - 欠落した行が除外されます。
- ゼロの抑制 - ゼロのみが含まれるデータ行を除外します。このオプションの選択を解除しても、ゼロを含むデータは Essbase に表示されません。ゼロのデータを表示するには、このオプションの選択を解除し、「保存」をクリックしてグリッドを開きなおします。
- アンダースコアの抑制 - メンバー名に含まれるアンダースコア文字を表示しません。
- 別名 - 取得対象として、メンバー名でなく別名が表示されます。このオプションが作用するのは、「別名テーブル名」ボックスで別名テーブルを選択したときにかぎります。
- データレス・ナビゲーションを使用可能にする - データを取得しなくても、ドリルやピボットなどのグリッド操作を実行できます。必ずこのオプションの選択を解除してから、データ取得を開始してください。
- 空のグリッド・エラー - グリッドが空の場合に、エラーを戻します。
- メンバー名の繰り返し - 取得対象として、メンバー名が繰り返されます。この機能は、データに関連付けられたメンバー名を即座に見られるため、大規模なグリッドには便利です。このオプションの選択を解除すると、Essbase ではグリッドで繰り返されたメンバーは削除されなくなります。繰り返されたメンバー名を削除するには、オプションの選択を解除し、「保存」をクリックしてグリッドを開きなおします。
- 行次元に両方を使用 - 各行メンバーについて、メンバー名と別名が表示されます。
- 最新のメンバーの指定 - ブロック・ストレージ・データベースからの取得対象として、「最新のメンバー名」ボックスに指定されたメンバーが使用されます。
- 中間層のキャッシュを使用可能にする - グリッド・データが中間層のキャッシュに格納され、これにより取得時間が短縮されます。デプロイメント・サーバーは、Essbase 管理サーバーのアプリケーション・サーバー上でサブレットとして実行されます。このオプションを選択しない場合、グリッド・データは Essbase サーバーに格納されます。
- ハイブリッド分析を使用可能にする - ハイブリッド分析リレーショナル・ソースが表示されます。このオプションの選択がアウトライン・エディタの「ハイブリッド分析を使用可能にする」設定と矛盾する場合は、このオプション

が優先されます。複数レベルのハイブリッド分析メンバーを含むアウトラインの場合は、最下位レベルのハイブリッド分析メンバーに対してドリルアップ操作を行うと、直接 Essbase 親メンバーに移動し、その他すべてのハイブリッド分析レベルを迂回します。

- 不明メンバーの表示 - 取得対象として、データベースのメンバー名に一致しない名前が表示されます。

関連情報

[354 ページの「データのプレビュー」](#)

「データの複製」ダイアログ・ボックス

複製パーティションについては、「データの複製」ダイアログ・ボックスを使用してソース・パーティションからターゲット・パーティションにデータを複製できます。

「ソース」ボックスと「ターゲット」ボックスにはそれぞれ、現在のソースとターゲットの Essbase サーバー、アプリケーション、データベースの名前が表示されます。

「複製オプション」グループで、複製オプションを選択します:

- 変更されたセルのみを更新
- すべてのセルを更新

関連情報

- [435 ページの「データの複製」](#)
- 複製パーティション(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `getallreplcells(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getupdatedreplcells(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `putallreplcells(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `putupdatedreplcells(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `refresh replicated partition(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス

「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックスのタブは、データ・ソースのグローバル・プロパティを定義するために使用します:

- [区切り記号](#) - フィールド間の区切り記号を指定します
- [フィールドの編集](#) - ルール・ファイルのフィールド操作を元に戻します

- [ヘッダー](#) - ヘッダー・レコードの位置を表示および指定します
- [トークンを無視](#) - すべてのフィールドで文字列を無視します

関連情報

- [218 ページの「ファイル区切り記号の設定」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [240 ページの「フィールド操作を元に戻す」](#)
- [230 ページの「データ・ソースのヘッダーの設定」](#)
- [文字列の一致に基づいたフィールドの無視](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「区切り記号」タブ

「区切り記号」タブを使用して、データ・ソースのファイル区切り記号を設定します。通常、ファイル区切り記号(データ・ソースのフィールドを区切る文字)は、データ・ソースを開いた直後に設定します。デフォルトでは、フィールドがタブで区切られます。

「区切り記号」タブの「区切り記号」グループで、区切り記号を選択します:

- [カンマ](#)
- [タブ](#)
- [すべてのスペース](#)
- [カスタム](#) - 区切り記号としてテキスト・ボックスに入力する文字を設定します。0 個から 127 個までの任意の標準 ASCII 文字を入力できます。

データ・ソース列の幅を固定する場合は、「列幅」オプションを選択し、幅をテキスト・ボックスに入力します。列には、少なくとも 5 桁の数値を含めることができる必要があります。

関連情報

- [218 ページの「ファイル区切り記号の設定」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [560 ページの「「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス」](#)

「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「フィールドの編集」タブ

「フィールドの編集」タブを使用して、1つまたは複数のフィールド操作(例: 移動、分割、結合、テキストを使用した作成、または結合を使用した作成)を元に戻すことができます。

「フィールドの編集」タブの列には次の情報が表示されます:

- 操作 - 操作のタイプ(例: 移動、分割、結合、結合を使用した作成、テキストを使用した作成)
- 列 - ルール・ファイルで移動、分割、結合または作成される列の数
- 文字の分割 - 分割操作における文字数

該当するボタンをクリックして、次のダイアログ・ボックスにアクセスします。たとえば、「移動」ボタンをクリックすると、「フィールドの移動」ダイアログ・ボックスが表示され、「テキストを使用した作成」ボタンをクリックすると、「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- [「フィールドの移動」ダイアログ・ボックス](#)
- [「フィールドの結合」ダイアログ・ボックス](#)
- [「フィールドの分割」ダイアログ・ボックス](#)
- [「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックス](#)
- [「テキストを使用した作成」ダイアログ・ボックス](#)

操作を削除するには、操作を選択して「削除」をクリックします。操作は操作の逆の順序で削除する必要があります。つまり、新しい操作から古い操作の順に削除する必要があります。

関連情報

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [560 ページの「「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス」](#)

「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「ヘッダー」タブ

「ヘッダー」タブを使用して、データ・ソースのヘッダー・レコードの場所を指定できます。

「スキップする行数」ボックスで、データのロード時に(上部からカウントして)スキップできるヘッダーの行数を指定します。0 から 999,999 個のレコードをスキップできます。すべてのヘッダー・レコードをスキップすることをお勧めします。

「データ・ソースのヘッダー・レコード」グループで、ヘッダーの場所を指定します:

- ヘッダー名を含むレコード-データ・ソースのヘッダーとして使用する次元およびメンバーを指定するレコードの番号を入力します。指定した次元およびメンバーは、各データ・ソース・レコードで使用されます。1つの次元から指定できるメンバーは1つのみです。たとえば、サンプルのヘッダー名に「Jan, Sales」が含まれている場合、データ・ソースの各レコードはYear次元のJanメンバー、およびMeasures次元のSalesメンバーにマッピングされます。
- データ・ロード・フィールドの名前を含むレコード-データ・ソースのデータ・ロード・フィールド名が含まれているレコードの番号を入力します。データ・ロード・フィールド名は、Essbaseにデータ・ソースのデータ・ロード・フィールドの順序を示す次元名またはメンバー名です。サンプルのデータ・ロード・フィールド・ヘッダーは、「Year, Measures, Market, Product, Scenario」です。
- 次元構築フィールドの名前を含むレコード-データ・ソースの次元構築フィールドの名前を含むレコードの数を入力します。次元構築フィールド名ヘッダーは、「Level0, Product」、「Level 1, Product」、「Level2, Product」などの、次元名とフィールド・タイプから構成されます。

関連情報

- ヘッダー・レコードの定義(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- データ・ソース・ヘッダー(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 有効なデータ・ソースのヘッダー・フィールド・タイプ(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [230 ページの「データ・ソースのヘッダーの設定」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [560 ページの「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「トークンを無視」タブ

「トークンを無視」タブを使用して、データ・ロードまたは次元構築の際、指定された文字列に一致するすべてのデータ・ソース・フィールドを無視できます。「トークンを無視」タブに設定した指定は、1つの列のみでなくデータ・ソース全体に適用されます。

「無視するトークン」ボックスにおいて、無視するテキスト文字列を入力または編集します。

行を入力する場合は「新規」ボタンをクリックします。検索操作を定義する場合は「[Enter]」キーを押します。選択した行を削除する場合は「削除」ボタンをクリックします。

データ・ソースの特定のテキスト文字列をロードしないようにする場合は、無視するトークンを定義します。

関連情報

- [236 ページの「フィールドの無視」](#)
- [237 ページの「トークンの指定によるフィールドの無視」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [560 ページの「\[データ・ソースのプロパティ\] ダイアログ・ボックス」](#)

データベース情報ウィンドウ

このウィンドウは、アクセス権を持っているすべての Essbase データベースのプロパティを表示するために使用します。このウィンドウではプロパティを編集できません。

このウィンドウの内容は、ブロック・ストレージ・データベースと集約ストレージ・データベースでは異なります。使用可能な情報には、次が含まれます:

- 「アプリケーション」、「データベース」 - アプリケーション名とデータベース名
- データ・キャッシュ・サイズ - データ・キャッシュのサイズ(KB 単位)
- ファイル・キャッシュ・サイズ - データ・ファイル・キャッシュのサイズ(KB 単位)
- インデックス・キャッシュ・サイズ - インデックス・キャッシュのサイズ(KB 単位)
- インデックス・ページ・サイズ - インデックス・ページのサイズ(KB 単位)
- 圧縮 - 圧縮の設定
- 取得バッファ・サイズ - 取得バッファのサイズ(KB 単位)
- 取得ソート・バッファ・サイズ - 取得ソート・バッファのサイズ(KB 単位)
- ロックのタイムアウト - データ・ブロックのロックのタイムアウトの設定(分単位)
- データベースのステータス - データベースが実行されているかどうか
- 経過時間 - データベースの実行時間(時間:分:秒の形式)
- 次元数 - データベース・アウトラインの次元の数
- 「現在のデータ・キャッシュ」、「現在のファイル・キャッシュ」、「現在のインデックス・キャッシュ」 - 名前付きキャッシュによって現在使用されているメモリー(KB 単位)。(データベースにデータがない場合、ゼロになります。)

関連情報

- [335 ページの「すべてのデータベースのプロパティの表示」](#)
- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)

関連コマンド

- `display database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbinfo(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbstate(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getdbstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `getperfstats(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ

データベース・プロパティ・ウィンドウは、データベース・プロパティを表示および編集するために使用します。データベース・プロパティを編集するには、データベースのデータベース・マネージャ権限が必要です。

データベース・プロパティ・ウィンドウの次のタブは、集約ストレージ・データベースとブロック・ストレージ・データベースに適用されます:

- **一般** - 起動、計算および最小権限のオプションを設定します。
- **次元** - 次元に関する情報を表示します。
- **統計** - データ・ブロック、ヒット率および読取り/書込み操作に関する情報を表示します。
- **変更** - データベースに対して行われた操作のリストを表示します。

データベース・プロパティ・ウィンドウの次のタブは、ブロック・ストレージ・データベースにのみ適用されます:

- **キャッシュ** - Essbase のキャッシュのサイズを設定し、キャッシュ関連の設定を指定します。
- **トランザクション** - Essbase がディスクにデータを書き込むタイミングと方法を指定します。
- **ストレージ** - データの圧縮方法を指定したり、データを複数のディスクに格納するためのパラメータを指定します。
- **通貨** - 通貨データベースにリンクし、関連オプションを設定します。

圧縮の概算を表示する「**圧縮**」タブは、集約ストレージ・データベースにのみ適用されます。

関連情報

- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)

関連コマンド

- `alter database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `query database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbinfo(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ・「キャッシュ」タブ

「キャッシュ」タブは、ブロック・ストレージ・データベースのキャッシュ・サイズおよびキャッシュ関連設定を指定するために使用します。

「キャッシュ・メモリーのロック」オプションを選択するかどうかを決定する際には、次の点を考慮してください:

- オプションの選択を解除(デフォルト)すると、Essbase サーバーのカーネルがシステム RAM を優先的に使用できなくなります。
- このオプションを選択できるのは、Essbase の入力/出力設定が直接入出力である場合のみです。[アクセス\(入出力\)モードの選択](#)を参照してください。
- オプションを選択すると、インデックス・キャッシュ、データ・ファイル・キャッシュおよびデータ・キャッシュで使用されるメモリーが物理メモリー内にロックされます。
- オプションを選択すると、システムのメモリー・マネージャがデータベース・キャッシュで使用されるメモリーのスペースをスワップおよび予約する必要がなくなるため、パフォーマンスが向上することがあります。
- このオプションを選択する場合、Essbase カーネル以外が使用できるように、システム RAM の少なくとも 3 分の 1 を残してください。

「キャッシュ・サイズ」ノードで、様々なバッファのサイズを指定することにより、インデックス・キャッシュ、データ・ファイル・キャッシュおよびデータ・キャッシュに割り当てられるメモリーの量を設定します。デフォルト値、最小値および推奨値については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』および [346 ページの「インデックス・ファイルとデータ・ファイルのサイズ確認」](#)を参照してください。

- インデックス・キャッシュ設定
- データ・ファイル・キャッシュ - 圧縮データ(.pag)ファイルの保持用(Essbase が [バッファ入出力](#)を使用している場合は使用されません)
- データ・キャッシュ設定 - 圧縮されていないデータ・ブロックの保持用

「キャッシュ・サイズ」ノードの次のボックスには、インデックス・キャッシュ、データ・ファイル・キャッシュおよびデータ・キャッシュに使用されているメモ

リーの量が表示されます。いずれの場合でも、データベースにデータが含まれない場合、値は0になります。

- インデックス・キャッシュの現在値
- データ・ファイル・キャッシュの現在値
- データ・キャッシュの現在値

キャッシュ設定を変更した場合、その変更内容は、次のいずれかのときに有効になります:

- データベースが起動されたとき。
- すべてのデータを消去する RESETDB コマンド(ESSCMD)が発行されたとき。
- すべてのデータが消去されたとき。

「インデックス・ページ設定」ボックスには、インデックス・ページのサイズ(8KBで変更不可能)が表示されます。データベースにデータが含まれる場合、「インデックス・ページの現在値」ノードには、「インデックス・ページ設定」に表示される値が表示されます。データベースにデータが含まれない場合、ボックスには「0」が表示されます。

関連情報

- Essbase キャッシュの最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- Essbase サーバー・カーネルの理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ・「圧縮」タブ

「圧縮」タブは、集約ストレージ・データベースの圧縮の概算を表示するために使用します。ディスク上のデータベースのサイズに関する圧縮の概算は、圧縮次元のタグが付けられた次元によって異なります。

「圧縮」タブでは、各データベース次元に関する情報と圧縮次元なしに関する情報が一連の列に表示されます:

- 次元名
- 圧縮 - 次元が圧縮次元としてタグ付けされているかどうかに応じて「TRUE」または「FALSE」
- 保管されているレベル 0 のメンバー - 保管されているレベル 0 のメンバーの数
- 平均バンドル量 - 圧縮次元バンドル当たりの値の個数の概算平均
- 値の長さの平均 - 値を保管するのに必要となる概算の平均バイト数
- レベル 0 サイズ(MB) - 圧縮データベースの概算のサイズ

注： <圧縮次元なし>というラベルが付いた行の値は、会計タグが付けられた次元がないことを示します。

関連情報

- [集約ストレージ・データベースの圧縮の管理](#)
- 集約ストレージ・データベースの圧縮次元について(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ・「通貨」タブ

「通貨」タブは、ブロック・ストレージ・データベースの通貨換算オプションを設定するために使用します。

次のボックスごとに、値を選択します:

- 通貨データベース - 選択する通貨データベースにメイン・データベースをリンクします(現在のデータベースが通貨データベースにリンクされていない場合、ボックスには「なし」が表示されます。)
- 換算方法 - メイン・データベースの値を、通貨データベースに指定されている換算レートで乗算または除算します(デフォルトは「除算」です。)
- デフォルトの通貨タイプのメンバー - 通貨データベースの通貨タイプ次元のメンバーを選択します(通貨タイプ次元には、様々な通貨シナリオを識別するためのメンバーが含まれています。)

次のノードには、メイン・データベースのアウトラインに定義されている次元名が表示されます:

- 国次元 - 現在のデータベースが通貨データベースにリンクされていない場合、「なし」が表示されます。
- 時間次元 - デフォルトは「年」です。

- カテゴリ次元 - 通貨カテゴリとタグ付けされている会計次元(デフォルトは「会計」です。)
- 通貨パーティション次元 - 「通貨パーティション」とタグ付けされている次元(現在のデータベースが通貨データベースにリンクされていない場合、「なし」が表示されます。)

関連情報

- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [450 ページの「通貨の換算」](#)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「次元」タブ

「次元」タブには、現在のデータベース・アウトラインに関する情報が表示されます。

「次元数」ボックスには、標準次元と属性次元の合計数が表示されます。一連の列には、各次元に関する情報が表示されます:

- 次元 - 次元名
- タイプ - 疎または密(ブロック・ストレージ・データベースにのみ適用されません。)
- 次元内のメンバー - 共有メンバーおよびラベルのみのメンバーを含む、メンバーの合計数
- 保管されたメンバー - データ値を保管できるメンバーの数

注: 共有メンバーやラベルのみのメンバーが含まれる次元の場合、「保管されたメンバー」の数は「次元内のメンバー」の数よりも小さくなります。また、ブロック・ストレージから集約ストレージに変換されたデータベースの場合、属性次元のメンバーには「動的計算」のタグが付けられています。「動的計算」のタグが付けられていた標準次元のメンバーは、保管済メンバーのタグが付けられます。この変更は、「保管されたメンバー」列に表示される保管済メンバーの数に影響します。

関連情報

- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)

- 334 ページの「データベースの監視について」
- 565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」

関連コマンド

- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「一般」タブ

「一般」タブは、データベースの起動、計算および最小権限のオプションを設定するために使用します。

現在のデータベースの説明を作成するには、「説明」ボックスにテキストを入力します。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

現在のデータベースの場合、「データベース・タイプ」ノードに「標準」または「通貨」が表示されます。

ブロック・ストレージ・データベースが自動的に開始されるように設定するには、「起動」グループで、最初のオプションまたは両方のオプションを選択します:

- データベースの開始をユーザーに許可 - ユーザーがデータを取得しようとしたときにデータベースが開始されます。このオプションはデフォルトで選択されています。このオプションは、たとえば、複数のデータベースを使用している場合にメモリー不足を回避するための一時的な措置として、選択を解除することもできます。
- アプリケーションの開始時にデータベースを開始 - データベースは親アプリケーションの開始時に開始されます。

現在のデータベースがブロック・ストレージ・データベースである場合、「計算」グループで、オプションを選択します:

- 欠落した値の集約 - 親レベルでデータをロードしない場合、このオプションを選択すると、計算のパフォーマンスが向上する場合があります。このオプションが選択されているときにデータを親レベルでロードした場合、データベースの集計結果が#MISSING 値であっても、親レベルの値はそのデータベース集計結果で置き換えられます。デフォルトでは、このオプションは選択されていません。
- 等式によるブロックの作成 - このオプションを選択すると、データ・ブロックが存在しないメンバーの組合せに対して非定数値を割り当てたときに、Essbase でデータ・ブロックが作成されます。このオプションを選択するとデータベースのサイズが非常に大きくなる可能性があるため、このオプションはデフォルトでは選択されていません。

疎次元のメンバーに定数を割り当てる場合は、Essbase でデータ・ブロックが作成されます。このため、疎メンバーに定数を割り当てる場合(West = 5 など)、「等式によるブロックの作成」を選択する必要はありません。ただし、疎メンバーに定数以外のものを割り当てるときにブロックが作成されるように

するには、「等式によるブロックの作成」を選択する必要があります。たとえば、疎の Scenario 次元のメンバーである Actuals にデータが存在しない場合、次の割当てを行うためには、「等式によるブロックの作成」を選択する必要があります: $2002Forecast = Actuals * 1.05$;

- 2パス計算 - このオプションを選択すると、デフォルト計算の後に、2パスのタグが付いているメンバーが再計算されます。このオプションはデフォルトで選択されています。

2パスのタグは、会計タグが付けられた次元のメンバー、および任意の次元の「動的計算」および「動的計算および保管」のメンバーに対してのみ作用します。

現在のデータベースで EPM System のセキュリティ・モードが使用されていない場合、「最小アクセス・レベル」リストから設定を選択します:

- なし - ユーザーはそれぞれの権限に応じてデータベースにアクセスできます。「なし」は、新しく作成されたアプリケーションおよびデータベースに対するデフォルトのグローバル権限です。
- 読取り - ファイルの表示、データ値の取得、およびレポート・スクリプトの実行が可能になります。
- 書込み - ファイルの表示、データ値の取得、レポート・スクリプトの実行、およびデータ値の更新が可能になります。
- 計算 - ファイルの表示、データ値の取得、レポート・スクリプトの実行、データ値の更新、および計算の実行が可能になります。
- データベース・マネージャ - データベース・アウトラインおよびファイルの変更を含むすべてのデータベース・タスクの実行が可能になります。

「データの取得バッファ」グループで、取得バッファのサイズを KB 単位で指定します。バッファのサイズを大きくすると、取得のパフォーマンスが向上する場合があります。デフォルト値、最小値および推奨値については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

- バッファ・サイズ - Spreadsheet Add-in やレポート・スクリプトからのデータの取得を処理および最適化するために使用する取得バッファの設定。バッファのサイズを増やすと、取得のパフォーマンスが向上する場合があります。デフォルト値、最小値および推奨値については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- ソート・バッファ・サイズ - 取得時にソートするために使用される取得ソート・バッファの設定。バッファのサイズを増やすと、取得のパフォーマンスが向上する場合があります。デフォルト値、最小値および推奨値については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- 計算の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の EPM System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章
- レポートおよび他の取得機能の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「変更」タブ

「変更」タブの列には、データベースに対して最近行われた操作(アウトラインの更新、データ・ロード、計算など)に関する情報が表示されます:

- 操作 - 操作のタイプ(データ・ロードや計算など)
- ユーザー - 操作を実行したユーザーの名前
- 開始時刻 - データのロックなどの準備タスクを含む操作が開始された、Essbase サーバー基準時刻(操作に要した時間については、[アプリケーション・ログ](#)の経過時間のエントリを参照してください。)
- 終了時刻 - 操作が終了した、Essbase サーバー基準時刻
- ノート - コメント。入力は任意です

関連情報

- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「統計」タブ

「統計」タブには、データ・ブロック、ヒット率および読取り/書込み操作に関する情報が表示されます。

データベースの現在の実行に関する基本情報が複数のノードに表示されます:

- データベースの開始時刻 - Essbase サーバーのタイム・ゾーンに準拠
- データベースの経過時間 - 時間:分:秒の形式
- 接続数 - 接続しているユーザー数
- 統計 - 「統計」タブの情報が最後に収集された、Essbase タイム・ゾーン基準日時

「ブロック」ノードには、ブロック・ストレージ・データベースのデータ・ブロックに関する統計が表示されます:

- 既存のブロック数 - 存在している(データが格納されている)ブロックの合計数
- ブロック・サイズ - 展開(圧縮解除)されたデータ・ブロックのバイト単位のサイズ(セル数×8; 8KB から 100KB になるのが理想的です)。ブロック・サイズを変更するには、データベースの疎/密の構成を変更する必要があります。
- ブロックの潜在数 - ブロックの最大数(1つの疎次元のメンバー数に別の疎次元のメンバー数を掛け合わせるによって得られます)。たとえば、Sample Basic データベースでは、19 個の Product メンバーと 25 個の Market メンバーがあります(共有メンバーやラベルのみのメンバーは数えません)。Product と Market はデータが保管される疎次元であるため、潜在データ・ブロックの数は $19 \times 25 = 475$ 個になります。
- 既存のレベル 0 ブロック - 存在している(データが含まれる)レベル 0 ブロック(子メンバーを1つも持たない疎次元メンバーのブロック)の合計数。データは上位レベルにロードされる場合があるため、レベル 0 ブロックの数とデータ入力によって作成されたブロックの数が同じになるとはかぎりません。
- 既存の上位レベル・ブロック - レベル 0 ブロック以外の、存在している(データが含まれる)ブロックの合計数。上位レベル・ブロックには、上位レベルの疎メンバーのすべての組合せ、およびレベル 0 の疎メンバーを含む上位レベルの組合せが含まれます。
- ブロックの密度(%) - 既存のデータ・ブロックのサンプルに基づく、各データ・ブロック内のデータ・ポイントの平均充てん率。疎/密の構成によりブロック密度が最大になります。しかし、ブロック密度を最大にするとデータ・ブロックの数が急増することがあります。ブロック・サイズとブロックの急増を考慮したうえで、ブロック密度の最大化を試みてください。
- 既存の最大ブロック数のパーセンテージ - 存在するブロックの数と可能なブロックの数の比を示すパーセント。この割合は、データベースの疎密の度合いを示すメジャーになります。このパーセントが非常に小さい値(1パーセント未満など)になることは通常はありません。
- 圧縮率 - ディスク上に保管されているブロックの圧縮効率のメジャー。通常、圧縮率はブロック密度を示します。
- 平均クラスタ率 - データ(.pag)ファイルの断片化レベル。最大値 1 は、断片化がないことを表します。取得、計算、データ・ロードのパフォーマンスが低下しており、クラスタ率の値が 1 よりも著しく小さい場合は、データのエクスポートと再ロードを実行してデータ・ファイルの再書込みを実行すること

を検討してください。ファイルの再書込みによりファイルの断片化が解消され、1に近いクラスタ率が得られるようになります。

「集約ストレージ統計」ノードには、集約ストレージ・データベースの各次元に関する統計が表示されます:

- 名前
- 保管されるレベル数(次元レベル係数) - 集約ストレージ・データベースでは、すべてのレベルが保管されるわけではありません。
- 次元キーで使用されるビット数 - キーの長さは8バイトの倍数(8、16または24など)です。このため、たとえば、65ビットを使用するキーの長さは9バイトで、64ビットを使用するキーの長さは8バイトです。したがって、使用されるビット数を64に減らすと、データベースのサイズも小さくなります。

「集約ストレージ統計」ノードには、集約ストレージ・データベースに関する統計が表示されます:

- キーの最大長(ビット) - すべての次元で使用されているすべてのビットの合計(たとえば、最初の4ビットがYearに使用されているような場合でも、すべての次元に使用されているキーの最大長としては20ビットになる、など。)
- キーの最大長(バイト) - セル当たりでキーに使用されているバイト数
- 入力レベルのセルの数 - すべての入力レベルのセルがレベル0のセルであることが前提
- 集約ビューの数
- 「集約セルの数」
- 入力レベル・データ・サイズ(KB) - 入力レベル・データによって使用されるディスク容量の合計
- 集約データ・サイズ(KB) - 集約セルによって使用されるディスク容量の合計

「ランタイム」ノードに表示されるランタイム統計を確認する場合は、ヒット率に関する次の情報を考慮してください:

- ヒット率とは、情報がディスクからではなくキャッシュから取得される頻度のことです。
- ヒット率が増すと、ディスクから取得される情報が減るため、パフォーマンスが向上します。
- ヒット率が1.0である場合、データはディスクからは一切取得されないため、パフォーマンスが最大になります。
- キャッシュに割り当てるメモリの単位は小さくすることをお勧めします。割当て単位が小さくても大きくても効果は同じですが、大きな単位で割り当てると、通常、ヒット率の向上に限界が生じてきます。

ブロック・ストレージ・データベースの場合、「ランタイム」ノードには、様々なヒット率の統計が表示されます:

- インデックス・キャッシュ・ヒット率
- データ・ファイル・キャッシュ・ヒット率

- データ・キャッシュ・ヒット率

集約ストレージ・データベースの場合、「ランタイム」ノードには、集約ストレージ・キャッシュに関する統計が表示されます:

- キャッシュ・ヒット率
- 現在のキャッシュ・サイズ(KB) - キャッシュは、指定した限度まで動的に増加します。
- 現在のキャッシュ・サイズの制限値(KB) - 制限を変更するには、[82 ページの「集約ストレージ・キャッシュのサイズ設定」](#)を参照してください。

ブロック・ストレージ・データベースの場合、「ランタイム」ノードは、次の各イベントが発生した回数を示すとともに、影響を受けるデータ・ファイルのパス情報を提供します。

- インデックス・ページ読取り
- インデックス・ページ書込み
- データ・ブロック読取り
- データ・ブロック書込み

集約ストレージ・データベースの場合、「ランタイム」ノードには、ページに関する統計が表示されます:

- 前回始動してから読み取られたページ数
- 前回始動してから書き込まれたページ数
- ページ・サイズ(KB)

集約ストレージ・データベースの場合、「ランタイム」ノードには、ディスク・スペースに関する統計が表示されます(ディスク・スペースは Default テーブルスペースで使用されるスペースを表し、一時ディスク・スペースは Temp テーブルスペースで使用されるスペースを表します。どちらも場合も、一部のファイル内のスペースの一部は使用されていないことがあります。)

- データに割り当てられたディスク・スペース(KB)
- データで使用されているディスク・スペース(KB)
- 割り当てられた一時ディスク・スペース(KB)
- 使用されている一時ディスク・スペース(KB)

関連情報

- Essbase キャッシュの最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [82 ページの「集約ストレージ・キャッシュのサイズ設定」](#)
- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- display database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getdbstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ・「ストレージ」タブ

「ストレージ」タブは、ブロック・ストレージ・データベースのデータ・ストレージ・オプションを設定するために使用します。

「現在の入出力アクセス・モード」に指定されているモードを使用しないようにする、つまり、入出力アクセス・モードを変更するには、「保留中の入出力アクセス・モード」ボックスでモードを選択します:

- バッファ入出力 - ファイル・システムのバッファ・キャッシュを使用します。データベースの作成時に `essbase.cfg` ファイルの `DIRECTIO` 設定で直接入出力を指定していない場合、バッファ入出力がデフォルトになります。(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。)
- 直接入出力 - ファイル・システムのバッファ・キャッシュを使用せず、非同期のオーバーラップ入出力を実行します。これによって、応答時間が速くなり、キャッシュ・サイズをさらに最適化できるようになります。直接入出力を選択すると、データベースが開始されるたびに Essbase では直接入出力の使用が試みられます。直接入出力が使用できない場合、Essbase ではバッファ入出力が使用されます。キャッシュ・メモリのロック機能や、オペレーティング・システムに用意されているノー・ウェイト(非同期)入出力を使用可能にするには、直接入出力を選択する必要があります。

「データ圧縮」ボックスで、オプションを選択します:

- ビットマップ符号化 - ビットマップを使用してデータ・セルが表され、ビットマップ、ブロック・ヘッダーおよびその他の制御情報のみがディスクに保管されます。これがデフォルトの設定であり、データを最も効率的に圧縮する方法です。

Essbase で保管されるのは欠落していない値のみで、反復値やゼロ値は圧縮されません。Essbase では、データ・ブロックがデータ・キャッシュに移動されると、ビットマップを使用して欠落した値が再作成され、ブロックが完全に展開されます。

- RLE(ランレングス符号化) - 連続する反復値(ゼロを含む)が圧縮され、各反復値と連続反復回数が記録されます。

RLE が適しているのは、**ブロックの平均密度**が 3 パーセント以下である場合や、連続するゼロの値やゼロ以外の連続する反復値がデータベースに多数存在している場合などです。

- ZLIB - 圧縮されるデータに基づくデータ・ディクショナリが作成されます。

通常、ZLIB 圧縮は、データの密度が非常に高い場合に高い圧縮率を示します。ただし、場合によっては、他の圧縮方式のほうが高い圧縮率を示すことがあります。ZLIB 圧縮の場合、節約される記憶域は、欠落セル数や等しい値を持つセルの連続回数とは、ほとんど関係ありません。

- 圧縮しない

「ディスク・ボリューム」テーブルの列で、各ディスク・ボリュームでのストレージの割当て方法を指定します:

- ディスク・ボリューム - 一連のボリュームの名前を、使用する順序どおりに選択します。
- パーティション・サイズ - 各ボリュームに割り当てるディスク・スペースの最大量を指定します。

デフォルト(「無制限」)を使用すると、Essbase では、使用可能な領域から必要なだけ使用されます。

- 単位 - 各「パーティション・サイズ」の値の単位(KB、MB または GB)を選択します。
- ファイル・タイプ - ボリュームごとに、インデックス・ファイル(essn.ind)またはデータ・ファイル(essn.pag)、あるいはインデックス・ファイルとデータ・ファイルの両方のうち、いずれをボリュームに保管するかを指定します。デフォルトはインデックス・ファイルとデータ・ファイルの両方です。
- ファイル・サイズ - ボリュームごとに、インデックス・ファイルやデータ・ファイルの最大サイズを指定します。ファイルのサイズがこの値に到達すると、Essbase で新しいファイルが作成されます。デフォルトは 2G です; 最小は 8192K (8M) です。
- 単位 - 各「ファイル・サイズ」の値の単位(KB、MB または GB)を選択します。
- 「削除」ボタン: 削除対象のボリュームが含まれている行を選択して「削除」をクリックすると、Essbase によってそのボリュームに新しいファイルが保管されなくなります。Essbase によってそのボリュームに新しいファイルが書き込まれなくなりますが、そのボリュームに作成済のファイルは、引き続きアクセスおよび使用されます。

注: ストレージに使用するディスク・ボリュームを指定しない場合、Essbase では、すべてのインデックス・ファイルおよびデータ・ファイルは ARBORPATH 環境変数で指定されているボリュームに保管され、領域が必要なだけ使用されます。

これ以上のファイルがボリュームに保管されないようにするには、「ディスク・ボリューム」テーブルで、ボリュームが含まれる行を選択し、「削除」を選択します。そのボリュームにこれ以上ファイルを書き込むことはできなくなりますが、ボリューム上のファイルはアクセスおよび使用できます。

データ/インデックス・ファイル・テーブルの列には、ディスク・ボリュームに保管されている各ファイルに関する情報が表示されます:

- データ/インデックス・ファイル・タイプ - インデックス(.ind)またはデータ(.pag)

- サイズ - KB 単位
- ステータス - 「開く」、閉じましたまたは見つかりません
- 名前 - パスおよび名前

関連情報

- バッファ入出力と直接入出力の理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- ストレージの割当てとデータの圧縮(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・プロパティ・ウィンドウ - 「トランザクション」タブ

ブロック・ストレージ・データベースの場合、「トランザクション」タブは、Essbase でディスクにデータが書き込まれるタイミングを指定し、複数の同時ユーザーの間のデータ・アクセスのレベルを制御するために使用します。

トランザクションが完了してコミットされるまで、トランザクションに含まれているすべてのデータ・ブロックに対する読取り/書込みロックが保持されるようにするには、「コミット・アクセス」オプションを選択し、同時オプションを指定します:

- 待機(秒) - ロックされたデータ・ブロックにアクセスできるようになるまでトランザクションが待機する秒数を指定します。デフォルト(20 秒)のままにするか、値を入力するか、あるいは、リストから「無限」または「0(待機しない)」を選択します。
- プリイメージ・アクセス - 別の同時トランザクションが実行されている間にロックされているデータ・ブロックに対する読取り専用アクセス権を、ユーザーに付与します。

トランザクションがブロック単位で読取り/書込みロックを保持できるようにするには、「アンコミット・アクセス」オプション(デフォルト設定)を選択してから、Essbase がコミット操作を実行するタイミングを指定します:

- ブロックのコミット - Essbase がコミットを行うまでに更新するデータ・ブロック数(デフォルトは 3000 です。)
- 行のコミット - データ・ロードで、Essbase がコミットを行うまでに処理するデータ・ファイルの行数(デフォルトは 0 です。)

「ブロックのコミット」と「行のコミット」のどちらかが 0 以外の値である場合、どちらか最初のしきい値に到達したときに Essbase でデータがコミットされます。たとえば、「ブロックのコミット」を 10 に、「行のコミット」を 0 に設定してデータ・ロードを行うと、10 個のブロックが更新されたときに Essbase でコミットが行われます。「ブロックのコミット」を 5 に、「行のコミット」を 5 に設定してデータ・ロードを行うと、5 行がロードされた時点か、5 個のブロックが更新された時点のどちらか早いほうの時点で Essbase でコミットが行われます。

注： シームレスな修復を実現するために、Essbase では重複データはコミットされるまで保持されます。重複データに対応できるよう、データベースのサイズの 2 倍のディスク容量を確保するようにしてください(特に、コミット・アクセスを使用する場合や、「ブロックのコミット」と「行のコミット」の値が 0 である場合)。

注： このタブは、集約ストレージ・データベースには適用されません。

関連情報

- データの整合性の保持(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [106 ページの「データベース・プロパティの設定」](#)
- [334 ページの「データベースの監視について」](#)
- [565 ページの「データベース・プロパティ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstate(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdbstateitem(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getperfstats(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・トリガー・スプール・ファイル・ウィンドウ

データベース・トリガー・スプール・ファイル・ウィンドウは、トリガーのスプール・ファイルの表示および削除に使用します。

このウィンドウには、現在のトリガーの定義対象である Essbase サーバー・インスタンス、アプリケーションおよびデータベースが示されます。

注： 他のデータベースを対象に定義されたトリガーを表示するには、エンタープライズ・ビューで、目的のデータベースの下の「トリガー」ノードをダブルクリックします。

「名前」列には、スプール・ファイルの名前が一覧表示されます。

このウィンドウには次のボタンが用意されており、それぞれがスプール・ファイル・リストに影響を及ぼします：

- 表示
- 削除
- すべて削除
- リフレッシュ

関連情報

- [447 ページの「トリガー・スプール・ファイルの表示」](#)
- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [444 ページの「トリガーの作成」](#)
- [445 ページの「トリガーの編集」](#)
- [446 ページの「トリガーの削除」](#)
- [447 ページの「トリガーの使用可能化および無効化」](#)
- [580 ページの「データベース・トリガー・ウィンドウ」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- drop trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

データベース・トリガー・ウィンドウ

データベース・トリガー・ウィンドウは、トリガーを表示、作成、編集、有効化、無効化および削除するために使用します。

このウィンドウには、Essbase サーバー・インスタンスと、一覧表示されているトリガーの定義対象であるデータベースが示されます。

注： 他のデータベースを対象に定義されたトリガーを表示するには、エンタープライズ・ビューで、目的のデータベースの名前の下の「トリガー」ノードをクリックします。

このウィンドウの各列には、一覧表示されている各トリガーに関する情報が表示されます:

- 名前 - Sample.Basic.EastColas など
- 定義 - MaxL コマンドおよび MDX 構文
- 使用可能 - TRUE または FALSE

このウィンドウには次のボタンが用意されています:

- 新規 - トリガーを作成します
- 編集 - 「トリガーの編集」ダイアログ・ボックスが開きます。選択したトリガーを編集するために使用します

注: 「トリガーの編集」ダイアログ・ボックスは、トリガーをダブルクリックして開くこともできます。

- 使用可能にする - 選択した無効のトリガーを有効にします
- すべて中断 - データベース・セッション中にすべてのトリガーを無効にします。アプリケーションを閉じると、トリガーは「すべて中断」をクリックする前の値(有効または無効)に戻ります。
- 削除 - 選択したトリガーを削除します
- リフレッシュ - トリガー情報を更新します

関連情報

- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [444 ページの「トリガーの作成」](#)
- [445 ページの「トリガーの編集」](#)
- [446 ページの「トリガーの削除」](#)
- [447 ページの「トリガーの使用可能化および無効化」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- drop trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックス

「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックスは、動的時系列(DTS)メンバーを使用可能および使用不可にし、世代に DTS メンバーを関連付けて、DTS メンバーに別名を指定するために使用します。

「系列」列には、システム定義の DTS メンバーが長い順にリストされます;たとえば、S-T-D(当季初めからの累計)は P-T-D(期間累計)に先行します。

- H-T-D
- Y-T-D
- S-T-D
- P-T-D
- Q-T-D
- M-T-D
- W-T-D
- D-T-D

「使用可能」列オプションを選択または選択解除することにより、このオプションに関連付けられたメンバーを使用可能または使用不可にします。

「世代」列で、世代番号(使用可能なメンバー当たり 1 つの番号)を選択します。DTS メンバーを時間次元のレベル 0 メンバーに関連付けることはできません。また、1 つの世代番号を複数のメンバーに割り当てないでください。

システム定義のメンバーの世代番号を選択すると、Essbase では、事前定義済の世代名(H-T-D: 履歴、Y-T-D: 年、S-T-D: 季、P-T-D: 期間、Q-T-D: 四半期、M-T-D: 月、W-T-D: 週、D-T-D: 日)が適用されます。DTS メンバー名および世代名は、Essbase が使用するために予約されています。たとえば、予約されている DTS 世代名を使用して時間次元の世代に名前を付けると、Essbase では、この世代名(履歴を表す H-T-D など)に関連付けられた DTS メンバーが作成されて使用可能になります。

別名を DTS メンバーに割り当てるには、「デフォルト」列のメンバー行に、1 つまたは複数の別名(1 つまたは複数の別名テーブルから 1 つずつ)を入力します。

詳細は、[177 ページの「動的時系列メンバーの使用可能化」](#)を参照してください。

関連情報

- [177 ページの「動的時系列メンバーの使用可能化」](#)
- [178 ページの「動的時系列メンバーの無効化」](#)
- [190 ページの「動的時系列メンバーの別名の作成」](#)

「世代の定義」ダイアログ・ボックス

「世代の定義」ダイアログ・ボックスを使用して、世代名を作成、編集および削除できます。

計算スクリプトおよびレポート・スクリプトで世代名を使用して、世代名を適用するすべてのメンバーを参照できます。たとえば、世代名「Month」は月のすべてのメンバー(Jan、Feb など)を参照します。

1つの世代に付けることができる名前は、1つのみです。指定する名前は一意である必要があります;つまり、世代名、レベル名、メンバー名、別名、従来の別名は重複させられません。メンバーの名前付けルールに従ってください。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

「世代の定義」ダイアログ・ボックスの「次元」ボックスで、名前を付ける世代を含む次元を選択します。

次の列で、情報を表示し、アクションを実行します:

- 状態 - ダイアログ・ボックスを開いた後に作成または更新された世代名に対して、それぞれ「新規」または「変更済」と表示します。ダイアログ・ボックスを開いてから名前が作成も更新もされなかった場合は、何も表示されません。
- 数値 - 既存の世代の世代番号を表示します。世代名を作成する場合は、この列で、最初の空のセルをクリックし、次の世代番号を割り当てます。世代番号を変更する場合は、変更するセルをクリックし、番号を選択します。DTS メンバーに関連付けられている番号は変更できません。
- 一意 - **重複メンバー名のアウトライン**に対し、メンバー名を含む次元で「一意」列オプションを選択して、関連する世代においてメンバー名が一意であることを要求します。
- 世代名 - 既存の世代の名前を表示します。世代名を作成するには、この列で、最初の空のセルをクリックし、名前を入力します。世代の名前を変更する場合は、変更するセルをクリックし、名前を入力します。メンバーの名前付けルールに従ってください。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。DTS メンバーに関連付けられている世代の名前は変更できません。
- 削除 - 「削除」列オプションを選択して、関連する世代名を削除できます。

関連情報

- [179 ページの「世代およびレベルの名前付け」](#)
- [583 ページの「「レベルの定義」ダイアログ・ボックス」](#)
- 次元とメンバー(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

「レベルの定義」ダイアログ・ボックス

「レベルの定義」ダイアログ・ボックスは、レベル名を作成、編集、または削除するために使用します。たとえば、レベル名 Month を作成し、月を含む世代に適用できます。

計算スクリプトやレポート・スクリプトの中で世代名やレベル名を使用することで、その名前が適用されているすべてのメンバーを参照できます。

1つのレベルに付けることができる名前は、1つのみです。指定する名前は一意である必要があります;つまり、世代名、レベル名、メンバー名、別名、別名の組合せは重複させられません。準拠が必要な名前付けルールの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

「次元」ボックスで、名前を割り当てるレベルが含まれている次元を選択します。デフォルトでは、現在の次元が表示されます。

次の列において、情報を表示または入力します:

- 状態 - ダイアログ・ボックスが表示されてから作成または更新されたレベル名に対して、それぞれ「新規」または「変更済」と表示します。ダイアログ・ボックス更新以降に作成も更新もされなかった名前に対しては、何も表示されません。
- 番号 - 既存のレベルの番号を表示します。レベル名を作成する場合は、最初の空のセルをクリックして、次のレベルの番号を割り当てます。番号を変更する場合は、変更するセルをクリックして、番号を選択します。
- 一意 - 重複メンバー名を許可する次元に対して、現在のアウトラインで**重複メンバー名**を許可する場合、メンバー名を関連するレベルにおいて一意にする際に、この列オプションを選択します。
- 削除 - 関連するレベル名を削除する場合は、この列オプションを選択します。

関連情報

- [582 ページの「世代の定義」ダイアログ・ボックス](#)
- [179 ページの「世代およびレベルの名前付け](#)
- 次元とメンバー(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス

「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスは、次元構築中にアウトラインを変更する方法を定義するために使用します。

次のような変更が可能です:

- 別名テーブルの更新
- 疎/密構成の決定
- 複数のフィールドにわたる選択条件や除外条件の結合
- メンバーの変更
- 次元の作成

このダイアログ・ボックスには、次のタブがあります:

- [グローバル設定](#) - ルール・ファイルですべての次元のプロパティを設定します
- [次元構築の設定](#) - メンバーが Administration Services で変更される方法を定義します
- [次元定義](#) - ルール・ファイルで次元を作成します

ルール・ファイルにアウトラインを関連付けて、次元ノードを取り込むには、「アウトライン」ボタンをクリックします。

関連情報

- [222 ページの「メンバー・プロパティの設定および変更」](#)
- [220 ページの「構築方法の指定」](#)
- [219 ページの「ルール・ファイルを使用した次元の名前付け」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス - 「次元構築の設定」タブ

「次元構築の設定」タブは、次元構築中にメンバーを変更する方法を決定するために使用します。

「次元」ノードで、次元を選択します。「次元構築の設定」タブで選択したすべてのオプションは、ここで選択した次元に適用されます。このノードが空の場合は、「アウトライン」ボタンをクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。

このタブには、複数のオプション・グループがあります:

- 既存のメンバー
- 属性メンバー
- 構築方法
- メンバーのソート
- メンバーの更新

「既存のメンバー」グループのオプションは、次のとおりです:

- 競合の無視 - アウトラインに存在しているメンバー名を無視します; 「移動可能」オプションを選択している場合、このオプションは選択できません; このオプションは、構築方法として追加を使用する場合にのみ使用できます
- 移動可能 - 次元内で、メンバーとその子を新しい親に移動します; プライマリ・メンバーを認識し、データ・ソースと照合します; 「競合の無視」オプションを選択している場合、このオプションは選択できません; このオプションは、重複メンバー・アウトラインでは使用できません
- プロパティの変更可能 - メンバーのプロパティを、データ・ソースに指定されているプロパティに変更します; 「UDA の変更可能」オプションを使用可能にします。
- 式の変更可能 - メンバーの式を、データ・ソースに指定されている式に変更します。
- UDA の変更可能 - UDA の値を、データ・ソースに指定されている値に変更します(このオプションを選択しない場合、データ・ソースの UDA は既存の UDA に追加されます)
- 共有メンバーのプロトタイプ・エラーの自動修正を許可 - 次元の構築中に、アウトラインで共有メンバーがプライマリ・メンバーより上位の位置にロードされた場合、最上位の共有メンバーがプライマリ・メンバーになり、それま

でのプライマリ・メンバーが共有メンバーになります。これにより、検証エラーを回避できます。

- 共有しない - メンバーに新しい親を指定するレコードを除外します; 構築方法として親/子を使用する場合のみ使用可能です; 集約ストレージ・データベース内の保管階層のメンバーには適用できません(このオプションを選択しない場合、共有メンバーを作成できます。)

「属性メンバー」グループのオプションは、次のとおりです:

- 関連付けの変更可能 - メンバー属性の関連付けを、データ・ソースで指定されている関連付けに変更します(たとえば、「100-10」メンバーがデータ・ソースでは「8 Ounce」属性に関連付けられており、アウトラインでは「12 Ounce」属性に関連付けられている場合、Essbase では「100-10」メンバーが「8 Ounce」属性に関連付けられます。)
- メンバーを作成しない - Essbase でメンバーが作成されないようにします

「構築方法」グループのオプションは、次のとおりです:

- 世代参照の使用 - トップダウンのデータ・ソースから次元を構築します。世代階層は、上から順に番号が付けられます(次元が世代 1 で、そのすぐ下の子が世代 2 になります)
- レベル参照の使用 - ボトムアップのデータ・ソースから次元を構築します。レベル階層は、下から順に番号が付けられます(最下位レベルがレベル 0 になります)
- 親/子参照の使用
- 一致する文字列を使用してメンバーの兄弟として追加
- 最下位レベルの兄弟として追加
- 子として追加 - 選択した次元の子としてメンバーを追加します
- NULL 値の処理 - NULL フィールドの後にあるプライマリ・フィールド(メンバー名など)を上位へ移動し、NULL フィールドの後にあるセカンダリ・フィールド(メンバーのプロパティや別名など)は無視します; このオプションは、構築方法として世代またはレベルを使用する場合にのみ使用できます

「メンバーのソート」グループのオプションは、次のとおりです:

- なし
- 昇順
- 降順

「メンバーの更新」グループのオプションは、次のとおりです:

- マージ - メンバーを既存のメンバーの中に挿入します(デフォルト)
- 未指定の削除 - データ・ソース内に存在しないメンバーを削除します; 構築方法として世代、レベルまたは親/子を使用する場合にのみ使用できます

関連情報

- 高度な次元構築の概念の理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 共有メンバーの理解(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [584 ページの「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス](#)

「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス - 「次元定義」タブ

「次元定義」タブのオプションは、標準次元および属性次元のプロパティの設定または変更を行うために使用します:

- アウトライン - 関連するアウトラインの次元のリストを表示します。標準次元のプロパティを変更するには、次元を右クリックし、「プロパティの編集」を選択します。属性次元を定義するには、基本次元を右クリックし、「プロパティの編集」を選択します。
- ルール・ファイル - ルール・ファイルで定義されている標準次元のリストを表示します。次元を作成するには、「ルール・ファイル」オプションを選択し、「次元」テキスト・ボックスに次元名を入力してから、[Enter]キーを押します。(命名ルールについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)。次に、「次元」ノードで、次元を右クリックしてそのプロパティを設定できます。

ルール・ファイルにアウトラインを関連付けて、次元ノードを取り込むには、「アウトライン」ボタンをクリックします。

関連情報

- [588 ページの「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)
- 次元およびメンバーのプロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- データ・ソースを使用したメンバー・プロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [584 ページの「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス](#)

「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス - 「グローバル設定」タブ

「グローバル設定」タブのアイテムは、ルール・ファイル内のすべての次元に影響するプロパティを設定するために使用します:

- 別名テーブルの更新 - リストから、次元構築時に更新する別名テーブルを選択します。デフォルトでは、「デフォルト」別名テーブルが選択されます。

- データの構成 - ブロック・ストレージ・データベースの場合、次元の疎/密の決定方法を指定するには、次のいずれかのオプションを選択します：
 - 次元プロパティの設定の使用 - Essbase ではルール・ファイルまたはアウトラインで指定されている疎/密の構成が使用されます。
 - 密/疎の自動構成 - 次元の疎/密は Essbase により割り当てられます。
- サイズおよびタイプによって次元を砂時計の形に配置 - ブロック・ストレージ・データベースの場合、次元を次の順序で配置するには、このオプションを選択します。この順序は、データの取得には最適でない場合があります。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のパフォーマンスを最適化するためのアウトラインのデザインに関する項を参照してください。
 - 会計次元および時間次元が、アウトラインの最上部に配置されます
 - 次にその他の密次元が、大きいものから小さいものへという順番で配置されていきます
 - その次に疎次元が、小さいものから大きいものへという順番で配置されていきます
 - 属性次元がある場合は、順不同で配置されます
- グローバル選択/除外ブール演算 - 「AND」オプション(すべてのフィールドが選択条件や除外条件を満たしている場合のみ、レコードを選択または除外します)または「OR」オプションを選択します(いずれかのフィールドが選択条件や除外条件を満たしている場合、レコードを選択または除外します)。

ルール・ファイルにアウトラインを関連付けて、次元ノードを取り込むには、「アウトライン」ボタンをクリックします。

関連情報

- [233 ページの「選択条件や除外条件の結合」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [584 ページの「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス](#)

「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス

「次元プロパティ」ダイアログ・ボックスのタブは、次元構築時に新規や既存の標準次元および属性次元のプロパティを設定または変更するために使用します：

- **次元プロパティ** - 一般的なプロパティ(次元のタイプ、2パス計算、データ・ストレージ、データ構成など)を設定します
- **会計次元** - 会計次元のプロパティ(タイム・バランス、通貨換算、差異レポートなど)を設定します
- **世代/レベル名** - 世代やレベルに名前を付けます
- **属性次元** - 属性次元の名前およびタイプを定義します

関連情報

- 次元およびメンバーのプロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス - 会計次元プロパティ・タブ

会計次元プロパティ・タブは、ブロック・ストレージ・データベースの会計次元のプロパティを設定するために使用します。

「タイム・バランス」ノードで、タイム・バランス・プロパティを設定します:

- 既存の定義またはなし - アウトラインで指定されている設定を適用します(デフォルト)。設定が指定されていない場合、Administration Services により「なし」が適用されます。
- なし - タイム・バランス・プロパティを適用しません。メンバー値はデフォルトの方法で計算されます。
- 期首 - 親の値が期間の開始時点における値を表します。
- 期末 - 親の値が期間の終了時点における値を表します。
- 平均 - 親の値が期間の平均値を表します。
- 「スキップ」ノード - タイム・バランスの計算時に無視する値を決定するためのオプション(「なし」、「#Missing」、「ゼロ」または「#Missing およびゼロ」)を選択します。たとえば、「なし」を選択すると値は無視されず、「#Missing およびゼロ」を選択すると#MISSING とゼロの両方の値が無視されます。スキップ設定を指定できるのは、タイム・バランス・プロパティが「期首」、「期末」または「平均」に設定されている場合のみです。

注: 計算時に Essbase で#MISSING 値が検出された場合、#MISSING 値は、メンバーの総数ではなく、値を持つメンバーの数で除算されます。

通貨データベースの場合、「通貨換算」ノードで、通貨換算カテゴリを定義します:

- 既存の定義またはなし - アウトラインで指定されている設定を適用します(デフォルト)。設定が指定されていない場合、Essbase では次元が通貨関連でないとみなされます。
- なし(祖先を使用) - 次元が通貨関連でないことを指定します。
- 換算しない - 換算を必要としない、数量やパーセントなどの値用
- カテゴリ - 特定のカテゴリ・タイプへの換算を必要とする値用。「カテゴリ」ボックスで、必要な換算のタイプ(米国ドルなど)を入力します。

「差異レポート」ノードで、実績データと予算データの差異を計算する方法を指定します:

- 既存の定義または支出外 - アウトラインで指定されている設定を適用します (デフォルト)。設定が指定されていない場合、Essbase では次元が支出外として保管されます。
- 支出外 - メンバーを支出外として設定します。販売などの支出外アイテムの実績値が予算値を上回る必要があります。実績値が予算値を下回ると、差異は負数になります。
- 支出 - メンバーを支出として設定します。コストなどの支出アイテムの実績値が予算値を下回る必要があります。実績値が予算値を上回ると、差異は負数になります。

関連情報

- 会計次元の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [588 ページの「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「次元プロパティダイアログ・ボックス - 「属性次元」タブ

「属性次元」タブは、属性次元を作成するために使用します:

- 「名前」ボックスで、次元の名前を入力します。標準次元の命名ルールに従います。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- 「タイプ」ボックスで、タイプ(テキスト、数値、ブールまたは日付)を選択します。
- 「新規」ボタンをクリック(して指定した次元を作成)するか、「削除」ボタンをクリック(して選択した次元を削除)します。

関連情報

- 属性次元の構築と属性の関連付け(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [588 ページの「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「次元プロパティ」タブ

「次元プロパティ」タブは、一般的な次元プロパティを設定するために使用します。

任意の次元について、「次元タイプ」ノードで、次元タイプを選択します:

- 既存の定義またはなし - アウトラインで指定されている次元タイプを指定します(デフォルト)。アウトラインでタイプが指定されていない場合、Essbase により「なし」が適用されます。

- なし - 次元タイプを適用しません。
- 会計 - 利益や在庫などの測定するアイテムに次元を使用します。会計のタグを付けられる次元は、アウトライン当たり 1 つのみです。次元に会計のタグを付けた場合は、「[会計次元](#)」プロパティを設定します。
- 時間 - データの収集頻度や更新頻度を表すために次元を使用します。時間のタグを付けられる次元は、アウトライン当たり 1 つのみです。
- 国 - 複数の国のビジネス活動を追跡するための次元(ブロック・ストレージのみ)として使用します。国次元の場合、「通貨名」ボックスに通貨名を入力できます。

任意のブロック・ストレージ次元について、データベース内を 2 度目にパススルーするとき次元を計算するには、「2 パス計算」を選択します。

メンバー名の重複が可能なデータベースの次元について、「次元内で一意となるメンバー名」ノードで、[メンバー名の一意性](#)設定を指定します:

- 既存の定義または一意 - アウトラインで指定されている一意性設定を適用します(デフォルト)。アウトラインで設定が指定されていない場合、Essbase により「一意」が適用されます。
- 次元内で一意となるメンバー名 - メンバー名を一意にします。
- 次元内で重複するメンバー名 - 重複(一意でない)メンバー名を許可します。

任意の次元について、「データ・ストレージ」ノードで、ストレージ・オプションを選択します:

- 既存の定義または保管 - アウトラインで指定されている保管設定を適用します(デフォルト)。アウトラインで設定が指定されていない場合、Essbase により「保管」が適用されます。
- データの保管 - データを次元とともに保管します。
- 共有しない - 次元に関連付けられているデータを共有しません。このため、親子の関係などの暗黙の共有関係がある場合でも、データは複製されます(親と子の両方に保管されます)。このオプションは、集約ストレージ・アウトラインに保管された階層には適用されません。
- ラベルのみ - 次元にデータを関連付けません。集約ストレージ・アウトラインの場合、このオプションには制限があります。
- 動的計算および保管 - ユーザーからデータを要求されたときに、次元に関連付けられたデータを計算し(ブロック・ストレージのみ)、計算されたデータを保管します。
- 動的計算 - ユーザーからデータを要求されたときに、次元に関連付けられたデータを計算し(ブロック・ストレージのみ)、計算されたデータを破棄します(保管しません)。

ブロック・ストレージ・データベースの任意の次元について、「構成」ノードで構成オプションを選択します:

- 既存の定義または疎 - アウトラインで指定されている構成設定を適用します (デフォルト)。アウトラインで設定が指定されていない場合、Essbase により「疎」が適用されます。
- 密 - 密次元とは、多くの次元交差にデータ値が存在する次元のことです。

注： 密次元のメンバーには属性を関連付けることができないため、基本次元の保管設定を密に設定しないでください。

- 疎 - 疎次元とは、データ値が存在している次元交差が少ない次元のことです。たとえば、すべての製品をすべてのマーケットで販売するわけではない場合は、Products 次元は疎に設定します。

集約ストレージ・データベースの任意の次元について、「階層タイプ」ノードで階層タイプを選択します:

- 既存の定義または保管済 - アウトラインで指定されている階層設定を適用します。アウトラインで設定が指定されていない場合、Essbase により「保管済」が適用されます。
- 複合階層: 使用可能 - 保管階層と動的階層の両方を使用します。
- 保管済 - デフォルト。会計次元は保管できません。
- 動的 - 会計次元は自動的に動的として設定されます。

注： 動的階層および保管済階層に関連する制約の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の階層に関する項を参照してください。

次元およびメンバーに対して解決順の設定を割り当てることができます。次元の場合、「次元の解決順」ノードでオプションを選択します。メンバーの場合、「解決順」ノードでオプションを選択します:

- 既存の値または 0 - アウトラインで指定されている解決順の設定を適用します。アウトラインで設定が指定されていない場合、Essbase により「0」が適用されます。
- 新規の値 - 計算の優先度(0-127)を割り当てます。最高の解決順が割り当てられた次元またはメンバーの式が最初に計算されます。0 より小さい値は 0 に再設定され、127 を超える値は 127 に再設定されます。警告メッセージは表示されません。デフォルト値は 0 です。

注： 解決順が割り当てられていないメンバーは、その次元の解決順を継承します。解決順の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の計算順序に関する項を参照してください。

関連情報

- 次元およびメンバーのプロパティの設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

- [588 ページの「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「世代/レベル名」タブ

「世代/レベル名」タブで、次のアクションを実行して世代やレベルに名前を付けます:

- 「世代」オプションまたは「レベル」オプションを選択します。
- 「番号」ボックスで、名前を付ける世代またはレベルの番号を入力します。
- 「名前」ボックスで、名前を入力します。次元およびメンバーの命名ルールに従います。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- 「新規」ボタンをクリックします。

メンバー名の重複が可能な次元について、「一意のメンバー名」列をクリックし、[メンバー名の一意性要件](#)を指定します。

- 一意 - 世代またはレベル内でメンバー名が一意となるようにします。
- 重複 - 世代またはレベルにおいて重複するメンバー名を許可します。
- デフォルトまたは重複 - アウトラインで指定されている設定を適用します。設定が指定されていない場合、Essbase により「重複」が適用されます。

関連情報

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [588 ページの「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

使用不可であるユーザー名ウィンドウ

使用不可であるユーザー名ウィンドウは、Essbase サーバーで使用不可であるユーザー名を識別したり使用可能にするために使用します:

- 使用不可であるユーザー名を使用可能にするには、「使用不可であるユーザー名」リストで、ユーザー名を選択し、適切な一重矢印ボタンをクリックします。
- 前に使用可能にしたユーザー名を使用不可にするには、「使用可能」リストで、ユーザー名を選択し、適切な一重矢印ボタンをクリックします。
- すべてのユーザー名を反対側のリストに移動するには、適切な二重矢印ボタンをクリックします。

関連情報

- [303 ページの「ユーザー名の無効化」](#)
- [305 ページの「無効化されたユーザー名の表示またはアクティブ化」](#)

関連コマンド

alter user(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「トランザクションの表示」ダイアログ・ボックス

ログに記録されたトランザクションのリストをデータベースから取得するには、「トランザクションの表示」ダイアログ・ボックスを使用します。最後のトランザクションの再実行以降にログに記録されたトランザクションか、入力した日時以降に記録されたトランザクションを表示するかを選択します。

ログに記録および再実行できるのは、ブロック・ストレージ・データベースのトランザクションのみです。

ログに記録されたトランザクションのリストを表示するには、管理者の役割が必要です。

関連情報

- [117 ページの「ログに記録されたトランザクションの再実行」](#)
- [118 ページの「ログに記録されたトランザクションの表示」](#)
- トランザクション・ロギングの使用可能化およびトランザクションの再実行の構成(『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』内)

関連コマンド

query database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックス

「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックスを使用して、共有メンバーの基本として使用する重複メンバーを選択します。

たとえば、ある次元に Diet Cola メンバーの 3 つのインスタンスが含まれており、それぞれ異なる親メンバーの下にあるとします。いずれかの Diet Cola メンバーに共有のタグを付ける場合は、残りの 2 つのメンバーのいずれかをその共有メンバーの基本として指定する必要があります。

「共有メンバー」列には、作成する共有メンバーの名前が表示されます。

「基本メンバー」列には、アウトライン内で共有メンバー名に一致するすべてのメンバーの修飾名が表示されます。この列で、共有メンバーの基本として指定する重複メンバーをダブルクリックします。ダブルクリックしたメンバーは、「共有メンバー」列に追加されます。

関連情報

- [132 ページの「重複するメンバー名について」](#)

- [139 ページの「アウトラインの保存」](#)
- [165 ページの「共有メンバーの定義」](#)
- [638 ページの「「メンバーのプロパティ」 ダイアログ・ボックス - 「情報」 タブ](#)

「ドリルスルー定義の編集」 ダイアログ・ボックス

「ドリルスルー定義の編集」 ダイアログ・ボックスは、ドリルスルー定義の追加、変更、または削除に使用します。

編集または削除するドリルスルー定義を「定義」で選択するか、または「新規定義を追加するには、ここをクリックします」を選択します。

ドリルスルー定義の編集ダイアログ・ボックスでは、ドリルスルー定義に関する次の情報を編集できます:

- URL 名-クライアント・アプリケーションに表示されるドリルスルー定義の名前
- XML コンテンツ-クライアント・アプリケーションにおける Essbase からのデータの取得方法を定義するスクリプト
- 領域-クライアント・アプリケーションで使用できる情報が含まれているデータベース・スライス

「領域」にメンバーを追加するには、メンバー・ツリーでメンバーをダブルクリックします。「領域」内のメンバーにコマンドおよび関数を適用するには、「コマンドと関数」でコマンドおよび関数をダブルクリックします。オプションで、別名を使用する場合や、Administration Services に関数の引数を自動的に挿入させる場合は、「別名の使用」または「引数の挿入」を選択します。

定義に対する XML スクリプトをロードまたはエクスポートするには、「ファイルから XML をロード」または「XML のエクスポート」を選択します。

ドリルスルー URL および領域に関する詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の制限に関する付録を参照してください。

関連トピック

[123 ページの「ドリルスルー定義の管理」](#)

「関数の編集」 ダイアログ・ボックス

「関数の編集」 ダイアログ・ボックスは、グローバル(サーバー)のレベルまたはローカル(アプリケーション)のレベルで Essbase に登録されているカスタム定義関数のプロパティを編集するために使用します。

注: カスタム定義関数には、Essbase とともにオプションとしてインストールされる Java Runtime Environment が必要です。

- Essbase サーバー - 現在の Essbase サーバー・インスタンスの名前

注： 別の Essbase サーバー・インスタンスの関数を編集するには、エンタープライズ・ビューで目的のサーバーの下の「関数」ノードをダブルクリックします。

- スcope - 関数が関連付けられているアプリケーション名(グローバル関数の場合は<すべてのアプリケーション>)
- 名前 - MaxL で使用される二重命名規則が反映されない関数名; たとえば、@JSUM
- ステートメント - 関数の MaxL 指定

「関数の編集」ダイアログ・ボックスでは、次の情報を編集できます:

- クラス - 関数を開発するために使用される完全な Java クラス名
たとえば、次のようなコンパイル済 Java クラスが.jar ファイルにアーカイブされる場合があります: `com.hyperion.essbase.calculator.Statistics1`。
この場合、`Statistics.java` が `Statistics.class` にコンパイルされ、そのクラスが次のようにアーカイブされています: `com/hyperion/essbase.calculator/Statistics.class`。
- メソッド - 現在の関数に関連付けられた Java クラス・メソッド(たとえば、`com.hyperion.essbase.calculator.Statistics.covariance` の `covariance` 要素はメソッドを示します。)
- 指定 - Essbase 計算機構文の指定文字列(オプション); たとえば、`@COVARIANCE (expList1, expList2)`
`EssListCalcFunctions` API 関数の出力文字列を使用して現在の関数を戻すには、指定文字列を使用する必要があります。指定文字列を使用しない場合、コメントを入力できません。
- コメント - 指定文字列を使用する場合のみ必要に応じて使用可能です

「ランタイム」オプションを選択できるため、現在関数をランタイム関数として指定します。ただし、次の例に示すように、「ランタイム」プロパティはパフォーマンスに重大な影響を及ぼす可能性があるため、「ランタイム」を選択するのは特別な状況下のみにする必要があります:

- 現在の日付や急激に変化するリレーショナル・テーブルによって戻り値が異なるランタイム関数は、パフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があります。
- オペランドが含まれないランタイム関数や、定数値をオペランドとして使用するランタイム関数は事前に変更できません; このため、事前実行の最適化値が失われます。
- 組込み Essbase @CALCMODE(CELL)関数を使用すると、ランタイム関数が範囲内のすべてのセルで実行される可能性があります。
- 実行されるたびにランダム値を戻す `Mem1=@RANDOM()`などのランタイム関数は、異なるブロックごとに異なる値を戻す可能性があります。

関連情報

- 377 ページの「カスタム定義関数の編集」
- 375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」
- 548 ページの「カスタム定義関数マネージャ」

関連コマンド

create function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「ロガーの編集」ダイアログ・ボックス

ログ・メッセージのレベルを変更するには、「ロガーの編集」ダイアログ・ボックスを使用します。

注： ログ・メッセージは Provider Services のコマンドライン・ウィンドウに表示されます。

「ロガー・レベル」・リスト内でオプションを選択して、表示されるメッセージの種類を決定します。オプションは、特殊なものから一般的なものへの順で一覧表示されます：

1. エラー - エラーおよび致命的メッセージ
2. 警告 - 警告、エラーおよび致命的メッセージ
3. 情報 - 情報、警告、エラーおよび致命的メッセージ
4. デバッグ - デバッグ、情報、警告、エラー、および致命的なメッセージ

「マクロの編集」ダイアログ・ボックス

「マクロの編集」ダイアログ・ボックスは、グローバル(サーバー)のレベルまたはローカル(アプリケーション)のレベルで Essbase に登録されているカスタム定義マクロのプロパティを編集するために使用します。

読取り専用ボックス：

- Essbase サーバー - 現在の Essbase サーバー・インスタンスの名前
- スコープ - マクロが関連付けられているアプリケーション名(ローカル・マクロの場合)または<すべてのアプリケーション>(グローバル・マクロの場合)
- 名前 - マクロの名前
- ステートメント - 現在のマクロ定義を指定する MaxL ステートメント

情報を入力または変更するテキスト・ボックスは、次のとおりです：

- シグネチャ - マクロ引数を渡すスタイルの説明

たとえば、次のシグネチャでは、2つのカンマで区切った引数とそれに続く引数リストとしてマクロを渡します: (SINGLE, SINGLE, GROUP)

- 展開 - シグネチャの処理方法を示す文字列
たとえば、次のマクロ、シグネチャおよび展開を使用する場合、@SUM3 (x, y, z)は@SUM3 (x + y + z)に置き換えられます:
 - 名前 - @SUM3
 - シグネチャ - (SINGLE, SINGLE, SINGLE)
 - 展開 - (@@1, @@2, @@3)
- 指定 - Essbase 計算構文の指定文字列; たとえば、@MYMACRO (mbrName, rangeList)
指定文字列は必要ありません。指定文字列を使用することにより、EssListCalcFunctions API 関数の出力文字列によってマクロとその構文が戻されるようにします。
- コメント - 必要はなく、指定文字列を使用する場合のみ使用可能

関連情報

- [381 ページの「カスタム定義マクロの編集」](#)
- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [549 ページの「カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

create macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「ノートの編集」ダイアログ・ボックス

「ノートの編集」ダイアログ・ボックスは、セル・ノートのコンテンツを編集するために使用します。セル・ノートとは、リンク・レポート・オブジェクトのタイプの1つです。

「メンバーの組合せ」ボックスは、現在のノートがリンクされているメンバーの組合せを識別します。

注： 現在のノートを別のメンバーの組合せに添付するには、現在のリンクを削除し、Spreadsheet Add-in を使用してノートを目的のメンバーの組合せにリンクします。

「ノート」ボックスで、ノートのコンテンツを編集します。ノートの長さ制限は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)

「URL の編集」 ダイアログ・ボックス

「URL の編集」 ダイアログ・ボックスは、リンク・レポート・オブジェクトの URL 文字列を編集するために使用します。

このダイアログ・ボックスには次のテキスト・ボックスがあります:

- メンバーの組合せ - 現在の URL に関連付けられたメンバーの組合せを表示します(変更はできません)。
- URL - URL 文字列を編集します。長さ制限は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- 説明 - URL の説明があれば編集します。

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)

「ユーザー/グループ・アクセスの編集」 ダイアログ・ボックス

「ユーザー/グループ・アクセスの編集」 ダイアログ・ボックスのリストは、ユーザーとグループの次の権限を編集するために使用します(ユーザーについては[714 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ - 「ユーザー」 タブ](#)、グループについては[712 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ - 「グループ」 タブ](#) タブを参照してください):

- アプリケーションのアクセス
- データベースのアクセス
- フィルタ

関連情報

- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [712 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ」](#)

「エディタ・オプション」 ダイアログ・ボックス

「エディタ・オプション」 ダイアログ・ボックスのオプションは、開かれているオブジェクトに適用されます:

- 「オブジェクトのロック」を選択する場合は、[111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)を参照してください。
- 「アウトラインの関連付け」を選択すると、関連付けられたアウトラインの次元名とメンバー名がエディタに取り込まれます。このため、次元名とメンバー

名を入力せずに選択できます。389 ページの「[編集集中の Essbase オブジェクトへのアウトラインの関連付け](#)」を参照してください。

オブジェクトをロックしてアウトラインを関連付けるよう求められないようにするには、[デフォルト設定を変更](#)します。

関連情報

- [102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)
- [655 ページの「「オプション」ダイアログ・ボックス - 「Essbase」タブ](#)

「Essbase クラスタ情報」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスは、Essbase サーバーのクラスタ情報を表示するために使用します。最初にサーバーを選択すると、そのサーバーのユーザー名とパスワードの入力が求められます。

関連情報

[329 ページの「Essbase クラスタ情報の表示」](#)

セキュリティ権限の移行の例

この項目では、次のことを前提とします:

- 移行対象のユーザー(User1)がターゲット・サーバー上に存在しているものとします。
- 移行対象のアプリケーション(MyApp)が MyDb1、MyDb2、MyDb3 および MyDb4 の 4 つのデータベースを使用しているものとします。
- MyDb1、MyDb2 および MyDb4 がターゲット・サーバー上に存在しているものとします。

移行前の時点で User1 がソース・サーバーおよびターゲット・サーバーで有している権限は次のとおりです:

ソース・サーバーでの権限	ターゲット・サーバーでの権限
MyDb1 に対する読取り	MyDb1 に対する読取り
MyDb2 に対する書込み	MyDb2 に対する計算
MyDb3 に対する読取り	該当なし
MyDb4 に対する書込み	MyDb4 に対する読取り

次のどの移行オプションが選択されているかによって、移行時のターゲット・サーバー上の User1 の権限が変更されます:

- ユーザー/グループの権限を変更しない - 権限は変更されません。MyDb3 データベースはターゲットにコピーされますが、User1 からはアクセスできません。
- ユーザー/グループの権限を減らす - MyDb1 および MyDb4 に対する権限は変更されません。MyDb2 に対する権限は、「計算」から「書込み」に引き下げられます。MyDb3 に対しては、ソースレベルの権限が付与されます。
- ユーザー/グループに権限を追加する - MyDb1 および MyDb2 に対する権限は変更されません。MyDb3 に対しては、ソースレベルの権限が付与されます。MyDb4 に対する権限は「読取り」から「書込み」に引き上げられます。

「計算スクリプトの実行」ダイアログ・ボックス

「計算スクリプトの実行」ダイアログ・ボックスの外観は、ユーザーの実行するスクリプトが(1)ファイル・システムから開かれたか、(2)アプリケーションに関連付けられているがデータベースには関連付けられていないか、または、(3)データベースに関連付けられているかによって異なります。

ファイル・システム(Essbase Server ではなく)に保存されているスクリプトを実行する場合、「計算スクリプトの実行」ダイアログ・ボックスのボックスを使用して、スクリプトを実行する Essbase サーバー・インスタンス、アプリケーションおよびデータベースを選択できます。

選択できるデータベースは 1 つのみです。アクセス権のあるデータベースのみがリストされます。

スクリプト・プロセスとして処理する場合、「バックグラウンドで実行」オプションを選択します。バックグラウンド・プロセス中は、コンソールを終了できますが、Essbase 管理サーバーをシャット・ダウンできません。プロセスのステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで確認できます。

関連情報

[368 ページの「計算スクリプトの実行」](#)

関連コマンド

- execute calculation(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calcdefault(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calcline(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベース計算の実行」ダイアログ・ボックス

「データベース計算の実行」ダイアログ・ボックスは、データベースで実行する計算スクリプトを選択するために使用します。

計算スクリプトの選択元の「計算スクリプト」ボックスには、アクセス権限がある計算スクリプトのみが表示されます。

「状態」テキスト・ボックスには、データベースの計算状態が表示されます:

- 計算の実行中です
- 最後に計算した後で、データの値が変更されました
- 最後に計算した後で、データの値が変更されていません
- データベースにデータがありません

「バックグラウンドで実行」処理オプションを選択した場合、コンソールを終了できませんが、Essbase 管理サーバーは計算が完了するまでシャット・ダウンできません。バックグラウンド・プロセスのステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで参照できます。

関連情報

- [計算中](#)
- [ブロック・ストレージ・データベース](#)
- Essbase データベースの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- execute calculation(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calcdefault(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- calcline(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「レポート・スクリプトの実行」ダイアログ・ボックス

「レポート・スクリプトの実行」ダイアログ・ボックスは、レポート・スクリプトを実行するデータベースの選択に使用します。

ダイアログ・ボックスの外観は、実行するスクリプトが(1)ファイル・システムから開かれているスクリプト、(2)データベースではなくアプリケーションに関連付けられているスクリプト、(3)データベースに関連付けられているスクリプト、のいずれかによって異なります。

実行中のスクリプトが Essbase サーバーではなくファイル・システムに保存されると、次のボックスが表示されます。この場合は、優先するデータベースを指定するアイテムを選択します:

- Essbase サーバー
- アプリケーション
- データベース

ダイアログ・ボックスでは、次のオプションを1つ以上選択できます。ただし、「バックグラウンドで実行」オプションを選択した場合、「コンソール」オプションまたは「出力ファイル」オプションは選択できません。

- バックグラウンドで実行 - プロセスの実行中も作業を続行できます。また、コンソールを終了できますが、Essbase 管理サーバーをシャットダウンすることはできません。プロセスのステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで確認できます。
- コンソール - レポートは、管理サービス・コンソールのレポート・ビューア・ウィンドウに表示されます。
- プリンタ - レポートは、選択したプリンタに送信されます。「バックグラウンドで実行」を選択した場合、レポートは Essbase 管理サーバー・コンピュータのデフォルトのプリンタに送信されます。
- 出力ファイル - レポートは、出力ファイル(.rpt)へ送信されます。「検索」ボタンをクリックして、特定のファイルを参照できます。

関連情報

[390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)

関連コマンド

- export data(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- runrept(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「別名テーブルのエクスポート」ダイアログ・ボックス

「別名テーブルのエクスポート」ダイアログ・ボックスは、データベースから ASCII ソース・ファイルへ別名テーブルをエクスポートするために使用します。これにより、バックアップに使用したり後で他のデータベースにインポートするテーブルのコピーを作成して保管します。

「別名テーブル」ボックスでは、別名テーブルを選択します。「OK」をクリックすると、「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで、エクスポート・ファイル名(.alt 拡張子付き)と、テーブルの保存先の場所(Essbase 構造内またはファイル・システムの任意の場所内)を指定します。

関連情報

- [185 ページの「別名テーブルのエクスポート」](#)
- [186 ページの「別名テーブルのインポート」](#)
- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- unloadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- loadalias(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベースのエクスポート」ダイアログ・ボックス

「データベースのエクスポート」ダイアログ・ボックスは、データをエクスポートするために使用します。

「ファイルにエクスポート」ボックスで、1つまたは複数のファイルを指定します。また、大部分の場合、データのエクスポート先の場所も指定します。情報を入力する際には、次の点に留意してください:

- ファイル名は二重引用符で囲まないでください。
- 複数のデータのエクスポートを並行して行うには、複数のファイルをカンマで区切ったリストを指定します。使用されるスレッド数は、ファイル名の数に応じて変化します。
- デフォルトでは、エクスポート・ファイルには.txt という拡張子が使用されます。デフォルト以外の拡張子を付ける場合は、その拡張子を一重引用符で囲みます。
- デフォルトでは、エクスポート・ファイルは、アプリケーション・ディレクトリ (ARBORPATH\app) に保管されます。ファイルをデフォルト以外の場所に保管するには、その場所への完全なパスを指定します。

データをエクスポートする場合、「エクスポート・オプション」グループで、次のいずれかのオプションを選択します:

- すべてのデータ・ブロック・ストレージ・データベースについて、集計および計算の結果を含むすべてのデータがエクスポートされます。
- レベル 0 のデータ・ブロック - レベル 0 の疎メンバーの組合せが含まれるブロックのデータのみがエクスポートされます。
- 入力レベルのデータ・ブロック - ブロック・ストレージ・データベースについて、前回行われたデータ・ロードまたはスプレッドシートの「ロック」および「送信」によってデータが入力されたブロックのデータのみがエクスポートされます。このため、集計と計算の結果はエクスポートされません。

ブロック・ストレージ・データベースからデータをエクスポートする場合、「列フォーマットでのエクスポート」オプションを選択します。このオプションを選択するかどうかを決定する際は、次を考慮してください:

- 列フォーマットでは各行に各次元のメンバー名が含まれ、名前は行ごとに繰り返されるため、リレーショナル・データベースへのデータ・ロードは効率的に行われます。
- 列構造のため、データは Essbase 以外のアプリケーションでも使用できます。
- 列フォーマット以外のファイルは列フォーマットのファイルより小さいため、列フォーマット以外のファイルのほうがロード時間が短くなります。

「バックグラウンドで実行」オプションを選択できます。バックグラウンド・プロセス中は、コンソールを終了できますが、Essbase 管理サーバーをシャット・ダウン

ンできません。エクスポート処理のステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで確認できます。

注： デフォルトでは、Administration Services は、ローカル・ファイル・システムではなく、選択された Essbase 管理サーバーにデータベースをエクスポートします。

関連情報

[113 ページの「データベースのエクスポート」](#)

関連コマンド

- export data(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- export(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「LRO のエクスポート」ダイアログ・ボックス

「LRO のエクスポート」ダイアログ・ボックスは、データベースのバックアップや消去を行うための準備作業として、リンク・レポート・オブジェクト(LRO)をデータベースからエクスポートするために使用します。

「エクスポート先」オプション・グループで、LRO 情報のエクスポート先となる場所を選択します:

- Essbase サーバー - Essbase サーバーの次のディレクトリにエクスポートします:
(ARBORPATH/app/appname_dbname-exportdir)
- ローカル・ファイル・システム - 指定したファイルシステム・ディレクトリにエクスポートします

「LRO エクスポート・ディレクトリ」ボックスでは、次のいずれかのアクションを実行します:

- 「Essbase サーバー」オプションを選択している場合は、デフォルトのエクスポート・ディレクトリに追加する接尾辞を入力します。

たとえば、Sample Basic のアプリケーションおよびデータベースから LRO をエクスポートする場合、このテキスト・ボックスに lro と入力すると、次のディレクトリがサーバーに作成されます: ARBORPATH/app/sample_basic-lro

- 「ローカル・ファイル・システム」オプションを選択する場合は、ディレクトリのパスを入力するかディレクトリを参照します。ローカル・コンピュータ上のディレクトリの他、ネットワーク上のディレクトリも指定できます。

Essbase は、ディレクトリ構造ではなくエクスポート・ディレクトリを作成します。たとえば、Essbase は c:\temp\exports\to\this\long\path ではなく c:\temp\exports を作成します。Essbase はディレクトリを上書きしません。したがって、作成するディレクトリがすでに存在する場合は、エクスポートは失敗します。エクスポート・ディレクトリの内容の詳細は、[395 ページの「LRO のエクスポート」](#)を参照してください。

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [395 ページの「LRO のエクスポート」](#)
- [396 ページの「LRO のインポート」](#)

関連コマンド

- `export lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `import lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「パーティションのエクスポート」ダイアログ・ボックス

「パーティションのエクスポート」ダイアログ・ボックスは、パーティション定義をファイル・システムまたはネットワークにエクスポートするために使用します:

- 「最初」リストで、パーティション定義のエクスポート先のドライブとフォルダを選択します。
- 「ファイル名」`name` ボックスで、エクスポートするパーティション定義ファイルの名前を入力します。
- 「ファイルのタイプ」ボックスで、`.xml` を選択します。デフォルトでは、エクスポートされるパーティション定義ファイルには `.xml` の拡張子が使用されません。`.xml` の拡張子が付けられたパーティション・ファイルのみをインポートできます。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [439 ページの「パーティション定義のエクスポート」](#)
- [439 ページの「パーティション定義のインポート」](#)

「選択ルールのエクスポート」ダイアログ・ボックス

「選択ルールのエクスポート」ダイアログ・ボックスのタブは、パーティション領域マッピングからメンバー選択ルールをエクスポートするために使用します:

- ファイル・システム - ファイルシステム内でのエクスポート・ファイルの保存場所に移動します。
- 管理サーバー - エクスポート・ファイルを Essbase 管理サーバーに保存します。Essbase 管理サーバー・オブジェクトはエンタープライズ・ビューに表示されません。共有されないエクスポート・ファイルは、`EPM_ORACLE_INSTANCE/eas/storage/selection/EASusername` に保存されます。共有されるエクスポート・ファイルは、`EPM_ORACLE_INSTANCE/eas/storage/public/selection/EASusername` に保存されます。(EPM_ORACLE_INSTANCE は、EPM

System 製品がインストールされているルート・ディレクトリの名前で、EASusername は、選択ルールをエクスポートしたユーザーの名前です。)

他の Administration Services ユーザーがエクスポート・ファイルにアクセスできるようにするには、「共有」オプションを選択します。

関連情報

- [430 ページの「領域マッピングからの選択ルールのエクスポート」](#)
- [430 ページの「パーティションの領域マッピングの選択ルールのインポート」](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)

ユーザーの外部化ウィザード

ユーザーの外部化ウィザードは、ユーザーを外部化して Shared Services に移行します。

注： Administration Services ユーザーに対してこのウィザードを実行するには、実行ユーザーが、管理者権限を持っていること、および外部化されて Shared Services に移行されていることが必要です。Essbase ユーザーに対してこのウィザードを実行するには、実行ユーザーがネイティブの管理者(旧スーパーバイザ)権限を持っている必要があります。

このウィザードは、現在ネイティブ Essbase セキュリティを通じて認証されているユーザー、および現在のリリースの前は外部的に認証されていたユーザーを検出します。次に、検出したユーザーを、1)Shared Services を通じた認証用に構成されたプロバイダに含まれている外部ユーザーおよび2)ネイティブ Shared Services ディレクトリに含まれているユーザーと照合します。

一致が見つからなかった場合は、そのユーザーをネイティブ Shared Services ユーザーとして作成するか、そのユーザーを削除できます。一致が見つかった場合は、そのユーザーのセキュリティ情報が Shared Services に移行されます。このウィザードは、外部化されていないすべてのネイティブ・ユーザーの外部化を試行します。したがって、繰り返し実行が可能です。

注： 移行を実行する際には、すべての外部認証プロバイダが実行されている必要があります。

Essbase の Shared Services への移行に関する情報とヒントについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

次の項では、ウィザードの起動および使用方法について説明しています：

- [608 ページの「ユーザーの外部化ウィザードの起動」](#)
- [608 ページの「ユーザーの外部化ウィザード・ページ」](#)

関連情報

- [263 ページの「Shared Services へのユーザーの移行」](#)
- [259 ページの「Shared Services のユーザー管理について」](#)

ユーザーの外部化ウィザードの起動

▶ ユーザーの外部化ウィザードを起動するには:

- 1 ネイティブ・ユーザーを外部化する「Essbase 管理サーバー」インスタンスまたは「Essbase サーバー」インスタンスの横のノードを選択します。
- 2 次のいずれかのアクションを行います:
 - Essbase 管理サーバーの場合、「Essbase 管理サーバー」ノードを選択して右クリックし、「ユーザーの外部化」を選択します。
 - Essbase サーバーの場合は、「セキュリティ」ノードを選択して右クリックし、「ユーザーの外部化」を選択します。

ユーザーの外部化ウィザード・ページ

ウィザード・ページに関する情報を表示するには、次のリンクをクリックします:

- [外部化するオブジェクトの選択](#)
- [Shared Services プロパティの指定](#)
- [パスワード情報の指定](#)
- [外部ディレクトリへのユーザーのマッピング](#)
- [外部ディレクトリへのグループのマッピング](#)
- [ユーザー/グループの外部化](#)

外部化するオブジェクトの選択ページ

このページでは、外部化する「ユーザー」または「グループ」(あるいはその両方)、Shared Services に外部化されていないユーザーまたはグループをそれぞれ選択します。

注: ウィザードを Essbase 管理サーバーから起動した場合、「グループ」オプションは選択できません。

Shared Services プロパティの指定ページ

このページのテキスト・ボックスには、選択したオブジェクトを外部化する Shared Services サーバーの名前とポート番号が表示されます。オブジェクトを外部化するサーバーは、Shared Services 外部認証構成ファイルに指定されています。情報はこのファイルから取得されますが、編集はできません。

パスワード情報の指定ページ

このページは、ネイティブの Shared Services ユーザーとして作成したユーザーにパスワードを作成する方法を指定する際に使用します。パスワードは、ユーザーが移行されると作成されます。

注： グループのみを移行する場合、パスワード設定は表示されません。

パスワードが自動生成されるようにするには、「自動生成」オプションを選択します。このオプションを選択するかどうかを決定する際は、次を考慮してください：

- 自動生成されたパスワードは、テキスト・ファイルに記録されます。
- パスワード・ファイルとその拡張子.txt を指定する必要があります。
- パスワード・ファイルとログ・ファイルに同じ名前は使用できません。
- ファイル名を指定し、ファイル・パスを指定しなかった場合、ファイルは EPM_ORACLE_HOME\products\Essbase\eam\console\bin ディレクトリに作成されます。
- パスワード・ファイルは、MaxL ステートメント `display user` を実行して復元できます。
- パスワードは既存のファイルの末尾に追加できます。

ネイティブ・ユーザー名をパスワードとして使用するには、「ネイティブ・ユーザー名をパスワードとして使用する」オプションを選択します。移行中、ユーザー名は小文字のパスワードに変換されるため、Shared Services でのパスワードは小文字になります。たとえば、"Mark"というネイティブ・ユーザーのパスワードは"mark"になります。

すべてのユーザーで同じパスワードを使用するには、「パスワード」オプションを選択し、全ユーザー用として1つのパスワードを指定し、確認入力します。

「ロギングの詳細」領域で、外部化プロセスの詳細を記録するテキスト・ファイルを指定または参照します。ファイル拡張子として.log を指定する必要があります。既存のファイルを選択した場合は、新しいエントリは既存のエントリの末尾に追加されます。すべての情報およびエラー・メッセージは指定したファイルに書き込まれます。ログ・ファイルとパスワード・ファイルに同じ名前は使用できません。ログ情報は、[Essbase ログ・ファイル](#)にも書き込まれます。

外部プロバイダへのユーザーのマッピング・ページ

プロバイダ・ページを表示する前に、このウィザードでは Shared Services が外部認証用に構成されたときに指定された認証プロバイダを対象として、一致するユーザーを検索します。複数のプロバイダが指定されている場合、プロバイダは外部認証構成ファイルにリストされている順に検索されます。

プロバイダ・ページには、検索結果がテーブル形式で表示されます。このテーブルの列は次のとおりです：

- 列の1つでは、以前のリリースでネイティブ認証または外部認証されたユーザーを含めて、Essbase 管理サーバーまたは Essbase サーバーのネイティブ・ユーザーがネイティブ・ユーザー ID によって識別します。

- その他の列には、指定した認証プロバイダで検出された一致ユーザーに関する情報(「外部ユーザー ID」、「姓」、「名」および「外部プロバイダ」)が表示されます。

注： このテーブルに表示されるのは最初の一致のみです。他の一致を検索するには、ユーザーを選択して「検索」ボタンをクリックし、検索条件を指定します。

- 「アクション」列には、各ユーザーに適用される移行アクション(「作成」、「移行」または「移行しない」)が表示されます

ネイティブの Shared Services ユーザーを作成する「作成」オプションは、一致が検出されなかったユーザーに対してのみ使用できます。「移行」オプションは、一致が検出されたユーザーに対してのみ使用できます。いずれの場合も、ユーザー(新規または既存)は、ローカル・セキュリティ・ファイルで移行済とタグ付けされ、Shared Services 内で、ネイティブ・セキュリティ・ユーザーに付与されたアクセス権と役割でプロビジョニングされます。

注： 「アクション」列では、移行オプションをユーザーにつき 1 つ選択できます。

移行アクションを複数のユーザーに同時に適用するには、ユーザーを選択し、「アクション」リストで移行オプション(「作成」、「移行」または「移行しない」)を選択します。

このページのボタンは次のとおりです：

- 適用 - 移行の選択が適用され、「アクション」列が更新されます
- 検索 - 「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックスが開き、選択したユーザーの他の一致を検します

外部プロバイダへのグループのマッピング・ページ

このページを表示する前に、ウィザードでは、Shared Services が外部認証用に構成されたときに指定された認証プロバイダを対象に、一致するグループを検索します。複数のプロバイダが指定されている場合、プロバイダは外部認証構成ファイルにリストされている順に検索されます。

注： ウィザードを Essbase 管理サーバーから起動した場合、このページは表示されず、このトピックは該当しません。

プロバイダ・ページには、検索結果がテーブル形式で表示されます。このテーブルの列は次のとおりです：

- 列の 1 つでは、以前のリリースでネイティブ認証または外部認証されたグループを含めて、ネイティブ Essbase サーバー・グループがネイティブ・グループ ID により識別されます。

- その他の列には、指定した認証プロバイダで見つかった一致グループに関する情報(「外部グループ ID」、「姓」、「名」および「外部プロバイダ」)が表示されます。

注： このテーブルに表示されるのは最初の一致のみです。他の一致を検索するには、グループを選択して「検索」ボタンをクリックし、検索条件を指定します。

- 「アクション」列には、各グループに適用される移行アクション(「作成」、「移行」または「移行しない」)が表示されます

ネイティブの Shared Services グループを作成する「作成」オプションは、一致が見つからなかったグループに対してのみ使用できます。「移行」オプションは、一致が見つかったグループに対してのみ使用できます。いずれの場合も、グループ(新規または既存)は、ローカル・セキュリティ・ファイルで移行済とタグ付けされ、Shared Services 内で、ネイティブ・セキュリティ・グループに付与されたアクセス権と役割でプロビジョニングされます。

注： 「アクション」列では、移行オプションをグループにつき 1 つ選択できます。

移行アクションを複数のグループに同時に適用するには、グループを選択し、「アクション」リストで移行オプション(「作成」、「移行」または「移行しない」)を選択します。

このページのボタンは次のとおりです:

- 適用 - 移行の選択が適用され、「アクション」列が更新されます
- 検索 - 「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックスが開き、選択したグループの他の一致を検索します

ユーザー/グループの外部化ページ

外部化プロセスを開始するには、「ユーザー」オプションまたは「グループ」オプション(あるいは「ユーザー」と「グループ」オプションの両方)を選択し、「開始」ボタンをクリックします。

注： ウィザードを Essbase 管理サーバーから起動した場合、「グループ」オプションは選択できません。

このページでは、次の追加アクションを実行できます。

- 「ステータス」ボックスで、プロセスの進捗を確認します。
- 「停止」ボタンをクリックして、プロセスを停止します。プロセスの停止前に外部化されたユーザーとグループはログ・ファイルに記録されています。
- 「終了」ボタンをクリックして、ウィザードを閉じます。

「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス

「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスのタブは、フィールド値を操作するために使用します:

- **グローバル・プロパティ** - データ・ロードおよび次元構築時に、選択したフィールドのコンテンツを変更するために使用します。たとえば、大文字/小文字の変更、接頭辞や接尾辞の追加、スペースの削除、スペースからアンダースコアへの変換、値の置換などを指定します
- **データ・ロード・プロパティ** - データ・ロード時に、選択したフィールド内の名前をアウトライン内の名前にマッピングするために使用します
- **次元構築プロパティ** - 次元構築時に、選択したフィールドのタイプ、番号および次元を設定するために使用します

「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックスでは、次の列に移動するには [Alt] キーを押しながら [N] キーを押します。また、前の列に移動するには [Alt] キーを押しながら [P] キーを押します。

- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [223 ページの「フィールド・タイプの設定\(次元の構築\)」](#)
- [240 ページの「フィールド名のマッピング」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「データ・ロード・プロパティ」タブ

「データ・ロード・プロパティ」タブに指定する情報は、データ・ロード時にデータソースのフィールドを直接 Essbase データベースのメンバーまたはメンバーの組合せにマップするために使用されます。

注: データ・ロード・ルールを SQL データ・ソースに適用する場合、フィールド名はデフォルトで表のフィールド名になります。このため、SQL データベース名と Essbase データベース名は一致しません。この場合、Essbase 名を使用してマップできます。

一意のメンバー名のみを含むアウトラインに対して、「デフォルト」オプションを選択します。次に、「フィールド名」ボックスで、メンバー名またはメンバーの組合せ(カンマ区切り)を入力するか、「次元」ノードで、次元またはメンバーをダブルクリックします。現在のフィールドが指定されたメンバー、メンバーの組合せまたは次元にマップされます。

重複するメンバー名を含むアウトラインの場合は、「リファレンス・メソッドを使用」オプションを選択し、次の情報を入力します:

- タイプ - 「世代」または「レベル」をダブルクリックします。
- リファレンス番号 - 世代番号またはレベル番号を入力します。デフォルトは前のフィールドの世代番号またはレベル番号です。
- リファレンス次元 - 次元名を入力するか、「次元」ノードで次元またはメンバーをダブルクリックします。

注：「次元」ノードに移入されていない場合は、「アウトライン」ボタンをクリックし、ルール・ファイルをアウトラインと関連付けます。

次のオプションを1つ以上選択します。これらはすべて現在のフィールドに適用されます：

- 「データ」フィールド - データ・ソースに各次元のフィールドと1つのデータ列がある場合に、このオプションを選択します。
- 「日付」フィールド - このオプションを選択した後で、日付フォーマットを選択できます。
- 「無視」フィールド - フィールドをアウトラインにロードしない場合にこのオプションを選択します。
- スケール - フィールド値を乗算(乗数は指定)する場合にこのオプションを選択します。たとえば、「Sales」データ・ソースで値を100のオーダーで追跡し、データがロードされる Essbase データベースで実質的な値を追跡するとします。この場合、データ・ソースの値(54.6 など)を100で乗算する必要があります(Essbase データベースに「\$5460」などをロードして表示するため)。

関連情報

- [240 ページの「フィールド名のマッピング」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [612 ページの「「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス」](#)

「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「次元構築プロパティ」タブ

「次元構築プロパティ」タブを使用して、選択したフィールドのフィールド・タイプ、フィールド番号および次元を設定します。

データ・ソースのフィールドはメンバーを記述する列の一部です。各フィールドには、メンバー名、メンバーのプロパティおよび属性の関連付けについての情報を含めることができます。Essbase でフィールド情報を処理できるようにするには、ルール・ファイルにフィールド・タイプを指定します。

「次元構築プロパティ」タブの「次元」ノードには、ルール・ファイルの次元(作成する次元)とアウトラインの次元の名前がリストされます。次元をダブルクリックすることで、その次元を、選択したフィールドのメンバーを追加する次元として設定します。

注：「次元」ノードが空の場合は、「アウトライン」ボタンをクリックして、ルール・ファイルにアウトラインを関連付けます。

「タイプ」リストで、フィールド・タイプをダブルクリックして選択します。選択するタイプを決定する際、次のことに留意してください：

- 「重複する世代」および「重複するレベル」を選択できるのは、それぞれ前のフィールドが「世代」、「レベル」フィールドの場合にかぎります。
- 「重複する世代の別名」および「重複するレベルの別名」を選択できるのは、それぞれ前のフィールドが「重複する世代」、「重複するレベル」フィールドの場合にかぎります。
- リストの下部の「属性次元」グループには、属性次元名がリストされます(ルール・ファイルがアウトラインと関連付けられていることが前提です)。ブール、文字列、日付および数値の属性次元に対しては、次元タイプが識別されます。数値の属性次元を選択した場合は、範囲情報を入力できます。

注：「解決順」タイプは、集約ストレージ・データベースに対してのみ使用可能です。

「タイプ」リストで数値の属性次元を選択した場合は、範囲を設定できます：

1. 「属性メンバーを範囲内に配置」を選択します。
2. 「範囲サイズ」と「開始値」に、正数または正の小数を入力します:たとえば、範囲サイズが10で開始値が15の場合、Essbaseはメンバー15-, 5-, 5、15、25などを構築します。また、たとえば、範囲サイズが10で開始値が0の場合、Essbaseはメンバー10-, 0、10などを構築します(このように、0を開始値として設定することで、0を含む範囲を定義します。)
3. 次元のメンバーを削除、再構築および再関連付けするように次元構築を設定します。

注：次元構築の際、基本メンバーと属性メンバーの関連付けはすべて失われます。構築で関連付けを再作成できるようにするには、属性次元のメンバーに関連付けるすべての基本次元のメンバーをソース・データに含める必要があります。

デフォルトでは、「数値」ボックスには前のフィールドの世代番号またはレベル番号が表示されます。別の番号の入力を検討する際は、次のことに留意してください：

- フィールド・タイプが親か子の場合は、番号は0である必要があります。
- 別名、プロパティ、通貨カテゴリ、通貨名、「式」フィールドまたは属性の関連付けを作成する場合は、関連付けられたメンバーの世代またはレベルを番号で指定する必要があります。

次の任意のオプションを選択できます：

- 次元構築時にフィールドを無視

- フィールドが空の場合に削除 - このオプションを選択すると、Essbase ではフィールドを NULL または空とみなし、関連付けられた情報をアウトラインから削除するか、その情報をデフォルト値にリセットします。このオプションはメンバーのプロパティ、式、UDA および属性の関連付けに適用されます (ただし、当該の次元に対して、必要な次元オプションが「次元構築の設定」ダイアログ・ボックスで選択されていることが前提です)。

関連情報

- [223 ページの「フィールド・タイプの設定\(次元の構築\)」](#)
- 属性次元の構築と属性の関連付け (『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [612 ページの「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス - 「グローバル・プロパティ」タブ

「グローバル・プロパティ」タブを使用して、データ・ロードまたは次元構築の際、選択したフィールドの値を変更できます。

設定したフィールドの値を変更するには、次のアクションの1つまたは複数を実行します:

- フィールド値の元の大文字/小文字を保持するかあるいは大文字または小文字に変換するかを設定するには、「大文字/小文字」を選択します。
- 「接頭辞」ボックスで、各フィールド値の前に付けるテキスト文字列を入力します。
- 「接尾辞」ボックスで、各フィールド値の後に付けるテキスト文字列を入力します。
- 「先頭/末尾のスペースを削除」オプションを選択します。先頭または末尾にスペースを含むフィールドは、メンバー名にマップできません。このオプションはデフォルトで選択されています。
- 「スペースをアンダースコアに変換」オプションを選択します。
- 「置換」列に置換元のテキスト文字列を入力し、「置換後の文字列」列に、「置換」列の文字列から置き換えるテキスト文字列を入力します。テキスト文字列を、単語全体がヒットしたときにのみ置換する場合は、「完全に一致する単語を検索」オプションを選択します。「置換」列のテキスト文字列に一致するすべてのテキスト文字列を置換する場合は、「すべて置換」オプションを選択します。デフォルトでは、Essbase は初出の文字列のみを置換します。

検索操作は、「新規」ボタンをクリックするか[Enter]キーを押して定義します。選択した検索操作を削除するには、「削除」をクリックします。

関連情報

- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)

- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)
- [612 ページの「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス](#)

「ファイルのエンコード方式」ダイアログ・ボックス

管理サービス・コンソールに「ファイルのエンコーディング」ダイアログ・ボックスが表示されるのは、クライアント上の場所に保存するファイルや、クライアント上の場所から読み取るファイルに、エンコード方式のインディケータが含まれないときです。

Unicode モードでないアプリケーションで使用するファイルや、リリース 7.0 よりも前のバージョンの Essbase サーバーで使用するファイルの場合は、「OK」をクリックすると、エンコード方式のインディケータがファイルに追加されます。つまり、この場合は、「OK」をクリックするのみです。

エンコード方式が Unicode ではないテキスト・ファイルの場合、エンコード方式のインディケータはロケール・ヘッダー・レコード内にあります。

Unicode モードのアプリケーションで使用するファイルの場合、次のいずれかのアクションを実行し、エンコード方式を定義します:

- UTF-8 オプションを選択します。ファイルのエンコード方式が UTF-8 でないときは、このオプションは表示されません。
- テキストのエンコード方式のリストから、Unicode 以外のテキスト・エンコード方式を選択します。選択は慎重に行ってください;間違ったエンコード方式を選択すると、データが壊れる可能性があります。

関連情報

- [124 ページの「ファイルのエンコード方式とロケールについて」](#)
- [95 ページの「アプリケーションの作成」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)
- [MaxL スクリプトの作成](#)
- [ルール・ファイルの作成](#)
- Unicode モード・アプリケーションの管理(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

非 Unicode モード・アプリケーションでは、正しいロケールがすでに選択されているので、変更を加えずに「OK」をクリックします。

フィルタ・エディタ・ウィンドウ

フィルタ・エディタ・ウィンドウは、セキュリティ・フィルタを作成または編集するために使用します。フィルタを作成した後、ユーザーまたはグループへの[フィルタの割当て](#)を行います。

フィルタ・エディタ・ウィンドウの「フィルタ定義」タブには、次のフィールドがあります:

- フィルタ名 - 新しいフィルタの場合、名前(文字、数字およびスペース;長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)。既存のフィルタの名前が表示された場合、このフィールドは読取り専用です。
- アクセス - 現在のメンバー指定にアクセス・レベルを適用します:
 - なし: データは取得も更新もできません。
 - 読取り: データは取得は可能ですが、更新はできません。
 - 書込み: データは取得および更新が可能です。
 - メタ読取り: メタデータ(次元名およびメンバー名)の取得および更新が可能です。

注: 「メタ読取り」アクセス・レベルの場合、他のすべてのアクセス・レベルが上書きされます。追加のデータ・フィルタがある場合は、既存のメタ読取りフィルタ内で強制的に適用されます。メンバーの組合せへのフィルタリング(AND 関係を使用)は、メタ読取りには適用されません。メタ読取りでは、各メンバーを個別にフィルタします(OR 関係を使用)。

- メンバー指定 - 次のガイドラインを使用して、「アクセス」列で選択したレベルを適用する次元またはメンバーを指定します:
 - 次元名またはメンバー名、別名、メンバーの組合せ、Essbase 関数で定義されたメンバー・セット、または先頭にアンパサンド(&)を付けた形の代替変数名を指定します
 - 複数のエントリはカンマで区切ります。
 - メンバーを手動で入力するか、アウトライン・ツリーまたは関数ツリーからメンバーまたは関数を選択します。アウトライン・ツリーから選択した名前は、自動的に二重引用符で囲まれます("名前")。手動で入力する名前も二重引用符で囲むことをお勧めします。

フィルタ・エディタ・ウィンドウでは、次のツリーから選択できます:

- フィルタが関連付けられているデータベース・アウトライン。このアウトラインには、メンバー名または別名を表示できます。別名を持つメンバーの別名を表示するには、「別名の使用」オプションを選択し、「別名テーブル」ボックスで別名テーブルを選択します。
- 次元およびメンバーを定義する Essbase メンバー・セット関数。関数は、カテゴリ別またはアルファベット順に表示できます。関数に引数テンプレートを挿入するには、「引数の挿入」オプションを選択します。

フィルタ・エディタ・ウィンドウには、次のボタンがあります:

- 確認 - 名前および関数構文を検証します。結果は「メッセージ」ペインに表示されます。
- 削除 - 「フィルタ」領域から行を削除します

- 保存-フィルタ情報は Essbase セキュリティ・ファイル(essbase.sec)に保管されます。

関連情報

[307 ページの「フィルタの管理」](#)

関連コマンド

alter filter(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

フィルタ・ウィンドウ

フィルタ・ウィンドウは、データベースのセキュリティ・フィルタを管理するために使用します。

このウィンドウの行には、状況依存メニューが用意されています(1 つまたは複数の行を選択して右クリックします)。

このウィンドウ内の列には、次の情報が表示されます:

- フィルタ名
- アプリケーション-フィルタが関連付けられているデータベースを使用するアプリケーションの名前
- データベース-フィルタが関連付けられているデータベースの名前

フィルタを作成したり、選択したフィルタを編集、コピーまたは削除するには、関連するボタンをクリックします。Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードに設定されている場合は、「割当て」ボタンが使用できるため、ユーザーまたはグループに選択したフィルタを割り当てることもできます。

関連情報

- [307 ページの「フィルタの管理」](#)
- [616 ページの「フィルタ・エディタ・ウィンドウ」](#)

「検索」ダイアログ・ボックス

「検索」ダイアログ・ボックスは、計算スクリプト・エディタ、式エディタ、MaxL スクリプト・エディタ、レポート・スクリプト・エディタおよびレポート・ビューア内のテキストを検索するために使用します:

- 「検索」テキスト・ボックスで、検索するテキストの入力、貼付けまたは選択を行います。
- 大文字と小文字を区別して検索するには、「大文字/小文字の一致」オプションを選択します。

関連情報

- [678 ページの「置換」ダイアログ・ボックス」](#)

- [153 ページの「エディタでのテキストの検索」](#)

「外部グループの検索」ダイアログ・ボックス

「外部グループの検索」ダイアログ・ボックスは、外部認証プロバイダのグループを検索するために使用します。

「グループ名」ボックスで、検索文字列を入力します。この文字列は、先頭が文字である必要があります。ワイルドカード文字は1つ使用できます。たとえば、"H*"と入力します。

「検索」をクリックすると、検索文字列の最初のインスタンスが検索されます。「検索」を再度クリックすると、2番目のインスタンスが検索されます。

関連情報

[607 ページの「ユーザーの外部化ウィザード」](#)

「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックス

「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックスでは、外部認証プロバイダのユーザーを検索します。

任意の認証プロバイダについて、ユーザー名によるオプションを使用できます。入力する名前は、英字で始まる必要がある他、ワイルドカード文字を1つ含むことができます。

LDAP と MSAD では、「名前別」または「電子メールによる」オプションを使用できます。どちらのオプションも、完全一致を必要とし、ワイルドカード文字を受け付けません。

「検索」ボタンをクリックして、検索するアイテムの最初の値を検索した後、その他の値を検索します。

関連情報

- [管理サーバーでのユーザーの作成](#)
- [607 ページの「ユーザーの外部化ウィザード」](#)
- [282 ページの「外部認証の管理」](#)

「メンバーの検索」ダイアログ・ボックス

アウトライン・エディタ、アウトライン・ビューア、計算スクリプト・エディタ、式エディタ、レポート・エディタおよびフィルタ・エディタでは、「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスを使用して、指定した文字列に関連するアイテムを検索できます。検索結果は「[検索結果](#)」タブに表示されます。

「検索」ボックスで、検索対象の文字列を入力します(または貼り付けます)。テキストを入力する際には、次のことに留意してください:

- アウトライン・ビューア、計算スクリプト・エディタ、式エディタ、レポート・エディタおよびフィルタ・エディタでは、完全に一致する単語(検索文字列の前後に空白あり)としての検索文字列のインスタンスのみが戻されます。検索文字列を含むすべてのインスタンスを検索するには、*および?のワイルドカードを使用します。
- アウトライン・エディタでは、検索文字列を含むすべてのインスタンスが戻されます。完全に一致する単語としての文字列を検索する場合は、「一致する単語のみ」オプションを選択します。アウトライン・エディタではワイルドカードは使用できません。
- [重複するメンバー名のアウトライン](#)でメンバーを検索するときには、修飾メンバー名を入力する必要はありません。この場合、検索文字列に一致するすべてのメンバーが検索されます。
- [重複するメンバー名のアウトライン](#)でメンバーを検索する際には、注意が必要です。別名になっていないメンバー名に一致する別名検索が、サポートされていないためです。その場合、不適切な結果が表示され、名前が不明であるというメッセージが戻されます。

テキスト入力後、「一致するテキストの検索場所」オプションを選択し、検索する情報のタイプを指定します:

- メンバー名
- 式 - アウトライン・エディタでのみ使用可能
- UDA - アウトライン・エディタでのみ使用可能

次のオプションから 1 つ以上を選択して、検索を制御できます:

- 一致する単語のみ - アウトライン・エディタでのみ使用可能。このオプションを選択すると、たとえば Sample Basic では、検索文字列「100」により「100」というメンバーのみが戻されます。このオプションの選択を解除した場合は、検索文字列「100」により、100、100-10、100-20、100-20(共有メンバー)および Large_210000000 など、「100」を含むすべてのメンバーが戻されます。
- 大文字/小文字の一致 - このオプションを選択すると、検索文字列の大文字/小文字との一致のみに検索を制限できます。
- 次元の選択 - リストから、選択した次元内でのみ検索する次元を選択します。
- 別名テーブルの選択 - リストから、指定した別名テーブルかすべての別名テーブルを選択します。デフォルトでは、別名テーブルは選択されません。

関連情報

- [153 ページの「アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換」](#)
- [195 ページの「エディタでのメンバーの検索」](#)
- [363 ページの「スクリプトでの次元名およびメンバー名の挿入」](#)
- [621 ページの「「結果の検索」タブ」](#)

「結果の検索」タブ

「メンバーの検索」ボタンをクリックすると、「結果の検索」タブが表示されます。このタブには、メンバーの検索要求と一致するメンバーが表示されます。

アウトライン・ツリー内でメンバーの場所を特定するには、そのメンバーを右クリック、またはダブルクリックします。

(アウトライン・エディタ内で)メンバーを編集するには、そのメンバーを右クリックし、次のいずれかのアクションを実行します:

- アウトライン・ツリー内でフォーカスをメンバーに移動
- 「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスにアクセスし、メンバーを表示または編集
- メンバーの切取り、またはコピー
メンバーを子または兄弟として貼り付けるかどうかを選択できます。
- メンバーの削除

次の検索操作を実行できます:

- 結果リストを消去
- 他の検索操作を実行

「=」タブは、アクセス元のウィンドウまたはダイアログ・ボックスが閉じられるまで開いたままになります。

関連情報

- [153 ページの「アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索と置換」](#)
- [619 ページの「「メンバーの検索」ダイアログ・ボックス」](#)

「式」ダイアログ・ボックス

「式」ダイアログ・ボックスの「式」ペインには、選択したメンバー式のテキストが表示されます。このダイアログ・ボックスは(アウトラインではなく)式のみをロードするため、式は比較的すばやく表示されます。式がペインのサイズを超えると、スクロール・バーが表示されます。

「式」ダイアログ・ボックスは、アウトライン・ビューアの一部です。アウトライン・ビューアの詳細は、[147 ページの「式の表示」](#)に関する章を参照してください。

関連情報

- [147 ページの「式の表示」](#)
- [146 ページの「次元およびメンバーのプロパティの表示」](#)

「通貨アウトラインの生成」ダイアログ・ボックス

「通貨アウトラインの生成」ダイアログ・ボックスは、アウトラインを生成する通貨データベースを選択または作成するために使用します。

Essbase サーバー・インスタンスおよびアプリケーションを選択し、既存の通貨データベースを選択するか新しい通貨データベースの名前を入力します。

関連情報

- [452 ページの「通貨データベース・アウトラインの生成」](#)
- [449 ページの「Essbase 通貨換算について」](#)
- [450 ページの「通貨の換算」](#)

「グローバル・マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックス

「グローバル・マッピング・メンバーの選択」を使用して、グローバル・メンバー・マッピングを定義できます。

拡張領域固有メンバーのマッピングの詳細は、[429 ページの「パーティションでの領域固有のメンバー・マッピングの定義\(オプション\)」](#)を参照してください

「グローバル・マッピング・メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが「領域」タブの「ソース」と「ターゲット」列のどちらから起動されたかに応じて、ダイアログ・ボックスの「次元」タブには、ソースまたはターゲットのデータベースの次元およびメンバーのツリー・ビューが表示されます。メンバーを選択して、「マッピング」タブの「ソース」または「ターゲット」列に挿入します。

注： 重複メンバー名のアウトラインで作業して[重複メンバー名](#)を挿入する場合は、修飾メンバー名が「ソース」または「ターゲット」列に挿入されます。

次元ツリーは次の方法で変更できます：

- メンバーを名前に表示および選択する場合、「表示方法」グループで、「メンバー名別」オプションを選択します。
- ブロック・ストレージ・データベースで作業する場合に、DTS メンバーを表示および選択するときは、「表示方法」グループで「動的時系列別」オプションを選択します。
- 「メンバー名別」オプションを選択済で別名を使用する場合は、「別名の使用」オプションを選択して現在の別名テーブル内の別名を表示します。別名がないメンバーについては、メンバー名が表示されます。

注： メンバーを選択しようとしているため、「世代名別」と「レベル名別」は適用されません。

次元ツリーの検索に使用する「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスを表示するには、「メンバーの検索」ボタンをクリックします。ツリーで選択したメンバーの情報を表示する「メンバー情報」ダイアログ・ボックスを表示するには、「メンバー情報」ボタンをクリックします。

「結果の検索」タブに、「メンバーの検索」要求に一致したメンバーがリストされます。621 ページの「結果の検索」タブを参照してください。

関連情報

- 421 ページの「パーティションについて」
- 431 ページの「パーティションでのグローバル・マッピングの定義」
- 536 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」タブ」

グループ・ウィンドウ

注： このウィンドウは、Essbase サーバーが **EPM System** セキュリティ・モードの場合、読取り専用です。

グループ・ウィンドウは、ウィンドウのタイトル・バーに示されている Essbase サーバー上の Essbase サーバー・ユーザー・グループを管理するために使用します。1つのグループを管理することも、あるいは複数のグループを同時に管理することもできます。

1つまたは複数の行を選択して右クリックすると、状況依存ショートカット・メニューが表示されます。

グループについての情報を一覧表示する列:

- グループ名
- グループのタイプ - 次のグループ・タイプを表示します:
 - 管理者 - Essbase サーバー上のすべてのユーザー、グループおよびデータに対するフル・アクセス権限を持ちます。
 - ユーザー - 作成/削除権限、グループ・メンバーシップ、アプリケーションまたはデータベース権限、またはフィルタによって権限が付与されないかぎり、一切のアクセス権限を持ちません。
- 権限の作成/削除 - このグループのユーザーに対して次のいずれかの権限を表示します:
 - ユーザー/グループ - 同等かそれ以下の権限を持つ他のユーザーおよびグループを作成/削除できます。
 - アプリケーション - アプリケーションの作成/削除を行ったり、そのアプリケーション内のデータベースに対するアクセスを制御できます。
 - ユーザー/グループ/アプリケーション - 他の2つのオプションにリストされたすべての権限を持ちます。

このウィンドウには様々なボタンがあり、それらを使用してグループを**作成**、**編集**、**コピー**または**削除**できます。

関連情報

- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の、Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章、および EPM System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

「LRO のインポート」ダイアログ・ボックス

「LRO のインポート」ダイアログ・ボックスは、以前に**エクスポート**したリンク・レポート・オブジェクト(LRO)をインポートするために使用します。

LRO は、次のいずれかのアクションを実行して、ファイル・システムのディレクトリまたは Essbase サーバーの**エクスポート・ディレクトリ**からインポートできます:

- 「ローカル・ファイル・システムのディレクトリ」を選択し、目的のディレクトリのパスを入力するか、目的のディレクトリを参照します。
- 「Essbase サーバーのディレクトリ」オプションを選択し、目的のディレクトリを選択して「インポート後にサーバーの LRO ディレクトリを削除します。」オプションを選択します。Essbase サーバーによってエクスポート・ディレクトリが検出されない場合は、「Essbase サーバーのディレクトリ」オプションは使用できません。

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [396 ページの「LRO のインポート」](#)
- [395 ページの「LRO のエクスポート」](#)

関連コマンド

- `export lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `import lro(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「メンバー・マッピングのインポート」ダイアログ・ボックス

「メンバー・マッピングのインポート」ダイアログ・ボックスを使用して、外部テキスト・ファイルからメンバー・マッピングをインポートできます。

「マッピング・ファイル」ボックスで、マッピング・ファイルのパスおよびファイル名を入力するか、マッピング・ファイルを参照して選択します。

「フォーマット設定」グループで、ラベルを欠落したメンバー(たとえば、データ・ターゲットにないデータソース・メンバー)に割り当てるには、「非メンバー」ボックスを選択し、ラベルを指定します。デフォルトでは、非メンバーにはボイドのラベルが付けられます。

「フォーマット設定」グループで、次のいずれかのオプションを選択します:

- ソース列が最初 - テキスト・ファイルの最初の列にソース・メンバー名が含まれている場合
- ターゲット列が最初 - テキスト・ファイルの最初の列にターゲット・メンバー名が含まれている場合

関連情報

- [432 ページの「パーティションのメンバー・マッピングのインポート」](#)
- [431 ページの「パーティションでのグローバル・マッピングの定義」](#)

「パーティション・ファイルのインポート」ダイアログ・ボックス

「パーティション・ファイルのインポート」ダイアログ・ボックスを使用して、以前に[エクスポート](#)されたパーティション定義をインポートできます。

次のボックスで、インポートするパーティション定義ファイルについての情報を入力します:

- 検索 - ドライブおよびフォルダ
- ファイル名 - パスおよびファイル名(ファイル・システム・ウィンドウでファイルを選択した場合は、ボックスに自動的に移入されます。)
- ファイルのタイプ - デフォルトでは、.xml ファイル・タイプが選択されます。.xml 拡張子を付けてエクスポートしたパーティション定義ファイルのみをインポートできます。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [439 ページの「パーティション定義のインポート」](#)
- [439 ページの「パーティション定義のエクスポート」](#)

「選択ルールのインポート」ダイアログ・ボックス

「選択ルールのインポート」ダイアログ・ボックスのタブは、旧リリースの Administration Services またはアプリケーション・マネージャから以前にエクスポートされたメンバー選択ルールをインポートするために使用します。

- ファイル・システム - 選択ルールファイルに移動するか、「ファイルのタイプ」リストで.txt または.se1 ファイルを参照します。

- Essbase サーバー - Essbase サーバーのコンピュータ上のアプリケーション-データベースのディレクトリ構造内を移動します:
 - 検索 - Essbase サーバーを選択します。

選択した Essbase サーバー上にあるアプリケーションがリスト・ボックスに表示されます。インポートするファイルが含まれているアプリケーションまたはデータベース、あるいはその両方を選択します。次に、ファイル自体を選択します。
 - ファイル名 - 選択されたファイルを表示します。
 - ファイルのタイプ: ファイルのタイプ(.sel)が表示されます。インポートするファイルにはこの拡張子が付けられている必要があります。
- 管理サーバー - Essbase 管理サーバーにエクスポートされた選択ルールをインポートします。選択ルールは次のとおりです:
 - オブジェクト - Essbase 管理サーバーにエクスポートされた選択ルール・ファイルが表示されます。
 - ユーザー - その選択ルールをエクスポートした Administration Services ユーザーの名前が表示されます。
 - 変更日 - 選択ルールがエクスポートされた日時が表示されます。
 - 共有 - その選択ルールを他の Administration Services ユーザーと共有できるかどうかを示されます。

関連情報

- [430 ページの「パーティションの領域マッピングの選択ルールのインポート」](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)

「フィールドの結合」ダイアログ・ボックス

「フィールドの結合」ダイアログ・ボックスは、(「結合するフィールド」ボックスで選択された)複数のフィールドを1つのフィールドに結合するために使用します。

関連情報

- [238 ページの「フィールドの結合」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウ

リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウは、リンク・レポート・オブジェクト(LRO)を表示、編集および削除するために使用します。

注： リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウでは、LRO の作成や、リンク・パーティションの作成または変更はできません。LRO を作成するには、Spreadsheet Add-in を使用してオブジェクトをデータ・セルにリンクします。リンク・パーティションを作成、変更するには、[パーティションの作成/パーティションの編集ウィンドウ](#)を使用します。

「LRO のフィルタ」グループからオプションを選択することで、LRO のリストをフィルタできます:

- 次の日付以前に変更 - 日付を入力または選択して、その日付以前に変更された LRO のみを表示します。任意の変更ステータスの LRO を表示する場合は、現在の日付(デフォルト)を選択します。
- 作成者 - ユーザーを選択して、そのユーザーが作成した LRO のみを表示します。任意のユーザーが作成した LRO を表示する場合は、「すべてのユーザー」(デフォルト)を選択します。

LRO についての情報が次の列に 1 行ずつ表示されます:

- タイプ - 「ファイル」、「ノート」または「URL」
- オブジェクトの説明 - セル・ノートでは空白
- リンク・オブジェクト - ファイルの場合、オリジナルのファイル名;セル・ノートの場合、ノートのコンテンツ;URL の場合、URL アドレス
- 作成者 - オブジェクトを作成したユーザー名
- 最終更新 - オブジェクトが最後に変更された日時
- メンバーの組合せ - オブジェクトがリンクされているメンバーの組合せ

選択したオブジェクトを編集するには、「編集」ボタンをクリックします。実行可能なアクションは「オブジェクト・タイプ」で決定します:

- リンク・ファイル - 「添付ファイルの変更」ダイアログ・ボックスで、メンバーの組合せにリンクするファイルを変更できます。ファイルの内容は編集できません。
- セル・ノート - 「ノートの編集」ダイアログ・ボックスで、ノートのコンテンツを編集できます。
- URL - 「URL の編集」ダイアログ・ボックスで、異なる URL 文字列を入力します。

選択したオブジェクトを表示するには、「表示」ボタンをクリックします。表示の方法と内容は、「オブジェクト・タイプ」で決定します:

- リンク・ファイル - Essbase でファイルをローカル・コンピュータまたはネットワークに保存するよう求めるプロンプトが表示されます。ファイルを保存した後で、指定した場所からそのファイルを開きます。Essbase サーバー・コンピュータからは添付ファイルを直接表示できません。
- セル・ノート - ノートのコンテンツを「ノートの表示」ダイアログ・ボックスで編集でなく表示のみできます。

- URL - URL がデフォルトの Web ブラウザに表示されます。

選択した LRO を Essbase サーバーから削除する場合は、「削除」ボタンをクリックします。リンク・ファイルの場合、データ・セルからファイルへのリンクがインデックス・ファイルから削除され、ファイルが Essbase サーバーから削除されますが、クライアント・マシンに格納されているファイルのコピーは保持されます。セル・ノートと URL はデータベースから削除されます。

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)
- [397 ページの「LRO ファイル・サイズの制限」](#)
- [395 ページの「LRO のエクスポート」](#)
- [396 ページの「LRO のインポート」](#)

ロケーション別名ウィンドウ

ロケーション別名ウィンドウを使用して、ロケーション別名を作成、編集、削除できます。ロケーション別名は、別名を含むデータベースの物理ロケーションに、別名をマップします。

ウィンドウの列に、別名を入力するとともに、リモート・データベースに関する次の情報を入力または選択します:

- Essbase サーバー - 名前または IP アドレス
- アプリケーション
- データベース
- ユーザー名 - リモート・データベースが含まれている Essbase サーバーのユーザー名
- 確認済 - 指定されたサーバーに対して別名情報を検証したかどうかを示す

次の別名情報を確認するには、「テスト」ボタンをクリックします:

- 入力されたユーザー名とパスワードを使用して、指定のサーバーに接続できること
- 指定のアプリケーションが存在していること
- 指定のデータベースが指定のアプリケーションに存在していること

別名設定を行う場合は、「設定」ボタンをクリックします。

別名を名前変更する場合は、別名を選択して「名前変更」ボタンをクリックし、ダイアログ・ボックスで新しい名前を入力して、「OK」をクリックします。

別名を削除する場合は、別名を選択して「削除」ボタンをクリックします。

関連情報

- [121 ページの「ロケーション別名の作成」](#)

- [122 ページの「ロケーション別名の編集または削除」](#)

関連コマンド

- `create location alias(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `drop location alias(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `createlocation(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `deletelocation(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `listlocations(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ロック済オブジェクト・ウィンドウ

ロック済オブジェクト・ウィンドウで、所有する権限に従って、ロック済オブジェクトを表示またはロック解除できます。(権限の詳細は、[269 ページの「セキュリティと権限について」](#)を参照)

このウィンドウには、それぞれが関連するオブジェクトについての情報を提供する、次の列が表示されます:

- アプリケーション
- データベース
- オブジェクト名
- オブジェクト・タイプ - レポート・スクリプトやアウトラインなど
- ロックしたユーザー - オブジェクトをロックしたユーザーの名前
- ロック時刻 - オブジェクトがロックされた日時

該当するボタンを選択することで、選択したオブジェクトまたはすべてのオブジェクトをロック解除したり、ウィンドウに表示された情報を更新(リフレッシュ)できます。

関連情報

- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)
- [102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)

関連コマンド

- `alter object(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display object(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `unlockobject(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ロック・ウィンドウ

ロック・ウィンドウを使用できるのは、ブロック・ストレージ・データベースで作業している場合にかぎります。

このウィンドウを使用すると、データ・ロックのロック解除、列の移動(列をその他のロケーションにドラッグ)、列のサイズ変更(列見出しの境界をドラッグ)ができます。ただし、オブジェクトのロック解除はできません。オブジェクトのロック解除には、[ロック済オブジェクト・ウィンドウ](#)を使用します。

ロック・ウィンドウには、次の列が表示されます。列名の後に、表示される情報を記載します:

- ユーザー - 少なくとも 1 つのデータ・ブロックに対するロックを保持している全ユーザー
- アプリケーション/データベース - ユーザーが接続しているアプリケーションおよびデータベース
- ロックされたブロック数 - 各ユーザーによってロックされたブロック数
- ロック時間(秒) - ユーザーのデータ・ブロックがロックされている時間の長さ (「時間:分:秒」の形式。直近の 10 秒単位に丸めます。ユーザーがデータ・ブロックをロックできる最長時間はアプリケーション・プロパティ・ウィンドウで設定します。)

「ロック解除」ボタンをクリックすると、選択したユーザーのロックが解除されるのみでなく、ユーザーが現在のセッションから切断されます。

関連情報

- [321 ページの「データのロックの表示」](#)
- [323 ページの「データ・ロックのタイムアウトの設定」](#)
- [322 ページの「データのロック解除」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)
- [629 ページの「ロック済オブジェクト・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- listlocks(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- removelocks(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウ

ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウには、Essbase サーバー・インスタンスまたはアプリケーションに対する、ログ・チャートおよびログ・チャート・エントリのテーブルが表示されます。

注: テキストのみのバージョンのログを表示するには、[ログ・ビューア](#)を使用してください。

次のボックスに、現在のログについての情報が表示されます:

- 作成者
- 作成日
- ログ内の最も古い日付
- ログ内の最も新しい日付 - 必ず現在の日付になります

「期間」ボックスでは、期間を選択してログ・チャートの表示範囲を限定できます。期間は現在の日付から始まり、過去にさかのぼります。

「フィルタを適用して表示」リストでは、事前定義されたフィルタまたはカスタム・フィルタを選択して、チャートの表示範囲を1つのメッセージ・タイプに限定できます。事前定義されたフィルタ名は次のとおりで、各フィルタがチャートに含めるメッセージのタイプを示しています:

- エラー
- 警告
- 計算 - ブロック・ストレージ・データベースの場合は計算文字列(1012550)と計算スクリプト(1012579)の経過計算時間を、集約ストレージ・データベースの場合は集約ビュー選択プロセス(1270046)と集約ビューの生成(1270045)の経過時間を、アプリケーション・ログに含めます
- ログに記録されたユーザー - Essbase サーバーのログにユーザーのログイン・メッセージ(1051187)を含めます
- スプレッドシート・クエリー - スプレッドシート・クエリーの経過時間(1020055)をアプリケーション・ログに含めます
- データ・ロード - ブロック・ストレージ・データベースの場合、データ・ロードで更新されたセル数(1003037)およびデータ・ロード・プロセスの経過時間(1003052)を、集約ストレージ・データベースの場合、データ・ロード・プロセスおよびデータ・ロード・バッファのコミット・プロセスの経過時間(1003058)を、アプリケーション・ログに含めます

「フィルタを適用して表示」リストにカスタム・フィルタを追加する場合は、「フィルタの追加」ボタンをクリックし、「カスタム・フィルタの追加」ダイアログ・ボックスでフィルタを作成します。カスタム・フィルタを編集または削除する場合は、「フィルタを適用して表示」リストでフィルタを選択し、「フィルタの編集」または「フィルタの削除」ボタンをクリックします。

注: カスタム・フィルタのみが追加、編集、削除できます。

デフォルトの3次元の折れ線グラフ以外のグラフを表示する場合は、次のオプションから1つ以上を選択します:

- 3D を使用可能にする - 3次元ビューを表示します
- 棒グラフの積み重ね - 系列を定義するカスタム・フィルタの場合に、棒グラフの棒を積み重ねます
- 塗りつぶし - 折れ線グラフを色で塗りつぶします

ログエントリ・テーブルの表示は、次の方法で変更できます:

- 「ログ・エントリの表示」オプションの選択を解除してテーブルを非表示にします
- 列を異なる場所にドラッグします
- 列ヘッダーをダブルクリックして列をソートします

いつでも、「リフレッシュ」をクリックして、手動リフレッシュ・プロセスを開始できます。自動リフレッシュ・プロセスを使用可能にする場合は、「リフレッシュ・レート」ボックスでリフレッシュ・レート(秒、分または時間)を指定します。次に、「開始」をクリックして自動リフレッシュ・プロセスを開始し、「停止」をクリックして自動リフレッシュ・プロセスを取り消すことができます。

関連情報

- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの生成」](#)
- [253 ページの「ログ・チャートの表示」](#)
- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

「ログ・ビューアのオプション」ダイアログ・ボックス

「ログ・ビューアのオプション」ダイアログ・ボックスを使用して、ログ・ビューア・ウィンドウに表示するログ・エントリの数を指定できます。

このダイアログ・ボックスでは、次のオプションのいずれかまたは両方を選択します:

- ログの表示 - 最大 5MB のログ・エントリを表示します
- 開始日 - 「日付」ボックスで指定したエントリで開始します

「開始日」オプションを選択する場合は、次のいずれかのアクションを実行して「日付」ボックスに日付を入力します:

- 現在の日付をダブルクリックして日付を入力します。
- 「日付」ボックスの横にある下向き矢印をクリックして、日付セクタ・ボックスで日付を選択します。

関連情報

- [256 ページの「ログ・ビューアについて」](#)
- [256 ページの「ログの表示」](#)

ログ・ビューア・ウィンドウ

ログ・ビューア・ウィンドウを使用して、Essbase サーバー・インスタンスとアプリケーションのログを表示できます。

注： ログをフィルタしてログ・チャートを表示するには、「ログ・アナライザ」を使用します。

ログ・ビューア・ウィンドウに表示された行は、コピーして外部ファイルまたは Microsoft Excel などの別プログラムに貼り付けることができます。ウィンドウの内容は印刷したり保存できます。

アクションを実行または開始するには、右クリックするかコマンドを選択します:

- コピー - 選択したテキストをコピーします
- すべて選択 - すべてのテキストを選択します
- 検索 - 「検索」ダイアログ・ボックスを開きます
- 次を検索 - 「検索」ダイアログ・ボックスに最後に入力したテキストと一致する次の箇所を検索します
- 行に移動 - 移動先ダイアログ・ボックスを開きます

関連情報

- [251 ページの「Essbase ログについて」](#)
- [256 ページの「ログ・ビューアについて」](#)
- [256 ページの「ログの表示」](#)
- [252 ページの「ログ・アナライザについて」](#)
- Essbase ログの使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

「メンバー情報」ダイアログ・ボックス

「メンバー情報」ダイアログ・ボックスのボックスに、選択したメンバーについての情報が表示されます:

- 次元
- メンバー
- 世代
- レベル
- [ストレージの設定](#)
- [式](#)
- [ユーザー定義の属性\(UDA\)](#)
- [コメント](#)

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [536 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」タブ」](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)

「メンバー名」ダイアログ・ボックス

「メンバー名」ダイアログ・ボックスの「メンバー名」ボックスは、パーティションのメンバー・マッピングを入力または編集するために使用します。

一度に入力または編集できるのは1つのメンバー名のみです。

数字()で始まるメンバー名("100-Blue など")および次のいずれかの文字を含むメンバー名は、引用符で囲む必要があります: アンパサンド、アスタリスク、アットマーク、円記号(バックスラッシュ)、中カッコ、大カッコ、コロン、カンマ、ダッシュ、等号、感嘆符、大なり記号、ハイフン、小なり記号、マイナス記号、丸カッコ、パーセント記号、ピリオド、プラス記号、セミコロン、スラッシュまたはチルダ。

重複メンバー名の場合は、修飾メンバー名を入力する必要があります。重複メンバー名は、アウトライン・ビューアの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで確認できます。メンバー選択ツールを使用してアウトライン・ツリー内の重複メンバー名を使用する場合は、修飾メンバー名が自動的に挿入されます。

拡張領域固有メンバーのマッピングの詳細は、[429 ページの「パーティションでの領域固有のメンバー・マッピングの定義\(オプション\)」](#)を参照してください。

関連情報

- [431 ページの「パーティションでのグローバル・マッピングの定義」](#)
- メンバーのマッピング(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

create partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「メンバーのプレビュー」ダイアログ・ボックス

「メンバーのプレビュー」ダイアログ・ボックスの「選択したメンバー」ボックスには、「ルール」ボックスに指定された選択基準に一致するメンバーがリストされます。

たとえば、「ルール」ボックスにメンバー関数@CHILDREN("Qtr1")を指定すると、「選択したメンバー」ボックスには Jan、Feb および Mar がリストされます。

複数の選択条件を満たしているメンバーがあっても、「選択したメンバー」ボックスにリストされるのは1回のみです。

関連情報

- [421 ページの「パーティションについて」](#)
- [536 ページの「パーティションの作成またはパーティションの編集ウィンドウ - 「領域」タブ」](#)
- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)

「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス

「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスは、1つ以上の次元またはメンバーのプロパティを編集するために使用します。

現在のメンバーの名前が、ダイアログ・ボックスの上部に表示されます。ダイアログ・ボックスのコンテンツは、ブロック・ストレージ・アウトラインと集約ストレージ・アウトラインのどちらを使用しているかに応じて異なります。

ダイアログ・ボックスには、次のタブが含まれています。タブの機能は、現在のメンバーの特性によって異なります。いずれの場合でも、タブ間を移動するときは、以前のタブでの選択が保存されます。

- **情報** - 一般情報、および別名関連情報を表示および編集
- **属性** - 属性次元を疎の非属性次元に割当て
- **関連付け** - 1つ以上の属性に対して、属性次元が割り当てられている疎の非属性次元のメンバーに割当て
- **UDA** - UDA (ユーザー定義属性を割当て、または割当てを解除
- **式** - 式エディタを開く

注： 集約ストレージ・アウトラインでは、式は MDX 構文で表現されます。そのため、集約ストレージ・アウトラインには、「式」タブに式エディタではなく **MDX スクリプト・エディタ**が表示されます。

メンバーが1人のみが選択されている場合、「前へ」ボタンや「次へ」ボタンをクリックすると、(アウトラインで定義した)その前後のメンバーに移動できます。最初に選択されたメンバーに対する変更は保存されます。複数のメンバーが選択された場合、これらのボタンは使用できません。

関連情報

[166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」](#)

「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「関連付け」タブ

「関連付け」タブは、次のいずれかのデータストレージ・プロパティを割り当てられた基本次元メンバーに、属性を関連付けるために使用します: 「データの保管」、 「動的計算」または「動的計算および保管」。

このタブには次のボックスがあります:

- 関連付けられた属性 - 現在の基本次元メンバーに関連付けられた属性
- 使用可能な属性 - 現在の基本次元に関連付けられた属性次元。割当てに使用可能な属性を表示するには、次元ノードを開きます。
- 選択した使用可能な属性のフル・ネーム - 「使用可能な属性」リストで選択されている属性のメンバー名(接頭辞/接尾辞や、_、^、|などの結合文字を含む)

現在の基本次元メンバーに属性を割当てまたは割当て解除するには、次のボタンをクリックします:

- 割当て - 「使用可能な属性」ボックスで選択した属性を割り当てます
- 削除 - 「関連付けられた属性」で選択したメンバーの割当てを解除します
- すべて削除 - 「関連する属性」ボックスにリストされた属性の割当てをすべて解除します(このボタンは、「関連する属性」ボックスにリストされた属性を選択すると使用可能になります。)

属性の関連付けは、次のルールに従う必要があります:

- 基本次元メンバーには、属性次元のレベル 0 のメンバーのみを関連付けます。
- 特定の属性次元からメンバーを関連付ける基本次元のメンバーは、同じレベルである必要があります。
- 基本次元の各メンバーには、1つの属性次元につき1つの属性のみを関連付けられます。たとえば、製品 100-10 に関連付けられるサイズ属性は1つのみです。
- 基本次元の各メンバーには、複数の属性次元のメンバーを関連付けられます。たとえば、製品 100-10 には、サイズ属性とパッケージ・タイプ属性の両方を関連付けられます。

注: 集約ストレージ・データベースとの属性の関連付けの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- [196 ページの「属性について」](#)
- [198 ページの「基本次元のメンバーへの属性の関連付け」](#)
- [標準次元への属性次元の関連付け](#)

「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「属性」タブ

「属性」タブは、現在の標準次元に任意の数の属性次元を割り当てるために使用します。

注: 複数の属性次元は疎次元にのみ割り当てることができます。単一の疎次元は1つの標準次元にのみ割り当てることができます。

このタブには、次のリスト(属性次元の割当ておよび割当て解除の際に更新)が表示されます:

- 関連付けられた属性次元 - この属性次元はすべて現在の標準次元に割り当てられています

- 他の属性次元 - これらの属性次元には割当てに使用可能なものと使用不能なものがあります(他の標準次元に割り当てられている属性次元は、使用可能ではありません。使用不能な次元の名前の後には、関連する標準次元の名前が、カッコに囲まれて続きます。)

属性次元の割当てまたは割当て解除には、次のボタンを使用します:

- 割当て - 「他の属性次元」リストから選択した属性次元を割り当てます
- すべて割当て - 使用可能な属性次元をすべて割り当てます
- 削除 - 「関連付けられた属性次元」リストから選択した属性次元の割当てを解除します
- すべて削除 - 割り当てられたすべての属性次元の割当てを解除します

関連情報

- [196 ページの「属性について」](#)
- [標準次元への属性次元の関連付け](#)
- [198 ページの「基本次元のメンバーへの属性の関連付け」](#)

「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスの「式」タブ

「式」タブは、メンバーに適用される式で、デフォルトのデータベース計算および計算スクリプトによる計算によって計算される式を編集するために使用します。

注: 計算スクリプト内でのみ計算される式を編集する場合は、[計算スクリプト・エディタ](#)を使用します。集約ストレージ・アウトラインでは、式は MDX 構文で表現されます。[75 ページの「集約ストレージ・データベースの式の作成」](#)を参照してください。

このタブには、テキスト編集ペイン、ポイント・アンド・クリック方式のメンバー選択、関数テンプレートおよび構文チェッカが含まれています。

このタブでは、次のアクションを実行できます:

- [メンバー式の作成および編集](#)
- [アウトライン・ツリーでのメンバーの検索](#)
- [アウトライン・ツリーからスクリプトへのメンバーの挿入](#)
- [スクリプトへの関数およびコマンドの挿入](#)
- [構文のオートコンプリート機能の使用](#)
- [要素の色分けとカスタマイズ](#)
- [式におけるメンバー名または別名の使用](#)
- [事前定義されたテンプレートを使用した式の作成](#)

関連情報

- 191 ページの「式について」
- 192 ページの「アウトライン内の式の作成および編集」
- 式の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 式の例の検討(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「情報」タブ

「情報」タブは、基本次元またはメンバー情報(集計プロパティ、ストレージ・プロパティおよびコメントなど)を表示または変更、および別名テーブルの操作に使用します。

このタブで使用可能なアイテムは、次元またはメンバー・タイプおよびアウトライン・タイプ(ブロック・ストレージ、集約ストレージまたは通貨)によって異なります。

このタブには複数のノードが表示されます。すべてのノードに、選択した次元またはメンバーについての情報が表示されます。一部のノードは読取り専用です;一部のノードは入力を受け付けます;一部のノードはすべての状況に適用されます;一部のノードは特定の状況にのみ適用されます。

- メンバー情報 - 次元およびメンバーのプロパティ
- 修飾メンバー名 - アウトライン・ビューアおよび重複するメンバー名アウトラインでのみ表示
- 修飾メンバー共有名 - アウトライン・ビューア、重複メンバー名アウトライン、および一意でない名前を持つ基本メンバーに関連付けられた共有メンバーでのみ表示
- ハイブリッド分析 - ハイブリッド分析に使用可能なアウトラインでのみ表示
選択したメンバーに対して「ハイブリッド分析」を使用可能または使用不可にするには、「使用可能」または「使用不可」を選択します。

値を変更する場合は、値を選択し、次のどのボックスが表示されているかに応じて異なる値を入力または選択します。

- 名前 - 次元名またはメンバー名を入力します。(名前付けルールの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。)
- コメント - 標準次元または標準メンバーの場合に、コメントを入力します。255 文字まで入力できます。
- 次元タイプ - ブロック・ストレージ・アウトライン内の次元の場合は、「なし」、「勘定科目」、「時間」、「国」、「通貨パーティション」、「通貨タイプ」または「属性」を選択します。集約ストレージ・アウトライン内の次元の場合は、「なし」、「勘定科目」、「時間」、「日付、時刻」または「属性」を選択します。
- 属性タイプ - 属性次元の場合に、「テキスト」、「数値」、「ブール」または「日付」を選択します。

- フォーマット文字列の関連付け - アウトライン・プロパティで型付きメジャーを使用可能にしている場合、オプションで、MDX フォーマット文字列を作成するよう選択できます。

フォーマット文字列を使用すると、数値そのものかわりに、より有意な値を表示できます。たとえば、テキスト・ベースのフォーマット文字列を使用して、データ・セルを「高」、「中」、および「低」と表示できます。

フォーマット文字列を関連付けるには、次の構文を使用します:

```
MdxFormat (
    string_value_expression
)
```

ここで、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』に記載されているように、string_value_expression は有効な MDX 文字列値式です。フォーマット文字列の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の型付きメジャーの操作に関する項を参照してください。

- 次元の解決順 - 次元の場合に、次元に割り当てられた式を Essbase が計算する際に使用する、優先度を表す数値(0-127)を指定します。
- 基本次元レベルへの添付 - リンク属性次元の場合に、属性次元を関連付ける日時次元のメンバー・レベルを定義します。
- 集計 - 次元または属性でもないメンバーの場合に、次のいずれかの集計演算子を選択します: +、-、*、/、%、~(無視)、または^ (非集計)。デフォルトは加算(+)です。

集約ストレージ・アウトラインの場合には、制限を適用できます。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の集約ストレージとブロック・ストレージの比較に関する項を参照してください

- 2パス - ブロック・ストレージ・アウトラインの標準メンバーの場合に、アウトライン内の2度目のパス・スルー時にメンバーを計算する場合は「TRUE」、計算しない場合は「FALSE」を選択します。
- 圧縮 - 非圧縮次元の場合に、次元を圧縮次元として設定し、次元階層を「動的」に変更する(次元階層が以前に保管されていたとき)際には、「TRUE」を選択します。その他の次元はすべて「FALSE」に設定されます。圧縮次元の場合には、この設定の選択を解除すると、次元から圧縮属性が削除されます。
- データ・ストレージ - 現在の次元またはメンバーのデータ値を Essbase で保管する方法を判断する、次のいずれかのオプションを選択します: 「データの保管」、「動的計算および保管」または「動的計算」。「共有しない」、「ラベルのみ」、または「共有メンバー」。

「動的計算および保管」オプションおよび「動的計算」オプションは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

- 階層 - 次元、または集約ストレージ・アウトライン内の世代2メンバーの場合には、「保管済」オプション(デフォルト)または「動的」オプションを指定し、集約ストレージ・アウトライン内の次元の場合には、「階層:使用可能」オプション(「保管済」と「動的」を両方選択した場合と同じ)を選択します。選択した

ストレージ・オプションは、次元または世代 2 メンバーが先頭ノードである階層に適用されます。

会計次元は動的である必要があります。動的階層および保管階層に関する制限の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください

- 差異レポートの支出 - @VAR または @VARPER 関数を含む式を割り当てられていてブロック・ストレージ・アウトライン内にある会計メンバーの場合に、Essbase で実績データと予算データの差を計算する方法を指定できます。メンバーを支出外(デフォルト)としてタグ付けする場合は「FALSE」オプション、支出としてタグ付けする場合は「TRUE」を選択します。

関連情報

- [635 ページの「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス](#)
- [135 ページの「アウトラインの操作」](#)
- [166 ページの「次元およびメンバーのプロパティの設定」](#)

「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス - 「UDA」タブ

「UDA」タブは、ユーザー定義属性(UDA)の作成、割当て、割当て解除を行うために使用します。

属性との共通点は、UDA がカテゴリ別にデータを取得するために使用されることです。属性との相違点は、UDA には組込みの機能がないことです。ただし、属性が疎次元にのみ割り当てられるのに対し、UDA は密または疎の次元に割り当てられます。属性と UDA との比較の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

このタブには、次のリストが表示されます:

- 選択したメンバー名に割り当てられた UDA - UDA が 1 つのメンバーにのみ割り当てられている場合は、そのメンバーの名前が UDA の横に表示されます。UDA が複数のメンバーに割り当てられている場合は、メンバー数が UDA の横に表示されます。
- 次元名次元に割り当てられた UDA - 単一の UDA をダブルクリックするか複数の UDA を選択して、「割当て」ボタンをクリックすると、単一または複数の UDA が選択したメンバーに割り当てられ、このリストに追加されます。

テキスト・ボックスに新しい UDA の名前を入力できます。次に、「割当て」ボタンをクリックして、新しい UDA を選択したメンバーに割り当てることができます。

関連情報

- [203 ページの「アウトライン・エディタを使用した UDA の操作」](#)
- UDA の作成(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

移行ウィザード

移行ウィザードは、Essbase サーバー・インスタンス間でアプリケーションやデータベースを移行(コピー)するために使用します。Essbase がサポートしている任意のプラットフォームに移行できます。たとえば、Windows 開発サーバーから UNIX 本番サーバーにアプリケーションを移行できます。

アプリケーションを移行する際、ソース・アプリケーションへの影響はなく、ソース・サーバーにもターゲット・サーバーにもダウンタイムは生じません。

このトピックには、次のセクションが含まれています:

- [485 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザードの起動」](#)
- [641 ページの「移行されるデータと移行されないデータ」](#)
- [486 ページの「集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード・ページ」](#)

このウィザードを使用するには、ソースおよびターゲット Essbase サーバー・インスタンスに対するアプリケーションの作成/削除権限が必要です。ユーザーやグループを移行するには、ターゲット Essbase サーバー・インスタンスに対するユーザーおよびグループの作成/削除権限が必要です。Essbase インスタンスが同時にソースとターゲットになることはできません。また、ターゲット Essbase リリースはソース Essbase リリース以降である必要があります

ウィザードを使用する前に、次のことを行ってください:

- ターゲット・サーバーが稼働していることを確認します。
- 移行するデータベースのバックアップを作成します。

次のトピックでは、ウィザードの起動および使用方法について説明しています:

- [641 ページの「移行ウィザードの起動」](#)
- [641 ページの「移行されるデータと移行されないデータ」](#)
- [642 ページの「移行ウィザード・ページ」](#)

関連情報

- [99 ページの「アプリケーションのコピー」](#)
- [108 ページの「データベースのコピー」](#)
- [293 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのコピー」](#)
- [295 ページの「Essbase サーバー・グループのコピー」](#)

移行ウィザードの起動

▶ このウィザードを起動するには、「ウィザード」>「移行」を選択します。

移行されるデータと移行されないデータ

アプリケーションとともに移行される情報は次のとおりです:

- データベースおよびそのオブジェクト(計算スクリプト、レポート・スクリプト、ルール・ファイル、メンバー選択ファイル、Essbase クエリー・デザイナ・ファイルなど)
- すべてのデータベース・アウトライン(メンバー・プロパティ、アウトライン・プロパティ、式など)
- キャッシュ設定などの、アプリケーションおよびデータベースのプロパティ(ディスク・ボリュームは除く)
- ユーザーとグループ
パスワードも移行されます。移行後は、ソース・ユーザーやグループの権限とは無関係に、ターゲット・ユーザーやグループのプロパティを編集できます。
- フィルタおよびその関連付け
移行後に、フィルタを再度ユーザーやグループに割り当てる必要はありません。
- 代替変数
- リンク・レポート・オブジェクト(LRO)
- カスタム定義関数
- カスタム定義マクロ

アプリケーションとともに移行されない情報は次のとおりです:

- データ(.pag および.ind ファイル)
- Essbase サーバーでオブジェクトとして認識されていないファイル(スプレッドシート・ファイル、テキスト・ファイル、MaxL スクリプト・ファイル、ESSCMD スクリプトなど)
- Essbase 構成ファイル(essbase.cfg)
- ディスク・ボリューム
- パーティション(個別にパーティションをコピーしてください。)
- トリガー

移行ウィザード・ページ

下のリンクをクリックすると、ウィザードの各ページに関する情報が表示されます:

- [ソースおよびターゲットの Essbase サーバーの選択](#)
- [ソースおよびターゲットのアプリケーションの選択](#)
- [移行するオブジェクトの選択](#)
- [セキュリティ移行オプションの選択](#)
- [移行する個々のユーザーの選択](#)
- [移行する個々のグループの選択](#)

ソースおよびターゲットの Essbase サーバーの選択ページ

このページでは、基本の移行タイプ、ソースおよびターゲットの Essbase サーバー・インスタンスを選択します。

「ユーザー・レベル」リストで、移行タイプを選択します:

- 標準 - Essbase オブジェクトのタイプのみを移行できます。このため、ユーザーおよびグループ、または個々のオブジェクトは移行できません。たとえば、アプリケーションに関連付けられたすべての計算スクリプトを移行できますが、個々の計算スクリプトは移行できません。
- 拡張 - 特定の計算スクリプトまたはフィルタなど、個々のオブジェクトを移行できます。また、選択したユーザーおよびグループ、またはすべてのユーザーおよびグループは、(ユーザーおよびグループがそのアプリケーションまたはアプリケーション内のデータベースへのアクセス権を持っている場合に)移行でき、ユーザーおよびグループに関連付けられているセキュリティ権限の移行方法を指定できます。

注: ソースまたはターゲットの Essbase サーバー・インスタンスが EPM System セキュリティ・モードで実行されている場合は、拡張移行を実行できません。

「ソースの Essbase サーバー」および「ターゲットの Essbase サーバー」リストで、アプリケーションの移行元と移行先の Essbase サーバー・インスタンスをそれぞれ選択します。

移行をバックグラウンドで実行する場合は、「バックグラウンドで移行」オプションを選択します。このオプションを選択した場合、移行の処理中にコンソールを終了できますが、Essbase 管理サーバーはシャット・ダウンできません。移行のステータスは、「バックグラウンド・プロセスのステータス」ウィンドウで確認できます。

ソースおよびターゲットのアプリケーションの選択ページ

このページでは、ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションを選択します。ターゲット Essbase サーバー・インスタンスでは、移行されたアプリケーションを新規または置換アプリケーションとして追加できます。移行されるアプリケーションがターゲット・アプリケーションを置換する(上書きする)場合、重複するターゲット・オブジェクトが移行されるオブジェクトで置換されます。

注: 集約ストレージ・アプリケーションとブロック・ストレージ・アプリケーションとの間の移行はできません。

「Essbase サーバーのソース・アプリケーション」ボックスと「Essbase サーバーのターゲット・アプリケーション」ボックスで、ソース・アプリケーション(ソース Essbase サーバー・インスタンスでの名前)とターゲット・アプリケーション(ターゲット Essbase サーバー・インスタンスでの移行後の名前)をそれぞれ選択します。

ターゲット・アプリケーションの既存のオブジェクトを置換する場合(ソース・アプリケーションやデータベースのアウトライン・プロパティやデータベース・プロパティで、ターゲット・アプリケーションやデータベースのアウトライン・プロパティやデータベース・プロパティを置換する場合など)は、ターゲットの既存のオブジェクトを置換オプションを選択します。置換されないターゲット・オブジェクトに変更はありません。

移行するオブジェクトの選択ページ

このページには、ソース・アプリケーションおよびその関連オブジェクトのツリー・ビューが表示されます。アプリケーションとともに移行するオブジェクトの選択方法は、実行する移行タイプによって異なります。

- 標準移行 - データベースと、オブジェクトのタイプを選択できます。特定の計算スクリプトやフィルタなど、ファイルを個別に選択することはできません。
- 拡張移行 - データベースと、個々のオブジェクトを選択できます。

セキュリティ移行オプションの選択ページ

このページでは、移行対象のユーザーおよびグループのセキュリティ権限の移行方法を指定できます。ソースの Essbase サーバー・インスタンスの権限への影響はありません。

注： このページとオプションは、拡張移行を実行している場合のみ該当します。

移行対象のユーザーおよびグループが移行前にターゲットの Essbase サーバー・インスタンスに存在する場合、それらのユーザーまたはグループに対して次のオプションが適用されます。選択できるオプションは1つのみです:

- ユーザー/グループの権限を変更しない - 移行前と移行後ではターゲット権限は同じです。例
- ユーザー/グループの権限を減らす - ソース権限が移行前のターゲット権限よりも低い場合、ターゲットの権限をソースの権限のレベルまで下げます。例
- ユーザー/グループに権限を追加する - ソース権限が移行前のターゲット権限よりも高い場合、ターゲット権限をソースの権限のレベルまで上げます。例

管理者ユーザーおよびグループを移行する場合は、「管理者のコピー」オプションを選択します。

移行する個々のユーザーの選択ページ

このページでは、移行するユーザーを決定します。

注： このページとオプションは、拡張移行を実行している場合のみ該当します。

「選択したユーザー」および「使用可能なユーザー」ボックスには、移行対象のユーザーとして選択されているユーザーと選択されていないユーザーがそれぞれリストされます。

ユーザーのステータスを変更する(移行対象のユーザーとして選択する、または選択を解除する)には、ユーザーを選択し、該当する一重矢印ボタンをクリックします。どちらか一方のボックスにリストされている全ユーザーのステータスを変更するには、該当する二重矢印ボタンをクリックします。

移行する個々のグループの選択ページ

このページでは、移行するグループを指定します。

注： このページとオプションは、拡張移行を実行している場合のみ該当します。

「選択したグループ」ボックスと「使用可能なグループ」ボックスには、移行対象として選択されたグループと選択されていないグループがそれぞれ一覧表示されます。

グループのステータス(移行対象として選択されているかどうか)を変更するには、目的のグループを選択し、該当する向きの一重矢印ボタンをクリックします。どちらかのボックスに一覧表示されている全グループのステータスを変更するには、該当する向きの二重矢印ボタンをクリックします。

あるグループに関連付けられている全ユーザーを移行するかどうかを指定するには、目的のグループを選択し、関連付けられた全ユーザーを移行オプションを選択します。

「フィールドの移動」ダイアログ・ボックス

「フィールドの移動」ダイアログ・ボックスは、ルール・ファイル内でデータソース・フィールドを移動するために使用します。

「位置の選択」ボックスには、データソース・フィールドが現在の順序でリストされます。フィールドを移動するには、フィールドを選択して「上へ」または「下へ」ボタンをクリックします。「上へ」または「下へ」ボタンは、それぞれ、選択されたフィールドがリストの先頭または末尾の場合に無効になります。

関連情報

- [237 ページの「フィールドの移動」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「新規」ダイアログ・ボックス

「新規」ダイアログ・ボックスは、Essbase オブジェクト、ユーザーおよびグループを作成するプロセスを開始するために使用します。

「Essbase」タブのオプションを選択すると、様々なタイプの Essbase オブジェクトの作成に使用できるダイアログ・ボックスが開きます:

「Essbase」タブのオプション	開くダイアログ・ボックス
ブロック・ストレージ・アプリケーション	アプリケーションの作成
集約ストレージ・アプリケーション	アプリケーションの作成
データベース	データベースの作成
ユーザー	ユーザーの作成
グループ	グループの作成

「スクリプト」タブのオプションを選択すると、様々なタイプの Essbase スクリプトおよびオブジェクトの作成に使用できるエディタが開きます:

「スクリプトスクリプト」タブのオプション	開くエディタ
レポート・スクリプト	レポート・スクリプト・エディタ
計算スクリプト	計算スクリプト・エディタ
MaxL スクリプト	MaxL スクリプト・エディタ 。
MDX script	MDX スクリプト・エディタ
データ・ルール・ファイル	データ準備エディタ

「ウィザード」タブから、様々な Essbase ウィザードを開くことができます:

- [移行ウィザード](#)
- [集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード](#)
- [集約ストレージ・パーティション・ウィザード](#)
- [ユーザー設定ウィザード](#)

関連情報

- [95 ページの「アプリケーションの作成」](#)
- [103 ページの「データベースの作成」](#)
- [279 ページの「Essbase サーバーのユーザーの作成」](#)
- [280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」](#)
- [359 ページの「スクリプトの作成」](#)
- [MaxL スクリプトの作成](#)
- [216 ページの「ルール・ファイルの作成」](#)

「新規関数」ダイアログ・ボックス

「新規関数」ダイアログ・ボックスは、「Essbase サーバー」ボックスで指定した Essbase サーバー・インスタンスでカスタム定義関数を作成するために使用します。

注： 別の Essbase サーバー・インスタンスの関数を編集するには、エンタープライズ・ビューで目的のサーバーの下の「関数」ノードをダブルクリックします。

Essbase で作成できるのは Java で開発された関数のみです。カスタム定義関数には、Essbase とともにオプションとしてインストールされる Java Runtime Environment が必要です。

関数を作成するには、次のテキスト・ボックスに情報を入力します：

- スコープ - アプリケーション名(ローカル関数の場合)または<すべてのアプリケーション>(グローバル関数の場合)
- 名前 - たとえば、@JSUM
長さの制限および命名規則の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- クラス - 関数を開発するために使用される完全な Java クラス名
たとえば、次のようなコンパイル済 Java クラスが .jar ファイルにアーカイブされる場合があります: `com.hyperion.essbase.calculator.Statistics1`。
この場合、`Statistics.java` が `Statistics.class` にコンパイルされ、そのクラスが次のようにアーカイブされています: `com/hyperion/essbase.calculator/Statistics.class`
- メソッド - 関数に関連付けられた Java クラス・メソッド
たとえば、`com.hyperion.essbase.calculator.Statistics.covariance` の `covariance` 要素はメソッドを示します。
- 指定 - Essbase 計算機構文の指定文字列(オプション); たとえば、@COVARIANCE(`expList1, expList2`)
EssListCalcFunctions API 関数の出力文字列を使用して現在の関数を戻すには、指定文字列を使用する必要があります。指定文字列を使用しない場合、コメントを入力できません。
- コメント - 説明(指定文字列を使用する場合のみ必要に応じて使用可能です)

「ランタイム」オプションを選択できるため、現在関数をランタイム関数として指定します。ただし、「ランタイム」プロパティはパフォーマンスに重大な影響を及ぼす可能性があるため、「ランタイム」を選択するのは特別な状況下のみにする必要があります。

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)

- [376 ページの「カスタム定義関数の作成」](#)
- [548 ページの「カスタム定義関数マネージャ」](#)

関連コマンド

- `create function(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `display function(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「新しいマクロ」ダイアログ・ボックス

「新規マクロ」ダイアログ・ボックスは、カスタム定義マクロを作成するために使用します。

読取り専用ボックス:

- Essbase サーバー - 現在の Essbase サーバー・インスタンスの名前
- ステートメント - MaxL ステートメントを使用したマクロ定義の指定方法

情報を入力するテキスト・ボックスは、次のとおりです:

- スコープ - アプリケーション名(ローカル・マクロの場合)または<すべてのアプリケーション>(グローバル・アプリケーションの場合)
- 名前 - マクロの名前;たとえば、@MYMACRO (命名の制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください)
- シグネチャ - マクロ引数を渡すスタイルの説明

たとえば、次のシグネチャでは、2つのカンマで区切った引数とそれに続く引数リストとしてマクロを渡します: (SINGLE, SINGLE, GROUP)

- 展開 - シグネチャの処理方法を示す文字列

たとえば、次のマクロ、シグネチャおよび展開を使用する場合、@SUM3 (x, y, z)は@SUM3 (x + y + z)に置き換えられます:

- 名前 - @SUM3
- シグネチャ - (SINGLE, SINGLE, SINGLE)
- 展開 - (@@1, @@2, @@3)

- 指定 - Essbase 計算構文の指定文字列;たとえば、@MYMACRO (mbrName, rangeList)

指定文字列は必要ありません。指定文字列を使用することにより、EssListCalcFunctions API 関数の出力文字列によってマクロとその構文が戻されるようにします。

- コメント - 必要はなく、指定文字列を使用する場合のみ使用可能

関連情報

- [375 ページの「カスタム定義の関数とマクロについて」](#)
- [380 ページの「カスタム定義マクロの作成」](#)

- [549 ページの「カスタム定義マクロ・マネージャ・ウィンドウ」](#)

関連コマンド

- create macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「新しい変数」ダイアログ・ボックス

「新規変数」ダイアログ・ボックスは、代替変数を作成するために使用します。

「Essbase サーバー」ボックスには、変数の作成対象である Essbase サーバー・インスタンスが示されます。このボックスは読取り専用です。

次のボックスでは、変数に対して様々な指定を選択または入力します:

- アプリケーション - 変数を適用するアプリケーションを選択するか、または、現在のサーバー上のすべてのアプリケーションに変数を適用する場合は「すべてのアプリケーション」を選択します。
- データベース - 変数を適用するデータベースを選択するか、または、選択したアプリケーション内のすべてのデータベースに変数を適用する場合は「すべてのDB」を選択します。
- 名前
- 値

注: 代替変数の名前と値を設定するルールは、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください

関連情報

[93 ページの「代替変数の管理」](#)

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createvariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- deletevariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listvariables(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- updatevariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「新しいトリガー」および「トリガーの編集」ダイアログ・ボックス

「新規トリガー」/「トリガーの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、トリガーを作成または編集します。このダイアログ・ボックスに入力された情報は、MaxL コマンドの生成に使用されます。生成されたコマンドを実行すると、指定したトリガーが作成されます。

トリガーを使用したデータ変更の監視の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

トリガーは次の手順で作成または変更します:

▶ トリガーを作成または変更する手順は次のとおりです:

1 「新規トリガー」/「トリガーの編集」ダイアログ・ボックスの「データベース」ボックスに、現在のデータベース名が `essbase_server.database` の形式で表示されます。他のデータベース用のトリガーを作成するには、エンタープライズ・ビューで目的のデータベースの下の「トリガー」ノードをダブルクリックします。「名前」フィールドに名前を入力し、「Where」タブを選択します。

2 「Where 条件」に、有効な対称 MDX スライサ仕様を使用して Where 条件を入力します。次に例を示します:

```
(Jan, Sales, Actual, [100], East)
```

入力した Where 条件は「定義」ボックスに表示されます。

オプションで、次のチェック・ボックスのいずれかを選択します:

- 更新後 - 選択すると、データ更新操作全体の完了後に実行されるトリガーが作成されます。選択を解除すると、データベース領域に対して指定された条件を満たすセル更新によるデータ更新プロセス中に実行されるトリガーが作成されます。
- 値をログに記録 - 選択した場合、「更新後」の選択が解除されると、新旧の値が、When 句に指定されたスプール・ファイルに記録されます。それ以外の場合は、何もしません。

3 「When 条件」をクリックし、「時間」ボックスに有効な MDX 条件式を入力して、テストする条件を定義します。次に例を示します:

```
Jan > 20
```

4 次のチェック・ボックスのいずれかを選択して、トリガーがアクティブ化されたときのアクションを指定します:

- スプール - トリガーがアクティブ化されたときにスプール・ファイルを作成します。ファイルの名前を「スプール」テキスト・ボックスに入力します。
- メール - トリガーがアクティブ化されたときに電子メールを送信します。次の情報を入力します:
 - SMTP サーバー: 会社の SMTP サーバーの名前。
 - 宛先: トリガーがアクティブ化されたときにメッセージを送信する宛先電子メール・アドレス。

- 送信元: メッセージの送信元電子メール・アドレス。このアドレスのデフォルトは、Essbase Administration Services にログインしたユーザーのアドレスになります。
- 件名: メッセージの件名行。

注: Essbase で電子メール・アラートを送信できるようにするには、システムに Java Virtual Machine (JVM)がインストールされており、Essbase 用に構成されている必要があります。Essbase は、essbase.cfg ファイルで構成します。JVM を含めた構成設定の確認方法の詳細は、[330 ページの「構成ファイル\(essbase.cfg\)設定の表示」](#)を参照してください。

5 「適用」をクリックして、When 条件を適用します。

6 **オプション:** 「新規」をクリックして別の When 条件を作成し、ステップ 2 および 3 を繰り返します。

7 **オプション:** Else 条件を指定する手順は次のとおりです:

1. 「Else 句」をクリックします。
2. 次のチェック・ボックスのいずれかを選択して、トリガーがアクティブ化されたときのアクションを指定します:
 - スプール - トリガーがアクティブ化されたときにスプール・ファイルを作成します。ファイルの名前を「スプール」テキスト・ボックスに入力します。
 - メール - トリガーがアクティブ化されたときに電子メールを送信します。次の情報を入力します:
 - SMTP サーバー: 会社の SMTP サーバーの名前。
 - 宛先: トリガーがアクティブ化されたときにメッセージを送信する宛先電子メール・アドレス。
 - 送信元: メッセージの送信元電子メール・アドレス。このアドレスのデフォルトは、Essbase Administration Services にログインしたユーザーのアドレスになります。
 - 件名: メッセージの件名行。

注: Essbase で電子メール・アラートを送信できるようにするには、システムに Java Virtual Machine (JVM)がインストールされており、Essbase 用に構成されている必要があります。Essbase は、essbase.cfg ファイルで構成します。JVM を含めた構成設定の確認方法の詳細は、[330 ページの「構成ファイル\(essbase.cfg\)設定の表示」](#)を参照してください。

8 「OK」をクリックして、トリガーを保存します。

関連情報

- [443 ページの「トリガーについて」](#)
- [444 ページの「トリガーの作成」](#)

- [580 ページの「データベース・トリガー・ウィンドウ」](#)
- トリガーを使用したデータ変更の監視(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- create trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- display trigger(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「開く」ダイアログ・ボックス

「開く」ダイアログ・ボックスは、Essbase ファイルおよびその他のファイルを開くために使用します。ファイルを開く方法は、ファイルがどのように保存されたかによって異なります。

「ファイル・システム」タブは、ファイル・システムにあるファイルを開くために使用します。「ファイルのタイプ」リストで、開くファイルのタイプを指定できます。

「Essbase サーバー」タブは、Essbase サーバーのアプリケーションまたはデータベースのディレクトリ構造にあるファイルを開くために使用します。

- 検索 - Essbase サーバーのコンピュータおよびアプリケーション、あるいは目的のファイルを含むアプリケーションまたはデータベースを選択して、ファイルを選択します。
- ファイル名 - 選択したファイルの名前がこのテキスト・ボックスに表示されます。
- ファイルのタイプ - 選択可能なファイルの数を制限するには、ファイル・タイプを選択します。データ準備エディタから「開く」ダイアログ・ボックスを起動した場合は、ファイルのタイプのリストにはデータ・ファイルのタイプ (.xls や .txt など)のみが表示されます。

「開く」ダイアログ・ボックスを管理サービス・コンソールの特定のコンポーネント(データ準備エディタなど)から開いた場合は、「管理サーバー」タブは使用できません。

「管理サーバー」タブを使用して、Essbase 管理サーバーに保存されたファイルを開くことができます。このタブには、次の列があります:

- オブジェクト - Essbase 管理サーバーに保存されたファイルをリストします
- 作成者 - 各ファイルを作成または保存した Essbase 管理サーバーのユーザー名を識別します
- 「変更日」列 - 各ファイルが最後に保存された日時が示されます
- 「共有」列 - ファイルを他の Essbase 管理サーバー・ユーザーと共有できるかどうかを示します

関連情報

- [360 ページの「スクリプトを開く」](#)

- 403 ページの「MaxL および MDX スクリプトを開く」
- 216 ページの「ルール・ファイルを開く」
- 160 ページの「アウトラインを開いて編集する」
- 366 ページの「スクリプトの保存」
- 410 ページの「MaxL および MDX スクリプトの保存」
- 224 ページの「ルール・ファイルの保存」
- 139 ページの「アウトラインの保存」

「SQL データ・ソースを開く」ダイアログ・ボックス

SQL データベースからのデータを使用してルール・ファイルの作成、またはデータ・ロードや次元構築を実行する前に、そのデータベースに接続する必要があります。

「SQL データ・ソースを開く」ダイアログ・ボックスでは、データベースへの接続に必要な情報を指定します。接続後は、特定のテーブルのコンテンツがデータ準備エディタに表示されます。

「データ・ソース名」グループでは、次のオプションを選択します：

- SQL データ・ソース - タイプを選択します。
- 代替変数 - 「SQL データ・ソース」で選択したタイプの代替変数を選択します。
- Oracle Call Interface(OCI)サービス名 - OCI 接続識別子を使用して Oracle データベースを選択します。

Oracle OCI 接続識別子を使用するには、次の構文を使用します：

```
host:port/Oracle_service_name
```

たとえば、次の OCI 接続識別子では、ホスト・サーバー名は `myserver`、ポート番号は `1521`、Oracle サービス名は `orcl.us.oracle.com` です：

```
myserver:1521/orcl.us.oracle.com
```

- SQL データ・ソースなし - このルール・ファイルのデータ・ソースがないか、以前に設定した SQL データ・ソースをこのルール・ファイルから削除します。

「接続」グループには、データベース名、サーバー名、アプリケーション名、ユーザー名、パスワードなどの接続情報を入力します。入力する情報はデータベースによって異なります。

次のボックスに、次のアイテムを直接入力するか、「開く」ボタンをクリックしてさらに大きなウィンドウで情報を入力します：

- Select - SQL の SELECT ステートメント

SELECT ステートメントは、SQL データベースから取得するデータを指定します。デフォルト値は*(行内のすべての列を選択)です。

- From - SQL データベースやテーブルの場所を指定するディレクトリ・パス
- Where - SQL の WHERE 句

WHERE 句は、データを取得するために満たす必要のある条件を指定します。デフォルトでは、WHERE 句は*(テーブル内のすべての行を選択)です。

注：「Select」、「From」、「Where」の各ボックスでは、文字列"field=value"ではなく、代替変数を入力できます。代替変数を入力するときは、変数名の前にアンパサンド(&)を挿入してください。

次のいずれかのボタンをクリックし、接続の設定を終了します:

- OK/取得 - SQL データベースへ即時接続
- OK/保存 - SQL データベースに接続せずに設定を保存

関連情報

- [SQL データ・ソースを開く](#)
- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「オプション」ダイアログ・ボックス

「オプション」ダイアログ・ボックスは、管理サービス・コンソールのオプションの設定に使用します。

このダイアログ・ボックスには、次のタブが含まれています:

- [表示](#) - コンソールの外観を制御
- [スクリプト・エディタ・オプション](#) - スクリプト・エディタ・テキストの色分けやフォーマット設定をカスタマイズ
- [Essbase](#) - Essbase オブジェクトのロック、バックグラウンドでの計算およびレポートの実行、エディタで開くオブジェクトへのアウトラインの関連付けに関するオプションを設定
- [アウトライン・ツール](#) - アウトライン・エディタやアウトライン・ビューアに表示するアウトライン情報を指定
- [MaxL エディタ](#) - MaxL スクリプト・エディタの表示と動作を指定
- [アウトライン・ツール](#) - アウトライン・エディタやアウトライン・ビューアに表示するアウトライン情報を指定
- [MDX エディタ](#) - MDX スクリプト・エディタの動作と表示方法を指定

次のボタンをクリックして、様々なダイアログ・ボックス・アクションを実行します:

- デフォルト - ダイアログ・ボックスの設定をデフォルトに戻します。デフォルトに戻すタブを選択するようメッセージが表示されます。
- リセット - ダイアログ・ボックスを開いた後に変更した内容を削除します。「適用」をクリックして保存した変更はリセットされません。
- 適用 - 設定を保存します
- 閉じる - ウィンドウを閉じます。「適用」をクリックせずに行われた変更は保存されません。

関連情報

- [管理サービス・コンソールの表示オプションの設定](#)
- [102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)
- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)
- [368 ページの「計算スクリプトの実行」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)
- [151 ページの「アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューアのカスタマイズ」](#)

「オプション」ダイアログ・ボックス - 「Essbase」タブ

「Essbase」タブは、Essbase オブジェクトのロック、バックグラウンドでの操作の実行、およびエディタへのアウトラインの関連付けに関するプリファレンスを設定するために使用します。

「Essbase オブジェクトを開くとき」ボックスでは、オブジェクト(計算スクリプトやレポート・スクリプトなど)が開かれているときのロックおよびロック解除の設定を指定できます:

- オブジェクトを常にロックする - 他のユーザーは、ロックされているオブジェクトの変更、名前変更、削除はできません。
- オブジェクトをロックしない - ユーザーは、ロックされていないオブジェクトの変更、名前変更、削除ができます。
- オブジェクトをロックするかを尋ねるプロンプトを表示する - このオプションは、デフォルトで選択されています。

注: アウトライン・エディタで開かれているアウトラインは、すべてロックされています。

「計算スクリプトを実行するとき」リストでは、完全データベース計算や計算スクリプトによる計算に適用されるバックグラウンド・プロセスのオプションを選択します:

- 常にバックグラウンドで計算する - 計算の処理中も、作業を続行またはコンソールを終了することができます。計算を開始すると、そのプロセスの ID が表示されます。この ID はバックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウに表示されるため、プロセスのステータスを追跡できます。
- 計算が終了するまで常に待つ - 計算が終了するまで、作業を続行またはコンソールを終了することはできません。
- バックグラウンドで計算するかを尋ねるプロンプトを表示する - このオプションは、デフォルトで選択されています。

「レポート・スクリプトを実行するとき」リストでは、レポートの実行に適用されるバックグラウンド・プロセスのオプションを選択します:

- レポートを常にバックグラウンドで実行する - レポートの実行中も、作業を続行またはコンソールを終了することができます。レポートの実行を開始すると、そのプロセスの ID が表示されます。この ID はバックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウに表示されるため、実行ステータスを追跡できます。
- レポートの実行が終了するまで常に待つ - レポートの実行が終了するまで、作業を続行またはコンソールを終了することはできません。
- レポートをバックグラウンドで実行するかを尋ねるプロンプトを表示する - このオプションは、デフォルトで選択されています。

「データ・ロード/次元構築を実行するとき」ボックスでは、データ・ロードや次元構築に適用されるバックグラウンド・プロセスのオプションを選択します:

- データ・ロード/次元構築を常にバックグラウンドで実行する - データ・ロードや次元構築の処理中も、作業を続行またはコンソールを終了することができます。プロセスを開始すると、ID が表示されます。この ID はバックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウに表示されるため、プロセスのステータスを追跡できます。
- データ・ロード/次元構築の実行が終了するまで常に待つ - データ・ロードまたは次元構築が完了するまで、作業を続行またはコンソールを終了することはできません。
- データ・ロード/次元構築をバックグラウンドで実行するかを尋ねるプロンプトを表示する - このオプションは、デフォルトで選択されています。

「エディタでアウトラインを関連付けるとき」グループでは、エディタで開いているオブジェクトをアウトラインに関連付けるかどうかを決定するオプションを選択します:

- 常にアウトラインに関連付ける
- アウトラインに関連付けない
- アウトラインに関連付けるかを尋ねるプロンプトを表示する

「メッセージ」ペインで「メッセージ・パネルで MaxL ステートメントを表示」オプションを選択すると、実行する Administration Services から Essbase サーバーに送信された MaxL ステートメントがすべて表示されます。ステートメントが実行されると、そのステートメントを含むタブが「メッセージ」ペインに追加されます。

関連情報

- [102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)
- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)
- [368 ページの「計算スクリプトの実行」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)
- [654 ページの「「オプション」ダイアログ・ボックス」](#)

「オプション」ダイアログ・ボックス - 「表示」タブ

「表示」タブは、コンソールのインタフェースの表示の変更に使用します。「表示」タブの設定は、スクリプト・エディタ、エンタープライズ・ビュー、ダイアログ・ボックスなど、コンソール表示のすべての要素に影響します。

「フォント設定」グループでは、次のフォント設定を実行できます：

- フォント
- サイズ
- スタイル - 太字または斜体

「ツールバーのレイアウト」グループでは、コンソール・ツールバーのレイアウトを指定できます：

- 拡張 - 一般ツールバーはメニュー・バーの横に、アクティブなウィンドウのツールバーは一般ツールバーとメニュー・バーの下に表示されます。
- インライン - 一般ツールバーはメニュー・バーの横に、アクティブなウィンドウのツールバーはそのウィンドウの内部に表示されます。
- 標準 - 一般ツールバーとアクティブなウィンドウのツールバーは、メニュー・バーの横に表示されます。

表示されているツールバーはいずれも**非表示**にすることができます。

注：「保存」ボタンや「印刷」ボタンなど、一般ツールバーのボタンはコンソール全体に適用されます。アクティブなウィンドウのツールバーのボタンは、アクティブなウィンドウにのみ適用されます。たとえば計算スクリプト・エディタがアクティブなウィンドウの場合、計算スクリプト・エディタに適用されるボタン(「構文チェック」ボタンや「スクリプトの実行」ボタン)を含むツールバーが表示されます。

関連情報

- [管理サービス・コンソールの表示オプションの設定](#)
- [コンソールのツールバー](#)
- [654 ページの「「オプション」ダイアログ・ボックス」](#)
- [管理サービス・コンソールの機能](#)

「オプション」ダイアログ・ボックス - 「MaxL エディタ」タブ

「MaxL エディタ」タブは、MaxL スクリプト・エディタのオプションやデフォルトの動作を設定するために使用します。

MaxL スクリプト・エディタの動作を指定するには、「エディタ」グループから 1 つ以上のオプションを選択します:

- オートコンプリートを使用可能にする - 入力していくと、MaxL スクリプト・エディタには関連するキーワードおよび値のリストが表示されます。このオプションはデフォルトで選択されています。
- オートコンプリートで GUI ヘルプを使用可能にする - 各 MaxL ステートメントの入力を支援する GUI コンポーネントが起動されます。たとえば、`create filter` ステートメントを入力すると、フィルタ・エディタが起動されます。このオプションは、「オートコンプリートを使用可能にする」オプションが選択されている場合にのみ使用可能です。
- 実行後のエンタープライズ・ビューの同期化 - エンタープライズ・ビューが、MaxL スクリプトの実行結果である変更を使用して自動的に更新されます。たとえば、`database-creation` スクリプトを実行するとすぐに、エンタープライズ・ビューが更新されて新しいデータベースが追加されます。このオプションはデフォルトで選択されています。

「結果」ペインへの結果の表示方法を指定するには、「結果パネル」グループで次のオプションを選択または選択解除します。デフォルトでは、すべてのオプションが選択されます。

- Echo ステートメント - 選択すると、すべての MaxL ステートメントと結果が表示されます。選択を解除した場合は、結果のみが表示されます。
- 結果を 1 つのタブに表示 - 選択すると、すべての結果が 1 つのタブに表示されます。選択を解除した場合は、各ステートメントの結果が各タブに 1 つずつ表示されます。
- 情報メッセージの表示 - 選択すると、結果とともに情報メッセージが表示されます。結果とともに情報メッセージが表示されないようにする場合は、選択を解除します。
- 警告メッセージの表示 - 選択すると、結果とともに警告メッセージが表示されます。結果とともに警告メッセージが表示されないようにする場合は、選択を解除します。

スクリプト実行エラーの発生時の処置を指定するには、「実行時のエラー」グループでオプションを選択します。どのオプションを選択しても、エラーが「結果」ペインに書き込まれます。

- 実行の停止
- 続行プロンプト - 実行を続行するか停止するかを尋ねられます。デフォルトでは、このオプションが選択されます。
- 無視して続行

スクリプト実行時に未定義の変数に遭遇した場合の処置を指定するには、「未定義の変数」グループでオプションを選択します。どのオプションを選択しても、「未定義の変数」エラーが「結果」ペインに書き込まれます。

- 実行の停止
- 続行プロンプト - 実行を続行するか停止するかを尋ねられます。デフォルトでは、このオプションが選択されます。
- 無視して続行

関連情報

- [MaxL の実行オプションの設定](#)
- [408 ページの「未定義変数の解決」](#)
- [MaxL の実行結果の表示](#)
- [405 ページの「MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [MaxL データ定義言語の使用\(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内\)](#)
- [MaxL のリファレンス\(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内\)](#)
- [654 ページの「「オプション」ダイアログ・ボックス」](#)

「オプション」ダイアログ・ボックス - 「MDX エディタ」タブ

「MDX エディタ」タブは、MDX スクリプト・エディタのオプションやデフォルトの動作を設定するために使用します。

「オートコンプリートを使用可能にするオプション(「エディタ」領域内)はデフォルトで選択されます。このオプションを選択すると、MDX スクリプト・エディタは、ユーザーが MDX ステートメントを入力するときに、関連するキーワードとともにプロンプトを表示します。

「結果」ペインへの(結果および)情報の表示方法を設定するには、「結果パネル」グループで1つ以上のオプションを選択します。デフォルトでは、すべてのオプションが選択されます。

- Echo ステートメント - MDX ステートメントが表示されます。
- 情報メッセージの表示
- 警告メッセージの表示

また、「結果パネル」グループでは、デフォルトで「結果を1つのタブに表示」オプションが選択されます。この場合、すべてのステートメントのすべての結果が1つのタブに表示されます。このオプションの選択を解除した場合は、各ステートメントの結果が各タブに1つずつ表示されます。

スクリプト実行エラーの発生時の処置を決定するには、「実行時のエラー」グループでオプションを選択します。どの場合にも、エラーが「結果」ペインに書き込まれます:

- 実行の停止
- 続行プロンプト - 実行を続行するか停止するかを決定します。このオプションはデフォルトで選択されています。
- 無視して続行

スクリプト実行時に未定義の変数に遭遇した場合の処置を設定するには、「未定義の変数」グループでオプションを選択します。どの場合にも、変数エラーが「結果」ペインに書き込まれます。

- 実行の停止
- 続行プロンプト - 実行を続行するか停止するかを決定します。このオプションはデフォルトで選択されています。
- 無視して続行

関連情報

- [412 ページの「MaxL および MDX の実行オプションの設定」](#)
- [408 ページの「未定義変数の解決」](#)
- [413 ページの「MaxL および MDX の実行結果の表示」](#)
- [MaxL および MDX スクリプト・エディタでのオートコンプリート機能の使用](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)
- [654 ページの「「オプション」ダイアログ・ボックス」](#)

「オプション」ダイアログ・ボックス - 「アウトライン・ツール」タブ

「アウトライン・ツール」タブは、管理サービス・コンソールのアウトライン・ツリーのプロパティを表示するために使用します。プロパティは、次にアウトラインを開いたときに有効になります。

「ツリー内の表示」グループでは、アイテムの組合せを自由に選択できます:

- 集計 - 両方のダイアログ・ボックスに、集計演算子(+、-、%など)が表示されます。
- 式 - アウトライン・エディタには、メンバー式の先頭の 250 文字が表示されません。
- 次元タグ - 両方のダイアログ・ボックスに、次元タグ(「勘定科目」、「時間」、「属性」、「属性計算」、「国」、または CurPartition)が表示されます。このオプションが選択されていても、「次元タイプがありません」というタグが付けられている次元では、次元タグは表示されません。

- 別名 - アウトライン・エディタに、メンバーの別名が表示されます(「別名」という語の後に表示されます)。
- メンバーのプロパティ - 両方のダイアログ・ボックスに、メンバーのプロパティ(「ラベルのみ」や「共有しない」など)が表示されます。
- コメント - アウトライン・エディタに、コメントが表示されます。コメントは/* ... */で囲まれます。
- 関連付け - アウトライン・エディタには、基本次元メンバーに関連付けられている属性の名前が横に表示されます。
- 属性タイプ - 両方のダイアログ・ボックスに、属性次元のタイプが表示されます。タイプの情報は「タイプ」という語の後に表示されます。
- 子の数 - 両方のダイアログ・ボックスに、各メンバーに含まれている子の数が表示されます。

確認オプションを選択することもできます:

- メンバーの削除 - アウトラインからメンバーを削除するたびに求められます。
- メンバーの移動 - アウトライン内でメンバーを移動するたびに求められます

関連情報

- [アウトライン・ビューアおよびアウトライン・エディタのカスタマイズ](#)
- [654 ページの「オプション」ダイアログ・ボックス](#)
- [662 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ」](#)
- [667 ページの「アウトライン・ビューア・ウィンドウ」](#)

「オプション」ダイアログ・ボックス - 「スクリプト・エディタ・オプション」タブ

「スクリプト・エディタ・オプション」タブは、スクリプト・エディタ(計算スクリプト・エディタ、レポート・スクリプト・エディタ、MaxL スクリプト・エディタ、式エディタなど)のカスタマイズに使用します。スクリプト要素の色を選択したり、テキストのフォーマット設定を制御することができます。

「セクション」列には、色を選択できるスクリプト要素が表示されます:

- コメント - スクリプト実行時に無視される注釈
- キーワード - 計算コマンド、レポート・コマンド、MaxL ステートメントのキーワード
- 関数 - 計算関数と MDX ステートメント
- オプション - MaxL ステートメントの終端、計算コマンドおよびレポート・コマンドのオプション
- 文字列 - 一重引用符、または二重引用符で囲まれたテキスト。
- 数字 - 任意の数値
- 演算子 - 算術演算子、条件演算子、論理演算子および次元間演算子

色列には、各要素で選択された色が表示されます。色を変更するには、ドロップダウン・リストから標準の色、または「カスタム」を選択します。「カスタム」を選択すると、「エディタの色の設定」ダイアログ・ボックスを使用してカスタムの色を選択できます。

「タブのサイズ」ボックスでは、タブ位置のサイズを文字数で入力します。たとえば、タブのサイズとして2を入力すると、2文字分の幅がインデントされます。

折返しの動作を指定するには、最初のオプション、または両方のオプションを選択します:

- 右端で折り返す - 語の区切りに関係なく、編集ペインの右端余白でテキストを分割。
- ワード・ラップを使用可能にする - 語と語の間でテキストを分割。

関連情報

- [357 ページの「スクリプトの色分けのカスタマイズ」](#)
- [358 ページの「スクリプト・フォーマットのカスタマイズ」](#)
- [654 ページの「「オプション」ダイアログ・ボックス」](#)

管理サービス・コンソールの表示オプションの設定

管理サービス・コンソールの表示オプションを設定できます。設定した内容は Essbase 管理サーバーに保管されるため、どのコンピュータから接続しても常に同じコンソールが表示されます。

▶ コンソールの表示オプションを設定するには:

- 1 メニュー・バーから「ツール」>「コンソール・オプション」を選択します。
- 2 「表示」タブを選択します。
- 3 選択した UI コンポーネントのフォント、サイズ、およびスタイルを選択します。
- 4 目的のツールバーのレイアウトを選択します。
- 5 「適用」をクリックして、設定を保存します。

新しい設定に基づいて、コンソールの表示が変更されます。

- 6 「閉じる」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

関連情報

[「オプション」ダイアログ - 「表示」タブ](#)

アウトライン・エディタ・ウィンドウ

アウトライン・エディタは、Essbase データベース・アウトラインとそのプロパティを手動で定義し管理するためのグラフィカルな環境を提供します。

アウトラインを開くと、「アウトライン」メニューがコンソールのメニュー・バーに追加されます。編集する各アウトラインごとに個別のウィンドウが開きます。

注： アウトラインを読取り専用ですばやく表示するには、[アウトライン・ビューア](#)を使用します。

アウトライン・エディタには、次のタブがあります：

- [アウトライン](#) - アウトライン内で次元とメンバーを操作
- [プロパティ](#) - 属性設定や次元データ・ストレージのプロパティなど、アウトライン・プロパティを定義
- [157 ページの「クエリー・ヒント」](#) - 次元のクエリー・ヒントを編集
- [変更](#) - 現在の編集セッション中にアウトラインに対して加えられた変更を表示
- [確認](#) - アウトラインの確認から派生するメッセージ、およびエラーを表示
- [結果の検索](#) - 検索操作の結果として表示されるメンバーで作業

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [アウトラインを開く](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のデータベース・アウトラインの作成および変更に関する項

アウトライン・エディタ・ウィンドウ・「変更」タブ

「変更」タブには、現在の編集セッション中に行われたアウトライン変更(各アクションの説明と日時)のリストが最古から最新の順に表示されます。このタブで、すべての変更を表示し、一部の変更を[元に戻す](#)ことができます。

関連情報

- [662 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ」](#)
- [181 ページの「アウトライン変更を元に戻す」](#)

アウトライン・エディタ・ウィンドウ・「アウトライン」タブ

アウトライン・エディタの「アウトライン」タブには、アウトライン構造が折りたたみ可能なツリー・ビュー形式で表示されます。データベース名の直下にある分岐が次元を表します。次元名の直下にある分岐がメンバーです。

各次元およびメンバー名の横には、その次元またはメンバーに関する情報が表示されます。選択した情報が表示されるよう、[アウトライン・エディタをカスタマイズ](#)できます。

「アウトライン」タブで実行できる操作は、次のとおりです:

- [次元プロパティまたはメンバーのプロパティへのアクセス](#)
- [メンバー式の作成または更新](#)
- [世代とレベルへの名前付け](#)
- [動的時系列メンバーを使用可能化](#)
- [メンバーの切り取り、コピー、名前変更](#)
- [子メンバーまたは兄弟メンバーの追加または貼付け](#)
- [子メンバーの昇順または降順ソート](#)
- [1つのビューの\(同じアウトラインの\)複数のビューへの分割](#)

関連情報

- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [155 ページの「アウトライン内の次元およびメンバーの操作」](#)
- [アウトライン・ビューアおよびアウトライン・エディタのカスタマイズ](#)
- [664 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ」](#)
- [663 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「変更」タブ」](#)
- [666 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「確認」タブ」](#)

アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「プロパティ」タブ

アウトライン・エディタの「プロパティ」タブは、次のアウトライン・プロパティを表示および編集するために使用します:

- 大文字/小文字の区別
- 別名テーブルの設定
- メンバー名における一意性の要件
- 属性の設定
- 次元ストレージ・タイプ

注: このタブのコンテンツは、ブロック・ストレージと集約ストレージ・アウトラインのどちらを使用しているかによって異なります。

次のノードが、データベース・プロパティに適用されます:

- 大文字と小文字を区別するメンバー - メンバー名および UDA で大文字と小文字を区別するかどうかを指定します。たとえば、「TRUE」を選択すると、Product と product は別のメンバーとみなされます。「FALSE」を選択すると、Product と product は同一のメンバーとみなされます。

- アウトラインのタイプ - **集約ストレージ**、**ブロック・ストレージ**または通貨のいずれかを指定します。この設定はデータベースの作成時に定義されており、変更できません。
- 重複を許可されたメンバー名 - TRUE(アウトラインが**メンバー名の重複**について使用可能な場合)または FALSE(一意のメンバー名が必要な場合は)のいずれかです。FALSE は TRUE に変更できますが、TRUE を FALSE に変更することはできません。
- 別名テーブル - アウトラインに関連付けられている別名テーブルを表示します。「デフォルト」という名前の別名テーブルが最初に表示されます。ノードを右クリックすると、別名テーブルを**作成**、**削除**、**または消去**できるメニューが表示されます。テーブル名を右クリックし、選択したテーブル上でアクションを実行するか、テーブルをインポートまたはエクスポートします。

「属性の設定」ノードは、属性次元にのみ適用されます。Essbase で属性次元の名前を処理する方法を定義するには、次のプロパティを指定します:

- 接頭辞/接尾辞のフォーマット - 接頭辞や接尾辞なしでメンバー名を表示する場合は「なし」を選択するか、次のアクションを実行します:
 1. 値を選択します。
 2. 接頭辞または接尾辞の値を、「次元」、「親」、「親の親」、「祖先」から選択します。
 3. 区切り記号(接頭辞または接尾辞と元の名前の間に挿入)をアンダースコア(_)、パイプ(|)、キャレット(^)から選択します。
 4. 接頭辞と接尾辞のどちらかを選択します。

注: 接頭辞や接尾辞は、メンバー名を一意にするために使用します。デフォルトでは、属性メンバー名に接頭辞または接尾辞は含まれていません。

- 計算次元名 - 属性計算次元の名前、または属性計算次元のいずれかのメンバーの名前を指定します。指定された名前はレポートとスプレッドシートで使用されます。メンバー関数はメンバー名に影響されません。たとえば、どのような名前でも、属性計算次元の2番目のメンバーはカウントされます。ブロック・ストレージ・データベースの場合、デフォルト名は Sum、Count、Min、Max、Avg です。集約ストレージの場合、Sum メンバーのみが使用されます。
- ブール、日付、および数値属性の設定 - メンバー名のフォーマットを指定します:
 - ブール次元の場合は、TRUE なら「はい」を、FALSE なら「いいえ」を指定します。
 - 日付の属性次元の場合は、「月が最初(mm-dd-yyyy)」または「日が最初(dd-mm-yyy)」のいずれかのフォーマットを選択します。
 - 数値の次元については、「範囲の一番下」か「範囲の一番上」を選択し、1つ以上の値を指定します。たとえば、「範囲の一番上」を選択して属性に 1000、100000、1000000 を指定すると、範囲は 0-1000、1001-100000、100001-1000000 となります。

ブロック・ストレージ・データベースの次元については、「データ・ストレージ」ノードで、ストレージのプロパティを「自動構成」か「次元ストレージ・タイプ」に設定できます。「自動構成」オプションを選択すると、Essbase は次元を「密」(大部分の交差を含む)、または「疎」(相対的に少ない交差を含む)のいずれかとして指定します。「自動構成」オプションを選択しない場合、ユーザーが作成した次元については、「次元ストレージ・タイプ」で「密」か「疎」を選択します。デフォルトでは、属性次元は恒久的に「疎」に設定されています。下線付きの設定は、値をクリックして変更できます。

関連情報

- [160 ページの「アウトラインを開いて編集する」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のデータベース・アウトラインの作成および変更に関する項
- [137 ページの「アウトライン・プロパティの設定」](#)

アウトライン・エディタ・ウィンドウ・「テキスト・リスト・マネージャ」タブ

アウトライン・エディタの「テキスト・リスト・マネージャ」タブは、テキスト・リスト・オブジェクトの作成および編集に使用します。

データベースでは、数値メジャーの他に、テキストまたは日付に基づいた値を持つ型付きメジャーを持つことが可能です。型付きメジャーでは、セルの値にテキスト・ラベルを列挙したリストを1つ含められます。これらのラベルは、テキスト・リスト・オブジェクトと呼ばれるマッピング・アーチファクトを使用して、アウトライン・レベルで定義します。

「テキスト・リスト」ペインには、テキスト・リスト・オブジェクトが表示されます。テキスト・リスト・オブジェクトの追加、削除、インポート、エクスポート、およびアルファベット順のソートが可能です。

注： 新しいテキスト・リストへのインポートのみ実行できます。既存のテキスト・リストを開いた場合、インポート・オプションは無効になっています。

「マッピングの編集」ペインには、選択したテキスト・リスト・オブジェクトの詳細が表示されます。このペインで、型付きメジャーを定義し、内部的に保管されている整数にマップできます。また、マッピングを作成または削除、およびテキスト・リスト・オブジェクトの ID へのマッピングを自動生成できます。

アウトライン・エディタ・ウィンドウ・「確認」タブ

「確認」タブは、アウトラインの確認時に見つかったアウトライン・エラーおよびメンバー・エラーを示します。

関連情報

- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [662 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ」](#)
- [140 ページの「アウトラインの確認」](#)

「アウトラインの印刷オプション」ダイアログ・ボックス

「アウトラインの印刷オプション」ダイアログ・ボックスは、アウトラインの印刷やプレビューに使用します:

- 展開したすべてのアイテム - すべてのメンバーを印刷(すべてのノードを展開)
- 表示されるアイテムのみ - アウトライン・ビューアまたはアウトライン・エディタの「アウトライン」タブに表示されるメンバーを印刷

関連情報

[141 ページの「アウトラインの印刷」](#)

アウトライン・ビューア・ウィンドウ

アウトライン・ビューアのタブは、アウトラインの表示に使用します(変更は不可):

- [アウトライン](#) - アウトラインのツリー・ビューを表示
- [プロパティ](#) - 世代、レベル名、属性設定など、アウトラインのプロパティを表示

アウトライン・ビューアは表示が必要な場合のみメンバーをメモリーにロードするため、情報を比較的すばやく提供します。選択した情報のみが表示されるよう、[アウトライン・ビューアをカスタマイズ](#)できます。

注: アウトラインを変更するには、[アウトライン・エディタ](#)を使用します。

関連情報

- [131 ページの「アウトラインについて」](#)
- [144 ページの「アウトラインの表示」](#)
- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)

アウトライン・ビューア - 「アウトライン」タブ

アウトライン・ビューアの場合、メンバーはすぐに表示されます。一方、アウトライン・エディタの場合は、Essbase 管理サーバー・コンピュータのメモリーにアウトラインがロードされた後に表示されます。

アウトライン・ビューアの「アウトライン」タブの説明:

- 次元は、データベース名の直下の分岐に表示されます。
- メンバーは、次元名の下に分岐に表示されます。
- 各次元およびメンバー名の横には、その次元またはメンバーに関する情報が表示されます。
- 次元やメンバーの階層は展開および縮小できます。
- 1つのビューを複数のビューに分割できます。
- 右クリックして、次元またはメンバーのプロパティを示すセカンダリ・ペインを表示できます。
- 右クリックして「属性ビューア」を選択して、メンバーの属性を表示できます。

アウトライン・ビューアをカスタマイズして、選択した情報のみ「アウトライン」タブに表示されるようにできます。ここで、アウトライン・ビューアに表示される情報量はアウトライン・エディタより少ないことに留意してください。

関連情報

- [144 ページの「アウトライン・ビューアについて」](#)
- [667 ページの「アウトライン・ビューア・ウィンドウ」](#)
- [668 ページの「アウトライン・ビューア - 「プロパティ」タブ」](#)
- [149 ページの「アウトライン・エディタについて」](#)
- [663 ページの「アウトライン・エディタ・ウィンドウ - 「アウトライン」タブ」](#)
- [516 ページの「属性ビューア・ウィンドウ」](#)

アウトライン・ビューア - 「プロパティ」タブ

「プロパティ」タブには、アウトラインのプロパティのツリー・ビューが表示されます。通常、値は最下位のレベル・アイテムの横に表示されます。

注: アウトラインのプロパティを変更するには、[アウトライン・エディタ](#)を使用します。

「情報」ノードには、次の情報が表示されます:

- 大文字と小文字を区別するメンバー名 - 「TRUE」(名前の違いが大文字と小文字のみのメンバーを複数のメンバーとして処理)、または「FALSE」(名前の違いが大文字と小文字のみのメンバーを同一のメンバーとして処理)

- **重複を許可されたメンバー名** - 「TRUE」(メンバー名の重複を許可)または「FALSE」(一意のメンバー名が必要)
重複を許可されたメンバー名は、データベースの作成時、またはアウトライン・エディタの「プロパティ」タブで設定されます。
- **アウトラインのタイプ** - **集約ストレージ**、通貨、または**ブロック・ストレージ**
アウトラインのタイプは、データベース作成時に設定されます。この設定は変更できません。
- **次元ストレージ・タイプの自動構成** - **ブロック・ストレージ・データベース**については、「TRUE」(Essbaseが密または疎として次元を指定する場合)または「FALSE」(デフォルト設定の疎を手動で保持する必要がある場合)のいずれかです。
- **別名テーブル** - アウトラインに関連付けられている別名テーブルのリスト

「世代名」ノードと「レベル名」ノードはそれぞれ、世代とレベルの名前を示します。たとえば、Sample Basic データベースでは、Quarter は Year 次元の世代 2 の名前であり、SKU は Product 次元のレベル 0 の名前です。**メンバー名の重複**を許可するアウトラインについて、これらのノードはそれぞれ特定の世代やレベルで一意のメンバー名が必要かどうかを示します。

「属性の設定」ノードには、属性次元とメンバーの設定が表示されます。

- **接頭辞/接尾辞のフォーマット** - 属性メンバーのフォーマットを定義する設定
- **計算次元名** - 属性計算次元とそのメンバーの名前
- **ブール、日付および数値属性の設定** - ブールおよび日付属性次元のメンバーに対する名前の設定
- **数値範囲の指定** - 値が属性範囲の上限または下限のどちらを表すかを表示

注：ここに記載されているプロパティは、特に注意書きがないかぎり、アウトライン・エディタの「プロパティ」タブを使用して定義できます。

「印刷オプション」ダイアログ・ボックス

「印刷オプション」ダイアログ・ボックスは、ルール・ファイルの印刷またはプレビューに使用します。

1つ以上のダイアログ・ボックスのコンテンツを印刷するには、次のいずれか、または複数のオプションを選択します:

- **フィールド・プロパティ** - 「フィールド・プロパティ」ダイアログ・ボックス
- **データ・ソースの設定** - 「データ・ソースのプロパティ」ダイアログ・ボックス
- **データ・ロードの設定** - 「データ・ロードの設定」ダイアログ・ボックス
- **次元構築の設定** - 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス
- **次元プロパティ** - 「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス。

関連情報

[227 ページの「ルール・ファイルの印刷」](#)

「パスワードを Essbase サーバーへ伝播」ダイアログ・ボックス

「パスワードを Essbase サーバーへ伝播」ダイアログ・ボックスは、ユーザーのパスワードを変更し、そのユーザーが存在するすべての Essbase サーバー・インスタンスに新パスワードを伝播するために使用します。

「パスワード」ボックスと「パスワードの確認」ボックスに、ユーザーのパスワードを入力および再入力します。パスワードの大文字と小文字は区別されません。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

「選択済」ボックスと「使用可能」ボックスにはそれぞれ、パスワードを伝播するか、または伝播できる Essbase サーバー・インスタンスがリストされます。次の方法で、インスタンスを1つのボックスからもう一方のボックスに移動できます:

- 1つのインスタンスを移動するには、そのインスタンスを選択し、該当する一重矢印ボタンをクリックします。
- 複数のインスタンスを移動するには、[Shift]または[Ctrl]キーを使用して複数のインスタンスを選択し、該当する一重矢印ボタンをクリックします。
- 1つのボックスに表示されているすべてのインスタンスを移動するには、該当する二重矢印ボタンをクリックします。

関連情報

- [302 ページの「サーバー間でのパスワードの伝播」](#)
- [293 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのコピー」](#)

「クエリー・ヒントの選択」ダイアログ・ボックス

アウトライン・エディタで、「クエリー・ヒント」タブの下の次元をダブルクリックすると、「クエリー・ヒントの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

「次元」ペインに表示されているアウトラインで、クエリーの集約に使用するメンバーを選択します。

実行できるアクションは、次のとおりです:

- メンバーを検索するには、「メンバーの検索」ボタンをクリックし、「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスを使用します。
- メンバーについての情報(世代、レベル、および関連付けられている式、UDA、コメントなど)を表示するには、メンバーを選択し、「情報」ボタンをクリックします。

「レコード表示カウント」ダイアログ・ボックス

「レコード表示カウント」ダイアログ・ボックスのボックスに、データ準備エディタで表示されるレコードを決定する値を入力します:

- 表示カウント - 表示されるレコード数(最大 500)です。デフォルトでは、データ準備エディタに表示されるレコードは 50 個です。
- 開始レコード - 表示される最初のレコード番号です。たとえば 5 を入力すると、データ準備エディタにはレコード 1 からレコード 4 までは表示されません。デフォルトでは、データ準備エディタの表示はレコード 1 からです。

関連情報

[215 ページの「データ準備エディタについて」](#)

Performance Management Architect への Essbase サーバーの登録ダイアログ・ボックス

Performance Management Architect への Essbase サーバーの登録ダイアログ・ボックスを使用して、Performance Management Architect において Essbase サーバーを登録または登録解除します。

注： Oracle Hyperion Shared Services に対して外部化されている Essbase サーバー・インスタンスのみ登録できます。

「選択済」および「使用可」のボックス・リストは、それぞれ Oracle Hyperion EPM Architect に登録されたサーバーと、登録可能なサーバーを示しています。

次のいずれかの方法で、サーバーをあるリストからもう一方のリストに移動し、それにより権限を付与するか取り消します:

- 1つのサーバーを移動するには、それを選択して該当の一重矢印ボタンをクリックします。
- 1つのボックスに含まれるすべてのサーバーを移動するには、該当の二重矢印をクリックします。

選択したサーバーは、「サーバー名」の下に表示されます。このサーバーに対してわかりやすい名前を、「インスタンス名」の下に入力して割り当てます。

「レコードの除外」ダイアログ・ボックス

「レコードの除外」ダイアログ・ボックスは、データ・ロード中または次元構築中にロードされないデータ・ソース・レコードを特定するために使用します。

「グループ」グループでは、いずれかの拒否基準に一致するフィールドを含むレコードを拒否する場合は「OR」を、すべての拒否基準に一致するフィールドを含んで

いるレコードを拒否する場合は「AND」を選択します。デフォルトでは「AND」が選択されています。

次の列では、データ・レコードが拒否される基準を定義します:

- タイプ - 「文字列」または「数値」を選択し、それぞれ文字列や数値に対する拒否基準のベースにします。
- 文字列/数値 - 拒否基準のベースとなる文字列や数値を入力します。
- 条件 - 「等しい」、「等しくない」、「より大きい」、「以上」、「より小さい」、「以下」、「含む」、「含まない」のいずれかを選択します。選択する条件は、「タイプ」および「文字列/数値」と結合し、基準を作成します。たとえば、「OR」と「文字列」を選択して XYZ と入力し、「等しい」を選択すると、XYZ という値を持つフィールドを含むレコードはすべて拒否されます。また、「OR」と「数値」を選択し、5 を入力して「以下」を選択すると、5 以下の値を持つフィールドを含むレコードはすべて拒否されます。

注: 「含む」条件と「含まない」条件は、文字列とのみ併用できます。

- 大文字と小文字を区別 - 「文字列」を選択し、拒否基準で大文字と小文字が区別されるようにする場合は、このオプションを選択します。

基準を作成するには、「新規」ボタンをクリックします。基準を削除するには、削除する基準を選択して「削除」ボタンをクリックします。

関連情報

- [232 ページの「レコードの除外」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「別名テーブルの名前変更」ダイアログ・ボックス

「別名テーブルの名前変更」ダイアログ・ボックスは、別名テーブルの名前変更に使用します。

「現在の名前」ボックスには、選択した別名テーブルの名前が表示されます。

「新規の名前」ボックスには、選択した別名テーブルの新しい名前を入力します。別名テーブル名は、次元とメンバーの命名ルールに準拠する必要があります。ルールの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

- 別名の設定(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [188 ページの「別名テーブルの名前変更」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

- renameobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「アプリケーションの名前変更」ダイアログ・ボックス

アプリケーションの名前を変更するには、「アプリケーションの名前変更」ダイアログ・ボックスの「変更後の名前」ボックスに新しい名前を入力します。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』に説明されている命名ルールに従ってください。

関連情報

[100 ページの「アプリケーション名の変更」](#)

関連コマンド

- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameapp(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「計算スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス

「計算スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックスの「名前変更」ボックスでは、現在の計算スクリプトの新しい名前を入力できます。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

[372 ページの「スクリプトの名前変更」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「カスタム・ビューの名前変更」ダイアログ・ボックス

「カスタム・ビューの名前変更」ダイアログ・ボックスは、カスタム・ビューの名前変更に使います。デフォルトでは、カスタム・ビューの名前は「MyView<数値>」になっています。

「現在の名前」ボックスに、選択したカスタム・ビューの名前が表示されます。

「変更後の名前」ボックスに、選択したカスタム・ビューの新しい名前を入力します。

関連情報

- [55 ページの「カスタム・ビューのタブの名前変更」](#)
- [52 ページの「カスタム・ビューについて」](#)
- [53 ページの「カスタム・ビューの作成」](#)
- [55 ページの「カスタム・ビューでのオブジェクトの並べ替え」](#)

「データベースの名前変更」ダイアログ・ボックス

データベースの名前を変更するには、「データベースの名前変更」ダイアログ・ボックスの「変更後の名前」ボックスに新しい名前を入力します。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』に説明されている命名ルールに従ってください。

関連情報

[109 ページの「データベース名の変更」](#)

関連コマンド

- `alter database rename(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `renamedb(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「フィルタの名前変更」ダイアログ・ボックス

セキュリティ・フィルタの名前を変更するには、「フィルタの名前変更」ダイアログ・ボックスの「変更後の名前」ボックスに新しい名前を入力します。

フィルタ名には、文字、数字、スペースを使用できます。長さの制限については、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

関連情報

- [311 ページの「フィルタの名前変更」](#)
- [307 ページの「フィルタの管理」](#)

関連コマンド

`alter object(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「関数の名前変更」ダイアログ・ボックス

「関数の名前変更」ダイアログ・ボックスは、カスタム定義関数の名前を変更するために使用します:

- 関数名 - 現在の名前が表示されるボックス(読取り専用)

- 変更後の名前 - 新しい名前を入力するボックス(命名の制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。)
- 既存の関数の上書き - すでに新しい名前を使用している関数を上書きするかどうかを決定するオプション

関連情報

[378 ページの「カスタム定義関数の名前変更」](#)

関連コマンド

create function(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「グループの名前変更」ダイアログ・ボックス

Essbase サーバー・ユーザーのグループの名前を変更するには、「グループの名前変更」ダイアログ・ボックスの「変更後の名前」ボックスに新しい名前を入力します。

グループ名は英数字で始める必要があります、大文字と小文字は区別されません。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

グループの名前を変更しても、そのグループのユーザーには影響しません。

関連情報

[298 ページの「グループの名前変更」](#)

関連コマンド

alter group(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「マクロの名前変更」ダイアログ・ボックス

「マクロの名前変更」ダイアログ・ボックスは、カスタム定義マクロの名前を変更するために使用します:

- マクロ名 - 現在の名前が表示されるボックス(読取り専用)
- 変更後の名前 - 新しい名前を入力するボックス(命名の制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。)
- 既存の関数の上書き - 新しい名前を使用しているマクロを上書きするかどうかを決定するオプション

関連情報

[383 ページの「カスタム定義マクロの名前変更」](#)

関連コマンド

create macro(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「レポート・スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス

レポート・スクリプトの名前を変更するには、「レポート・スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックスの「変更後の名前」ボックスに新しい名前を入力します。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

関連情報

[372 ページの「スクリプトの名前変更」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「ルール・ファイルの名前変更」ダイアログ・ボックス

ルール・ファイルの名前を変更するには、「ルール・ファイルの名前変更」ダイアログ・ボックスの「変更後の名前」ボックスに、使用しているオペレーティング・システムで有効な名前を入力します。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

Essbase では、すべてのルール・ファイル名に .rul という拡張子を追加します。

関連情報

[226 ページの「ルール・ファイルの名前変更」](#)

関連コマンド

- alter object(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- renameobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「ユーザーの名前変更」ダイアログ・ボックス

Essbase サーバー・ユーザーの名前を変更するには、「ユーザーの名前変更」ダイアログ・ボックスの「変更後の名前」ボックスに新しいユーザー名を入力します。

ユーザーの名前変更のルール:

- 自身の名前や Essbase サーバーに接続中のユーザーの名前は変更できません。

- 名前は文字や数字で始め、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』に説明されている長さ制限を準拠する必要があります。
- 名前には、円記号(バックスラッシュ)(\)以外の特殊文字を含めることができません。
- 大文字と小文字が区別されません。

関連情報

[ユーザーの名前変更](#)

関連コマンド

- `alter user(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `renameuser(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「パーティションの修復」ダイアログ・ボックス

「パーティションの修復」ダイアログ・ボックスは、無効なアプリケーション、データベースまたはユーザー情報を含むパーティションの修復に使用されます。

「データ・ソース」グループと「データ・ターゲット」グループのフィールドではそれぞれ、ソースとターゲットの情報を指定できます。修復が必要なフィールドのみ使用できます:

- Essbase サーバー - ソース・データベースまたはターゲット・データベースが存在する Essbase サーバー・インスタンスの名前
- アプリケーション - ソース・データベースまたはターゲット・データベースを含んでいるアプリケーションの名前
- データベース - ソース・データベースまたはターゲット・データベースの名前
- ユーザー - パーティションで、ソースまたはターゲットの Essbase サーバー・インスタンスへの接続に使用されるユーザー名
- パスワード - パーティションで、ソースまたはターゲットの Essbase サーバー・インスタンスへの接続に使用されるパスワード

関連情報

- [437 ページの「パーティションの修復」](#)
- [422 ページの「エンタープライズ・ビューでのパーティションの表示」](#)
- [423 ページの「パーティションの作成」](#)
- パーティション・アプリケーションの設計(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- パーティションの作成および維持(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter partition(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- drop partition with force(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「置換」ダイアログ・ボックス

MaxL スクリプト・エディタや計算スクリプトエディタなどのテキスト・エディタ内で、「置換」ダイアログ・ボックスを使用してテキストを検索および置換できます。

「検索」ボックスと「置換後の文字列」ボックスではそれぞれ、検索するテキストと置換するテキストを入力、貼付け、または選択します。

大文字と小文字を区別して検索する場合は、「大文字/小文字の一致」オプションを選択します。

関連情報

- [618 ページの「検索」ダイアログ・ボックス](#)
- [153 ページの「エディタでのテキストの検索」](#)

「アウトライン内の置換」ダイアログ・ボックス

アウトライン・エディタ内の「アウトライン内の置換」ダイアログ・ボックスを使用して、テキストを検索および置換できます。

「検索」ボックスと「置換後の文字列」ボックスではそれぞれ、検索するテキストと置換するテキストを入力、貼付け、または選択します。

検索パラメータを指定するには、次のオプションを1つ以上選択します:

- 一致する単語のみ - たとえば、このオプションを選択して 100 を入力すると、検索では 100 のメンバーのみが戻されます。このオプションを解除し、100 を入力して検索すると、100、100-10、100-10 (共有メンバー)、Large-21000000 など、100 を含むすべてのメンバーが戻されます。
- 大文字/小文字の一致 - たとえば、このオプションを選択して「検索」ボックスに product という語を入力すると、Product のメンバーではなく product のメンバーが戻されます。
- 次元の選択 - 選択した次元に対する検索を制限します。デフォルトでは、すべての次元が検索されます。
- 別名テーブルの選択 - 選択した別名テーブルを検索に含めます。デフォルトでは、別名テーブルは検索されません。
- 一致するテキストの検索場所 - 情報のタイプ(メンバー名、式、UDA)を1つ以上、検索に含めます。

関連情報

- [アウトライン内のメンバーおよびテキストの検索](#)
- [153 ページの「エディタでのテキストの検索」](#)

「トランザクションの再実行」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスは、データベースの復元時に再実行するトランザクションを指定するために使用します。

トランザクションを再実行するには、管理者の役割が必要です。

ダイアログ・ボックス・アイテム

- 「**最終再実行時間または最後に復元されたバックアップの時間に基づく**」 - 最後の再実行要求の日時を、トランザクションを再実行する期間の開始時間として使用します。
- 「**開始時間**」 - トランザクションを再実行する期間の開始日時をユーザーが入力できるようにします。
- 「**バックグラウンドで再実行**」 - トランザクションの再実行をバックグラウンド・プロセスとして実行します。

関連情報

- [117 ページの「ログに記録されたトランザクションの再実行」](#)
- [118 ページの「ログに記録されたトランザクションの表示」](#)
- トランザクション・ロギングの使用可能化およびトランザクションの再実行の構成(『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』内)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

レポート・ビューア・ウィンドウ

レポート・ビューア・ウィンドウには、レポート・スクリプトから生成されたレポートが表示されます。このウィンドウのコンテンツは印刷、保存またはコピーできる他、特定のレポート・テキストやレポート・ラインを検索することもできます。

「フォント」ボックスのコンソール・ツールバーで、レポート・ビューアで使用するフォントを選択できます。適切に列を揃える場合は、Courier などの等幅フォントを選択してください。

ウィンドウの任意の部分を右クリックし、次のいずれかのアクションを開始します:

- 元に戻す

- やり直し
- 切取り
- コピー
- 貼付け
- 消去 - ウィンドウからすべてのコンテンツを削除
- すべて選択。
- 検索 - 「[検索](#)」ダイアログ・ボックスを開きます
- 置換 - 「[置換](#)」ダイアログ・ボックスを開きます

関連情報

- [387 ページの「レポート・スクリプトについて」](#)
- [390 ページの「レポート・スクリプトの実行」](#)
- [391 ページの「レポートの保存」](#)
- [43 ページの「管理サービス・コンソールのウィンドウの印刷」](#)

「データベースの復元」ダイアログ・ボックス

「データベースの復元」ダイアログ・ボックスを使用して、アーカイブ・ファイルからデータベースを復元します。次のオプションから選択します:

- ファイルから復元 - アーカイブ・ファイル名を入力します。
- 復元を強制 - バックアップ・ファイル内のアプリケーション名またはデータベース名がアプリケーション名またはデータベース名と違う場合に選択します。
- バックグラウンドで復元 - 復元コマンドをバックグラウンド・プロセスとして実行します。
- 拡張 - ボリュームのマッピングを指定する場合にクリックします。
- 追加(詳細オプション) - ディスク・ボリュームをマッピング・テーブルに追加します。
- 削除(詳細オプション) - ディスク・ボリュームをマッピング・テーブルから削除します。

関連情報

- [115 ページの「ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ」](#)
- [116 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの復元」](#)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベースの再構築」ダイアログ・ボックス

「データベースの再構築」ダイアログ・ボックスで、「バックグラウンドで再構築」オプションを選択または解除できます。

このオプションを選択する場合は、次の操作が可能です：

- 再構築プロセスとして操作を続行できます。
- コンソールを終了できます。
- 再構築が完了するまで、Essbase 管理サーバーをシャットダウンできません。
- プロセス ID が表示されます。
- プロセス ID は、[バックグラウンド・プロセスのステータス](#)・ウィンドウでステータスを追跡するために使用します。

関連情報

- [114 ページの「手動によるデータベースの再構築」](#)
- データベースの再構築の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベースの再構築のオプション」ダイアログ・ボックス

アウトラインを保存すると、データベースが再構築されます。データベース再構築の管理の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

「データベースの再構築」ダイアログ・ボックスで次のいずれかのオプションを選択し、再構築中のデータ値の処理方法を指定できます：

- すべてのデータ - すべてのデータ値が保存されます。
- レベル 0 のデータ - レベル 0(リーフ・ノード)値のみ保持されます。計算に必要なすべてのデータがレベル 0 メンバーに存在するときは、このオプションを選択する必要があります。このオプションを選択すると、データベースが再構築される前に上位レベルのブロックがすべて削除されます。そのため、再構築に必要なディスク・スペースが削減され、計算時間も短縮されます。データベースが再計算されると、上位レベルのブロックは再作成されます。
- 入力データ - ロードされているデータを含むブロックのみが保存されます。ただし、(上位レベルと下位レベルの両方の)ロードされたデータを含むすべてのブロックは保存されます。
- 全データの破棄 - すべてのデータ値が消去されます。

ハイブリッド分析が使用可能になると、「再構築がハイブリッド分析に影響を与える場合に警告」オプションが表示されます。Essbase アウトラインに対する変更が、ハイブリッド分析データ・ソースのコンテキスト内で実行されるクエリーに与えられる影響について警告を表示する場合は、このオプションを選択します。

関連情報

データベースの再構築の最適化(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `increstruc(essbase.cfg)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setdbstateitem(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス

「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスは、計算スクリプト、レポート・スクリプト、ルール・ファイル、MaxL スクリプト、アウトラインなどのオブジェクトを保存するために使用します。

すべてのオブジェクトがどの場所にも保存できるわけではありません。そのため、保存するオブジェクトのタイプによって、次のタブが、すべてではありませんが少なくとも1つダイアログ・ボックスに表示されます:

- ファイル・システム - オブジェクトを、クライアント・コンピュータまたはネットワーク上に保存します。
- Essbase サーバー - オブジェクトを、アプリケーション、データベース、またはアプリケーションとデータベースの両方に保存します。
- 管理サーバー - Essbase 管理サーバーにオブジェクトを保存します。

エンコードを指定するには、エンコードの指定オプションを選択し、次のいずれかのアクションを実行します:

- UTF-8 を選択します。
- 非 Unicode のエンコードをリストから選択します。非 Unicode モードのアプリケーションで作業している場合は、正しいエンコードが選択されます。この場合は、選択を変更しないでください。

注: アウトラインについては、Essbase サーバーのエンコードが使用されます。そのため、エンコード・オプションはアウトラインには適用されません。

関連情報

- [366 ページの「スクリプトの保存」](#)
- [224 ページの「ルール・ファイルの保存」](#)
- [139 ページの「アウトラインの保存」](#)
- [410 ページの「MaxL および MDX スクリプトの保存」](#)
- [391 ページの「レポートの保存」](#)

- [434 ページの「パーティションの保存」](#)

「スクリプト変数」ダイアログ・ボックス

「スクリプト変数」ダイアログ・ボックスは、スクリプト変数を作成、設定、更新および削除するために使用します。

次の列は、既存の変数とその値を示し、変数の場合は作成、値の場合は入力できることを示しています。

- 変数
- 値

変数を作成する場合は「新規」ボタンをクリックし、選択した変数を削除する場合は「削除」ボタンをクリックします。

関連情報

- [407 ページの「MaxL および MDX スクリプトでの変数の定義」](#)
- [408 ページの「未定義変数の解決」](#)
- [400 ページの「MaxL スクリプト・エディタについて」](#)
- [418 ページの「MDX スクリプト・エディタについて」](#)

会計次元の選択ダイアログ・ボックス

会計次元の選択ダイアログ・ボックスでは、圧縮統計を確認し、集約ストレージ・データベースの会計次元を選択するために使用します。

注： 圧縮統計は、データベース・プロパティ・ウィンドウの「圧縮」タブにも表示されます。

「会計次元」列:

- 現在のデータベースに、すべての次元を表示します
- 会計次元が存在しないと仮定する圧縮次元なし行を含んでいます
- 赤のアイコンを表示し、会計として一部の次元にタグが付けられないようにします。通常、このような次元には 10,000 を超えるレベル 0 の子が含まれています。
- 緑のアイコンを表示し、会計としてタグを付けるのに適切な次元を示します。通常、このような次元には 10,000 を下回るレベル 0 の子が含まれています。

「レベル 0 に必要なサイズ」列の各行には、その行で識別される次元が会計次元としてタグが付けられている場合、圧縮されたデータベースの必要なサイズ(MB)が表示されます。

「会計次元」列で圧縮統計を確認した後は、会計としてタグを付ける次元を選択します。「OK」をクリックすると、アウトラインが更新され、変更の反映と再構築が行われます。

関連情報

- [集約ストレージの会計次元の選択](#)
- データベース圧縮のための会計次元の選択(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」ダイアログ・ボックス

「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」ダイアログ・ボックスで、現在のクラスタに追加するデータベースを指定します:

- Essbase サーバー - 目的のデータベースを含む Essbase サーバー・インスタンス
- アプリケーション - 希望するデータベースを含むアプリケーション
- サンプル - 目的のデータベース

「レコードの選択」ダイアログ・ボックス

「レコードの選択」ダイアログ・ボックスは、データ・ロード中または次元構築中にデータ・ソース・レコードがロードされるかどうかを決定するために使用します。

「ブール」グループでは、いずれかの選択基準に一致するフィールドを含むレコードをロードする場合は「OR」を、すべての選択基準に一致するフィールドを含むレコードをロードする場合は「AND」を選択します。デフォルトでは「AND」が選択されています。

次の列で、ロード中にデータ・レコードが選択される基準を定義します:

- タイプ - 「文字列」または「数値」を選択し、それぞれ文字列や数値に対する選択基準のベースにします。デフォルトでは「文字列」が選択されています。
- 文字列/数値 - 選択基準のベースとなる文字列や数値を入力します。
- 条件 - 「等しい」、「等しくない」、「より大きい」、「以上」、「より小さい」、「以下」、「含む」、「含まない」のいずれかを選択します。選択する条件は、「タイプ」および「文字列/数値」と結合し、基準を作成します。たとえば、「OR」と「文字列」を選択して XYZ と入力し、「等しい」を選択すると、XYZ という値を持つフィールドを含むレコードはすべてロードされます。また、「OR」と「数値」を選択し、5 を入力して「以下」を選択すると、5 以下の値を持つフィールドを含むレコードはすべてロードされます。

注: 「含む」条件と「含まない」条件は、文字列とのみ併用できます。

- 大文字と小文字を区別 - 「文字列」を選択し、選択基準で大文字と小文字が区別されるようにする場合は、このオプションを選択します。

基準を作成するには、「新規」ボタンをクリックします。基準を削除するには、削除する基準を選択して「削除」ボタンをクリックします。

関連情報

- [231 ページの「レコードの選択」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「電子メールの送信」ダイアログ・ボックス

「電子メールの送信」ダイアログ・ボックスは、管理サービス・コンソールから他の管理者または Oracle テクニカル・サポートに、Essbase の情報が含まれる電子メール・メッセージを送信するために使用します。このダイアログ・ボックスのタイトルは、送信する情報のタイプに応じて変わります。

「電子メールの送信」ダイアログ・ボックスのテキスト・ボックスで、一般的な電子メール・プログラムで入力する情報を入力します:

- 宛先 - デフォルトでは、このボックスには最近使用したアドレスが表示されます。
- cc - メッセージのコピーを送信する相手は、すべての受信者から見えます。
- bcc - メッセージのブラインド・コピーを送信する相手は、直接の受信者やコピー送信先の受信者からは見えません。
- 件名 - 電子メールのトピックを受信者に通知します。
- コメント - コメントを追加するかどうかは任意です。

アドレスを入力する際には、次の点に留意してください:

- 受信者アドレスは検証されません。
- メッセージは、正常に受信されない場合でも、戻されません。
- 複数のアドレスはカンマで区切る必要があります。

関連情報

- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)
- [69 ページの「電子メール・サーバーの指定」](#)

セッションおよび要求の終了オプション

このトピックでは、セッションの終了や要求の強制終了のために使用できるオプションが表示されます。

次のテーブルは、「ログオフ」オプションが選択されているものと仮定しています。いずれの場合も、要求を終了してセッションからログオフするための「強制」オプションを使用できます。

「ログオフ」オプションは、次のスコープで選択できます:

- 選択したユーザー
- 選択したサーバー、アプリケーションまたはデータベース上のすべてのユーザー
- 選択したサーバー、アプリケーションまたはデータベース上のユーザーのすべてのインスタンス
- 選択した要求
- 選択したサーバー上のすべての要求

「強制終了」オプションは、次のスコープで選択できます。いずれの場合も、「強制」オプションは使用できません。

- 選択したアプリケーション
- 選択したデータベース
- 選択したサーバー上の選択したユーザー
- 選択したアプリケーション上の選択したユーザー
- 選択したデータベース上の選択したユーザー

セッション・ウィンドウ

セッション・ウィンドウは、Essbase サーバー・インスタンス、アプリケーションまたはデータベースのユーザー・セッションやユーザー要求を表示および管理するために使用されます。

管理者権限がある場合、すべてのユーザーの情報がウィンドウに表示されます。アプリケーション・マネージャ権限がある場合、その権限が有効なアプリケーションに接続しているすべてのユーザーの情報がウィンドウに表示されます。

ウィンドウを変更できます:

- 列を移動するには、その列を他の場所にドラッグします。
- 列のサイズを変更するには、列の見出しの境界をドラッグします。

自身と同等またはそれ以下の権限を持つユーザーについては、Essbase サーバーからアクティブ・セッションの接続を解除し、要求を終了できます。

最初のボックスで、「ログオフ」または「強制終了」を選択します:

- 「ログオフ」を選択すると、ユーザーは特定のオブジェクトから接続を解除され、セッションが終了します。同じユーザーが実行中の他のセッションや、他のユーザーが実行中のセッションには影響しません。
- 「強制終了」を選択すると、ユーザーは Essbase サーバーに接続したままになりますが、安全な終了点に到達すると、ユーザーの要求が終了します。このユーザーはセッションを継続し、新しい要求を発行できます。

2 つ目のボックス、3 つ目のボックスで使用できるオプションは、「ログオフ」と「強制終了」のどちらを選択したかによって異なります。「ログオフ」オプションと「強制終了」オプションを使用するすべての方法のリストについては、[685 ページ](#)の「セッションおよび要求の終了オプション」を参照してください。

次の列には、様々な情報が表示されます:

- ユーザー - Essbase サーバーに接続中のすべてのユーザーです。管理者ではない場合、保有するアプリケーション・マネージャ権限が有効なアプリケーションに接続しているユーザーのみ表示されます。
- セッション - セッション ID
- ログイン時間 - ユーザーが Essbase サーバーに接続している時間(時間:分:秒)です
- アプリケーション - 各ユーザーがアクセスしている各アプリケーションの名前です。サーバーに接続していても、アプリケーションを開始していないユーザーには、アプリケーション名が表示されません。アプリケーション名が表示されると、そのアプリケーションが明示的にシャットダウンされるまで表示され続けます。
- データベース - 各ユーザーがアクセスしている各データベースの名前です。サーバーに接続していても、データベースを開始していないユーザーには、データベース名が表示されません。データベース名が表示されると、そのデータベースが明示的にシャットダウンされるまで表示され続けます。
- DB 接続時間 - 各ユーザーが「アプリケーション/データベース」列で指定されているデータベースに接続している時間(時間:分:秒)です。
- 要求 - ユーザーが発行した要求のタイプ(計算、データベースの再構築、次元構築、クエリーなど)です。
- 要求時間 - 要求の処理されている時間(時間:分:秒)です。
- 要求状況 - 要求が実行中であるか、終了中であるか、終了済であるかが示されます。
- 接続元 - ユーザーのコンピュータの名前です。
- 接続 IP - ユーザーのコンピュータの IP アドレスです

要求を処理しているセッションを終了するには、「要求」列に示すとおり、「強制」オプションを選択します。

選択したセッションまたは要求を切断するには、「適用」をクリックします。

関連情報

- [319 ページの「アクティブなユーザー・セッションの表示」](#)
- [320 ページの「ユーザー・セッションおよび要求の切断」](#)

関連コマンド

- `display session(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `alter system(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「アクティブな別名テーブルの設定」ダイアログ・ボックス

「アクティブな別名テーブルの設定」ダイアログ・ボックスの「使用可能な別名テーブル」ボックスでは、コンソール・セッションのデータベースに対するデフォルトの別名テーブルとして機能する別名テーブルを選択します。別名が表示または更新される際には、default-alias-table 別名が使用されます。

このダイアログ・ボックスで設定した内容は、アウトライン・エディタ・セッションで表示される別名テーブルには影響を与えません。[アウトライン・エディタのアクティブな別名テーブルの設定](#)を参照してください。

関連情報

- [44 ページの「管理サービス・コンソール・セッションでのアクティブな別名テーブルの設定」](#)
- [189 ページの「アウトライン・エディタのアクティブな別名テーブルの設定」](#)
- Essbase データベースの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdefaultcalc(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- setdefaultcalcfile(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「データベース・ノートの設定」ダイアログ・ボックス

「データベース・ノートの設定」ダイアログ・ボックスを使用して、データベースにノートを添付します。データベース・ノートは、データベースのステータスや更新の期限をユーザーに通知するためなど、様々な目的に使用します。

ノートは「データベース・ノート」ボックスに入力します。ノートは、Spreadsheet Add-in のログイン・ダイアログ・ボックスからユーザーにブロードキャストされます。

関連情報

- [107 ページの「データベースへのコメント」](#)

関連コマンド

- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「デフォルト計算の設定」ダイアログ・ボックス

「デフォルト計算の設定」ダイアログ・ボックスを使用して、データベースのデフォルト計算を設定します。

次のオプションのいずれかを選択し、それぞれデフォルト計算として使用する計算スクリプトを選択するか、計算文字列を入力します:

- 計算スクリプトの使用
- 計算文字列の使用 - デフォルトの文字列は `CALC ALL;` です

関連情報

- [351 ページの「デフォルト計算の設定」](#)
- Essbase データベースの計算(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- `alter database(MaxL)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setdefaultcalc(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- `setdefaultcalcfile(ESSCMD)`(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

Provider Services プロパティ・ウィンドウ

Provider Services ウィンドウでは、Provider Services のプロパティを表示および編集できます。サーバー・レベルのプロパティを表示および編集するには、管理者権限が必要です。

このウィンドウには、次のタブがあります:

- [ロギング](#) - ログレベルの設定を指定します
- [設定](#) - セッションのタイムアウトの制限および1つのセッション中に取得される最大行数と最大列数を指定します
- [クライアントの配置](#) - Smart View クライアントのアップグレードの自動配置を使用可能にします

Provider Services プロパティ - 「クライアントの配置」タブ

「クライアントの配置」タブは、Smart View クライアントのアップグレードの自動配置を使用可能にするために使用します。

次のいずれかのオプションを選択します:

- Smart View クライアントにアップグレードを強制 - ユーザーにアップグレードを要求します。このため、ユーザーが Smart View の現バージョンを引き続き使用できなくなります

- Smart View クライアントにアップグレードを警告 - 新しいバージョンの Smart View が利用可能であることをユーザーに通知し、ユーザーが Smart View の現バージョンを引き続き使用できるようにします
- Smart View クライアントをアップグレードに適用 - 管理者が Oracle Hyperion Smart View for Office をアップグレードできるようにします。さらに、ユーザーにアップグレードについて通知しますが、Provider Services の再起動は要求しません

関連情報

- [690 ページの「Provider Services プロパティ - 「ロギング」タブ](#)
- [690 ページの「Provider Services プロパティ - 「設定」タブ](#)

Provider Services プロパティ - 「ロギング」タブ

「ロギング」タブは、ログのレベルを設定したり XML トレースを使用可能にするために使用します。

ログ・メッセージを記録および表示する場所を決定するには、次のオプションのいずれか、または両方を選択します:

- プロバイダのロギングを使用可能にする - ログ・ファイルにログ・メッセージを送信します(ファイルの場所は管理者が指定)
- プロバイダのコンソールにメッセージを表示 - 起動メッセージを表示する Provider Services コンソール・ウィンドウにログ・メッセージを送信します

いずれかの記録-表示オプションを選択すると、「プロバイダのロギングを使用可能にする」を選択できるようになるため、Smart View クライアントとプロバイダ間の XML 要求-応答の通信トレースが使用可能になります。

「最小ログ・レベル」リストで、最小ログ・レベルを選択します:

- 警告 - 警告、エラーおよび致命的メッセージ
- 情報 - 情報、警告、エラーおよび致命的メッセージ
- デバッグ - デバッグ、情報、警告、エラー、および致命的なメッセージ

関連情報

- [689 ページの「Provider Services プロパティ - 「クライアントの配置」タブ](#)
- [690 ページの「Provider Services プロパティ - 「設定」タブ](#)

Provider Services プロパティ - 「設定」タブ

「設定」タブの次のボックスで、目的の設定を指定します:

- セッションのタイムアウト(分):セッションがアクティビティなしの状態で行える時間(分)(デフォルトは 60)
- 最大行数 - 1つのセッションで取得できる最大行数(デフォルトは 5000)

- 最大列数 - 1 つのセッションで取得できる最大列数(デフォルトは 255)

関連情報

- 689 ページの「Provider Services プロパティ - 「クライアントの配置」タブ」
- 690 ページの「Provider Services プロパティ - 「ロギング」タブ」

Provider Services のセッション・ウィンドウ

Provider Services ウィンドウは、Oracle Hyperion Provider Services セッション(全ユーザー・セッション、特定ユーザーのセッションまたは特定のセッション・タイプ)を監視するために使用します。

どのようなセッションを表示するかを決定するには、次のいずれか、または両方のアクションを実行します:

- 「ユーザーのセッションを表示」オプションを選択し、ユーザー・リストから、監視するセッションを使用しているユーザーを選択します。
- 「次のタイプのセッションを表示」グループで、オプション(「JAPI」、「XMLA」または「SMARTVIEW」)を選択します。

次の列に、セッション情報(セッションごとに 1 行)が表示されます:

- 「セッション」: アクティブなセッション ID
- モード - 「サーバー」(スタンドアロン・サーバー・モード用)または「クラスタ」(分析クラスタ・モード用)
- セッション・タイプ - スタンドアロン・サーバーまたは分析クラスタのセッションからの要求のタイプ
- ユーザー - ユーザー ID
- Essbase サーバー - 要求元の Essbase サーバー・インスタンスの名前
- アプリケーション
- データベース
- 要求時間 - 最新の要求時間
- 要求 - 現在実行中の要求の名前(存在する場合)

「フィールドの分割」ダイアログ・ボックス

「フィールドの分割」ダイアログ・ボックスは、フィールドの内容を 2 つのフィールドに分割するために使用します。

「フィールド」ボックスには、選択したフィールドの名前が表示されます。

「列内の文字数」ボックスには、最初のフィールドに配置する文字数を入力します。たとえば、選択したフィールドに含まれている文字列が UPC100-10-1 の場合、

3を入力すると、左側のフィールドにUPCが、右側のフィールドに100-10-1が、それぞれ配置されます。

関連情報

- [239 ページの「フィールドの分割」](#)
- [234 ページの「フィールド操作について」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「SQL 接続」ダイアログ・ボックス

「SQL 接続」ダイアログ・ボックスは、SQL データベースに接続するために使用します。SQL データベースを使用してルール・ファイルの作成、データのロードまたは次元の構築を行うには、SQL データベースに接続する必要があります。

次のボックスで、接続情報を入力または選択します:

- ユーザー名 - データベースで使用するユーザー名
- パスワード - 使用するユーザー名のパスワード
- Essbase サーバー - SQL データベースのクライアントとして機能するインスタンス
- アプリケーション - SQL データベースのクライアントとして機能するアプリケーション
- データベース - SQL データベースへの接続に使用されるルール・ファイルを含むデータベース

接続すると、データ準備エディタの所定のタブで内容を確認できます。

関連情報

- [218 ページの「SQL データベースを開く」](#)
- [211 ページの「データ・ロードおよび次元構築」](#)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「サブセット」ダイアログ・ボックス

「サブセット」ダイアログ・ボックスは、パーティション内の領域を定義する際に、メンバーのサブセットにルールを適用するために使用します。まず、指定した条件を満たすメンバーを選択し、次に、条件ロジックの定義と条件式同士のグループ化を実行します。サブセット・オプションを使用することで、選択ルールをより柔軟に定義できます。

注: 設定できる条件は最大 50 件までです。

条件は、次のリストから選択して作成します:

- 最初のリストには、「[領域マッピング・メンバーの選択](#)」ダイアログ・ボックスで選択したメンバーが使用できるサブセット化の方法が表示されます。使用可能なオプションは、選択した表示方法によって異なります。
- 2番目のリストには、フィルタ処理条件が表示されます。IS を選択すると、条件を満たすメンバーが含まれます。IS NOT を選択すると、条件を満たすメンバーが除外されます。
- 3番目のリストには、最初と2番目のリストで選択したサブセット化の方法とフィルタ処理条件に関連付けられている値が表示されます。

「条件」ツリーに複数の条件を追加するには、「条件として追加」オプションを選択します:

- AND - 現在の条件とその前の条件が満たされている必要があります。
- OR - 現在の条件またはその前の条件が満たされている必要があります。

「条件」ツリーには、領域定義でメンバーを含めたり除外したりするために使用されるサブセット化の条件が表示されます。

「条件」ツリーに複数の条件を追加するには、「条件として追加」オプションを選択します:

- AND - 現在の条件とその前の条件が満たされている必要があります。
- OR - 現在の条件またはその前の条件が満たされている必要があります。

関連情報

- [427 ページの「パーティションの領域の定義」](#)
- [428 ページの「パーティションの領域を定義する際のメンバーの検索」](#)

代替変数ウィンドウ

代替変数ウィンドウを使用して、代替変数を作成、編集、削除します。

このウィンドウには次の列が表示されます:

- 「アプリケーション」 - 選択した Essbase サーバー・インスタンス上の 1 つまたはすべてのアプリケーションに変数を適用するには、個々のアプリケーションを選択するか、「(すべてのアプリケーション)」を選択します。
- データベース - 選択したアプリケーション内の 1 つまたはすべてのデータベースに変数を適用するには、それぞれ目的のデータベースまたは「(すべての DB)」を選択します。
- 変数 - 変数名を入力するか置換します。名前に一重引用符が含まれている場合は、各一重引用符の前にスラッシュを付けます。前にスラッシュがない一重引用符は破棄されます。
- 値 - 変数名を入力するか置換します。

このウィンドウには次のボタンが用意されています:

- 設定 - 選択した変数を作成または編集します。
- コピー - 他の Essbase サーバー・インスタンスに[変数をコピー](#)します。
- 削除 - 選択した変数を、選択した Essbase サーバー・インスタンスから削除します。
- リフレッシュ - ウィンドウ情報を更新します。

関連情報

- [93 ページの「代替変数の管理」](#)
- [92 ページの「電子メールによる Essbase 情報の送信」](#)

関連コマンド

- alter system(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter application(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- createvariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- deletevariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- listvariables(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- updatevariable(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「アウトラインの同期」ダイアログ・ボックス

「アウトラインの同期」ダイアログ・ボックスは、アウトラインの同期に含めるアウトライン変更タイプの選択に使用します。

同期中のアウトラインに関する情報は次のノードに表示されます:

- 「ターゲット・アウトライン」 および 「ソース・アウトライン」 - 関連付けられている Essbase サーバー名、アプリケーション名およびデータベース名が表示されます。変更の追跡方向によっては、同期プロセスとパーティションでターゲットとソースの定義が異なることがあります。
- 「ターゲット時間」 および 「ソース時間」 - アウトラインに最後に加えられた変更のタイム・スタンプ
- 同期 - アウトラインが同期されているかどうか

「次元」、「メンバー」、「メンバーのプロパティ」の各ノードでは、使用する変更タイプを選択します。

「次元」 および 「メンバー」 のオプション - たとえば、「次元」ノードで「追加」 および 「名前変更」 のみ選択した場合は、次元の挿入および名前変更による変更のみ含められます。

- 追加
- 削除

- 名前変更
- 移動
- 次元タイプの更新 - このオプションは次元にのみ適用されます。選択可能な次元タイプは、なし、勘定科目、時間、国、通貨パーティションおよび属性です。

「メンバーのプロパティ」のオプション - たとえば、「別名」および「集計」のみ選択した場合、別名タグや集計タグに影響する変更のみ含められます。

- 会計タイプ
- 別名
- 計算式
- 集計
- 通貨換算タグ
- 通貨カテゴリ
- データ・ストレージ
- UDA

すべてのオプションを選択する場合、オプションを何も選択しない場合、選択したオプションのみ選択する場合は、それぞれ「すべて選択」、「何も選択しない」、「適用」を選択します。

適用または拒否されたエントリをアウトライン変更ログ(.chg)から削除するには、「削除」ボタンをクリックします。エントリがすべて変更または削除された場合は、Essbaseによって.chg ログが削除されます。

関連情報

- [440 ページの「アウトラインの同期化」](#)
- アウトライン変更ログとその使用(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)

関連コマンド

- applyotlchange(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- getpartitionchanges(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- purgeotlchange(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)
- resetotlchangetime(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「トランザクション・リスト」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスは、ログに記録されたデータベース・トランザクションを表示したり、データベース復元のためデータベースを再実行する際に使用します。次のリストから再実行オプションを選択します:

- 「すべてのトランザクションを選択」 - 表示されているすべてのトランザクションを再実行するよう選択します。
- 「バックグラウンドで再実行」 - トランザクションの再実行をバックグラウンド・プロセスとして実行します。
- 「再実行」 - 選択したトランザクションの再実行とデータベースへの書き込みを開始します。

関連情報

- [117 ページの「ログに記録されたトランザクションの再実行」](#)
- [118 ページの「ログに記録されたトランザクションの表示」](#)
- トランザクション・ロギングの使用可能化およびトランザクションの再実行の構成(『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』内)

関連コマンド

alter database(MaxL)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

日時次元の作成ウィザード

日時次元の作成ウィザードでは、集約ストレージ・アウトライン内の時間次元の階層と属性を自動的に作成できます。

▶ 日時次元の作成ウィザードを使用するには:

- 1 アウトライン・エディタを開きます。
- 2 アウトライン・エディタ・ウィンドウで、集約ストレージ・アウトラインを右クリックします。
- 3 「日時次元の作成」を選択します。
- 4 「共通属性の選択」ページで、次のアクションを実行します:
 - 次元名を入力します。
 - 暦週の最初の日を選択します。
 - 目的の期間の開始日と終了日を選択します。

このページの詳細は、[701 ページの「日時次元の作成ウィザード - 共通属性の選択ページ」](#)を参照してください。

- 5 「次へ」をクリックします。
- 6 「カレンダー階層の追加」ページで、「追加」を選択します。

- 7 698 ページの「日時次元の作成ウィザード - 「カレンダー階層の選択」ページ」で、カレンダー階層のタイプを選択します。

カレンダー階層については、カレンダー・テンプレートの定義についての説明を参照してください。

- 8 必要に応じて、階層に変更を加えます(リンク変数属性(LVA)を使用可能にします)。
- 9 「OK」を選択して、「カレンダー階層の選択」ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 10 「次へ」を選択して、701 ページの「日時次元の作成ウィザード - 日付属性の選択ページ」を開きます。

次のページで、予約されている日(週末)と休日を入力します。このウィンドウの詳細は、日付属性の選択についての説明を参照してください。

関連情報

- 697 ページの「日時次元の作成ウィザード - カレンダー階層の追加ページ」
- 698 ページの「日時次元の作成ウィザード - 「ラベリング・ルール」の定義ページ」
- 698 ページの「日時次元の作成ウィザード - 「カレンダー階層の選択」ページ」
- 701 ページの「日時次元の作成ウィザード - 共通属性の選択ページ」
- 701 ページの「日時次元の作成ウィザード - 日付属性の選択ページ」
- 702 ページの「日時次元の作成ウィザード - 「リンク属性の選択」ページ」
- 集約ストレージの時間ベースの分析(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』)

日時次元の作成ウィザード - カレンダー階層の追加ページ

日時次元の作成ウィザード - カレンダー階層の追加ページは、カレンダー階層を作成、編集、または削除するために使用します。日時次元ではカレンダー階層を1つのみ持つことが可能です。

- 追加 - 698 ページの「日時次元の作成ウィザード - 「カレンダー階層の選択」ページ」が開きます。
- 編集 - 698 ページの「日時次元の作成ウィザード - 「カレンダー階層の選択」ページ」が開きます。
- 次へ - 日レベルのメンバーに対する共通属性を定義するための701 ページの「日時次元の作成ウィザード - 共通属性の選択ページ」が開きます。
- 終了 - 日時次元が作成されます。

日時次元の作成ウィザード - 「ラベリング・ルールの定義」ページ

「ラベリング・ルールの定義」ページで、日時次元メンバーの命名に使用するパターンを定義します。たとえば、「週」レベルからページを開く場合は、このページを使用して「週」レベルのメンバー用の名前フォーマットを定義します。

このページには次のセクションが表示されます:

- 時間レベル - ページの最も左側に表示されます。時間レベルのリストからは、名前フォーマット内に含める 1 つ以上の時間レベルを選択できます。
リストされている時間レベルは、ページが開かれた時間レベルよりも高レベルのものです。使用可能な時間レベルは太字で表示されます。
- メンバー名の例 - 「時間レベル」セクションの右側に表示されます。使用可能なフォーマットのリストから、目的のフォーマットを選択できます。
- 選択済フォーマット - メンバー名の例セクションの上に表示されます。選択に応じて使用されるメンバー名フォーマットが表示されます。メンバーの数に応じた範囲が表示されます。たとえば、週 1/12 は、メンバーの週番号が 1 から 12 の範囲にわたることを示します。

メンバー名の年の部分を、4 桁ではなく 2 桁で表示するには、「2 桁の年を使用します」オプションを選択します。

日時次元の作成ウィザード - 「カレンダー階層の選択」ページ

「カレンダー階層の選択」ページで、次のいずれかのカレンダー・タイプを選択します:

- [グレゴリオ暦](#)
- [会計](#)
- [リテール](#)
- [製造](#)
- [ISO 8601](#)

次に、このページのウィザードで、選択したタイプの階層が作成されます。このため、このウィザードで、階層構造とメンバーの命名ルールを定義できます。

選択したカレンダー・タイプに応じて、様々なセクションが表示されます。

時間レベル・ルール(すべての・カレンダー・タイプ)

階層にレベルを含めるには、レベルの横にあるチェック・ボックスを選択します。一部のレベルは一部のカレンダー・タイプでは使用できません。また、一部のレベルは他のレベルと組み合わせて使用できません。たとえば、半期と三半期は相互に排他的です。

時間レベルの選択内容によって、日時次元内に作成されるメンバーが定義され、年、月、または期間の特性の定義に使用できるセマンティック・ルールの特典が決定されます。

チェック・ボックスを選択すると、その関連レベルが展開されます。次に、下線の付いたラベリング・ルールを選択すると「ラベリング・ルールの定義」ダイアログ・ボックスが開き、選択したレベルの日時メンバーに適用する命名パターンを選択できます。意味のある命名パターンを採用し、また、重複しないメンバーのアウトラインの場合は、重複名を使用しないようにしてください。

年ルール(会計および製造タイプ)

開始時点または終了時点に基づいて1年を定義します。ほとんどの開始および終了オプションでは、月、週、または日などの詳細を指定する必要があります。

最初に、次のいずれかのオプションを選択します。次に、必須情報を指定します。たとえば、「年は指定日に始まる」を選択する場合、月および日を指定します。

- 「開始週 - 月内の番号」
- 「終了週 - 月内の番号」
- 年は指定日を含む週に始まる
- 年は指定日を含む週またはその直後の週から始まる
- 年は指定日に始まる

「年は指定日に始まる」オプションを選択する場合、「53週を強制する」オプションに続いて「52週を強制する」オプションを選択するか、「53週を強制する」オプションのみを選択できます。どちらのオプションでも、余った日を最初の週と最後の週のどちらかに結合するか、または、結合されていない日数が最も少ない場所によって余った週を決定する(自動マージ)かを指定できます。

選択したオプションによって、次のリストを使用できます:

- 月
- 週
- 日

月セマンティック・ルール(会計およびリテール・タイプ)

会計およびリテール・タイプの場合、次のいずれかのオプションを選択します。これらの各オプションは、選択した年オプションに基づいています:

- 指定された週番号で開始 - 「開始週 - 月内の番号」オプションに指定した週を使用します。
- 月は常に指定日(dd)を含む週に始まる - 「年は指定日を含む週に始まる」オプションに指定した日番号を使用します。
- 月は指定日(dd)を含む週またはその直後の週に始まる - 「年は指定日を含む週またはその直後の週から始まる」オプションに指定した日番号を使用します。
- 月は常に指定した日番号(dd)に始まる - 「年は指定日に始まる」オプションに指定した日番号を使用します。

- 月は常に指定した日番号(dd)に始まる - 年オプション「年は指定日に始まる」に指定した日番号を使用します。

リテール・タイプの場合、「四半期-月パターン」を選択し、四半期内で4週を含める月と5週を含める月、また、年内で6週を含める月を定義します。

期間ルール(製造タイプ)

製造カレンダーでは、12か月のかわりに13の期間を使用します。次のオプションごとに、値を選択します:

- 4期間ある四半期 - タブすべての期間には3つの期間があります。
- 5週ある期間 - タブすべての期間には4つの週があります。

「リンク属性の追加」ボタン

「リンク属性の追加」ボタンをクリックすると、[702 ページの「日時次元の作成ウィザード - 「リンク属性の選択」ページ](#)が開きます。このページで、日時次元にリンクする属性次元を作成します。

グレゴリオ暦カレンダー階層

グレゴリオ暦カレンダーは、1月1日から始まり12月31日で終了する標準的な12か月のカレンダーです。グレゴリオ暦カレンダーでは、年、半期、三半期、四半期、月、週、および日の各期間にメンバーを含められます。

会計カレンダー階層

会計カレンダーは財務報告要件に基づいており、任意の日付で開始できます。会計カレンダーには、次の期間のメンバーを含めることができます: 年、半期、三半期、四半期、月、週、日。

カレンダーの作成時には、年がまず週、次に月へと分割されます。

たとえば、1週間が7日で定義される、四半期-月パターンに基づいたカレンダーがあるとします。1年が52週の場合、12か月の報告期間内には、4週間の月が2つと5週間の月が1つの組合せが4回繰り返されます。各四半期には、3か月のパターン(4-4-5、4-5-4または5-4-4週)を選択します。1年が53週の場合は、追加の週が1つ含まれます。

注: 月が特定の日付で始まり、その日付が週の半ばにある場合、その週は2つの週に分割されます。その結果、年に含まれる週の数が増える場合があります。

リテール・カレンダー階層

リテール・カレンダーは、NRF(全米小売業協会)をベースに普及しており、複数年にわたって前週比データを分析します。このカレンダーでは4-5-4週の四半期パターンを採用しており、5年から6年ごとにうるう週が含まれます。開始日は年ごとに異なりますが、常に2月の初旬となります。2つの年の比較を行う場合は、通

常、両方の年を、同じ休日数を含むよう標準化するため、53 週ある年の最初の週が除外されます。

リテール・カレンダーでは、年、半期、四半期、月、週および日の各期間にメンバーを含められます。

製造カレンダー階層

製造カレンダーでは、13 期間の年と 7 日間の週を定義します。期間は、それぞれ 3 期間で構成される 3 四半期と 4 期間で構成される 1 四半期にグループ化されます。53 週の年では、1 つの期間に 1 週多く含まれます。

13 の期間を定義する際に、どの四半期に 1 期間多く含めるかを指定します。53 週ある年の場合は、どの期間に 1 週多く含めるかを指定します。年を開始する日付を指定する場合は、その年が 53 週あるのか 52 週なのかを示す必要があります。52 週のカレンダーの場合、カレンダーはまず 53 週にグループ化され、その後で 52 週に調整されます。

ISO カレンダー階層

ISO 8601 カレンダーは 7 日間からなる週を使用します。年はグレゴリオ暦の新年の開始日(1 月 1 日)の前または後から開始できますが、開始日を含む週にグレゴリオ暦の年の最初の木曜日が含まれるようにする必要があります。週は月曜日から開始されます。ISO 8601 カレンダー階層には、年、週および日の各期間にメンバーを含められます。

日時次元の作成ウィザード - 共通属性の選択ページ

このページは、集約ストレージ・アウトラインの日時次元の命名、暦週の最初の日の選択、およびメンバーが作成されるモデリング期間の選択に使用します。

次のボックスで、目的の情報を入力します:

- 日時次元名
- 週最初の日 - カレンダーを開始する暦週の日
- モデリング期間 - メンバーが作成される期間の開始日と終了日。各フィールドの横には、下向き矢印が表示されます。矢印をクリックすると、カレンダーの日付の選択インタフェースを使用できます。

日時次元の作成ウィザード - 日付属性の選択ページ

このページは、作成対象の日時次元の日レベル・メンバーに属性を関連付けるために使用します(アウトラインに日レベル・メンバーが含まれる場合)。

▶ 日レベル・メンバーに関連付ける属性を含むテキスト型の属性次元を指定するには:

- 1 「日モデリングの実行」オプションを選択します。
- 2 「日ラベル」ボックスに、テキスト属性次元の名前を入力します。

▶ 「予約日数」を指定する手順は、次の通りです:

- 1 ブール属性次元に関連付ける曜日(日曜日、月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日)を選択します。
- 2 選択した各曜日の横で、日ラベル(曜日に関連付けるテキスト属性の名前)を指定します。

同じラベルを複数回使用できます。たとえば、土曜日と日曜日を結び付けるために、Weekend というラベルを使用できます。この場合、土曜日と日曜日の値には Weekend_True が表示され、他の曜日では Weekend_False と表示されます。

「休日」リストは、ブール属性次元に関連付けられた特別な日を示します。次の休日リスト・アクションを実行できます:

- 日付の追加 - カレンダー・ツールを使用して、日付を選択します。次に、「追加」ボタンをクリックします。
- 休日ラベルの適用 - 休日を選択してから、休日に関連付けるテキスト属性の名前を入力します。
- 日付の削除 - 日付を選択してから、「削除」ボタンをクリックします。

「戻る」ボタン(697 ページの「日時次元の作成ウィザード - カレンダー階層の追加ページ」に戻る)または「終了」ボタン(ウィザードを閉じて日時次元を作成する)のどちらを選択しても、選択内容は保持されます。

日時次元の作成ウィザード - 「リンク属性の選択」ページ

このウィザードを使用すると、属性次元を日時次元にリンクできるため、日時メンバーの周期性に基づく分析を実行できるようになります。

周期性とは、日時次元のメンバーによって共有されるパターンと定義され、時間に基づく分析を可能にします。たとえば、1月と4月はグレゴリオ暦カレンダーの四半期において最初の月であるため、1月と4月はパターンを共有します。このため、1月と4月には"Month By Quarter: 1"という属性に関連付けることができます。リンク属性を使用すると、たとえば、四半期または年の初めまたは終わりの時点で売上が向上しているかどうかを確認できます。

「リンク属性の選択」ページには、「カレンダー階層の選択」ダイアログ・ボックスで選択した時間レベルに基づいて指定可能なすべてのクロス集計の組合せが表示されます(例: 年の四半期ごと、年の月ごと、および四半期の月ごと、など)。

表示されているすべての属性をリンクするには、すべての属性を選択オプションを選択します。これ以外の場合は、リンクする属性を選択します。

次のボックスでは、選択したリンク属性次元の名前または別名を変更できます:

- 次元名
- 別名の接頭辞 - これ以降、属性名には別名の接頭辞が付けられます。

「オブジェクトのロック解除」ダイアログ・ボックス

「オブジェクトのロック解除」ダイアログ・ボックスの列には、アプリケーションまたはデータベースのロック済オブジェクトに関する情報が表示されます:

- オブジェクト名
- オブジェクト・タイプ - レポート・スクリプトやアウトラインなど
- ロックしたユーザー - オブジェクトをロックしているユーザーの名前
- ロック時刻 - オブジェクトがロックされた日付と時刻

保有するセキュリティ権限に応じて、オブジェクトを表示し、ロックを解除できます。権限の詳細は、[269 ページの「セキュリティと権限について」](#)を参照してください。

関連情報

- [111 ページの「オブジェクトのロックおよびロック解除」](#)
- [102 ページの「Essbase のデフォルトのオプションの設定」](#)

関連コマンド

unlockobject(ESSCMD)(『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』内)

「アウトラインの更新」ダイアログ・ボックス

「アウトラインの更新」ダイアログ・ボックスは、メンバーをブロック・ストレージにロードして次元を構築するために使用します。

「タイプ」グループでは、「SQL」を選択するか(SQL データベースをデータ・ソースとして使用)または「データ・ファイル」を選択します(ファイルをデータ・ソースとして使用)。その後、次のいずれかのアクションを実行します:

- 「SQL」を選択した場合は、「SQL ユーザー」および「SQL パスワード」ボックスに、SQL データベースのユーザー名とパスワードを入力します。
- 「データ・ファイル」オプションを選択した場合は、1 つ以上のデータ・ファイルを探して選択します。

選択したファイルが「データ・ファイル」ボックスに一覧表示されます。データ・ファイルを選択する際には、次の点に留意してください:

- Essbase サーバー上に保存されているファイルを探す場合は、「データ・ファイルの検索」ボタンをクリックします。
- Essbase サーバー上に保存されているデータ・ソースとデータのロード先データベースは、同じディレクトリ上にある必要があります。
- 保存先が Essbase サーバー上ではないファイルを探すには、「ファイル・システム」タブを使用します。
- ファイルを削除するには、目的のファイルを選択し、「削除」ボタンをクリックします。

アウトラインはルール・ファイルを使用して動的に更新されるため、「ルールの使用」オプションが選択された状態となり、解除できないようになっています。アウトラインが動的に更新されない場合は、このオプションを選択することによって動的な更新を有効にできます。

選択したルール・ファイルのパスと名前は「ルール・ファイル」ボックスに表示されます。ルール・ファイルを選択する際には、次の点に留意してください:

- Essbase サーバー上に保存されているルール・ファイルを探す場合は、「ルール・ファイルの検索」ボタンをクリックします。
- Essbase サーバー上に保存されているルール・ファイルとデータのロード先データベースは、同じディレクトリ上にある必要があります。
- 保存先が Essbase サーバー上ではないファイルを探すには、「ファイル・システム」タブを使用します。

エラーの処理方法を指定するには、次のアクションを実行します:

- 「エラー・ファイル」ボックスに、エラーの書き込み先を指定します。このオプションは、「ルール・ファイルの使用」が選択されていると使用可能になります。このオプションが選択されていない場合、エラーは管理サービス・コンソールがインストールされているマシンの `aaspath\client` ディレクトリに書き込まれます。
- 「上書き」オプションを選択します。エラー・ファイルの内容の上書きを選択すると、アウトラインを修正し、エラー・ファイルをデータ・ソースとして使用して、過去の拒否済レコードをロードできるようになります。

関連情報

[213 ページの「ルール・ファイルを使用したアウトラインの動的な更新」](#)

「ユーザー・プロパティ」(管理サーバー)ウィンドウ

「ユーザー・プロパティ」ウィンドウで、Essbase 管理サーバーのユーザーのプロパティを表示および編集します。

- [ユーザー情報](#) - ユーザー名、パスワード、権限などの情報を表示および編集します。

- [Essbase サーバー](#) - ユーザーのエンタープライズ・ビューで Essbase サーバー・インスタンスを追加または削除します。

関連情報

- [63 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーの作成」](#)
- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)
- [エンタープライズ・ビューのユーザー設定ウィザードからの Essbase サーバーの削除](#)
- [36 ページの「Administration Services の設定」](#)

ユーザー・プロパティ・ウィンドウ - 「Essbase サーバー」タブ

「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックスの「Essbase サーバー」タブのアイテムは、ユーザーのエンタープライズ・ビューで Essbase サーバー・インスタンスを追加または削除するために使用できます:

- Essbase ノード - Essbase サーバーがインストールされているコンピュータの名前を入力または選択してインスタンスを追加します:
 - Essbase サーバーのコンピュータ名と Essbase 管理サーバーのコンピュータ名は異なってもかまいません。
 - "localhost"は使用しないでください。この名前を使用すると、パーティションを表示する際や、管理サービス・コンソールと Essbase 管理サーバーを別のコンピュータで実行する際に問題が発生する原因となる可能性があります。
 - サーバー名またはクラスタ名のいずれかを選択できます。
 - エージェント・ポートにデフォルトのポート値が割り当てられていない場合、ServerMachineName:Port#(jdoe2:4378 など)というフォーマットでポート値を指定できます。
- ユーザー名 - Essbase に定義されているとおりに正確に名前を入力します。
- 「パスワード」と「パスワードの確認」 - [外部認証](#)されているユーザーのパスワードを入力します。
- SSL を使用 - SSL 暗号化を使用して接続します。
- 設定 - クリックすると、ユーザー名およびパスワードが Essbase サーバーまたは外部認証ソースに照会されます。
- 削除 - クリックすると、選択したインスタンスがユーザーのエンタープライズ・ビューから削除されます。
- 「適用」と「リフレッシュ」 - それぞれクリックすると、設定が適用されるか、最後に「適用」をクリックしたときに有効だった設定に戻されます。

関連情報

- [48 ページの「エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの追加」](#)

- [704 ページの「ユーザー・プロパティ」\(管理サーバー\)ウィンドウ](#)
- [707 ページの「ユーザー設定ウィザード」](#)

ユーザー・プロパティ・ウィンドウ - 「ユーザー情報」タブ

注： このタブは EPM System セキュリティ・モードでは読取り専用です。

「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックスの「ユーザー情報」タブのアイテムは、Administration Services ユーザーに関する情報を表示および変更するために使用します:

- ネイティブ - ネイティブの Administration Services 認証を可能にします(デフォルトで選択されています)。
「ネイティブ」を選択した場合は、ユーザーの Administration Services パスワードを入力および確認する必要があります。
- 外部 - [外部認証](#)を使用可能にすることにより、ユーザー名、姓名、または電子メール・アドレスによる外部ユーザーの検索を可能にします。

テキスト・ボックスは、「ネイティブ」を選択した場合にのみ使用できます:

- ユーザー名 - 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』に規定されている長さを超えることはできません。大文字と小文字は区別されず、円記号(バックslash)を除く任意の特殊文字を使用できます。
- 「パスワード」と「パスワードの確認」 - 大文字と小文字は区別されず、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』に規定されている長さを超えることはできません

ボタンは、「外部」を選択した場合にのみ使用できます: 検索

アイテムは、「ネイティブ」と「外部」のどちらを選択しても使用できます:

- 「電子メールのフル・ネーム」と「電子メール・アドレス」 - ユーザーが管理サービス・コンソールから他の管理者やテクニカル・サポートに電子メールで情報を送信する際に使用されます。
- 管理者権限 - ユーザーに管理者権限を与えるかどうかに応じて「TRUE」または「FALSE」です。(ユーザーの Essbase サーバー権限には影響しません。)

関連情報

- [704 ページの「ユーザー・プロパティ」\(管理サーバー\)ウィンドウ](#)
- [64 ページの「Essbase 管理サーバーのユーザーのパスワードの変更」](#)
- [65 ページの「Essbase 管理サーバー・ユーザーの名前変更」](#)
- [707 ページの「ユーザー設定ウィザード」](#)

ユーザー設定ウィザード

このウィザードは、Essbase サーバーが [EPM System セキュリティ・モード](#) で実行されている場合は使用できません。

Administration Services ユーザーの作成または編集、およびそれらのユーザーの Essbase サーバー・アクセスの設定または変更を行うには、ユーザーの設定ウィザードを使用します。1 回のウィザードの起動で処理できる Administration Services ユーザーは 1 ユーザーのみです。

ユーザーを作成する場合は、最初のページでユーザー名を入力するか、外部のユーザーを検索し、後続のページでユーザー情報を定義したり、プロパティを設定します。ユーザーを編集する場合は、最初のページで既存のユーザー名を指定し、後続のページでそのユーザーの情報を変更したり、プロパティを設定します。

このウィザードの使用方法は、所有している権限によって異なります：

- 新しい Administration Services ユーザーを作成するには、Essbase 管理サーバーの管理者権限が必要です。
- 新しい Essbase サーバー・ユーザーを作成するには、Essbase サーバーの管理者権限か、ユーザーおよびグループの作成/削除権限が必要です。
- 既存の Administration Services ユーザーのプロパティを編集するには、Essbase 管理サーバーの管理者権限が必要です。管理者以外のユーザーは、自身のパスワード、電子メール情報、および Essbase サーバーのリストを編集できます。

ユーザー設定ウィザードの使用については、次のトピックを参照してください：

- [707 ページの「ユーザー設定ウィザードの起動」](#)
- [707 ページの「ユーザー設定ウィザード・ページ」](#)

関連情報

- [33 ページの「Administration Services について」](#)
- [87 ページの「Essbase サーバーへの接続」](#)
- [88 ページの「Essbase サーバーからの切断」](#)

ユーザー設定ウィザードの起動

- ▶ ユーザー設定ウィザードを起動するには、「ウィザード」 > 「ユーザーの設定」を選択します。

ユーザー設定ウィザード・ページ

下のリンクをクリックすると、ウィザードの各ページに関する情報が表示されます：

- [管理サーバーのユーザー名](#)
- [管理サーバーのユーザー情報](#)

- Essbase サーバー接続
- Essbase サーバーでのユーザーの作成の確認
- Essbase サーバーのユーザー情報
- 設定の完了

ユーザー設定ウィザード - 管理サーバーのユーザー名ページ

このページでは、ユーザーの Essbase 管理サーバーのユーザー名を指定します。

Administration Services ユーザーを編集する場合は、「ユーザー名」ボックスに Essbase 管理サーバー・ユーザー名を入力します。

Administration Services ユーザーを作成する場合は、次のいずれかのアクションを行います:

- 「ユーザー名」ボックスで、Essbase 管理サーバー・ユーザー名を入力します。管理サーバー・ユーザー名は、Essbase サーバー・ユーザー名と同じである必要はありません。

ユーザー名は命名規則に従っている必要があります。ユーザー名は、文字または数字で始め、2 個以上のワイルドカード文字を含めないでください。大文字と小文字は区別されません。長さ制限を超えないようにしてください。(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照)。

- 「外部ユーザーの検索」オプションを選択し、ユーザー名(「ユーザーによる検索」オプションを選択)、名前(「名前による検索」オプションを選択)、または電子メール・アドレス(「電子メールによる検索」オプションを選択)を基準に検索を実行します。

ユーザー名は、文字(たとえば、H*など)で始める必要があります、2 個以上のワイルドカード文字(たとえば、H*_J*)を含めることはできません。名前および電子メール・アドレスに、ワイルドカードを含めることはできません。

Administration Services ユーザーを作成する場合は、次のいずれかのオプションを選択します:

- ネイティブ・ユーザーの作成 - ユーザーをネイティブ Administration Services ユーザーとして作成します。
- 外部ユーザーの作成 - ユーザーを外部 Administration Services ユーザーとして作成します。

注: 外部ユーザーのオプションは、システムで外部認証が構成されている場合のみ選択可能です。

ユーザー設定ウィザード - 管理サーバーの外部検索の結果

外部ユーザーを検索すると、このページが表示され、検出された外部ユーザーがリストされます。

このページでは、ユーザーを選択します。

ユーザー設定ウィザード - 管理サーバーのユーザー情報ページ

このページでは、ユーザーの Essbase 管理サーバー・ユーザー名が「ユーザー名」ボックスに表示されます。

次のボックスで、ユーザーの情報を入力または選択します:

- 電子メールのフル・ネームおよび電子メール・アドレス - ユーザーが管理サービス・コンソールから他の管理者またはテクニカル・サポートに情報を電子メールで送信するときに使用される名前およびアドレス(92 ページの「[電子メールによる Essbase 情報の送信](#)」を参照)
- パスワードおよびパスワードの確認 - 外部認証のユーザーの場合は必要なパスワードの大文字と小文字は区別されず、ユーザーの Essbase サーバー・パスワードと同じである必要もありません。長さの制限については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
- 管理者権限 - 「TRUE」または「FALSE」
管理者権限を持つユーザーは、Essbase 管理サーバー・ユーザーを作成、変更および削除でき、任意のエンタープライズ・ビューに表示される Essbase サーバー・インスタンスのリストを変更できます。管理者権限のないユーザーは、自身の Essbase 管理サーバー権限を変更できません。この設定は、ユーザーの Essbase サーバー権限には影響しません。
- ユーザー・タイプ - 「ネイティブ認証の使用」または「外部認証の使用」
 - 外部認証が構成されておらず、Administration Services でユーザーが内部認証される場合は、「ネイティブ認証の使用」オプションを選択します。
 - **外部認証**が構成されており、ユーザーの Administration Services ログイン情報がアプリケーションの外部に保管されている場合は、「外部認証の使用」オプションを選択します。

ユーザー設定ウィザード - 「Essbase サーバー接続」ページ

このページでは、ユーザーのエンタープライズ・ビューに表示する Essbase サーバー・インスタンスを指定します。これを行うには、Administration Services ユーザーを Essbase サーバー・ユーザーにマップします。各 Administration Services ユーザーには、固有のエンタープライズ・ビューが存在します。

次の列では、次のアクションを行います:

- Essbase サーバー - 基本の Essbase サーバー・インスタンスがインストールされているコンピュータの名前を入力します。この名前は、Essbase 管理サーバーがインストールされているコンピュータの名前と同じである場合があります。「localhost」という名前は使用しないでください。パーティションが表示された場合や、Essbase 管理サーバーおよび管理サービス・コンソールが異なるコンピュータで実行されている場合に、問題が発生する場合があります。現在のエージェント・ポート値がデフォルト値以外である場合、ServerMachineName:port(例、jdoe2:4378)というフォーマットで現在の値を指定する必要があります。

- ユーザー名 - 基本の Essbase サーバー・インスタンスとまったく同じユーザーの Essbase サーバー・ユーザー名を入力します。

注： ユーザーが Essbase サーバー・インスタンスに存在しない場合は、ウィザードでユーザーを作成できます。

- パスワード - ユーザーが外部認証される Essbase サーバー・インスタンスの場合、Essbase サーバー・インスタンスとまったく同じユーザーの Essbase サーバー・パスワードを入力します。
- パスワードの確認 - 入力したパスワードを再入力します。

ユーザー設定ウィザード - Essbase サーバーでのユーザーの作成の確認ページ

このページには、「Essbase サーバー接続」ページにリストされている Essbase サーバー・インスタンス上に現在存在しないユーザーがリストされます。

作成確認では、リストされているユーザーの作成を確認し、ユーザーの情報を Essbase 管理サーバーに保存するかどうかを確認します。「Essbase サーバー接続」ページで入力したユーザー名およびパスワードを使用して、インスタンス 1 つに 1 人の Essbase サーバー・ユーザーが作成されます。

次の読取り専用の列に、ユーザー情報が表示されます：

- Essbase サーバー - ユーザーが作成される Essbase サーバー・インスタンスの名前
- ユーザー名 - Essbase サーバー・ユーザー名

注： ユーザー名を変更するには、「接続」ページに戻ります。

次の列で、各オプションを選択または選択を解除します：

- 情報の保存 - ユーザーの Administration Services および Essbase サーバーの接続情報を Essbase 管理サーバーに保存する場合は、このオプションを選択します。
- ユーザーの作成 - Essbase サーバー・インスタンスへのユーザーの作成を確認する場合は、このオプションを選択します。このオプションは、ユーザーが存在しない Essbase サーバー・インスタンスに対してのみ選択可能です。

「作成不能」メッセージが表示される場合、ユーザーを作成する Essbase サーバー・インスタンスへのアクセス権がないか、ユーザーを作成する Essbase サーバー・インスタンスが実行されていません。

ユーザー設定ウィザード - Essbase サーバーのユーザー情報ページ

このページでは、Essbase サーバー・ユーザーを認証するときに使用するモデルを選択し、各ユーザーのユーザー・タイプを選択します。

各 Essbase サーバー・ユーザーに、次のいずれかの「認証モデル」オプションを選択します:

- Essbase サーバー認証 - ネイティブ Essbase サーバー認証を有効にして、Essbase サーバー・セキュリティの一部としてユーザーを作成および保存する場合は、このオプションを選択します。
- 外部認証 - ユーザーの外部認証を有効にする場合は、このオプションを選択します。このオプションは、Essbase サーバー・インスタンスで外部認証が有効になっている場合にのみ選択可能です。

選択したモデル・オプションに従って、次の一部またはすべての情報を入力するか、いずれの情報も入力しない場合があります:

- ユーザーに「Essbase サーバー認証」オプションを選択した場合、「接続」ページで入力した Essbase サーバー・パスワードを入力し、確認のため再入力します。パスワードを変更する場合は、「接続」ページに戻ります。
- Essbase サーバー・インスタンスに対する管理者権限またはユーザーおよびグループの作成/削除権限がある場合は、「パスワードの変更プロンプトを表示」オプションを選択できます。このオプションを選択すると、ユーザーが次回ログインするときに、パスワード変更を求めるプロンプトが表示されます。オプションの選択を解除すると、ユーザーは割り当てられたパスワードを保持します。デフォルトでは、このオプションは選択されていません。

Essbase サーバー・ユーザーの場合、「ユーザー・タイプ」グループで次のいずれかのオプションを選択します:

- 管理者 - ユーザーに Essbase サーバー・インスタンス上のすべてのユーザー、グループ、およびデータに対するフル・アクセス権限を付与します。
- ユーザー - いずれの継承権限も付与しません。このため、ユーザーは作成/削除権限、グループ・メンバーシップ、アプリケーションまたはデータベース権限、またはフィルタによってアクセスが許可されないかぎり、一切のアクセス権限を持ちません。

ユーザーおよびグループの作成/削除権限、またはアプリケーションの作成/削除権限、あるいはその両方を付与できます。Essbase サーバー・インスタンス上のユーザーのプロパティを編集すると、特定のアプリケーションおよびデータベースに対する権限をユーザーに付与し、ユーザーのメンバーシップをグループで管理することもできます。

ユーザー設定ウィザード・セットアップの完了ページ

このページでは、設定が完了したことを確認します。

ウィザードを再起動して別の Administration Services ユーザーを作成する場合は、「別のユーザーの作成」オプションを選択します。

ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ

このウィンドウは、アプリケーションおよびデータベースに対するユーザーおよびグループの権限を編集するために使用します。次のことを変更できます:

- アクセス
- セキュリティ・フィルタの割当て
- 計算スクリプトの権限

これらの権限は、エンタープライズ・ビューの「Essbase サーバー・セキュリティ」ノードの下で「ユーザーとグループ」からも編集できます。詳細は、[272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)を参照してください。

このウィンドウにアクセスするには、エンタープライズ・ビューでアプリケーション名またはデータベース名を右クリックします。

関連情報

- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [289 ページの「ユーザーおよびグループの計算権限の管理」](#)
- [307 ページの「フィルタの管理」](#)

ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ - 「グループ」タブ

このタブは、アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ権限をセキュリティ・グループ内のユーザーに付与するために使用します。

- アプリケーションおよびデータベースの階層ツリー・ビュー - ユーザーまたはグループ権限を使用して処理するアプリケーションまたはデータベースを選択します。
- 割り当てられたグループの表示 - 選択したアプリケーションまたはデータベースの現在のアクセス権限を持つグループのみを表示します。
- アプリケーションのアクセス - 現在のアプリケーション・アクセス権限。オプションを選択して変更します:
 - なし - グループ内のユーザーに、選択したアプリケーションまたはデータベースのアクセス権限を付与しません。ただし、アプリケーションまたはアプリケーション内のいずれかのデータベースに「なし」よりも高い最小権限が設定されている場合、または特定のセルに関してより高い権限を与えるようなフィルタがユーザーに与えられている場合は、そのアクセス権がユーザーに付与されます。
 - データベース・アクセス - グループ内のユーザーがアプリケーション内の各データベースのユーザーに個別の権限を付与できるようにします。
 - アプリケーション・マネージャ - グループ内のユーザーに対して、選択したアプリケーションについてのみ、管理者の使用できる権限のほとんどを

付与します。ユーザーはアプリケーションへのフル・アクセス権限を持ち、このアプリケーションに対して次のタスクを実行できます:

- データベースを作成および削除します。
- ユーザーを切断します。
- フィルタを定義して割り当てます。
- データのロックを解除します。

設定されている権限がアプリケーション・マネージャの場合は、権限を変更することはできません。

- データベースのアクセス - 現在のデータベースのアクセス権限が表示されます。アプリケーションが選択されている場合は無効です。アクセス権限を変更するには、オプションを選択します:
 - なし - 選択したデータベース内のオブジェクトまたはデータ値へのアクセス権を削除します。
 - フィルタ - グループ内のユーザーに、選択したデータベースでそのユーザーに割り当てられたフィルタで定義されているアクセス権限を付与します。ユーザーに割り当てられたフィルタを選択できます。
 - 読取り - データベースの読取り専用アクセス権限をグループ内のユーザーに付与します。この権限には、レポート・スクリプトの実行権限は含まれていますが、変更権限は含まれていません。
 - 書込み - データベース内のデータ値の読取り権限および更新権限(計算権限は除く)をグループ内のユーザーに付与します。この権限には、Essbase オブジェクトの実行権限は含まれていますが、変更権限は含まれていません。
 - 計算 - データベース内のデータ値の読取り権限、更新権限、および計算権限をグループ内のユーザーに付与します。データベースに対してユーザーが実行できる特定の計算スクリプトを選択できます。[514 ページの「計算の割当て」ダイアログ・ボックス](#)を参照してください。
 - データベース・マネージャ - データベース内のデータ値の読取り、更新、計算の各権限と、データベースに関連するすべてのファイルを変更する権限をグループ内のユーザーに付与します。データベース・マネージャは、データベースに対してあらゆる計算スクリプトを実行する権限を持ちます。
- フィルタ - 選択したデータベースに対してグループに関連付けられているフィルタが表示されます。「データベースのアクセス」権限で「なし」以外を選択した場合に、「フィルタ」ノードでフィルタを選択できます。
- 計算の割当て - グループ内のユーザーが実行できる計算スクリプトを選択します。「計算の割当て」ダイアログ・ボックスが開きます。「データベースのアクセス」権限が「計算」である場合に有効です。

関連情報

- [712 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)

- 280 ページの「Essbase サーバーのグループの作成」
- 293 ページの「グループ・プロパティの編集」
- Essbase サーバーでのグループの作成/編集ダイアログ・ボックス

ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ・「ユーザー」タブ

このタブのアイテムは、アプリケーションおよびデータベースのセキュリティ権限をユーザーに付与するために使用します:

- アプリケーションおよびデータベースの階層ツリー・ビュー・ユーザーまたはグループ権限を使用して処理するアプリケーションまたはデータベースを選択します。
- 割り当てられたユーザーの表示 - 選択したアプリケーションまたはデータベースの現在のアクセス権限を持つユーザーのみを表示します。
- アプリケーションのアクセス - 現在のアプリケーション・アクセス権限。オプションを選択して変更します:
 - なし - ユーザーに、選択したアプリケーションまたはデータベースのアクセス権限を付与しません。ただし、アプリケーションまたはアプリケーション内のいずれかのデータベースに「なし」よりも高い最小権限が設定されている場合、または特定のセルに関してより高い権限を与えるようなフィルタがユーザーに与えられている場合は、そのアクセス権がユーザーに付与されます。
 - データベース・アクセス - ユーザーがアプリケーション内の各データベースのユーザーに個別の権限を付与できるようにします。
 - アプリケーション・マネージャ - ユーザーに対して、選択したアプリケーションについてのみ、管理者の使用できる権限のほとんどを付与します。ユーザーはアプリケーションへのフル・アクセス権限を持ち、このアプリケーションに対して次のタスクを実行できます:
 - データベースを作成および削除します。
 - ユーザーを切断します。
 - フィルタを定義して割り当てます。
 - データのロックを解除します。

設定されている権限がアプリケーション・マネージャの場合は、権限を変更することはできません。

- データベースのアクセス - 現在のデータベースのアクセス権限が表示されません。アプリケーションが選択されている場合は無効です。アクセス権限を変更するには、オプションを選択します:
 - なし - 選択したデータベース内のオブジェクトまたはデータ値へのアクセス権を削除します。
 - フィルタ - ユーザーに、選択したデータベースでそのユーザーに割り当てられたフィルタで定義されているアクセス権限を付与します。ユーザーに割り当てられたフィルタを選択できます。

- 読取り - データベースの読取り専用アクセス権限をユーザーに付与します。この権限には、レポート・スクリプトの実行権限は含まれていますが、変更権限は含まれていません。
- 書込み - データベース内のデータ値の読取り権限および更新権限(計算権限は除く)をユーザーに付与します。この権限には、Essbase オブジェクトの実行権限は含まれていますが、変更権限は含まれていません。
- 計算 - データベース内のデータ値の読取り権限、更新権限、および計算権限をユーザーに付与します。データベースに対してユーザーが実行できる特定の計算スクリプトを選択できます。514 ページの「[計算の割当て](#)」ダイアログ・ボックスを参照してください。
- データベース・マネージャ - データベース内のデータ値の読取り、更新、計算の各権限と、データベースに関連するすべてのファイルを変更する権限をユーザーに付与します。データベース・マネージャは、データベースに対してあらゆる計算スクリプトを実行する権限を持ちます。
- フィルタ - 選択したデータベースに対してユーザーに関連付けられているフィルタが表示されます。「データベースのアクセス」権限で「なし」以外を選択した場合に、「フィルタ」ノードでフィルタを選択できます。
- 計算の割当て - 選択したユーザーが実行できる計算スクリプトを選択します。「計算の割当て」ダイアログ・ボックスが開きます。「データベースのアクセス」権限が「計算」である場合に有効です。

関連情報

- [712 ページの「ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ」](#)
- [269 ページの「セキュリティと権限について」](#)
- [287 ページの「アプリケーションおよびデータベースに対するユーザー/グループ権限の管理」](#)
- [292 ページの「Essbase サーバー・ユーザーのプロパティの編集」](#)
- [289 ページの「ユーザーおよびグループの計算権限の管理」](#)
- [307 ページの「フィルタの管理」](#)

ユーザー・ウィンドウ

ユーザー・ウィンドウは、ウィンドウのタイトル・バーに表示されている Essbase サーバー・インスタンス上のユーザーを管理するために使用します。

注： このウィンドウは、Essbase サーバーが [EPM System](#) セキュリティ・モードの場合、読取り専用です。

次の列には、一覧表示されているユーザーに関する情報が表示されます。Essbase サーバーが EPM System セキュリティ・モードではない場合、1 人以上のユーザーを選択したり各種フィールドを変更したりできます。ほとんどの操作は、複数のユーザーに対して同時に行うことができます。

- ユーザー名

- ユーザー・タイプ - 「管理者」 (Essbase サーバー上のすべてのユーザー、グループおよびデータに対するフル・アクセス権限) または 「ユーザー」 (一切のアクセス権なし。ただし、作成/削除権限、グループ・メンバーシップ、アプリケーション権限、データベース権限またはフィルタによって権限が付与された場合を除く)
- アプリケーション・アクセス・タイプ - ユーザーがアクセスできるアプリケーション (286 ページの「ユーザーのアプリケーション・アクセス・タイプの設定」を参照)
- 権限の作成/削除 - 「ユーザー/グループ」、「アプリケーション」 または 「ユーザー/グループ/アプリケーション」

「ユーザー/グループ」権限が付与されているユーザーは、自身と同じかそれより低い権限を持つユーザーおよびグループを作成および削除できます。「アプリケーション」権限が付与されたユーザーは、アプリケーションの作成と削除およびアプリケーション内のデータベースに対するアクセスの制御ができます。「ユーザー/グループ/アプリケーション」権限が付与されたユーザーは、「ユーザー/グループ」権限および「アプリケーション」権限で可能なすべてのタスクを実行できます。

- 前回のログイン時刻 - Essbase サーバー・コンピュータのタイム・ゾーンで表示
- 認証 - 「ネイティブ」または「外部」
ネイティブ・ユーザーの認証には、ネイティブの Essbase 認証が使用されます。外部ユーザーは、サポートされている企業の認証リポジトリで外部認証されます。
- パスワードの変更 - ユーザーに対して次のログイン時にパスワードの変更を要求するかどうかに応じて「はい」または「いいえ」を指定します
- アクティブ - ユーザーに Essbase サーバーへのログオンを許可するかどうかに応じて「はい」または「いいえ」を指定します

実行可能なアクションは、次のとおりです:

- 1つ以上の行を選択して右クリックし、表示されるコンテキスト依存メニューからコマンドを選択します。
- 「新規」ボタンをクリックし、ユーザーを作成します。
- 1つ以上のユーザーを選択し、「編集」、「コピー」または「削除」ボタンをクリックします。
- 「リフレッシュ」または「閉じる」ボタンをクリックします。

関連情報

- [272 ページの「ユーザーおよびグループの管理」](#)
- 『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の、Oracle Essbase ネイティブ・セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章、および Oracle Enterprise Performance Management System セキュリティ・モードでのユーザー管理およびセキュリティに関する章

「検証ルール」ダイアログ・ボックス

「検証ルール」ダイアログ・ボックスは、ルール・ファイルの検証に失敗した原因を特定するために使用します。

次の列に、エラーに関する情報(エラーごとに1行)が表示されます:

- エラーを含むフィールド - エラーの原因となったフィールド番号
- エラー/警告メッセージ - エラーが記述されたメッセージ

関連情報

- [223 ページの「ルール・ファイルの検証」](#)
- 有効なデータ・ロード・ルール・ファイルの要件(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- 無効な次元構築ルール・ファイル(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』内)
- [210 ページの「データ・ロードのルール・ファイルの作成」](#)
- [210 ページの「次元構築ルール・ファイルの作成」](#)

「ノートを表示」ダイアログ・ボックス

「ノートを表示」ダイアログ・ボックスは、セル・ノートのコンテンツを編集するためでなく表示するために使用します。セル・ノートとは、リンク・レポート・オブジェクトのタイプの1つです。

このダイアログ・ボックスには次のテキスト・ボックスがあります:

- メンバーの組合せ - ノートに関連付けられたメンバーの組合せを識別します
- ノート - ノートのコンテンツを表示します

関連情報

- [393 ページの「リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)について」](#)
- [394 ページの「LRO の管理」](#)

「ウィンドウ」ダイアログ・ボックス

「ウィンドウ」ダイアログ・ボックスには、開いているウィンドウのリストが表示されます(最大10個)。開いているウィンドウのいずれかをアクティブにするには、ウィンドウのリストから目的のウィンドウを選択します。

関連情報

- [43 ページの「管理サービス・コンソール内のウィンドウの管理」](#)

この章の内容

Java プラグインによる Administration Services の拡張	719
プラグイン・コンポーネントの構成	719

Java プラグインによる Administration Services の拡張

Administration Services では、製品機能を拡張するための Java プラグインの開発と使用をサポートしています。Administration Services Java プラグインは、インストール可能なコンポーネントです。開発者によるプラグイン・コンポーネントの作成を支援するために、次のドキュメントが用意されています:

- 『Administration Services 開発者ガイド』
- 『Administration Services Java API リファレンス』

プラグイン・コンポーネントの構成

クライアント上で、プラグイン・コンポーネントの作成、削除、または順序変更を実行できます。プラグインは、管理サービス・コンソールの「エンタープライズ・ビュー」のツリー内のノードとして表示されます。表示される順序は、「インストールされたプラグイン」テキスト・ボックスに表示されている順序と同じです。

▶ プラグイン・コンポーネントを構成するには:

- 1 管理サービス・コンソールで、「ツール」>「コンポーネントの構成」を選択します。
- 2 プラグイン・コンポーネントを追加する場合は、「追加」をクリックし、Java アーカイブ(*.jar)ファイルを選択して、インストール済プラグインのリストに追加します。
- 3 プラグイン・コンポーネントを削除する場合は、「インストールされたプラグイン」テキスト・ボックスで目的のコンポーネントを選択して、「削除」をクリックします。
- 4 「インストールされたプラグイン」テキスト・ボックスでのコンポーネントの順序を変更するには、目的のコンポーネントを選択し、「上に移動」または「下に移動」をクリックして、リスト内の希望する位置に移動します。

5 「閉じる」をクリックします。

関連情報

- [518 ページの「プラグイン・コンポーネントの構成」ダイアログ・ボックス](#)
- 『Administration Services 開発者ガイド』
- [Oracle Essbase Administration Services Java API リファレンス](#)

用語集

!「感嘆符」を参照してください。

#MISSING 「欠落データ」を参照してください。

2 パス 他のメンバーの計算済の値に依存するメンバーを再計算するために使用される、Essbase のプロパティです。2パスのメンバーは、2番目のパスの間にアウトラインから計算されます。

Calculation Manager Planning および **Financial Management** のユーザーがグラフィカルな環境でビジネス・ルールを設計、検証、管理するために使用できる、Enterprise Performance Management Architecture(EPMA)のモジュールの1つです。

CDF 「カスタム定義関数」を参照してください。

CDM 「カスタム定義マクロ」を参照してください。

Cookie Web サイトによってコンピュータ上に配置されたデータのセグメントです。

EPM Oracle インスタンス EPM System 製品のアクティブで動的なコンポーネント(実行時に変更できるコンポーネント)が含まれているディレクトリです。EPM Oracle インスタンス・ディレクトリの場所は構成時に EPM System コンフィグレータを使用して定義します。

EPM Oracle ホーム EPM System 製品に必要なファイルを含むミドルウェア・ホームのサブディレクトリです。EPM Oracle ホームの場所は、EPM System インストーラでのインストール中に指定されます。

essbase.cfg Essbase のオプションの構成ファイルです。管理者は、このファイルを編集して Essbase サーバー機能をカスタマイズできます。一部の構成は、Essbase クライアントで使用することにより、Essbase サーバーの設定を上書きできます。

EssCell 特定の Essbase データベース・メンバーの交差を示す値を取得するために、Essbase Spreadsheet Add-in のセルに入力する関数です。

ESSCMD Essbase の操作を対話的に実行したり、バッチ・スクリプト・ファイルから実行したりするための、コマンドライン・インタフェースです。

ESSLANG テキスト文字を解釈するために使用されるエンコード方式を定義する Essbase 環境変数です。「エンコード方式」も参照してください。

ESSMSH 「MaxL シェル」を参照してください。

Extensible Markup Language (XML) データに属性を割り当てるタグのセットで構成される言語です。スキーマに基づいて、複数のアプリケーションの間で解釈可能です。

Extract-Transform-Load (ETL) データを抽出してアプリケーションに移行するための、データ・ソース固有のプログラムです。

GUI グラフィカル・ユーザー・インタフェース

ID 外部認証におけるユーザーまたはグループの固有の ID です。

Interactive Reporting 接続ファイル(.oce) データベース API(ODBC、SQL*Net、など)、データベース・ソフトウェア、データベース・サーバーのネットワーク・アドレス、データベース・ユーザー名などのデータベース接続情報を含むファイルです。管理者は、Interactive Reporting 接続(.oce)ファイルを作成して発行します。

Java アプリケーション・サーバー・クラスタ Java 仮想マシン(JVM)のアクティブ-アクティブ・アプリケーション・サーバー・クラスタです。

Java データベース接続(JDBC) Java ベース・クライアントとリレーショナル・データベースにより使用されるクライアントとサーバー間の通信プロトコルです。JDBC インタフェースにより、SQL ベースのデータベース・アクセスのための呼出しレベル API が提供されます。

JSP Java Server Page です。

KeyContacts ガジェット Smart Space ユーザーのグループを含み、Smart Space Collaborator へのアクセスを提供するガジェットです。たとえば、マーケティング・チームおよび開発チーム向けに個別の KeyContacts ガジェットを使用できます。「ガジェット」も参照してください。

LRO 「リンク・レポート・オブジェクト」を参照してください。

MaxL Essbase で使用される多次元データベース向けアクセス言語です。データ定義の言語(MaxL DDL)とデータ操作の言語(MaxL DML)から構成されます。「MaxL DDL」、「MaxL DML」および「MaxL シェル」も参照してください。

MaxL DDL Essbase で、バッチまたは対話的なシステム管理のタスクに使用されるデータ定義の言語です。

MaxL DML Essbase で、データのクエリーと抽出に使用されるデータ操作の言語です。

MaxL DML の計算済メンバー 分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

MaxL Perl モジュール Essbase MaxL DDL の一部である Perl モジュール(essbase.pm)です。このモジュールを Perl パッケージに追加すると、Perl プログラムから Essbase データベースにアクセスできます。

MaxL シェル MaxL ステートメントを Essbase サーバーに渡すためのインタフェースです。MaxL シェルの実行可能ファイル(UNIX は essmsh、Windows は essmsh.exe)は、Essbase の bin ディレクトリに格納されています。

MaxL スクリプト・エディタ 管理サービス・コンソールのスクリプト開発環境です。MaxL スクリプトで Essbase を管理するとき、テキスト・エディタと MaxL シェルの代替として MaxL スクリプト・エディタを使用できます。

MDX (多次元式) 多次元準拠データベースでクエリーと計算に使用される言語です。

MIME タイプ アイテムのデータ・フォーマットを示す属性です。システムは、これによってオブジェクトを開くアプリケーションを判断します。ファイルの Multipurpose Internet Mail Extension(MIME)タイプはファイル拡張子または HTTP ヘッダーにより決定されます。プラグインはブラウザに対して、サポートされる MIME タイプ、および各 MIME タイプに対応するファイル拡張子を通知します。

NULL 値 データのない値です。NULL 値はゼロに等しくありません。

ODBC Open Database Connectivity の略です。データベース管理システム(DBMS)の情報処理方法に関係なく、あらゆるアプリケーションにより使用されるデータベース・アクセスの方法です。

OLAP メタデータ・カタログ Essbase 統合サービスにおける、リレーショナル・データ・ソースから引き出されたデータの性質、ソース、場所および種別について説明するメタデータを含むリレーショナル・データベースです。

OLAP モデル Essbase Integration Services における、リレーショナル・データベースのテーブルおよび列から作成された論理モデル(スター・スキーマ)です。OLAP モデルは多次元データベースの構造を生成するために使用されます。「オンライン分析プロセス(OLAP)」も参照してください。

Open Database Connectivity (ODBC) 標準のアプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)です。これにより、アプリケーションから複数のサードパーティ・データベースにアクセスできます。

Oracle ホーム 特定の製品に必要なインストール済ファイルを含むディレクトリで、ミドルウェア・ホームのディレクトリ構造内にあります。「ミドルウェア・ホーム」も参照してください。

PL 勘定(P&L) 損益勘定です。P&L は通常、会社の損益計算書を構成する費用勘定と収益勘定の集合を指します。

POV (視点) 行、列、またはページ軸に割り当てられていないメンバーを選択することにより、データ・フォーカスを設定する機能です。たとえば、FDMでの POV の選択項目には、場所、期間、カテゴリ、およびターゲット・カテゴリが含まれる可能性があります。また、Smart View で POV をフィルタとして使用すると、Currency 次元を POV に割り当て、Euro メンバーを選択できます。データ・フォームで POV を選択すると、ユーロ建でデータが表示されます。

Production Reporting 「SQR Production Reporting」を参照してください。

PVA 「期別価額メソッド」を参照してください。

root メンバー 次元分岐における最上位のメンバーです。

Shared Services レジストリ Shared Services リポジトリの一部です。ほとんどの EPM System 製品(インストール・ディレクトリ、データベース設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)の EPM System 配置情報を管理します。

SPF ファイル SQR Production Reporting Server で作成される、プリンタに依存しないファイルです。フォント、間隔、ヘッダー、フッターなど、フォーマットされた実際のレポート出力を表します。

SQL スプレッドシート SQL クエリーの結果セットを表示するデータ・オブジェクトです。

SQR Production Reporting データ・アクセス、データ操作、および SQR Production Reporting ドキュメント作成のための専用プログラミング言語です。

Structured Query Language (SQL) リレーショナル・データベースに対する指示を処理するために使用される言語です。

TCP/IP 「Transmission Control Protocol/Internet Protocol」を参照してください。

Transmission Control Protocol/Internet Protocol (TCP/IP) 異なるオペレーティング・システムおよび内部アーキテクチャを持つコンピュータをリンクする標準的な通信プロトコルのセットです。TCP/IP を使用すると、LAN および WAN に接続する多様なコンピュータとの間でのファイルの交換、メールの送信、およびデータの格納が可能です。

Unicode モードのアプリケーション 文字テキストが UTF-8 でエンコードされている Essbase アプリケーションです。様々な言語に設定されているコンピュータを使用するユーザーが、アプリケーション・データを共有できます。

WebLogic Server ホーム WebLogic Server インスタンスに必要なインストール済ファイルを含むミドルウェア・ホームのサブディレクトリです。WebLogic Server ホームは、Oracle ホームのピアです。

WITH セクション MaxL DML で、オプションで使用できるクエリーのセクションです。セットまたはメンバーを定義する再利用可能な論理を作成するために使用されます。WITH セクションでセットまたはカスタムのメンバーを一度定義すると、クエリー中に複数回参照できます。

Workspace ページ 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用できます。

ws.conf Windows プラットフォーム用の構成ファイルです。

wsconf_platform UNIX プラットフォーム用の構成ファイルです。

XML 「Extensible Markup Language」を参照してください。

XOLAP アウトラインのメンバーのみを格納し、クエリー時にリレーショナル・データベースからすべてデータを取得する、Essbase の多次元データベースです。XOLAP は、集約ストレージ・データベースおよび重複メンバー名を含むアプリケーションをサポートします。

Y 軸スケール 「調査」セクションに表示される、チャートの Y 軸上の値の範囲です。たとえば、各チャートについて一意の Y 軸スケールを使用したり、すべての詳細チャートに同一の Y 軸スケールを使用したり、または列内のすべてのチャートに同一の Y 軸スケールを使用することが可能です。多くの場合、共通の Y 軸スケールを使用すると、一目でチャートを比較できるようになります。

Zero Administration サーバー上のプラグインの最新バージョン番号を識別するソフトウェア・ツールです。

「OK」ステータス 集計ステータスの1つです。エンティティが集計済であり、階層の下にあるデータが変更されていないことを示します。

「データなし」ステータス 集計ステータスの1つです。特定の期間と勘定科目のデータがこのエンティティに含まれていないことを示します。

「ロック済」ステータス 集計ステータスの1つです。変更できないデータがエンティティに含まれていることを示します。

「変更済」ステータス エンティティのデータが変更されたことを示す集計ステータスです。

「影響」ステータス 親エンティティに連結する子エンティティの変更を示すステータスです。

「非アクティブ」ステータス エンティティの当期の連結が非アクティブ化されていることを示すステータスです。

お気に入りガジェット Reporting and Analysis ドキュメントと URL へのリンクを含むガジェットです。「ガジェット」も参照してください。

アウトライン 多次元データベースのデータベース構造です。すべての次元、メンバー、タグ、タイプ、集計、および算術的関係を含みます。データは、アウトラインに定義された構造に応じてデータベースに保管されます。

アウトライン同期 パーティション・データベースで、データベースのアウトラインの変更を他のデータベースに伝播するプロセスです。

アクセス権 リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

アクティビティ・レベルの承認 操作対象のデータに依存せず、アプリケーションへのユーザー・アクセス、およびアプリケーションで実行できるアクティビティのタイプを定義します。

アクティブ-アクティブ高可用性システム すべての使用可能メンバーが要求に対応でき、アイドル状態のメンバーがないシステムです。通常、アクティブ-アクティブ・システムは、アクティブ-パッシブ・システムより豊富な拡張性オプションを備えています。「アクティブ-パッシブ高可用性システム」と対比してください。

アクティブ-パッシブ高可用性システム 常に要求に対応するアクティブ・メンバーと、アクティブ・メンバーに障害が発生した場合にのみアクティブ化されるパッシブ・メンバーが存在するシステムです。「アクティブ-アクティブ高可用性システム」と対比してください。

アクティブ・サービス 実行タイプが保留ではなく開始に設定されているサービスです。

アセンブリ EPM System 製品またはコンポーネントのインストール・ファイルです。

アダプタ ターゲットおよびソース・システムのデータやメタデータにプログラムを統合するためのソフトウェアです。

アップグレード 新しいソフトウェアのリリースを配置、アプリケーションやデータを移動、前の配置から新しい配置へ情報をプロビジョニングするプロセスです。

アドホック・レポート エンド・ユーザーが動的に作成するオンライン分析クエリーです。

アプリケーション 1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。2)必要とされる特定の分析のセットまたはレポートのセット、あるいはその両方に対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

アプリケーションの通貨 アプリケーションのデフォルトのレポート用通貨です。

アプリケーション・サーバー・クラスタ 同時に稼働し、信頼性と拡張性を実現するために連携している複数のアプリケーション・サーバーが緩やかに結合したグループです。ユーザーには1つのアプリケーション・サーバー・インスタンスのように見えます。「垂直アプリケーション・クラスタ」および「水平アプリケーション・クラスタ」も参照してください。

アプリケーション移行ユーティリティ アプリケーションとアーチファクトの移行に使用されるコマンド・ライン・ユーティリティです。

アプリケーション管理者 アプリケーションの設定、構成、維持、および制御の担当者です。アプリケーションのすべての権限およびデータ・アクセス権を持ちます。

アペンダ 宛先を意味する Log4j の用語です。

アーチファクト 個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

イメージ・ブックマーク Web ページやリポジトリ・アイテムへのグラフィック・リンクです。

インストール・アセンブリ EPM System インストーラにプラグインする製品インストール・ファイルです。

インデックス 1)疎データの組合せによりブロック・ストレージ・データベースでデータを取得する方法です。2)インデックス・ファイルを指します。

インデックス・キャッシュ インデックス・ページを含むバッファです。

インデックス・ファイル ブロック・ストレージのデータ取得情報を格納する Essbase ファイルです。ディスクに常駐し、インデックス・ページを含みます。

インデックス・ページ インデックス・ファイルの低位区分です。インデックス・ページには、データ・ブロックを指すポインタが含まれます。

インデックス項目 疎次元の交差へのポインタです。インデックス・エントリはディスク上のデータ・ブロックをポイントし、オフセットを使用してセルを検索します。

イントロスペクション データベース固有の関係に基づいて階層を判断するために、データ・ソースを詳細に検査することを指します。「スクレーピング」と対比してください。

インポート・フォーマット FDM における、ソース・ファイルの構造の定義です。これにより、ソース・データ・ファイルを FDM データのロード位置にロードできます。

エクスプローラ クライアント/サーバー・ベースのツール。直接データ・ソースにアクセスしたり、リポジトリに格納した構築済のデータ・モデルに編成された情報を参照したりする必要のある上級ユーザーにクエリー、分析およびレポート作成機能を提供します。

エンコード方式 テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングする方法の 1 つです。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。「コード・ページ」、「ロケール」も参照してください。

エンタープライズ・ビュー Administration Services の機能の 1 つです。グラフィカルなツリー・ビューを使用して Essbase 環境を管理できます。エンタープライズ・ビューを使用すると、Essbase アーチファクトを直接操作できます。

エンティティ 部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。

エージェント アプリケーションやデータベースの開始と停止、ユーザー接続の管理、ユーザー・アクセスのセキュリティ対策を行う Essbase サーバー・プロセスです。このエージェントは、ESSBASE.EXE と呼ばれます。

オンライン分析プロセス(OLAP) 複数ユーザーによりクライアントとサーバー間の計算を行える多次元的环境です。集計された企業データをリアル・タイムで分析するユーザーが使用します。OLAP システムの機能には、ドリルダウン、データのピボット、複素数計算、トレンド分析、およびモデリングが含まれます。

カスケード メンバー値のサブセットに対して複数のレポートを作成するプロセスです。

カスタム・カレンダー システム管理者が作成したカレンダーです。

カスタム・プロパティ ユーザーが作成した次元または次元メンバーのプロパティです。

カスタム・レポート 設計レポート・モジュールで作成する複雑なレポートです。コンポーネントの様々な組合せによって構成されます。

カスタム定義マクロ(CDM) Essbase のマクロです。Essbase 計算機の関数および専用マクロ関数を使用して記述されます。カスタム定義マクロが使用する Essbase の内部マクロ言語により、計算関数を組み合わせることが可能となり、複数の入力パラメータが処理されます。「カスタム定義関数」も参照してください。

カスタム定義関数(CDF) Java で開発され、MaxL により Essbase の標準計算スクリプト言語に追加された、Essbase 計算関数です。「カスタム定義マクロ」も参照してください。

カスタム次元 ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。

カタログ・ペイン アクティブ・セクションで利用可能な要素のリストを表示する領域です。クエリーがアクティブ・セクションの場合はデータベース・テーブルのリストが表示されます。ピボットがアクティブ・セクションの場合は結果列のリストが表示されます。ダッシュボードの場合は埋込み可能セクション、グラフィック・ツール、およびコントロール・ツールが表示されます。

カテゴリ データ編成に使用するグループです(月など)。

カレンダー ユーザー定義の期間、およびその関係です。暦年または会計年度は、Q1、Q2、Q3、および Q4 から構成されます。

ガジェット EPM のコンテンツを容易に表示し、Reporting and Analysis のコア機能にアクセスできる、軽量で単純な専用アプリケーションです。

キャッシュ データを一時的に保持する、メモリー内のバッファです。

キューブ 3 つ以上の次元を含むデータのブロックです。Essbase データベースはキューブです。

キューブ・スキーマ Essbase Studio におけるメジャーおよび階層などのメタデータ要素です。キューブの論理モデルを指します。

キューブ配置 Essbase Studio で、アウトラインを構築してデータを Essbase アプリケーションおよびデータベースにロードするために、モデルのロード・オプションを設定するプロセスです。

クエリー・ガバナ Essbase Integration Server のパラメータまたは Essbase サーバーの構成設定です。データ・ソースに対して実行されるクエリーの時間とサイズを制御します。

クラスタ 単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。

クラスタ・サービス システムとしてクラスタ・メンバーの操作を管理するソフトウェアです。クラスタ・サービスを使用すると、一連のリソースやサービスを定義して、クラスタ・メンバー間でのハートビート・メカニズムを監視し、これらのリソースやサービスをできるだけ効率よくかつ透過的に別のクラスタ・メンバーに移動できます。

クラスタ内部接続 ノード障害を検出するためにハートビート情報についてハードウェア・クラスタで使用されるプライベート・リンクです。

クラスタ棒グラフ カテゴリを横に並べたグラフです。垂直棒グラフでのみ使用されます。

クリーン・ブロック 計算スクリプトによってすべての次元が一度に計算された場合、または計算スクリプトで SET CLEARUPDATESTATUS コマンドが使用された場合の、データベース全体の計算が完了しているデータ・ブロックを指します。

クロス集計レポート テーブル・フォーマットでデータの分類および集計を行うレポートです。テーブルのセルには、交差する分類に合致するデータの集計結果が保管されています。たとえば、製品販売情報のクロス集計レポートに、列見出しとして Small や Large などのサイズ属性、行見出しとして Blue や Yellow などの色属性を表示できます。テーブルの中で Large と Blue が交差するセルには、サイズが Large のすべての Blue 製品の総売上げが表示されません。

グリッドの POV 行、列、またはページの交差に次元を配置せずに、グリッド上で次元メンバーを指定する手段です。レポート設計者はグリッド・レベルで POV の値を設定し、ユーザーの POV がグリッドに影響を与えないように防ぐことができます。次元に含まれるグリッドの値が 1 つのとき、その次元は行、列、またはページではなくグリッドの POV に配置します。

グループ 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

グローバル・レポート・コマンド 別のグローバル・コマンドに置き換えられるか、またはファイルが終了するまで実行し続けるレポート・スクリプトのコマンドです。

コミット・アクセス Essbase の取引の処理方法に影響する Essbase カーネルの分離レベルです。コミット・アクセスでは、同時取引は書込みロックを長期間保持し、予測可能な結果を生成します。

コンテキスト変数 タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

コンテンツ リポジトリに格納されたあらゆるタイプのファイルの情報です。

コンテンツ・ブラウザ コンテンツを参照して選択し、Workspace ページに配置するために使用できるコンポーネントです。

コントリビューション 子エンティティから親に追加される値です。それぞれの子は親に対するコントリビューションを持ちます。

コード・ページ 一連のテキスト文字へのビット組合せのマッピングです。コード・ページは、それぞれ異なる文字セットをサポートします。各コンピュータには、ユーザーが必要とする言語の文字セットについてのコード・ページ設定が含まれます。このドキュメントでは、コード・ページは非 Unicode のエンコードのビット組合せに文字をマッピングします。「エンコード方式」も参照してください。

サイクル・スルー データベースを計算しながら、そのデータベース内で複数パスを実行します。

サイレント応答ファイル インストール管理者が提供する必要があるデータをかわりに提供するファイルです。応答ファイルによって、ユーザーが操作または入力しなくても EPM System インストーラや EPM System コンフィグレータは実行されます。

サブスクリプト 項目またはフォルダが更新されるときに自動的に通知を受け取るように、項目またはフォルダにフラグを付けることを指します。

サブ勘定科目のナンバリング 不連続の整数を使用してサブ勘定科目のナンバリングを行うためのシステムです。

サポート詳細 セルの値を算出した計算および仮定です。

サンプリング エンティティの特性を判別するためにエンティティの代表的な部分を選択するプロセスです。「メタデータのサンプリング」も参照してください。

サービス ビジネス項目を取得、変更、追加、および削除するためのリソースです(権限付与、認証など)。

サーブレット Web サーバーが実行可能なコンパイルされたコードです。

システム抽出 アプリケーションのメタデータから ASCII ファイルにデータを変換する機能です。

シナリオ データを分類するための次元です(Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)。

シリアル計算 デフォルトの計算設定です。1つの計算を複数のタスクに分割して、一度に1つのタスクを計算します。

シングル・サインオン(SSO) 一度ログオンすれば、認証を再度求められることなく複数のアプリケーションにアクセスできる機能です。

シングル・ポイント障害 障害が発生した場合にユーザーが通常の機能にアクセスできなくなる、システムのコンポーネントです。

ジョブ 出力生成のために起動できる特殊なプロパティを持つドキュメントです。ジョブには Interactive Reporting、SQR Production Reporting、または汎用ドキュメントを含めることができます。

ジョブの出力 ジョブの実行によって生成されたファイルやレポートです。

スキーマ リレーショナル・データベースにおける、データおよびデータ間の関連を表す論理モデルです。

スクレーピング データ・ソースを検査して、最も基本的なメタデータ要素を得ることを指します。「イントロスペクション」と対比してください。

スケール スケールによって値の表示方法を決定します(整数、十単位、百単位、千単位、百万単位など)。

スコア ターゲットを達成するレベルです。通常はターゲットのパーセンテージとして表されます。

スコアカード 目標を達成する上での、従業員、戦略要素、または責任要素の進行状況を示すビジネス・オブジェクトです。スコアカードに追加された各メジャーおよび子スコアカードについて収集されるデータに基づいて、進行状況が確認されます。

スコープ Essbase の操作または設定により包含されるデータ領域です(セキュリティ設定の影響を受けるデータ領域など)。通常、スコープには3レベルの粒度があり、上位レベルが下位レベルを包含します。これらのレベルは上位から下位の順で、システム全体(Essbase サーバー)、Essbase サーバー上のアプリケーション、Essbase サーバー・アプリケーション内のデータベースとなります。「持続性」も参照してください。

ステージ 1)通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の1つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の2つのタイプがあります。2)Profitability では、組織内での割当てプロセスのステップを表す、モデル内の論理区分です。

ステージング・テーブル 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

ステージング領域 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

ステージ・アクション 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

ステージ内割当て 同じステージ内のオブジェクトに対する財務フローの割当てです。

ステージ後割当て 割当てモデルにおける割当てです。後に続くモデル・ステージの場所に割り当てられます。

ステータス・バー コマンド、勘定科目、およびデータ・ファイルの現在のステータスに関する有用な情報が表示される画面下部のバーです。

スナップショット 特定の時点の読取り専用データです。

スポットライタ 選択された条件に基づくカラー・コーディングを可能にするツールです。

スマート・カット URL フォームのリポジトリ項目へのリンクです。

スマート・タグ Microsoft Office アプリケーションでのキーワードです。スマート・タグのメニューから使用可能な定義済アクションに関連付けられています。Oracle EPM System 製品でも、スマート・タグを使用して Reporting and Analysis のコンテンツのインポートや Financial Management および Essbase の機能へのアクセスが可能です。

スーパーバイザ サーバーのすべてのアプリケーション、データベース、関連ファイル、セキュリティ機構にフル・アクセスできるユーザーです。

ズームチャート チャートを拡大することにより詳細情報を表示するためツールです。ズームチャートは、チャートに表示されるメトリックについて数値情報を詳細に表示できます。

セカンダリ・メジャー プライマリ・メジャーよりも優先度の低いメジャーです。セカンダリ・メジャーには業績レポートがありませんが、スコアカードで使用したり、次元メジャーのテンプレートを作成するために使用できます。

セキュリティ・エージェント Web アクセス管理プロバイダ(Oracle Access Manager、Oracle Single Sign-On または CA SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

セキュリティ・プラットフォーム Oracle EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

セル 1)多次元データベースの次元の交差を表すデータ値です。ワークシート上の行および列の交差を指します。2)管理ドメインに属するノードの論理グループです。

セル・ノート Essbase データベースでセルに付けられるテキスト注釈です。セル・ノートは LRO の一種です。

タイトル・バー Strategic Finance 名、ファイル名、およびシナリオ名のバージョン・ボックスを表示するバーです。

タイムライン・ビューア 特定の場所について、完了したプロセス・フロー・ステップの日時を表示するための FDM の機能です。

タイム・イベント ジョブの実行をトリガーします。

タイム・スケール 指定された期間別(毎月、四半期ごとなど)にメトリックを表示するスケールです。

タスクフロー ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

タスクフロー・インスタンス タスクフローの状態と関連データが含まれる、タスクフローの単一のインスタンスです。

タスクフロー参加者 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

タスクフロー定義 ステージとステージ間の関係のネットワーク、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)から構成される、タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスです。

タスクフロー管理システム タスクフローを定義および作成し、その実行を管理するシステムです。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

タスク・リスト 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

タブ Strategic Finance で、勘定科目とレポートのナビゲーションを行うことができるビューです。

ダブル MDX 構文の要素です。セルは、各次元からのメンバーの交差として参照されます。次元が削除されている場合、最上位のメンバーが示されます。たとえば、(Jan)、(Jan, Sales)、([Jan], [Sales], [Cola], [Texas], [Actual]) といったダブルがあります。

ダッシュボード 業務の要約を対話的に示すメトリックと指標の集まりです。ダッシュボードにより分析アプリケーションを構築して配置できます。

チャート・テンプレート ワークスペース・チャートに表示するメトリックを定義するテンプレートです。

テキスト・メジャー Essbase では、メジャーが示されている次元で Text としてタグ付けされたメンバーを指します。セルの値は定義済テキストとして表示されます。たとえば、Satisfaction Index というテキスト・メジャーについては、Low、Medium、および High という値を含めることがあります。「型付きメジャー」、「テキスト・リスト」および「導出テキスト・メジャー」も参照してください。

テキスト・リスト Essbase で、数値の識別子にマッピングされたテキストの値を格納するオブジェクトです。テキスト・リストではテキスト・メジャーを使用できます。

デフォルト通貨単位 データの単位スケールです。たとえば、千単位で分析を定義するように選択して 10 を入力すると、10,000 と解釈されます。

データベース接続 データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。

データ・キャッシュ 非圧縮データ・ブロックを保持するメモリー内のバッファです。

データ・セル 「セル」を参照してください。

データ・ファイル・キャッシュ 圧縮データ(PAG)ファイルを保持する、メモリー内のバッファです。

データ・フォーム Web ブラウザなどのインタフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。

データ・モデル データベース・テーブルのサブセットを示します。

データ・ロック 指定された基準(期間、シナリオなど)に従ってデータの変更を防ぐ機能です。

データ・ロードのルール テキストベース・ファイル、スプレッドシート、またはリレーショナル・データ・セットからのデータをデータベースにロードする方法を決定する一連の基準です。

データ・ロード位置 FDM で、ソース・データをターゲット・システムに送信する報告単位です。通常、ターゲット・システムにロードされる各ソース・ファイルに対して FDM のデータ・ロード位置が 1 つあります。

データ値 「セル」を参照してください。

データ関数 データを集約する関数です。データの平均、最大値、カウントを求めたり、他の統計値によりデータのグループを集約します。

トップ・ラベルとサイド・ラベル 列と行の見出しです。ピボット・レポートの上部とサイドにそれぞれ表示されます。

トラフィック・ライト 2つの次元メンバーの比較、または一定の制限値に基づいて、レポートのセルまたはピンを色分けする機能です。

トリガー ユーザーが指定した基準に従ってデータを監視するための、Essbase の機能の 1 つです。基準に一致すると、Essbase はユーザーまたはシステム管理者にアラートを送信します。

トレーサビリティ メタデータ要素を物理ソースまで追跡する機能です。たとえば Essbase Studio の場合、キューブ・スキーマをそれ自体の階層およびメジャー階層から次元要素、日付/時間要素、メジャー、そして最終的には物理ソース要素まで追跡できます。「系列」も参照してください。

トレース・レベル ログ・ファイルに取り込まれた詳細のレベルです。

トレース割当て 財務データのフローに対する視覚的な追跡を可能にする Profitability の機能です。この追跡は単一の交差から、モデル内の前方または後方に実行できます。

トークン 外部認証システム上の1つの有効なユーザーまたはグループの暗号化されたIDです。

トースト・メッセージ 画面右下の隅で消えていくメッセージです。

ドライバ Profitability and Cost Management で、ドライバを使用する複数ソース間の数学的關係、およびこれらのソースがコストや収益を割り当てる宛先を示す、割当て方法の一種です。Business Modeling については、「コスト・ドライバ」および「アクティビティ・ドライバ」も参照してください。

ドリルスルー あるデータ・ソースの値から別のソースの対応するデータに移動することです。

ドリルダウン 次元の階層を使用してクエリー結果セット内をナビゲートすることです。ドリルダウンにより、ユーザーのパーспекティブが集約データから詳細に移ります。たとえば、ドリルダウンにより年と四半期の階層關係、または四半期と月の階層關係が明らかになります。

ネイティブ認証 サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

ネスト列見出し 複数の次元からのデータを表示するレポート列の列見出しのフォーマットです。たとえば、Year と Scenario のメンバーが含まれる列見出しはネスト列です。ネスト列見出しでは、見出しの一番上の行の Q1(Year 次元)が、見出しの一番下の行の Actual および Budget(Scenario 次元)で修飾されます。

ハイパーテキスト・マークアップ言語(HTML) Web ブラウザでのデータ表示を指定するプログラミング言語です。

ハイパーリンク ファイル、Web ページまたはイントラネット HTML ページへのリンクです。

ハイブリッド分析 リレーショナル・データベースに格納された下位のデータを、Essbase に格納された要約レベルのデータにマッピングする分析です。リレーショナル・システムの大規模スケーラビリティと多次元データを組み合わせます。

ハードウェア・クラスタ ネットワーク・サービス(たとえば IP アドレス)やアプリケーション・サービス(データベースや Web サーバーなど)のシングル・ビューを、これらのサービスのクライアントに提供するコンピュータの集合です。ハードウェア・クラスタの各ノードは、独自のプロセスを実行するスタンドアロン・サーバーです。これらのプロセスは互いに通信して、連携してアプリケーション、システム・リソースおよびデータをユーザーに提供する1つのシステムのようなものを形成します。

バックアップ アプリケーション・インスタンスの複製コピーです。

バッチ POV ユーザーの POV において、バッチに含まれる各レポートおよびブックのすべての次元の集合です。バッチのスケジュールを立てる際は、バッチ POV で選択されたメンバーを設定できます。

バッチ・ファイル 複数の ESSCMD スクリプトを呼び出して複数の ESSCMD セッションを実行できるオペレーティング・システム・ファイルです。Windows システムの場合、バッチ・ファイルには BAT というファイル拡張子が付けられます。UNIX の場合、バッチ・ファイルはシェル・スクリプトとして記述されます。

バッチ・ローダー 複数ファイルの処理を可能にする FDM コンポーネントです。

バッチ処理モード サーバー管理や診断のルーチン・タスクを自動化するために使用できるバッチやスクリプト・ファイルを記述するために、ESSCMD を使用する方法です。ESSCMD スクリプト・ファイルは複数のコマンドを実行でき、オペレーティング・システムのコマンドラインから実行したり、オペレーティング・システムのバッチ・ファイルから実行したりすることが可能です。バッチ・ファイルを使用すると、複数の ESSCMD スクリプトを呼び出したり、ESSCMD の複数インスタンスを実行したりできます。

バッチ計算 データベースにおいてバッチで実行される計算です(計算スクリプト、すべてのデータベース計算など)。動的計算はバッチ計算とはみなされません。

バージョン データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果です。たとえば、Budget - Best Case と Budget - Worst Case では、Budget がシナリオであり、Best Case と Worst Case がバージョンです。

パターン照合 条件として入力されるアイテムの一部またはすべての文字と値を照合する機能です。欠落文字は、疑問符(?)またはアスタリスク(*)などのワイルド・カード値で表せます。たとえば、「Find all instances of apple」では apple が戻されるのに対して、「Find all instances of apple*」では apple、applesauce、applecranberry などが戻されます。

パフォーマンス・インディケータ ユーザーが指定した範囲に基づくメジャーおよびスコアカード・パフォーマンスを示すために使用されるイメージ・ファイルです。ステータス記号とも呼ばれます。デフォルトのパフォーマンス・インディケータを使用することもできますが、無制限に独自のパフォーマンス・インディケータを作成することも可能です。

パブリック・ジョブ・パラメータ 管理者が作成する再利用可能な名前付きジョブ・パラメータです。必要なアクセス権を持つユーザーがアクセスできます。

パブリック反復タイム・イベント 管理者が作成する再利用可能なタイム・イベントです。アクセス・コントロール・システムからアクセスできます。

パレット JASC に準拠し、.PAL 拡張子を持つファイルです。各パレットには相互に補完し合う 16 色が含まれ、ダッシュボードの色要素の設定に使用することが可能です。

パースペクティブ スコアボードのメジャーやアプリケーションにおける戦略目標をグループ化するために使用されるカテゴリです。パースペクティブにより、主要な利害関係者(顧客、従業員、株主、金融関係者など)またはキー・コンピテンシ領域(時間、コスト、品質など)を示すことができます。

パーティション化 データ・モデルの間で共有またはリンクされるデータの領域を定義するプロセスです。パーティション化は Essbase アプリケーションのパフォーマンスとスケーラビリティに影響することがあります。

パーティション領域 データベース内のサブ・キューブです。パーティションは、データベースの一部からの 1 つ以上のセル領域から構成されます。複製パーティションおよび透過パーティションの場合、2 つのパーティションが同じ形状となるために、領域内のセルの数がデータ・ソースとターゲットで同一となる必要があります。データ・ソース領域に 18 個のセルが含まれる場合、データ・ターゲット領域にも対応する 18 個のセルが含まれている必要があります。

ビジネス・プロセス 集散的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

ビジネス・ルール 期待される一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。

ビジュアル・キュー 特定のタイプのデータ値をハイライトする、フォントや色などのフォーマットが設定されたスタイルです。データ値は、次元メンバー、親メンバー、子メンバー、共有メンバー、動的計算、式を含むメンバー、読取り専用データ・セル、読取りおよび書込みデータ・セル、またはリンク・オブジェクトのいずれかになります。

ビュー 年次累計または期別のデータ表示です。

ピボット 取得したデータのパーспекティブを変更します。Essbase では、まず次元が取得され、データが行に展開されます。その後、データのピボット(並替え)を行うことにより、異なる視点を得ることができます。

ピン ピンボードと呼ばれるグラフィック・レポート上に配置される対話型アイコンです。ピンは動的です。ピンは、基盤となるデータ値や分析ツールの基準に基づいて、イメージやトラフィック・ライトの色を変更できます。

ピンボード 3 種類のデータ・オブジェクトの表示タイプの 1 つです。ピンボードは、背景およびピンと呼ばれる対話型アイコンから構成されるグラフィックです。ピンボードを使用するにはトラフィック・ライトを定義する必要があります。

ファイル区切り記号 データ・ソース内のフィールドを区切る文字です(カンマ、タブなど)。

ファクト・テーブル スター結合スキーマの中心のテーブルです。外部キー、および次元テーブルから取得した要素により特徴付けられます。通常、このテーブルにはスキーマの他のすべてのテーブルに関連する数値データが含まれます。

フィルタ データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスを制御したりする場合に使用されます。

フェイルオーバー プライマリ・データベース、サーバーまたはネットワークに障害が発生したり、これらがシャットダウンしたりする場合に、冗長性のあるスタンバイ・データベース、サーバーまたはネットワークに自動的に切り替える機能です。フェイルオーバー用にクラスタリングされているシステムは、高可用性、サーバーの冗長性を利用したフォルト・トレランス、および共有ディスクなどのフォルト・トレラント・ハードウェアを提供します。

フォーマット文字列 1) Essbase では、セル値の表示方法を変換する方法です。2) Data Relationship Management では、Format または Formatted Date 派生プロパティのパラメータで、返すプロパティ値のフォーマットを指定します。

フッター レポート・ページ下部に表示されるテキストまたはイメージです。ページ番号、日付、ロゴ、タイトル、ファイル名、作成者名など、動的な関数や静的なテキストが含まれます。

フリーフォーム・グリッド 動的計算のために、複数のソースからのデータを提示、入力、および統合するためのオブジェクトです。

フリーフォーム・レポート作成 ワークシートに次元メンバーまたはレポート・スクリプト・コマンドを入力することにより、レポートを作成することを指します。

フレーム デスクトップ上の領域です。ナビゲーション・フレームとワークスペース・フレームが2つの主要な領域となります。

フロー勘定科目 期別と年次累計の符号なしの値を格納する勘定科目です。

ブック 1) Financial Reporting では、類似したドキュメントのグループを保持するコンテナです。ブックは、次元セクションまたは次元の変更を指定する場合があります。2) Data Relationship Management では、グループとして同時に実行できるエクスポートの集合です。エクスポート結果は、結合することも、個別に出力することもできます。

ブックの POV ブックが実行される次元のメンバーです。

ブックマーク ユーザー個人のページに表示されるレポート・ドキュメントまたは Web サイトへのリンクです。ブックマークのタイプには、マイ・ブックマークとイメージ・ブックマークがあります。

ブロック プライマリ・ストレージ・ユニットです。多次元配列であり、すべての疎次元のセルを表します。

ブロックされた勘定科目 手動で入力する必要があるために連結ファイルの計算に含めない勘定科目です。

ブロック・ストレージ・データベース 疎次元に定義されたデータ値の密度に基づいてデータを分類および格納する、Essbase のデータベース・ストレージ・モデルです。データ値はブロック単位で格納され、ブロックは値を含む疎次元メンバーについてのみ存在します。

ブロードキャスト・メッセージ Planning アプリケーションにログオンしているユーザーに対して管理者が送信する単純なテキスト・メッセージです。メッセージには、システムの可用性、アプリケーション・リフレッシュの通知、アプリケーションのバックアップなどの情報が詳細に表示されます。

プライマリ・メジャー 企業および事業のニーズにとって重要な、優先度の高いメジャーです。コンテンツ・フレームに表示されます。

プランナ データの入力と送信、他のプランナが作成したレポートの使用、ビジネス・ルールの実行、タスク・リストの使用、電子メール通知の使用、および Smart View の使用が可能なユーザーです。プランナは、大多数のユーザーから構成されます。

プランニング・ユニット シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライスです。プラン・データの準備、確認、注釈付け、および承認のための基本単位です。

プレゼンテーション Web Analysis ドキュメントのプレイリストです。レポートの分類、整理、並べ替え、配布、および確認を行うことができます。リポトリ内のレポートを参照するポインタを含みません。

プロキシ・サーバー セキュリティを保証するために、ワークステーション・ユーザーとインターネットの間で仲介を行うサーバーです。

プロジェクト 実装でグループ化された Oracle Hyperion 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

プロセス監視レポート FDM データ変換プロセスにおける、場所とその位置のリストです。プロセス監視レポートを使用して、決算手順のステータスを監視できます。レポートにはタイム・スタンプが付けられるので、時間データがロードされた場所を判断するために使用できます。

プロット領域 X 軸、Y 軸、および Z 軸で囲まれている領域です。円グラフの場合は、その周りに表示される長方形の領域です。

プロビジョニング ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権限を付与するプロセスです。

ページ グリッドまたはテーブルでの情報表示の一種です。しばしば Z 軸により示されます。ページには、1つのフィールドからのデータ、計算により得られるデータ、またはテキストを含めることができます。

ページ・ファイル Essbase のデータ・ファイルです。

ページ・メンバー ページ軸を決定するメンバーです。

ページ見出し レポートの現在のページで表示されているメンバーをリストした、レポート見出しの一種です。ページ上のすべてのデータ値には、ページ見出し内のメンバーが共通属性として適用されています。

ホスト アプリケーションとサービスがインストールされているサーバーです。

ホスト・プロパティ ホストに関するプロパティです。ホストに複数の Oracle EPM ホームが含まれる場合は、いずれかの Oracle EPM ホームに関するプロパティとなります。

マイ Workspace ページ ユーザーが作成するカスタマイズ可能な Workspace ページです。リポジトリを参照することなく 1つの場所から簡単にアクセスできるように特別なマークが付いています。

マスター・データ・モデル 複数のクエリーによりソースとして参照される独立するデータ・モデルです。このモデルが使用される場合は、「クエリー」セクションのコンテンツ・ペインに「ロック済データ・モデル」と表示されます。データ・モデルは「データ・モデル」セクションに表示されるマスター・データ・モデルにリンクされています(管理者によって非表示になっていることがあります)。

マップ・ナビゲータ 戦略、責任、および因果関係の各マップに現在の位置を示す機能です。赤色のアウトラインで示されます。

マップ・ファイル 外部データベースとの間のデータの送信や取得に使用される定義を格納するファイルです。マップ・ファイルの拡張子は、データ送信用が.mps、データ取得用が.mpr です。

マルチロード 複数の期間、カテゴリ、および場所を同時にロードすることを可能にする FDM の機能です。

マージ データ・ロード・オプションの 1 つです。データ・ロード・ファイルで指定された勘定科目の値のみを消去し、データ・ロード・ファイルの値で置換します。

ミドルウェア・ホーム Oracle WebLogic Server ホームを含み、EPM Oracle ホームおよびその他の Oracle ホームも含むことができるディレクトリです。ミドルウェア・ホームは、ローカル・ファイル・システム、または NFS を介してアクセス可能なリモート共有ディスク上に配置できます。

ミニスキーマ データ・ソースからのテーブルのサブセットをグラフィカルに示したものです。データ・モデリングのコンテキストを表します。

ミニレポート レポートのコンポーネントの 1 つです。レイアウト、コンテンツ、ハイパーリンク、およびレポートのロード用の一つまたは複数のクエリーを含みます。各レポートには、1つ以上のミニレポートを含めることができます。

メジャー OLAP データベースのキューブに含まれる数値で、分析に使用されます。メジャーには、利益幅、売上原価、売上数量、予算などがあります。「ファクト・テーブル」も参照してください。

メタアウトライン Essbase Integration Services における、OLAP モデルから Essbase アウトラインを作成するための構造とルールを含んでいるテンプレートです。

メタデータ データベースに格納された、またはアプリケーションにより使用されるデータのプロパティと属性を定義および説明するデータ・セットです。メタデータには、次元名、メンバー名、プロパティ、期間、およびセキュリティなどが含まれます。

メタデータのサンプリング ドリルダウン操作で次元に含まれるメンバーのサンプルを取得するプロセスです。

メタデータ・セキュリティ ユーザーにより特定のアウトライン・メンバーへのアクセスを制限するための、メンバー・レベルのセキュリティ・セットです。

メタデータ要素 データ・ソースから算出されるメタデータ、および Essbase Studio で使用するために格納され、カタログが作成されるおよびその他のメタデータです。

メンバー 次元内の個別のコンポーネントです。メンバーにより、類似する単位の集まりが個別に特定および区別されます。たとえば、時間次元には Jan、Feb、および Qtr1 などのメンバーが含まれることがあります。

メンバー・リスト 次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます。

メンバー・ロード Essbase 統合サービスにおける、次元およびメンバーを(データなしに)Essbase アウトラインに追加するプロセスです。

メンバー専用レポート・コマンド レポート・ライターのフォーマット・コマンドの 1 つです。レポート・スクリプトで現れると実行されます。このコマンドは関連するメンバーにのみ影響し、メンバーを処理する前にフォーマット・コマンドを実行します。

メンバー選択レポート・コマンド 兄弟、世代、レベルなどのアウトラインの関係に基づいて、メンバーの範囲を選択するレポート・ライター・コマンドの一種です。

モデル 1)アプリケーション固有のデータ表現を含むファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次元と非次元のアプリケーション・オブジェクトという 2 つの主要なタイプがあります。2)Business Modeling で、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、また計算するために接続されたボックス・ネットワークです。

ユーザー・ディレクトリ ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所です。リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。一般的に使用されているユーザー・ディレクトリには、Oracle Internet Directory (OID)、Microsoft Active Directory (MSAD) および Sun Java System Directory Server があります。

ユーザー変数 ユーザーのメンバー選択に基づいてデータ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示する変数です。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。

ユーザー定義メンバー・リスト ユーザー定義による、特定の次元に含まれるメンバーの静的なセットです。

ユーザー定義属性(UDA) アウトラインのメンバーに関連付けられ、メンバーの特性を説明する属性です。これを使用すると、指定された UDA が関連付けられているメンバーのリストが戻されます。

ライトバック 取得を行うスプレッドシートなどのクライアントが、データベースの値を更新する機能です。

ライフサイクル管理 製品環境間でアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーチファクトを移行するプロセスです。

ライン・アイテムの詳細 勘定科目で最も下位の詳細レベルです。

リソース システムにより管理されるオブジェクトまたはサービスです(役割、ユーザー、グループ、ファイル、ジョブなど)。

リポジトリ ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマットおよび注釈の情報を格納します。

リレーショナル・データベース 関連する 2 次元テーブルにデータを保管するデータベースです。「多次元データベース」と対比してください。

リンク 1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクは、フォルダ、ファイル、ショートカットおよび他のリンクを参照できます。2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して次のアクティビティが開始するポイントです。

リンク・データ・モデル リポジトリのマスター・コピーにリンクされたドキュメントです。

リンク・パーティション データ・セルを使用して 2 つのデータベースをリンクするための共有パーティションです。ワークシートのリンク・セルをクリックすると、リンク・データベースの次元を示す新しいシートが開きます。これにより、表示される次元をドリルダウンできます。

リンク・レポート・オブジェクト(LRO) セル・ノート、URL、またはテキスト、オーディオ、映像、画像を含むファイルなどの外部ファイルへのセルベースのリンクです。Financial Reporting では、Essbase LRO 向けにサポートされるのはセル・ノートのみです。「ローカル・レポート・オブジェクト」と対比してください。

リンク条件 タスクフローのステージを順序付けるためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

レイアウト領域 コンテンツを配置できる Workspace ページの領域です。

レイヤー 1)階層構造内で横並びにメンバーを含む場所です。世代(上から下へ)またはレベル(下から上へ)により指定されます。2)他のオブジェクトに対して相対的なオブジェクトの場所です。たとえば、Sample Basic データベースでは Qtr1 と Qtr4 は同じ年に含まれるので、世代が同一であることとなります。しかし、不均衡階層を含むデータベースの場合、Qtr1 と Qtr4 は同一世代であっても同じレイヤーに位置しないことがあります。

レコード データベースで、1つの完全な入力項目を形成するフィールドのグループです。たとえば、顧客レコードには、名前、住所、電話番号、および販売データのフィールドが含まれることがあります。

レベル 階層ツリー構造において、データベース・メンバーの関係を定義するレイヤーです。レベルは一番下の次元メンバー(レベル 0)から上位の親メンバーへと並べられます。

レベル 0 のブロック 疎のレベル 0 メンバーの組合せに使用されるデータ・ブロックです。

レベル 0 のメンバー 子の存在しないメンバーです。

レポートの通貨 財務諸表を準備するために使用される通貨です。現地通貨からレポートの通貨に変換されます。

レポート・エクストラクタ スクリプトの実行時に、Essbase データベースからのレポート・データを取得する Essbase コンポーネントです。

レポート・オブジェクト レポートの設計において、テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどの動作や外観を定義するプロパティを持つ基本要素です。

レポート・スクリプト 1つまたは複数の運用レポートを生成する、Essbase レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイルです。

レポート・ビューア レポート・スクリプトの実行後に完全なレポートを表示する Essbase コンポーネントです。

ログ・アナライザ Essbase ログのフィルタ、検索、および分析を行うための Administration Services の機能です。

ロケーション別名 データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで管理サービス・コンソール、ESSCMD、または API を使用して設定されます。

ロケール コンピュータで使用される言語、通貨および日付のフォーマット、データのソート順、および文字セットのエンコード方式を指定するコンピュータ設定です。Essbase ではエンコード方式のみが使用されます。「エンコード方式」、「ESSLANG」も参照してください。

ロケール・ヘッダー・レコード スクリプトなど、一部の非 Unicode でエンコードされたテキスト・ファイルの先頭で、エンコード・ロケールを特定するテキスト・レコードです。

ロック済 ユーザーやプロセスがデータを変更するのを防ぐために、ユーザーが呼び出すプロセスです。

ロック済データ・モデル ユーザーが変更できないデータ・モデルです。

ローカル・レポート・オブジェクト Explorer で Financial Reporting レポート・オブジェクトにリンクされていないレポート・オブジェクトです。「リンク・レポート・オブジェクト」と対比してください。

ローカル結果 データ・モデルのクエリー結果です。ローカルの結合で結果を使用する場合は、結果をデータ・モデルにドラッグして挿入できます。ローカルの結果を要求すると、カタログに表示されます。

ロード・バランサ 要求をクラスタの個々のアプリケーション・サーバーに分散するハードウェアおよびソフトウェアであり、システムへの唯一のエントリ・ポイントです。

ロード・バランシング サーバー・グループ全体で要求を分散することです。これによって、エンド・ユーザーのパフォーマンスが最適化されます。

ロールアップ 「連結」を参照してください。

ワイルド・カード 検索文字列で単一の文字(?)または文字グループ(*)を示す文字です。

ワークフロー FDM でデータを最初から最後まで処理するために必要なステップです。ワークフローは、インポート(GL ファイルからのデータ・ロード)、検証(すべてのメンバーが有効なアカウントにマッピングされていることの確認)、エクスポート(マッピングされたメンバーのターゲット・アプリケーションへのロード)、およびチェック(ユーザー定義の検証ルールを使用してデータを処理することにより、データの精度を確認)から構成されます。

ワークブック 多数のワークシートを含むスプレッドシート・ファイル全体です。

一意でないメンバー名 「重複メンバー名」を参照してください。

一意のメンバー名 データベース・アウトライン内に一度のみ存在する、共有されないメンバーの名前です。

一意メンバーのアウトライン 重複メンバー名を使用できないデータベース・アウトラインです。

三角換算法 残高のある通貨から別の通貨へ第三の共通通貨を介して変換する方法です。たとえば、デンマーク・クローネから英国ポンドへ残高を変換するには、残高をクローネからユーロへ、ユーロからポンドへ変換できます。

上位レベル・ブロック 少なくとも1つの疎メンバーが親レベルのメンバーになっているデータ・ブロックです。

世代 データベースでのメンバー関係を定義する階層ツリー内のレイヤーです。世代は、次元の最上位のメンバー(世代1)から子メンバーへと1世代ずつ下に配置されていきます。一意の世代名を使用すると、階層ツリー内のレイヤーを特定できます。

並列エクスポート Essbase データを複数のファイルにエクスポートする機能です。並列エクスポートは、1つのファイルにエクスポートした場合に比べて時間を短縮できます。また、1つのデータ・ファイルでサイズが大きくなりすぎた場合の、オペレーティング・システムでの操作上の問題を解決できます。

並列データ・ロード Essbase で、複数プロセスのストリームによりデータ・ロードのステージを同時に実行することを指します。

並列計算 計算オプションの1つです。Essbase では計算がタスクに分割され、一部のタスクは同時に計算されます。

事前計算 ユーザーが取得する前にデータベースの計算を実行することです。

交差 多次元データベース内の次元の交差を表すデータの単位。ワークシートのセル。

仕訳(JE) シナリオと期間の勘定科目残高の借方または貸方に計上する調整の集合です。

代替階層 共有メンバーの階層です。代替階層はデータベース・アウトラインの既存の階層に基づきますが、次元に代替レベルを持ちます。代替階層により、異なる視点(POV)から同一データを表示できます。

会社間消去 「消去」を参照してください。

会社間照合 アプリケーション内の会社間勘定科目の対の残高を比較するプロセスです。会社間の受取勘定科目は、対応する会社間の支払い勘定科目と比較されます。一致する勘定科目は、組織の連結合計から会社間のトランザクションを消去するために使用されます。

会社間照合レポート 会社間勘定科目の残高を比較して、勘定の収支が合っているかどうかを示すレポートです。

使用済ブロック 最後に計算された後に変更されたセルを含むデータ・ブロックです。子ブロックが使用済である場合(つまり更新されている場合)、上位のブロックにも使用済のマークが付けられます。

例外 事前定義済の条件を満たす値です。フォーマット・インディケータを定義したり、例外が生成されたときに登録ユーザーに通知したりできます。

依存エンティティ 組織内の他のエンティティに属するエンティティです。

保存された仮定 ビジネス上の主要な計算を推進するための、Planning でのユーザー定義の仮定です(事業所の床面積1平方フィート当たりのコストなど)。

保管階層 集約ストレージ・データベースのアウトラインのみで、アウトラインの構造に従ってメンバーが集約される階層を指します。保管階層のメンバーには、式を含められないなどの一定の制限があります。

信頼できるユーザー 認証されたユーザーです。

修飾名 定まったフォーマットのメンバー名です。重複メンバーのアウトラインにおいて、重複メンバー名を区別します([Market].[East].[State].[New York]、[Market].[East].[City].[New York]など)。

個人の反復タイム・イベント 再利用可能なタイム・イベントです。作成したユーザーのみがアクセスできます。

個人用ページ リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。

個人用変数 複雑なメンバー選択の特定の選択ステートメントです。

値次元 入力値、換算値および連結の詳細を定義するために使用される次元です。

兄弟 他の子メンバーと同じ世代で、すぐ上に同じ親を持つ子メンバーです。たとえば、メンバー Florida とメンバー New York はメンバー East の子であり、互いの兄弟です。

入力データ 計算されるのではなくソースからロードされるデータです。

共有 Workspace ページ 専用のシステム・フォルダに格納され、組織全体で共有する Workspace ページです。権限を持つユーザーが共有 Workspace ページの「ナビゲート」メニューからアクセスできます。

共有ストレージ フェイルオーバー・クラスタのすべてのノードに対して使用できる必要のあるデータを含むディスク・セットです。共有ディスクとも呼ばれます。

共有ディスク 「共有ストレージ」を参照してください。

共有メンバー ストレージ・スペースを別の同名メンバーとの間で共有するメンバーです。Essbase アウトラインに複数回現れるメンバーが重複して計算されることを防ぎます。

再構成 URL ユーザーが Workspace にログオンしているときに、サブレット構成設定を動的に再ロードするための URL です。

再構築 データベース・インデックス、また場合によってはデータ・ファイルの再生成もしくは再構築を行う操作です。

冗長データ 重複データ・ブロックです。Essbase で更新されたブロックがコミットされるまで、取引の間保持されます。

凡例ボックス 次元のデータ・カテゴリを特定するためのラベルを含むボックスです。

出資比率 エンティティが親によって所有される程度です。

分離レベル データベース操作のロックとコミットの動作を決定する Essbase カーネルの設定です。選択肢は: コミット・アクセスまたはアンコミット・アクセス。

列 Data Relationship Management における、インポート・ソース、またはクエリー、比較、検証またはエクスポートの結果に関連付けられたデータのフィールドです。

別名テーブル メンバーの代替名を含むテーブルです。

割当て 割当てモデルでのソースと宛先の関連付けです。割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

加重 スコアカードのアイテムに割り当てられた値です。スコアカード全体のスコアの計算において、そのアイテムの相対的な重要性を示します。スコアカードのすべてのアイテムの加重を総計すると 100% になります。たとえば、ある製品について新機能を開発する重要性を認識する場合、開発者のスコアカード上の New Features Coded のメジャーに Number of Minor Defect Fixes のメジャーよりも大きな加重が割り当てられます。

動的ビュー勘定科目 勘定科目の 1 つです。勘定科目の値は、表示されているデータから動的に計算されます。

動的メンバー・リスト システムにより作成される名前付きメンバー・セットです。ユーザーが定義した基準が使用されます。アプリケーションでリストが参照されるとき、リストは自動的にリフレッシュされます。次元メンバーの増減に応じて基準が自動的にリストに適用され、変更内容が反映されます。

動的レポート レポートを実行するときに更新されるデータを含むレポートです。

動的参照 データ・ソース内のヘッダー・レコードを指すルール・ファイル内のポインタです。

動的時系列 ブロック・ストレージ・データベースで、期間累計のレポート作成を実行するプロセスです。

動的計算 Essbase で、動的計算メンバー、または動的計算および保管メンバーとしてタグ付けされているメンバーについてデータを取得する場合にのみ実行される計算です。メンバーの値は、バッチ計算で事前に計算されるのではなく、取得時に計算されます。

動的計算および保管メンバー ブロック・ストレージ・アウトラインで、値を最初に取得したときにのみ Essbase によって計算されるメンバーです。計算された値はデータベースに保管され、2 回目以降の取得では計算を実行する必要がありません。

動的計算メンバー ブロック・ストレージ・アウトラインで、Essbase により取得時にのみ計算が行われるメンバーです。取得要求の処理が完了すると、計算された値は破棄されます。

動的階層 集約ストレージ・データベースのアウトラインに限定して、取得時に値が計算されるメンバーの階層です。

勘定科目のブロック 連結ファイルで勘定科目が入力データを受け入れるプロセスです。ブロックされた勘定科目は加算連結プロセスで値を受け取りません。

勘定科目の消去 連結時に連結ファイル内で値がゼロに設定された勘定科目です。

勘定科目タイプ 時間の経過に伴う勘定科目の値のフロー、およびその符号の振舞いを決定するプロパティです。勘定科目の種別のオプションには、支出、収益、資産、負債、および資本が含まれます。

単項演算子 アウトラインのメンバーに関連付けられている算術インディケータ(+、-、*、/、%)です。単項演算子では、データベースのロールアップ中のメンバーの計算方法が指定されます。

原点 2つの軸の交差です。

反復タイム・イベント ジョブの実行開始点と実行頻度を指定するイベントです。

反復テンプレート 各期間に対して同一の調整を行うための仕様テンプレートです。

収益勘定科目 期別の値と年次累計値を格納する勘定科目です。値が正の場合は純利益が増えます。

同期 Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

同期済 モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。「モデル」も参照してください。

名前付きセット MaxL DML で、MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションに定義された論理を使用するセットです。名前付きセットはクエリー内で複数回参照することが可能です。

因果関係マップ 企業戦略を形成する要素の関連、およびこれらの要素が組織の戦略目標を達成するためにどのように連動するかを示すマップ。因果関係マップのタブは、各戦略マップについて自動的に作成されます。

垂直アプリケーション・クラスタ 複数のアプリケーション・サーバー・インスタンスが同じマシン上にあるクラスタです。

型付きメジャー Essbase で、メジャーが示されている次元で Text または Date というタグが付けられたメンバーです。セルの値は事前定義されたテキストまたは日付として表示されます。

基本エンティティ 組織の構造の一番下に位置し、他のエンティティを持たないエンティティです。

基本次元 1 つまたは複数の属性次元に関連付けられている標準次元です。たとえば、製品に香りがあるとすると、Product 次元が Flavors 属性次元の基本次元となります。

基本通貨 日常の業務取引が行われる通貨です。

変換 アプリケーションの移行後、移行先環境で正しく機能するように、アーティファクトを変換するプロセス。

変換元通貨 為替レートを使用して変換先通貨に変換される前の、値の元の通貨です。

変換先通貨 残高の変換後の通貨です。為替レートを入力して、変換元通貨から変換先通貨に変換します。たとえばユーロから米ドルに変換する場合、変換先の通貨は米ドルです。

外部でトリガーされるイベント ジョブの実行をスケジュールするための、時間ベースでないイベントです。

外部認証 アプリケーションの外部に格納されたユーザー情報を使用して、Oracle EPM System 製品にログオンすることを指します。ユーザー・アカウントは EPM System で維持されますが、パスワード管理およびユーザー認証は Oracle Internet Directory (OID) や Microsoft Active Directory (MSAD) などの企業ディレクトリを使用して外部サービスで実行されます。

多次元データベース 3 つ以上の次元でデータを整理、格納、および参照する方法です。次元のセットが交差するポイントが個別の値となります。「リレーショナル・データベース」と対比してください。

子 データベース・アウトライン内で親を持つメンバーです。

子孫 データベース・アウトラインで親の下に位置するメンバーです。たとえば、年、四半期および月を含む次元では、メンバー Qtr2 およびメンバー April がメンバー Year の子孫となります。

安全率 より安全な投資から期待される利回りです (米国の長期国債など)。

定義済ドリル・パス データ・モデルでの定義に従って次の詳細レベルにドリルするために使用されるパスです。

宛先 1) Business Rules では、計算済の値が格納されるデータベースのブロックです。2) Profitability and Cost Management では、割当てモデルでのソースと宛先の関連付けです。割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

実績の頻度 日付のセットを作成して結果を収集および表示するために使用されるアルゴリズムです。

実行時プロンプト ビジネス・ルールが実行される前にユーザーが入力または選択する変数です。

密次元 ブロック・ストレージ・データベースでは、次元メンバーのすべての組合せについてデータを含んでいる可能性があります。たとえば、時間次元はしばしば密ですが、これは時間次元がすべてのメンバーのあらゆる組合せを含んでいる可能性があるからです。「疎次元」と対比してください。

対称トポロジ 運用サイトとスタンバイ・サイトの層全体で同一である Oracle Fusion Middleware 障害回復構成です。対称トポロジでは、運用サイトとスタンバイ・サイトにあるホスト、ロード・バランサ、インスタンス、アプリケーションの数は同じです。両方のサイトで同じポートが使用されます。システムは同一に構成され、アプリケーションは同じデータにアクセスします。

対称型マルチプロセッシング(SMP) マルチプロセッシングとマルチスレッディングを使用可能にするサーバーのアーキテクチャです。多数のユーザーが単一のインスタンスに同時に接続した場合でも、パフォーマンスが大きく低下することはありません。

導出テキスト・メジャー Essbase Studio で、範囲として表現された定義済ルールによって管理される値を持つテキスト・メジャーです。たとえば、販売高メジャーに基づく導出テキスト・メジャー「販売実績インデックス」は、「高」、「中」、および「低」の値で構成できます。この導出テキスト・メジャーは、個々の販売高の値を「高」、「中」、「低」の範囲に分類して表示するように定義されます。「テキスト・メジャー」も参照してください。

属性 次元メンバーの特性です。たとえば、従業員次元メンバーには、名前、年齢、または住所の各属性がある場合があります。Product 次元のメンバーはサイズ、味などの複数の属性を持つ可能性があります。

属性の関連付け データベース・アウトラインでの関係です。これにより、属性次元のメンバーが基本次元のメンバーの特性を表します。たとえば、製品 100-10 がグレープ味である場合、製品 100-10 は Flavor 属性の関連付けがグレープになります。したがって、Product 次元のメンバー 100-10 は Flavor 属性次元のメンバー Grape に関連付けられることになります。

属性タイプ 様々な関数(データのグループ化、選択、または計算)を使用可能にするためのテキスト、数値、ブール値、日付、またはリンク属性タイプです。たとえば、Ounces 属性次元は数値タイプを持つので、各製品の属性として指定されるオンス数を使用して当該製品のオンス当たりの収益を計算できます。

属性レポート 基本次元メンバーの属性に基づくレポート作成プロセスです。「基本次元」も参照してください。

属性次元 次元の一種です。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。

属性計算次元 メンバーのグループに対して、合計、カウント、平均、最小、および最大を計算するシステム定義の次元です。この次元は動的に計算され、データベース・アウトラインでは表示されません。たとえば、メンバー Avg を使用すると、製品 Red についてニューヨークでの 1 月の平均売上上の値を計算できます。

履歴平均 多数の履歴期間にわたる勘定科目の平均です。

差異 プラン値と実績値などの2つの値の差です。

市場リスク割増額 国債よりもリスクの高い投資を投資家に呼びかけるための、安全率に追加して支払われる利回りです。予測される市場利回りから安全率を差し引いて計算されます。この数字が示すモデルは将来の市況に近いものとなる必要があります。

式 Data Relationship Management で、プロパティ値を動的に計算するために派生プロパティによって使用されるビジネス・ロジックです。

式の保存 データ取得中にワークシート内に保持される、ユーザーが作成した式です。

役割 リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

従業員 特定のビジネス・オブジェクトに対して責任を負う(または関与する)ユーザーです。従業員は組織に勤めている必要はありません(コンサルタントなど)。従業員は、認可のためにユーザー・アカウントに関連付けられている必要があります。

復元 データベースが破損または破壊された場合にデータおよび構造の情報を再ロードする操作です。通常、データベースをシャット・ダウンおよび再起動した後で実行されます。

感嘆符(!) 一連のレポート・コマンドを終了して、データベースからの情報を要求する文字です。レポート・スクリプトは感嘆符を使用して終了する必要があります。レポート・スクリプト内では複数の感嘆符を使用できます。

戦略マップ 上位レベルのミッションおよびビジョンのステートメントを、構成要素である下位レベルの戦略的達成目標に組入れる方法を示します。

戦略目標(SO) 測定可能な結果によって定義された長期目標です。各戦略目標は、アプリケーション内の1つのパースペクティブに関連付けられ、1つの親(エンティティ)を持ち、重要成功要因または他の戦略目的の親になります。

手動ステージ ユーザーの操作が必要なステージです。

抽出コマンド Essbase レポート作成コマンドの1つです。データベースから抽出される RAW データの選択、向き、グループ分け、および配列を処理します。小なり記号(<)から始まるコマンドです。

拡張リレーショナル・アクセス リレーショナル・データベースと Essbase 多次元データベースの統合を指します。これにより、すべてのデータがリレーショナル・データベースに保持され、Essbase データベース内の要約レベルのデータにマッピングされます。

持株会社 法的エンティティ・グループの一部であるエンティティです。グループ内のすべてのエンティティに対して直接的または間接的に投資しています。

持続性 Essbase の操作や設定に対する継続的または長期的な影響です。たとえば、ユーザー名やパスワードの有効性について、Essbase 管理者がその持続性を制限することがあります。

接続ファイル 「Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)」を参照してください。

換算 「通貨換算」を参照してください。

換算レート 「為替レート」を参照してください。

支出勘定科目 期別の値と年次累計値を格納する勘定科目です。値が正の場合は、純利益が減ります。

支配比率 所属するグループのコンテキスト内でエンティティが受ける支配の程度です。

数値属性範囲 基本次元メンバーに関連付けるために使用される機能です。メンバーは個別の数値を含み、値の範囲を示す属性を持ちます。たとえば、顧客を年齢別に分類する場合、Age Group 属性次元に 0-20、21-40、41-60、および 61-80 という年齢範囲に該当するメンバーを含めることができます。各 Customer 次元メンバーは Age Group 範囲に関連付けられます。データを取得する際は、個別の年齢の値ではなく年齢範囲に基づいて処理されます。

日付メジャー Essbase で、メジャーが示されている次元で「日付」のタグが付けられているメンバーです。セルの値はフォーマット済の日付として表示されます。メジャーとしての日付は時間次元を使用し示すことが困難なタイプの分析に役立つことがあります。たとえば、一連の固定資産の取得日をアプリケーションで追跡する必要がある場合、取得日の範囲が実現可能な時間次元モデリングの範囲を超えて長期にわたってしまうことがあります。「型付きメジャー」も参照してください。

時系列レポート作成 カレンダーの日付(年、四半期、月、週など)に基づくデータのレポート作成プロセスです。

時間次元 データが示す期間です(会計期間、暦時間など)。

暗黙の共有 メンバーが1つ以上の子を持ち、連結されている子は1つのみである場合、親と子が値を共有します。

最上位メンバー 次元のアウトラインで、階層ツリーの一番上に位置する次元メンバーです。次元メンバー間に階層の関係がない場合は、ソート順で最初のメンバーを指します。階層の関係がある場合、最上位メンバーの名前が次元名と同一となるのが一般的です。

最新 最新の期間として定義されたメンバーからデータ値を抽出するために使用される、スプレッドシートのキー・ワードです。

期別価額メソッド(PVA) 通貨換算プロセスの1つです。一定期間における期別の為替レート値を適用して通貨を算出します。

期末 チャートの日付範囲を調整できる期間です。たとえば、月の期末の場合、当月末までの情報がチャートに表示されます。

株式ベータ 株のリスクを指します。その株の収益と市場利益率の差異により測定され、ベータと呼ばれるインデックスで示されます。たとえば、市場利益率が1%変動するのに伴って株の収益が通常1.2%変動するのであれば、その株のベータ値は1.2です。

検証 アウトラインに対してビジネス・ルール、レポート・スクリプトまたはパーティション定義をチェックして、チェック対象のオブジェクトが有効であることを確認するプロセスです。

検証ルール データの整合性を強化するために FDM で使用されるルールです。たとえば、FDM では、検証ルールによって、FDM からターゲット・アプリケーションにデータがロードされた後に、特定の条件が満たされていることが保証されます。

構築方法 データベース・アウトラインを変更するために使用するメソッドの一種です。データ・ソース・ファイルのデータ・フォーマットに基づいて構築メソッドを選択します。

構造ビュー トピックをコンポーネントのデータ項目の単純なリストとして表示します。

標準仕訳テンプレート 各期間に共通する調整を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID、または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。

標準次元 属性次元以外の次元です。

権限 データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

欠落データ(#MISSING) ラベル付けされた場所のデータが存在しないか、値が含まれていないか、データが入力されていないかまたはロードされていないことを示すマーカーです。たとえば、勘定科目に当期ではなく過去または将来の期間のデータが含まれている場合は、欠落データが存在します。

次元 ビジネス・データを整理して値の抽出や保持のために使用されるデータ・カテゴリです。通常、次元には関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。たとえば、Year 次元は多くの場合四半期、月などの期間の各単位のメンバーが含まれます。

次元タイプ 定義済の機能を使用可能にする次元のプロパティです。時間のタグが付けられた次元は、定義済のカレンダー機能を持ちます。

次元タブ 「ピボット」セクションで、行と列の間でデータのピボットを実行するためのタブです。

次元テーブル 1)特定のビジネス・プロセスに関する多数の属性を含むテーブルです。2)Essbase Integration Services では、Essbase の潜在的な次元を定義する1つ以上のリレーショナル・テーブルのための、OLAP モデルのコンテナを指します。

次元性 MaxL DML において、セットで示された次元およびその順序です。たとえば、{(West, Feb), (East, Mar)}というセットの場合は、含まれている2つのタプルはいずれも次元(Region, Year)を反映しているため、同一の次元性であることとなります。

次元構築 Essbase アウトラインに次元およびメンバーを追加するプロセスです。

次元構築のルール データ・ロードのルールに似た仕様です。Essbase でアウトラインを変更するために使用されます。変更は外部データ・ソース・ファイルのデータに基づきます。

次元間の無関係性 次元が他の次元と交差しない状況を指します。次元に含まれるデータは、交差しない次元からはアクセスできないため、交差しない次元はその次元とは無関係となります。

残高勘定科目 特定の時点に関連する符号なしの値を格納する勘定科目の種別です。

水平アプリケーション・サーバー・クラスタ 複数のアプリケーション・サーバー・インスタンスがそれぞれ異なるマシン上にあるクラスタです。

汎用ジョブ SQR Production Reporting または Interactive Reporting 以外のジョブを指します。

消去 組織内のエンティティ間での取引をゼロに設定(消去)するプロセスです。

消去済勘定科目 連結ファイルに表示されない勘定科目です。

為替レート・タイプ 為替レートの識別子です。異なるレートのタイプが使用されるのは、一定期間および年間について複数のレートが存在することがあるためです。従来より、期末時点でのレートを当期の平均レートおよび期末レートとして定義します。その他、ヒストリカル・レート、予算レート、予測レートなどのレート・タイプがあります。レート・タイプは特定の時間に適用されます。

現地通貨 入力通貨タイプです。入力通貨タイプが指定されていない場合は、現地通貨がエンティティの基本通貨に一致します。

疎次元 ブロック・ストレージ・データベースで、他の次元と比較した場合に、すべてのメンバーの組合せのデータを含んでいる可能性の低い次元です。「密次元」と対比してください。たとえば、すべての顧客がすべての製品のデータを持っているわけではありません。

目標 指定された期間(日、四半期など)についてメジャーに期待される結果です。

直接レート 為替レート・テーブルに入力する通貨レートです。直接レートは通貨換算に使用されます。たとえば、残高を日本円から米ドルに変換する場合、変換元通貨を日本円、変換先通貨を米ドルとして、為替レート・テーブルに期間またはシナリオのレートを入力します。

相互割当て 財務フローの割当ての一種です。宛先の1つとしてソースが含まれます。

関連サブクエリー 親クエリーの各行で一度評価されるサブクエリーです。サブクエリーのトピック・アイテムを親クエリーのトピックに結合することにより作成されます。

確認レベル プロセス管理の確認ステータス・インディケータの1つです。「開始していません」、「第1パス」、「送信済」、「承認済」、「発行済」など、プロセス単位のレベルを示します。

祖先 その下にメンバーを含む分岐メンバーです。たとえば、メンバー Qtr2 とメンバー 2006 はメンバー April の祖先です。

移行スナップショット アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

移行ログ アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

移行定義ファイル(.mdf) アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

移行監査レポート 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

税金の初期残高 Strategic Finance では、損失の初期残高、収益の初期残高、および納税の初期残高のエントリーは、Strategic Finance の最初の期間に先立つ期間に発生していることを前提とします。

算出ステータス 一部の値または式の計算が変更されたことを示す集計ステータスです。影響を受けるエンティティについて正しい値を取得するには、再集計する必要があります。

算術データ・ロード データベース内の値に対して演算(たとえば各値に10を加算するなど)を実行するデータ・ロードです。

算術演算子 式およびアウトラインでのデータの計算方法を定義する記号です。標準的な算術演算子またはブール演算子が使用されます(+、-、*、/、%など)。

管理対象サーバー 内蔵された Java 仮想マシン(Java Virtual Machine: JVM)で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

精度 数値に表示される小数点以下の桁数です。

系列 異なるメタデータ要素間の関係です。メタデータ要素が他のメタデータ要素からどのように導き出されるかを示し、メタデータ要素を物理ソースまでトレースします。Essbase Studio では、この関係を系列ビューアでグラフィカルに表示できます。「トレーサビリティ」も参照してください。

系統データ 割当ての計算後にオプションで生成される追加データです。このデータにより、すべての割当てステップにわたるコストまたは収益のフローについてレポートを作成できます。

組織 各エンティティ、およびその関係を定義するエンティティの階層です。

結合 特定の列または行の共通のコンテンツに基づく2つのリレーショナル・データベース・テーブルまたはトピックの間のリンクです。通常、異なるテーブルまたはトピック内の同一または類似するアイテムの間で結合が起きます。たとえば、Customer テーブルと Orders テーブルで Customer ID の値が同一である場合、Customer テーブル内のレコードが Orders 内のレコードに結合します。

統制グループ 証明書および評価の情報を維持および整理するために FDM で使用されるグループです。サーベンス・オクスリ (Sarbanes-Oxley) 法の規定に準拠する上で特に役立ちます。

統合 Shared Services を使用して Oracle Hyperion アプリケーションでデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付けおよびスケジュールが決定されます。

繰返し 同じバージョンのデータを修正して移行する予算またはプランニング・サイクルのパスです。

置換 データ・ロードのオプションの1つです。データ・ロード・ファイルに指定された期間のすべての勘定科目からの既存の値を消去し、データ・ロード・ファイルからの値をロードします。ロード・ファイルに勘定科目が指定されていない場合、指定された期間に該当する値が消去されます。

耳折れ 折り曲げられたページの角です。チャートのヘッダー領域の右上の隅に表示されます。

自動ステージ ユーザーの操作を必要としないステージです(データ・ロードなど)。

自動逆仕訳 次期に逆仕訳する調整を入力するための仕訳です。

行の抑制 欠落値を含む行を除外し、スプレッドシート・レポートからの文字にアンダースコアを付ける設定です。

表示タイプ リポジトリに保存された3種類の Web Analysis フォーマット(スプレッドシート、チャート、ピンボード)のいずれかを指します。

製品 Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

複製パーティション パーティション・マネージャにより定義されるデータベースの一部。あるサイトで管理されるデータの更新を別のサイトに伝播するために使用されます。ユーザーは、ローカルのデータベースと同じようにデータにアクセスできます。

要約チャート 「調査」セクションで、同じ列内で下に表示される詳細チャートをロール・アップするチャートです。各チャート列最上位の要約レベルにメトリックを描画します。

親 直接レポートする依存エンティティを1つ以上含むエンティティです。親は少なくとも1つのノードに関連付けられたエンティティであるため、エンティティ、ノード、および親の情報が関連付けられています。

親の調整 親に関連して子に転記される仕訳エントリーです。

計算スクリプト データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。

計算済勘定科目 計算式を変更することができない勘定科目です。計算式は、構築するモデルの勘定科目の整合性を保つために固定されています。たとえば、当期純利益、計算済勘定科目の計算式は戦略的財務に組み込まれており、履歴期間または予測期間で変更はできません。

計算結果アイテム データベースやキューブに物理的に格納される列に対して、仮想の列を指します。クエリー実行時にデータベースにより、または Interactive Reporting Studio の「結果」セクションで計算されます。計算結果アイテムは、関数、データ項目、およびダイアログ・ボックスで提供される演算子に基づくデータ計算であり、レポートに含まれたり他のデータの計算に再利用されることがあります。

設計レポート コンポーネント・ライブラリを使用してカスタム・レポートを作成するための Web Analysis Studio のインタフェースです。

詳細チャート 要約チャートで、詳細な情報を提供するチャートです。詳細チャートは要約チャートの下にある「調査」セクションに列で表示されます。要約チャートに円グラフが表示される場合、その下の詳細チャートには円の各区分が示されます。

認証 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

認証サービス 単一の認証システムを管理するコア・サービスです。

調整 「仕訳」を参照してください。

調整勘定科目 会社間勘定科目の消去プロセスで均衡しない差額が格納される勘定科目です。

調査 「ドリルスルー」を参照してください。

論理 Web アプリケーション Web アプリケーションの内部ホスト名、ポートおよびコンテキストの識別に使用される、別名が付けられた参照です。クラスタ環境または高可用性環境では、分散コンポーネントに対する単一の内部参照を確立する別名です。EPM System では、クラスタ化されていない論理 Web アプリケーションは Web アプリケーションを実行する物理ホストにデフォルトで設定されています。

論理グループ FDM で、ソース・ファイルが FDM にロードされた後に生成される 1 つ以上の論理勘定です。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

負債勘定科目 一定時点における会社の負債残高を格納する勘定科目タイプです。例: 未払費用、買掛金勘定、長期借入金。

責任マップ 組織内の責任チーム(重要事業領域とも呼ばれます)の責任、報告、および依存関係の構造を視覚的、階層的に示します。

貸借一致の仕訳 借方の合計と貸方の合計が等しい仕訳です。

資産勘定科目 勘定科目タイプの 1 つです。会社の資産の値を保管します。

軸 1)測定と分類に使用されるグラフィックを貫通する直線です。2)多次元のデータを整理および関連付けるために使用されるレポートのアスペクトです(フィルタ、ページ、行、列など)。たとえば、Simple Basic でデータ・クエリーを実行する場合、軸では Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 の値の列を定義できます。Market と Product の階層による合計が行データとして取得されます。

透過パーティション ローカルのデータベースの一部であるかのように、リモート・データベースのデータにアクセスして変更できるようにする共有パーティションです。

透過ログイン ログイン画面を起動せずに認証されたユーザーをログインさせるプロセスです。

通常仕訳 特定の期間に一度かぎりの調整を入力するための機能です。通常仕訳は、貸借一致、エンティティごとに貸借一致、貸借不一致のいずれかになります。

通貨の上書き 任意の入力期間について選択した入力メソッドを上書きして、デフォルトの通貨/アイテムとして該当期間の値の入力を使用可能にする機能です。入力メソッドを上書きするには、数値の前または後にシャープ(#)を入力します。

通貨パーティション アプリケーションでの定義に従って、基本通貨から現地通貨メンバーを隔離する次元タイプです。通貨タイプ(実績、予算、予測など)を特定します。

通貨換算 データベースの通貨の値を別の通貨に変換するプロセスです。たとえば、1 米ドルをユーロに変換するには、ドルに為替レート(たとえば、0.923702)を乗じます(1×0.923702)。変換後のユーロの額は 0.92 になります。

連結 従属するエンティティからのデータを親エンティティに集約するプロセスです。たとえば、次元 Year に Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 というメンバーが含まれている場合、この連結は Year になります。

連結ファイル(*.cns) 集計のプロセスでチャートまたはツリー・ビューを使用して Strategic Finance ファイルを追加、削除または移動するためのグラフィカル・インタフェースです。集計ファイルを使用して、集計を定義したり変更したりすることも可能です。

連結ファイル(親) 事業部門のすべてのファイルが連結されたファイルです。連結の定義を含みます。

連結比率 親に連結された子の値の割合です。

適応状態 Interactive Reporting Web Client の権限レベルです。

選択リスト レポート設計者がレポートの視点(POV)を定義する際に各次元に指定するメンバーのリストです。定義されたメンバー・リストに指定されたメンバーを選択するか、または動的リストの関数に定義された条件に一致するメンバーを選択するだけで、選択リストを使用する次元の POV を変更できます。

重複する別名 別名テーブルに複数存在し、データベース・アウトラインの複数メンバーに関連付けられている可能性のある名前です。重複する別名は、重複メンバーのアウトラインでのみ使用できます。

重複メンバーのアウトライン 重複メンバー名を格納しているデータベース・アウトラインです。

重複メンバー名 データベース内に複数存在する、それぞれ異なるメンバーを表す同一のメンバー名です。たとえば、ニューヨーク州を示すメンバーとニューヨーク市を示すメンバーが存在する場合、データベースに New York という名前のメンバーが2つ含まれることがあります。データベースに New York という名前のメンバーが2つ含まれることがあります。

重要事業領域(CBA) 部門、地域、工場、コスト・センター、プロフィット・センター、プロジェクト・チーム、またはプロセスに編成された個人またはグループです。責任チームまたはビジネス領域とも呼ばれます。

重要成功要因(CSF) 戦略目標を達成するために確立および維持する必要がある能力です。戦略目標または重要プロセスにより所有され、1つ以上のアクションに対する親となります。

関数 Data Relationship Management で、パラメータを受け入れ動的値を返す、派生プロパティ式の構文要素です。

関連勘定科目 メイン勘定科目に関連する、同一のメイン勘定科目番号でグループ化された勘定科目です。勘定科目の構造体では、すべてのメイン勘定科目および関連勘定科目は同一のメイン勘定科目番号にグループ化されます。メイン勘定科目と関連勘定科目は、勘定科目番号の最初の接尾辞により区別されます。

限界税率 税引き後の負債コストを計算するために使用されるレートです。最近計上された所得に適用される税率(所得額に適用される最高の税率区分の税率)を示し、連邦税、州税、および地方税を含みます。課税対象所得と税率区分の現在のレベルに基づいて、限界税率を予測できます。

障害回復 地理的に離れたスタンバイ・サイトへのアプリケーションおよびデータに対する回復戦略を備えることで、運用サイトでの自然災害や予定外の停止から守る機能です。

隣接する四角形 Interactive Reporting ドキュメントのセクションを個人用ページに埋め込む場合に、Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツをカプセル化する必須のパラメータです。高さと幅を表すピクセル、または1ページ当たりの行数により指定されます。

集約 集約ストレージ・データベースの値をロール・アップおよび格納するプロセスです。または集約プロセスによって格納された結果を指します。

集約スクリプト 集約を構築するための集約ビューの選択を定義するファイルです。集約ストレージ・データベースのみで使用されます。

集約ストレージ・データベース 潜在的に大きな多数の次元に分類される疎に分散した大規模なデータをサポートするように設計されたデータベースのストレージ・モデルです。上位のメンバーと式は動的に計算され、選択されたデータ値は集約、格納されます。通常、集約の合計所要時間が改善されます。

集約セル 複数のセルから構成されるセルです。たとえば、Children(Year)を使用するデータ・セルは、Quarter 1、Quarter 2、Quarter 3、および Quarter 4 のデータを含む4つのセルに展開されます。

集約ビュー 各次元内のメンバーのレベルに基づく集約セルの集合です。計算時間を短縮するため、値は事前に集約されて集約ビューとして格納されています。取得は集約ビューの合計から開始され、合計に追加されます。

集約制約 集約要求ライン・アイテムや集約メタトピック・アイテムに設定する制約です。

集約関数 関数の一種です。合計、平均の計算など、データの要約や分析を実行します。

集計ルール 階層のノードを集計する際に実行されるルールです。親の残高が正しく集計されるように、顧客固有の適切な式を含めることができます。消去プロセスは、このルール内で制御できます。

非アクティブ・グループ 管理者によりシステムへのアクセスが非アクティブにされているグループです。

非アクティブ・ユーザー 管理者によりアカウントが非アクティブ化されているユーザーです。

非対称トポロジ 運用サイトとスタンバイ・サイトの層全体で異なる Oracle Fusion Middleware 障害回復構成です。たとえば、非対称トポロジでは、運用サイトよりも少ないホストとインスタンスがあるスタンバイ・サイトが含まれることがあります。

非次元モデル Shared Services のモデル・タイプの 1 つです。セキュリティ・ファイル、メンバー・リスト、計算スクリプト、Web フォームなどのアプリケーション・オブジェクトが含まれます。

領域 メンバーおよび値の定義済みのセットであり、パーティションを構成します。

高可用性 障害が発生した場合でもアプリケーションが継続してサービスを提供できるようにするシステム属性です。これは、シングル・ポイント障害の除去、フォルト・トレラント・ハードウェアおよびサーバー・クラスタにより実現されます。1 つのサーバーで障害が発生すると、処理要求は別のサーバーにルーティングされます。

高機能計算 最後に実行された計算以降に更新されたデータ・ブロックを追跡する計算方法です。

索引

記号

#Missing 値。「欠落した値」を参照

%演算子, 171

*演算子, 171

+演算子, 171

-演算子, 171

.cfg ファイル, 330

.chg ファイル, 440

.csc ファイル, 355

.ddb ファイル, 421

.ind ファイル。「インデックス・ファイル」を参照

.mdx ファイル

保存, 410

開く, 403

.mdx 拡張子, 418

.msh ファイル, 403

開く, 403

.mxl ファイル

保存, 410

開く, 403

.otl ファイル, 131

.pag ファイル。「データ(.pag)ファイル」を参照

.rep ファイル, 387

.rpt ファイル, 391

.rul ファイル, 209

/演算子, 171

0(ゼロ)値

ストレージ用の圧縮, 347

タイム・バランス計算でのスキップ, 172

2パス計算

データベース計算向けに使用可能化, 384

メンバーの定義, 172

~演算子, 171

「ASO MDX 式テンプレート」ダイアログ・ボックス, 514

「Essbase Administration Services ログイン」ダイアログ・ボックス, 497

「Essbase」タブ(「オプション」ダイアログ・ボックス), 655

「Essbase クラスタ情報」ダイアログ・ボックス, 600

「Essbase サーバー」タブ(「ユーザー・プロパティ」), 705

「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックス, 480

「LRO のインポート」ダイアログ・ボックス, 624

「LRO のエクスポート」ダイアログ・ボックス, 605

「MaxL スクリプト・エディタ」タブ(「オプション」ダイアログ・ボックス), 658

「MaxL ステートメント」タブ(メッセージ・ペイン), 42

「MDX スクリプト・エディタ」タブ(「オプション」ダイアログ・ボックス), 659

「OS」タブ(Essbase サーバー・プロパティ), 501

「SQL データ・ソースを開く」ダイアログ・ボックス, 653

「SQL 接続」ダイアログ・ボックス, 692

「UDA」タブ(「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス), 640

「URL の編集」ダイアログ・ボックス, 599

「すべてのマクロのコピー」ダイアログ・ボックス, 520

「すべての関数をコピー」ダイアログ・ボックス, 520

「なし」アクセス・レベル, 269

「アウトライン」タブ(アウトライン・エディタ), 663

「アウトライン」タブ(アウトライン・ビューア), 668

「アウトラインのコンパクト化」ダイアログ・ボックス, 518

- 「アウトラインの印刷オプション」 ダイアログ・ボックス, [667](#)
- 「アウトラインの同期」 ダイアログ・ボックス, [694](#)
- 「アウトラインの更新」 ダイアログ・ボックス, [703](#)
- 「アウトラインの関連付け」 ダイアログ・ボックス, [515](#)
- 「アウトライン・ツール」 タブ(「オプション」ダイアログ・ボックス), [660](#)
- 「アウトライン内の置換」 ダイアログ・ボックス, [678](#)
- 「アクション」 メニュー, [41](#)
- 「アプリケーション/データベース・アクセス」 タブ(グループ・プロパティ), [532](#)
- 「アプリケーション/データベース・アクセス」 タブ(ユーザー・プロパティ), [543](#)
- 「アプリケーションのコピー」 ダイアログ・ボックス, [521](#)
- 「アプリケーションの作成」 ダイアログ・ボックス, [530](#)
- 「アプリケーションの名前変更」 ダイアログ・ボックス, [673](#)
- 「アプリケーションの開始時にデータベースを開始」 オプション, [570](#)
- 「ウィンドウ」 ダイアログ・ボックス, [717](#)
- 「ウィンドウ」 メニュー, [43](#)
- 「エディタ・オプション」 ダイアログ・ボックス, [599](#)
- 「オブジェクトのロック解除」 ダイアログ・ボックス, [703](#)
- 「オプション」 ダイアログ・ボックス, [654](#)
- 「カスタム・ビューのノードの配置」 ダイアログ・ボックス, [513](#)
- 「カスタム・ビューの名前変更」 ダイアログ・ボックス, [673](#)
- 「カスタム・フィルタの追加」 / 「カスタム・フィルタの編集」 ダイアログ・ボックス, [481](#)
- 「キャッシュ」 タブ(データベース・プロパティ), [566](#)
- 「グループ」 タブ(ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ), [712](#)
- 「グループ」 タブ(ユーザー・プロパティ), [544](#)
- 「グループのコピー」 ダイアログ・ボックス, [524](#)
- 「グループの作成」 ダイアログ・ボックス, [532](#)
- 「グループの名前変更」 ダイアログ・ボックス, [675](#)
- 「グループ・プロパティ」 ダイアログ・ボックス, [532](#)
- 「グループ情報」 タブ(グループ・プロパティ), [534](#)
- 「グローバル・プロパティ」 タブ(「フィールド・プロパティ」), [615](#)
- 「グローバル・マッピング・メンバーの選択」 ダイアログ・ボックス, [622](#)
- 「グローバル設定」 タブ(次元構築の設定), [587](#)
- 「コマンドを許可」 オプション, [505](#)
- 「サブセット」 ダイアログ・ボックス, [692](#)
- 「ショートカット」 メニュー。「右クリック・メニュー」を参照
- 「スクリプト変数」 ダイアログ・ボックス, [683](#)
- 「ストレージ」 タブ(データベース・プロパティ), [576](#)
- 「セキュリティ」 タブ(Essbase サーバー・プロパティ), [502](#)
- 「タイプ」 タブ(パーティションの作成/パーティションの編集ウィンドウ), [539](#)
- 「ツール」 メニュー, [41](#)
- 「テキストを使用した作成」 ダイアログ・ボックス, [546](#)
- 「ディスク・ドライブ」 タブ(Essbase サーバー・プロパティ), [498](#)
- 「デフォルトの別名テーブルの設定」 ダイアログ・ボックス, [688](#)
- 「デフォルト計算の設定」 ダイアログ・ボックス, [689](#)
- 「データの組合せの消去」 タブ(データ・ロードの設定), [554](#)
- 「データの複製」 ダイアログ・ボックス, [560](#)
- 「データベースのアーカイブ」 ダイアログ・ボックス, [509](#)
- 「データベースのエクスポート」 ダイアログ・ボックス, [604](#)
- 「データベースのコピー」 ダイアログ・ボックス, [522](#)
- 「データベースの作成」 ダイアログ・ボックス, [531](#)
- 「データベースの再構築」 ダイアログ・ボックス, [681](#)
- 「データベースの再構築のオプション」 ダイアログ・ボックス, [681](#)
- 「データベースの名前変更」 ダイアログ・ボックス, [674](#)

- 「データベースの復元」 ダイアログ・ボックス, [680](#)
- 「データベース・ノートの設定」 ダイアログ・ボックス, [688](#)
- 「データベース計算」 ダイアログ・ボックス, [601](#)
- 「データ・ストレージ」 タブ(管理サーバーのプロパティ), [483](#)
- 「データ・ソースのプロパティ」 ダイアログ・ボックス, [560](#)
- 「データ・ブロックのロックのタイムアウト」 オプション, [505](#)
- 「データ・ロード」 ダイアログ・ボックス, [551](#)
- 「データ・ロードの設定」 ダイアログ・ボックス, [553](#)
- 「データ・ロード・プロパティ」 タブ(「フィールド・プロパティ」), [612](#)
- 「データ・ロード結果」 ダイアログ・ボックス, [553](#)
- 「データ値」 タブ(データ・ロードの設定), [555](#)
- 「トランザクション」 タブ(データベース・プロパティ), [578](#)
- 「トランザクションの再実行」 ダイアログ・ボックス, [679](#)
- 「トランザクションの表示」 ダイアログ・ボックス, [594](#)
- 「トランザクション・リスト」 ダイアログ・ボックス, [696](#)
- 「トリガーの編集」 ダイアログ・ボックス, [650](#)
- 「トークンを無視」 タブ(「データ・ソースのプロパティ」), [563](#)
- 「ノートの編集」 ダイアログ・ボックス, [598](#)
- 「ノートの表示」 ダイアログ・ボックス, [717](#)
- 「パスワードの変更」 ダイアログ・ボックス, [517](#)
- 「パスワードを Essbase サーバーへ伝播」 ダイアログ・ボックス, [670](#)
- 「パーティションのエクスポート」 ダイアログ・ボックス, [606](#)
- 「パーティションのコピー」 ダイアログ・ボックス, [525](#)
- 「パーティションの修復」 ダイアログ・ボックス, [677](#)
- 「パーティション・ファイルのインポート」 ダイアログ・ボックス, [625](#)
- 「ファイル」 メニュー, [41](#)
- 「ファイルのエンコード方式」 ダイアログ・ボックス, [616](#)
- 「フィルタのコピー」 ダイアログ・ボックス, [523](#)
- 「フィルタの割当て」 ダイアログ・ボックス, [515](#)
- 「フィルタの名前変更」 ダイアログ・ボックス, [674](#)
- 「フィールドの分割」 ダイアログ・ボックス, [691](#)
- 「フィールドの移動」 ダイアログ・ボックス, [645](#)
- 「フィールドの結合」 ダイアログ・ボックス, [626](#)
- 「フィールドの編集」 タブ(データ・ソースのプロパティ), [562](#)
- 「フィールド・プロパティ」 ダイアログ・ボックス, [612](#)
- 「プラグイン・コンポーネントの構成」 ダイアログ・ボックス, [518](#)
- 「プロパティ」 タブ(アウトライン・エディタ), [664](#)
- 「プロパティ」 タブ(アウトライン・ビューア), [668](#)
- 「ヘッダー」 タブ(「データ・ソースのプロパティ」), [562](#)
- 「ヘッダー定義」 タブ(データ・ロードの設定), [556](#)
- 「ヘルプ」 メニュー, [41](#)
- 「マクロのコピー」 ダイアログ・ボックス, [525](#)
- 「マクロの名前変更」 ダイアログ・ボックス, [675](#)
- 「マクロの編集」 ダイアログ・ボックス, [597](#)
- 「マッピング」 タブ(パーティションの作成/パーティションの編集ウィンドウ), [538](#)
- 「メンバーのプレビュー」 ダイアログ・ボックス, [634](#)
- 「メンバーのプロパティ」 ダイアログ・ボックス, [635](#)
- 「属性」 タブ, [636](#)
- 「メンバーの検索」 ダイアログ・ボックス, [619](#)
- 「メンバー・マッピングのインポート」 ダイアログ・ボックス, [624](#)
- 「メンバー名」 ダイアログ・ボックス, [634](#)
- 「メンバー情報」 ダイアログ・ボックス, [633](#)
- 「ユーザー/グループ・アクセスの編集」 ダイアログ・ボックス, [599](#)
- 「ユーザー」 タブ(グループ・プロパティ), [535](#)

- 「ユーザー」タブ(ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ), 714
- 「ユーザーのコピー」ダイアログ・ボックス, 528
- 「ユーザーの作成」ダイアログ・ボックス (Essbase サーバー), 542
- 「ユーザーの名前変更」ダイアログ・ボックス, 676
- 「ユーザー・プロパティ」ダイアログ・ボックス(Essbase サーバー), 542
- 「ユーザー情報」タブ(Essbase サーバーのユーザー・プロパティ), 545
- 「ユーザー情報」タブ(管理サーバーのユーザー・プロパティ), 706
- 「ライセンス」タブ(Essbase サーバー・プロパティ), 500
- 「ルール・ファイルのコピー」ダイアログ・ボックス, 527
- 「ルール・ファイルの名前変更」ダイアログ・ボックス, 676
- 「レコードの選択」ダイアログ・ボックス, 684
- 「レコードの除外」ダイアログ・ボックス, 671
- 「レコード表示カウント」ダイアログ・ボックス, 671
- 「レベルの定義」ダイアログ・ボックス, 583
- 「レポート・スクリプトのコピー」ダイアログ・ボックス, 526
- 「レポート・スクリプトの名前変更」ダイアログ・ボックス, 676
- 「レポート・スクリプトの実行」ダイアログ・ボックス, 602
- 「ログ・ビューアのオプション」ダイアログ・ボックス, 632
- 「一般」タブ(アプリケーション・プロパティ), 505
- 「一般」タブ(データベース・プロパティ), 570
- 「世代の定義」ダイアログ・ボックス, 582
- 「代替変数のコピー」ダイアログ・ボックス, 528
- 「作成された次元」および「削除された次元」ダイアログ・ボックス, 547
- 「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックス, 594
- 「別名テーブルのエクスポート」ダイアログ・ボックス, 603
- 「別名テーブルのコピー」ダイアログ・ボックス, 519
- 「別名テーブルの作成」ダイアログ・ボックス, 530
- 「別名テーブルの名前変更」ダイアログ・ボックス, 672
- 「動的時系列メンバーの定義」ダイアログ・ボックス, 581
- 「区切り記号」タブ(「データ・ソースのプロパティ」), 561
- 「印刷オプション」ダイアログ・ボックス, 669
- 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス, 682
- 「変換設定」ダイアログ・ボックス, 518
- 「変更」タブ(アウトライン・エディタ), 663
- 「変更」タブ(データベース・プロパティ), 572
- 「外部グループの検索」ダイアログ・ボックス, 619
- 「外部ユーザーの検索」ダイアログ・ボックス, 619
- 「属性」タブ(「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス), 636
- 「式」タブ(「メンバーのプロパティ」), 637
- 「式」ダイアログ・ボックス, 621
- 「情報」タブ(「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックス), 638
- 「接続」タブ(パーティションの作成/パーティションの編集・ウィンドウ, 537
- 「接続を許可」オプション, 505
- 「新しいトリガー」ダイアログ・ボックス, 650
- 「新しいマクロ」ダイアログ・ボックス, 648
- 「新しい変数」ダイアログ・ボックス, 649
- 「新規」ダイアログ・ボックス, 646
- 「新規関数」ダイアログ・ボックス, 647
- 「更新を許可」オプション, 505
- 「検索」ダイアログ・ボックス, 618
- 「検証」タブ(パーティションの作成/パーティションの編集ウィンドウ, 541
- 「構成」タブ(管理サーバーのプロパティ), 483
- 「次元」タブ(データベース・プロパティ), 569
- 「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス, 588
- 「世代/レベル名」タブ, 593
- 「属性次元」タブ, 590
- 「会計次元プロパティ」タブ, 589
- 「次元定義」タブ(次元構築の設定), 587
- 「次元構築の設定」タブ(次元構築の設定), 585
- 「次元構築の設定」ダイアログ・ボックス, 584
- 「次元構築プロパティ」タブ(「フィールド・プロパティ」), 613

- 「添付ファイルの変更」 ダイアログ・ボックス, 517
- 「添付ファイルの最大サイズ」 オプション, 505
- 「環境」 タブ, 499
- 「確認」 タブ(アウトライン・エディタ), 666
- 「等式によるブロックの作成」 オプション, 353
- 「管理サーバーでのユーザーの作成」 ダイアログ・ボックス, 541
- 「管理サーバーの追加」 ダイアログ・ボックス, 479
- 「結合を使用したフィールドの作成」 ダイアログ・ボックス, 531
- 「結果の検索」 タブ, 621
 - アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューア, 621
 - 式エディタ, 637
- 「統計」 タブ(Essbase サーバー・プロパティ), 504
- 「統計」 タブ(アプリケーション・プロパティ), 507
- 「統計」 タブ(データベース・プロパティ), 572
- 「置換」 ダイアログ・ボックス, 678
- 「自動ログオフ」 オプション, 273
- 「表示」 タブ(「オプション」 ダイアログ・ボックス), 657
- 「表示」 メニュー, 41
- 「計算の割当て」 ダイアログ・ボックス, 514
- 「計算スクリプトのコピー」 ダイアログ・ボックス, 522
- 「計算スクリプトの名前変更」 ダイアログ・ボックス, 673
- 「計算スクリプトの実行」 ダイアログ・ボックス, 601
- 「通貨」 タブ(データベース・プロパティ), 568
- 「通貨アウトラインの生成」 ダイアログ・ボックス, 622
- 「選択ルールのインポート」 ダイアログ・ボックス, 625
- 「選択ルールのエクスポート」 ダイアログ・ボックス, 606
- 「開く」 ダイアログ・ボックス, 652
- 「関数のコピー」 ダイアログ・ボックス, 524
- 「関数の名前変更」 ダイアログ・ボックス, 674
- 「関数の編集」 ダイアログ・ボックス, 595
- 「関連付け」 タブ(「メンバーのプロパティ」 ダイアログ・ボックス), 635
- 「集約ストレージ・データベースの再構築」 ダイアログ・ボックス, 484
- 「電子メールの送信」 ダイアログ・ボックス, 685
- 「非アクティブの制限」 オプション, 502
- 「領域」 タブ(パーティションの作成/パーティションの編集ウィンドウ), 536
- 「領域の定義」 ダイアログ・ボックス, 511
- 「領域マッピング・メンバーの選択」 ダイアログ・ボックス, 512
- 「領域固有メンバーのマッピング」 ダイアログ・ボックス, 510

A - Z

Administration Services。「Administration Services」を参照

- アーキテクチャ, 33
- シャットダウン, 70
- ユーザーの追加, 63
- 接続, 35
- 機能, 39
- 終了, 70
- 設定, 36
- 説明, 33
- 配置, 33
- 開始, 34

Administration Services の終了, 70

Administration Services の設定, 36

Administration Services を閉じる, 70

Apache コネクタ・ポート, 66

API リファレンス, 719

ARBORPATH 環境変数

Essbase サーバーについて表示, 328

管理サーバーについて表示, 483

ASOsamp アプリケーション, 37

ASO 式

作成, 514

CCONV コマンド, 454

CCTRACK 設定, 456

CDF。「カスタム定義関数」を参照

CDM。「カスタム定義マクロ」を参照

CPU 情報、表示, 329

Demo アプリケーション, 37

DM Demo アプリケーション, 37

EAS サーバー。「管理サーバー」を参照
echo(MaxL ステートメント), 400

- essbase.cfg 構成ファイル, 330
- essbase.log ファイル, 256
- essbase.sec、エクスポート, 316
- essbase.sec セキュリティ・ファイル
 - essbase_timestamp.bak と比較, 315
 - コンテンツのエクスポート, 316
 - コンパクト化(最適化), 316
 - 説明, 269
- essbase_timestamp.bak、更新, 315
- Essbase からの切断
 - 1つのサーバーから, 88
 - すべてのサーバーから, 70
- Essbase の開始時にアプリケーションを開始オプション, 505
- Essbase キャッシュのヒットリツ, 343
- Essbase サーバー。「Essbase サーバー」を参照
 - Unicode モードのアプリケーションを作成する権限, 91
 - アクセス, 87
 - エンタープライズ・ビューからの削除, 49
 - エンタープライズ・ビューの表示, 47
 - エンタープライズ・ビューへの追加, 48
 - オペレーティング・システム情報, 329
 - サーバー・ログの削除, 257
 - サーバー・ログを開く, 256
 - セキュリティ, 269
 - ディスク・ドライブ情報, 329
 - プロパティの管理, 89
 - プロパティの設定, 89
 - ポート, 86
 - ユーザー接続の統計, 331
 - ライセンス情報, 327
 - 切断, 88
 - 接続, 35
 - 権限, 270
 - 監視, 325
- Essbase サーバーの複数インスタンス, 86
- Essbase サーバー・コンピュータのネットワーク・プロトコル, 327
- Essbase サーバー・プロパティ・ウィンドウ, 498
- Essbase サーバー構成, 48
- Essbase 管理サーバー。「管理サーバー」を参照
- ESSCMD インタフェース, 94
- ESSLANG ロケール, 124, 126
- ESSLANG 値
 - 管理サーバーについて表示, 483
- essmsh(MaxL シェル), 401
- esssvr(アプリケーション・サーバー), 96
- HTTP コネクタ・ポート, 66
- Interntl サンプル・データベース, 450
- Java
 - カスタム定義関数に使用, 376
- Java API リファレンス, 719
- Java プラグイン, 719
- LRO。「リンク・レポート・オブジェクト」を参照
- LRO ファイルの最大サイズ, 397
- MaxL および MDX スクリプトでの変数の展開, 409
- MaxL および MDX スクリプトの未定義変数, 408
- MaxL シェルのインタフェース, 401
- MaxL スクリプト
 - .msh 拡張子, 400
 - .mxl 拡張子, 400
 - Essbase サーバーに接続, 412
 - MaxL シェル, 401
 - MaxL シェルのインタフェース, 401
 - MaxL シェルのキーワードのサポート, 400
 - MaxL スクリプト・エディタ, 400
 - エディタを対話的に使用, 400
 - オートコンプリート, 405
 - コピー, 415
 - コメント, 406
 - ストレージ, 410
 - テキストの検索, 153
 - メッセージを非表示, 413
 - 作成, 402
 - 保存, 410
 - 削除, 415
 - 印刷, 415
 - 名前変更, 415
 - 変数, 407, 408, 409
 - 外部ファイルの参照, 409
 - 実行, 412
 - 情報, 399
 - 構文のガイドライン, 403
 - 結果, 413
 - 色分け, 357
 - 開く, 403
 - 電子メール, 92
- MaxL スクリプトのネスト, 409
- MaxL スクリプト・エディタ

- タブ位置, 358
- ワード・ラップ, 358
- 情報, 400
- MaxL ステートメント、「メッセージ」 ペインでの表示, 102
- MDX スクリプト
 - .mdx 拡張子, 418
 - Essbase サーバーに接続, 412
 - MDX スクリプト・エディタ, 418
 - MDX 関数の挿入, 419
 - エディタを対話的に使用, 418
 - オートコンプリート, 405
 - コピー, 415
 - コメント, 406
 - ストレージ, 410
 - メッセージを非表示, 413
 - 作成, 402
 - 保存, 410
 - 別名, 419
 - 削除, 415
 - 印刷, 415
 - 名前変更, 415
 - 変数, 407, 408, 409
 - 実行, 412
 - 情報, 417, 418
 - 構文のガイドライン, 403
 - 次元名およびメンバー名の挿入, 419
 - 結果, 413
 - 開く, 403
- MDX スクリプト・エディタ
 - タブ位置, 358
 - ワード・ラップ, 358
 - 情報, 418
- MDX テンプレート, 514
- MDX 式(集約ストレージ), 75
- MDX 関数
 - MDX スクリプトでの挿入, 419
 - 情報, 417
- MetaRead アクセス・レベル, 616
- MyView。「カスタム・ビュー」を参照
- Planning, 286
- Planning、アクセスの表示, 286
- Provider Services
 - Essbase クラスタ, 468
 - Provider Services プロパティ・ウィンドウ, 689
 - XML トレースの使用可能化, 463
- 「Provider Services の追加」 ダイアログ・ボックス, 481
- 「クラスタの追加」 ダイアログ・ボックス, 481
- 「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」 ダイアログ・ボックス, 684
- 「スタンドアロン・サーバーの追加」 ダイアログ・ボックス, 481
- 「ロガーの編集」 ダイアログ・ボックス, 597
- クライアントのアップグレードの自動配置, 460
- クラスタについて, 468
- クラスタの削除, 470
- クラスタの追加, 468
- クラスタ・コンポーネントのリフレッシュ, 473
- クラスタ・コンポーネントの使用可能化, 472
- クラスタ・コンポーネントの削除, 471
- クラスタ・コンポーネントの無効化, 473
- クラスタ・コンポーネントの追加, 470
- クラスタ・リストのリフレッシュ, 469
- スタンドアロン・サーバー, 465
- スタンドアロン・サーバーの削除, 467
- スタンドアロン・サーバーの追加, 466
- スタンドアロン・サーバー・リストのリフレッシュ, 466
- セッションのタイムアウト, 463
- セッションの監視, 462
- セッション・ウィンドウ, 691
- リストのリフレッシュ, 464
- ログのプロパティの設定, 463
- ログ・レベルのメッセージの設定, 463
- ログ・レベルの指定, 463
- 分析クラスタ・ウィンドウ, 497
- 切断, 461
- 削除, 465
- 情報, 459
- 接続, 461
- 最大行数および列数の指定, 464
- 追加, 460
- Provider Services プロパティ - 「クライアントの配置」 タブ, 689
- Provider Services プロパティ - 「ロギング」 タブ, 690
- Provider Services プロパティ - 「設定」 タブ, 690

- RLE データ圧縮, 347
- Sample_U アプリケーション, 37
- SAN ストレージ, 345
- set(MaxL ステートメント), 400
- Shared Services
 - へのサーバーの変換, 262
 - アプリケーションの登録, 266
 - ユーザーとグループの移行, 263
 - ユーザー管理と, 259
 - 計算およびフィルタ・アクセス, 264
- Shared Services へのアプリケーションの登録, 266
- shell(MaxL ステートメント), 400
- SMTP サーバー、指定, 69
- spool(MaxL ステートメント), 400
- SQL データベース
 - 接続, 218
 - 開く, 218
- UDA, 203
 - アウトライン・エディタを使用した割当て, 203
 - ルール・ファイルを使用した割当て, 229
 - 割当て, 203
 - 定義, 203
 - 符号の反転と, 248
- Unicode
 - Unicode モードの Essbase サーバーの設定, 91
 - Unicode モードの Essbase サーバー, 91, 502
 - Unicode モードのアプリケーション
 - Sample_U, 37
 - 作成, 127
 - 移行, 128
- URL(リンク・レポート・オブジェクトとして), 394
- version(MaxL ステートメント), 400
- Windows サービス, 67
- Xchgrate サンプル・データベース, 452
- XREF 関数、ロケーション別名, 121
- ZLIB 圧縮, 347

- あ行**
- アイコン
 - アプリケーションとデータベース, 333
 - エンタープライズ・ビュー, 333
- アウトライン
 - アウトラインへの変更の表示, 180
 - アウトライン変更後のデータベースの再構築, 139
 - アクティブな別名テーブルの設定, 189
 - エラー, 140
 - コピー, 141
 - コンパクト化, 83
 - スクリプト・エディタでの表示, 389
 - ソート, 176
 - テキストの検索, 153
 - テキストの置換, 153
 - ハイブリッド分析, 170
 - ビューのカスタマイズ, 151
 - プロパティ, 137
 - プロパティの定義, 137
 - メモリーの懸念事項, 160
 - メンバーおよびテキストの検索, 153
 - メンバーの UDA, 203
 - メンバーの代替名(UDA), 203, 229
 - ルール・ファイルを使用した動的な更新, 213
 - ロック, 136
 - ロック解除, 136
 - 会計次元, 168
 - 作成
 - アウトライン・エディタでの, 137
 - データ・ソースから, 211
 - 通貨換算向け, 452
 - 保存, 139
 - 削除, 142
 - 動的構築, 211
 - 印刷, 141
 - 同期, 440
 - 名前変更, 142
 - 命名
 - メンバー, 163
 - 世代とレベル, 179
 - 次元, 162
 - 変更、表示, 180
 - 展開, 145
 - 時間次元, 167
 - 最適化, 142
 - アウトライン・エディタを使用, 142
 - ルール・ファイルによる, 220
 - 検索, 153
 - 次元およびメンバーのコピー, 164
 - 次元およびメンバーの削除, 177

- 次元およびメンバーの移動, 155, 164
- 砂時計の形に配置, 587
- 確認, 140
- 編集, 160
- 縮小, 145
- 表示
 - アウトライン, 144
 - 次元/メンバーのプロパティ, 146
- 説明, 131
- 追加
 - メンバー, 163
 - 別名, 190
 - 次元, 162
- 通貨換算と, 450
- 重複メンバー, 137
- 開く, 160
- 関連付け
 - スクリプトとの, 389
 - ルール・ファイルでのメンバー・フィールドの, 240
 - ルール・ファイルとの, 389
 - 基本次元のメンバーへの属性の, 198
 - 基本次元への属性次元の, 199
- 集約ストレージ・アウトライン, 73
- アウトラインでの色, 151
- アウトラインの変更
 - 元に戻す, 181
 - 同期のログ, 440
 - 表示, 180
- アウトラインへの変更
 - 元に戻す, 181
 - 表示, 180
- アウトライン・エディタ
 - アウトラインの最適化, 142
 - アウトラインの管理プロセス, 135
 - ウィンドウ, 662
 - カスタマイズ, 151
 - キーボード・ショートカット, 155
 - クエリー・ヒント, 157
 - ツールバー, 152
 - メンバーの検索, 195
 - 変更の表示, 180
 - 変更を元に戻す, 181
 - 次元およびメンバーの操作, 155
 - 確認のプロンプトの無効化, 151
 - 説明, 149
- アウトライン・エディタ - 「テキスト・リスト・マネージャ」 タブ, 666
- アウトライン・ビューア
 - ウィンドウ, 667
 - カスタマイズ, 151
 - 説明, 144
- アウトライン・ファイル(.otl), 131
- アウトライン同期, 440
- アウトライン変更の追跡, 440
- アウトライン変更ログの削除, 440
- アクセス
 - Essbase サーバーへの, 707
 - アウトラインへの, 131
 - アプリケーションへの, 274
 - データベースへの, 275
 - フィルタの使用, 307
 - 管理サーバーへの, 63
- アクセス(入出力)メソッド, 349
- アクセラレータ・キー
 - アウトライン・エディタでの, 149
- アクティブなプロセス、表示, 319
- アクティブな別名テーブル、設定, 189
- アプリケーション
 - エンタープライズ・ビューのアイコン, 333
 - コピー, 99, 521
 - サンプル・アプリケーション, 37
 - シャットダウン, 97
 - ステータス, 332
 - パーティション・アプリケーション, 421
 - プロパティの設定, 98
 - ユーザー・セッション, 319
 - ランタイム統計の表示, 331
 - ロックの管理, 321
 - ロード, 96
 - 作成, 95, 530
 - 停止, 97
 - 削除, 101
 - 名前変更, 100
 - 最小権限の設定, 274
 - 権限, 271
 - 登録, 266
 - 監視, 332
 - 移行, 641
 - 移行ウィザードによるコピー, 641
 - 通貨換算, 450
 - 開始, 96
 - 開始の自動化, 97

- アプリケーション/データベースのステータス・ウィンドウ, 509
- アプリケーションのアクティビティの阻止, 277
- アプリケーションの作成/削除の権限, 269
- アプリケーションの開始、自動, 97
- アプリケーション・アクセス・タイプ、設定, 286
- アプリケーション・セキュリティ、無効化, 276
- アプリケーション・パーティション。「パーティション」を参照
- アプリケーション・プロパティ・ウィンドウ, 504
- アプリケーション・マネージャ権限, 269
- アプリケーション・ログ。「ログ」を参照
- アラート(トリガー), 443
- アルゴリズム(構築方法), 220
- アンコミット・アクセス
 選択, 348
- アンダースコア
 ルール・ファイルでのスペースの変換, 244
- アーキテクチャ、Administration Services, 33
- イベント・ログ。「ログ」を参照
- インタフェース。「コンソール」を参照
- インデックス・キャッシュ
 サイズ設定, 342
- ヒット率, 343
- インデックス・ファイル
 サイズの確認, 346
- ストレージの割当て, 345
- 移行および, 641
- 読取り/書込み統計の確認, 336
- インポート
 LRO, 396
- パーティション, 439
- パーティションのメンバー・マッピングを, 432
- メンバー選択ルールをパーティションに, 430
- インライン・ツールバーのレイアウト, 42
- ウィザード, 45
- ウィンドウ、管理
 印刷, 43
- 複数の管理, 43
- エクスポート
 LRO, 395
- データベース, 113
- パーティション, 439
- メンバー選択ルール, 430
- 別名テーブル, 185
- エディタ
 MaxL スクリプト・エディタ, 400
- MDX スクリプト・エディタ, 418
- アウトライン・エディタ, 149
- データ準備エディタ, 215
- フィルタ・エディタ, 616
- レポート・スクリプト・エディタ, 388
- 計算スクリプト・エディタ, 356
- エラー。「エラー・メッセージも」を参照
- エラー。「エラー・メッセージ」も参照
- MaxL スクリプトにおける, 412
- ルール・ファイル内, 223
- レポート・スクリプトの, 392
- 計算スクリプトの, 370
- エラー・メッセージ
 コンソールで表示, 42
- 管理サーバー・ログ内, 60
- 電子メール, 42
- エンコード方式
 アウトラインを開く際にプロンプトを表示, 160
- スクリプトを保存するときのプロンプト, 366
- スクリプトを開くときのプロンプト, 360
- ルール・ファイルを開く際にプロンプトを表示, 216
- レポートをファイルとして保存するときのプロンプト, 391
- 判別方法, 126
- 説明, 124
- エンタープライズ・ビュー
 Essbase サーバーの表示, 48
- Essbase サーバーの追加, 48
- アイコン, 333
- オブジェクトの削除, 50
- オブジェクトの追加, 50
- オブジェクトの選択, 56
- オブジェクトの順序, 46
- カスタマイズしたビュー, 52
- サブセット, 52
- ナビゲーション, 56
- ナビゲーション・ヒント, 52
- ビューのリフレッシュ, 51
- プラグイン, 719

- 更新, 51
 - 管理サーバーの削除, 63
 - 管理サーバーの追加, 61
 - 説明, 46
 - エンタープライズ・ビューに表示, 48
 - エンタープライズ・ビューのサブセット, 52
 - エンタープライズ・ビューのナビゲーション・ヒント, 52
 - エンタープライズ・ビューのリフレッシュ, 51
 - エンタープライズ・ビューの展開, 51
 - エンタープライズ・ビューの縮小, 51
 - エージェント(Essbase サーバー), 88
 - デフォルト以外のポートへの接続, 88
 - オブジェクト
 - の操作, 57
 - エンタープライズ・ビューからの削除, 50
 - エンタープライズ・ビューへの追加, 50
 - データベースとともにコピー, 108
 - ロックおよびロック解除, 111
 - 選択, 56
 - オブジェクトの順序
 - エンタープライズ・ビュー内, 46
 - カスタム・ビューでの, 55
 - オプション、設定
 - Essbase のデフォルト, 102
 - アウトライン・エディタおよびアウトライン・ビューア, 151
 - 表示, 662
 - オペレーティング・システム情報, 329
- か行**
- カスタマイズ
 - MaxL スクリプト・エディタ, 412
 - アウトライン・エディタ, 151
 - エンタープライズ・ビュー, 53
 - コンソール, 42
 - カスタマイズされたビュー。「カスタム・ビュー」を参照
 - カスタム・ビュー
 - オブジェクトの並べ替え, 55
 - オブジェクトの削除, 54
 - 作成, 53
 - 削除, 54
 - 名前変更, 55
 - 持続性, 52
 - 説明, 52
 - カスタム定義マクロ
 - コピー, 382
 - 作成, 380
 - 使用, 382
 - 削除, 383
 - 名前変更, 383
 - 移行, 382
 - 編集, 381
 - 表示, 380
 - 説明, 375
 - 電子メール, 92
 - カスタム定義マクロ・マネージャ, 549
 - カスタム定義関数
 - コピー, 378
 - 作成, 376
 - 使用, 377
 - 削除, 379
 - 名前変更, 378
 - 移行, 378
 - 編集, 377
 - 表示, 375
 - 説明, 375
 - 電子メール, 92
 - カスタム定義関数マネージャ, 548
 - キャッシュ
 - と入出力メソッド, 349
 - ヒット率の確認, 343
 - ブロック・ストレージのサイズ設定, 342
 - ブロック・ストレージ向けに最適化, 342
 - メモリーのロック, 341
 - 現在のサイズの表示, 335
 - 集約ストレージ・キャッシュ, 82
 - キャッシュ・サイズの設定
 - ブロック・ストレージの, 342
 - 集約ストレージ, 82
 - キャッシュ・メモリーのロック, 341
 - キューブ。「データベース」を参照
 - キーボード・ショートカット
 - アウトライン・エディタでの, 155
 - クエリーの追跡(集約ストレージ), 78
 - クエリー・ステートメント(MDX スクリプト), 417
 - クエリー・ヒント, 157
 - クライアント、Administration Services, 33
 - クラスタ情報, 600
 - クラスタ率, 338
 - グループ
 - Essbase サーバー上

権限の付与, 287
 Shared Services による管理, 259
 コピー, 295, 524
 サーバー間での移行, 295
 フィルタの割当て, 309
 メンバーシップの管理, 284
 作成, 280
 削除, 300
 名前変更, 298
 権限, 272
 編集, 293
 グループ・ウィンドウ, 623
 グローバル・プレースホルダ, 93
 グローバル設定, 330
 コピー
 MaxL スクリプト, 415
 MDX スクリプト, 415
 アウトライン, 141
 アプリケーション, 99
 アプリケーション、移行ウィザードの使用, 641
 カスタム定義マクロ, 382
 カスタム定義関数, 378
 グループ, 295
 セキュリティ
 アプリケーションとともに, 641
 データベースとともに, 641
 データベース, 108
 データベース、移行ウィザードの使用, 641
 データベースを持つオブジェクト, 108
 パスワード, 302
 パーティション, 436
 フィルタ, 310
 メンバー, 164
 ユーザー, 293
 ルール・ファイル, 225
 レポート・スクリプト, 371
 ログ・メッセージ, 632
 代替変数, 94
 次元, 164
 計算スクリプト, 371
 コマンド、スクリプトに挿入, 364
 コミット、分離レベルの設定, 348
 コミット・アクセス
 選択, 348
 コメント
 MaxL スクリプトにおける, 406

MDX スクリプトでの, 406
 アウトラインでの表示/非表示, 151
 データベース, 107
 データ・ロード時に無視, 236
 レポート・スクリプトの, 361
 次元およびメンバー, 175
 計算スクリプトの, 361
 コンソール, 39
 カスタマイズ, 42
 ブラウザからの開始, 68
 表示オプション, 662
 説明, 39
 開始, 68
 電子メールの送信, 92
 コンソールからの電子メールの送信, 92
 コンテナ・ノード, 46
 コンパクト化
 アウトライン・ファイル(.otl), 83
 セキュリティ・ファイル(essbase.sec), 316
 コンピュータ情報, 329

さ行

すべてのウィンドウを閉じる, 43
 サブキューブ(パーティション), 427
 サンプル・アプリケーション, 37
 サンプル・アプリケーションとデータベース, 37
 サーバー
 Essbase サーバー, 85
 SMTP, 69
 管理サーバー, 59
 サーバー・ログ。「ログ」を参照
 サーバー全体の設定(Essbase サーバー), 330
 システム・ファイル、リストの表示, 327
 シャットダウン
 Administration Services, 70
 アプリケーション, 97
 データベース, 106
 シングル・サインオン, 35, 282
 スキップ
 #MISSING 値とゼロ値, 172
 ヘッダー・レコード, 230
 スキップ・プロパティ(タイム・バランス計算用), 172
 スクリプト
 MaxL スクリプト, 399
 MDX スクリプト, 417, 418

- レポート・スクリプト, 387
- 計算スクリプト, 355
- 集約スクリプト, 490
- スクリプトの行番号, 358
- スクリプト・エディタ
 - MaxL スクリプト・エディタ, 400
 - MDX スクリプト・エディタ, 418
 - タブ位置, 358
 - レポート・スクリプト・エディタ, 388
 - ワード・ラップ, 358
 - 計算スクリプト・エディタ, 356
- スクリプト・エディタでのタブ位置, 358
- スクリプト・エディタでのワード・ラップ, 358
- スクリプト・エディタでの行の折り返し, 358
- スクリプト・エディタのオートコンプリート
 - MaxL スクリプト・エディタ, 405
 - MDX スクリプト・エディタ, 405
 - レポート・スクリプト・エディタ, 362
 - 計算スクリプト・エディタ, 362
- ステータス
 - アプリケーションとデータベース, 332
 - 管理サーバー, 62
- ステータス・メッセージ, 42
- ストレージ
 - ディスク・スペースの確認, 329
 - ディスク上のデータ圧縮, 347
 - データ値, 173
 - パーティションあり, 421
 - ブロック・ストレージと, 345
 - リンク・レポート・オブジェクト, 397
 - 次元に対する設定, 170
 - 集約ストレージと, 81
 - 集約ビュー向け, 490
- ストレージの割当て
 - 集約ストレージと, 81
- ストレージ・タイプ、次元の, 170
- スプレッドシート
 - クエリー・ファイル(.eqd), 108
 - データ・ソースとして, 217
 - データ・プレビュー, 354
 - ロックの表示, 321
- スプール・ファイル, 447
- スペース
 - フィールドの前後の削除, 243
 - ルール・ファイルでのアンダースコアへの変換, 244
- スワップ領域、表示, 329
- セキュリティ
 - essbase.sec および essbase_timestamp.bak ファイル, 315
 - Shared Services のユーザー管理, 259
 - アプリケーション/データベースのセキュリティ, 271
 - アプリケーションおよびデータベースとともに移行, 641
 - アプリケーションに対する権限の設定, 274
 - アプリケーションに対する無効化, 276
 - アプリケーション・アクセス・タイプの割当て, 286
 - グループの作成, 280
 - グループの移行, 295
 - サーバー全体のセキュリティ, 270
 - セキュリティ・バックアップ・ファイルの更新, 315
 - セキュリティ・ファイルのコンテンツのエクスポート, 316
 - セキュリティ・ファイルのコンパクト化, 316
 - セキュリティ・ファイルの最適化, 316
 - データに対するユーザーのロック, 321
 - データベースに対する権限の設定, 275
 - フィルタ, 307
 - フィルタの割当て, 287
 - ユーザー/グループ, 272
 - ユーザー/グループのセキュリティ, 272
 - ユーザーの作成
 - Essbase サーバー上, 279
 - 管理サーバーでの, 63
 - ユーザーの移行, 293
 - ユーザー・セッション, 319
 - 他の EPM アプリケーションへのアクセス, 286
 - 外部認証, 282
 - 情報ファイル(essbase.sec), 269
 - 権限, 269
 - 集約ストレージ, 74
- セキュリティの復元, 315
- セキュリティ・ファイル(essbase.sec)
 - コンテンツのエクスポート, 316
 - コンパクト化, 316
 - バックアップ・ファイルと比較 (essbase_timestamp.bak), 315
 - 説明, 269

セキュリティ・ファイルのバックアップ、更新, 315
 セキュリティ・プラットフォーム, 282
 セッション
 Administration Services のタイムアウトの管理, 60
 Administration Services の管理, 60
 Essbase サーバー
 アクティブなものの表示, 319
 切断, 320
 要求の終了, 320
 セッション・ウィンドウ, 686
 セミコロン
 MaxL スクリプトにおける, 399
 MDX スクリプトでの, 417
 セル・ノート、管理, 394
 ゼロ値
 タイム・バランス計算でのスキップ, 172
 データ圧縮時, 347
 ソース・アウトライン(アウトライン同期), 440
 ソース・データベース(パーティション), 421
 アウトラインの変更, 440
 エンタープライズ・ビューでの表示, 422
 ターゲットとの同期, 440
 データの複製, 435
 メンバーのマッピング, 431
 定義, 426
 接続情報, 426
 無効な情報の修復, 437
 領域の定義, 427

た行

タイムアウト
 Essbase サーバーの接続, 273
 データ・ブロックの, 323
 管理サーバーの接続, 60
 タイム・ゾーン, 504
 タイム・バランス・プロパティ, 172
 タブ、名前変更, 55
 ターゲット・アウトライン(アウトライン同期), 440
 ターゲット・データベース(パーティション), 421
 エンタープライズ・ビューでの表示, 422
 ソースとの同期, 440
 データの複製, 435

メンバーのマッピング, 431
 定義, 426
 接続情報, 426
 無効な情報の修復, 437
 領域の定義, 427
 ツリー、カスタマイズ, 52
 ツールバー
 アウトライン・エディタ, 152
 コンソール, 42
 テキスト
 アウトラインでの検索, 153
 アウトライン内の置換, 153
 データ・ロード時に無視, 236
 フィールドの作成, 239
 フィールドの分割, 239
 テキスト・エンコード方式
 アウトラインを開く際にプロンプトを表示, 160
 スクリプトを保存するときのプロンプト, 366
 スクリプトを開くときのプロンプト, 360
 ルール・ファイルを開く際にプロンプトを表示, 216
 レポートをファイルとして保存するときのプロンプト, 391
 判別方法, 126
 説明, 124
 テキスト・ファイル、データ・ソースとして, 217
 テキスト・メジャー
 説明, 133
 テキスト属性タイプ, 202
 テクニカル・サポート
 Essbase 情報の送信, 92
 テスト・データ, 354
 テーブルスペース, 81
 ディスク・スペース
 ブロック・ストレージへの割当て, 345
 使用可能を確認, 329
 集約ストレージ向けの割当て, 81
 ディスク・スワップ、情報の表示, 329
 ディスク・ドライブ情報, 329
 ディスク・ボリューム
 ストレージの停止, 345
 定義, 345
 移行および, 641
 ディスク・ボリュームの割当て解除, 345

- ディレクトリ
 - アプリケーション・ファイルの場所, 95
 - スクリプト・ファイルの場所, 366
 - データベースファイルの場所, 103
- デバッグ
 - Essbase サーバーのアクティビティ, 251
 - 管理サーバーのアクティビティ, 60
- デフォルトのテーブルスペース, 81
- デフォルト計算
 - 実行, 352
 - 実行後の 2 パス, 384
 - 設定, 351
- データ
 - コピー, 108
 - スケール, 249
 - ストレージの割当て, 345
 - ストレージ・プロパティ, 173
 - データ・ロードの前の消去, 247
 - プレビュー, 354
 - ロック解除, 322
 - ロード, 211
 - 共有, 173
 - 操作, 245
 - 期間の平均, 172
 - 消去
 - ブロック・ストレージ・データベースからの, 119
 - 集約ストレージ・データベースから, 79
 - 移行および, 641
 - 計算
 - ブロック・ストレージ・データベース, 352
 - 集約ストレージ・データベース, 78
 - 通貨換算, 449
- データに対するユーザーのロック
 - 削除, 322
 - 表示, 321
- データのプレビュー, 354
- データの保護, 348
- データの再計算, 384
- データの整合性
 - オプション, 348
 - コミットとトランザクション, 578
- データベース
 - アウトライン, 160
 - エクスポート, 113, 604
 - エンタープライズ・ビューのアイコン, 333
 - コピー, 522
 - データのプレビュー, 354
 - トランザクションのロギング, 118
 - トランザクションの再実行, 117
 - バックアップ, 115
 - プロパティ
 - すべての表示, 335
 - 編集, 334
 - 作成, 103, 531
 - 復元, 116
 - 手動による再構築, 114
 - 計算
 - ブロック・ストレージ, 352
 - 集約ストレージ・データベース, 78
 - 重複メンバー名, 103
 - データベースのアーカイブ, 115
 - データベースのスライス, 421
 - データベースの再構築
 - アウトラインの保存時, 139
 - 手動, 114
 - データベースの消去
 - データ・ロードの前に自動的に, 247
 - 手動, 119
 - データベースの複製。「複製パーティション」を参照
 - データベースへのコメント, 107
 - データベース・トリガー。「トリガー」を参照
 - データベース・トリガー・ウィンドウ, 580
 - データベース・トリガー・スプール・ファイル・ウィンドウ, 579
 - データベース・パーティション。「パーティション」を参照
 - データベース・プロパティ・ウィンドウ, 565
 - データベース・マネージャ権限, 269
 - データベース情報ウィンドウ, 564
 - データ・キャッシュ
 - サイズ設定, 342
 - ヒット率, 343
 - データ・ストレージ・プロパティ
 - メンバーの定義, 173
 - データ・ソース
 - Essbase サーバーからのロード, 551
 - ヘッダー・レコード, 230
 - 開く, 217
 - データ・ファイル
 - サイズの確認, 346
 - ストレージの割当て, 345
 - 断片化統計の表示, 338

移行および, 641
 データ・ファイル・キャッシュ
 サイズ設定, 342
 ヒット率, 343
 データ・フィルタ。「フィルタ」を参照
 データ・ブロック
 すべて消去, 122
 データ・ブロック統計の確認, 336
 ロックとトランザクション, 348
 ロックの最大時間の設定, 323
 ロックの管理, 321
 ロック解除, 322
 上位レベルの消去, 120
 圧縮, 347
 統計, 336
 計算済の消去, 120
 データ・プレビュー・グリッド, 556
 データ・ロード
 サーバーから、またはローカルで, 551
 データの組合せの消去, 554
 データ値の消去, 247
 バックグラウンド・プロセスとして, 211
 フィールドのマッピング, 240
 フィールドの無視, 236
 フィールド名, 240
 ブロック・ストレージ・データベース, 211
 ヘッダー定義, 556
 ルール・ファイル、作成, 216
 レコードの選択, 231
 レコードの除外, 232
 ワークフロー, 210
 値の加算または減算, 246, 247
 再構築が延期された次元構築, 211
 実行, 211
 集約ストレージ・データベース, 211
 データ・ロード時に値を加算, 246
 データ・ロード時に値を減算, 247
 データ値。「値」を参照
 データ値のスケーリング, 249
 データ値の減算
 アウトライン内のメンバーに対する設定, 171
 ルール・ファイル内, 247
 データ圧縮。「圧縮」を参照
 データ準備エディタ, 215。「ルール・ファイル」も参照
 トラブルシューティング。「エラーも」を参照

トラブルシューティング。「エラー」も参照
 Essbase ログ, 251
 パーティション, 433
 メッセージ・ペイン, 42
 レポート・スクリプト, 392
 管理サーバー, 60
 計算スクリプト, 370
 通貨換算, 457
 トランザクション, 348
 ロギング, 118
 再実行, 117
 表示, 118
 トランザクションのロギング, 118
 トランザクションの再実行, 117
 トリガー
 スプール・ファイル, 447
 作成, 444
 使用可能化, 447
 削除, 446
 無効化, 447
 編集, 445
 表示, 445
 説明, 443
 トリガーウィンドウ, 580
 トークン、無視, 237
 ドキュメント
 プラグイン・ドキュメント, 719
 開発者ドキュメント, 719
 ドライブ情報, 329
 ドリルスルー定義
 作成, 595
 削除, 123
 編集, 123, 595
 追加, 123
 ドルの値、換算, 449
 ドル記号(\$)
 MaxL および MDX の変数における, 407

な行

なし(タイム・バランス・プロパティ), 172
 ネイティブのセキュリティ・モード, 259
 ノーウェイト入出力, 349
 ノート
 データベース, 107
 データ・セルの, 394
 メンバーの, 175
 ノード, 57

は行

- ハイブリッド分析
 - アウトライン内のリレーショナル・メンバーの表示, 148
 - 使用可能化, 170
- バックアップ
 - アプリケーション, 99
 - セキュリティ・ファイル, 315
 - データ, 113
 - データベース, 108
 - データベースのバックアップ, 115
 - データベースの復元, 116
 - トランザクションのロギング, 118
 - トランザクションの再実行, 117
 - パーティション, 439
 - リンク・レポート・オブジェクト(LRO), 395
- バックグラウンド・プロセス
 - ステータスの確認, 326
 - デフォルトの設定, 102
 - データ・ロード用, 211
 - ポートと, 86
 - レポートの, 390
 - 次元構築用, 211
 - 計算, 368
 - 集約向け, 490
 - 電子メール, 92
- バックグラウンド・プロセスのステータス・ウィンドウ, 516
- バッチ計算, 352
- バッファ
 - サイズの設定, 343
 - 現在のサイズの表示, 335
- バッファ入出力, 349
- バージョン情報、表示, 327
- パスワード
 - Essbase サーバー・ユーザー, 301
 - Essbase サーバーに伝播, 302
 - アプリケーションとともに移行, 641
 - 有効期限の制限, 306
 - 次のログイン時に変更を強制, 300
 - 管理サーバーに伝播, 301
 - 管理ユーザーの, 64
- パス情報, 328
- パフォーマンス統計, 331
- パーセント演算子, 171
- パーティション
 - アプリケーションとともに移行, 641
 - インポート, 439
 - エクスポート, 439
 - コピー, 525
 - サブキューブ, 427
 - サンプル・アプリケーション, 433
 - セル・カウント, 427
 - タイプ, 426
 - データベースとともにコピー, 108
 - トラブルシューティング, 433
 - パーティション定義を電子メールで送信, 92
 - マッピング, 538
 - メンバーのマッピング, 431
 - メンバーの検索, 428
 - メンバー選択ルールのインポート, 430
 - メンバー選択ルールのエクスポート, 430
 - リンク, 426
 - ロック, 111
 - 作成, 423, 535, 537
 - 作成プロセス, 423
 - 保存, 434
 - 個別にコピー, 436
 - 削除, 436
 - 接続情報, 426
 - 検証, 433
 - 無効の修復, 437
 - 編集, 424, 535, 537
 - 複製, 426
 - 説明, 421
 - 透過, 426
 - 通貨パーティション, 452
 - 開く, 424
 - 領域, 427
 - 領域固有のマッピング, 429
 - パーティションのセル・カウント, 427
 - パーティションの作成/パーティションの編集ウィンドウ, 535
 - パーティションの修復, 437
 - パーティションの領域定義, 427
 - ヒント、クエリー, 157
 - ビットマップ圧縮
 - 圧縮率の確認, 348
 - 選択, 347
 - ビュー, 46
 - ファイル
 - Essbase システム・ファイル・リスト, 500

- MaxL スクリプトでの参照, 409
- インデックス・ファイルとデータ・ファイルのサイズ確認, 346
- ストレージの割当て, 345
- データ・ファイルを開く, 217
- リンク・レポート・オブジェクトとして, 394
- ファイルの場所(テーブルスペース), 81
- ファイル・システム
 - アウトラインのコピーに使用, 141
 - アプリケーションのコピーに使用, 99
 - サーバーのディスク・ドライブの, 329
 - データベースのコピーに使用, 108
- ファイル区切り記号, 218
 - パーティションのマッピング・ファイル, 432
 - ルール・ファイル内, 218
- ファイル名, 357
- ファイル名の拡張子
 - MaxL スクリプト, 400
 - MDX スクリプト, 418
 - アウトライン, 131
 - パーティション, 421
 - レポート・スクリプト, 387
 - 計算スクリプト, 355
- ファイル命名の考慮事項, 357
- フィルタ
 - アプリケーションとともに移行, 641
 - カスタムの追加またはカスタムの編集, 481
 - コピー, 310, 523
 - メタデータ, 308
 - ユーザーとグループへの割当て, 309
 - ログ・チャートと, 254
 - 作成, 308, 616
 - 削除, 311
 - 名前変更, 311
 - 構文の確認, 308
 - 編集, 308, 616
 - 説明, 307
- フィルタ・ウィンドウ, 618
- フィルタ・エディタ, 616
- フィールド
 - テキストを使用した作成, 546
 - 作成, 531
- フィールド、ルール・ファイル
 - スペースからアンダースコアへの変換, 244
 - タイプ, 223
- テキストを使用した作成, 239
- テキスト文字列の置換, 241
- データのマッピング, 240
- 分割, 239
- 前後のスペースの削除, 243
- 区切り記号, 218
- 名前、置換, 241
- 大文字/小文字、変更, 243
- 大文字と小文字, 243
- 定義, 246
- 接尾辞, 244
- 接頭辞, 244
- 操作
 - 元に戻す, 240
 - 説明, 234
 - 操作を元に戻す, 240
- 数値, 223
- 文字列の一致に基づいて無視, 237
- 無視, 236
- 移動, 237
- 空の置換, 242
- 結合, 238
- 結合を使用した作成, 238
- 複数の選択, 235
- 追加, 239
- 除外/選択条件の結合, 233
- フィールドの分割、ルール・ファイルでの, 239
- フィールドの前後のスペースの削除, 243
- フィールド区切り記号、設定, 218
- フィールド操作, 234
- フィールド設定。「フィールド」を参照
- フォント、変更
 - コンソールで, 662
- フレームワーク・ドキュメント, 719
- ブロック。「データ・ブロック」を参照
- ブロックの密度, 336
- ブロック・サイズ, 336
- ブロック・ストレージ
 - 定義, 73
 - 集約ストレージへのアウトラインの変換, 74
- ブール
 - 属性
 - デフォルトのメンバー名の変更, 201
 - 接頭辞/接尾辞の定義, 200
 - 次元のタグ付け, 202
- プラグイン

管理, 719
 開発, 719
 プラグインの順序変更, 719
 プリファレンス。「オプション」を参照
 プロセス
 アクティブなもの表示, 319
 ポートと, 86
 終了, 320
 プロセスの強制終了, 320
 プロセスの終了, 320
 プロパティ
 Essbase サーバー・レベル
 監視, 325
 設定, 89
 アウトライン、表示, 137
 アプリケーション・レベル
 監視, 332
 設定, 98
 データベース・レベル
 監視, 334
 設定, 106
 次元およびメンバー, 166
 2パス計算, 172
 アウトライン内での定義, 166
 ストレージ, 173
 タイム・バランス計算, 172
 ルール・ファイル内で定義, 222
 共有メンバー, 165
 属性, 197
 差異レポート作成, 174
 疎/密, 170
 通貨換算, 174
 集計, 171
 表示, 146
 電子メール, 92
 ヘッダー
 ロケール, 126
 ヘッダー・レコード
 スキップ, 230
 データ・ソース, 230
 ルール・ファイル, 231
 ヘッダー名, 230
 ホワイト・スペース
 フィールドの前後の削除, 243
 ホワイト・スペース、アンダースコアへの変換, 244
 ボタン(ツールバー)

アウトライン・エディタ, 152
 コンソール, 42
 ボリューム。「ディスク・ボリューム」を参照
 ポート
 Essbase サーバーの
 デフォルト以外のエージェントへの接続, 88
 使用可能を確認, 328
 情報, 86
 管理サーバーの, 66

ま行

マウス、構成, 40
 マウス・クリック、削減, 52
 マクロ
 コピー, 520, 525
 編集, 597
 マクロ、カスタム定義の, 375
 マシン名
 Essbase サーバー, 85
 管理サーバー, 59
 マシン情報, 329
 マストヘッド、表示, 41
 マッピング
 データ・ロードのフィールド, 240
 パーティションでの領域固有のマッピング, 429
 メンバーをパーティションに, 431
 マージ
 ルール・ファイルでのフィールドの, 238
 メイン・ウィンドウ, 39
 メイン・データベース、通貨アプリケーション, 450
 メジャー
 テキスト, 133
 型付き, 133
 日付, 134
 メタデータ・セキュリティ, 308
 メッセージ。「エラー・メッセージも」を参照
 MaxL/MDX スクリプト・エディタで非表示, 413
 メッセージ・ペイン, 42
 メニュー
 メニュー・バー, 41
 右クリック・メニュー, 40
 メニュー・バー, 41
 メモリー

Essbase キャッシュのロック, 341
 Essbase サーバー向けに使用可能を確認, 330
 アウトラインと, 160
 ブロック・ストレージ・キャッシュへの割当て, 342
 集約ストレージ・アプリケーションのキャッシュ, 82
 メンバー
 MDX スクリプトでの挿入, 419
 アウトラインからの削除, 177
 アウトラインでの検索, 153, 195
 コピー, 164
 コメントの追加, 175
 スクリプトに挿入, 363
 セキュリティ, 308
 ソート, 176
 プロパティ, 146, 166
 2 パス, 172
 UDA, 203
 コメント, 175
 ストレージ, 173
 タイム・バランス, 172
 ラベルのみ, 173
 代替名(別名), 190
 共有, 173
 共有しない, 173
 動的時系列, 177
 動的計算, 173
 動的計算および保管, 173
 差異レポート作成, 174
 支出, 174
 表示, 146
 設定, 166
 通貨換算, 450
 集計演算子, 171
 プロパティの表示, 146
 作成, 163
 取り扱い, 135
 名前変更, 176
 展開, 145
 属性, 196
 属性の関連付け, 198
 式の定義, 192
 検索, 619
 検索および置換, 153
 移動, 164
 縮小, 145

説明, 131
 重複名, 132
 メンバーの切取りと貼付け, 164
 メンバーの組合せ
 データ・ロードのためのマッピング, 240
 ヘッダー・レコードと, 231
 メンバーの集計, 171
 データベース計算の実行, 352
 集計プロパティの設定, 171
 メンバーを共有しない, 173
 メンバー・ロード、実行, 211
 メンバー選択ルール
 パーティションからのエクスポート, 430
 パーティションにインポート, 430
 メール。「電子メール」を参照

や行

ユーザー
 Essbase サーバーへの, 279
 Essbase サーバー上, 279
 コピー, 293
 サーバーのロックアウト, 303
 サーバー間での移行, 293
 セッションの切断, 320
 パスワードの伝播, 302
 パスワードの変更, 301
 パスワード変更の強制, 300
 フィルタの割当て, 309
 ユーザー名の変更の伝播, 297
 ユーザー名の無効化, 303
 作成, 279
 削除, 299
 名前変更, 297
 強制ログオフ, 320
 有効期限の管理, 303
 権限の付与, 287
 無効化されたユーザー名のアクティブ化, 305
 編集, 292
 表示, 281
 間での移行, 293
 非アクティブによるタイムアウト, 273
 Shared Services による管理, 259
 コピー, 528
 管理サーバーから, 66
 管理サーバーでの
 Essbase サーバーのアクセス, 48

- パスワードの変更, 64
 - 作成, 707
 - 削除, 66
 - 名前変更, 65
 - ユーザー/グループ・アクセス・ウィンドウ, 712
 - ユーザーおよびグループの作成/削除の権限, 269
 - ユーザーのプロビジョニング。「Shared Services」を参照
 - ユーザーのログオフ。「ユーザーの切断」を参照
 - ユーザーの切断, 273, 320
 - セッション管理から, 320
 - 非アクティブ期間の経過後, 273
 - ユーザーの外部化ウィザード, 607
 - ユーザーの外部認証, 259, 282
 - ユーザーの強制ログオフ。「ユーザーの切断」を参照
 - ユーザー・アクティビティ、遮断, 277
 - ユーザー・インタフェース。「コンソール」を参照
 - ユーザー・ウィンドウ, 715
 - ユーザー・セッション。「セッション」を参照
 - ユーザー・プロパティ・ウィンドウ(管理サーバー), 704
 - ユーザー・プロビジョニング。「Shared Services」を参照
 - ユーザー・ログイン
 - 試行回数の制限, 303
 - ユーザー名。「ユーザー」を参照
 - ユーザー定義属性。「UDA」を参照
 - ユーザー設定ウィザード, 707
- ら行**
- ライセンス情報, 327
 - ラベルのみプロパティ、設定, 173
 - ランタイム統計
 - ブロック・ストレージ, 331
 - 集約ストレージ, 83
 - ランレングス符号化(RLE)圧縮, 347
 - リソースの使用状況
 - Essbase サーバー上, 329
 - リレーショナル・メンバー
 - アウトライン内の表示, 148
 - リンク・パーティション
 - 作成, 423。「パーティション」も参照
 - 説明, 421
 - リンク・レポート・オブジェクト(LRO)
 - アプリケーションとともに移行, 641
 - インポート, 396
 - エクスポート, 395
 - サイズの制限, 397
 - データベースとともにコピー, 108
 - 管理, 394
 - 説明, 393
 - リンク・レポート・オブジェクト・ウィンドウ, 626
 - ルール・ファイル
 - アウトラインとの関連付け, 389
 - コピー, 225, 527
 - スペースからアンダースコアへの変換, 244
 - テキストを使用したフィールドの作成, 239
 - テキスト文字列の置換, 241
 - データベースとともにコピー, 108
 - データ・ロードのためのフィールドのマッピング, 240
 - データ値のスケーリング, 249
 - データ値の消去, 247
 - データ値への加算/データ値からの減算, 246, 247
 - フィールドの分割, 239
 - フィールドの前後のスペースの削除, 243
 - フィールドの大文字と小文字の変更, 243
 - フィールドの無視, 236
 - フィールドの移動, 237
 - フィールドの結合, 238
 - フィールド操作を元に戻す, 240
 - ブロック・ストレージ・データベース, 211
 - ヘッダー・レコード, 231
 - メンバーへの接頭辞および接尾辞の追加, 244
 - ロックおよびロック解除, 111
 - ワークフロー, 210
 - 作成, 210, 216
 - 作成プロセス, 210
 - 保存, 224
 - 個々にコピー, 225
 - 別名の作成および更新, 228
 - 削除, 227
 - 印刷, 227
 - 名前変更, 226
 - 文字列の一致に基づいたフィールドの無視, 237

- 検証, 223
- 砂時計の形に配置, 220
- 符号の反転, 248
- 結合を使用したフィールドの作成, 238
- 開く, 216
- 関連するデータ・ソースを開く, 217
- 集約ストレージ・データベース, 211
- ルール・ファイルでのフィールドの一致, 240
- ルール・ファイルでのフィールドの再配置, 237
- ルール・ファイルでのフィールドの分割, 239
- ルール・ファイルでの符号の反転, 248
- ルール・ファイルでの選択/除外条件の結合, 233
- ルール・ファイル内の列, 235
- レコード、ルール・ファイル内
 - レコード操作, 230
 - ロードしない, 232
 - 表示する数の選択, 215
 - 表示の設定, 215
 - 表示カウント, 215
 - 選択, 231
 - 開始の選択, 215
 - 除外, 232
- レベル
 - メンバー名が一意となるよう指定, 179
 - ルール・ファイル内での数値の設定, 223
 - 名前の定義または削除, 179
 - 定義, 583
- レベル 0 ブロック
 - エクスポート, 113
 - 番号の表示, 336
- レベル名
 - 定義または削除, 179
- レポート
 - バックグラウンド・プロセスの後で表示, 326
 - 保存, 391
 - 保存されたレポートを開く, 391
 - 出力先, 390
 - 印刷, 390
 - 生成, 390
- レポート・スクリプト
 - アウトラインの関連付け, 389
 - アウトライン・ツリー内のメンバーの検索, 195
 - エラー, 392
- エラーのトラブルシューティング, 392
- コピー, 371, 526
- コメント, 361
- テキストの検索, 153
- ロックおよびロック解除, 111
- 代替変数, 365
- 作成, 359
- 保存, 366
- 出力をプリンタに送信, 390
- 別名, 363
- 削除, 372
- 印刷, 373
- 名前変更, 372
- 実行, 390
- 構文のガイドライン, 389
- 構文のチェック, 367
- 次元名およびメンバー名の挿入, 363
- 結果の表示, 390
- 色分け, 357
- 説明, 387
- 通貨換算と, 454
- 開く, 360
- レポート・スクリプト・エディタ
 - オートコンプリート, 362
 - コンテンツの消去, 359
 - タブ位置, 358
 - ワード・ラップ, 358
 - 色分け, 357
 - 説明, 388
 - 開く, 388
- レポート・ビューア・ウィンドウ, 679
- ログ
 - アウトライン変更ログ, 440
 - メッセージのコピー, 632
 - ログ・アナライザ, 252
 - ログ・ビューア, 256
 - 削除, 257
 - 管理サーバー, 60。「ログ・チャート。」も参照
 - 計算情報の確認, 369
 - 説明, 251
 - 開く, 256
 - 電子メール, 92
- ログに記録されたトランザクションの表示, 118
- ログアウト, 88
 - Essbase サーバーから, 88

管理サーバーから, 61
 ログアウト(MaxL ステートメント), 404
 ログイン, 35
 Essbase サーバーへの, 87
 管理サーバーへの, 35
 試行回数の制限, 303
 ログイン(MaxL ステートメント), 404
 ログ・アナライザ, 252
 ログ・アナライザ・チャート・ウィンドウ, 630
 ログ・チャート
 カスタム・フィルタの作成/編集, 254
 削除, 255
 生成, 253
 表示, 253
 ログ・ビューア・ウィンドウ, 632
 ロケーション別名
 作成, 121
 削除, 122
 編集, 122
 ロケーション別名ウィンドウ, 628
 ロケール
 判別方法, 126
 説明, 124
 ロケール・ヘッダー, 126
 ロック
 およびロック解除, 111
 アウトライン, 136
 オブジェクト, 111
 オブジェクトのロック
 オブジェクトのロックおよびロック解除, 111
 デフォルトのロックの動作の変更, 102
 ロックされたオブジェクトの削除, 111
 キャッシュをメモリーに, 341
 スクリプト, 111
 デフォルトの設定, 102
 データ・ブロック, 321
 データ・ロック
 とデータの整合性, 348
 タイムアウトの設定, 322
 リストを電子メールで送信, 92
 ロック解除, 322
 削除, 322
 表示, 321
 ロック・ウィンドウ, 630
 ロック済オブジェクト・ウィンドウ, 629

ロック解除
 アウトライン, 136
 オブジェクト, 111
 デフォルトの動作の設定, 102
 データ, 322
 ロード。「データ・ロード」を参照
 アウトライン, 160
 アプリケーション, 96。「データ・ロード」も参照
 データ, 211
 データベース, 104
 メンバー, 211
 次元, 211
 ロードのステータス, 332
 ロールアップ
 タイム・バランス・オプション, 172
 メンバーの集計, 171

わ行

一意でないメンバー名。「重複メンバー名」を参照
 一時テーブルスペース, 81
 上位レベル・ブロック、消去, 120
 下線。「アンダースコア」を参照
 世代
 メンバー名が一意となるよう指定, 179
 ルール・ファイル内での数値の設定, 223
 名前の定義または削除, 179
 定義, 582
 世代名
 動的時系列, 177
 定義または削除, 179
 並列プロセス。「バックグラウンド・プロセス」を参照
 中間層サーバー, 59
 乗数、データ値のスケール, 249
 乗算演算子, 171
 予算での支出と実績の支出の比較, 174
 予約ポート, 86
 代替変数
 ガイドライン, 693
 コピー, 528
 コピー/移行, 94
 スクリプトでの使用, 365
 リストを電子メールで送信, 92
 作成, 93
 削除, 93

- 更新, 93
- 代替変数ウィンドウ, 693
- 代替階層, 165
- 仮想メモリー, 330
- 会計次元
 - 2パス・プロパティの設定, 172
 - タイム・バランス・プロパティの設定, 172
 - プロパティの設定, 589
 - 作成, 168
 - 差異レポート・プロパティの設定, 174
 - 通貨換算プロパティの設定, 450
 - 集約ストレージ・データベースで最適の選択, 80
- 伝播
 - Essbase サーバーへのパスワードの, 302
 - ユーザー名の変更, 297
 - 管理サーバーへのパスワードの, 301
- 位置設定
 - アウトライン内のメンバー, 155, 176
 - ルール・ファイルでのフィールドの, 237
- 作成
 - MaxL スクリプト, 402
 - MDX スクリプト, 402
 - Unicode モードのアプリケーション, 127
 - アウトライン, 137
 - アプリケーション, 95
 - カスタム・ビュー, 53
 - カスタム定義マクロ, 380
 - カスタム定義関数, 376
 - グループ, 280
 - データベース, 103
 - パーティション, 423
 - フィルタ, 308
 - メンバー, 163
 - メンバー、次元構築による, 209
 - メンバーに対する式, 192
 - メンバーの別名, 190
 - ユーザー
 - Essbase サーバー上, 279
 - 管理サーバーでの, 63
 - ルール・ファイル, 216
 - レポート・スクリプト, 359
 - 代替変数, 93
 - 別名テーブル, 184
 - 属性, 197
 - 次元, 162
 - 次元、次元構築による, 209
 - 計算スクリプト, 359
 - 通貨換算アプリケーション, 450
 - 使用不可であるユーザー名ウィンドウ, 593
 - 使用可能なポート, 328
 - 使用開始, 36
 - 保存
 - MaxL の実行結果, 414
 - MaxL スクリプト, 410
 - MDX の実行結果, 414
 - MDX スクリプト, 410
 - アウトライン, 139
 - パーティション, 434
 - ルール・ファイル, 224
 - レポート, 391
 - レポート・スクリプト, 366
 - 計算スクリプト, 366
 - 保管階層(集約ストレージ), 76
 - 個別次元, 205
 - 値
 - ストレージ, 173
 - データ・ロード時に加算, 246
 - データ・ロード時に減算, 247
 - 動的に計算, 173
 - 属性, 203
 - 期間の平均, 172
 - 累積, 177
 - 停止
 - Administration Services, 70
 - アプリケーション, 97
 - データベース, 106
 - 要求, 320
 - 元に戻す
 - アウトラインの変更, 181
 - ルール・ファイルでのフィールド操作, 240
 - 入出力, 349
 - 入出力メソッド, 349
 - 入力データ・ブロック、エクスポート, 113
 - 共有
 - アプリケーション間にわたるデータ, 421
 - データ, 165
 - 管理サーバー上で MaxL スクリプトを, 410
 - 管理サーバー上で MDX スクリプトを, 410
 - 共有メンバー、作成, 165
 - 再構築が延期された次元構築, 211
 - 出力
 - MaxL スクリプト, 413
 - MDX スクリプト, 413

- 分散データ, 421
- 分離レベルの設定, 348
- 初期ログイン・アカウント, 35
- 別名
 - MDX スクリプトでの, 419
 - アウトライン内の表示, 151
 - インポート, 186
 - エクスポート, 185
 - コピー, 187, 519。「別名テーブル」も参照
 - レポート・スクリプトの, 363
 - ロケーション別名, 121
 - 作成/編集, 190, 228
 - 動的時系列メンバー, 190
 - 計算スクリプトの, 363
 - 説明, 182
 - 重複する別名, 182
- 別名テーブル
 - アウトラインのアクティブに設定, 189
 - アクティブに設定, 189
 - インポート, 186
 - エクスポート, 185, 603
 - コピー, 187
 - セッションでのアクティブの設定, 44
 - 作成, 184, 530
 - 削除, 188
 - 名前変更, 188
 - 定義, 184
 - 消去, 188
 - 説明, 182
- 制限
 - LRO ファイル・サイズ, 397
 - データに対するユーザーのロック, 323
 - パスワード, 306
 - ユーザーのログイン試行回数, 303
 - ユーザーの非アクティブ, 303
 - ユーザー名, 303
- 削除。「削除」を参照
 - MaxL スクリプト, 415
 - MDX スクリプト, 415
 - アウトライン, 142
 - アプリケーション, 101
 - エンタープライズ・ビューからのオブジェクトの, 50
 - エンタープライズ・ビューのオブジェクト, 50
 - カスタム・ビュー, 54
 - カスタム・ビューからのオブジェクトの, 54
- カスタム定義マクロ, 383
- カスタム定義関数, 379
- グループ, 300
- サンプル・アプリケーション, 37
- スクリプト, 372
- データのロック, 322
- データベース, 110
- パーティション, 436
- フィルタ, 311
- プラグイン, 719
- メンバー, 177
- ユーザー
 - Essbase サーバーからの, 299
 - 管理サーバーから, 66
- リンク・レポート・オブジェクト, 394
- ルール・ファイル, 227
- レポート・スクリプト, 372
- ログ, 257
- ロックされたオブジェクト, 111
- 代替変数, 93
- 次元, 177
- 計算スクリプト, 372
- 割当て
 - アウトライン・エディタを使用した UDA, 203
 - フィルタ, 309。「関連付け」も参照
 - ルール・ファイルを使用した UDA, 229
- 加算
 - +演算子, 171
 - アウトラインでの設定, 171
 - ルール・ファイル内, 246
- 動的メニュー, 40
- 動的時系列
 - メンバーの別名, 190
 - メンバーの無効化, 178
 - 使用可能化, 177
- 動的時系列メンバー
 - 定義, 581
- 動的次元構築, 210
- 動的計算および保管メンバー, 173
- 動的階層(集約ストレージ), 76
- 区切り記号
 - ルール・ファイル内で設定, 218
- 区切り記号、ルール・ファイル内のフィールド, 218
- 印刷
 - MaxL スクリプト, 415

- MDX スクリプト, 415
- アウトライン, 141
- ウィンドウ, 43
- スクリプト, 373
- ルール・ファイル, 227
- レポート, 390
- 式, 194
- 取得
 - データのプレビュー, 354
 - 集約ストレージ向けの改善, 78
- 取得バッファ, 343
- 可変属性
 - アウトラインでの使用可能化, 207
 - サンプル・シナリオ, 205
 - 使用のガイドライン, 206
 - 保存, 207
 - 概要, 204
 - 次元レベルで削除, 206
 - 次元レベルで追加, 206
 - 無効化, 208
- 右クリック・メニュー, 40
- 同時, 348
- 同時プロセス。「バックグラウンド・プロセス」を参照
- 同時接続, 86
- 同期
 - アウトライン, 440
 - セキュリティ・ファイルとバックアップ・ファイルの, 315
 - パスワード, 301
 - ユーザー名, 297
- 名前変更
 - MaxL スクリプト, 415
 - MDX スクリプト, 415
 - MyView のタブ, 55
 - アウトライン, 142
 - アプリケーション, 100
 - カスタム・ビュー, 55
 - カスタム定義マクロ, 383
 - カスタム定義関数, 378
 - グループ, 298
 - データベース, 109
 - フィルタ, 311
 - ユーザー, 65
 - ルール・ファイル, 226
 - レポート・スクリプト, 372
 - 別名テーブル, 188
- 次元およびメンバー, 176
- 計算スクリプト, 372
- 命名
 - Essbase サーバー, 85
 - UDA, 203
 - アプリケーション, 95
 - カスタム・ビュー, 55
 - データベース, 103
 - ファイル, 357
 - フィルタ, 308
 - メンバー, 163
 - メンバーの別名, 190
 - ルール・ファイルと, 219
 - レベル, 179
 - 世代, 179
 - 別名テーブル, 184
 - 属性のメンバー
 - ブール, 201
 - 属性計算次元/メンバー, 200
 - 接頭辞/接尾辞, 200
 - 日付, 202
 - 次元, 162
 - 次元、ルール・ファイルで, 219
 - 管理サーバー, 59
- 国次元
 - タグ付け, 451
 - 現在の表示, 568
 - 通貨名の割当て, 456
- 圧縮
 - ブロック・ストレージ・データベース
 - 圧縮方式の選択, 347
 - 圧縮率の確認, 348
 - 統計, 348
 - 集約ストレージ, 80
- 型付きメジャー
 - 説明, 133
- 基本次元, 204
 - 属性への関連付け, 198
 - 属性次元への関連付け, 199
 - 説明, 196
- 増分次元構築, 211
- 変換
 - Shared Services セキュリティへのサーバーの, 262
 - ブロック・ストレージ・アウトラインを集約ストレージへ, 74
 - 通貨, 454

変数

- ARBORPATH, 328
- Java 環境変数, 328
- MaxL スクリプトにおける, 407, 408, 409
- MDX スクリプトでの, 407, 408, 409

変更

- MyView の名前, 55
- アウトラインへの, 180
- アプリケーション名, 100
- エンタープライズ・ビューの順序, 46
- カスタム・ビューの名前, 55
- データベースへの, 337
- データベース名, 109
- パスワード
 - Essbase サーバー・ユーザー, 301
 - 管理ユーザー, 64
 - メンバー名, 176
- 変更ログ、削除, 440
- 大文字/小文字
 - ルール・ファイルのフィールドの変更, 243
 - 区別、アウトラインでの, 664
- 大文字と小文字。「大文字/小文字」を参照
- 子メンバー
 - ストレージの設定, 173
 - 作成, 163
 - 共有メンバー, 171
 - 番号の表示, 151
 - 説明, 131
 - 集計, 171。「メンバー」も参照
- 孤立パーティション, 437
- 定数, 353
- 定義。「作成」を参照
- 実績の支出と予算での支出の比較, 174
- 実行

- MaxL スクリプト, 412
- MDX スクリプト, 412
- デフォルト計算, 352
- データベース計算
 - ブロック・ストレージ, 352
 - 集約ストレージ・データベース, 78
- レポート・スクリプト, 388, 390
- 計算スクリプト, 368
- 集約ストレージ・データベース, 78

- 密/疎のストレージ, 73
- 密ストレージ設定, 170
- 密度, 336

密次元

- アウトラインでの設定, 170
- 表示, 337
- 対話、MaxL ステートメント, 400
- 小文字。「大文字/小文字」を参照
- 展開済のデータ・ブロック
 - サイズの確認, 336
 - 圧縮されたブロックに対する比率, 348
- 属性
 - アウトラインでの情報の表示, 180
 - アウトラインでの関連付けの非表示, 151
 - ブール・タイプ, 201
 - 値の範囲のグループ化, 197
 - 基本次元のメンバーへの関連付け, 198
 - 定義, 197
 - 属性計算次元, 203
 - 接頭辞および接尾辞, 200
 - 数値, 197
 - 日付タイプ, 202
 - 説明, 196
- 属性データ、計算, 203
- 属性ビューア・ウィンドウ, 516
- 属性名
 - ブール, 201
 - 値の範囲の, 197
 - 接頭辞および接尾辞, 200
 - 日付属性次元, 202
- 属性次元
 - アウトラインでのタイプの表示/非表示, 151
 - タイプ、設定, 202
 - タグ付け, 169
 - 作成, 590
 - 作成プロセス, 197
 - 定義, 197
 - 標準次元への関連付け, 199
 - 説明, 196
- 属性次元のメンバー
 - アウトラインでの関連付けの表示/非表示, 151
 - フォーマットの定義, 197
 - ブール・タイプ, 201
 - 基本のメンバーへの関連付け, 198
 - 属性計算次元, 203
 - 接頭辞および接尾辞, 200
 - 数値タイプ, 197
 - 日付タイプ, 202
 - 計算, 203

属性計算次元

メンバー名、変更, 200

属性データを計算するために使用, 203

差異レポート作成, 174

平均

タイム・バランス計算, 172

属性計算内, 203

親にロールアップ, 172

平均(タイム・バランス・プロパティ), 172

平均クラスタ率, 338

平均ブロック密度, 336

式

アウトラインでの表示/非表示, 151

メンバーに対する作成, 192

印刷, 194

式エディタでの色分け, 357

確認, 140

表示, 147

説明, 191

集約ストレージ・データベースと, 75

式エディタ

コンポーネント, 637

タブ位置, 358

ワード・ラップ, 358

使用, 192

印刷元, 194

色分け, 357

説明, 191

役割。「権限」を参照

待機設定, 348

復元

データベース, 116

ログに記録されたトランザクション, 117

情報メッセージ(MDX/MaxL), 413

拡張リレーショナル・アクセス, 148

拡張子。「ファイル名の拡張子」を参照

挿入

MDX 関数, 419

メンバーおよび次元を MDX スクリプトに,
419

メンバーおよび次元を計算スクリプトに,
363

計算コマンド, 364

計算関数, 364

接尾辞

ルール・ファイルでのメンバー, 244

属性名のフォーマットでの使用, 200

接続

Administration Services への, 35

Essbase サーバーへの, 87

Administration Services から, 35

MaxL スクリプトから, 404

MDX スクリプトから, 404

ポートの使用状況, 86

切断/再接続, 88

MaxL スクリプトにおける, 404

MDX スクリプトでの, 404

SQL データベースへの, 218

とポート, 86

パーティション・アプリケーションの, 426

修復, 437

パーティション・データベースへの, 426

現在の表示, 319

終了, 320

複数エージェント, 88

阻止, 277, 303

接続ステータス

管理サーバー, 62

接頭辞

ルール・ファイルでのメンバー, 244

属性名のフォーマットでの使用, 200

接頭辞および接尾辞の追加

ルール・ファイルでのメンバーへの, 244

属性次元のメンバーへの, 200

換算、通貨。「通貨換算」を参照

支出プロパティ, 174

数値属性

値の範囲の割当て, 197

次元のタグ付け, 202

整合性。「データの整合性」を参照

文字

ルール・ファイルでのフィールドの分割,

239

文字列

ルール・ファイルでの無視, 237

ルール・ファイルでの置換, 241

断片化

アウトライン・ファイル内, 83

セキュリティ・ファイルの, 316

データ・ファイルの, 338

再構築, 114

新規

MaxL スクリプト, 402

MDX スクリプト, 402

- アウトライン, 137
- アプリケーション, 95
- カスタム・ビュー, 53
- カスタム定義マクロ, 380
- カスタム定義関数, 376
- グループ, 280
- データベース, 103
- ユーザー
 - Essbase サーバー上, 279
 - 管理サーバーでの, 63
 - レポート・スクリプト, 359
 - 代替変数, 93
 - 計算スクリプト, 359
- 日付メジャー
 - 説明, 134
- 日付属性
 - メンバー名のフォーマットの設定, 202
 - 次元のタグ付け, 169
- 時系列レポート作成
 - 動的メンバーの作成, 177
 - 平均の計算, 172
 - 期首/期末の値の取得, 172
 - 累積値の計算, 177
- 時間次元
 - タイム・バランス・プロパティの設定, 172
 - 動的時系列, 177
 - 定義, 167
 - 通貨アプリケーションの, 450
- 暗黙の共有関係, 173
- 暴走プロセス、終了, 320
- 更新
 - エンタープライズ・ビュー, 51
 - ルール・ファイルを使用したアウトライン, 213
 - 代替変数, 93
 - 複製パーティション, 435
- 書込み、数, 336
- 書込みアクセス, 269
- 最大
 - LRO ファイルのサイズ, 397
 - データ・ブロックのロック時間, 323
 - パスワードの期間, 306
 - ユーザーのログイン試行回数, 303
- 最小権限、定義
 - アプリケーションの, 274
 - データベース, 275
- 最適化
 - アウトライン, 142
 - アウトライン・エディタを使用, 142
 - ルール・ファイルによる, 220
 - アウトライン・ファイル(.otl), 83
 - キャッシュ, 342
 - セキュリティ・ファイル(essbase.sec), 316
 - レポート, 392
 - 計算, 370
- 有効期限
 - Administration Services セッションの, 60
 - データに対するユーザーのロック, 323
 - パスワードの, 306
 - ユーザー名の, 303
- 期末(タイム・バランス・プロパティ), 172
- 期首(タイム・バランス・プロパティ), 172
- 本番サーバー
 - アプリケーションの移行, 641
 - グループの移行, 295
 - データベースの移行, 641
 - ユーザーの移行, 293
- 条件、変更のトリガー, 443
- 検索
 - アウトライン, 153
 - アウトライン・ツリー内のメンバー, 195
 - アウトライン内のテキスト, 153
 - スクリプトで行を, 358
 - スクリプト内のテキスト, 153
 - ルール・ファイルでのテキスト文字列の置換, 241
 - レポート・スクリプト, 153
 - 計算スクリプト, 153
- 検証
 - アウトライン, 140
 - パーティション, 433
 - フィルタ, 308
 - ルール・ファイル, 223
 - レポート・スクリプト, 367
 - 式, 140, 192
 - 計算スクリプト, 367
- 構成ファイルの設定, 330
- 構文のガイドライン
 - MaxL ステートメント, 403
 - MDX ステートメント, 403
 - レポート・スクリプト, 389
 - 式, 194
 - 計算スクリプト, 357
- 構文のチェック

- レポート・スクリプト, 367
- 式, 192
- 計算スクリプト, 367
- 構文の完了
 - MaxL スクリプト・エディタ, 405
 - MDX スクリプト・エディタ, 405
 - レポート・スクリプト・エディタ, 362
 - 計算スクリプト・エディタ, 362
- 構築方法, 220
- 標準ツールバーのレイアウト, 42
- 標準次元
 - 属性次元への関連付け, 199
 - 説明, 196
- 権限。「権限」を参照
 - Essbase サーバーの, 270
 - アプリケーションおよびデータベースの, 271
 - ユーザーおよびグループの, 272
 - 管理サーバーの, 63
 - 説明, 269
 - 集約ストレージ, 74
- 欠落した値
 - タイム・バランス計算でのスキップ, 172
 - データの消去, 119
 - データ圧縮時, 347
 - 計算時の集約, 385
- 欠落した値の集約, 385
- 欠落した値の集計, 385
- 次元
 - MDX スクリプトでの挿入, 419
 - アウトラインからの削除, 177
 - アウトラインでの検索, 195
 - アウトラインの最適な順序, 142
 - アウトライン・エディタでの作成, 162
 - コピー, 164
 - コメントの追加, 175
 - スクリプトに挿入, 363
 - セキュリティ, 308
 - ソート, 176
 - タグ
 - アウトラインでの表示および非表示, 151
 - 設定, 167
 - データベース統計, 337
 - データ・ソースから構築, 209
 - プロパティ
 - アウトラインでの設定, 166
 - プロパティの表示, 146
 - プロパティの設定, 166
 - メンバーの追加, 163
 - メンバーの集計, 171
 - ルール・ファイルで作成, 219
 - ルール・ファイルで命名, 219
 - 一意のタグ付け, 169
 - 代替名, 190
 - 会計次元, 168
 - 名前変更, 176
 - 固有のプロパティ, 169
 - 国次元, 451
 - 展開, 145
 - 属性の関連付け, 199
 - 属性次元, 196
 - 属性計算次元, 203
 - 式の作成, 192
 - 時間次元, 167
 - 疎/密データ・ストレージの設定, 170
 - 移動, 155, 164
 - 縮小, 145
 - 説明, 131
 - 通貨パーティション, 452
 - 配置, 220
 - 次元およびメンバーのソート, 176
 - 次元タイプ、定義, 167
 - 次元構築
 - アウトライン・エディタでの動的な, 213
 - バックグラウンド・プロセスとして, 211
 - フィールドの無視, 236
 - フィールド名, 230
 - ブロック・ストレージ・データベース, 211
 - ルール・ファイル、作成, 216
 - レコードの選択, 231
 - レコードの除外, 232
 - ワークフロー, 210
 - 再構築の延期, 211
 - 増分構築, 211
 - 実行, 211
 - 集約ストレージ・データベース, 211
 - 正の値、符号の反転, 248
 - 比率
 - キャッシュのヒット率, 343
 - 圧縮率, 348
 - 平均クラスター率, 338
 - 通貨換算率, 450
 - 消去

- アプリケーションに対するユーザー・アクティビティの, 277
- スクリプト・エディタ, 359, 410
- ブロック・ストレージ・データベースからのデータの, 119
 - データ・ロードの前に自動的に, 247
- メッセージ・ペイン, 42
- 別名テーブル, 188
- 集約ストレージ・データベースからのデータ, 79
- 添付ファイル、管理, 394
- 演算子、集計
 - アウトラインでの表示/非表示, 151
 - メンバーへの割当て, 171
- 為替レート, 450
- 無効化
 - アプリケーション・セキュリティ, 276
 - セキュリティ, 276
 - パスワード, 306
 - ユーザー名, 303
- 無視
 - タイム・バランス計算の値, 172
 - データベース計算で値を, 385
 - ルール・ファイルでのフィールドの, 236
- 独立次元, 204, 206
- 現在のプロセス
 - バックグラウンド・プロセス, 326
 - ユーザー・セッション, 319
- 現地通貨、換算, 449
- 環境変数
 - ARBORPATH, 328
- 疎次元
 - アウトラインの最適な順序, 142
 - 表示, 337
 - 設定, 170
 - アウトライン・エディタを使用, 170
- 監視
 - Essbase サーバーのプロパティ, 325
 - アクティブなユーザー・セッション, 319
 - アプリケーション・プロパティ, 332
 - データに対するユーザーのロック, 321
 - データベース・プロパティ, 334
 - バックグラウンド・プロセス, 326
 - ログの表示, 256
 - 開始/停止ステータス, 332
- 直接入出力, 349
- 砂時計の形に配置
 - アウトライン・エディタによる, 142
 - ルール・ファイルによる, 220
- 確認。「検証」を参照
- 確認のプロンプト(アウトライン・エディタでの無効化), 151
- 移動
 - サーバー間でのアプリケーション, 641
 - メンバー, 164
 - ルール・ファイル, 225
 - ルール・ファイルでのフィールドの, 237
 - 次元, 164
- 移行, 263
 - アプリケーション, 641
 - アプリケーションの Unicode モードへの, 128
 - カスタム定義マクロ, 382
 - カスタム定義関数, 378
 - グループ, 295
 - データベース, 641
 - パーティション, 436
 - ユーザー, 293
 - 代替変数, 94
 - 移行ウィザード, 641
- 移行ウィザード, 641
- 空のフィールド、置換, 242
- 符号、反転(ルール・ファイルでの), 248
- 管理サーバー, 59
 - Essbase サーバーへのユーザー・アクセス, 48
 - MaxL スクリプトを保存, 410
 - MDX スクリプトを保存, 410
 - エンタープライズ・ビューからの削除, 63
 - エンタープライズ・ビューへの追加, 61
 - サンプル・ビュー, 47
 - シャットダウン, 70
 - ステータスの確認, 62
 - タイムアウト, 35
 - パーティション定義の保存, 434
 - ポート, 66
 - ユーザーの削除, 66
 - ユーザーの追加, 63
 - ログ, 60
 - ログイン, 35
 - 停止, 70
 - 切断, 61
 - 接続, 35
 - 説明, 59

- 開始, 34
- 管理サーバーからの切断, 61
- 管理サーバーのデフォルト・ポート, 66
- 管理サーバーのプロパティ・ウィンドウ, 483
- 管理サービス・コンソール
 - アクティブな別名テーブルの設定, 44。「コンソール」も参照
 - ブラウザからの開始, 68
 - 開始, 68
- 管理者ログイン情報, 35
- 管理者権限, 269
- 管理者権限(管理サーバー), 63
- 範囲、数値属性, 197
- 累積値、データ・ロード, 246
 - 消去, 247
- 累積値、定義, 177
- 結合
 - フィールド, 238
 - フィールドの作成, 238
- 結果
 - MaxL スクリプト, 413
 - MDX スクリプト, 413
- 統計
 - データ・ストレージ, 346
 - データ・ブロック, 336
 - ヒット率, 343
 - ポート, 328
 - ランタイム, 331
 - 圧縮, 348
 - 断片化, 338
 - 読取り/書込み操作, 336
 - 集約ストレージ・データベース, 83
- 継承、通貨換算, 174
- 編集
 - カスタム定義マクロ, 381
 - カスタム定義関数, 377
 - グループのセキュリティ・プロパティ, 293
 - スクリプト, 360
 - フィルタ, 308
 - ユーザーのセキュリティ・プロパティ, 292
 - リンク・レポート・オブジェクト, 394
 - ルール・ファイル, 216
- 置換
 - アウトライン内のテキスト, 153
 - スクリプト内のテキスト, 153
 - ルール・ファイルでのテキスト文字列の, 241
- 自動化
 - MaxL での管理タスク, 399
 - アプリケーションの開始, 97
 - データベースの開始, 105
 - データ・ロードの前のデータの消去, 247
 - ユーザーのログオフ, 273
- 色分け
 - アウトラインでの, 151
 - スクリプト・エディタの, 357
- 行に移動, 358
- 表示オプション, 662
- 表示形式の設定, 662
- 複数のサーバー間での移行
 - アプリケーション, 641
 - グループ, 295
 - データベース, 641
 - ユーザー, 293
- 複数ディスク・ストレージ, 345
- 複数データベースにスパン, 421
- 複製。「コピー」を参照
- 複製パーティション
 - 作成, 423。「パーティション」も参照
 - 更新, 435
 - 更新の権限の指定, 426
 - 説明, 421
- 要求
 - アクティブなもの表示, 319
 - アプリケーションに対する遮断, 277
 - 終了, 320
- 親
 - 共有メンバー, 165
 - 子の平均として値を設定, 172
- 解決順序(集約ストレージの式), 76
- 計算
 - 2パス計算, 172, 384
 - の権限, 289
 - アウトラインでの定義, 171, 191
 - アウトラインの最適化, 142
 - アウトラインの配置の最適化, 220
 - オプションの設定, 570
 - カスタマイズされた, 375
 - タイム・バランス, 172
 - デフォルトの設定, 351
 - データベースの完全計算, 352
 - バックグラウンド・プロセス, 368
 - バッチ計算のためのアウトラインの最適化, 142

- ログ・エントリの確認, 369
- 動的計算, 345
- 実績と予算, 174
- 実行
 - ブロック・ストレージ・データベース, 352
 - 集約ストレージ・データベース, 78
- 属性データ, 203
- 差異レポート作成, 174
- 計算状態の確認, 338
- 通貨換算, 454
 - 集約ストレージ・データベース, 78
- 計算されたデータ、消去, 120
- 計算アクセス, 269
- 計算コマンドおよび関数
 - カスタム定義マクロ, 375
 - カスタム定義関数, 375
 - 式への挿入, 192
 - 構文のガイドライン, 357
 - 計算スクリプトに挿入, 364
- 計算スクリプト。「計算スクリプト」を参照
 - アウトラインの関連付け, 389
 - アウトライン・ツリー内のメンバーの検索, 195
- エラー, 370
 - エラーのトラブルシューティング, 370
- コピー, 371
- コメント, 361
- テキストの検索, 153
- デフォルト計算として設定, 374
- ロックおよびロック解除, 111
- 代替変数, 365
- 作成, 359
- 保存, 366
- 別名, 363
- 削除, 372
- 印刷, 373
- 名前変更, 372
- 実行, 368, 601
- 検索, 153
- 構文のガイドライン, 357
- 構文のチェック, 367
- 次元名およびメンバー名の挿入, 363
- 色分け, 357
- 計算情報の確認, 369
- 計算関数およびコマンドの挿入, 364
- 説明, 355
 - 通貨換算と, 454
 - 開く, 360
- 計算スクリプト・エディタ
 - オートコンプリート, 362
 - コンテンツの消去, 359
 - タブ位置, 358
 - ワード・ラップ, 358
 - 色分け, 357
 - 説明, 356
 - 開く, 356
- 計算順序
 - 集約ストレージ・データベース, 76
- 記述子、データ・ソース, 121
- 設定、ユーザー, 707
- 評価順序(集約ストレージの式), 76
- 詳細ツールバーのレイアウト, 42
- 認証
 - 外部, 282
- 認証、外部, 259
- 読取り/書込み統計, 336
- 読取りアクセス, 269
- 警告
 - コンソールで表示, 42
- 警告メッセージ(MDX/MaxL), 413
- 負の値、符号の反転, 248
- 追加
 - エンタープライズ・ビューへの Essbase サーバーの, 48
 - エンタープライズ・ビューへのオブジェクトの, 50
 - エンタープライズ・ビューへの管理サーバーの, 61。「作成」も参照
 - プラグイン・コンポーネント, 719
 - ユーザー
 - Essbase サーバーへの, 279
 - 管理サーバーへの, 63
 - ルール・ファイルへのフィールドの, 239
- 送信メール・サーバー, 69
- 透過パーティション
 - 作成, 423。「パーティション」も参照
 - 説明, 421
- 通信ポート, 66
- 通貨
 - アウトラインの生成, 622
- 通貨アウトラインの生成, 452
- 通貨データベース
 - アプリケーションとともにコピー, 641

- メイン・データベースへのリンク, 454
- 作成, 452
- 計算, 454
- 通貨パーティション, 452
- 通貨換算
 - トラブルシューティング, 457
 - プロセス, 450
 - メイン・データベース・アウトラインの準備, 450
 - レポート作成, 454
 - 計算, 454
 - 説明, 449
 - 追跡, 456
 - 通貨データベース・アウトラインの作成, 452
 - 通貨パーティションの作成, 452
- 連続次元, 205
- 選択ルール
 - エクスポート, 606
- 選択条件
 - 定義, 231
 - 結合, 233
- 配置サーバー。「Essbase 配置サーバー」を参照
- 配置シナリオ, 33
- 重複メンバー名
 - アウトラインでの検索, 153
 - アウトラインでの許可, 137
 - アウトラインを変換して許可, 138
 - サンプル・アプリケーション, 37
 - データベースの作成, 103
 - データ・ロードと, 240
 - レベルに対するタグ付け, 179
 - 世代に対するタグ付け, 179
 - 別名, 182
 - 情報, 132
 - 次元に対するタグ付け, 169
 - 重複する共有メンバーの作成, 165
- 開く
 - MaxL スクリプト, 403
 - MDX スクリプト, 403
 - アウトライン, 160
 - データ・ソース・ファイル, 217
 - パーティション, 424
 - ルール・ファイル, 216
 - レポート・スクリプト, 360
 - ログ, 256
 - 式, 192
- 管理サーバー・ウィンドウ, 34
- 計算スクリプト, 360
- 開始
 - Administration Services, 34
 - アプリケーション, 96
 - データベース, 104
 - 管理サービス・コンソール, 68
- 開始/停止ステータス, 332
- 開始、自動化
 - アプリケーションの, 97
 - データベース, 105
- 開発サーバー
 - アプリケーションの移行先/移行元, 641
 - グループの移行, 295
 - ユーザーの移行, 293
- 開発者ドキュメント, 719
- 関数
 - カスタム定義の, 375
 - コピー, 520, 524
 - スクリプトに挿入, 364
 - フィルタ定義に挿入, 308
 - 作成, 647
 - 式への挿入, 192
 - 新規, 647
- 関連付け
 - アウトライン・エディタを使用した UDA, 203。「割当て」も参照
 - エディタでアウトラインを, 389
 - ルール・ファイルを使用した UDA, 229
 - 基本次元のメンバーへの属性の, 198
 - 標準次元への属性次元の, 199
- 除外
 - データ・ロード/次元構築時のフィールドの, 236
 - レコード, 232
 - 文字列の一致に基づいてフィールドを, 237
 - 条件の結合, 233
- 除外条件
 - 定義, 232
 - 結合, 233
- 除数、データ値のスケール, 249
- 除算演算子, 171
- 階層
 - 代替, 165
 - 保管済, 76
 - 動的, 76
 - 複数, 76

- 集約スクリプト, 490
- 集約ストレージ
 - アウトラインと, 73
 - アウトライン・ファイルのコンパクト化, 83
 - キャッシュのサイズ設定, 82
 - クエリー・データの追跡, 78
 - サンプル・アプリケーション, 37
 - ストレージと, 81
 - セキュリティと, 74
 - テーブルスペース, 81
 - データの消去, 79
 - データベースのエクスポート, 113
 - データ・ロード, 211
 - ブロック・ストレージ・アウトラインの変換, 74
 - ルール・ファイル, 211
- 事前集約, 78
- 再構築, 139
- 圧縮と, 80
- 式, 75
- 情報, 71
- 最適な会計次元の選択, 80
- 次元構築, 211
- 統計, 83
- 複数の階層, 76
- 計算順序, 76
- 階層と, 76
- 集約、消去, 79
- 集約の計算, 78
- 集約ストレージ・アウトライン変換ウィザード, 485
- 集約ストレージ・パーティション・ウィザード, 487
- 集約ビュー
 - 定義, 490
 - 統計, 490
 - 選択可能な最大数, 490
- 集約設計ウィザード, 490
- 集計からメンバーを除外, 171
- 集計演算子
 - アウトラインでの表示/非表示, 151
 - メンバーへの割当て, 171
- 電子メール。「電子メール」を参照
 - SMTP サーバーの指定, 69
 - コンソールからの送信, 92
 - 送信, 685
 - 送信者情報の指定, 92
 - 電子メールの XML 添付ファイル, 92
 - 電子メールへの HTML 添付ファイル, 92
 - 電子メール・アラート(トリガー), 443
 - 非アクティブ, 273
 - 非同期プロセス。「バックグラウンド・プロセス」を参照
 - 非同期入出力, 349
 - 領域固有のマッピング(パーティション), 429
 - 高機能計算
 - 計算を最適化するために使用, 386
 - 通貨換算と, 454

A-Z あ行 か行 さ行 た行 な行 は行 ま行 や行 ら行 わ行